
ネギまヒーローズ

ぞにけん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまヒーローズ

【Nコード】

N4088G

【作者名】

ぞにけん

【あらすじ】

スタークリスタル事件から一カ月後：ネギと3-A生徒達はいつもの平和な学園生活を過ごしていた。だがある日、クリスタルの真実が書かれた一通の手紙がネギ達の元へ辿り着く。当時の事件に対する恐怖心を隠せないネギ達だが、突然発生した空間の歪みにより、異空間に飛ばされてしまう。その世界は、これから始まるうとする災いへと導く、新たな冒険の始まりだった…。ネギま！？、マリオ、ソニックのクロスアドベンチャーストーリー！

プロローグ 六つの力伝説

……… 科学と社会が発達した世界… 『物質界』 ……
……… 魔法と幻想が生存する世界… 『幻想界』 ……

かつてこの関連のない二つの世界は、全知全能の神により、一つの世界として繋がっていた…

科学と魔法と言う二つの世界の源を結び付ける事により、世界に混沌なる大惨事が起こる事なく、バランスが保たれていた…

現実と幻想を一つの源として繋げた世界… それは神が待ち望んでいた世界であった…

お互いとは異なる種族や国家はあったが、誰もお互いの異なる存在に否定せず、永遠の平和を願っていた…

しかし… そんな世界にも、永遠の平和を望まぬ者もいた…

世界中の心無き邪悪なる存在達が集結し、空間を操る事で、世界の支配と破滅を企み始めた…

究極の災いの力… 『六つの力』 を求め、世界各地に混沌の渦を巻き起こした…

『六つの力』

空間の歪みを作り出し、全ての存在を無に還す事が出来ると言う災厄の力…

その名の通り、様々な力を宿った六つの道具が存在すると言う…
その生い立ち是不明だが… 大半の力は世界を救える事が出来るが…

その大半には混沌を生み出す事が出来ると言う…
更に、その中の一つは、更なる破壊衝動を起こす力を宿り、存在し

ない邪悪なる魔物を創造する事が出来ると言う…
力が発動され、空間の歪みが発生した事で、多くの人々は死滅され、

多くの国々は消滅したのだと言う…

人々は希望を失い、世界は大いなる死と絶望の淵に陥ってしまった…

しかし、彼らの野望は永遠に続かなかった…

それは、世界の支配や破壊を求むためにも、『六つの力』は実は完成されていなかったのだと言う…

力を手に入れたにしても、『六つの力』の内の五つしか集めておらず、最後の一つは永遠に手に入らなかった…

神の怒りを触れてしまった邪悪なる者達は、電光石火の如く、神の手に捕らわれた…

彼らの罪は決して許される事もなく、裁きを受けた彼らは、『時の狭間』と言う多くの罪人達が彷徨い続ける無の空間に封印した…

だが、最後に残された罪人はこう残した…

”我らは消えるが…我らの意志は死なん…

時が来れば、新たなる継承者が現れ、我が望みを続ける…

全てが大いなる死と絶望を望む限り、我が望みは滅びん…

我らは再び舞い上がる…新たな継承者と共に…

そして『六つの力』が一つになる時…災いは再び世を襲うであろう…

『六つの力』…混沌と死の力…そしてその力は…

『混沌の魂』…『奇跡の心』…『無限の星』…『永遠の太陽』…

闇の絶叫』…そして…

最後の言葉を残す事もなく、神はその者を『時の狭間』に封印した…

神は混沌が終わり、世界に平和が戻ったと思っただが…まだ終わってはいなかった…

不完全のまま発動されてしまった『六つの力』の影響により、空間

の歪みが更に広がり、世界のバランスが破壊されてしまった…

大地は裂け、海も溢れ、怒れる風と雷が世界を襲う…

人々は助けを呼ぶが、それぞれは自らの未来に希望を感じず、または無意味に死した者もいた…

世界は完全なる無に陥ろうとした…

神は恐れ、自らの夢が惨い悪夢として終わろうとも予知していなかった…

己の夢に絶望した神は、世界のバランスを再び保つために、一つの世界を二つに分かれ、異空間に送り込む…

神はこう言った…

”私の夢は、風と共に流れる灰のように消え去った…混沌から避けるためにも止むを得ぬ選択だ…

だが、二つの世界を異空間に送り込み、世界の破滅から避けたにしても、いつか惨劇は再び起こるであろう…

いつか世の絶望を望む継承者が現れるかも知れん…だが逆に、世界を救う者も現れるであろう…

『三つの奇跡』…邪悪なる者達と混沌なる力と戦う選ばれし三人の勇者達…

正義と優しさ…そして光を持った心と共に、彼らは二つの世界を、大いなる死と絶望から救えるであろう…”

混沌の時代から数年も経ち…誰も分かれてしまった二つの世界の事を語らなかつた…

そして時が流れるにつれ…二つの世界の存在は…人々の記憶から消え去った…

第1話 嵐の夜に潜む闇

………何もない空間………一人の少年はその空間の中にいた………
眠るかのように目を閉じたままだが、
実際はこの空間に来てから起きていた……。しかし、宙に浮かんで
いるため、身動きも出来ず、場所の見当もなかった………。

(…ここ…ここは…?)

眠っているが、意識がある少年……。だが口から言えず、心の中で
言った。

(…ゆ…夢…? 僕…またこの夢を…?)

心当たりのある少年……。どうやら以前何回もこの空間に来た事がある
ようだ。とりあえず彼は動こうとしたが、
力が入らなかった。

(…ダメだ…動けない……。でも…何で僕はまたこの夢を見るん
だろう…? 僕…この夢を知ってるのかな…?)

一体何なんだろう…全く分からない……。)
身動きも出来ず、浮いたまま悩む少年。しかし、その時……。

空間の先に何者かの人影が現れた。その姿は少年からの距離から
離れ過ぎて見えないが、シルエツトによると、
長い髪の毛にスカートをしていた。その姿から、正確的に少女だ
と思われる。だが距離の問題で姿が見えない……
更に少年は彼女の事を認識していない様子。例え何度もこの空間
に訪れたにしても、少女とは初対面であった。

(…ん? …だ、誰…そこにいるのは…?)

少年は声を掛けようとするが、当然ながら声が出ない。更に少女
は何かを言っているように聞こえるが、

距離の問題で聞き取れない。少年はそれでも彼女の声を聞き取るうとした。

(え…何…? よく聞こえませんが…?)

彼は引き続き少女の声を聞き取るうとした。そして…。

『……………けて……………』

(…え?)

『……………すけ……………だ…か……………願い……………助けて……………!』

ようやく少女の声を聞き取れた少年。そんな彼女は明らかに誰かの助けを呼んでいた。

(助けて? あの、それって、僕に言ってるんですか? よく分からないけど、どう言う意味で…?)

だが少年が問い掛けようと、突然空間の光景が徐々に暗くなり始めた。その同時に少女の姿もゆっくりと消えて行く…。

(あつ…ちよつ…待ってください! 貴女は一体…!? 今のはどう言う意味で…!?)

くつ…だ、ダメだ……………意識……………が……………。)

後を追おうにも身動きも出来ない少年。空間が暗くなる同時に、少年の意識も薄れた…。

現実世界

…時刻はもう朝…外で鳥が元気よく鳴き、眩しい太陽の光は部屋の中に照らしていた。少年はまだ布団の中に寝ていて、例の夢で魘されていた。

「…う…う…ん…ま…待って……………き…君…は……………。」

「じゃねえツスよ？」

少年の相棒である白いオコジヨ…『アルベール・カモミール』、通称『カモ』がそう言う。

カモ「しかもすごいツスねえ…『コスプレカード』を引き抜いたとは言え、

まさか従者自身がカードを引き寄せるとは思わなかったツスね！ 通常は兄貴本人が引き抜ツスが、

従者までも自分のカードを引き出せるとは知らなかったツスねえ…。 今まで理論に過ぎないと思つたツスけど、

まさか事実だったとはあ…。」

『ネオ・パクティオーカード』

魔法使いの従者として認められた者と『仮契約』バクティオーを行う事…

つまりキスする事で手に入ると言う魔法のカード…。 従者によって魔法は異なるが、

それぞれは三種類のカードに分けられていて、それぞれは『アーマー』、『コスプレ』、そして『スカ』が存在する。

引き抜く時は常にランダムに決まっっていて、従者はどの姿と力を得るのは運次第となっている。 元はと言えば、

契約者でないとカードを引き抜けない事になっているが、カモの研究によると、先ほど言ったように、

従者自身もカードを発動させる事が出来るらしい。 明日菜がそれを試みた結果、見事に成功した様子で、

契約者でなくても自由に引き抜ける事が出来るようになった。 しかし、そんな叩かれて涙目になっている少年には、

感心していなかった。

「だからと言って…わざわざ魔法を発動して、それで僕を起こせばいいって物じゃないですよ!？」

第一、魔法を使う事で体力が消耗してしまうのも分かってるはず

でしょう!？」

明日菜「だから仕方がないって言ったでしょ!? 起きないあんたが悪いんだから!」

木乃香「アスナあゝ、そう言う問題ちゃうと思うんやけどあゝ…。」

そう、先ほど少年が言ったかのように、『ネオ・パクティオーカード』を発動する事によって、体力を消耗してしまう…。

要するに、空腹になってしまおうと言う。少年はその事で明日菜を叱るが、本人は気にしてもいない様子。

刹那「あの…お嬢様、アスナさんにネギ先生…そろそろ行かないと遅刻してしまいますが…。」

「え…?」

少年は壁に飾つてある時計を見ると、クラスが始まる時間まで後僅かとなつていた。

「わああああああ!!! しまったあ!!! もうこんな時間! ? は、早く着替えないと、遅刻しちゃう〜!!!」

明日菜「もう、遅刻したらあんたのせいだからね!」

カモ「そんな事よりも姉さん、さつさと元の姿に戻つたらどうツスか? これ以上その姿でいると空腹で死んじまうツスよ?」

明日菜「あつ、そうだった…。え〜つと…去れ!」
アヘアット

彼女が呪文を唱えると、黒衣着物姿から赤い制服姿に変身した。

彼女が元の姿に戻つた後、

少年は包帯に巻かれた長い棒を背負い、緑色のスーツ姿に着替えた。
「お待たせしました! それでは、行きましょう!」

…少年の名前は『ネギ・スプリングフィールド』

ヨーロッパにあるウエルズと言う町から来た少年で、『立派な魔法使い』を指すために、
マギステラ

日本へやって来た。修行のために、彼は現在麻帆良学園女子中等

部3 - A担任教師として勤めている。

そのためか、周囲から彼の事を『子供先生』と呼ばれるほど有名になっっている様子。

だが実際彼が『立派な魔法使い』^{マジステルマジ} 目指している理由は、行方不明になっただ彼の父：

『サウザンドマスター』と言う称号を持つ『ナギ・スプリングフィールド』を探すためである。彼がこの学園に来てから、

生徒達を巻き添えにするほど、魔法や呪縛に関わる数々の事件を解決した。現実、

魔法使いの存在を現代社会に明かす事は禁じられていたが、3 - A生徒達に正体を見破られて以来、全員『仮契約』^{ハクテイオー} を行い、頼もしい仲間達を結成する事が出来た。

『スタークリスタル』事件が終えてから一ヶ月
ネギと生徒達はいつもとは変わらない学園生活を過ごしていた。

それ以来魔法や呪縛に関わる事件は一切起こらず、
学園に平和な日々を送っていた。だが、例え平和が訪れたにしても、ネギは大人しくいる訳には行かなかった。

切な生徒達を守る事を誓った彼は、そのために強くならなければいけないと思ひ、エヴァンジェリンや菲を師匠にし、

自らを鍛え続けた。エヴァからは強力な魔法、菲からは武術を極め、魔法と武術を両方とも使って戦う事から、

ネギは『魔法拳士』と言う称号を与えるようになる。

その間に、あの事件以来から明日菜も剣術の腕を上げようと思ひ、刹那を師匠として鍛えるようになった。

もちろんその間にも、木乃香は治癒魔法の練習を行い、のどかと夕映のような他のパートナー達も魔法の練習を行っていた。

時間の合間だけに…。

とりあえず、本編に戻って…。

ネギ達が麻帆良学園の3・Aクラスに辿り着いた時には、クラス開始の鐘が鳴り出した。

彼らは無事クラスの時間まで間に合ったのである。いつもと変わらない挨拶をし、いつもと変わらない授業を始める…。

その間にネギは黒板に英語で書かれた文字を書き、生徒達に振り向いた。

ネギ「え〜っと…では、この英文を過去形に訳してみましょう。

まずは誰から…。」

彼は生徒を選んでいる間に、手前の机にいる『雪広あやか』ユキヒロアヤカと言っ
長い金髪の生徒が、

目を輝かせながら彼に見つめていた。選ばれるのを期待していた
ようだが、残念にもネギの眼中には入っておらず、

なぜか明日菜の方へ立ち止まった。その間の明日菜は選ばれない
よう、教科書で身を隠しながらネギに睨んでいた。

そのオーラは前の席にいる『超鈴音』チヤオリンシエンと言う、赤い頬と黒髪のお団
子頭をした中国人生徒まで届き、

感じていた本人は多少引き気味になっていた。

明日菜（私を選ぶんじゃないわよ〜〜〜!!!）

心の中から彼女はそう言うが…。

ネギ「う〜ん…よしっ！ では、アスナさん！ お願いします
！」

彼が明日菜を選ぶと、彼女は怒りの余りに手に持っていたシャーペ
ンを押し折った。

明日菜（何でなのよ、バカネギィ〜〜!!!）

ネギ（アスナさんがあんなに真剣に教科書に向き合って…何て努力
家なんだあ〜!）

空気も読めないネギは、そんな怒る彼女に感激な目で見つめていた。

その後、あやかは自分の席から立ち上がり、

明日菜は何気に反応した。

あやか「ネギ先生……バカレッド如きがこんな問題解けるはずないですわあっ!!」

明日菜「何ですってえ、このシヨタコンいいんちよ!？」

ネギ「わあ!?!? ちよ、ちよっと……!! ま、また始まったあ!？」

いつもの明日菜とあやかによる喧嘩が始まり、止めようにも出来ない哀れな子供先生。

そのためクラス全体が盛り上がり始めた。ただ、中でも盛り上がっていないかった生徒もいた。

ネギの強力な魔法を教える師匠である『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』と言う、

ネギと同じ身長に長い金髪の少女は、退屈そうに欠伸をしていた。

他にも授業中にもかかわらず、
『龍宮真名』と言う色黒で長い黒髪をした生徒は自慢の拳銃を磨いたり、

『ザジ・レイニーデイ』と言う顔に刺青に色黒でセミショートな銀髪をした少女はジャグリングの練習をしていた。

???「また始まったですね……」

『綾瀬夕映』と言う紫色の長髪をした少女は呆れた表情でそう言った。

その間に隣に座っている『早乙女ハルナ』と言う眼鏡に長い黒髪の少女は、喧嘩している二人に対して笑っていた。

???「ったく……いつまで経ってもホントに相変わらずだな、あいつら……」

手前にノートパソコンを使っている『長谷川千雨』と言う眼鏡に長いポニーテールをした少女は、

呆れた表情でそう言った。

バカレツドと委員長の無益な喧嘩が盛り上がり続けている間に、慌てていたネギは一瞬に立ち止まり、

少しだけ引き下がりながら、何かに悩み始めた。それに気づいた明日菜とあやかも一瞬に喧嘩を止め、

他の連中もそれに気づいて盛り上がるのを止めた。

あやか「あら…ネギ先生、どうかなさいましたか？」

ネギ「…え？」

聞かれている事に気付いたネギは、思わず見上げた。

あやか「あら、もしかして…私とアスナさんが喧嘩している事でお困りなのですね？　そうでしたら、申し訳ございません！」

私とアスナさんが授業中に何て情けない事を…私とアスナ

さんが是非ともネギ先生にお詫びを申し上げますわ！」

明日菜「はあ！？　何で私まで…！？　元はと言えばいいんちよが

…！」

あやか「イイデスネ、アスナサン…？」

彼女は鬼のような表情で明日菜に振り向き、明日菜は恐怖で少々引き込んだ。

ネギ「あ、いえ…別に気にしないでください！　ただちょっと…考え事をしていました…。」

明日菜「考え事？　何それ？」

ネギ「あ、いや…別に大した事ではありませんので…。」

明日菜「何よ、その大した事ないって！？　あんたまさか、また自分の事で何か黙り込んでんの！？」

以前に言ったはずでしょ！？　何か困った事とか悩み事があるんなら、私達に言いなさいよって！」

あやか「アスナさんの言う通りですわ！　是非ともネギ先生のお悩みをお聞きしたいですわ！」

そんな期待の目を輝かせているあやかとイラついた表情をする明日菜に対し、ネギは多少引いていた。

その間に力モはネギの上着ポケットの中から顔を出した。

力モ「ったくう、いつまでも遠慮ばつかすんなよ、兄貴！ 悩み事があんならとことんみんなの前に言っちまいなよ！」

例えば今朝夢か何か見てて魘されてたとか…。」

ネギ「え…？ 僕、魘されてたっけ…？」

明日菜「そう言えば私があんたを起こす前に、何か寝言を言いながら魘されてたわね…。」

ネギ「……………ああ、そう言えば…何かそんな事があつたようなあ…。」

「……………何か嫌な夢でも見てたの、ネギ君？」

『佐々木まき絵』と言うピンクの短いツインテールをした少女は問い掛けた。

ネギ「いや、別に嫌な夢ではなかったんですが…。その…何て言えばいいんでしょうか…今朝から変な夢を見てまして…。」

しかもここ数日前から同じ夢を見てまして…。まあ、別に大した夢ではないので、皆さんにお話しませんでした…。」

明日菜「毎日同じ夢って…どう見ても大事じゃないの！？ そんな同じ夢を毎日見てたのなら、

どうして私達に言わなかったの！？」

あやか「そんな事よりも、どんな夢を見たのですか？」

ネギ「どんな夢…ですか？ う〜ん…それはあ……………何て言えばいいんだろう……………」

余り変な夢だったからよく覚えてませんが、夢の中で女の子が現れまして…。」

彼がその言葉を出すと、生徒達（冷静系を除いて）は静まり返った。明日菜とあやかは当然、

夕映やその親友である『宮崎のどか』と言う目を隠すくらいに長い

紫色の前髪をした少女などは、
その言葉に対して反応した。

明日菜「ふう〜ん、女の子ね〜……………それってどう言う子か
しらあ〜!?」

嫉妬しているのか、明日菜は自分の拳をネギの頭の両側に強く捻り
込み始めた。

ネギ「あぎゃぎゃぎゃぎゃああああああ!!!」
あやか「きゃああ! アスナさん、ネギ先生に何て酷い事をお!
?」

激痛を感じながらも、ネギは勢いで明日菜の拳を振り払った。
ネギ「わ、分かりませんよ! その子は今朝現れただけで、それ以
前に現れた事なんて一度もないんですよ!

特に現実では一度もお会いした事すらありませんし…要する
に誰なのかも分かりませんよ!」
夕映「でも姿は見れたんですよ?」

ネギ「いえ、遠過ぎていた上に影の中に隠れていたので、姿は見え
ませんでした。でも…奇妙な事を言っていました。

距離問題で聞き取れなかったんですが…僕に向かって言っ
ていた言葉なのか……………」
助けて』と言っていました。」

彼がそう答えると、生徒達は再び静まり返り、更に多少恐怖心を感じ
じた。だが逆に千雨とエヴァは無関心にため息を吐き、
真名とザジは自分達の都合で夢中になっていた。

のどか「…た…助けて…って…言ったんですか…?」
???「それって何か…怖い感じ…やな?」

隣に座っていた『和泉亜子』^{いずみあこ}と言う淡い青色のショートヘアをした
関西人生徒が、怯えながらそう言った。

???「それって幽霊かも知れないでしょうか? 幽霊も人の夢の

中に現れる事もあるんですよ?」

『相坂さよ』と言う長い白髪に古いセーラー服を着た幽霊少女が問い掛けた。

「???」「ええ!? それってその女の子、幽霊かも知れないって事お!?!」

隣に座っていた『朝倉和美』と言う赤髪の少女が驚きながらさよに問い掛けた。

さよ「*夢枕に立つと言う言葉がありますから...」

彼女は笑顔で答えるが、和美は多少引いていた。

*夢枕に立つ：神の魂や死者の霊が人の夢に入り込み、相手に伝言や注意を伝えたりすると言う。

即ち『夢枕』は『夢の世界』と言う意味。

「???」「じゃあ、それってネギ坊主はその子に呪われてるって言う意味アルか?」

ネギの武術の師匠である『古菲』と言う色黒で短い淡い黄色のツインテールをした中国人生徒が無邪気に問い掛けた。

ネギ「ええ!? そ、そんな事ないですよ! さっき言いましたけど、僕その子とは一度も会った事ないし...」

それに誰かに恨むような事をしてない上に、霊に取り付かれやすい体質なんて持ってませんし...!」

ザジ「疲れてる時は霊に憑かれやすい...」

真名「3点...」

「???」「幽霊じゃなかったら、それでも不気味だね...」

『釘宮円』と言うショートな黒髪の少女は冷や汗を垂らしながらそう言った。

「???」「そうだね...。でももしかしたら本当に幽霊じゃないの?」

この世に未練があつて成仏出来ない幽霊が助けを求めに来る事はよくあるし、または生霊とか…。」

『柿崎美砂』と言う紫色の長髪をした少女は多少恐れながらも、遊び半分の気持ちでそう言った。

「???」やだあゝ！ その話止めてよあゝ!!!」

『椎名桜子』と言う金髪の短いツインテールをした少女は両耳を塞ぎながら怯えていた。

「???」そつだよ！ 怖い事を言うの止めてよね！」

『鳴滝風香』と言う赤い瞳に短いツインテールをした幼児体型の少女がそう言った。

「???」恐いですうゝ!!!」

風香の双子の妹である『鳴滝史伽』と言う青い瞳にお団子頭をした幼児体型の少女は涙目に怯えていた。

クラス全体はネギが言う『少女の夢』に関して騒ぎ始めた。 しかも授業中にもかかわらず、

そんなネギも授業に戻れない事で困っていた。 すると『長瀬楓』ながせ かえでと言う、

細目で長い黄緑のお下げをした忍者生徒は手を上げながらネギに問い掛け始めた。

楓「ネギ坊主、これは拙者の予想でござるが…お主が見ているその夢には不思議な力によって関わっているのでは…?」

ネギ「不思議な力? それって…魔法の事ですか?」

彼がそう答えると、楓は頷いた。

「???」あ、そつだよ！ もしそれが魔法ならば、エヴァちゃんに聞いてみるつてのはどう?」

エヴァちゃん魔法に詳しいからね！」

『明石裕奈』^{あかし ゆうな} と言う黒いサイドテールをした少女は、後ろの席にいるエヴァに振り向いてそう言った。

だが不機嫌そうなエヴァは、そんな彼女に睨み付いた。

エヴァ「ああ？ 何で私が責様らみたいなバカ共にそんなくだらん事を教えねばならんのだ…。」

茶々丸「それはみんなに魔法の事を理解するために頼られているからです、マスター。」

エヴァ「…フンツ…別に興味がある訳ではないが…『夢歩き』と言う魔法なら聞いた事がある。

他者の夢の中に入れる事が出来るが、それだけではない。

『夢歩き』は己の夢と他者の夢とシンクロしないと入る事が出来ない。一度シンクロした場合は、

現実にいるかのように、同じ夢の中でそいつとコミュニケーションが出来るようになる。まあ、

現実世界と夢の世界にいる時はそこまで違いはないだけだが…。だがこの魔法は、

最近では精神的な現象により発生する事が明らかになって

いる。

魔力のない人間が極度の疲労やストレスを持った場合、

『夢歩き』が発生すると言うケースがある。まっ、滅多

に起こる訳でもないがな。」

ネギ「では…誰かがその『夢歩き』と言う力で、僕の夢の中に入り込んでいると言う事でしょうか？」

カモ「でも兄貴…さっきエヴァ言わなかったツスか？ この『夢歩き』って、

魔法じゃなくても極度の疲労やストレスと言った精神的な物で発生する事もあるって…。」

エヴァ「そうかも知れんが、さっき言ったようにそう言う事は滅多に起こる訳でもない。

なぜ助けを求めているのかも正直どうでもいい事だが、私

の予想だと…その少女とやらが坊やの夢の中に現れたのは、

もしかしたら今死に掛けてるからじゃないのか？ もしそ
うだとしたら、

今頃幽霊に近い存在にでもなってるんじゃないのか？ 坊
やの脳裏に入り込んで助けを呼ぶ…そう、

まるで呪いを掛けているような…。」

彼女が妖しげに笑いながらからかうと、ネギは無言のまま、少しだ
け悪寒を感じていた。

その間に明日菜がネギを庇うかのように、彼の前に立ち上がった。

明日菜「ちよつとエヴァちゃん！ 縁起のない事を言つてネギをか
らかわないでよ！」

そんな彼女はエヴァに注意するにも、当の本人はそれを無視した。

木乃香「せやけどホンマに魔法なんかなあ？」

???「さあ…でもネギ君の場合そうなんじゃないのかな？ 色ん
な意味でストレス溜まってるみたいしね。」

『春日美空』と言うボーイッシュなショートヘアをした少女はそう
言った。

???「そう言えば、ネギ先生って最近エヴァちゃんと一緒に修行
してるんだったよね？」

ネギ先生がストレスを持つようになってるのはそのせ
いかしらね？ そうだったらお気の毒ね…。」

毎日毎日痛い目にあつて…。」

『那波千鶴』と言うグラマーで長い茶髪をした生徒は何気にエヴァ
をからかうかのように泣き真似をした。

その間に隣に座っている『四葉五月』と言う少し小太りで短いツイ
ンテールをした少女は、

それに対して苦笑いをした。

エヴァ「何だと貴様あ！？ 坊やがストレス溜まってるのは私のせ
いだと言うのかあ！？」

ならあそこのバカイエローとか言う奴は何だ!? あいつ
だって坊やの修行でストレス溜まらせてるんだぞ!？」

千鶴の文句に対し反抗するエヴァだが、逆にそれに対してバカイエ
ローこと菲は不機嫌になった。

千鶴「ああ…多分彼女は軽いから大丈夫だと思うわ」

菲「誰が軽いアルかあ!？」

更に菲も腹黒い千鶴に対して反抗しながら立ち上がった。その結
果、クラス全体は再び騒ぎ始めた。

千雨（或いはお前達が原因だろうな…。 毎日バカみたいに騒いで
るからな…。）

彼女は内心にそう言った。もちろんその同時に真名とザジは自分
達が今やっている事に夢中で何も言わなかった。

ネギ「わあ!! また始まったあ!! み、皆さん!! 僕の件に
関しては別にいいですから、みんな席について静かに…!」

キィ~~~~ンコォ~~~~ンカァ~~~~ンコォ~~~~ン!

授業に戻ろうとした直後、休み時間の鐘が鳴り出した。これによ
り生徒達は一斉に静まったが、逆にネギは失望した。

ネギ「わあ~~~~ん!! またマトモな授業が出来なかったよお〜
~~~~!~!」

…授業は無駄な意味で終わり、ネギ、明日菜、木乃香と刹那は廊下  
を歩いていた。

しかしその間にネギは真面目に授業が出来なかった事を失望的に後悔し、落ち込みながら歩いていた。

逆に明日菜にとってはその事すら気にしていなかった。 あんな騒ぎで授業が出来なかったのも当然の事である。

例えば冷静な生徒がクラス内にいたにしても、無関心な彼女らが連中の騒動を阻止するためにネギを助けてくれる訳でもない。

悩み無用に明るく楽しむのが3 - Aの常識だが、逆にネギは10歳にもかかわらず、童心を持たないほどに真剣で礼儀正しく、自分の目的と役目を第一に思う大人負けな精神力を持つ子供先生。

例え大人のような奇抜で真面目な態度を持ったにしても、騒ぐ連中を収める力もない上に、周囲から子供扱いされてしまう。

そんな自分の存在感に対し、

ネギは今日も落ち込み続けていた。

ネギ「はあ〜…………… 今日も授業出来なかったあ……………」

明日菜「もう、落ち込まないの！ みんなみたいにもっと明るく楽しまなきゃ！」

カモ「姐さん…それ、励みになってねえんすけど…」

木乃香「なあ、せつちゃん。 さっきの話どう思うん？」

刹那「ああ、例のネギ先生の夢と『夢歩き』の件ですね？ 私にもよく分かりませんが、

ネギ先生の体から妖あやかしや霊的な物は感じませんし、

エヴァンジェリンさんの言うように魔法が精神的な現象で発生した物かと…。 どう思いますか、ネギ先生？

何か心当たりは……………？」

ネギ「あの、刹那さん…その件はもういいですから。 別に大した事ではないので、もう気にしないでください。」

優しく気を使うネギだが、その言葉に多少の嫌気さを感じた。 なぜならこの夢のせいで授業が纏まらなかったからである。

そのためにもネギは自分の夢を嫌うようになり、話した事も後悔した。

刹那はそんな失望している子供先生に対して申し訳ないと思ったが、それでも刹那と木乃香、  
そしてもちろん明日菜も彼の事を気にしていた。

???「あれ？　ネギ君じゃないのか？」

ネギが前を見上げると、そこにはある中年男性がいた。その人物は眼鏡をかけ、白いスーツを着た短い白髪の男性で、  
ネギの方へ向かっていた。彼の名は『高畑<sup>たかはた</sup>・T・タカミチ』…ネギの友達及び明日菜の元担任教師で、  
最強の魔法使いとも呼ばれていた男である。彼は手を振りながらネギに挨拶をした。

ネギ「あつ、タカミチ！」

明日菜「きゃああああ！！　高畑先生！！！」

タカミチを目撃した明日菜は、思わずネギを勢いで突き飛ばし、目からハートを飛ばしながらタカミチの方へ猛スピードで掛け付けた。

明日菜「何て偶然なんでしょうか！？　こんな所で高畑先生と会えるなんてえ！」

タカミチ「ハツハツハツ、今日も元気そうだね、明日菜君。　クラスで何かいい事でもあったのかい？」

明日菜「ええ、もちろんです！　もうクラスは毎日のように楽しくて楽しくて…！」

しかしそれは嘘だと言う事、ネギ達には分かっている。そのため  
にネギ達はそんな明日菜に対して苦笑いをした。

ネギ「アスナさん、タカミチと会えて嬉しそうですね。」

カモ「でもいつそう言う趣味に戻ったんだ…？」  
木乃香「てつきりもう飽きたと思うけど…。」  
刹那「理由は分かりませんが、以前のように戻ったようですね…。」

明日菜は元はと言えば『ゴッドファーザー』シリーズに出て来るような、

ダンディな中年男性を熱烈的に好むと言う『オジコン』だった。

そのため、タカミチの事を一方的に憧れていたが、

3学期に入った時には突然に気が変わり、『チュパカブラ』に夢中になり、しまいには『チュパカブラ研究部』と言う部活を始め、

チュパカブラグッズを作り出し始めたのだ。結果的には存在理由が不明である上に、

不気味なデザインをしていた事から不評さで売れる事もなかったが、スタークリスタル事件が発生し頃には、

彼女の興味はネギの姉的な存在である『ネカネ・スプリングフィールド』の変装『黒バラ男爵』や、

闇の妖精である通称『ボンゲボンゲ』に向けて一変した。木乃香曰く、

『一つの事に集中すると他の事は忘れる習性』の持ち主だが、事件から一ヶ月も経った今、

なぜか元のオジコン趣味に戻ったらしい。しかし、それ以前にチュパ研はどうなったのかは不明である。

タカミチ「あ、そうそう。ちょうどネギ君を探してたんだが、ちょっと時間あるかな？」

ネギ「え？ あ、うん、あるけど…。」

タカミチ「明日菜君、ネギと話したい事があってねえ、悪いけどちょっとの間だけネギ君を借りてもいいかな？」

明日菜「あ、もちろん構いませんよ、高畑先生！ 別に今いりませんから、どうぞご自由に持ってっちゃってください！」



ネギ「ア、アスナさん…。」

自分を物扱いにされたネギは、涙目で陽気な明日菜に見詰めていた。

…ネギとカモ、そしてタカミチは、通常エヴァと茶々丸が昼寝などに使われている学園の屋上へやって来た。

今は休み時間なので、青空の下にあるキャンパスで多くの生徒達が遊んだり会話をしていた。その風景の中で、

3人は風を浴びながら屋上から眺めていた。

タカミチ「そう言えばネギ君、あれからネカネ君やアーニヤ君からの様子はどうなったんだい？

最近彼女達からの手紙とかは…。」

ネギ「あ、うん！ 最近二人からの手紙貰ったよ！ ネカネお姉ちゃんやウェールズに戻って以来元気にしてるし、

アーニヤもロンドンに戻ってから修行を上手く行ってるみたいだよ！ 以前よりも修行が順調に進んでるみたいで、

特にホームステイしている家族とは仲良くしてるんだって！ それを聞いて僕安心したよ！」

タカミチ「そうか、それは聞いてよかったよ！ 特にアーニヤ君も上手くやっているみたいで、聞いて安心したよ。

以前は魔力増強のためにスタークリアルを手にしていただけ、今はもうそれに頼らずにやってるんだね。

それも君のおかげだと思うよ。君が彼女を闇から救い、応援したからこそ、

彼女は今でも上手くいくようになったんだ。彼女は今でもきつと君の事を心から感謝してると思うよ！」

ネギ「え…あ、いやあ…そんな別に…」  
タカミチの褒め言葉に対し、ネギは照れ始めた。

『アーニヤ』こと『アンナ・ユーリエウナ・ココロウア』  
ネギと供にウエールズの魔法学校から卒業したネギの幼馴染で、同じく『立派な魔法使い』<sup>マキステル・マギ</sup>を目指している少女である。

卒業後、修行のためにロンドンで占い師を務めていたが、周囲からの不評な声を浴びながらも上手く行かず、

ホームステイ先の一家とも仲良くなれない事から、不幸と孤独、更に絶望の日々を送り続けていた。 それにもかかわらず、

日本で上手く行っているネギに対して嫉妬心を燃やし、ウエールズの魔法学校に封印されていた闇の魔法アイテム、

スタークリスタルを入手し、ネギをこの世から消し去ろうとしていた。 だがネギが彼女を闇から救い出した後、

彼からの応援により、もう一度最初からやり直すためにロンドンへ戻った。 そして事件から一カ月後、ネギの情報によると、

彼女は以前とは違うくらいにロンドンで上手く行っていると言う。

もちろんホームステイ先の一家とも仲良くなり、  
その事に関してネギは安心していった。

ネギ「あ、そう言えばタカミチもどうなの？ 今まで作るうとして  
いる例の『世界チンミー麵』、上手く行ってるの？」

タカミチ「ああ、あれねえ…。 ハッハッハッハッ…まあ、ラーメンを美味しく出来るように色々工夫してみたんだけど、

全然ダメでみたいで…。 食材が悪いのか、それとも自分の腕が悪いのか…。

例え何回調理しても腹痛が止まらなくて…。  
ネギ「つまり…やめたって事だよな？」

カモ「兄貴、そっちの方がもっといいと思うツスよ。 あんな危険物質が世界中に広まったら、

確実にバイオハザードが起こるツスから。」  
タカミチは苦笑いをしながらタバコを吸い始めた。

元はと言えば、タカミチは明日菜が憧れるほどのダンディな外見をしているにもかかわらず、実は大のラーメン好き。

スタークリスタル事件にて、ネギと3-A生徒達が幻想世界に飛ばされてしまった時、タカミチはある計画を立てようとしていた。

それは『世界チンミー麵』を作る事で、事件当時に何度も挑戦していたが、

試食中に多くの者を激しい腹痛に陥らせるほど失敗し続けた。そのため、エヴァやまき絵、

更にネカネをモルモット実験台のように被害を受け、生徒達の間では危険異物と知られていた。

鈴音や五月の力も借りてみたが、それでも失敗してしまったようで、あれ以来何度も食材や調理に関する研究を試みたが、先ほど話したように成功する術もなく、諦めたらしい。

ネギ「……ところでタカミチ……。僕とこうして話したいのは分かるけど、本当は僕に何か伝えたいんでしょ？」

彼が問い掛けると、タカミチは途中でタバコを吸うのを止めた。

ネギ「こう言う会話、別にアスナさん達の前にやっても構わなかったけど……アスナさん達を残し、僕をここに連れて行くなんで、

何か理由があるんじゃないのかなって……。」

彼がそう言つと、タカミチは手に持っていたタバコを下ろし、ため息するかのように口から煙を吹いた。

タカミチ「……君の言う通りだよ、ネギ君。実は君に大事な事を伝えたくて、ここまで連れて来たんだ。

あれからもう一ヶ月も経ったけど……君はスタークリスタルの事、まだ覚えているかい？」

ネギはカモはその発言に対応して頷いた。

タカミチ「あの事件以来、あの石に関してちょっと気になってね……色々調べてみたんだ。そしたら……」

あの石に関する新しい情報を手したんだ。」

ネギ「えっ！？ スタークリスタルに関する新しい情報！？ それって何なの！？ って言うか、どう言う意味！？

まさか……また誰かに盗まれたとか……！？

タカミチ「いや、そうじゃないんだ。実は、その石に関して色々調べるために、図書館島へ行っただ。」

スタークリスタルの情報が書かれている本をね。君やのどか君の話だと、その本を探すのは不可能であって、

もちろんのどか君の魔法でさえも不可能だったと聞いたけど、僕はその本を館内中探し回り続けた……一度休まず、

誰の力も借りずにね。探すのに一日中掛かったと思うけど……それが見付かったんだよ……

スタークリスタルの本が！ 信じられるかい？ のどか君の魔法でさせも発見出来なかったその本が、

ようやく発見出来たんだよ！」

ネギ「ホントに！？ じゃあ、何て書いてあったの！？

タカミチ「本の内容によると、君が知っている通り、スタークリスタルは強大な闇の力を宿る危険な魔法アイテムだ。」

その起源は今でも不明だけど、人の心を操り、存在しない生物を創造する事が出来る……。だけど、

これだけは君には知らなかったと思うだろう。もちろん僕も始めは知らなかった……。

以前アーニヤ君が盗んだスタークリスタルは四つで、それが全部の石かと僕は思った。けど……

それは正しい数ではなかった……。実はこの世界に……十個のスタークリスタルが存在していたんだよ！」

ネギ・カモ「十個のスタークリスタルう！？」

二人は思わず驚きに叫んでしまった。

ネギ「ス、スタークリスタルには…十個も!？」

タカミチ「ご存知の通り、スタークリスタルを全て集めると、その闇の力から発する巨大な災いで世界を襲うと言われていた。

しかし、以前アーニヤが手にしていたスタークリスタルは不完全な物で、例え四つとも揃ったとしても、

その力は完全ではなかったんだよ。あの時彼女が君に對抗するために使っていた力は、

彼女の深く暗んだ心から来た物。あれほどの災厄を起こすほどの強力な魔法が使えたとしても、

実際は完全ではなかった…。所有者に限られていたかも知れないけど、真実には…

十個のスタークリスタルを全て集めると、この世界に本当の災いが襲い掛かるらしい…。」

カモ「あの時の闇の力は不完全だったのか!? どう言う事だよ!? あの力は魔法世界を生み出せるほどの強大なパワーがあったし、

もちろんあの真祖とも呼ばれているエヴァの姉さんだって簡単に操れたんだぜ!？」

あれは死ぬくらいに強かったんだぞ!? それくらい分かってるはずだろ!？」

カモの言う通り…スタークリスタルは起源不明でありながらも、強大で邪悪な力を宿ると言われている。

もちろん、あのサウザンドマスターとも呼ばれていたネギの父、ナギでさえも手に負えなかったとも言われていた。

しかも、その石の力に触れた者を支配する程、最大級に危険とも言われていた。アーニヤが以前その石を手にした時、

絶望に落ちた彼女を闇の力に支配され、彼女を憎むべき敵であるネギを抹殺し、大惨事を起こす事を命じられた。

簡単に言えば、スタークリスタルは深く暗んだ心を引き寄せる磁石だと思われる。

その強大な力は真祖のエヴァや強力な剣士でもある明日菜を操れるほど、

更に心の叫びによって生み出された魔法世界を創造するほどもある。もちろん、邪悪なる妖精を創造し、

所有者の敵を徹底的に抹殺する事を命じれるほどでもある。しかし、その石が強力で危険であろうとも、

ネギは無事アーニヤを闇から救い、石を元の場所へ封印する事が出来た。

ネギは当初スタークリスタルは四つだけ揃うと災いが起こると思われていたが、

今タカミチがその情報を耳にするまでは何も知らなかったらしい。

ネギ「で、でも…それって何？ さっきスタークリスタルを十個全部揃うと、真の災いが襲い掛かるって言ったでしょ？」

その…タカミチが見付けた本の中に、何か詳しく書かれてなかった？」

タカミチ「それが…本を見付けたのはよかった物の…その本はとても古くてねえ…

何年前からあった物なのかは分からないけど、その本は激しく痛んでてね…。数ページだけ読めたけど、

殆どのページは破けられたみたいで、水質や日光が原因でインクも消えかかっていたんだ。

本当はもっと何か書かれてあったと思うんだけど、残念ながら今僕が知る内容はここまでみたいだ…。」

カモ「しかし…他の石はどうなんだ？ さっきこの世界には十個のスタークリスタルがあるって言ってたけど…

以前アーニヤが盗んだ四つのスタークリスタルは今魔法学校に封印されてんのなら、他の奴はどこにあるんだ？」

タカミチ「その事に関して例の本をもつと深く調べてみたんだけど、  
どうやら他の六つはヨーロッパのどこかに隠されてあるらしいんだ。  
本の内容によると、

その隠された石は強力な結界と幻術によって守られていて、  
誰にも近づけないように隠されてあるらしい。

しかもその石の居場所は、魔法学校の校長含む学校関係者以外誰も知らないんだ。

以前に彼らの方へ連絡してみたら、石の本当の数やその居場所に関しては最初から知ってたらしい。以前、

調査班からそのような報告が来たみたいだからね。」

カモ「でもそれなら何で十個全部学校に置いてかなかったんだ？  
そっちの方がもつと安全だと思うが…。」

タカミチ「それがダメなんだ…学校四つだけの石を封印したのは、  
全てを集める事を回避しやすくさせるためなんだ。

逆に全部揃ったまま封印した場合、直ぐに災いを起こしやすくなってしまう。

だから全てを集め難くさせるために、他の六つをその場で放置したんだ。アーニヤ君が四つの石を盗む以前、

その事を全然知らなかったからね。」

ネギ「そうなんだ…。」

彼は安心そうにため息を出した。

スタークリスタルの事件に被害を受けた事のあるネギは、スタークリスタルはどれほど危険で恐ろしいのか、

どの魔法使いより理解していた。寧ろ、二度とあのような事件が今後に発生しない事を、

事件が終えた一ヶ月前から願っていた。しかし、その石の本当の数を知り、

今でもヨーロッパのどこかで嚴重に封印されている事を知った今、  
ネギは多少安心したようだ。

ネギ「けどタカミチ…何でその事を僕にだけ教えるの？別にアスナさん達にも教えてやってもよかったと思うけど…。」  
タカミチ「僕も始めはそうしようかなと思っただけ…やめたんだ。3-Aの生徒達、特に明日菜君は、

君にとっては大切なパートナー達だ。少なくとも、あの石の力で被害を受けた者もいたからね。

仮に知らせたら、深く気にしてしまうと思って…。」

その返答を聞いた後、ネギは静まり、例の事件の事を思い出し始めた。明日菜やエヴァだけでなく、数人の3-A生徒達も、一度はスタークリスタルの妖精達に操られた事があつた。妖精達はネギを抹殺するために生徒達を操っていたが、ネギの活躍によって妖精達を倒した後、操られた生徒達を解放し、要請を元の石に戻しながら手にする事が出来た。あの事件を思い出すだけで、ネギは多少心に痛みを感じた。

カモ「でもよ…それっていい事なんじゃねえのか？また誰かがスタークリスタルを盗んだ訳でもないし…」

それに本当の数を知ったとしても、まだ誰もその残りを見付けた訳でもないし…それっていい知らせだよ、な？」  
タカミチ「うん…でも僕はこの事を君達に知らせたかつたんだ。何しろ僕も君達も、あの事件の被害者だからね…。」

彼は再びタバコを吸い、その煙を吹いた。タカミチとカモは石が今でも異常がなかった事で安心していたが、ネギだけは一人だけ何かを悩むかのように下を向いていた。

ネギ「…ねえ、タカミチ。」

彼は頭を上げながら問い掛けた。

ネギ「タカミチがスタークリスタルの話をしていた時、僕思ってた



んだ。 僕がアーニヤを闇の力から助けたのを、

知ってるよね？ アーニヤが闇に支配されてしまったのは、自分の心が弱かったからだと思うんだ。

絶望的な日々を過ごしていたせいで、アーニヤは一度希望を失ってしまった…。 けど、

今はもうやる気を取り戻して上手く行っている…。 僕が思うには、アーニヤの心の中にまだ希望が残っていたから、

闇を超える事が出来て、石は彼女のを支配する事が出来なくなっただ。 例えその心が弱くても、

アーニヤは助けが欲しかった…。 ずっと僕に助けを呼んでいたんだ。 アーニヤの心は暗んでも、

悪くても死んでもいない…。 まだ希望が残っていたから闇を超える事が出来たんだ。 ただ、

それが心のどこかに隠れてたから、それを見付けるのに時間が掛かったんだと思う。 でも、

アーニヤの心はもう弱くはない。 もちろん一人じゃない事も分かった。 今でもアーニヤは修行に上手く行き、

以前より幸せに過ごしている…。それがアーニヤの心を強くしてくれたんだと思うんだ。

……………でもね…もしも……………もしもの話だよ？ もし…心を持たない、真に悪い人間がスタークリスタルを触れたら、

どうなってしまうのかな？ 以前の事件とは違う何かが起こるかな？」

その問い掛けを聞いていたタカミチは、吸っていたタバコの煙を吹き、静かに考え始めた。

タカミチ「……………分からない…。 スタークリスタルは多くの謎に包まれた呪われた魔法道具だからね…」

例の本にはもうあれ以上何も書かれてなかったし…いや、酷く痛む前に何か重要な事が書かれてあったかもしれない

い…。

多分魔法学校の校長やその関係者には何も知らないと思う…。でも、これだけ言えるのは…

この先注意しなければならぬ。この世界には決して全ての人間は心を持った善人とは限らない…。

その時が来ない事を、願うしかないよ…。」

三人は静まり返り、学園の風景を眺め続けた。すると突然強い風が吹き始め、目の前に雷の轟音と共に暗雲が現れ、青空を覆い始めた…。

…数時間後

学園に緊急的な報告が来た。それは放課後、突然の嵐が学園に向かって来ると言う気象注意報である。

この注意報により部活と施設を中止にする事になり、生徒達は直行寮に帰還するよう報告した。最後の鐘が鳴った後、

生徒達は教室から出て、寄り道せず直ぐ量へ戻ったが、エヴァと茶々丸は自分達のコテージに戻り、

自縛霊であるさよは一人寂しく教室に残った。職員達含む全員が去った後、学園は沈黙の空間と化した。その同時に、

暗雲は青空を完全に覆い、雷が見えて来た。雨はまだ降っていないが、学園に襲撃するかの様に強風が吹いて来た。

…その夜

嵐はとうとう麻帆良学園に襲い掛かった。昼とは違い、強風は建物を揺るがすかのように激しくなり、豪雨も激しく地面を打っていた。雷の轟音も激しくなり、黒い雷

雲から稲光が眩しく見えて来た。

一方寮では、ネギ、明日菜と木乃香はパジャマ姿で窓から外を眺めていた。強風の原因で窓は激しく揺れていたが、それでも窓は割れる事もなかった。ちなみに刹那がそこにいなかったのは、自分の部屋に戻っていたからである。

三人は窓から嵐を眺めている間に、ネギは何かに気にしていた…。

カモ「見ろよ、この嵐！こりやさすがに誰もこんな嵐が学園に来るとは思わなかっただろうツスね！」

木乃香「ホンマやなあ…明日晴れるとエエけどなあ…。」

ネギ「大丈夫ですよ。この嵐は今晚中を通り過ぎるので、明日には晴れると他の先生達から聞きましたよ。」

明日菜「ええ〜？明日もこのままでいいと思うけどなあ〜。そしたら授業が休みになって一日中遊べるけどなあ〜！」

カモ「姉さん、そりや無理ツスよ。例えそうであっても、こんな嵐で外に出られねえツス。軽々吹っ飛ばされるツスよ。」

そう聞いた明日菜は落ち込んで挫折した。

しかしその間にネギは、ただ黙って暗雲を眺め続けていた。それは昼にタカミチから聞いた話の事を気にしていた。

スタークリスタルの真実と、心のない悪しき人間がそれを触れてしまうと言う恐れ…彼はその事を気にし続けていた。

しかしその事実を知らない明日名と木乃香は気にする事もなく、ネギが外を眺めている間にそのままベッドに入ってしまった。

ネギ（スタークリスタル……まさかこの世界に全部で十個もあつたなんて、全く知らなかった…。

今までアーニヤが盗んだ四つの石こそが実際の数だと思ったけど、タカミチから聞くまでは、

まだ残りの六つがヨーロッパのどこかに存在していたなんて

知らなかった…。今は安全に封印されてるけど、

それでも気になる…。もし心を持っていない悪人がスタークリスタルを手に入れてしまったら、

一体どうなってしまっただろう…？ 出来ればその時が来なければいいけど…

あの忌まわしい事件を再び止める事が出来なくなるかもしれない…。でも…もしその時が再び来たら、

どうすればいいんだろう…？ この嵐が何か意味をしていないければいいけど………。( )

明日菜「ネギィ、何やってんのぉ？ もう寝るわよぉー！」

ネギ「あ、はい！」

明日菜に呼ばれた事に気付いたネギは、お互いにお休みの挨拶をし、明かりを消した。そしてネギは自分の布団の中に入り、

寝付けようとしますが、まだスタークリスタルの事に関して気にしている様子…にもかかわらず、

これ以上考え過ぎない方がいいと思ったか、直ぐに眠りに落ちた。

もちろん明日菜、木乃香、そしてカモも、

一日の疲労から解放するために眠りに落ちた。

…麻帆良学園付近の闇に包まれた森にて

この人気もない暗闇に包まれた森の中に、一人の人物が立っていた…。その人物の姿勢は不気味に怪しく、

強風が木々を激しく揺らしても、激しい豪雨が森全体に降りかかっている。その人物は少しも動かなかった。

暗闇の中にいるせいでその姿は見え難く、稲光でさえも役に立たな

い。だが、人間ではなく、別の何かだと思われる。  
しかもその人物は、不気味に笑っていた…。

「……………フッフッフッフッフ……………ついに……………ついに一つ目の『力』  
を手にする事が出来た……………。」

だが完全形の『力』を手にするには、後五つが必要……………。近  
くにその内の一つの『力』は感じるが…

あれは最後に取って置くのでしょうか……………。楽しみと言う物は、  
最後まで取って置くべきだから……………。

フッフッフッフッフ……………この『力』がある限り……………全ては『伝説』  
通りに動き出す……………。」

そして……………全ての『力』が揃う時……………僕の望み……………いや……………みんなの望み  
が実現する……………。『時の破壊』には失敗したが……………

フッフッフッフッフ……………今度こそ……………フッフッフッフッフ  
ッ……………。」

不気味な笑いが響き渡り、稲光は暗闇の森を一瞬に照らすと、その  
人物の姿は忽然と消えてしまった。その後、

二人の謎の人物が、その怪しい人物が立っていた場所まで駆け付け  
て来た。先ほどの人物同様、暗闇のせいで姿は見えないが、

一人だけ宙に浮いているのが分かる。彼らは強風に当たりながら  
も、先ほどの人物を探すかのように周囲を見渡していた。

????A「なっ……………い、いない!？」

????B「そんなバカな……………!？ 奴の気配は確かここから感じたの  
に……………一瞬にして消えた!？」

????A「くそっ!! 遅かったか……………! もっと早くここに連れて  
いれば、奴を捕まえる事が出来たのに……………!」

????B「仕方がないよ……………『力』の原因で『この世界』と『こちら  
の世界』が近づいて来てるにしても、

距離がそれでもまだ遠いからね。でもまだ信じられないよ…まさか奴はまだ生きていたなんて。」

「???A「僕もそうだよ…世界に対する最も恐ろしい敵………今までずっと生きていたなんて。」

「???B「もちろん『あの事件』から生き残れたなんて、想像も出来ないよ。しかもそれだけじゃない…」

一つの『力』が開放されてしまったために、奴は『時の狭間』を破壊してしまった。」

「???A「しかもパンドーラの箱を破壊してしまったために、倒す事も苦労したとも言われている邪悪なる存在達が、

地上まで脱出してしまった…。このままでは放って置く訳には行かない!

何としても騒動が起きる前に全員を『時の狭間』に戻さないとい…!」

「???B「『この世界』には『時の狭間』から脱出した者の気配は感じないから、

誰がここを襲うかと言う心配する必要はないみたいだね。」

「???A「多分な…けど、『力』が奴の手に渡り、発動させた以上、近い日には真の災いが始まる…。」

そうなる前にかして止めないと…!」

「???B「でもどうする? 悪者達は彼らに任せる?」

「???A「いや、彼らは以前に奴らを倒せたかもしれない…でも二度目には出来ないと僕は思う…。以前の戦いで、

奴らは彼らの攻略や弱点を見抜いてしまっているかもしれないからな。恐らく、

以前のように彼らは奴らを止める事は出来ないだろう。

でも…予言によれば、

『異世界から来た者』こそが全てを救えると…。」

「???B「『空間の歪みが起きる時…異世界からの選ばれし者がこ

の世に舞い降りし…

その選ばれし者がこの世の二つの勇者と合わせる時…希望の光となり…

『六つの力』を収める闇を制するであろう… ……彼女  
の予言ではそう言っていた…。

でも僕はあの予言に疑問がある…。 彼女の予言通り、  
この件をその選ばれし者に任せろべきなの？

なぜなら…。

??? A「分かってる…僕もそこが心配なんだ…。 でも…僕が思  
うには、彼らならその選ばれし者と組み、

『この世界』と『こちらの世界』を襲い掛かる災いから  
救ってくれる…。 ただ、

あの予言が間違っていればいいんだけど…。

??? B「じゃあ…これからどうする？ もうこのエリアには奴の  
気配を感じないけど…。」

??? A「ここは仕方ない…『こちらの世界』に戻ろう。 もしか  
したら、次の作戦を立てるために戻ったかもしれない。

この事をあのお方達に報告しよう！ 行くよ、 ヲヴォイ

ド 『ー！』

??? B「はい、『ジーノ』！』

再び稲光が森を照らした時、彼らも忽然と姿を消した。 この時ま  
で、この森で何があったのかは誰も知らない…。

そして今夜も…この怪しげな嵐は続く… ……。

## 第2話 開放された空間の歪み

……………何も無い空間……………ネギは再びその空間の中にいた…。以  
前のように、彼は身動きがしないまま、  
この空間の中で一人浮いていた…。

ネギ(……………また…この夢だ……………)。

彼は目を閉じたままそう思ったが、何か違和感をした。以前とは  
違い、彼は少しずつ目を開き、両手足を動かす事が出来た。

以前は凍り付いたかのように身動きが出来なかったが、今度はなぜ  
か自由に動けるようになった。

しかし、元はと言えば地面のない空間であったために、前方や後方  
に進む事が出来なかった。

どこにも行けない事を理解したネギは、周囲を見回ってみた。

ネギ(…あれ…？ 動ける…！ でもやっぱりダメだ…ようやく自  
由に動けるようになったとしても、

どこにも行けそうにないや…。でも…一体ここがどこなの  
か…どう言う場所か夢なのか…全く分からない…。

でも…僕がまたここに来たと言う事は…ひょっとして……………。

)

ネギはそう思うと、どこかから何らかの気配を感じ始めた。その  
気配を感じた方向へ振り向くと、彼の前に謎の人影が現れた。

その姿はやはり見え難いが、間違いなく以前に彼の夢に登場した同  
じ少女の人影であった。

シルエットのような姿は今も変わらないが、声だけは以前より聞こ  
えるようになった。

『……………助けて……………誰か……………お願い……………助けて……………』



少女は手を組みながら、誰かか何かに祈っていた。彼女の声は、まるで何か悲惨な出来事が起きたかのように、悲しみを表していた。だがネギが明らかに彼女の声が聞き取れているにもかかわらず、彼女は近くに彼がいる事を気付いていない様子。以前はお互い接触が出来なかったほど距離は遠かったが、ネギが自由に動けるようになった今、彼女に接触する事が出来るかもしれない。ネギは決意を出来た時、少しずつ彼女の所まで近付き、話しかけてみた。

ネギ（あ、あのあゝ…。）

『えっ！？ …だ…誰…？ その声…もしかして…貴方なの…？ 私の声が聞こえるの…？』

ネギ（え？ あ、はい…はつきりと聞こえます。）

『本当に？ よかったあ…ようやく貴方と会えたわ…。』

ネギ（えっ…それってどう言う意味で…？）

少女は安心そうにそう言うが、ネギはその意味の分からない発言に対して多少混乱していた。

『…っと言う事は…もしかして、私の姿も見えるの？』

ネギ（え、いや…全く…。）

『そう…でも、今こうやって話し合っているとと言う事は…やはり…お互いの次元が近付いて来てるのね…。』

ネギ（次元…？）

少女の意味不明な発言に対して混乱し続けるネギ。彼女が一体どう言う意味でそう言ったのかはネギには全く理解不能だが、それでも少女はまだ意味不明に独り言を言っていた。話を戻すために、ネギは少女に問い掛けた。

ネギ（あの、すみません！ 貴女に聞きたい事があります！ 貴女

は一体、誰なんですか？ 貴女はもしかして、

人の夢の中に潜み、助けを求めている幽霊なんですか？

彼は以前エヴァとさよが言っていた幽霊説を言ってみたが、少女はそれに対応して頭を振った。

『いいえ…私は幽霊じゃないわ。でも、それに近い存在かもしれない。』

ネギ（それに近いつて…どう言う意味なんですか！？ それってまだ生きていて、

『夢歩き』と言う貴女の夢と僕の夢をシンクロさせて対面すると言う魔法が精神的な現象を使ってるんですか？）

『それも近いけど、違うわ…。けどその同時に、私は生きていない…。私は『精霊』…』

『私の世界』に存在するある物を守る運命さだめを持った魂かたまり…。私と貴方がこのように出会えたのは、

魔法でも現象でもない…。私は人の心に入り、夢の中でその人と対面する…それが精霊の力なのです。』

ネギ（精霊…私の世界…？）

その言葉に対して更に混乱するネギ。 さよと言った『幽霊』や、スタークリスタルから生み出された邪悪なる『妖精』なら会った事はあるが、『精霊』と言う存在とは一度も会った事はない。

当然ながら精霊と会うのは今回で初めてで、もちろん驚いていた。しかし、

先ほど彼女が言っていた『私の世界』とはどう言う意味をしていたのかは、ネギには分からなかった。

『…そして…このように出会えたのは…私は貴方の心の中にいるから…。でも私達がこのように接触出来なかったのは、

お互いの次元が掛け離れていたため…。そしてこのように会えたのは…次元の距離は徐々に近付いているから…。

だとすれば、これはいけないかもしれない…。』

ネギ（次元が徐々に近付いている…？ いけないかもしれない…？  
あの…すみません、それってどう言う…？）  
彼は次の問い掛けをする直前、少女は彼に振り向いた。

『お願い…よく聞いて。これは私達にとって、とても大事な話よ。  
そして何があっても、

この事を決して忘れてはいけない…。私が夢の中で貴方と会い  
に来たのは、

この先攻めて来る災厄の警告を知らせるためなの。』

ネギ（さ、災厄！？）

『そしてそのために、貴方の力が必要な。』

ネギ（ちょ、ちょっと待ってください！ 貴女の言うその災いつて  
…！？）

会話の途中、突然空間が激しく揺れ始めて来た。この振動の原因  
で、二人は会話を途中で止めた。

ネギ（え、じ、地震…！？ な、何で突然…！？）

『いけない！！』『歪み』が始まったわ…！！』

ネギ（え…『歪み』！？ それって…！？）

彼はその意味不明な言葉に対して再び少女に問い掛けるが、空間の  
激しい振動により届かなかった。もちろんそのせいで、

少女の声も聞き取り難くなって行く。ネギは自分の手を彼女に伸  
ばしてみるが、前進する事が出来ない上、

少女もだんだん遠ざかって行く。

『…お願い…この奇…のひと…！ お願い…達を  
助…！！ この…界が…

つがちか…前…！ ……が…！』

彼女はネギに何かを伝えようとしていたが、振動のせいでネギの耳

に届かなかった。そして振動が更に激しくなり、少女は消え去った。ネギ（え、何！？ 今何て…！？ お願い、待って…！）彼は消え去った少女に大声で言うが、無駄であった。そして少女が消え去った同時に、ネギの意識も薄れて行く…。

## 現実世界

…時刻は朝…麻帆良学園  
かつて学園を襲った嵐は、一晩で通り越し、綺麗な朝日を迎えていた。強風が原因で地面は木の葉やゴミだらけで、豪雨が原因で水溜りが多いが、以前より空は眩しく輝いていた。一方、明日菜と木乃香の寮では、眩しい朝日は窓から照らされ、その間に布団の中でうつ伏せ状態で寝ていたネギは例の夢を見ながら魘されていた。

ネギ「……………うう~~~~ん……………ま…待って……………それ…どう言う……………」  
そう魘されている間に、ネギは目を覚ました。  
ネギ「……………ここは…？」

部屋は眩しい太陽の光によって照らされ、特に変わった様子はない。しかしネギは呆然としたまま辺りを見回した。まだ寝ぼけているためか、頭ははつきりしていないらしいが、明らかに彼は夢の中ではなく、

現実世界にある寮の部屋に戻っていた。

するとネギは自分の背中から何かを感じていた。痛みは感じないが、とても軽い何かがある。彼の背中の上で跳んでいた。

ネギは後ろへ振り向くと、そこには『何か』がいた。それは小さくて可愛い、丸い坊の着ぐるみと、

鈴付きリボンで結ばれた長いツインテールをした少女…。そう、あれは『スカカード』状態の明日菜であった。

明日菜「おきろお〜！ あさだぞお〜！」

ネギを起こすかのように彼の背中に跳び捲くるスカ明日菜。そんなネギは起き上がり、困った表情をしながら、ぬいぐるみのような明日菜を持ち上げた。

ネギ「もう、いい加減にしてくださいよ！！ って言うか何で今回は『スカカード』状態なんですかあ！？」

怒鳴る彼だが、そんな明日菜はキャツキャツと、まるで子供のように笑っていた。

その後、制服姿の木乃香と刹那、そして木乃香の肩の上に乗ったカモが駆け付けて来た。

カモ「おお、兄貴！ 起きたんスね？」

木乃香「おはようなあ〜、ネギ君！」

刹那「おはようございます、ネギ先生…とりたい所ですが…」

「どうやらアスナさんまた先生に妙な起こし方をしたようですね…。」

木乃香「ごめんなあ〜、ネギ君：ネギ君がまだ起きへんから、アスナまた魔法使ってもうたんよ。」

「本当は止めたかったんやけど…。」

カモ「まあ、姐さんが激痛のあるカードを引き抜かなくてよかった

んじゃねえツスカ、兄貴？」

ネギ「良くないよお！！ 例えどんなカード引き抜こうとも、体力が消耗しちゃうって！！ とにかく、アスナさん！」

元の姿に戻ってくださいよ！」

ネギが布団から出た後、明日菜は言われた通りに呪文を唱え、元の制服姿の女子中学生に戻った。

通常は『ネオ・パクティオカード』が発動されている時、従者は体力が完全に消耗したら元の姿に戻ると言う事になっている。つまり、空腹なるまで元に戻れないが、カモの研究によると、従者の意志によって元に戻る事が出来ると判明されたようだ。しかし、それでも消耗された分の体力は残ってしまうと言う…。

明日菜「ふう〜…やっと戻れた…。」

彼女はため息を吐くと、再びネギに文句を言い付けた。

明日菜「全く、そんなに文句言ってもしょうがないでしょ！？ 昨

日みたいにあんたが起きないから悪いのよ！」

ネギ「だからと言って…！」

再び言い争いが起こる前に、木乃香は二人の間に割り込んだ。

木乃香「まあまあ、二人共！ こんな朝っぱらから喧嘩しても意味あらへんよ？ 今日も元気に学校行こうなあ〜！」

彼女が明るい笑顔を出すと、ネギと明日菜はそれに対応して、お互い言い争いのを止めにした。

その間にカモはネギの肩に乗りかかった。

カモ「ところで兄貴？ 今日もまた魔されてたようツスケど…まさかまた同じ夢でも見たんスか？」

明日菜「え、そうなの！？」

木乃香「また昨日と同じ夢見てたん、ネギ君？」

ネギ「え…あ…その…それは…。」

余りにも自分が見た夢の事を話す事を嫌がるネギだが…。

刹那「あの…ネギ先生、アスナさんにお嬢様…。その話は後にしませんか？」

これ以上長居するとまた遅刻してしまいますが…。」

ネギ「えっ…!？」

彼は壁に飾ってある時計を見ると、クラスが始まる時間まで後僅かとなっていた。

ネギ「わああああ、ホントだああああ!!! またこんな時間…!

!!! い、い、急がないとおおおお!!!」

そう慌てながら、ネギは急いでパジャマ服から先生服に着替え始めた。その間に明日菜はそんなネギに対し、呆れた表情でため息を吐いた。

明日菜「はあ…全くドジなガキなんだから…。」

…その後、ネギ達は無事、時間ギリギリでクラスに到着した。勢いで走っていたためか、四人共激しく呼吸していた。

そして生徒達全員がネギに対する恒例の挨拶をした後、カモはネギの上着ポケットから飛び出し、生徒達の前で鏡台に立ち上がった。

カモ「おお、全員ちゃんと集まってるようツスねえ? そして見てみい!

エヴァと茶々丸もちゃ〜んと出席してるじゃねえツスカ!

いやあ、感心感心!」

ネギ「カモ君?」

エヴァ「何だあ？　まるで私の事をどつかの不良みたいに呼んでるみたいだなあ？」

彼女はカモに鋭く睨みながらそう言った。

茶々丸「以前までは……。」

彼女は小声でそう言うと、エヴァは茶々丸に睨み付いた。

エヴァ「何か言ったか？」

茶々丸「いえ、何も……。」

彼女は軽く余所見をしながら返答した。

ネギ「ところでカモ君……いきなり飛び出してどうしたの？」

カモ「ああ……もし全員ここに集まっていたら、こいつを見せてやるうかなと思って……。」

すると、カモは自分の背後のどこかから一通の手紙を取り出した。

その手紙の宛先には英語で書かれてあったため、

恐らくネギの故郷であるウェールズから来た物だと思われる。　し

かし、その手紙は何なのか、生徒達には理解出来なかった。

あやか「それは何ですか？」

カモ「こいつはネギ兄貴と俺っちの出身地、ウェールズからの手紙ツス……！」

ネギ「ええ！？　ちょ、ちょっと待ってよ、カモ君！？　何でカモ君がそれを……！？　って言うか、

何で今まで隠し持ってたの！？　さっき寮にいた時、僕にくればよかったのに……！」

カモ「でも兄貴、これ兄貴だけに宛ててないんすよ？　封筒に『麻帆良学園女子中等部3-A生徒達へ』と書いてあって、

差出はネカネの姉さんからじゃなく、『メルディアナ魔法学校関係者より』って書いてあるツス。」

明日菜「メルディアナ魔法学校関係者？　ネカネさんからじゃない



の？」  
木乃香「一体誰からやるなあ？」

手紙の事で気になっていたりするためか、生徒達は早速教壇に集まって来た。しかしエヴァ、茶々丸、千雨、真名、そしてザジは、自分達の都合で席に残った。当然ながらエヴァは手紙に関しては一切無関心であり、茶々丸はそんなマスターの所へ居付き、千雨はノートパソコンで自分のホームページを更新したり、真名は拳銃を磨いたり、ザジはジャグリングの練習をしていた。その間にネギは手紙を見せなかつたカモに対して少し困っていたが、手紙は彼だけではなく3-A生徒達全員も含まれていたのも、良しとした。カモが封筒の中身を取り出した時、手紙には英文字で書かれていた事に気付き、  
当然ながら全員（または英語が読める数人除いて）には解読不能であった。しかし、これは元はと言えば魔法の手紙。  
手紙からはまるでSF映画によく出て来そうなホログラム映像が出て来た。その映像の中には、  
赤いネクタイをしている緑色のカエルと、わたあめのような白い猫が映っていた。

「??? A 『アーアー…本日は晴天なり…聞こえますでしょうか?』」  
「??? B 『多分大丈夫と思うミヤ。』」

全員「『モツ』と『シチミ』!？」  
ネギと生徒達は思わずその謎の生命体達の名を叫んだ。しかし、その中でまき絵だけはなぜかモツの事を『お父さん』と呼んでいた。

モツとシチミ  
スタークリスタル事件が起きた時、ウェールズのメルディアナ魔法

学校から派遣されたネギの監視役で、

『サウザンドマスター』とも呼ばれていたネギの父、ナギの下僕である。その姿は、

元々ハルナが描いたイラストキャラクターから借りた物であり、本来の姿は未だに誰も知らない様子。

スタークリスタル事件が解決された後、ネギと生徒達と共に学園に滞在する事になっていたはずだったが、

ネギの活躍と事件による報告と、残された他の仕事を済ませるためにウエールズに帰国したと言う。

ちなみにまき絵がモツの事を『お父さん』と呼んでいたのは、彼女が飼っていた犬がモツそっくりで、

意味不明に『お父さん』と言う名前を付けていたと言う。この真実こそ、モツのトラウマとなった。

モツ『ええ〜つと…ネギ先生に3・A生徒の皆さん、こんにちは。

モツと申します。

ウエールズに帰国して以来長くも皆さんとお会いしなかったので、お久しぶりでございます。』

シチミ『同じくシチミですミヤ。元気にしてますミヤ?』

ネギ『モツとシチミかあ…懐かしいですねえ!』

明日菜『ホントねえ〜スタークリスタル事件以来だねえ!』

ネギと明日菜含む他の生徒達も、映像に映るかつての仲間を見て懐かしんでいた。

しかしエヴァのような席に残った生徒達には、所詮どうでもよかつたらしい。

モツ『ええ〜つと…まずはどこから始めましょうか…。まず、私達は今ウエールズでお元気にしております。』

もちろん同じくウエールズに帰国したネカネさんもお元気に

しておりますし、

アーニヤさんもロンドンに戻ってから上手く修行しているそうです。』

シチミ『こっちはいつもモツのバカにツッコミ入れるの疲れるけど、上手く行ってるミヤ！

でもなかなか死なないのは残念だミヤ……。』

モツ『それってどう言う意味ですか…？ まあ…それよりも、まき絵さんはどうしています？

学園でお元気しておりますか？ 私がない間寂しがってませんでしたでしょうか？』

まき絵『うん、大丈夫だよお父さん！ まき絵元気しているよ！』  
彼女は涙ぐみながら返答するが、隣にいたあやかは大袈裟なまき絵に対して呆れていた。

モツ『しかし時の流れと言う物も早いですなあ…。 スタークリスタル事件が終えてから早一ヶ月…！

ウェールズに戻って以来3 - Aの皆さんの事が恋しくて恋しくて…。』

シチミ『何言ってるミヤ？ モツのアホ面なんて一ヶ月も経てばもうとつくに忘れてるミヤ！』

モツ『何を言うのですか、シチミは！？ 確かに私は今まで踏んだり蹴ったり、基踏まれたり蹴られたりはしましたが、

3 - Aの皆様は私にとっては思い出の一部！ 誰一人も私の事を忘れてはしませんよ！』

シチミ『ほう？ 『犬』と同列なモツの事がミヤ？』

……… 前言撤回ww

そのトラウマ的な言葉を受けてしまったモツは、田 浩史画風みたいなシヨック顔になり、固まってしまった…。

「????」あの二人(??)も相変わらずだねえ……。」

『村上夏美』と言うそばかすにシヨートな茶髪をした少女は苦笑いをしながら、

モツとシチミのやり取りに対してそう言った。

千鶴「でも元気そうでよかったね。」

状況も読まず、千鶴は笑顔でそう言った。

シチミ「あつ、そうだミヤッ!! 皆さんに重要な事を報告するためにこの手紙を送ったんだったミヤッ!!」

すっかり忘れてたミヤッ!! モツ、緑色のくせにブルーになつてないで報告だミヤ、報告!!」

モツ「おお…そうでしたあ!! 私としか事がっ!!」

先ほど落ち込んでいたモツは、シチミの掛け声により我を取り戻した。

モツ「ええ〜つと…実は、私達は皆さんにこの手紙をお送りしたのは、シチミの仰る通り、

皆さんにある最悪なお知らせをしなければなりません…。」

ネギ「最悪なお知らせ? それってどう言つ…?」

モツ「よくお聞きしましたね、ネギ先生!」

ネギ「…え?」

映像の中にいるモツがそう答えると、ネギと他の生徒達はそれに対して啞然とした。

夕映「…今、答えましたね…?」

『醤油ミルクコーラ』と言う奇妙なドリンクを飲みながら夕映はそう言った。

明日菜「ええ、ど、どうやって!?! これ、録画されてんでしょ! ?」  
「なのにあの力エルどうやってネギの質問を…!?!」

シチミ「へ? 何でそう言うミヤ?」

モツ「いや、私がそう言つと、恐らくネギ先生は『それってどう言

うの?』と絶対言うかもしれなかったので、

念のために答えました。こう言うのはですね、イメージが大事なんです。』

二体が思わぬ漫才をやり始めた時、映像を見ていた者達は皆沈黙となった。

モツ『まっ、それよりも…皆さんに大変なお知らせがあります。

これを聞いたからには、皆さんはきつと驚くと思います。

もちろん、いい意味ではなく…。えっとお…皆さんはスタークリスタルの事、今も覚えていますでしょうか?

もしも覚えていましたら…私達はそれをウェールズに持って帰った事も、ちゃんと覚えていますよね?

実は、そのスタークリスタルの事なんですが…。』

何やらいつもとは違う喋り方をするモツは、多少焦り始めた。そんな焦る力エルに対して、

ネギと生徒達は多少の緊張感を持ち始めた。

モツ『……………実は…またもや何者かに盗まれたそうで…。』

全員「ええええええ!?!?!?!?」

モツの一言に対して、全員思わず驚きの叫びを上げてしまった。

もちろん席に残っていた生徒達も、顔に出してはいないが、

非常に驚いていた様子。特にノートパソコンを弄っていた千雨、

銃を磨いていた真名、そしてジャグリングをしていたザジは、

一時的に動きを止めた。

ネギ「ま、また盗まれたって…!?!?」

明日菜「ちょ…ちょっと…それどう言う事よ!?!?」

そう聞く明日菜だが、所詮相手はビデオレターの中にいる人物…いや、生物。ビデオ電話ではために、

リアルタイムに返答する事はない。だがモツとシチミは、まるで

状況を呼んでいたかのように説明し始めた。

モツ『あれは確か…二日前の事でしょうか…。あの事件が終わって以来、私達は直ぐに回収した石をウェールズに持って行き、メルディアナ魔法学校の深い地下に封印したのです。以前はアーニヤに軽々盗まりましたが、

今回は強い魔法使いでさえも通れないように、強化された警備用魔法で強力な結界を張ったのです。』

シチミ『ところがある時、封印された地下から爆発が起きて、僕達がそこに着いた時には…それが酷い事なんですミヤ。』

結界も壁も完全に破壊され…安置されていたはずの石も全部なくなつてたんですミヤ。』

モツ『あの時校長含む全魔法学校関係者も愕然としました…でもその同時におかしいとも思つたんです。』

部屋を守っていた結界は、指一本で触れた者を一万ボルト以上の電流で感電させるほど強力で、

鏡のようにどんな強力な魔法でも軽く跳ね返せるほど強力だったんです。例えどんなに強力な魔法や武器を使つても、

決して破れる事はないのです。』

シチミ『通常は一度結界を張ると絶対に消えないんですミヤ。』

もちろん結界を作った校長先生でも解く事が出来ないんですミヤ。でも…その結界は破壊されたんですミヤ…。

どんな力を使って破壊したのかは不明ですが、四つの石が全部盗まれたのは事実ですミヤ！

そのせいで学校全体ショックなんですミヤ！』

鈴音「結界が強化されても破壊されたつて…そんな妙な話聞いた事ないネ？」

彼女は隣にいる『葉加瀬聡美』と言う眼鏡をかけたおでこの広いお下げの少女にそう言った。



円「全部合わせて十個も!？」

桜子「うそお!？ そんなにいっぱいあったの、スタークリスタル  
つて!？」

チアリーダー三人娘お互いポンポンを持ちながら驚いていた。

モツ『皆さんも知らなかったと思いますが…私達が帰国した時、校  
長先生が話すまで私達も最初は知らなかったのです。』

まさか全部十個もスタークリスタルが存在してたなんて…知  
りませんでした…。』

シチミ『しかも校長先生は、残りのスタークリスタルはヨーロッパ  
のどこかに安全に隠されてるって言うてましたミヤ。』

で、その祭壇の上で置かれていたスタークリスタルは、盗  
賊でさえも届けないように、

強力な結界と幻術で守られていたんですミヤ。 幻術は祭  
壇を透明化させる効果がありまして、

肉眼では見えないようにされてあるんですミヤ。』

モツ『しかし、四つのスタークリスタルが盗まれた同日、その残り  
の六つも盗まれていたのです! もちろん、

石を守っていた強力な結界と幻術もみんな破壊されていたの  
です! それを知った校長と学校関係者達は、

非常にショックを受けていました…。 たった一日と言う短  
時間で全部の石を軽々に盗めるなんて、

普通ではあり得ない事です! 例え犯人はアーニヤさんであ  
ったとしても、

さすがに彼女は残りの六つの在り処を知るはずもないですし、  
私達も彼女が犯人だとは絶対に思いませんし…。』

シチミ『あらかじめその祭壇を監視するために設置した、防犯カメ  
ラ同様の警備魔法も破壊されましたミヤ。』

ですから誰が盗んだのかは、心当たりがありませんミヤ。』  
モツ『それと、これはあくまでも私達の予想ですが…もしかしたら



その石は再び日本に向かっているのかと…。」

その間に3 - A生徒達は、スタークリスタルに関する不安感を抱え始めたために、お互いに小声で話し始めた。

もちろん席に残っていた生徒達も、その不安感を隠せなかった。

なぜなら事件当時、

数人の生徒達はスタークリスタルの妖精に操られた事がある。その経験を持った以上、

スタークリスタルに対する不安感と恐怖心を持つてもおかしくはない。

だが全員が不安を抱える中、エヴァの方は他よりもっと酷いとも言えよう。なぜなら事件当時、

スタークリスタルの影響で\*無意識にも巨大化されたり、\*\*コテージごとどこかへ漂流してしまったり、

生徒達の中でも最もスタークリスタルによる被害を受けていた。

更に、完全にスタークリスタルに操られ、

明日菜と供に\*\*\*闇エヴァと化した事もあった。例えエヴァは究極の力を持つ真祖の吸血鬼と呼ばれても、

スタークリスタルに対する不安感と恐怖心を持つのは、珍しいがおかしくはないはず。

\*アニメ第二期『魔法先生ネギま!?』の第20話より参照

\*\*同じく第21話より参照

\*\*\*同じく第23話より参照

しかし、もしスタークリスタルが日本に再び渡って来たとしたら、学園内に魔法に関する事件が発生するはず。

だがここ最近何も起きていない…もちろん妖精が出現し、誰かが操られたと言つ情報もない。

もしそのような事件が発生したとしたら、ネギやエヴァ、もちろんタカミチも、その魔力に気付くはず。

何も感じなかったと言う事は、魔法関連の事件は学園内に発生していない事になる。しかし、

十個も存在するスタークリスタルは、一日と言う短期間で何者かに盗まれたと言われている…。

もしかしたら…昨夜の嵐には何か関係があったのでは…？ でもその時魔法の気配は感じなかった…。

昨日タカミチから聞いたスタークリスタルの真実もとても気になる…。事件の解決者であるネギは、

3-A生徒達よりその事を非常に気にしていた…。

モツ『…とまあ、これだけでしよう…。出来れば私達も向こうに行ってお手伝いしたいと思いますが…』

残念ながら出来ません。私達がウェールズを留守にしている間にやらなければならぬ仕事が溜まりまして、

それを全て済まさなければならぬので…。』

シチミ『そして残念ながら、ネカネさんも向こうに行けないミヤ。なぜかよく分からないけど、

気象問題が原因で今空港は運行停止中になっている様子だ

ミヤ。』

モツ『ですので、今回お手伝いに行けなくて申し訳ございません…。

ああ…非常に残念…。』

美空「まあ、来ても来なくても、役に立たないけどね…。」

???「でも…それでも残念だね、来れなくて…特にネカネさん…。

『大河内アキラ』と言う身長の高い、黒くて長いポニーテールをした少女が、寂しそうにそう言った。

モツ』とりあえず、今日はここまでです。お手伝いに行けなくて申し訳ございませんが、

皆さんの安全をお祈りしております!」

シチミ』寂しくなるけど、みんなの事忘れないミヤ!」

モツ&シチミ』それでは…さようなら!」

二体がお辞儀をしながら別れの挨拶をした後、映像が消えた。

ネギ』…スタークリスタルか…。」

彼がそう呟き、手紙を少しだけ下ろすと、手紙から再びモツとシチミの映像が出現した。

それに対してネギと生徒達は多少驚いた。

モツ』ああ、そうそう…最後に大事な事を言うのを忘れてました。」

シチミ』言わば追伸ですミヤ!」

モツ』夕映さあ〜ん!」

奇妙なドリンクを飲んでいた夕映は、そのドリンクを飲みながら目を映像に向けた。

モツ&シチミ』そちらの都合がんばってください! いい意味で…。」

彼らは不気味な笑みをしながら、映像と共に消えて行った。その後夕映は、その言葉の意味を理解した同時に反応したためか、思わず飲んでいたドリンクを口から吹いてしまった。それに対して、生徒達は一瞬に彼女から離れた。

夕映「な、な、何を言ってるんですか、あのふざけた生物は!？」  
彼女は赤面しながら慌て始めた。

モツとシチミが残した言葉と夕映の突然な赤面はどう言う意味をしていたのか、この時誰にも知らなかったが、

慌てている本人だけしか知らない。ご存知の通り、夕映はネギの事を密かに好意を抱いていて、その事はあの二体以外誰も知らないと言う。だが、そんなネギに対する好意を密かに持つていても、それを同じくネギに好意を抱いている親友ののどかには明かせなかつた。明かした場合はのどかを傷つき、お互いの友情も解消されてしまうと、夕映はとても恐れていた。この時、彼女はなぜ恥ずかしがり、慌て始めたのかは、今の所誰も知らない…。

ネギ「…夕映さん、どうかしましたか？ 顔赤いですけど…。」  
夕映「うえ！？ えっ…あっ…いいえっ、ネギ先生！！ な、何でもありますん！！」  
のどか「ねえ、ゆえゆえ…そっちの都合って何の事？」  
夕映「ああ！？ いや、何でもないです！！ ホントに何でも…っ  
て言うかのどかには関係ない事です！！」  
彼女は必死に自分の秘密を隠そうと、思わず激しく拒否した。だが、ハルナはそんな彼女の行動を見て、何か怪しい物を感じていた。

亜子「そ、そんな事より、これどう言う事なん！？ 全く意味が分からへんねんけど！？」  
和美「確かに…誰かが短時間でスタークリスタルを全部盗めたのは不思議な話だけど…っと言うか、  
スタークリスタルには残り六つも存在していたなんて全然知らなかつたよ…。」  
裕奈「今まで四つしかないと思ったのに、まだあつたなんて…聞いてないよお〜！？」

カモ「…なあ、兄貴…これって非常によくないと思うっすけど…。」

ネギ「…うん…僕もそう思う…。」

だが二人は小声で言ったつもりが、明日菜の耳元に届いたようだ。

明日菜「ちよ〜と待てよ…？　ネギ、あんたまさか…最初から石の事を知ってたの？」

彼女がそう問い掛けると、ネギは一瞬に動揺した。

刹那「そう言えば昨日高畑先生に呼ばれた時…あれはもしかしてこの事では…？」

ネギ「…えっ…まあ…そ、そのお…。」

彼は焦り始め、誤魔化そうとするが…。

カモ「兄貴…もう秘密がバレちまったんだからさ、この際隠さずに話そうぜ？」

ネギ「…そうだね…。」

彼は頷き、生徒達に向いた。

ネギ「…はい、スタークリスタルの本当の数、僕は知ってました。

昨日タカミチ…いや、高畑先生から聞きました。」

木乃香「せやけどウチらに話さなかったん？」

明日菜「ちよつとネギ、何でそんな大事な事を話さなかったの！？」

私達はあるたのパートナーでしょ！？」

それくらいな事を知る権利あるはずでしょ！？」

ネギ「はい…話せなかったのは申し訳ないですが…高畑先生に言われたんです。　教えたらきつと気にすると思うから、

皆さんには内緒にした方がいいって…。　でも、その時は石はまだ安全に封印されてましたから…

だから心配する必要はないと、僕と高畑先生は思いました…。

「

楓「でもあの二人（？）が真相を語ったから、もはや隠す必要がなくなっただでござるぞ？」

ネギ「そ、そうですが…。」

風香「でも誰が盗んだんだろう…？ さすがにアーニヤちゃんじゃないよね？」

史伽「で、でももしそれがまたこっちに来たらどうしますか！？ こ、恐いですう〜！」

ネギ「…真相が明かされ、誰かが盗んだと知った以上、このまま放つて置く訳には行かない…！」

彼はそう呟くと、勢いで生徒達に振り向いた。

ネギ「皆さん、ここからしばらく自習を行います！ 僕は学園長室に行つて、この事を学園長に知らせに行つて来ます！」

それまでに一時間目が終わるまでここから出ないでください  
！」

彼がそう言った後、急いで扉の方へ向かうが、明日菜は彼を止めようとした。

明日菜「ちょ、ちょっとネギ…！」

ネギ「すみません、アスナさん…アスナさんもここに残ってください。ここからは教師同士の会議を行いますので、

生徒は立ち入り禁止です。それに、この事を高畑先生にも知らないと行けないので…。ですからアスナさん、

このかさんと刹那さん、しばらくの間ここに残ってください！ この事は後で話しますから！」

そう言った後、彼は扉を開け、急いで学園長室へ向かって廊下を走った。

明日菜「あ、ネギ！」

それでも彼女はネギを止めようとするが、ネギは彼女の声を受け止めず、走り去つて行った。

その後、生徒達はスタークリスタルに関して低音で騒ぎ始めた。

殆どはパニック状態で、殆どは混乱していた。

もちろんその話を思わず聞いてしまった冷静な生徒達も、自分達が先ほどこやっていた事を集中出来なかった。

もしあの話を聞いていなければ、戸惑いを隠す事が出来たかもしれないが、それは本人達には不可能な事であった。

特にエヴァは自分を冷静にいようとしても、スタークリスタルの不安と恐怖から離れられなかった。

そんな彼女の前に座っていた茶々丸は、彼女の恐怖心を理解していた。

茶々丸「マスター…。」

エヴァ「スタークリスタルの秘密……………まさかこの世界にまだそんなに存在していたとは思わなかった。

私の知識が確かならば、スタークリスタルは全部で四つしかないと思っただが、まさか後六つもあったとは…。」

しかも何よりも、その十個全てのスタークリスタルが何者かに盗まれるとは…。」

彼女は認めたくもなかったが、自分のスタークリスタルに対する恐怖心には十分理解していた。

例えば彼女が究極の存在であろうとも、彼女は自分よりスタークリスタルの方が強力だと言う事も理解していた。

それはもちろん、あのネギの父親であるナギでさえも手に負えなかった程でもある。

そんな彼女が困難な気持ちでため息を吹いている間に、その従者はただ彼女の事を心配するしか出来なかった。

茶々丸「もしかして、また以前のような事件が起こると思いますか？」

エヴァ「分からない……………スタークリスタルには謎が多過ぎる。」

私や他の連中を操れるほどの力があつた上に、

あの幻想世界を生み出せたんだ…もちろん、闇もね。フ  
ンツ…例えばこの私が真祖と呼ばれていたとしても、  
私はあの小汚い石ころを手に負えなかった。でも、その  
石が全部集まるとどうなるのか、私には分からない…。  
だが私が思うには、以前のような事件が起こるとは限らん  
かも知れんがな…。」

エヴァが悩んでいる間に、近くでノートパソコンを弄っていた千雨  
は思わず盗み聞きをしていた。  
彼女は関わらないように出来るだけ冷静にしようとしたが、スター  
クリスタルの真実を聞いた以上、緊張で仕方がなかった。  
しかも彼女は以前スタークリスタルに操られた経験があるために、  
エヴァの恐怖心を理解していた。  
その気持ちは、しばらくの間は離れる事は出来ないと思われる…。

…学園長室にて

ネギはタカミチと共に、麻帆良学園の学園長である同時に、関東魔  
法協会会長でもあり、  
木乃香の祖父でもある『近衛近右衛門<sup>このえ このえもん</sup>』のいる部屋にいた。ネギ  
は必死になりながら、  
二人にモツとシチミから得たスタークリスタルの情報を伝えた。  
彼はモツとシチミから受け取った手紙を持ちながら説明している間  
に、学園長とタカミチは静かでありながらも、  
スタークリスタルの真実に対して驚いていた。

学園長「…こ…これは驚きじゃ…。ネギ君…君の言った言葉、全



ては真かね…？」

ネギ「はい、メルディアナ魔法学校から送られて来たこの手紙にそう書いてありました！ 先ほど言いましたように、

スタークリスタルの本当の数は四つではなく、全部で十個だったんです！

残りの六つはヨーロッパのどこかに封印されたらしいのですが、何者かがその封印と幻術を破壊し、

たったの一日で全ての石を盗んだそうです！ 残念ながら、魔法学校関係者達は犯人は誰なのか検討も付かず、

その石は再びこちらに向かっているのではないかと予想されています！」

タカミチ「そ、そんなバカな…！？ 強力な警備用魔法が簡単に壊された上に、たった一日で石が全部盗まれたなんて…

それってあり得る事なのか！？」

学園長「その気持ちはワシにも同じじゃよ、高畑先生。しかしネギ君…この事は君の生徒達…

もしくは友達にも知っておるのかね？」

カモ「悪い…俺っちが誤ってみんなにこの手紙を見せ出しちまっ…。 本当は内密にするつもりだったんすけど、

まさか内容がこの事だったなんて知らなかったツスから…。」  
学園長「なるほど…。 しかし信じられん…まさかスタークリスタルは本当は十個も存在し、しかも誰かに盗まれたとは…。」

じゃが近頃異様な魔力を感じ取っていないために、石はただこの学園に来てはいないと思うのお。

もし来ていたとしたら、ワシだけじゃなく、ネギ君、高畑先生、更にあのエヴァンジェリンと言う娘にも、

その魔力に感じているはずじゃ。 じゃが、状況を知ってしまつた以上、じつとしてる訳には行かん。

事が起こる前にこちらから行動をしなければならぬ。」  
その後、学園長はネギに向けてこう言った。

学園長「で、ネギ君：君はスタークリスタル事件の経験者でありながら、騒動から避けるための対策はあるかね？」

ネギ「いえ、残念ながら：今はどうやって騒動から回避すればいいか、分からない状態です。ただ、今言える事は、

何かが起こる前に注意しなければいけないと。」

カモ「まあ学園長さん、余り兄貴を責めない方がいいツスよ？ 兄貴は以前あの石に殺され掛けた事があつたんすから、

それに対する恐怖心を今でも持つてるんすよ。俺っちは兄貴が石を止めるための対策を考えていない事で、

悪く思ったりしないツスけどね。」

学園長「うむ：君の言う通りかも知れんの。」

彼は一度ため息を吹き、引き続き言い続けた。

学園長「しかし、スタークリスタルに関して気になる所がたくさんあるの。スタークリスタルは謎に包まれた石：

そのために多くの考古学者や研究家などには誰一人もその謎を解明されていない。もちろん、

理論すら誰にも思い浮かべた事もない。ワシらがスタークリスタルの数は四つではなく十個だと分かった以上、

それが全て一つになった時には何が起こるのかのお？ 一ヶ月前に起きたあの事件とは、

何か違う出来事でも起こるのかのう？」

タカミチ「その事でしたら、以前図書館島で発見した、スタークリスタルに関する書類を調べてみましたが、

残念ながら本が古かった上に酷くも損傷していたために、それ以上の情報を得られませんでした。

ただ、知る事が出来たのは、その本当の数だけで。」

カモ「俺っちはさすがにエヴァに頼るのは無理だと思うツスね。

例え何百年も生き続けていた上に、

この学園に長年も住み着いてたとしても、さすがにスタークリスタルの詳しい所は知らないと思うツスよ。

まあ、それと…多分手紙を読んでいた時、密かに聞いていたエヴァも正直驚いてたかもしれないツスけど…。」  
ネギ「カモ君、<sup>マスター</sup>師匠の事をそんなに失礼な事を言わなくても…。」  
無礼な事を言うカモにネギは叱ろうとするが…。

カモ「何言ってるんすか、兄貴！？ 以前エヴァが巨大化した時を覚えてるツスか！？」

あの時エヴァが校舎の上に寝ようとした時、もう少しで学園全体がぶつ潰される所だったんすよ！？ まあ、

あの時\*茶々丸がいたから何とか助かったんすけど…。それと、

エヴァが闇の力で完全に洗脳された時も覚えてるツスか！？  
あの時生き残った生徒達がいなかったら、

正直兄貴は殺されてたツスよ！？ 例えエヴァは兄貴より強くても（まあ、ちょっとだけだな）、

エヴァだって石の力には手に負えなかったんすから！

エヴァだってあの石はどれほど恐ろしい物なのか分かってるんすよ！」

タカミチ「彼の言う通りだよ、ネギ君。 スタークリスタルはこの世の誰よりも強いと言われてるんだ。

特に君の父親だって手に負えなかったとも言われている。  
カモ君は別に悪気があつた訳じゃないけど、

あの時起こった出来事は全て事実だ。」  
ネギも自分の魔法の師匠であるエヴァに対して無礼になりたくはなかったが、受け入れたがらなくても、納得した。

\*アニメ第二期の第20話より参照…新撰組の羽織を着て笛を吹きながら登場した茶々丸は、日本文化が大好きな巨大エヴァを、校舎から降りるように誘導し、学園の崩壊から回避させた事があつ

た。しかしエヴァ本人は無意識だったため、当時の記憶はないと言う。

学園長「とにかく、知っての通り、今はとんでもない状況になってしまった…。一体誰がスタークリスタルを盗み、

それを使って何を企んでいるのか…？ この世界に闇が迫って来るのを感じる…どうすればいいのかまだ分からん…。

絶望的だと思うが、注意する以外に何も無い…。」

彼がそう言った後、ゆっくりと自分の椅子から立ち上がり、背後にある窓に振り向いて、空を景色を不安そうに眺めた。

学園長「じゃが…この先何も起こらなければ良いのじゃが…。」

その後、全ては沈黙の空間となり、三人は不安を抱えるようになった。その間にネギは、

スタークリスタル事件が始まった時を思い出した。その力は彼の生徒達を苦しませ、

洗脳させながらネギを殺そうとした事から、スタークリスタルはどれほど恐ろしい物なのか、ネギは十分に理解していた。

もう二度とあの事件が起こらないと強く願ってみるが、その不安感  
は彼から離れそうもない。会議が終わった後、

誰も何も言わなくなった。ただ、ネギとタカミチは、不安を抱えたままキャンパスを眺め続ける学園長を、

見守り続けていた…。

…学園の屋上にて

会議が終わった後、時刻はもう既に休み時間となっていた。学園

生徒達は既に外に出ていて、それぞれは楽しくバレーボールを遊んでいたり、他愛もない会話をしたり、個人的な趣味をしたりなどで楽しんでいた。

もちろん3-A生徒達も、教室から出て、自分達のお気に入りな場所へ向かって行った。その間に、

ネギは明日菜、木乃香と刹那と再会し、先ほどの会議を三人に話すために屋上へ向かった。ネギが全てを話した後、

三人は愕然としていた。

木乃香「…そうなんや…おじいちゃん、気付いてからホンマに驚いてたんや…。」

ネギ「はい…もちろん、高畑先生も…。先ほどの悪い知らせは、今まで誰も知りませんでした。皆さん、

困難に思っています。」

明日菜「もう、何で高畑先生まで困らせるのよ!？」

刹那「そう言う問題じゃありませんよ、アスナさん!」

その後、彼女はふと思い始めた。

刹那「しかし…一体誰が十個のスターストーンをたった一日で強奪したのでしょうか？」

私はさすがにあんな短時間で十個全てを盗めるなんて、不可能だと思つ以外想像も付きません。

特に神鳴流の剣士でさえも一日では済みませんから…。」

カモ「兄貴、これ言っちゃ悪いと思うツスけど…もしかして、またアーニヤの仕業じゃないツスよね？」

以前に石を盗んだ経験だつてあるし、これはもしかして…。」  
ネギ「何言ってるの、カモ君!? さつき手紙に映つてたモツの話聞いてなかったの!？」

アーニヤはスタークリスタルの本当の数なんて知らないし、その在り処だつて知らないんだよ!？」

例え知つてたとしても、たった一日で盗めるなんて無理だよ！それに、アーニヤだつてアリバイはある！

アーニヤがやつたつて言う可能性や証拠もないし、アーニヤを疑う理由なんてないよ！」

彼がカモに怒鳴り付くと、カモは少しだけ引いていた。もちろんそれを悪気があつて言つた訳でもなくても、

それはネギを困らせる発言に過ぎなかつた。ネギはこれ以上大切な人達に対する悪口や疑問を聞きたくはなかつた。カモだけでなく、明日菜達もそれに十分理解した。

明日菜「じゃあ、これからどうするつもりよ？」

ネギ「分かりません……。突然で衝撃的な情報でしたので、対策法を余り考えてませんでした。ただ、やれる事は、

この先を注意するだけで……。」

明日菜「何も考えてないつてどう言う意味よ！？ さつき会議でその話してたんでしょう！？ そんなの言い訳になんないわよ！」

カモ「ちよつと姐さん！ 兄貴を責めんじゃねえよ！ 確かに兄貴にとつちや作戦不足かもしれないねえッスけど、

あの時俺達やマジで混乱してたんすから！ 先の事を考えてなかつた兄貴に責めても意味ないッスよ！」

木乃香「カモ君の言う通りやで、アスナ。余りネギ君を責めたらアカンえ？」

別に石が盗まれたのはネギ君のせいやないし……。」

明日菜は木乃香とカモに同意するにも、この先何も言わなかつた。

当然石が盗まれたのはネギのせいではないために、彼に責め付ける権利はなかつた。自分の無責任な行為に罪悪感を感じた明日菜は、落ち込むように反省した。

ネギ「とにかく、今は対策法を思い浮かんでいませんが、これ以上放つて置く訳には行きません！」

石がこの日本に向かって来る可能性もありますから、新たな事件が再び起こる前に何とか対処しなければなりません！」

刹那「他の生徒達にも協力させるおつもりですか、ネギ先生？」

ネギ「その事はまだ考えていません。　と言うより、彼女達次第です。　協力するか否か、彼女達に任せますから……。」

カモ「兄貴には悪いけど、俺っちが思うには、エヴァは多分協力してくれないと思うツスよ？」

いくら彼女が強くても、信頼性が全くないツスからねえ……。

特に彼女が兄貴の師匠であって、

パートナーであつたとしても、スタークリスタルの静止には絶対協力してくれないと思うツスよ？　それに、

多分彼女にはあの石に対するちょっとしたトラウマだつてあるそうだし……。」

カモの言う通り……一ヶ月前にスタークリスタル事件が発生して以来、エヴァは石に対する多少の恐怖心を持つようになっていた。

特に彼女は信頼性もないために、チームワークも嫌っていた。　余りにも冷静沈着なために、面倒で時間の無駄だと思つたためか、誰一人も手伝おうともしなかった。　ネギはカモの意見に納得しにくなくとも、同意していた。

その間に、木乃香は上の空にふと何かを思い浮かんでいた。

木乃香「そう言えば……教室にいた頃からスタークリスタルの事で思つてたけど……。　結局全部で十個あつたつちゆうたら……」

それ全部集めてもうたらどないなるんやろ？　四つ揃つた時みたいにな、同じ事でも起こるんやろか？」

ネギ「そこは僕にもまだ分かりません。　以前アーニヤが盗んだ四つのスタークリスタルには、邪悪な妖精を召還したり、

存在しない幻想空間を創造したり、生徒達を操るほどの強大な力を持っていましたから……。」

けど、それが十個全部揃う時、どんな力が発揮するかはまだ分かりません。同じになるのか、それとも違うのか、

まだ謎が解明されないままです…。」

刹那「だとしたら、今からスタークリスタルに関する情報を探るかありませんね…。」

明日菜「でもどうやって見付け出すの？ 以前高畑先生が見付けたその本は古過ぎてダメになってたから、

これ以上の情報は見付からないってさっき言ってたでしょ？ つまり、

石に関する情報を見付け出す方法はどこにもないって事じゃない！ そう簡単に見付け出す方法なんてあるの？」

ネギ「確かに自力で本を探すのは無謀ですが、その本を短時間で見つけ出してくれる人なら、たった一名います！」

明日菜「え？ 誰、それ？」

彼女は呆然としながら混乱した。

ネギ「アスナさんでも知ってる方ですよ！ 魔法で色んな情報が書かれた本を一斉に取り出せる人が！」

三人のパートナーはその言葉をヒントにして考えると、ある人物を思い浮かんだ。

明日菜・木乃香・刹那「本屋ちゃん！（のどか！）（のどかさん！）」

三人は一斉にのどかの名前を言い出した。特に明日菜が呼ぶ『本

屋ちゃん』とは、

本が大好きなのどこに対するニックネームである。

カモ「そうか！！ 確かのだか嬢ちゃんのアーマーカードには、何万種類の情報が記録されている世界図絵を持ってたんだ！

それなら一日早くもスタークリスタルに関する情報を見付け出せるぜ！」



明日菜「でも、\*この前失敗しなかった？」

カモ「姐さん、あの時は石の名前すら知らなかったんすから、何も見付からなかったんすよ。でも名前や形を知っている以上、

以前みたいに失敗は出来ねえッスよ！ 情報を見付けるなんて、もう朝飯前ッスから！」

\*アニメ第二期の第8話より参照

カモ「あ、そうそう、兄貴！ この件にゆえっちも加えた方がいいと思うッス。 以前調べた情報によると、

ゆえっちのアーマーカードにはのどか嬢ちゃんと同じ世界図絵の能力を持つてるみたいッス。

ゆえっちも嬢ちゃんと一緒に組めば、情報収集もあつと言う間になるッス！」

ネギ「そうだね、のどかさんと共に、ゆえさんにも協力してもらおう！ もちろん二人を巻き込ませるかもしれないけど、

一刻も早く石に関する情報入手するには二人が必要だからね！」

木乃香「今休み時間やから、多分二人は図書室で本読んでると思うなあ？」

ネギ「分かりました！ それでは、図書室に向かって、のどかさんとゆえさんのご協力を願いますよう！」

情報を見付け次第、どう対処すればいいか、作戦を考えましょう！ 皆さん、賛成しますか？」

彼が三人のパートナーに問い掛けると、三人共異議なく同時頷いた。ネギ「では、早速…！」

『……………全ての運命が動き出す時が来た……………』

ネギ「!?!」

彼は動き出す直前、何かを感じた。そのため彼は途中で立ち止まり、静かになった。その行動に対し、明日菜達は不思議そうに思い始めた。

明日菜「…ネ、ネギ…?」

ネギ「……………あ、あの…皆さん、何か聞こえませんでしたか?」

彼は明日菜達に振り向き、奇妙な質問を言うと、三人は同時に頭を振った。

明日菜「は? 別に何も?」

木乃香「ウチも何も…?」

刹那「私も何も聞こえませんでしたか…?」

三人はそう答えた後、ネギは頭を掻きながら思い始めた。

ネギ「おかしいなあ…さつき何か…。」

『……………全ての願いが叶え……………いるべき領域に戻る時……………』

やはりネギは何かを感じるのか、ネギはどこかから聞こえる声を聞

き取りながら耳を傾いてみた。

しかし、その声は三人のパートナーやカモには聞こえず、その同時にネギの不思議な行動に不安と困難に思った。

そんなネギは耳を傾きながら、多少不安と恐怖を感じていた。

ネギ「……………いや……………な、何か聞こえる……………どこから……………。」

明日菜「……………ね、ねえ、ちょっとネギ？ あんた、私達を脅かそうとしてない？ もしそうだったら、やめてくれるかな？」

木乃香「もしかしてさよちゃんかな？ きつと透明になってネギ君に話してるんちゃうかな？」

刹那「いえ、違うと思います。 霊的な物はどこにも感じませんので、きつと相坂さんではないかと……………」

カモ「兄貴、俺達には何も聞こえねえッスよ？ 一体何が聞こえるんすか？ 教えてくれよ！」

ネギ「い、いや……………分からない……………ただ、声が……………」

『…………………………全ての願いを世界の運命と供に導かれよう……………  
…………………………無を蘇らす…………………………』

ネギ「え……………？ せ……………世界の……………運命……………？ 繋ぎ…………………………無…………………………？ こ、この声……………一体何を……………!？」

彼は謎の声を聞き取りながら混乱する間に、我慢ならない明日菜は彼の両肩を押さえ、

目を覚ますように話し掛けた。

明日菜「ちょっとネギ！ どうしたって言うの！？ 一体何が言いたいなの！？」

彼女は必死に混乱するネギを正気に戻すために揺らすが、どこから聞こえる奇妙で不気味な声のせいで、

ネギは落ち着きを取り戻せなかった。木乃香と刹那はそんなネギに対する困難と不安を持つようになるが、

その同時にカモはそんな相棒の異様な行動を見て不思議そうに思い始めた。

『……………運命が生まれた時……………決して変える事は出来ない……………』

『……………必ず供に導き……………そして供に終わる……………』

すると、ネギ、刹那とカモは何かしらの気配を感じた。刹那とカ

モはネギが聞こえる謎の声には聞こえなかったが、

ネギと供に何らかの気配を感じ取れた。彼らは周囲を見渡している間に、

明日菜と木乃香はそんな彼らの行動を見て困難していた。

『……………無……………何と言つ素晴らしい物であるつか……………』

明日菜「こ、今度は何？」  
木乃香「ど、どないしたん、せつちゃん？」

刹那「…ネ、ネギ先生……………私は貴方の言う何かには聞こえませんが…どこかから何かの気配は感じ取れます…！」  
カモ「お、俺っちもツスよ、兄貴！でも…こりや魔力じゃねえ…何か自然的な…って言うか、普通じゃねえ感じツス…！」  
ネギ「僕もそうだけど…これは一体…！？この気配…魔力…って言う感じじゃない……………何か違う……………」

感じた事もない何かの…！  
明日菜「ちよつと、何を感じるって言うのよ！？私には何も感じないわよ！？」  
木乃香「ウチもそうやけど…これって魔力を持った人とか、感の強い人しか分からへんのかな？」

『……………記憶は全て失い……………時は止まり……………存在する全てが消え去る……………』

その時、突然空中から紫色に光る電気が発生し、それがネギ達の真上から放って来た。しかもそれはネギ、

刹那とカモだけでなく、明日菜と木乃香にも見えていた。

ネギ「な、何今のは!？」

カモ「分からねえツスけど、これ自然的な物じゃねえみてえツス！」

刹那「何だ、今のは!？ あのような物、見た事はない!？」

更に、空气中に謎の電撃が周囲に放っている間に、突然地震が発生した。屋上にいたネギ達はそれに動揺し始め、

建物が揺れ始めるにつれ、慌て始めた。

木乃香「な、何：地震!？」

刹那「お、お嬢様!！」

彼女は振動で倒れそうになった木乃香を素早く受け止め、支えていた。その間に明日菜はしゃがみながら、

振動から身を守り、ネギは地面に突き立てている杖を強く握り締めながら支えていた。

明日菜「ちょ…何これ!？ さっきの変な静電気の次に地震って、何よ!？ 一体どうなってるって言うの!？」

カモ「あ、兄貴！ これ自然現象の物じゃねえツス！ 何かおかしいツスよ!？」

ネギ「わ、分かってるよ、カモ君！ で、でも、これは一体…!？ 自然的な物じゃないのは分かるけど、

魔力的な物を感じ取れない！ 一体何が…!？」

『……………さあ……………扉を開けよう……………』

謎の電撃が空気中に発生し、地震が起こっている最中、更なる出来事が起こり始めた。何と空間が突然歪み始め、ネギ達が見る光景が奇妙な形に変わり始めた。明日菜「な、何これえ!？」  
ネギ「け、景色が…歪んでる…!？」

『……………永遠の無と……………』

ネギの耳元から不気味な声が流れ続けている間に、空気中に発生する謎の電気が更に激しく増加し、地震も激しく悪化し、空間が酷く歪み出した。異様で危機的な現象に閉じ込められたネギ達は、その場から一步も動けなくなってしまった。災いのような現象に対し、ただ恐怖に怯え、パニック状態になり、混乱するしかなかった。

刹那「お、お嬢様…しっかり私に…!!」

そう言いながら、刹那は木乃香を強く抱きしめた。

明日菜「ちよつとネギ…何とかして…!!」

ネギ「…だ、ダメです……………全く…動けな……………!!」







### 第3話 ようこそ、素晴らしき新世界へ！

……煌く星々に包まれたとある空間の中……この空間の中で、  
四人の人物がいた。

その姿は影の中にいるために見えないが、二人は女性で、もう二人は男性なのが分かる。女性の方では、

一人は妖精のような羽根に桃色の髪とドレスをしていて、もう一人は頭にティアラを被った長い金髪に水色のドレス、

そして手に杖を持っていた。男性の方では、青い帽子とマントをしていたが、

体が木で出来ているために人間ではないのが分かる。そしてもう一人は緑色の髪の毛に、

奇妙な紋章が描かれた紺色のマントを着ていた。二人の女性は自分の背を男性二人に向けていたが、

男性二人は彼女らの従者であるためか、気にしてはいなかった。

男A「発動された空間の歪みは『物質界』を襲撃し、歪みの中に消えた者は『こちらの世界』へ向かっているところです。」

男B「しかし、殆どかそれ以上の被害者は、『物質界』から『無空域』に閉じ込まれたそうです。」

恐らく、『奴』の仕業かと…。」

女A「…そうですか……とうとう空間の歪みが……。」

女B「やはり…予言の通りですね…。」

二人の女性は絶望的にそう言った。

男A「いつ被害者は『こちらの世界』に訪れるかは不明ですが、『選ばれし者』は間もなく『こちらの世界』に訪れると思います。」

しかし、まだ一つだけ、疑問が残されていますが…。」

男B「我々は本当に、貴女の仰る通り、この『選ばれし者』に頼っても良いのでしょうか？」

『こちらの世界』にはどんな混沌を静止してくれる英雄達がたくさんいます。

この『選ばれし者』が異世界から来たからではありません……  
けど、

最も狙われている者を『選ばれし者達』と供に行かせて宜しいのでしょうか？ なぜなら、貴女の予言によると……。」

女A「予言の事なら分かっています……。私達には彼らの運命を変える事が出来ません……そしてその試練に苦しむでしょう……。」

けど……時が来れば……きっと会えます……。それまでに……今は彼らを見守らなければなりません……。そして……

彼らの使命から生き残る事を願うだけです…………。」

……ネギは闇の中にいた……。いつも眠りの中に見ていた夢ではない……彼は何も無い、闇だけに包まれた空間の中にいた。

彼は動く事も、見る事も、聞く事も、喋る事も、感じる事も出来ない……。彼には意識もなく、

光すら貫けないこの闇の中で、ただそのまま居着いていた……。

しかし……時が経つと、ネギはようやく意識を取り戻し、目をゆっくり開けながら光を見詰めた。

自分の視力が回復した後、彼は天井に回っている扇風機を見詰めていた。気が付けば、彼は二段ベッドの上で、

彼の杖が側に置かれたまま寝ていた。彼はゆっくり起き上がり、

周囲を見渡すと、気が付けば彼は謎の部屋にいた。

部屋の角には机の上にワイドスクリーンモニター付きのハイテクなパソコンが置かれており、

科学や機械に関する本がずっしり並べてある本棚も置かれていた。

彼は見た事もない部屋の中にいて、

この部屋は誰の物や、なぜここにいるのかは見当を付かなかった。

ネギ「…う…う…う…ん…。」

彼は手を額に当てながら唸り出した。

ネギ「…ここは…？ ど、どうして僕は…ここに…？」

彼は眠気を覚まそうとしながら、引き続き周囲を見回った。頭の調子が戻った後、彼は少し混乱し始めた。

ネギ「な、何なんだろう、この部屋…？ 僕、誰かの部屋にいるのかな？ でも…何かが違う…。」

まるで…ここは学園の物ではないように見えるけど…。カモ君！ どこにいるの！？」

カモ「うにゆ…ゆ…俺たちはここッスよ、兄貴い…。」

彼は眠たそうに、ネギの上着ポケットの中から顔を出した。

カモ「どうしたんスカあ？」

ネギ「カモ君、これを見てよ！」

彼は勢いでカモをポケットから引き抜き、カモを部屋全体を見させた。その後カモは正気を取り戻し、部屋を見て驚いた。

カモ「な、何じゃここはあ！？」

ネギ「やっぱり、カモ君も知らないんだ…。」

そう言いながら、ネギはカモを下ろした。

カモ「全然知らねえッスよ、兄貴！ この部屋、姐さんの部屋の一部でもねえし…って言うか、

ここは寮の部屋じゃねえッスよ！？」

ネギ「でも、僕達どうやってここに…？ 確か僕達は学園の屋上に

いて……！」

彼は話し続けると、何かを思い出した。

ネギ「ちょ、ちょっと待てよ!? アスナさんは!? このかさんや刹那さんも!! みんなどこへ……!?!」

彼はもう一度周囲を見回るが、三人のパートナー達の姿はどこにも見当たらなかった。

カモ「うう……ん……どうやら姐さん達は何かによって逸れちまつたようだなあ……?」

ネギ「それってどう言う意味……!? 一体何がアスナさん達を僕達から逸れさせたの!?!」

カモ「ちよつと兄貴、落ち着けて!!」

彼は混乱する相棒を落ち着かせようとすると、ネギは落ち着きを取り戻し、再び周囲を見回し、

今までの出来事を思い出してみた。

ネギ「と、とにかく……今まで何があったのか、お浚いしてみよう……」

まず……ウェールズにいるモツとシチミからの手紙が来て、

それを生徒達に見せて……。それでスタークリスタルの本当の数が十個だと分かり、

しかもそれが一日で何者かに盗まれたのを知り……。その後、タカミチと一緒に学園長にその事を知らせて……

あれこれで不安を持ちながら、対策すら何も考えずに終えて

……。そして屋上でアスナさん達と合流し、

どうやってスタークリスタルを止めるか色々話し合い……。

そこでのどかさんとゆえさんの力を借りようと決め、

早速会いに行こうと思つたら……。

彼は途中で立ち止まり、その後の出来事を必死に思い出そうとした。

ネギ「……それから……突然おかしい事が起きて……奇妙な電気があちこち放つて来て……地震も起きて……」

その後全てが突然歪み始め……目の前が真つ暗になって……それから……。」

カモ「どうやら俺達が思い出せる限りはここまでみてえッスね。」  
ネギ「…その後、僕は目を覚まして、気が付けば違う場所にいたんだ。しかもここは誰の部屋で、

何でここにいいのかも分からないし……。」

カモ「うう……ん……まあ、それよりも……こつから出た方がいいかもしれないねッスよ、兄貴。」

これ以上ここにいたって何も始まらないッスからね。」

ネギ「そうだね。こつから出た後、早速アスナさん達を探そう。」

今どうしてるのか心配だから……。」

ネギは二段ベッドに設置されている梯子から下りようとした時、下のベッドに誰かが寝ていた事に気付いた。

彼は覗き込むと、そのベッドには一人の少女が寝ていた。その少女は眼鏡をかけ、額の広い、

二本に分かれた黒いお下げをしていた。更にその少女は、麻帆良学園の制服を着用していた。

少女は近くにネギがいる事に気付かず、ただ気持ち良さそうに寝ていた。そう……その少女の正体は、

麻帆良学園のマッドサイエンティストで、3 - A 生徒の一員、葉加瀬聡美であった。

ネギ「葉加瀬さん!？」

彼は思わず聡美の苗字を大声で呼び掛け、聡美はそれに応じて目を覚ました。彼女はゆっくり起き上がると、

寝相が悪かったかのように背伸びや欠伸をし、目を掻きながら近くにいたネギに振り向いた。

聡美「ふあ……う……あ、ネギ先生……おはようございます……」

……つて、あれ？

朝の授業は確か一時間前に終わったはずじゃ…？ それとお  
ええ〜つと……………失礼ですけど、

何でネギ先生が私の部屋にいるんですかあ〜？」

カモ「何寝ぼけてんだよ、ハカセさんよ！？ ここはあなたの部屋  
じゃないつて、見りや分かるだろ！？」

彼は小さい手を叩きながら、聡美の目を覚まそうとしていた。

聡美「はあ〜？ 何を言っ……………？」

まだ寝ぼけていた彼女は部屋を見回すと、何か違和感がある事に気  
付き始めた。彼女にはパソコンに興味を持っていたが、

机にあるパソコンには見覚えはなかった。しばらく経って完全に  
目を覚ました聡美は、一瞬に困難した。

聡美「な、何ですかここは！？ ここ、私の部屋じゃないですよ！  
？ それに…ちよ、ちよつと待てよ…？」

確か私…超さんと一緒に、新しいプロジェクトの開発のため  
に研究所にいたはずでは…！？ 超さん…一体どこへ…

しかも何で私はここに…！？ それに…ネギ先生もなぜここ  
に…！？」

ネギ「僕もそれに困ってるんですよ…。 葉加瀬さん、こうなる前  
に何が起こったか、ちよつと教えてくれませんかでしょうか？」

彼はそう問い掛けると、聡美はこれ以前の出来事を思い出そうとし  
た。

聡美「…え…ええ〜つとですね……………あれは確か…学園の工学部  
にいた時でした…」。

先生が教室から出ている間に終了ベルが鳴り出し、休み時間  
にはある発明品を完成させるために、

超さんと一緒に工学部に戻ったんです…。ところが開発中  
に突然機械が粉々に爆発し、失敗になってしまったんです。

私達はそれに驚き、ショックを受けましたが、以前確認した  
時には確かにどこにも異常はなかったはずだったんです。

けど、私達がすっかりしている間に、突然数多くの機材から電気が放ち、それが研究所全体に広がったんです。

その時、超さんは何かおかしいと気付いたみたいなんです。先ほど言いましたように、

開発中の発明品には確かにどこにも異常はなかったはずで、きつと原因不明の何かによって爆発したと、

超さんは予想したんです。しかしその後、突然地震が発生して、研究所が揺れだしたせいで多くの道具や器具、

特に機材や資料などが散らばって……。それから……。何て言えばいいのやら……。突然部屋全体が歪み始め……

その間に私達は何も出来なくて……。そして……。突然目の前が真っ暗に……。」

ネギ「そして気が付いたらここにいた……。僕も同じ事がありました。僕も先ほど、

アスナさん達と一緒に学園の屋上にいたんですが、こっちも同じ現象が発生して、気が付いたら僕とカモ君がここに……。」

カモ「ふう〜〜む……。どうやらその爆発した発明品、何かの合図だったかもしんねえな？ ハカセさんや超に対して……。」

彼は顎を掻きながらそう言った。

聡美「私には余りよく分かりませんが……。その後の事は余り覚えてません……。ネギ先生、ここは一体どこかのか、

分かりますでしょうか？」

ネギ「すみません……。僕もその事で悩んでるんです……。ここはどんなのか、誰の部屋なのか、僕にはよく分かりません。

特にアスナさん達は一体どこにいるのかも分かりませんし……。

ちょうど僕達、このまま外に出て、

アスナさん達を探しに行こうと……。」

ネギと聡美との会話が Continuing 中、突然部屋のドアが開き、何者かが中に入って来た。ネギとカモ、



そして聡美はその人物に振り向いた時、愕然とした。さすがに『人』と呼ぶべきなのか、その人物は青い瞳に二本に分かれた尻尾、白い手袋と赤いスニーカーをした、

ネギと同じ身長をした黄金色の小狐だった。ネギ達はその人物に愕然としている間に、

狐の少年は安心そうに喜びながら彼らの所まで歩いて来た。

狐「あつ！ 二人共起きてたんだ！ よかったあゝ、心配してたよおゝ！ 君達が何も無い所から突然現れて、

気まで失つてたんだもん！ でも怪我とかがなくてよかったよ！

彼が安心そうにそう言つと、ネギの肩に愕然としていたカモに振り向いた。

狐「あれ？ 君オコジョなんて持ってたの？ もしかして、君のペツト？」

その後、聡美はその小狐の後ろに移動し、背中を引き裂けようと毛皮を引つ張り始めた。

狐「いぎゃあああああ！！ 痛だだだだだあ！！ ちょ、何してんの、何してんのお！！！！？」

彼は引つ張られる背中から激痛を感じながら叫び出した。

ネギ「は、葉加瀬さん！？ な、何やってんですか！？」

聡美「いや、この人形のチャックか何かを探してるんです！ きつと電源を切つてくれるスイッチか電池があるはずですよ！」

狐「僕は電池で動くオモチャじゃなあゝゝゝい！！！」

彼はそう叫び出しながら、勢いで聡美から引き離れた。そんな彼は先ほど引つ張られた背中から感じた激痛のせいで、涙目になっていた。

狐「痛つたあゝ……………もう、何でそんな事するのお！？ 今のすつ

ごく痛かったんだから…！ それに、

君から見て僕がおかしく見えても、僕は正真正銘の生き物だって見て分らないの！？」

痛む小狐を見詰めたネギとカモ、そして誤って彼を痛めた聡美は、まだ愕然としていた。

その後、聡美は素早くネギの隣に戻り、興奮しながらこう言った。

聡美「ネ、ネギ先生…さっきの見たかあ！？　今ので機械ではない事を証明してくれました！」

こ、これってどう言う意味なんでしょう！？」

ネギ「い、いや、僕にもさっぱり…。　もしかしたら、スタークリスタルの仕業なのかな…？」

確かスタークリスタルには、所有者の心の叫びから存在しない生物を生み出せる力があるのを知ってますが…。」

聡美「え！？　じゃあ、その石が私達の学園を襲い、再び幻想世界に…！？」

ネギ「さあ…まだ分かりませんが…。」

彼らがそう話している間に、無視されていた小狐は多少彼らにイラついていた。

狐「あのおく、もういいかなあ…？」

そんな怒った表情をしながら腕を組んでいる小狐を見たネギ達は、多少引いていた。

狐「あのね…君達さつきから何を言ってるのか僕にはさっぱり分からないけど…もう一度言うけど、

僕はロボットでも何でもないんだからね！　特にそう言う風に批判されるのも僕にとっては大ッ嫌いな事なんだから！

見ての通り、尻尾が二本に分かれていて少し微妙に見えるかもしれないけど、僕はちゃんと生きた狐なんだからね！

それに、君達がさつき言ってたその『スタークリスタル』って何？　それとその『幻想世界』ってどこの事？」

彼は引き続き問い詰めるが、ネギと聡美は彼を見詰めたまま固まっていた。

狐「…まあ、一つだけ分かるのは、君達はこの辺りの人間じゃないって事だね。 そうだとしたら、君達はどこから来たの？」

ネギ「え！？ え、あ、はい…え、えつとお…ぼ、僕達…麻帆良学園から来たんです。 日本の埼玉県にある学園でして…」

知ってますよね？」

狐「マホラガクエン？ サイタマ？ ニッポン？ それってどこにあるの？ 聞いた事もないけど…」

ネギ・聡美「えっ！？」

小狐の発言に対し、ネギと聡美は同時に驚いた。

聡美「ちょ、ちよつと待ってください！ 聞いた事もないってどう言う意味なんですか！？ 日本なんて、

世界中の誰もが知ってる国ですよ！？」

ネギ「そうですね！ 日本を聞いた事ないんですか？ 例えば、東京って言う、日本の人気が高くて有名な…！」

狐「トーキョー？ そんな所も聞いた事もないなあ…」

彼がそう答えると、ネギと聡美は混乱し始めた。

狐「うう…ん…君達が言う場所は一体どこなのかよく知らないけど…地図を見てどこにあるのか教えてくれるかな？」

壁に世界地図が貼ってあるから、これでその場所の位置を見せてみてよ。」

ネギと聡美は小狐が指す、壁に貼った世界地図の方へ振り向いた。

二人は日本の居場所を教えるために、

早速その地図に向かって行った。

ネギ「えつと、確かここに…」

ネギは日本の在り処を教えようとした時、何か違和感を気付き、一

瞬に立ち止まった。世界地図には二種類の大陸があり、西の大陸には『キノコワールド』と書かれてあり、東の大陸には『モビウス』と書かれてあった。日本はどこにも見当たらなかった。もちろんヨーロッパ、アジアやアメリカと言った国もどこにも載っていないかった。また、全ての大陸と島の形が違っていた。見覚えのない地図を見たネギと聡美は、目を大きく開きながら、沈黙のまま愕然とした。

ネギ「……ちよつ……な、何なんですか、この世界地図は！？ こんな地図見た事もないですよ！？」

聡美「私も同意です、ネギ先生！！全部の大陸や島の名前や形は、私達の知っているのと全然違います！！」

カモ「し、信じられねえ！！まるで俺達は違う世界に来ちゃったみてえだぞ！？」

彼らが驚いた状態でそう言うと、小狐も何かに驚いていた。

狐「ちよ、ちよつと待って……そのオコジヨ、喋れるの！？」

驚く所が間違っているために、彼はそれを置いて置く事にした。

狐「う、ううくん……まあ、それよりも、どうやら君達が探してる場所は地図に載ってないみたいだね？」

ネギ「……そ、そうみたい……ですけど……。」

彼は涙目で小狐に振り向いた。

ネギ「あの……すみません……僕達……どこにいるのか、教えてくれませんか……？」

狐「う、うん……分かった。」

ネギの泣き顔に引き気味な小狐は、地図に向かって現在地点に指した。

狐「まあ、見ての通り、僕達は東の大陸『モビウス』にいるんだ。

この大陸は豪速級な地形や危険な障害物が多くある、

言わば大冒険向きな大陸で、刺激的で難易度の高い冒険を好む冒険家達がよく訪れる大陸でもあるんだ。

で、今僕が指してる場所は『ミスティックルーイン』って言う場所で、深いジャングルや古代遺跡に囲まれてて、

多くの考古学者や冒険家達が、冒険やお宝、更にこの地の歴史を探るためによく訪れるんだ。」

ネギ「ミスティックルーイン…？」

狐「そうだよ！ あっ、そうだ！ よかったら一緒に外へ出ない？ ちょうどいい眺めになってるから、

見逃さない方がいいよ！」

…小狐の家の外

家の外見は小狐の少年と同じ黄金色で、その隣には崖に向けた車庫があつた。その家の壁には『T』と言う、

狐の尻尾で作られた英文字が描かれていた。この時、小狐はネギと聡美を外に連れ出し、その風景を眺めさせた。

時刻は既に夕方で、空はまるでキャンバスのように黄昏の色に染められていた。

今でも海に沈もうとする夕日も美しく輝いていて、その光は緑のジヤングルに照らしていた。更に近くに滝の音も聞こえ、

癒されるかのように流れていた。その美しい風景を眺めていたネギと聡美は、思わず見惚れていた。

聡美「…す、すごい…。これ…とても綺麗…。私…こんな風景見た事もないです…。夕日の明るさ…緑のジャングル…」

滝の音色…とっても癒された自然に囲まれています…。何だ

か…とても落ち着く…」

狐「どう？　これを見てどう思う？」

ネギ「え、はい、とても感心しちゃいます。　すごいですね…まさか君がこんな環境に住んでたなんて…」

本当に感心しちゃいましたよ！　こんな癒しに囲まれた場所に住んでるなんて…何だか羨ましいです。」

彼がそう言うと、小狐は照れ始めた。

カモ「でも…これで俺達はマジで麻帆良学園にいない事が明らかになったな…。」

「Hey ヘイガイス guys！　やっと起きたか！」

何者かの声を聞こえたネギ、聡美と小狐は、その声が聞こえた方向へ振り向いた。　すると屋根の上に、

一人の不思議な生物が寝そべりながら、こちらに向けて手を振っていた。　その生物の体は青く、長い刺々な髪に緑色の瞳、

更に白い手袋と金色のバツクルが付いた赤いスニーカーをしたハリネズミであった。　ネギと聡美がその謎の生物を発見した時、再び愕然としていた。

ハリネズミ「Was sup！ ワサップ　いい感じにお昼寝してたか？」

狐「あつ、戻ってたんだ！　いつ頃戻ってたの？　散歩の割には結構早かったけど…」

彼がそう問い掛けると、ハリネズミは屋根から飛び降り、身を回転しながら無事着地した。

ハリネズミ「そうだなあ…30分前ぐらいかな？　あんまりやる事がなかったから、ちよつとのんびりしてただけだよ。」

それに、俺は世界一早いハリネズミなんだぜ？　こんなジャングルと遺跡に囲まれた場所で散歩するなんて、

何秒かで終わっちゃおうよ！」

そんなカツコ付けた彼に対して小狐は笑うが、その間にネギと聡美はまだ固まったままだった。

ハリネズミ「でも二人共、無事でよかったぜ！ 最初はちょっと心配してたけど、思ったより大丈夫だったみたいだな？」

狐「あつ、そうだ！ そう言えば君達がどうやってここにいたのか、まだ説明しなかったね？ ねえ、せつかくだから、

彼らに説明してくれるかな？」

ハリネズミ「まっ、お前が頼むんならそうするけど？」

彼は両肩を上げながら、まるで仕方なさそうにそう答えた。そして

彼は家の前にある大きな広場の中央に歩き、

ネギと聡美に振り向いて説明し始めた。

ハリネズミ「あれは確か…昼頃だったかなあ？ 俺がさっきの場所で昼寝をしていた時、

突然どこからか眩しい光が出て来たんだ。最初は眩

しくて何も見えなかったけど、その光が収まった後、

今俺が立っている位置であんた達が倒れているのを見

たんだ。」

その後、彼は友達の小狐の所まで歩き、説明し続けた。

ハリネズミ「俺の親友であるこいつもその光を見て、あんた達を部

屋に運ぶの手伝ってくれたんだ。まあ、

こいつに感謝するんだな。特に眼鏡ちゃんも…。

元はと言ったら、

こいつがあんたを部屋まで一生懸命運んでくれたんだ

からな。せめて自分の体重に気を付けた方がいいぜ？

あんたが余りにも重過ぎるせいでこいつ死ぬかと思っ

たんだぜ？」

聡美「眼鏡ちゃんって…！？」

彼女は赤面しながら、ハリネズミの無礼さに対して怒り出した。

どうやら『眼鏡』とは聡美の事らしく、





聡美「でも変ですね：学園にいた時はまだ朝でしたけど…。」  
ネギ「多分僕達が気を失っている間に、何時間も寝込んでしまった  
のでしょう。」

狐「そうだ！　ね、よかつたら一緒に食べない？　夕食にカレー作  
ったんだけど、実は多過ぎちゃって…。」

よかつたら今晚僕達と一緒にご飯食べない？」

ハリネズミ「グッド アイデア Good idea！　その同時にあんた達の話も聞  
けるからな！　どうする？」

ネギ「え、いいんですか？」

カモ「遠慮すんなよ、兄貴！　せつかく誘ってくれてんだから、一  
緒に食べに行こうぜ！」

聡美「私も賛成ですが：私達みたいな他人が迷惑にならなければい  
いんですけど…。」

狐「気にしなくていいよ！　例えお互いまだ知らなくても、友達に  
なれるから！」

ハリネズミ「ああ！　遠慮せずにお互い知り合いながら楽しもうぜ  
！」

…時刻は夜

全員家の中に戻るまでは、既に夜になっていた。　ネギ、聡美とカ

モはダイニングテーブルで、

二人の動物らしき人物と供にカレーを食べていた。　三人はとても  
空腹だったため、

既に食べ終わっていた小狐とハリネズミよりたくさん食べていた様  
子。　そんなネギと聡美が食べている間に、

彼らは全ての出来事を二人に説明した。その間に小狐とハリネズミは、その話に多少混乱していた。

ハリネズミ「…ええ〜と…要するに…あんだ達が友達と学校にいる間に、突然変な電流があちこち現れて、

そこで地震が起きて、次に周りが突然歪み始めて…そして気が付いたら俺達のベッドにいた…だな？」

ネギ「はい、その通りです…でもそれまでに何が起こったのか、どうやってここに来たのかはさっぱり…。」

ハリネズミ「なあ、これ聞いてどう思う？」

彼は隣に座っていた小狐に問い掛けた。

狐「うう〜ん…余りよく分からないけど…彼らの話によると、恐らく彼らは別次元から来た人間だと思うんだ。」

ハリネズミ「別次元？ それってどう言う意味だ？」

狐「彼らは麻帆良学園って言う学校から来て、更に日本って言う国から来たって言ったよね？」

でもそんな場所の名前聞いた事もないし、地図にだって載っていない…。つまり、

彼らがこの世に存在しない場所から来たって事は、別の世界から来たって事になるんだよ。」

聡美「と言う事は、ここはやはり幻想世界なんでしょうか？ 魔法によって作られた世界で…。」

カモ「って、おい、ハカセさん！！ 魔法の事は誰にも言わないはずだろ！？」

カモの話によると、例え人間界に魔法使いが存在するとしても、現代社会と科学技術に生きる人間対して、

『魔法』はタブーとされていた。その存在を明かしてしまった場合は、責任者であるその魔法使いは、

強制的にウェールズに戻され、罰として動物に変えられてしまうと

言う。スタークリスタル事件当時、ネギは3-A生徒達に魔法の存在を明かしてしまった事でチュパカブラに変えられた事があるが、全員仮契約バクテイオウした際元の姿に戻り、最終的には許された。カモが聡美にそう注意した後、彼女は思わず魔法の存在を明かしてしまった事で口を両手で塞いだ。ネギも動揺していたが、なぜか小狐とハリネズミは驚いていなかった。

狐「魔法？ まあ…君達の言う『幻想世界』って何なのかよく分からないけど…この世界は魔法で作られてないよ？

でもこの世界にはすごい物がたくさんあるからね！ 特に魔法も！」

彼がそう返答すると、動揺していた三人は立ち止まり、愕然とした。魔法はタブーとされていたにもかかわらず、

二人は何とも不思議に思っただけでいまいなかった様子。

ネギ「え…？ ちょ、ちょっと待ってください…つまり…この世界に魔法は存在するんですか！？」

狐「もちろん！ まあ、この大陸ではそんなにないけど、

『キノコワールド』と言う大陸にはたくさんの魔法や不思議な生物がいるからね。」

カモ「マジかよ！？ でも魔法は世間ではタブーとされてたんじゃなかったのか！？」

ハリネズミ「魔法がタブー？ そんなの聞いた事もないね！ まあ、確かにこっちには科学技術が多いけど、

魔法が実在するなんて不思議には思わないね。」

聡美「と言う事は…魔法は存在すると言うのは常識なんですか？」

狐「多分それが君達の世界と僕達の世界の大きな違いかもしれないね。君達の世界では魔法は違法かもしれないけど、

こっちでは自由に使えるからね。知るのには別に悪くないけど、

使い方によるからね…。」

彼らがこの世界の事実を語っている間に、ネギ達は啞然としていた。ネギ達にとつては、この世界に魔法が実在し、

更にそれが常識となっていた事は、驚くべき事実であった。その間にネギ達は少々考え込んでいたが、

突然ハリネズミの少年は話に割り込んだ。

ハリネズミ「ところで、あんた達がここに来る前に他の友達と一緒にだっただよな？ だとしたら、

その友達もこの世界に来てるって事か？」

彼がそう問い掛けると、ネギ達は明日菜達の事を思い出し、勢いで椅子から立ち上がった。

ネギ「そ、そうだった！ 今まで忘れてたあ！！ アスナさんは一体どこへ行ってしまったんだろ…！！？」

特にこのかさんと刹那さんも…！！ 一体どこへ…！！？」

聡美「そう言えば、超さんの事も忘れてましたあ！！ 超さん…どうなったのかとても心配です…」

一体あれからどうなったんでしようか…？」

カモ「兄貴、皆さん達だけじゃないと思うツスよ？ あの奇妙な現象は学園全体に大きな影響を与えたみたいツスから、

他の連中もこの世界に来ちまった可能性があると思うツス！」

ネギ「ほ、ホントに！？」

カモ「多分な…。もしかしたら、3 - A生徒達…または少数がそれ以上の生徒や教師もこの世界に来ちまつてるかも…。」

ハリネズミ「その友達ってどんな奴なんだ？」

ネギ「はい…僕達がここに来る前に、僕には三人の生徒がいました…。全員女性ですけど…」

一人は鈴付きのリボンが飾ってある、長いオレンジ色のツインテールで…もう一人は長いストレートな黒髪…

そしてもう一人は黒いサイドテールに、どこへ行っても常に

刀を所持しているんです……」

聡美「そして私の友達はお団子付きの黒髪で、赤い頬を持っているんです。ちなみに、四人共私と同じ制服を着てます。」

狐「ねえ……散歩している間にそう言う子見掛けなかった？」

彼は親友のハリネズミにそう問い掛けたが、頭を振りながら返答した。

ハリネズミ「ノッブNope、見掛けなかったな。」

明日菜達の行方の手掛かりがないまま、ネギと聡美はハリネズミの返答に対して不安を抱えるようになった。その後、

ネギは再び自分の椅子から立ち上がり、何かを決意した。

ネギ「こうしてはいられない……！一刻も早く探しに行かないと……！」

カモ「なっ……！？ちょよ、ちょつと待てよ兄貴……！姐さん達の事が心配なのは分かるけど、

今は姐さん達がどこにいるのかと言う手掛かりはないツスよ……！？何も考えずにそのまま行こうだなんて無茶ツスよ……！」

狐「僕もそのオコジョとは賛成だよ。それに、今は夜だよ？こんな時間にジャングルへ行くなんて危険過ぎるよ。」

ミスティックルーインのジャングルはとも迷いやすいし、一度入り込んだら二度と戻って来れないほど有名なんだ。

明日の朝からやった方がいいよ。そっちの方が安全だから。聡美「ネギ先生、私も同じ気持ちでよく分かりますが、彼の言う通りです。」

今明日菜さんや超さん達がこの世界のどこにいるのか分からない限り、私達もどう探せばいいのかわかりませんから。」

ハリネズミ「眼鏡ちゃん言う通りだぜ？今夜は大人しくして、明日から動けばいい。そっちの方がもっと楽で行けるさ……！」

彼らがネギにそう説得すると、ネギは落ち着きを取り戻し、自分の椅子に座った。

ネギ「…皆さんの言う通りですね…。明日になるまで待ちましょ  
う。そしてその時が来たら、

アスナさん達をどう探せばいいか、考えましよう。」

カモ「賛成ツスよ！」

狐「それだったら、僕達も手伝うよ。そうすれば問題を抱えずに  
早く見付かるかもしれないし…。」

ハリネズミ「そりゃいいな！早い方が一番！チームを組めば、  
何もかも早く済ませるぜ！」

ネギ「え…貴方達も手伝うんですか？違う世界から来た赤の他人  
なのに？」

狐「さつき言ったでしょ？僕達はもう友達なんだ！そして困っ  
てる友達を助けるためなら、僕達は何だってやるよ！」

ハリネズミ「こいつの言う通りだよ！何か困った事があつたら、  
いつでも俺達に言ってくれよ！」

一人でやるよりやもつといいぜ？」

彼らも一緒に協力すると言う事を聞いたネギと聡美は、彼らの優し  
さに感激していた。

ネギ「…ありがとうございます、皆さん！とても助かります！」  
聡美とカモも同意しながら頷いた。

狐「あ、そうだ！そう言えばまだ自己紹介とかしなかったね！  
もし友達になるんだつたら、お互いを知るのが大切だね！」

僕の名前は『マイルズ・パワー』って言うんだけど、みんな  
からは『テイルズ』って呼んでるんだ！

本名よりニックネームの方が僕気に入ってるから、そう呼んで  
もいいよ！」

ハリネズミ「そして俺は『ソニック』…『ソニック・ザ・ヘッジホ  
ッグ』だ！よろしくな！」

ネギ「僕の名前はネギ・スプリングフィールドと言います！こち

らこそよろしくお願いします！」

カモ「俺っちはアルベール・カモミールってんだ！ 兄貴の有能な相棒さ！ だがカモって呼んでもいいぜ？」

そっちの方が簡単で覚えやすいからな！」

聡美「私の名前は葉加瀬聡美と申しますが、ハカセと呼んでもいいですよ！ 後、

私の事を『眼鏡ちゃん』って呼ぶのやめてくれますか？ 眼鏡をかけてるからって、

そう呼んで欲しくないんですけど。」

ソニック「ハツハツハツ、そうだな！ 今まで無礼な事言っただけが悪かったな！ 俺こう言う性格だからしょうがないんだ。」

テイルス「まっ、それよりも…ネギ、カモ、ハカセ…ようこそ、新世界へ！」

…ソニックとテイルスがネギと聡美を歓迎させた後、時刻は夜中の12時を過ぎていた。テイルスはネギと聡美を、

彼らが最初に起き上がった部屋に連れて行った。三人共テイルスの部屋にいる間に、ネギと聡美はパジャマ姿になっていた。

ネギは子供用の青いパジャマを着ていて、聡美は中サイズの桃色パジャマを着ていた。どちらもサイズぴったりだったらしく、

テイルスは感心していた。だがそんな二人は多少恥ずかしがっていた。

テイルス「うわあ、二人共ぴったりだよお！」

ネギ「え、えっと…ありがとうございます、わざわざ僕達にこのパ

ジャマを…。でもいいんですか？

このパジャマを僕達にくれて…。」

ティルス「いいんだよ！ そのパジャマ、以前僕がある人を助けたお礼として貰った物だけど、どれも僕に合わなくて……」

って言うか何で女の子用のパジャマもくれたのか全く分かんないんだけど…。」

聡美「でも…私こう言うのって滅多に着ないので…」

カモ「何い！？ ハカセさんはこう言うの着ねえのかよ！？ って事は、今まで着替えないで過ごしてたって訳かあ！？

何だってんだよ、それえ！？ 女の子なのに勿体ねえじゃねえか！？」

彼はそんながさつな聡美に対して驚いた状態で愚痴をこぼした。

ティルス「そうだよ、制服がしわだらけになったら困るでしょ？

パジャマさえ着ていれば、しわなんて問題ないよ！」

ネギ「僕もそう思います。それに、僕は葉加瀬さんが違う服を着るのを初めて見ますけど、

葉加瀬さんがそのパジャマを着てると、とっても可愛いですよ！」

彼は笑顔でそう褒めると、聡美は思わず赤面した。しかもそれはただの恥ずかしいと言う感じではなく、

これまでに彼女が感じた事もない何かであった。そんな彼女のリアクションを見たカモは、何かを思っていた。

聡美「えっ…？ あっ…えっとお…そ、そうです…ね…。とりあえず…このままにしてみます…。」

ネギ「しかし…いいんですか？ この部屋をお借りしてしまって…。」

この部屋、

元々はティルスさんとソニックさんの部屋でしょ？」

彼は部屋を見回りながら気になり掛けていた。

ティルス「ああ、気にしないで！ 君達がこの部屋を借りて寝ても



僕達は構わないよ！ リビングにソファーがあるから、

僕はそこで寝ても平気だから。それに、ソニックはいつも外で寝てるから、屋根の上で寝るって…。」

カモ「はあ！？ あいつ、いつも屋根の上で寝てんのかあ！？ 猫かよ、あいつはあ！？」

テイルス「ハリネズミだよ。それに、彼はアウトドア派だから、滅多に家の中にいないんだよ。」

彼がソニックの性格を説明している間に、ネギ達は理解したかのようにならぬに頷いた。

テイルス「とにかく、もう夜遅くなったから、そろそろ寝ないとね！ あれ以来色々あって疲れただろうから、

体力補給のためにぐっすり寝た方がいいよ！ そして明日起きたら、これからどうやって君達の友達を探すか、

考えようね！」

ネギ「そうですね。テイルスさん、僕達のために色々ありがとうございます。ありがとうございます。貴方の優しさにとても感謝してます。」

テイルス「別にいいよ、それえ！」

彼は頭を掻きながら照れ始めた。

テイルス「ああ、それと…僕と話す時は別に敬語で話さなくてもいいよ？ 特に呼び捨てしても構わないし…。」

ネギ「はい…でも紳士として、僕はそうしたいんです。余り無礼になりたくないので…。」

カモ「受け入れるよ、テイルス。兄貴は紳士として育てられて、自分では治しようもねえんだ。」

兄貴のやりたいようにやらせるよ！」

テイルス「そつかあ…まあ、正直言うと、僕8歳なんで、君達の方が僕より年上に見えるから…。もし年上ならば、

別に敬語使わなくてもいいんだけどね。でもそうしたいのなら…まあ…僕は構わないけどね。」

彼は多少困難しながら再び頭を掻いた。

ティルス「まつ、とにかく！ 何か必要であれば、いつでも僕達を呼んで！ 僕とソニックはリビングにいるから。」

それまでに、お休み！ そしてまた明日！」

ネギ「はい！ ありがとうございます！ そしてまた明日！」

お互い手を振りながら、ティルスはドアを閉め、部屋から出た。その後、残された三人は床に座り、一箇所に集まった。

ネギ「ねえ、カモ君…この世界の事、どう思う？」

カモ「ふう〜〜むう……………」

彼は腕を組みながら考え続け、何か思い浮かんだためか、ネギに見上げた。

カモ「俺の考えでは、この世界はスタークリスタルによって作られた物じゃないと思うツスね！」

聡美「どうしてそう思うんですか？」

カモ「俺達が以前魔法世界にいた時、世界全体は魔法で溢れていて、その世界は明らかに魔法によって作られた偽の世界だと、

簡単に気付いたんだ。けど、さっきのティルスとか言う奴はこの世界は魔法は存在すると言ったとしても、

この世界のどこから魔法の気配は感じない…。つまり、この世界は魔法による物ではなく、

自然的に作られた物だと思っただ。特にティルスとあのソニックとか言う奴からにも魔法の気配もなかったし…

あの二人はスタークリスタルによって生み出された奴じゃないと言う事になる。」

ネギ「と言う事は…僕達は本当に別の世界に来てしまったって事だね…。」

聡美「ネギ先生、これからどうしますか？」

ネギ「分かりませんが、先ほどテイルスさんの言う通りにしてみたいと思います。今日は一旦休み、明日の朝起きた後、

テイルスさんとソニックさんと一緒にアスナさん達を探しに行きましょう。彼らの力も必要だと思いますし……。」

カモ「まあ、兄貴。こんな事を言うのも悪いと思う上に、今まで何の話をしてたのかも覚えてるツスけど……。」

あの二人を信じてもいいんすかね？」

ネギ「何急に疑ってるの、カモ君？ あの人達……または動物達はとも優しい方々だって知ってるでしょ？」

僕には悪い奴らには見えないけど……。」

カモ「おいおい、兄貴い！ いつまで経ってもお人好しにはいらねえツスよ!？」

相手の本性を見抜くためにはまず疑ったり不審に思わないと……。」

ネギ「別にお人好しだからそう言っていないだよ、カモ君！ 僕には分かるからそう言ったんだ！ 見掛けからじゃない、

あれほど友達を助けようとするために努力してたんだよ？

元々他人に過ぎない僕達を、

あの二人は友達にしたいって言うてたんだよ？ 僕はあの二人に感謝してるんだ。彼らの言葉には偽りもなかったし、

だから疑う必要なんて全くないよ!」

聡美「ネギ先生の言う通りです。それに、この世界の事は彼らしか知らないんですから、彼らに頼る必要があります。」

カモさんの論理には分かりませんが、やはり友達を疑うのはよくないと思います。それは私がネギ先生や友達を信頼し、

ネギ先生が私を信頼し、そしてカモさんがネギ先生を信頼するみたい……違いますか?」

二人はカモを説教すると、カモは納得するようにならぬ息を吹いた。

カモ「へッ、どうやらあの二人を疑ってたのは俺っただけだったみてえだな……。二人の言う通りツス。」

向こうから手伝わって言ったんだから、彼らを信頼しようぜ

！」

ネギ「そうだね！」

そして会議が終わった後、三人共立ち上がった。

ネギ「そうであれば、もう寝ましょう。明日は捜索のために早く

起きなければいけないですし……。」

聡美「そうですね。これ以上遅くまで起きてはられませんしね。」

その後、ネギ達はテイルスの二段ベッドに向かった。以前ネギは上のベッド、聡美が下のベッドで寝ていたため、

その位置で寝る事に決めた。ネギが梯子を上り始めようとすると、カモは聡美に何かを伝えるために途中で立ち止まった。

カモ「そうそう……ハカセさん、一つだけ忠告するけど……。」

聡美「はい？ 何でしょうか？」

カモ「実は兄貴、寝る時にある悪い癖があるんだ。まだウェールズでネカネさんと一緒に住んでた時、

兄貴はよくネカネさんと一緒に寝てたんだよ。けど姐さんの部屋で寝るようになった兄貴は、

姐さんをネカネさんと思ったせいかな、よく姐さんのベッドの中に潜り込む場合があるんだよ。だ・か・ら……

寝ている間に気い付けるよお……。もしかしたら潜り込んで来るかもよお……？」

聡美「ええええええ！？ ネギ先生、明日菜さんにそんな事をお！？ そんなネギ先生の癖、初めて聞きましたよお！？」

彼女は驚くも思わず大声を出してしまった。

ネギ「なっ！？ 何言ってるの、カモ君！？！？ 葉加瀬さんに何て事をお！？！？」

彼はそんな変質的なオコジョに対して怒鳴り出した。

カモ「何だよ！？ 俺っちはただ注意を言っただけツスよ！？ そ

れがどこが行けないんスかあ!？」

ネギ「言ってる事がまるで僕が変態みたいに聞こえちゃったじゃないの!! 世の中には言っちゃ行けない言葉があるって、

それが分からないのお!？」

聡美「いや、ネギ先生…別に悪い事ではないと思いますよ? 子供って、

一人ぼつちやホームシックになるとそう言う気持ちになると…。」

ネギ「違う、誤解です、葉加瀬さん!! カモ君はそう言う意味で言っただんじゃないんです!! 分かってください!!」

ドアが閉まっているにもかかわらず、ネギの大声はリビングまで聞こえ、ソニックとテイルスにも聞こえていた。

ソニック「Wow…まさかあそこまでうるさかったとは思わなかったな…。」

テイルス「…直ぐ慣れるよ…。」

彼はそう言いながら苦笑いをした。

…全ては収まり、家の明かりは、全員眠りに落ちたと共に消えていた。

テイルスはリビングのソファで毛布をかけながら寝ていて、ソニックは寒さにはお構いなしに屋根の上で寝ていた。

一方テイルスの部屋で寝ていたネギ達だが…聡美はぐっすり気持ち良さそうに寝ていて、

カモはネギの隣に丸くなりながら寝ていたが、ネギだけは何かを思いながら寝ていなかった。

ネギ(…まさか僕達が別世界にいるなんて…まだ信じられないよ…。  
信頼出来る新しい友達なら出来たけど…

それでもどうやって僕達はここに来れたのか、まだ分からない  
いまだ…。

盗まれたスタークリスタルと関係あるのかな…？ もしそう  
なら…この世界とどう言う関係があるんだろう…？

そして何よりも…今アスナさん達はどこに…今でも無事  
ならいいんだけど…。( )

その間に彼は眠たそうに欠伸をした。

ネギ(…明日になってから考えよう…。 その時まで何か分かるか  
もしれないし…。( )

そう思った後、彼は目を閉じ、深い眠りに落ちた。

…深い闇の中

この光の存在しない漆黒の闇の中で、謎の影の集団がいた。 その  
集団の前に、彼らを収める謎の人物がいた。

全員一斉に集まった時、その中の一人が前に立ち上がり、彼らのリ  
ーダーだと思われる人物の前で敬意を持つかのように拝んだ。

???「我が主…この世界に『選ばれし者』が現れたようです。

これにより、我々の時がようやく訪れました…。」

「良かるう…ならば全てが望むその願いを叶えてやろう…  
その願いこそは…世界の終末を…!!」

## 第4話 We Are The Mario Brothers!

………ミステイクルーインに朝が向かえた。その朝日の光がテイルスの家の窓から照らし出した時、  
寝ていた少年の顔に当たった。その光の暖かさを感じたネギは、  
ゆっくりと目を開け、自分のベッドから起き上がった。  
彼が背伸びと欠伸を同時にしている間に、友達のオコジヨも同じように起き上がった。

ネギ「おはよう、カモ君!」

カモ「ああ、はようツス、兄貴い。」

その後、彼らは部屋の周囲を見回した。彼らは今テイルスの部屋にいて、明日菜の部屋ではない事に気付いた。

ネギ「うん…まだまだ慣れそうにもないね…。」

カモ「ああ…特にこれは夢じゃないって事ツスね。」

ネギ「そう言えば葉加瀬さんは今何を…?」

彼は一旦下を覗き込むと、聡美は既に起きていた事に気付いた……

…が、その間にまだ寝ぼけていたのか、

聡美は欠伸をしながら着替えていた。当然ながらパジャマのシャツ以外は脱がれていて、下着はほぼ丸見え状態だった。

この時聡美は後ろ向きだったので、ネギとカモが覗かれているにも気づかなかったが、シャツを脱ごうとした直前に気配を感じ、後ろへ振り向いた。その後ネギと聡美はお互い眼が合ってしまった、愕然とした。

ネギ「わあああああああああ!!!」

聡美「きゃあああああああ!!!」

ネギは急いで毛布を自分のの上にかかけ、聡美は脱ごうとしたシャツを

下に引つ張りながら下半身を隠そうとした。

二人は赤面しながら自身を隠したが、カモだけはそんな恥ずかしがる聡美を見詰めて感心していた。

ネギ「わわわっ、すす、すみません！！ これはわざとじゃないんで…何も見ませんでしたっ！！」

聡美「い、いえ、ネギ先生っ！ これは私が悪いんで…申し訳ございません！！」

まさか起きてたなんて思わなかったんで…！！」

カモ「ほほっう　こりゃ飛んだ偶然だなあ！　これがまさにグッドモーニングって言うもんツスね、兄貴！」

ティルス「何！？　どうしたの！？　一体何が…！？」

先ほど二人の悲鳴を聞こえたティルスは、勢いでドアを開き、飛び出して来た。

だが思わず聡美のセクシーな姿を目撃したティルスは、愕然としていた。

ティルス「うわああっ！？　ご、ごめんっ！！　まさかそう来るとは思ってた…！！」

彼はそう言いながら、急いで部屋から出て、ドアを閉めた。その間にネギと聡美は、

ティルスにとんでもない状況を見せてしまった事で、固まっていた。

その後、ティルスは閉じたドアに張り付いたまま、赤面状態に激しく呼吸していた。

そこでソニックが通り掛り、そんな疲労状態な相棒を見て気に掛けた。

ソニック「Hey pal! What's the matter?」

ティルス「え、えっ！？　い、いや、なな何でもない！！　べべ、



別に…何でもないから!!」  
そんなパニック状態になるテイルスに対し、ソニックはただ頭を傾げるだけであった。

…しばらくしてから全てが落ち着き、ネギ、聡美、カモ、そしてソニックとテイルスは、

ダイニングテーブルで朝食のホットケーキを食べていた。しかし、目の前に出来立てほやほやのホットケーキと冷やした牛乳が置いてあるにもかかわらず、全員殆ど触れていなかった。

ネギはいつもの教師用のスーツと、聡美はいつもの麻帆良学園制服を着ていて、

テイルスを含めた三人は赤面しながら苦笑していた。だがソニックは空気を読めないまま悩み続き、

カモは先程の事件で満足そうにニヤニヤし続けていた。

ネギ「あははは…さつきはすみませんでした、ご迷惑をかけてしまつて…。」

聡美「まさかあんな事が起こるなんて自分でも思いませんでした…。」

ああ、今でも恥ずかしいです…。」

本当にすみませんでした…。」

テイルス「ああ、いやいや、別にいいって! そう言うアクセシデントなんてよくあるって! で、でも、

みんな無事でよかったよ! さつき悲鳴が聞こえたからてつきり何かあったのかなと思って…。」

ソニック「何だよ? 俺がいない間に何かあったのか?」

カモ「そりゃ〜兄ちゃん、ありゃもつ…。」

彼は事件の事をソニックに教えようとしたが、ネギはそれを防ぐために素早くカモの口を両腕で塞いだ。

ネギ「いい、いいえ！！ 別に何でも！！！！ 何でもありませんから！！！」

聡美「そ、そうそう！！ ネギ先生の仰る通り…みんな大丈夫でしたから！！！」

ソニック「…ヘッ…イエアYe a h ライト r i g h t！ 昨夜から友達になつたばかりだつ…つう…のに、

早速俺の前から内緒話かよ？ こりゃ聞いてがっかりしちゃうねえ。」

彼は椅子に横たわり、頭を後ろに振り向きながら拗ねた。

ネギ「いや、そう言う意味じゃなくて…！ ただ…ソニックさんには教えたくない物なんですよ！ …ですよねえ？」

彼は焦りながら聡美に振り向くと、彼女も焦りながら頷いた。

聡美「は、はい！ そう言う事ですう！」

ソニック「ふう…ん…じゃあ、いいよ。俺に教えたくない物なら別にいいけど？」

納得行かないながらも、ソニックはそう答えるが…。

ソニック（その代わりみんなのいない間にテイルスから吐かしてやる…。）

その後、聡美は目を苦笑しているネギに向かせた。 彼女は例の事件で恥ずかしさに赤面するが、

その大半はこれまでになかった何かを感じ始めていた。 彼女はネギに見詰め続けている間に、

この気持ちは何なのか分からず、混乱していた。

聡美（…な、何だろう…この気持ち…？ ネギ先生を見ただけで、急に変な感じになっちゃう…。）

何でだろう…確かにあれは非常に恥ずかしかったけど…変だなあ…？

普段は男の人の前で裸になっても平気だったのに…一体何でこんな気持ちか…？ この気持ち…一体どう言う意味で…？)

ティルス「と、とにかく！ 今日は何をするの？ 何か予定とか決めた？」

ソニックがまた何か聞かれる前に、ティルスは話題を強制的に変え、ネギに問い掛けた。

ネギ「え？ あ、はい…ええ〜と…すみません、まだ状況に慣れていないために、まだ何も考えていなかったの…。」

ティルス「大丈夫だよ、ネギ。一刻も早く君の友達を探したいのは分かるけど、しばらくはゆっくりして行った方がいいよ。」

別に急がなくてもいいし、自分のペースで情報を集めよう！

ソニック「ゆっくり行くのは俺の柄じゃないけど、ティルスの言う通りだな。ならパソコンで調べたらどうだ？」

インターネットか何かを使えば、お前の友達に関する情報も何か見付かると思うぜ？

その間に俺はもう一度ジャングルに行って探し回ってみるよ。」

ティルス「ソニックの言う通りだね！」

聡美「あ、そう言えば…確かティルスさんの部屋にとってもいいパソコンがありましたよね？ 何製なのか分かりませんが、

見た目はとてもいいパソコンでしたよ。しかも何やら改造されたみたいで、見た事もない珍しい部品ばかりで…

一度使ってみたいと思っただんですが、無断にやったら失礼かなと思いますして…ん？」

彼女は話し続けると、何か思い付いたのか、途中で止まってティルスに振り向いた。

聡美「ちよつと待てよ…？ それってもしかして…君も科学者なん

ですか？」

テイルス「え…？　もしかして、君も？」

ソニック「まあ、こいつを見たら信じられないと思うけど…年齢が8歳にもかかわらず、

高いIQを持つてるほど物凄い天才なんだぜ？　色んな物を発明、開発とか修理したり、SFっぽい物を使ったり、

特に飛行機だつて操縦出来るんだぜ？　なぜならこいつの脳みそ、俺よりでかいからな！」

聡美「ホントですかあ！？」

彼女は興奮し出した瞬間、勢いで椅子から立ち上がり、テーブルの前から押し出して来た。

しかしそれだと朝食は荒らされてしまうので、彼女が前に押し出していく直前に、

ネギとカモは急いで目の前にあつた朝食を退かした。

聡美「貴方も機械にこつてるんですかあ！？　これは奇遇ですねえ！！　実は私も科学者で、

色んな物を発明するのが大好きなんですよお！！　それも人のためにも作ってますが、

機械と科学は私にとっては人生その物なんですう！！」

テイルス「ホントにい！？　君が科学者だったなんて、僕知らなかったよ！　まあ、機材を使ったり何かを発明したりするのは、

あくまでも僕の趣味だけど、僕も科学が大好きなんだ！　もしそうなら、

君は人生の中で一番自慢出来る発明って何？」

聡美「私ですかあ？　私はA・I・ロボットを開発した事があるんです！　ガイノイドですが、その子もとてもすごいんです！！

私は彼女に格闘機能やハッキング機能などを付け加えたのですが、最もと言えば、

彼女は普通の女の子のように行動出来るんです！　彼女の感情プログラムはかなり上出来でして、

自分から何かを学んだり、自分でやったりするんですよ！

最初はそのようなプログラムを搭載しなかったんですが…

私にとつてはとっても感心するんです！」

テイルス「へえ、それってすごいねえ！！ そんなロボット、今まで見た事もないよ……って言うか、少しぐらいは…。

でも、そんな君のロボット、一度でもいいから会ってみたいなあ…。 まっ、

逆に僕は変形可能な飛行機を開発したんだ！ 一見ただの飛行機だけど、

スイッチを押すとターボモードに変形したり、二足歩行の戦闘型や高速スピードカーに変形出来るんだ！

元々ソニックの飛行機だったんだけど、本人は気に入ってみたいだからね！ それとね……。」

二人の科学者達は科学と機械の話延々と続き、その間に忘れ去られたネギとソニックは、

そんな理解不能な会話をする二人を見詰めていた。

ソニック「グレイト Great… もう一人のメカフェチの登場だぜ…。」

ネギ「…みたいですね…。」

彼がそんな聡美とテイルスに対して苦笑いをした。

………ミステイクルーイン、モビウスから遠く離れたもう一つの大陸… 『キノコワールド』にて………

そこにはもう一つの物語があった………。 時刻は既に昼を過ぎ、静かな森の中に、とある一軒家があった。

その家は二階建てになっていて、屋根には緑色の土管があり、更に

正面には『MARIO マリオ BROS. ブラザーズ』と書かれた看板があつた。

その家の外には洗濯物を干していた一人の男がいた。その男は身長が高く、

黒い髭に『L』と言う文字が書かれた緑色の帽子を被り、そして青いオーバーオールを履いていて、

彼は気持ちいい洗濯日和の中で鼻歌を歌いながら洗濯物を干していた。殆ど干されていた服は、

青いオーバーオールと赤や緑のシャツで、彼はそれを終えた後、再び鼻歌を歌いながら家の中へ入った。

…家の中では、ソファに座ったままテレビを見ているもう一人の男がいた。

その男は先程洗濯物を干していた男より身長は低い、同じく黒い髭を持ち、『M』と言う文字が書かれた赤い帽子を被り、

同じく青いオーバーオールを履いていた。テレビにはテレビアニメ『ポケットモンスター』、

しかも『金銀編』の再放送（リメイク版発売決定祝いのため）をしていたが、男はただテレビの前に座ったまま眠っていた。

その髭は大きく、テレビのスピーカーから流れる音さえ聞こえないほどのうるささだった。そんな男が眠っている間に、

先程の緑の男がリビングに入り、眠っている赤い男を目撃した。そんな眠っている彼を見ていた緑の男は、

呆れそうにため息を吹いた。

緑の男「全くもう…！ 仕事中に寝るなんて…。仕事の依頼が来ないからって一日中寝てりゃいいってもんじゃないでしょ！？」

彼は文句を言うが、寝ている赤い男を起こせるほどの物ではなかった。彼は再びため息を吹き、そのまま振り向いた。

緑の男「はあ…！ たくう、しょうがないなあ…。でもいつか人手が必要な奴を徹底的に手伝うように懲らしめてやる…！」



そして彼は前を見ると、そこに見た事のない何かがある事に気付き、愕然とした。

緑の男「うわああああああああああ！！！！」

何かを見た彼は悲鳴を出し、急いで部屋から飛び出し、下のリビングに駆け付けた。

緑の男「兄さん！！ 大変だよ！！ 僕達の部屋に……！！？」

彼がリビングに戻ると、更に愕然とした。二階から何かが落ちたにもかかわらず、彼の兄である赤い男とは……

まだ寝ていた。

緑の男（このヤローツ！！ あれだけの音と揺れがあったのに、それでもまだ寝てたなんて……！！）

彼の怒りは、とうとう限度を超えた。

緑の男「いい加減に起きろ、このバカ兄貴い！！！！」

怒りに爆発した彼は『オバキューム』と言う掃除機を取り出し、それで赤い男の頭を殴り込んだ。

赤い男「ドベエツ！？」

それを諸に食らった赤い男は一気に目を覚まし、頭に激痛を感じながら弟である緑の男に振り向いた。

赤い男「痛つてえ〜！ 何すんだよお！？ 俺今起きてキノコ狩りに出掛けようとした所だったんだぞお！？」

緑の男「キノコとくだらない言い訳などどうでもいい！！ とにかく早く起きて僕に付いて来てよ！！」

そう言った彼は急いで兄の腕を掴み、二階まで引つ張り上げた。

赤い男「な、何だよ！？ 何かあったのかあ！？」

緑の男「まったくもう！！ 寝てる間に何か聞こえたり感じなかったの！？ とにかく、見せたい物があるんだから！！」



二人は二階の部屋まで辿り着き、緑の男が赤い男の顔を無理矢理部屋の中へ押し込むと、赤い男は何かを見て愕然とした。それは『物』ではなく『人』であり、天井の穴から照らされている光の中に包まれていた。

その人物はどちらも二人組みの女性で、一人ずつベッドの上で寝ていた。一人は長い黒髪の少女で、赤いチェックの付いたベッドの上に寝ていた。もう一人は黒いサイドテールをした少女で、手に刀を握りながら、緑のチェックの付いたベッドの上に寝ていた。そう、彼女らはネギと明日菜の友達である、近衛木乃香と桜咲刹那であった。

赤い男「な、何だあの子達はあ!?!」

緑の男「知らないよ! どうやら天井から来た見たいで…。」  
彼がそう言うと、赤い男は天井の穴を見上げた。

赤い男「うわあ…。」

その後、兄弟は不審に思いながら、寝ている二人の少女に近付き、確認し始めた。

赤い男「それにしても…何なんだこの子達は…? どうもこちら辺から来た子には見えないけど…。」

緑の男「そうだね…でも姿から見れば、多分『ダイヤモンドシティ』かモビウスのどこかな…?」

赤い男「ダイヤモンドシティかモビウスのどこかだつて!? おいおい、こつからだと物凄く遠いんだぞ!?

天井に突っ込んで来るほどどうやってここまで来れたつて言うんだよ!?!」

緑の男「さあ…でも…。」

その間に彼は天井に出来た穴を見て、慌て始めた。

緑の男「MAMMAMIA!!! 僕達の天井に何て事をお!!!」

赤い男「こりゃ痕が残るな…。」

二人の男が天井の穴を見上げている間に、木乃香と刹那は唸り出した。その唸り声を耳にした兄弟は、二人の少女に振り向いた。すると、木乃香と刹那はゆっくり目を開け、ゆっくりとベッドから起き上がった。

先程の墜落により多少体中に痛みを感じていたが、不思議にも怪我はなかった。

刹那「う、うう……ん……な、何だ…今は…？」

木乃香「痛たたあ………何やる、この痛み？」

刹那「お、お嬢様！！ お怪我は…！？」

木乃香「大丈夫よ、せっちゃん。せやけど、一体何が…？」

二人は前へ振り向くと、そこで彼女達を見詰めていた赤と緑の兄弟に気付いた。

赤い男「おっ！ 起き上がったぞ！」

緑の男「ふう、そりゃよかったよ！ どうやら家以外気にする事はなかったみたいだね！」

刹那「なっ…！？」

彼女は驚きながらも一歩下がって行った。

木乃香「へ？ どちら様…？」

刹那「お嬢様、下がってください…！」

彼女は木乃香を守りながら、愛刀夕凧を取り出し、構え始めた。

赤・緑「へっ！？」

刹那「この無礼なる下種共め！！ お嬢様に汚い手を出そうとは許

さん…！！ 去いねい…！！

奥義、『さん斬岩剣』…！！

赤・緑「のわあああああ…?!?!?!」

ザシユガアアアアアアアアン…！！

彼女は必殺技の『斬岩剣』を使うと、兄弟は驚きながら攻撃から避けた。その刀から発生した真空波が木製の壁に激突し、兄弟を更に驚かせるほど大きな穴が出来た。

緑の男「ぎゃああああああ！！！！ 僕達の壁に何て事おおおおお！！！！」

赤い男「ちよ…お前いきなり何しやがるんだ！？ 俺達の家をぶっ壊す気か！？」

刹那「は…！？ 俺達の…って、貴様達の家…？ 何を言っている…ここは私達の……？」

彼女と木乃香は周囲を見渡すと、彼女達が今いる部屋は明日菜と木乃香の寮部屋ではない事に気付いた。

刹那「…って、ちよつと待て……ここ、アスナさんとお嬢様の部屋じゃない……。こ、ここは…？」

木乃香「あ…そう言えばせつちゃん。ウチらさつき学園の屋上におれへんかった？」

刹那「あつ、そう言えば！」

彼女は自分の拳を左手でポンと叩きながらそう答えた。  
緑の男「何訳の分かんない事言ってるの、あんたらはああああ！？  
！？ 見てみる！！ 天井に穴が出来てるし、

今度は壁にまで穴出来ちゃってるよ！？ あんたら何様のつもりだよ！？

『レッキングクルー』の女の子バージョンかあ！？

彼が刹那の荒々しい攻撃に対して激怒すると、刹那は青ざめ始めた。  
その後、彼女は必死に兄弟の前に土下座し始めた。

刹那「も、申し訳ございません！！ てつきり貴方達をお嬢様の刺客かと思ひまして…！！ 家をめちゃくちやにしてしまつて、

本当に申し訳ございません！！」

緑の男「おうおう、思う存分謝れよ！　なぜなら僕は絶ツツツツ  
対に許さないんだからねえ！！」

その代わりあんたら器物破損により大いに弁償させて…！  
」

その時、赤い男は彼を落ち着かせようと、彼の肩を掴んだ。

赤い男「おい、ちよつと待てよ！　少しぐらい落ち着けよな？　あ  
の二人、ちよつと様子がおかしいと思わないか？」

緑の男「そんなの関係ねえ！！！！　僕達の家を壊そうとしたからに  
はきつちり謝罪を賠償を…！！！！」

赤い男「だから落ち着けてんだろが！！　あの二人、何かに関し  
て迷ってるように見えるんだ…」

きつと助けが欲しいみたいだけど…。」

緑の男「何で助ける必要があるんだよ！？　僕達の家を壊そうとし  
たくせに、助けて欲しいだつて！？　バカバカしい！！」

赤い男「バカバカしいのも、お前が困ってるのもよく分かってるけ  
ど…とりあえず話し掛けてみようぜ？

とりあえずここは俺に任せて、お前はそこで落ち着いてる  
よ！！」

そう言った後、赤い男は刹那と木乃香に近付いた。　その間に木乃  
香はベッドから立ち上がり、その男に振り向いた。

赤い男「へへっ、悪いな、俺の弟があー言う奴で。　あいつただ…

不機嫌な一日を過ごしてたからさ。」

木乃香「弟…？　兄とちやうの？」

赤い男「いや、そうじゃなくて…俺達双子の兄弟で、俺が兄なんだ。  
後これだけは言うけど…」

例え相手を外見から判断するとしても、でかい奴が年上で、  
小さい奴が年下とは限らないからな。

たまには逆にはなるんだよ、その人物によるけど…。例え  
ば……………」

刹那「あ、ええ…分かりました。 例え彼が貴方より身長が高くて  
も、彼は年上ではない…ですね。」

それを理解した刹那は、何かを思い浮かんだ。 それはなぜか楓、  
真名、そして鳴滝姉妹に連想していた。

あれはスタークリスタル事件が終えてから数日後、学校のない土日  
に刹那は映画館で楓と真名を目撃した事がある。

その頃の二人はどうやらある映画を見に来たらしいのだが、彼女達  
の身長が高過ぎるせいか、

受付にいた中年のオバハンが彼女らを中学生と認めず、大人の料金  
で払わそうとしていた。 しかも学生証を見せたとしても、

更に学生服を着たにしても、余りにも頑固過ぎた上に外見だけしか  
判断しないそのオバハンは、

それでも学生料金で払わしてくれなかった。 だが偶然に鳴滝姉妹  
が立ち寄って来た時、

オバハンは彼女らを一番安い子供料金で払わせ、通行を許可させた。  
それを目前にした大人に見え過ぎる楓と真名は啞然として、その間

に刹那はそんな彼女達に哀れみを感じていた。  
それが刹那の記憶に蘇った過去である。

赤い男「とにかく、どうやら君達は何かに困ってるようだけど、そ  
れは何なのか俺達には分からない。

でも君達がこの辺りから来た人間じゃないのは分かるけど  
…とりあえず、全てを安全に言う事で、

君達はどこから来たのか、何があってここに来たのか、教  
えてくれるかい？ それなら大丈夫だろ？」

刹那「え…あ、はい…多分…」

彼女は隣にいる木乃香に向きながらそう答え、早速男達に説明し始  
めた。

刹那「…まあ、最初は…」

グオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

突然何かが唸る音が聞こえ、二人の男はその音が聞こえた方向へ振り向いた。

その音は刹那と木乃香のお腹から聞こえたらしく、それに気が付いた二人は赤面しながらお腹を抱えた。

赤い男「ほほお、こりゃいい音がしたな！」

緑の男「何だよ、お腹でも空いているの？」

刹那「……………そう言えば……………」

木乃香「……………まだお昼食べてへんかったな……………」

恥ずかしさで赤面した少女達は、お互い向き合いながらそう言った。赤い男「なら、説明する前に体力が必要だな！」

その後、彼は後ろにいる緑の弟に振り向き、こう言った。

赤い男「なあ、さつき昼飯作るところだったんだろ？ だったらこの二人の分までも作ってくれないか？」

その間に俺は家の修理とかするからさ！」

緑の男「はあ！？ 僕があこの二人の分を！？ 僕達の家をこんなにしたくせに！？」

赤い男「おい…そりゃ厄介な真似をしたかもしれないけど、それでも大した傷じゃないだろ？」

いい加減文句ばっか言ってるんで、優しくしてやれよ！

一日中ぐだぐだ怒ってちゃ、何も解決しないぜ！

わかったか？」

緑の男「ぐう~~~~……………分かったよ、もう……………」

彼は目を細くし、背を低くしながら、納得もしないまま承知した。

…下の階のリビングにて  
四人がリビングに戻った後、刹那と木乃香は先程赤い男が寝ていたソファアの上に座っていた。  
その間に兄弟は、彼女達を寛ごうと近くに立っていた。

赤い男「そんじゃ、二人共ここで待っていてくれないか？ こいつはキッチンで飯作って、俺は屋根の修理に行つて来るから、

その間にここでテレビとか見て寛いでくれよ！」

緑の男「うん、出来上がったら直ぐ呼びに来るから……その前にそのテレビ高かったんだから、壊したりしないでよ！」

彼は二人の少女を睨みながら注意するが、逆に兄の方は彼を叱り出した。

赤い男「だからやめろって！！ まあ、とにかく！ 呼ぶまでここで待っていてくれよ！」

木乃香「おおきに！」

彼女が感謝する同時に、刹那も兄弟に向けて頷いた。

その後、刹那と木乃香をリビングに残しながら、赤い男は屋根へ、緑の男はまだ彼女達の事に対してぶつぶつと文句言いながらキッチンへ向かった。彼らが去った後、二人の少女はテレビも見ず、ただ座り込んでいた。そこで無言ながらもお互いの気持ちが一致したのか、お互い向き合いながら笑みを浮かび、同時に静かに頷いた。

…キッチンにて

緑の男は昼食の準備をしていた。カウンターの上にフライパン、ポウル、数個の野菜やキノコ、包丁、スパゲッティなどの材料や食材が並べてあったが、男は戸棚のあちこちを調べながら何かを探し続けていた。

緑の男「… ったくう、兄さんったらホントにお人好しなんだからなあ…。」

まだ先程の事で気が止まないネガティブな男…。

緑の男「ええ〜と… あれえ〜？ おかしいなあ…。最後に使ったトマトソース、どこに閉まったんだろう？

確かこの辺に…。

木乃香「もしかしてこれの事なん？」

彼女はそう言いながら、笑顔でトマトソースを緑の男に渡した。

緑の男「あ、そうそう、それぞれ…。って、どわあああ！？」

いつの間に木乃香が側にいた事に気付いた緑の男は、余りの驚きに引いてしまった。

緑の男「ば、バカッ！！ 驚かさないでよ！！ っていうか何で君がここに…！？」

何もせずにリビングで待ってるって言ったはずでしょ！？」

木乃香「ごめんなあ、せやけどどうも何もせえへんには行かへんのやあ。」

そう言いながら、彼女はカウンターに置いてあったフライパンを取り上げた。

木乃香「ほな、一緒に料理手伝ってもエエかな？ 一緒にやったら早く出来上がるえ？」

緑の男「気持ちはいけどノーサンキューだね…！」

ネガティブな彼は木乃香の優しさを引き受けないうまま、そのままフライパンを取り返した。

緑の男「僕は君に破壊的な真似とか何もやってほしくないの！ さ



つきの刀を振り回して部屋を壊した君の友達みたいだね！

って言うかその子もどこにいんの？」

木乃香「せつちゃんなら今お兄さんのお手伝いするために屋根におるけど……………」

その後、彼女は申し訳ない表情をしながら、緑の男の前にお辞儀した。

木乃香「…………… ホンマにごめんなさい、さっきせつちゃんがあんな事してもうて…。 せつちゃん、

ホンマはわざと貴方とお兄さんにあんな事したんじゃないの。

せつちゃんは、ウチもそやけど、

あの時戸惑ってたから……………」

緑の男「フンツ！ まあ、君が謝ってもその友達が僕に謝ってるの見当たらないけどね！ それに何なの、あの子の態度は？」

まるで君の用心棒みたいな感じだったけど…………… 君はどうかの国のお姫様とかなの？ もしそうだったら、

あの嫌な態度の辻褄が合うけどね。」

木乃香「それは……………」

彼女は下を向きながら話し続けた。

木乃香「…………… ウチ、お姫様とかちゃうねん… いや、ホンマはせつちゃんウチの事をそう言う風に扱って欲しくないし、

もちろんウチはせつちゃんを護衛つちゆう扱いしたくないねん。 ウチとせつちゃんは元々幼馴染の親友で、

出来れば特別扱いのない、普通のままな関係にしたいの。もちろんせつちゃんもその事を十分理解してるんやけど…

……………

どうも自分の立場から離れようともせえへんようで……………。

「

緑の男「ふうくん、そうなの？ じゃあ、君がお姫様じゃないんなら、何なの？」

君の友達が君の事を特別な意味で慕ってるんなら、君は何かのつもりだろ？」

彼は沸騰する鍋の中にスパゲッティを広げながら、木乃香に問い掛けた。

木乃香「いや、別に何でもないんやけど……………これ、ホンマに言っ  
てエエんやるか……………あんな、ウチは関西呪術協会つちゅう、

京都に隠されている協会の娘なんよ。ほんで元神鳴流の  
せつちゃんはウ、

チを守るために護衛役として雇われたんやけど、ウチは必  
要ないと思うて……………」

その間に麵を混ぜていた緑の男は、話を聞いている最中に立ち止ま  
った。

緑の男「……………今何て？」

木乃香「え？ ああ、神鳴流の事かな？ えっと、ウチもよく知ら  
ないんやけど、せつちゃんの話によると、

強力な剣術と呪術を持った剣士達が集う組織で……………」

緑の男「違う違う！ それじゃない！ どこから来たの！？」

木乃香「え、どこから？ せやから…………ウチとせつちゃんは京都から  
来たんえ。」

せやけど今は埼玉にある麻帆良学園つちゅう学校の寮に住  
んどるえ。」

その間にしばらく沈黙が走り、男は頬を掻きながら疑問に思い始め  
た。

緑の男「……………それ、どこ？」

木乃香「へ？ 貴方…京都知らんの？ もちろん、埼玉も？ 日本  
にあるんえ？ ほら、富士山や東京……………」

またはお寿司とかお相撲さんやお侍さんがおる国え？」

緑の男「ニッポン？ 聞いた事もないね。」

彼がそう答えると、木乃香は思わず愕然とした。

木乃香「えっ！？　せ、せやけど、ちよっと待って！？　あ、あの… ホンマにごめんやけど、

ウチら今どこにいるんか教えてくれる？　ここは… 日本え…？」

緑の男「何言ってるの？　ここはニッポンじゃなくて『キノコ王国』

！　大きなキノコと小さいキノコに囲まれた王国だよ！」

木乃香「キノコお！？」

それを聞いた彼女は、更に愕然とした。

… 屋根の上にて

一方赤い男は、屋根の上で修理を始めていた。　彼は刹那と木乃香が出来た穴を塞ぐために、板をハンマーで叩いていた。

そんな彼はいつもぶつぶつと文句言い続けていた弟とは違い、平然としながら気楽に仕事をしていた。

赤い男「うん、これくらいの損傷も大した事ないな。　夕方までには終わるだろう。」

その間に刹那が梯子で屋根の上まで上り上がって来た。

刹那「あ、あのう…。」

赤い男「どわあああっ！？」

突然顔を出した刹那に対し、赤い男は思わず驚いた。

赤い男「な、何だよ、君か！　何で君がここに…！？　しばらくりピングで待ってるってさっき言っただろ！？

ここは危ないから今すぐ降りた方がいいよ！」

彼は刹那にそう注意したが、刹那はそれでも屋根まで上がって来た。

刹那「はい、それは分かってますが…元はと言えばこれは私のせいなので、せめて貴方のお手伝いしようと思ひまして…。」  
赤い男「いや、別にいいよ。これは男の仕事なんだから、こう言うのは俺に任せろよ！」

刹那「いや、それでも手伝わせてください！一緒にやれば直ぐに終わりますし…それに、

私はこう言う体を動かす仕事に慣れてますから、例えきつくても平気です！」

赤い男「そうか？ ううううん…そこまで言うんなら、手伝わせてもらおうか！」

刹那の要望を引き受けた男は、彼女の手を引つ張り上げ、彼の近くに居させてもらった。その後、

彼は引き続き板をハンマーで叩き続けるが、刹那は先程の出来事にまだ気にしているため、  
申し訳なさそうな表情で下を向いていた。

刹那「……………あ、あのう……………私…何度も言いましたでしょうけど……………」

そう言った後、彼女は必死な思いで男の前に土下座をした。

刹那「…家の事は本当に申し訳ございませんでした！！どうか私の無礼さと愚かさをお許してください！！」

それに対して愕然とした男は、思わず動揺した。

赤い男「なっ！？ お、おい、やめろって、そう言うの！！俺は別に気にしてないから、

その事でいちいち謝らなくてもいいって！過去に起こった事はもう済んだ事！だからもう気にしなくていいよ！」

刹那「分かっています……………でも、だからと言って私は自分を許せないんです…。あの時は私とお嬢様は混乱して、

しかも先の事も何も考えず、あんな酷い事をしてしまっ…。

それに、例え貴方が許しても、

弟さんの方は許してくれません…。恐らく、一生恨み続けるでしょう…。」

赤い男「ああ、あいつの事なら気にするな。あいつそんなに悪い奴じゃないんだ。ただ……ネガティブなんでね。」

それに、さっき言ったみたいに、あいつこの一日いい事なかったから不機嫌なんだよ。後で許してくれると思うよ。」

その後、彼は刹那の顔に近付き、小声で話し始めた。

赤い男「まっ、気にすんな。もし許してもらわなかったら、今夜俺があいつを脅かしてやるからさ！ あいつ、

アー見えても臆病なんだ！」

彼がそう言くと、刹那は男と一緒に静かに笑い出した。だがその後、再び不安な表情に戻った。

刹那「…だといいですけどね…。」

赤い男「もちろんさ！ それと悪く思うなよ！ 家の傷は大して悪くなかったし、一緒にやれば直ぐに修理出来るよ！」

さっ、そうと決まればパパッと終わらせようぜ！」

刹那「はい。」

彼女が頷いた後、彼女は手元にあるハンマーを取り出し、男と一緒に板を叩き始めた。

赤い男「ところで、さっきの必殺技なんだけど…あれすごかったな！ 突然刀が光りだして、

振り落としたら急に長くなって……まるで以前俺と弟が遊んだ格闘ゲームみたいだったよ！

一体どこでそんな技覚えたんだ？」

刹那「え、『斬岩剣』の事ですか？ あれは神鳴流奥義の一つで、刀に『気』を込めて、

どんな頑丈な物体を真つ二つに切り裂ける事が出来るんです。最も、難関な敵を倒したり、

封鎖された場所から脱出したりなどに使用しています。私

が神鳴流道場に通っていた頃に覚えた技です。」

赤い男「シンメーリユー？ 聞いた事もないな？ それってどこにあんの？」

刹那「ええ、それは京……………」

刹那は説明し続けている間に、一瞬に目を風景の方へ向けた。すると何かを目前にしたのか、途中で話を止めた。

森の周辺にはたくさんの大きなキノコが生えていて、更に空を見上げたら、顔の付いた雲が真上から流れていた。

明らかに不思議な光景を目の当たりにした刹那は、正確的にここがどこなのか分からなくなってしまった。

刹那「……………あ、あのう……………こ、これ…何なのか良く分からないのですが……………私の気のせいでしょうか……………」

それとも先程の事件のせいで気が動転してるんでしょうか……………？ 何で、あちこちに巨大なキノコや、

顔の付いた雲があるんですか……………」

赤い男「え、ここどこなのか知らないの？ ここはキノコ王国と言って、大きなキノコや小さなキノコがたくさん生えてる、

大きな大陸なんだ！」

刹那「キノコ…王国……………」

それを聞いた彼女は、多少困難した。

刹那「あの、それってどう言う意味なんですか？ ここは、日本じやないんですか？」

赤い男「ニッポン？ 何それ？ それってどこのの？ 聞いた事もないけど……………」

その返答を耳にした刹那は、無言のまま青ざめていた。

刹那「……………ここが日本ではないとすれば……………一体……………？」

…その後、緑の男は家を出て、屋根を修理していた兄と刹那に昼食の用意が出来たと呼び掛けて来た。

それを聞いた二人は屋根から降り、家の中へ戻り、台所へ向かった。その間に家の中へ戻った刹那と、

緑の男と供に台所で待っていた木乃香は、この世界の事で多少混乱していた。赤い男と刹那が台所に入った後、

四人揃ってテーブルの前に座り、目の前にあるパスタを食べ始めた。そして食事中、

二人の少女はこの世界に訪れる前の出来事を、兄弟に話し始めた。

赤い男「……………で、簡単で言うと…君達は別の世界から来て、そこで何かが起こって、この……………何かに吸い寄せられて、

そして気が付いたらここにいた…って事だろ？」

刹那「ええ、多分…。」

緑の男「ねえ兄さん。もしかしてこの二人、僕達が『ハザマタウン』にいた時と同じような世界から来たのかな？」

赤い男「そりゃないよ。もしそうだとしたら、彼女はピクセル風な姿や色んな微妙な形になっているよ。」

どう見ても俺達人間の姿になっているし、俺達が以前行った世界から来たとは思わないさ。」

木乃香「それやったら、ウチらまた魔法によって生み出された幻想世界に戻って来てもうたんなかな？」

刹那「お、お嬢様！！それは内密…！！」

思わず魔法の事を口にした木乃香は、急いで口を両手で塞いだ。

刹那も多少慌てたが、よく見ると兄弟は平然な顔をしていた。

赤い男「魔法？ 幻想世界？ その世界…聞いた事ないけど、でもこの世界には魔法はあるけど、

それで作られてはいないね。」

それを聞いた刹那と木乃香は、愕然とした。

刹那「えっ！？ あ、貴方…魔法の事で驚いてないんですか！？

と言う事は…この世界には魔法が存在するんですか！？」

赤い男「さっき言ったように、そうだよ！ でも、俺達には持ってないけど、それぞれ持つてる奴もいるんだぜ！

例えば俺達がいつつも苦労しているあの頑固な化け亀野郎の横にいる、あのインチキ亀魔法使いのようにな。」

誰の事を言っていたのか二人の少女には分からなかったが、とりあえずそれを置いて置く事にした。

木乃香「せ、せやけど…この世界では魔法はタブーとされてなかったん？」

緑の男「何でタブーにならなきゃ行けないの？ この世界には色々な不思議な物がたくさんあるんだ！ もちろんあの……

透き通った………恐い顔の………暗闇の中で灯る………アレとか……。」

赤い男「幽霊だろ？」

緑の男「それを言わないでよおー！！！！」  
彼は思わず大声でそう言い出し、怯え始めた。

赤い男「へへへッ、ほらな？ 臆病だつて言つたら？」

その間に刹那と木乃香は赤い男と一緒に笑うが、その後止めた。

刹那「では…この世界では魔法は常識なんですか？」

赤い男「まあ、そうだな…。ただ、東にあるモビウスって言う大陸には科学技術を中心にしてるんだ。

ほんの少しだけ魔法はあるけど、殆どは科学で頼ってるからな。でも、もちろん魔法は存在する事に信じてるんだ。



だから、そんなにおかしいと思うような物じゃないよ。」

刹那「それがこの世界と私達の世界の大きな違いと言う事ですね…。私達の世界では、魔法は違法になってるんです。

その存在を世間に暴いてしまった場合は、罰として罪人を動物にさせる事があるんです。でも、

この世界では魔法は存在し、全てはその存在を受け入れている……となると、

この世界では魔法を認識や使用は自由なんですね。」

木乃香「わぁ〜…それやったらネギ君もこの世界で魔法使っても大丈夫なんやな！もちろんウチらがカードを使っても…。」

彼女がそう言うと、二人の少女は何かを思い出し、勢いで同時に椅子から立ち上がった。

刹那「そう言えば…！！ネギ先生とアスナさんは…！？確かこ

こに来る前に一緒にいたはずなのに…！！」

木乃香「そうやった！！ずーっと混乱しとったからすっかり忘れてもったわー！！」

赤い男「お、おい、二人共落ち着きなよ！」

彼は二人の少女を落ち着かせようとする、二人は同時に椅子に座った。

赤い男「とにかく、君達がこの世界に来てしまった事で混乱している事と、今の状況に関してよう〜く分かった。

だけど君達の友達は今どこにいるのか分からない限り、これからどうすればいいのか分からない。

とりあえず、今は落ち着いて、これからどうやって君達の友達を探せばいいか、一緒に考えようぜ！」

木乃香「それって……………」

赤い男「そっ！俺達も君達の友達を探すの手伝ってやるよ！」

緑の男「ええっ！？それって僕も含めるのお！？」

赤い男「当たり前だろ？ お前以外俺達は誰を示してると思ってるんだ？」

何をすればいいのかわからないこいつらを放って置く訳には行かないだろ？ それに、

お前さっきの事でまだ怒ってるのは分かるけど、そんな態度ばっかしてちゃ助けようもないだろ？

いい加減に頑固親父になってないで、優しくやれよな？」

彼がそう言つと、緑の弟はしばらく唸り出し、困った表情で腕を組みながら何かを決めた。

緑の男「んあぁ〜もう！！ 許せばいいんでしょ！？ 分かったよ！ さっきの事は許しておくよ！ これで満足！？」

赤い男「俺が求めている態度じゃないけど、まあいいとしよう…。」その後、赤い男は刹那と木乃香に振り向いた。

赤い男「まつ、心配するな！ 俺達も友達探すの手伝うからさ！

一緒に探せば直ぐ見付かるよ！」

刹那「でも…本当にいいんですか？ 以前私があんな事までしてしまつて…。」

木乃香「その上ウチらのような他人が別の世界から来たにしても？」

赤い男「おいおい、あんたさっき俺が屋根修理するのを手伝ってくれただろ？」

そしてお嬢ちゃんも俺の弟の料理を作るのに手伝ってくれた。二人共俺達を手伝ってくれたから、

今度は俺達がお返しする番だからな！ それに他人とか、そんなの関係ないね！ 困った奴がいる限り、

放って置く訳には行かないさ！ なつ、我が弟？」

緑の男「まあね…。」

赤い男「それに、今日から俺達は友達さ！ だから、何か困った事があつたら、俺達を頼らせるよ！」

二人の兄弟…或いは一人の赤い男が心強くそう言つと、刹那と木乃

香は彼らの優しさに励まされた。

刹那「…え、えっと……どう言っているのかわかりませんが……  
…ありがとうございます。」

木乃香「うん！ とても感謝しますわ！」

赤い男「そうそう、そう言えばあの事件が起きてからまだ自己紹介  
とかしてなかったな？ 俺は『マリオ』！」

で、こいつは『ルイージ』だ！」

ルイージ「そうだよ。」

木乃香「ウチは近衛木乃香と申します。 せやけど、木乃香って呼  
んでも構わへんえ。 そしてこっちはウチの幼馴染の親友、

せつちゃんこと桜咲刹那や。」

刹那「刹那です。 よろしくお願ひします。」

その後、彼女はルイージに振り向いた。

刹那「あ、それと……先程の件なんですけど……。」

ルイージ「もういいって言ったでしょ？ だからもうその事で謝ら  
なくてもいいよ。」

だが彼は頭を掻きながらこう言った。

ルイージ「……とは言っても、本当は謝るのはこっちなんだよね。  
さっきから嫌な態度ばかりしてごめん。」

マリオ「まっ、これでオツケーって事で！」

そう言いながら、二人の兄弟と二人の少女は、お互い握手し始めた。  
マリオ「ようこそ、俺達の世界へ！ これからもよろしくな！」

刹那「はい！ こちらこそ、よろしくお願ひします！」

そう言いながら、彼女は笑顔を浮かべた。

## 第5話 迷いの森の忍者と狩人

……一方モビウスのミスティクルーインでは、ネギ、聡美とカモは、ティルスと共に彼の研究所にいた。

その場にソニックがいないのは、恐らくジャングルの中で音速に探検しているのだろう。そんな彼が出かけている間に、ネギは自分達が使用する魔法をティルスに説明した。そんなティルスが興味津々に話を聞いていると、啞然としていた。

ティルス「ええっ！？ 君達魔法が使えるの！？ それってホント！？」

ネギ「はい…でもいつでもどこでも使えるって訳ではありません。

先程言いましたように、

僕達の世界では魔法の存在はタブーとされてるんです。そしてそれを世間に暴いた場合は、

暴いた者は罰として動物にされてしまうんです。僕も\*一

度はそうりましたが、後で許され、

元の人間の姿に戻してくれました。僕の魔法は、一般人がいない間でしか使えませんが、人を助けたり、

敵に攻撃したり出来ます。」

聡美「そして私は普段魔法は持ちませんが、ネギ先生と仮契約をした事で、

『ネオ・パクティオーカード』で魔法を使う事が出来るんです。このカードを使うと、

私はアーティファクトを使用する事が出来て、ネギ先生を応援する事が出来るんです。ただし、

これには制限がありました。」

ティルス「ホントに？ じゃあ、その魔法僕に見せてくれるかな？

多分、僕達の世界とはちょっと違うかも知れないからさ！」

ネギ「分かりました。でもここで強力な魔法を使うのは危険ですので、初心者がよく使う魔法をお見せしましょう。」

\*アニメ第二期の第12話から、彼が魔法を使用する瞬間を全3-A生徒達にバレてしまったため、

罰としてチユパカブラに変えられた事があるが、第14話では全員パクティオー仮契約したために元に戻れた。

その後、ネギはポケットから星の付いた小型の杖を取り出し、呪文を唱え始めた。

ネギ「プラクテ ビギ・ナル、”アールテスカット火よ、灯れ”！」

彼が呪文を唱え、杖を振り出すと、星の先から小さな炎が出て来た。それに対し、ティルスは興奮に驚いた。

ティルス「うわあ〜っ！！ すご〜い！！ ホントに杖から火が出たあ！！」

ネギ「ええ、でもこれは元々魔法を覚え始めるために練習用として使用された初心者用の詠唱魔法なんです。

もちろんこの杖も初心者用ですが、他にも風や光を現す詠唱魔法もあるんです。でも、

殆どは敵を眩ますだけの威力しかないので、余り強力ではありませんが…。」

彼がそう言った後、初心者用の杖をポケットの中に戻した。

ティルス「なるほど…。」

その後、彼は聡美の方へ振り向いた。

ティルス「ならハカセのはどう言う魔法が使えるの？」

聡美「私ですか？ まあ、先程言いましたように、私は生まれた頃から魔法を会得していませんが、

『ネオ・パクティオーカード』で魔法を使用する事が出来ます！ 例えば…。」

彼女はネギに振り向くと、ネギはそれに応じて頷いた。するとネギは自分の杖を取り出し、  
聡美に向けた位置に立ち止まったまま、目を閉じて構い出した。  
その後、  
聡美の真下から西洋文字に書かれた魔法陣が輝きながら現れ、聡美も目を閉じたまま、突如に宙に浮かび上げ、体が光り始めた。  
ティルスがその光景を不思議そうに見ながら、ネギは呪文を唱え始めた。

ネギ「パートナー葉加瀬聡美！ 我に示せ、秘められし力を！」  
彼が聡美の光る体からカードを引き抜くと、聡美の姿は学生服から白衣の研究服に変わった。その姿に変身した時、  
聡美の肩にはシオルダーバッグが背負われ、中に大量の調合薬の入ったフラスコを用意されていた。その姿を見たティルスは、  
更に興奮に驚いた。

ティルス「うわあ~~~~！！ 八カセが科学者に変身したあ！！  
……でもお、これが魔法とどう関係してるの？」  
カモ「兄貴、こっからは俺っちが説明させてもらうぜ！！」  
彼はネギの上着ポケットの中から飛び出しながらそう言った。

カモ「兄貴が先程抜いた物は『ネオ・パクティオーカード』っていう魔法アイテムで、

選ばれたパートナーと仮契約する事パクティオーで手に入る優れ物なのさ！  
けどカードには三枚存在していて、

何を引き抜くかランダムに決められるんだ。その内の一枚は『アーマーカード』で、

カードの中でも最も強いとされているカードなのさ！ でも  
これの悪い所は、

レアカードのために出現率がとても低くてな、それまでにい

つこのカードを引き抜けるのか誰にも分からねえんだ。

もう一つは『スカカード』と言ってな、これを引き抜いた場合は体が小さくなり、動物の着ぐるみを着てしまうんだ。

そのため史上最弱のカードと呼ばれてな、可愛いのは可愛いんだけど、全く役に立たないんだ。そして最後に、

今ハカセさんは『コスプレカード』の姿になっていて、カードの中でも最も引きやすい中級のカードなんだ！

『アーマーカード』ほど強くねえが、『スカカード』よりヤマシの方だな。」

聡美「そしてこの姿になっている間は、アーティファクトを使用する事が出来るんです。

例えばこのバッグの中に入っているフラスコ……これには様々な効果を宿った調合薬が入っています、

地面に投げ付けた時は、火・氷・光などと言った効果を出し、それで敵に攻撃したり、

目を眩ませたりする事が出来るんです。もちろん回復薬や解毒薬なども入っています、

これを飲むと傷を癒したりする事が出来るんです。」

ネギ「元々は契約者の僕が引き抜くんですが、カモ君の調査による

と、パートナーが『来れ』と唱えると、  
パートナー自身がカードを引き抜く事が出来るらしいんです。

でも、僕が引き抜いた方がより威力が高まるので、  
こっちの方をお勧めしますが……。」

聡美「このカードアヘアットされれば、魔法を使えますが……問題なのは  
『去れ』！」

彼女がそう唱えると、元の学生服に戻った。

聡美「……使えば使うほど体力が消耗してしまい、空腹になってしまうんです。」

テイルス「なるほどお……それはとても興味深い……。」  
彼は頷きながらそう言った。

テイルス「ところで、この『仮契約』って言うのは何なの？ それをするために何をすればいいの？」

彼がそう問い掛けると、ネギと聡美はお互い振り向き、『仮契約』バクティオーの事を思い出した事で赤くなつた。

カモ「そりゃ簡単さ！ これが男と女の関係なら、お互い……………」  
ところが彼が説明しようとする、ネギは『仮契約』バクティオーの本当の意味を隠すため、急いで口を塞いだ。

ネギ「ええ〜と…しよ、書類です！！ 契約書にサインすればそれでいいんです！」

聡美「そ、そうです！！ 紙をです！！」

テイルス「ふう〜〜ん……………」  
彼は何かを期待していたのかどうかは不明だが、ただ慌てる二人を見ながら不審に思い始めた。

そしてネギがカモを床へ落とした後、何かに気になりながらこう言った。

ネギ「……………『ネオ・パクティオーカード』と言えば……………他の生徒達はどうしてるんだらう……………」

特に明日菜さん……………今はどこに……………」

聡美「そうですね……………そう言えば、私も皆さんの事が気になります……………」

テイルス「ソニックは今君達の友達を探すために、もう一度ジャングルに向かって行ったよ。ソニックが戻って来るまで、

二人はここで待機した方がいいよ。」

カモ「いいのか？ ソニックの兄ちゃんがジャングルにいる間に俺達がここに残っても……………」

テイルス「大丈夫！ ソニックはあー見えても何度もジャングルで冒険しに行ったから、君達とは違って、

遭難したりはしないよ！」



…ミスティックルーインのジャングル

ジャングルの中は絡まったつるや湿った葉っぱに囲まれていて、地上には小さな川が流れていた。

それ以外に動物は生息しておらず、小さな虫でさえもどこにも見当たらない。だが、そこには二人の人物が、

ジャングルの中に彷徨っていた。どちらも身長の高い女性で、一人は色黒の肌と長い黒髪をした女性で、

もう一人は細目で長い黄緑のお下げをしていた。しかもその二人は、同じ麻帆良学園制服を着ていた。そう、

彼女達はネギの生徒、及びパートナーの二人で、一人は狩人の龍宮<sup>ハンター</sup>真名で、もう一人は忍者の長瀬楓であった。

二人は今どこにいるのか分からないまま、疲れで激しい呼吸をしながら、ジャングル内を彷徨い続けていた。

真名「……はあ……はあ……一体ここはどこなんだ……。」

楓「……はあ……はあ……さあ……でござる……。」

真名「……まさか……同じ所ぐるぐる回っていたとは言わないだろうな……?」

楓「何を言うでござるか、真名? 拙者達は今まで真っ直ぐ進んでたんでござるぞ?」

気付かずに途中で曲がるなんて有り得ないでござるよ!」

しかし、真名は途中で立ち止まり、前にいた楓の襟を引っ張った。

彼女が楓を強制的に近くにある木に振り向かせると、

その木には刃物で削られた『x』のマークが書かれてあった。

真名「…道に迷った際、予めに作った物だ。しかも私達はここを15回以上も通過していたんだぞ？」

その目印を見詰めていた楓は、真名に振り向き、自信なさそうに笑い始めた。

楓「…………アハハハハ…………道理で見覚えのあるような場所だと思っただござるよ。」

そんな呑気そうに笑う楓に対し、真名は手を額に当てながらため息を吹いた。

真名「…はあ……………一体これはどう言う事なんだ…？ 私達が目を覚めてから四時間前……………」

気がついたらこの見知らぬジャングルにいた…。それまでに何も食わずに飲まずに、

ずーっとこの見知らぬジャングルで迷い続けた…。まあ、ここには綺麗な川があるから、

喉が渴いた時には助かるが、野生の動物がどこにも見当たらないために、何も食べていない……………」

楓「しかしそれよりも…拙者達はどうかやってここに来たのか分からん……………」。拙者の覚えてる限りでは……………」

休み時間で鳴滝姉妹と供に、さんぽ部として散歩していたでござる。それは平和そうな散歩でござったが……………」

突然あちこちから奇妙な電流が出現し…それに地震も起き始め……………」そして周りが突然歪んで、

目の前が真っ暗になり……………。あれは一体何だったのか分からないでござるが、

気が付いたらお主と一緒にここにいたって事でござるよ。」

真名「それは私も同じだ…。あれは授業が終わり、休み時間に入った時の事……………」私は教会付近にいつもの事をしていた……………」

拳銃を磨くだけだがな。その間にザジが私の隣にいて、いつものようにジャグリングの練習をしながら、

寒いギャグを言い出していた。当然ながら私はそんなザジに低い点数をあげたが……突然奇妙な電流が出現し、

その同時に地震が発生した。その間に周囲が突然歪み始め、目の前が真つ暗になり……それから……くっ……

これ以上何も思い出さない……ここでお前と一緒に遭難してしまつた事だけしか記憶にないが……」

楓「うう……む……拙者が思うには、このジャングル……どうも麻帆良学園の一部とは思えないでござる。

キャンパス内やその遠い付近にはジャングルなんてなかったし……もちろんここは図書館島にある、

以前拙者が迷い込んでしまつた\*迷路でもなさそうでござるな。

「

\*アニメ第二期の第18話参照。

真名「まあ、ここがアマゾンでもないのは確かだ。だがどうも私達は今、

元々この世には存在しないジャングルの中にいるような気がするんだが……」

楓「それって、拙者達は再び幻想世界に戻って来てしまつたと言う事でござるか？」

真名「そこはまだ断定は出来ない。だが私達は今どこにいるのか、それを分かるためにはこのジャングルの出口を探さなければならぬ。そしてその後……」

真名が話しながら周囲を見回すと、一旦話を止め、遠い所から何かを発見した。

楓「どうしたでござるか、真名？」

真名「分からない……だが向こうから何か見えるようなんだが……」

「

楓「それなら調べに行ってみるでござるか？」

真名「そうだな…何か見付かるかもしれない。」

決意をした二人は、真名が目撃したその何かの方へ向かって行った。

楓・真名「なっ…!？」

二人は無事その場所に辿り着いた時、ある物を見て驚いていた。

それは円形状に流れている綺麗な川の間に住む、

大きな枯れ木の側に建てられた大きな小屋だった。

特に中には誰もいなかったが、

ランタンの火が付けっぱなしで、何者かに作られた木材の家具が綺麗になっていた。埃やカビは一切なく、

古代から存在していた物ではない様子だった。

楓「これは…小屋でござるな？」

真名「…と言う事は、誰かここに住んでいると言う事なのか…？」

彼女はそう言いながら、楓と共に小屋の中に入った。

楓「そうみたいでござるな？ ランタンが付けっぱなしで、家具には埃やカビが一切もないでござる。」

まるで真新しいように見えるが……………」

そう言いながら、彼女は一瞬に鼻を摘んだ。

楓「ぐっ…!! 生臭いでござるな…!! これは魚の臭いでござるな…!!」

真名「しかし驚きだな…まさかこんな何も生息しないジャングルの中で誰かが住んでいたとは…。でもそうであれば、

その住人から道を教えてもらうのにちょうどいいかもな。」

楓「そうでござるが…その生存者…または住人は今どこにいるんでござるか？」

真名「そこが問題……！？」

その時、真名は何かしらの気配を感じた。彼女はその気配を感じた方向へ振り向くと、

近くにある草木が音を立てながら揺れ出した。

楓「どうしたでござるか！？」

真名「…あの茂みから何者かの気配を感じる…！」

そう言いながら、彼女を銃を取り出す準備をしていた。

楓「もしかしたら、この小屋の主ではないでござるか？」

真名「或いは別の何かか…。」

楓「別の何かとは何なんでござるか？ ここには拙者達以外誰もいないのでござるよ？」

真名「もしかしたらいるかも知れないだろ！？ お前にはまだそれが分からんのだ！」

彼女達がまるで言い争うかのように話し合つと、草木から出てくる音がだんだん近付いて来た。それに気付いた二人は、

一旦話し合うのを止め、戦闘準備を唱えた。そしてその何か草木から飛び出て来ると、二人は啞然としていた。

その何かの正体は、茶色の手袋にベルト、黒いブーツ、そして手に釣竿と大きな魚を持った紫色の巨大な猫であった。

その顔は可愛いくらいなポーカーフェイスで、いかにも恐そうには見えなかったが、楓と真名はただ啞然としていた。

「……ふう〜…やっと帰れたんだよなあ〜。 浜辺からここまで

戻るのが大変なんだよなあ〜。」

少しだけ早く動けるように、ちょっとだけ運動でもしよう

かなあ〜……………ん〜〜〜？」

彼が見上げると、目の前に唾然のまま戦闘体勢に整っていた楓と真名が立っていた。

「……ああ、お客さんだあ！」

彼はまるで喜ぶように少し驚いたら、素早く立ち上がった。

「……いやあ、まさかお客さんが来てたなんて、知らなかったなあ。もしかして、」

僕が帰って来るのを待ってたの？ とりあえず、

僕の家によっこそお！ 僕に何か御用かなあ？」

彼は喜びながら二人に問い掛けるが、肝心の楓と真名は唾然としたままであった。

真名「……か、楓……日本の妖怪に詳しいお前なら……こいつが何なのか、分かるよな……？」

楓「……さ、さあ……ば、『化け猫』なら聞いた事はあるでござるが……」

これだとそんなに恐そうには見えないようござるが……。「……うう……ん……何を言ってるのか僕には全く分かんないけど……とりあえず気にしないでえ。」

僕、意地悪とかしないからあ。」

そう言いながら、彼は釣り上げた大きな魚を近くにあったテーブルの上に置いた。

「……ゆつくりしてつてよあ。……こつて結構気持ちいいんだよあ。あつ、そうそう……」

まだ自己紹介してなかったねえ。僕、『ビッグ・ザ・

キャット』って言うんだあ。そして僕、

ここに住んでるんだよあ。よろしくねえ。」

真名「あ、は、はあ……私の名は龍宮真名だ……」

楓「え……と……拙者の名は長瀬楓でござる……。よろしく……でござる……」

ビッグ「真名と楓ねえ？ うう〜ん……どう言う意味なのか分かんないけどお〜いい名前だねえ〜！」  
楓「ああ…それはあ…かたじけない…でござる…。」

その後、真名は楓の耳元に小声で話し掛けた。

真名「どうも信じられんな……私達がこの巨大な猫と会話している事を…。」

楓「同意でござるよ…。」

真名「しかしどう思う…？ 奴は危険か？」

楓「いや、見掛けによればそうには見えないでござるな。でも…

彼なら一応手伝ってくれると思うでござる…。」

真名「信用出来るのか？」

楓「試してみないと分からないでござるよ。」

二人は小声で会話し終わると、椅子に座りながら絡まった釣り糸を直しているビッグに振り向いた。

真名「あ…お前がここに住んでいるのは理解した上…もしかしたらお前はこのジャングルの事に関して詳しいと、

私達は思っている。だが本題に入る前に、私達は今どこにいるのか、教えてくれないか？」

ビッグ「ここお〜？ 簡単だよお〜。さっき言ったように、僕の家だよお〜！ そして今君が立っている場所はあ〜…。」

真名「いや、この小屋の事じゃない！ 私は聞いているのはこのジャングルだ！ ここは何て言うジャングルなんだ？」

ビッグ「あ〜、このジャングルねえ〜？ ここはあ〜…ミスティックルーインにあるジャングルなんだよお〜？」

とつても寂しいけど、とつても綺麗で静かなジャングルなんだよお〜？」

真名「ミスティック…ルーイン…？」

彼女は後ろに立っていた楓の方へ振り向いたが、彼女も知らないと

答えるかのように両肩を上げた。

真名「…ちよ、ちよっと待て……………そんな場所の名前、聞いた事もないのだが…」

ならここはどここの大陸か島にあるジャングルなんだ？」

ビッグ「大陸うゝ？ ええゝつと…このジャングルはモビウスって言う大陸にあるんだあゝ。 そう言う君達は、

『ステーションスクエア』かどこかから来たんでしょゝ？」

真名「…モビウス…ステーションスクエア…？」

ビッグの返答を聞く度に混乱して行く真名。 その同時に後ろにいた楓も、ビッグの言っている事に理解していなかったために、真名以上に混乱していた。

ビッグ「あれえゝ？ もしかして君達、何も知らないのおゝ？」

彼は驚いたかのようにそう言うが、その驚きは顔に表さなかった。

ビッグ「ううゝゝん……………君達ってホントに迷ったかもしれないねえゝ…。 このジャングルニだけじゃなく、全部にいゝ…。」

真名「…ああ…納得するよ…。」

彼女はビッグの言葉を受け入れながら、手を額に当てさせ、頭を振りながら困難のため息を吹いた。 一方後ろにいた楓は、何も考えずに無言のまま、そこで突っ立っていた。

ビッグ「でもおゝ、そんなに気にしなくていいよおゝ？」

彼は釣り糸を直し続けながら、平然とした感じにそう言った。

ビッグ「しばらくのんびりして休むといいよおゝ。 そうすれば何も困らず、落ち着いて明るくなるよおゝ。」

真名「悪いが、そうは行かない。」

彼女はビッグに見上げながら拒否した。

真名「こう見えても先を急いでるんでね…休んでる場合ではないのだ。 さて、本題に入ろうか。」

私達は一刻も早くここから出なければならぬ。 出口はど



ここにあるか、教えてくれないか？」

ビッグ「ええ〜？ それつてもう帰るって言うのお〜？」

彼はそう言いながら、釣り糸を直すのを止め、悲しげな表情で真名と楓に見上げた。

ビッグ「せっかく晩御飯作って、一緒に食べながらお話ししようと思つたのにい〜。」「

彼ががっかりしながらそう言うと、楓は彼の元へ歩いて来た。

楓「そうがっかりしてはダメでござるよ。もし拙者達が一度ここから抜け出たら、またここに戻って、遊びに来るでござるよ！」

多分……………」

ビッグ「うう〜ん……………分かったあ〜。それなら君達をここから出られる方法を教えてあげるよあ〜。」「

彼は元気を取り戻した後、真名と楓に出口への道を教えてやった。

すると彼は腕を上げ、ある方向へ向き、

二人の少女はその方向へ振り向いた。

ビッグ「このまま真つ直ぐ行ってえ〜……………途中で十字路があるからあ〜……………そこに着いたら左に曲がってえ〜……………」

そのまま真つ直ぐ進むと、崖の天辺まで続く梯子があるからあ〜……………」

梯子に登ると洞窟の中へと続くトロツコがあるからあ〜……………それに乗ったら出られるよあ〜。」「

真名「真つ直ぐ進んで左……………そして梯子に登ってトロツコに乗る……………」

彼女はその方向を記憶するために、何度も頭の中でそれを言い返した。

真名「…よしっ、記憶した！ ありがとう、ビッグ。色々教えてくれて、感謝するぞ。」「

ビッグ「いやあ〜、それほどでもあ〜……………でもあ〜、いつかまた会えるかなあ〜？」

楓「大丈夫、約束するでござるよ！」  
彼女がそう言った後、真名に振り向いた。それに応じて真名は賛成と言う意味で頷いたが、本人は自信がなかった。

……………ゲコツ！……………

その時、どこかから奇妙な音が聞こえ、それに素早く反応した楓は、緊張感と恐怖心が走り始めた。

真名とビッグにはその音を耳にしたかどうかは不明だが、楓の様子に気にしていた。

真名「どうした、楓？」

楓「……………な…何か……………悪しきな……………とても悪しきな気配が……………」

彼女がそう言いながら、突然汗だくになりながら焦り始めた。

真名「悪しき…？ 別に何も感じないが…？」

楓「それはお主には無関心だからでござるよ…。けど…拙者には感じる…！ あの気味の悪い声……………」

あのヌルヌルに寄生的なイボに包まれた毒々しい緑色の体……………

小さな獲物でも暗殺出来るあの伸縮するゴムのような舌……………

そして見詰めた敵を麻痺させる事が出来るあの忌まわしい眼差……………

し……………！！ あれは……………あれは……………！！！！！！……………」

楓が汗だくに震えながら、意味不明な事を言い続けると、ビッグの頭の上に何かが現れた。それに気付いた楓と真名は、

その物体に振り向き、驚いた。その物体の正体は……………カエルだった。

カエル「ゲコツ！」

楓「カエルうつ!?!?!? ぎゃああああああああああああああああああああああああああ!!!」

彼女は悲鳴を上げながら、物凄いスピードでジャングルの方まで逃げて行った。彼女が逃げた際に出来た煙が浮かび出し、

そんな彼女の思わぬ行動を見た真名とビッグはただ啞然としていた。

真名「か、楓!?!」

ビッグ「あれえ〜? 楓ちゃんどうしたのお〜? そんなに早く降りたかったのかなあ〜?」

その間に真名はビッグの頭の上に乗っているカエルに振り向くと、原因が分かったようだ。

真名「…問題が分かった…。とりあえず、色々ありがとな!」

彼女がそう言った後、楓が走り去った方向へ向かい、ビッグの家を後にした。

ビッグ「またねえ〜!」

カエル「ゲコツ!」

ビッグが手を振りながら、走り去った真名に別れを言った後、突然何かに気が付いた。

ビッグ「……………あれえ〜?」

彼はそう呟きながら、彼の左側の方へ振り向いた。

ビッグ「……………あつ……………間違えちゃったあ……………」

…奥深いジャングルの中

真名は激しく呼吸しながら、泥沼の付いた、逃げ去った楓の足跡を辿っていた。足跡を辿って数分も掛かったが、

真名は真つ直ぐ歩き続けている同時に、何か不安な気持ちになって

いた。

真名「…はあ…はあ…ったく…あいつは途中で曲がったり足止めせず、どうやってこんな複雑な所で早く走れるんだ…!？」

彼女はそう文句言うが、その後真剣な顔で複雑な道を進んでいた。

真名「…しかし…途中で曲がったりと言えば…この道はどうもおかしい…。 奴はここを進めば、

途中で十字路に辿り着くと言っていたが…その十字路がどこにも見当たらない…! と言う事は…。」

しかし、真名が道先の事を考えながら先を進み続けると、目の前に出口が現れた。

真名「…出口か…?」

彼女はその出口に見上げながらそう言いながら、戸惑いもなく、その出口に向かって行った。そして彼女が辿り着いた場所は、不思議にも広い空間であった。 彼女はその周囲を見回ると、近くにある岩の前で倒れていた楓の姿を目撃した。

真名「楓…!」

彼女は楓の名を呼びながら、倒れた少女の所へ駆け付けた。そこで辿り着き、楓の様子を調べると、

額にコブが出来た状態で気絶していた。 恐らく、楓は何も知らずに岩にぶつけたのだろう。

真名「おい、楓! 起きろ!」

彼女は楓の肩を揺らすと、楓は目を覚ました。

楓「う…うう…ん…ん?」

彼女は痛んだ額を手で当てながら、ゆっくりと起き上がった。

楓「…痛たたたた…な、何があっただ…ござるか…?」

真名「お前が逃げている時、この岩に頭をぶつけたのだよ。」

楓「痛ったあ…頭が痛い…でござる。」

彼女は今も頭の痛みを感じながらそう言った。

楓「…しかし…あの邪悪な生物…いかにも恐ろしいでござる！あれがビッグ殿の頭の上に現れた時、

まるで拙者を殺すと申したかのように鳴き出したでござるよ！

信じられるでござるか！？ あの恐ろしい妖怪を…！！」

真名「あのなあ、楓…。」

彼女は目を細くしながら、怯える楓に話し掛けた。

真名「不気味な目と伸縮する舌を持った無害な小動物がお前を殺す訳ないだろ。それに何だ、

突然あの場所からあっさりと逃げ出すなんて…。 お前はビ

ッグに感謝の一言も言わないでそこを後にしたし…

それに何だ？ お前があのかエル…或いはお前が言う『悪しき者』を見ただけで、こんな所で寝込んで怯えるとは…。

全く、どこの愚かしい女があんな無礼な…。」

彼女が楓に文句を言い続けていると、楓は勢いで真名の襟を両手で引っ張り、今も泣きそうな細目で真名に睨み付けた。

楓「お主には拙者の知る事を…何も知らない…でござる！！」

真名「分かった分かった。 お前はカエルが嫌いで、それに恐がっている。理由は聞かないが、十分理解した。」

彼女は自分の顔を楓から背きながらそう答えた。そして楓の弱点を知り尽くした後、楓は真名の襟を手放し、

彼女をそのまま草地に落とした。

真名「…けど、その代わりお前は何かを発見したようだな。」

真名は楓の背後にある何かに見上げている間に、楓は後ろへ振り向きながら見上げてみた。そこには何と、

苔に包まれた石で作られた大きな遺跡で、左右側には謎の石像、更

に蛇の頭の形をした入り口に向かってある長い階段があった。  
真名と楓はその神殿を見上げながら、言葉に出来ないほど啞然としていた。

楓「うわあ……これは神殿でござる！」

真名「そうだな……でも、これでビッグは私達に間違った道を教えてしまった事になるな。」

楓「でも……とても古い神殿でござるなあ……。しかも……以前拙者達が歴史の授業で習った何かに似てないでござるか？」

確かあ……えつとお……うう……ん……。

真名「グアテマラのペテン低地にあった古典期マヤの大都市、ティカル遺跡だろ？ 一度聞くが、

お前は歴史を含む全科目で何をしていたんだ？」

彼女はそう問い掛けると、楓はいつものポーカーフェイスで何も答えなかった。それに応じて、真名はため息を吹いた。

真名（……要するに授業中、何もしていないと言う事が……。道理でバカレンジャーの一員になった訳だ……。）

楓「で、でも！ これって拙者達は今……えつと……グ、グア、グ、タラ……とか言う所にいると言う事でござるか？」

真名「グアテマラだ！ ビッグはここはミスティックルーインと言う場所だと言っていた。だとしたら、

ここはグアテマラや中央アメリカ地方のどの遺跡地帯ではないと言う事だ。」

楓「なるほど……。」

彼女はそう言いながら、指で顎を撫でながら遺跡を見上げ続けた。

楓「なあ、真名。せっかくここに来たのだから、少し中に入って探検してみるでござるか？」

真名「何を言ってるんだ、楓？ 私達はこのジャングルから出て、

ここはどこなのかを調べなければならぬぞ！

遠足しに来た訳でもない上、そんな無意味な事をしてる暇などない！」

彼女はそう言うが、途中で考え直した。

真名「……………でも、この神殿を使えば、出口がどこにあるのかわかるかもしれない？ 楓、あの神殿の上にある柱に登って、

出口の在り処を探してみてくださいないか？」

楓「分かった、やってみるでござる！」

彼女が頷いた後、真名が指した神殿の上にある柱の頂点まで、自分の鍛えた忍術を使って軽々と登り上がった。

そして頂点に辿り着いた後、彼女は高所からジャングルの周辺を見渡し始めた。

楓「なかなか広いでござるな……………」

その間に彼女はある方向へ振り向くと、そこには絶壁があり、しかも上まで続く梯子と、洞窟の前に止まったトロツコがあった。

楓「おお、あれは何なんでござろうなあ？ もしかしてあれが

出口でござるな！ 早速降りて、この事を真名に……………ん？」

彼女が地上に戻ろうとしたその時、ふと振り向いて何かを発見した。

…一方真名は、神殿の階段を上り、入り口の扉を調べていた。一度扉を開けてみたが、なかなか開けられなかった。

次は強力な銃を使って開けてみようとしたが、考え直してみると不必要と思ひ、止めといた。

真名（ふむ…扉が開けられない……………でも、この神殿に何か不思議な物を感じる…。何か魔法とよく似た……………

或いは何らかの呪文……………一体この神殿は何なんだ？ まるでティカル遺跡にある神殿とよく似ているが……………）

その後、彼女は下の階にある二体の石像へ振り向いた。

真名（…そしてあの人型の石像……………人間ではなく、まるで動物の

ように見える…。

先程会ったあの巨大な猫も少し思っていたが、この半人半獣の類は何なんだ？ これってもしかや……………？)

楓「真名！！」

真名は柱の頂点にいる楓の声を耳にすると、そのまま頂点の方へ見上げた。

真名「出口見付かったかあ！？」

楓「もちろんでござるが、それよりもすごい物を見付けたでござるよ！」

彼女はそう答えると、神殿の後ろの方へ指した。それを見て建物の反対側に移動した真名は、ある物を目の当たりにした。

真名「なっ…！？」

…ジャングルの反対側にあったのは、とても大きくて高い鋼鉄の塔と、その中へ繋がっている長い鋼鉄のトンネル橋であった。

その橋の前は大きな断崖となっていて、その塔に興味を満たしたのか、真名と楓はそこへ向かう事にした。

意外とその塔は近かったので、二人は苦勞せず、無事に橋の入り口前に辿り着いた。だが見ての通り、

長い間から使われていなかったためなのか、橋全体は苔と錆に包まれていた。それを見続ける二人だが、

なぜこの塔がこんな無人のジャングルに建てられているのか分からなかった。

真名「何だ…この塔は…？」

楓「さあ…ただ言えるのは、この塔はこのジャングルのど真ん中に建てられているだけでござる。」

真名「この大量の苔と錆……………どうやら長い間から使用されていないかっただけだいな…？」



プシューウウウ！

しかし、楓が手前にあるボタンを押してみると、橋のシャッターが突然と開いた。

その予想外な展開を目の当たりにした真名は、啞然としていた。

楓「でも、扉はまだ動けるようでござるよ？ とりあえず、一回中に入って調べてみないでござるか？」

真名「だから私達はここを抜け出さなければならぬんだ！ 探検をしてる場合など…！」

彼女は一時反発したが、途中で考え直した。

真名「…とは言っても、どうもこの塔の事が気になって仕方がない…。もしかしたら、

何か役立つ物を見付かるかもしれない？ 分かった…中に入って調査してみよう。

役立つ物の見付け次第、ここを出るぞ！」

楓「了解でござる！」

彼女は張り切りながらも、真名と共に長いトンネル橋に入った。

その後、扉は自動的に閉まった。

まるで二人を塔の中に閉じ込めたかのように……。

…長い端を渡り抜け、楓と真名が辿り着いた場所は、二階建ての広い部屋であった。

二人がいる上の階にはコンピュータや様々な機械に囲まれていたが、下の階には何かしらの実験に使用されていたのか、

広い割には何もなかった。部屋は暗く、埃と蜘蛛の巣に包まれて

いたために、  
殆どの機械は長い間から使われていなかったようだった。もちろん二人の少女以外、人の気配も感じないが、部屋全体に興味を示しているほど恐れていなかった。

真名「何だここは？　たくさんのコンピュータや機械……何かの研究所か？」

楓「みたいでござるな。もし超殿や葉加瀬殿もここにいたら、より興奮していたかもしれないでござるな。」

真名「そうだな……。でも何のために使われたのだろうか…？」

その後、二人は役立つ物を探すために、部屋を調べ始めた。楓はキーボードやモニターの付いた机を調べ、

その間に真名は付近にある機械を調べていた。

真名「…ん？」

その時、彼女はあるカプセルを調べていた。彼女は周囲を見回すと、部屋には三つのカプセルがあった事に気付く。

しかし彼女が調べていたカプセルだけ、ガラスが割れていた。他の二つのカプセルは大丈夫だったが、

その内の一つは以前から開きっ放しになっていた。真名は手前にあるガラスの割れたカプセルを、他のカプセルに比較してみた。

真名「………妙だな……。他のカプセルとは違い、このカプセルだけガラスが割れている……。しかもこの破片はまだ新しい……。

通常このカプセルが長い間からこの状態のままだったら、破片やカプセル内は埃で溜まっているはず……。

でもどれも埃が全くない……。つまりここ最近、このカプセルの中にいた何かが出たとしても言うのだろうか？

だがこのカプセルの中に何がいて、何のために使われたのだろうか…？)

その時、突然部屋中のコンピュータ画面が付け出し、それに応じて真名は驚きに立ち上がった。

真名「な、何だ!？」

彼女は戸惑いながら、机の前にいた楓の方へ振り向いた。

楓「アハハ…どうやらこの機械、まだ動くようござる。」

その間に真名は楓の所まで駆け付けた。

真名「お、お前どうやって…!？」

楓「いや、ただ知らず知らずにボタンを押したら、急に起動し始めたのでござる。でも…なぜだか知らぬが、

今日の拙者は運が良いでござるな! ニンニン」

真名「そうかもしれないな…。だが機械がまだ動けそうで良かった。これなら、

ここがどこなのか調べる事が出来るかもしれないな。楓、

これを使って、

世界地図のデータか何かを出してみてくれないか?」

楓「世界地図のデータ? うう…ん…分かった、やってみるでござるよ。」

余り自信がなさそうにも、楓は二本の人差し指を使って、ゆっくりとキーボードのボタンを適当に押してみた。

ボタンを押す事によって、様々なデータが刻まれたウィンドウが画面に映し出すが、どれも違うデータばかりであった。

それぞれ映し出すウィンドウは、時にはエラーメッセージ、時にはバー状や円形状のグラフ、

時には暗号のような謎の文字や数字、そして時にはCGで出来た設計図であった。その設計図の中には、

一体のロボットのCG画像が映し出していた。そのロボットは長い手足に球状なボディー、右手にブラスターに、

背中にブラスターパネル、更にボディーの右部分に『102』と書

かれてあった。設計図の名前によると、ロボットの名前は『E-102』と書かれてあったが、今の二人にはそれをじっくり見ている場合ではなかった。楓はどのボタンが世界地図のデータを映し出すのか分からないため、時間を掛けながら適当なボタンを押し続けていたが、先を急ごうとしている真名は逆にイライラしていた。

真名「何そんなに時間を掛けてるんだ？早くしないと日が暮れるぞ？」

楓「急かさないでござる。拙者はお主とは違って、こつ言う機械物にはさつぱりで…。」

真名「はあ？お前中学生なのにこつ言う物が使えないのか？」その言葉を耳にした楓は、嫌気をさした。

楓「…言っておくでござるが、忍者は機械など使わないのでござるぞ。特にお主とは違い、忍者は自動的ではなく、

手動的な武器を使うのでござる！拙者は手裏剣を使うが、お主は拙者が銃を使う所など見た事もないでござろう！」

楓の予想外の反発を聞いた真名は、自分の手を額に当て、再びため息を吹いた。

真名「分かった…さつきは悪かったよ。ただここはどこなのかと言う事を知るのに急ぎたくてね…。分かった、

私は大人しくしてるから、お前は適当に時間を掛けてやれ。

だが、出来れば早くな。」

楓「謝罪成立でござる！」

彼女は笑顔で頷いた後、早速作業に戻った。楓が正しいボタンを押すのに時間は掛かったが、多少イライラしていた真名は、出来るだけいつものように冷静にしようとしていた。

…楓が正しいボタンを探すのを苦戦しながら数分が経ち、彼女があるボタンを押してみると、

画面から大きなウィンドウが映し出した。楓と真名がそのウィンドウに見上げると、それが世界地図のデータだと分かった。

楓「おお、もしかしてこれが世界地図かもしれないぞござる！」

真名「でかしたぞ、楓！ どうやらお前、本当に今日ついてるかもしれないか！」

彼女は楓の肩を叩きながら褒めた。

楓「いやあ……。」

彼女はテレながら笑い、真名と共にその地図を見る事にした。だが、その地図に何か違和感がある事に気付き、

二人は愕然とした。

真名「なっ……！？」

その地図によると、各島と大陸の名前と形は、真名と楓の知っている範囲から遥かに違っていた。大陸は二つもあり、

『キノコワールド』と『モビウス』と言う名前であった。日本はどこにも見当たらない。そのため、

この地図を目の当たりにした二人の少女は、混乱の同時に啞然としていた。

楓「な、何なんでござるか、この地図は……！？」

真名「……わ、分からない……。こ、この地図、見た事もない……いや、これは私達が探している地図ではないぞ！？」

楓「キノコワールドに……モビウス……？ 聞いた事もない大陸でござるが、その代わりに日本含む、

拙者達が知っている国がどこにも見当たらないでござるぞ？」

二人が混乱している間に、真名は一人だけ静粛に何かを考えていた。

真名「……だがこれで確信したような気がする……。ここはミスティックラインとか言う謎のジャングルだけではなく、

ここは明らかに私達の世界ではない。もちろん、魔法世界

でも……！」

楓「どう言う意味でござるか？」

真名「以前私達が訪れた魔法世界は、スタークリスタルを使ったアーニヤの思考によって生み出された、現実世界の鏡面世界だ。

つまり、例え違う生物や環境に囲まれた異なる世界でも、二つの世界には同じ場所があった……ただ、

魔法世界だけは多少廃墟になっていたがな。そしてもし私達が再び魔法世界にいるのなら、

この地図は現実世界と同じ地図になっているはず。しかし、全く違うと言う事は、

私達は現実世界でも魔法世界でもないと言う事になる。しかもそれだけじゃない……

あのビッグと言う巨大な紫色の猫、外にあった遺跡、そしてこの廃研究所……

私達がこれまで現実世界で行った機密任務の中で、あのような物は私達の世界には存在しなかった……

もちろんもしここが魔法世界だとしたら、例えアーニヤの想像力でも、あのような物を生み出す事なんて出来ないはず……

私の予想では……突然空間が歪み始めたあの時……自分達は違う世界に飛ばされたのかもしれない。

なぜそうなったのかは分からないが、あの歪みが何らかの影響で私達を……。」

真名が説明し続きながら楓の方へ振り向くと、楓を見ただけで何か不満を感じたのか、途中で立ち止まった。

そんな楓は、ただいつものようなポーカーフェイスで、真名の顔を見続けていた。その後、真名は自分の腕を組みながら、

楓に向かってこう言った。

真名「……私の言った事、理解しているのか？」

楓「ええ……と……お主が言いたいのはあ……こ

こは拙者達の世界ではなく、別の世界だ……

「と言つ事でござるな？」

彼女がそう言つと、真名はまるで癖になったかのように、再び手を額に当て、ため息を吹いた。

真名「……………どうやら分かつていないようだな……。」

楓「失敬な！ 拙者にはちゃんと分かつたでござるよ？ 少しだけ……。」

だが、楓と真名が地図の事で夢中になっている間に、一階の扉が自動的に開き、そこから何かがゆつくりと出て来た。

下の階に包まれた暗闇のせいでその姿は見えないが、足音が何やら機械的な物であつた。

だが二人の少女は地図の事に関して取り込み中だつたため、その謎の人物の存在に気付かず、もちろん足音も聞こえていなかった。

楓「さて……………この世界は拙者達の世界ではない事が分かつた以上、これからどうするつもりでござるか？」

真名「分からない……………だが今出来る事は、ここを出てジャングルを抜け出すしかない。出口がどこにあるか、覚えているか？」

楓「もちろん、ちゃんと頭の中に刻み込んだでござるよ！ 一旦ここから出てジャングルに戻れば、

出口探しなどお茶の子さいさいでござるよ！ ニンニン」

『残念ナガラ、ソノ必要ハナイ……。』

楓・真名「！？」

二人は謎の声を聞こえた方向へ振り向くと、下の階から二本のミサイルが二人に向かって飛んで来た。

楓・真名「うわあっ！？」

突然の先制攻撃により、楓と真名は急いでその場から離れた。そして緊急回避した後、ミサイルが機械に直撃し、爆発した。そのため複数の機械が激しい損傷を負い、無事回避出来た二人の少女は、ミサイルが発射した方向へ振り向いた。すると、その謎の人物が暗闇の中から少しずつ姿を現した。その姿は、全身真っ黒な鋼鉄ボディで、黄色く光る不気味な目、そして赤い鋼鉄の両足に車輪の付いた、まるでソニックと同じ姿をした大型のロボットであった。

??? ♪ヘッヘッヘッ………サスガニ俺ノ旧製作者ガ作り出シタコ  
ノ廃基地ニ招カザル客ガ来ルトハ思ワナカタガ…

大歓迎ダヨ…。オカゲデ俺ガコノ血ニ飢エタ手デ誰カヲ  
殺スノヲ楽シミニシテタンダカラナ!! ♪



## 第6話 起動、封印された戦闘兵器

………ミスティックルーンのジャングルに迷い込んでいた楓と真名。そのジャングルに隠された謎の廃墟に訪れた二人は、突然謎のソニック型のロボットと対面する。

「????」ヘッヘッヘッ………サスガニ俺ノ旧製作者ガ作り出シタコ  
ノ廃基地ニ招カザル客ガ来ルトハ思ワナカッタガ…

大歓迎ダヨ…。オカゲデ俺ガコノ血ニ飢エタ手デ誰カラ  
殺スノヲ楽シミニシテタンダカラナ!!!」

楓「なつ!?」 ロ、ロボットでござるか!?!」

真名「な、何者だ、貴様は!?!」

「????」フンツ! 俺ガ誰ナノ力知りタイノ力…俺ガコレカラ貴様  
ヲヲ蹴散ラスト言ウノニカ…?」

謎のロボットは嘲笑うかのように二人に挑発した。

「????」イイダロウ…貴様ヲノ最初ト最後ノ対面トシテ、特別ニ自  
己紹介デモシテヤロウ。俺ハ「メカソニックMK-IV」!

滅殺ト破壊ノタメニ作ラレタ、そにつく型ろぼつとノ4号  
機ダ!!! ソシテ貴様ヲコソガ、

俺ノ最初ノ被害者トナルヨウダナア…。」

楓「最初の被害者…? あのポンコツメカ、さつきから何拙者達に  
変な役名を与えようとしてるんでござるか?」

真名「さあな…だが、さすがに私達の手助けにはなりそうにも見え  
ないな!」

メカソニックIV「ハッハッハッハッ…ダガコンナ所デ誰カト会ウ  
ノハ久シブリダナ…。」

俺ハ長イ間カラココノがらくたかぶせるノ中ニ、

誰ニモ相手サレズニ長ラク封印サレテイタガ……

ソノ時ハモウ終ワツタ！！ 俺ヲ起動サセタ反乱ノ仲間達ノオカゲデ、俺ハ永イ眠リカラ覚マシ、

俺ノ前ニアル物全テヲ破壊シ尽クス準備ガ出来タ

！！ モチロン、

俺ノ最初ノ標的たげつとトナル貴様ラダケジャンナイ……

俺ヲコンナ寂レタ廃基地ニ見捨テタ、

俺ノ主含メテナア！！<sup>ㄱ</sup>

真名(なるほど)………こいつがあのかプセルの中に入っていたのか  
…。

彼女は背後にある壊れたカプセルの方を横目で見ながらそう思った。

真名「で、貴様は私達に何の用だ！？ なぜ貴様の製作者うみのおやが貴様を

ここに捨てた！？」

メカソニツクEV「何ダア？ 何レニ殺サレルト言ウノニ一々質問スルノカ？ マアイ…マズ最初ノ答エハ簡単ナ事…

貴様ヲ殺スタメニ用ガアルノダ！！ ソシテ次

ノ答エハ…俺ハ旧主ノ目障リナ障害物ト呼バレテイル、

アル敵ヲ倒スタメニ作ラレタ。ダガソイツハ俺

ヲ起動サセルヨリ、他ノ計画はつごみかくニ進ム事ニシタ。

ソシテコノ基地ガソノ敵ニ襲撃サレタ時、旧主ハ

俺ヲ回収スル事モセズ、マルデ不要ナ飾リ物ノヨウニ、

俺ヲコノ基地ト供ニ、敵ニヨツテ壊サレタるぼつ

と達ノヨウニ捨テラレタ…。

ソレ以来カラ俺ハ誓ツタノダ………最初カラ記入

サレテイタぶるぐらむ通り、

俺ノ敵ヲ徹底的ニ排除スル事ダケジャンク、無意

味ニ俺ヲ生ミ出シ、

ソシテ忘れ去ラレルタメニ俺ヲ捨テタ俺ノ旧製くりえー作

者たニ復讐スル事ヲナアツ！！！！<sup>ㄱ</sup>

楓「何なんでござるか、あのロボットは…？　どうも落ち着かせる必要があるでござるよ。」

真名「だが元製作者への怨みは私を殺したがる事とは何の関係はなさそうだが…。　とりあえず、

貴様は貴様を捨てたその元主に復讐したがる事は分かったが、だからと言ってなぜ私達を始末しようとする！？

関係ない者を殺せば、貴様は快感的に思うとでも言うのか？  
メカソニックE.V.『俺八戦闘用るぼつとダ！　殺傷ト破壊ノタメニ作ラレタノダ！！　ソシテ長イ年月カラ目覚メタ俺八、

初メテソナ貴様ヲ殺シタクテ待チ切レナイノダ！　貴様ラガ最初ノ客人ト言ウ事デ、

早速ばーていデモ始メヨウカ？　俺曰ク…血祭りヲナア！！！！』

その後、メカソニックE.V.は真名と楓に向けて両腕を上げ、その両腕をマシンガンに変形させ、

強力な銃弾を二人に向かって連発した。

楓・真名「うわあっ！？」

二人は横に飛び込みながら攻撃から回避し、追跡する銃弾から逃げ出し始めた。

そのため多くの機械が攻撃によって破壊されてしまい、その間にメカソニックE.V.は破壊を楽しんでいるかのようになり、

狂喜に笑い出していた。　攻撃を避け続ける二人は、ついに上の階から下の階に飛び降り、メカソニックE.V.の前に立ち上がった。

楓「どうやらあの狂気なロボット、本気で拙者達を殺そうとしているようではござるな！

さすがに茶々丸殿のように優しくないでござるな！」

真名「茶々丸とは違うのは当たり前だ！　奴は人型ではない上に気が狂ってんだぞ！」

そう言う問題ではないにもかかわらず、真名はそう答えた。だがその後、彼女は二丁拳銃を取り出し、再び楓に話し掛けた。真名「だが奴がそんなに私達を殺ろうとしているのなら、こちらも容赦なく倒すしかない！ 楓、準備はいいな!?」

楓「もちろんでござる!」

彼女もそう言いながら、クナイを取り出した。

メカソニックE.V.『何ダア？ 俺ト殺リ合オウツテノカ？ イイダロウ、掛カツテ来イヨ！ 俺ガ貴様ヲヲ軽ク、

ユツクリト髑リ殺シテヤロウ……………或イハ俺ノ場

合……………派手ニ素早クナア!!』

その後、彼は両足に付いた車輪を使い、真名と楓に向かって突撃した。しかも巨体にも関わらず、

予想以上の猛スピードで発進した。それに対して思わず驚いていた真名は、

自身の前にメカソニックE.V.が既に近付いていた事に気付く暇もなかったぐらい、身動き出来なかった。

真名「なっ…!?!」

すると、メカソニックE.V.は素早く真名に強力なパンチを食らわし、物凄い勢いで飛ばされた彼女は鉄の壁が凹むほど激突した。

そして床に落ちた真名は、強力な攻撃により受けた激痛を感じながら、苦しむかのように激しく咳き込んだ。

その同時に衝撃の影響で、彼女の口から血が出来た。

真名「ぐっ…かはっ…!!」

楓「真名!!」

メカソニックE.V.『次ハ貴様ノ番ダ!!』

彼がそう言うと、自分の鉄拳を楓に向けて上げた。それに気付いた楓は、自分の両腕でカバーしながら、

敵の攻撃をブロックした。その後二人は部屋全体に回りながら、

素早いパンチとキックでお互いの攻撃にぶつけ合った。

だがメカソニックEⅤは高速で楓の背後に移動し、強力なパンチで楓を鉄の床まで叩き飛ばした。

楓「ぐあっ!!」

床に転げ落ちた楓は、体に激痛を感じながら、ゆっくりと立ち上がった。

楓「くっ……どうやら本格的に拙者を怒らせたようござるな……」

……ならば、

こっちも本気で行かせてもらつてござるよ!! 『影分身の術』

!!」

彼女が術を唱えると、自身から16体の影分身を作り出し、メカソニックEⅤに襲い掛かった。だが、当のメカソニックEⅤは、その幻惑的な攻撃に全く戸惑っていなかった。

メカソニックEⅤ『何ダコレハ？ くるーん製造力何力カア？ フンッ！』

自分ノ偽物ヲ作ツタグライデ俺ヲすくらつぱニシ

ヨウト言ウンナラ……」

その間に彼のハイテクな目線から、分身の中から本物の楓を探すために標準カーソルを起動させた。

そしてそのカーソルが本物と思われる楓にロックオンした時、彼は次のようにこう言った。

メカソニックEⅤ『モットましナ技ヲ使ウンダナ!!』

彼がそう言った後、彼のハイテクな目から黄色いレーザーを放ち、楓に直撃した。

楓「ぐああああっ!!」

その攻撃の威力が強かったためか、楓の体全体に大きな激痛を感じた。その激痛が原因で影分身は一瞬に消えてしまい、

彼女は床に倒れた。

真名「か、楓……!!」

彼女が楓の名を叫びながら、痛みを感じながらもゆっくりと立ち上がった。

楓「うぐっ……ど、どう言う……事で……ござるか……!!? あ奴はどうやって……拙者が本物だと……」

わかったんで……ござるか……!!? 『影分身の術』は………幻影ではなく……生身の分身を生み出す……

特殊型の忍術の……で……ござる……!! 実体を探すのに……とても難関の……で……ござるぞ……!!」

真名「くっ……この鉄屑メカがあ……!!」

メカソニックE.V.の残忍な攻撃に対して怒り始めた真名は、二丁拳銃でメカソニックE.V.に素早く連発した。

しかし全ての銃弾は鋼鉄の敵には効かず、掠り傷すら残らないまま弾き飛ばされた。

真名「なっ……!?!」

自分の攻撃が無効だった事に気付いた真名は、思わずショックに愕然とした。

メカソニックE.V.『ケツ! サツキノ攻撃八何ノツモリダ? 安ッポイおもちゃノピすとるデモ使ッテルノカ?』

残念ナガラ痛ミモ痒ミモ感ジナイネ! ソンナ二本物ノ痛ミヲ感ジタイノナラ………□ヲ大キク開イテ、

コイツデモ食ッテロ……!!」

その後、彼のマシンガンアームズはロケットランチャーに変形し、二つのミサイルを真名に向けて発射した。

真名「うわっ……!!」

彼女は素早くそのミサイルを回避するつもりで横へ飛び込んだが、壁に激突したミサイルが爆発し、

真名はその爆風によって飛ばされた。

真名「うわああああ……!!」



わからないと思うでござるが………まあ、

確かに何も引かぬよりはマシでござるな！ 余り強くはないが、行くでござる……！」

メカソニックE.V.『今度八何ダ、仮装ばーていカア？ 言ツタハズダ、

貴様ラノクダラナイ努力ハ俺ヲ笑ワセル事シカ出来ナイトナ！ ダガ、

手ニ殺ロウゼエ……！」  
セツカクばーていヲヤツテイルノダカラ………派

その後、彼は再び猛スピードで真名と楓に襲い掛かるが、二人は素早くジャンプで回避した。

真名「今度は貴様がこれを食らう番だ……！」

楓「そしてこれが拙者達を痛め付けたお勘定でござる……！」

真名は再び二丁拳銃を連発し、楓は巨大な手裏剣を敵に投げ付けた。メカソニックE.V.『フウンツ……！』

だが、メカソニックE.V.は腕の一振り、全ての攻撃を軽々と弾き飛ばした。

楓・真名「なっ……！？」

メカソニックE.V.『ハツハツハツハツ……！ クダラン、実ニクダラナ過ギル……！ 例工違ウ姿ニ変身シテモ、

貴様ラノ威力ト努力ハ全然変ワツテナイナ！ ヤハリ貴様ラノヨウナ愚者ハ、

俺ヲ笑ワセタリ呆レサセル事シカ出来ナイノダナ……！ テツキリ俺ヲ楽シマセテクレルカト思ツタガ、

ドウヤラ期待外レナ上ニ時間ノ無駄ノヨウダツタナ……！」

真名「バカな……カードの力を使っているのに、それでも効果がないのか……？ 一体あのロボットはどれだけ強くて速いんだ……？」



楓「どうやら『コスプレカード』だけでは力不足でござるよ！ なぜなら普通の時とは余り変わってないように感じるし……」

「ここは一旦元に戻って、もう一度引いてみるでござるか？」

真名「いや、ダメだ！ そんな事したら無駄な体力を消耗してしまっただけでなく、

間違つて『スカカード』を引いてしまったら、命取りになってしまう！ しかもこんな状況下でカードを再発動させたら、

余計な隙を出してしまう！ 出来ればこの状況で余計な危険から避けたい……！」

楓「くっ………お主の言う通りでござる……。特に『アーマーカード』を引き抜く確立も低いでござるからな……。」

「ならどうすれば………？」

その時、彼女が一時右手をポケットの中に入れると、何かに気付いた。

楓「………どうやら今日の拙者は本当にツイてるでござるよ！」  
突然喜び出した彼女は、真名に小声で話し掛け始めた。

楓「真名！ しばらくの間、お主の銃で奴の目を反らしてくれないでござるか？ こっちには策があるでござる！」

真名「策！？ それって何だ!？」

楓「説明は後でござる！ とにかく相手にしてほしいでござる！」

真名「………分かった。だがいい物だといいいけどな、さもないと私達全員袋のネズミにだからな！」

彼女が楓の作戦に賛成した後、彼女は再び二丁拳銃で素早く連発した。だが当然の如く、命中はするも、

全ての攻撃は弾き飛ばされ、メカソニックE.V.は無傷でいた。しかし、そんな彼は珍しくも真名の攻撃に感心していた。

メカソニックE.V.『今度八何ダ、射撃ノ練習力？ 以前ヨリ八少シマトモニタツタカモシレナイガ…ソレデモ効力ナイネエ!!』

その後、彼は猛スピードで真名に攻撃を仕掛けるが、真名は両腕で

敵の攻撃を素早くブロックした。

そして二人は素早いパンチとキックでお互いにぶつけ合うが、真名はメカソニックE.V.の強力な攻撃に耐え切れず、逆に彼女の両手両足に痛みを感じ始めた。

メカソニックE.V.『ハッハッハッハッ！　ドウシタドウシタア！？　貴様ノ程度ハコンナ物カア！？』

真名（くっ………何てパワーだ……！　肉弾戦でも奴にダメージを与えないなんて……奴は無敵か！？）

楓「よし、真名！　今すぐ離れるでござる！」

彼女が真名の真上から飛び上がりながらそう言った。

楓「『影分身の術』……！」

そして彼女は再び術を唱え、再び16体の影分身を作り出し、メカソニックE.V.に襲い掛かった。

メカソニックE.V.『ハッ、バカゲテル！！　貴様ハ同ジ手段デコノ俺ヲ倒ソウトデモ思ツテルノカ？』

ナラクタバツテ考工直スンダナア……！」

その間に彼の視線から再び標準カーソルを起動させ、本物の楓に口ツクオンした。そして彼は目から強力なレーザーを放ち、

今度は急所に命中したため、楓に致命的なダメージを与えた。

真名「楓え……！」

過激的な光景を目の当たりにした真名は、思わず楓の名を大声で叫んだ。

ポオン……！！

しかし、楓の影分身が一斉に消えると、彼女自身も消えてしまった。

真名「なっ……！？」

メカソニックE.V.『何ッ！？』

突然の予想外な展開に、二人は思わず驚いていた。

真名「か、楓が…消えた!？」

メカソニツクIⅤ『バカナ!? ドウヤツテ…!?!』

彼は初めてながらも、多少困難になりながら周囲を見回した。

メカソニツクIⅤ『ドコダコノ虫ケラガア!!! 隠レテナイデ姿ヲ見セロオ!!!』

楓「拙者はここでござるよ! はあっ!!!」

その時、突然メカソニツクIⅤの背後から楓が出現し、楓は初めて敵にダメージを与えたかのように強く蹴り飛ばした。

メカソニツクIⅤ『グハアッ!?!』

真名「なっ!?!」

二人は倒されたと思われた楓が突然姿を現した事で驚いていたが、真名はそんな楓がまだ無事であった事を安心に思い、

メカソニツクIⅤは初めて混乱していた。

楓「もつと欲しいでござるか!?! なら特別に拙者の秘伝のマツサイジでもやって差し上げるでござるよ!!!」

その後、彼女は再び素早いパンチとキックで怯んだメカソニツクIⅤに攻撃し、

その後強力な回し蹴りでメカソニツクIⅤを蹴り飛ばした。

楓「まだ終わってないでござるよ!!! それえっ!!!」

次に彼女は破壊された機械の中から長いコードを取り出し、それをメカソニツクIⅤに投げ付き、巻き付かせた。

メカソニツクIⅤ『グッ…!?!』

楓「次はお主を涼ませてやるでござるよ!!! せいっ!!!」

その後、彼女は手に持っていた扇子を強く振り出し、風を操りながら巻き付かれたメカソニツクIⅤを上空へと飛ばした。

メカソニツクIⅤ『ヌオオッ!?!』

楓「真名!!!」



アノくるーん技デ……ドウヤツテ俺ヲ……？

楓「簡単でござる……これを使ったのでござるよ！」

彼女がそう言いながら、ポケットの中から自分の名前が書かれた、人の形をした白いお札を取り出した。

横にいた真名はその札を見た事があるのか、楓がそれを取り出した瞬間に啞然としていた。

メカソニツクEV『ナ…何ダ…ソレハ……タダノ…紙切れ…デハナイカ…！？』

楓「いや、これは『身代わりの紙型』と言う、東洋の呪術を込めた特殊の紙なのでござる。この紙に自分の名前を書くと、

自分の分身を作り出す事が出来るのでござる。しかし、影分身とは違い、この分身は本当の生身となり、

どんな機械でも簡単に見分けが付けなくなるのでござるよ。

お主が奇妙な機能を使ったせいで、

『影分身の術』は破れてしまったので、拙者は『身代わりの紙型』を使ってお主を惑わせようとしたのでござる…

簡単に本物の拙者を見付けないようにでござる！しかし先程言ったように、護符を発動させるには名前が必要でござる。

しかしその場で書いたらお主に見付かると思ったから、隠れながら発動させる必要があったのでござるよ。

最初はちよつと焦ったでござるが、上手く行ってよかったでござるよ！」

メカソニツクEV『ナ…ナルホド……ダカラ貴様ハ……自分ノ作戦ヲ俺ノ前カラ隠スタメニ……』

仲間ヲ利用シタノダナ……？

楓「近いが、一つだけ間違ってるでござる。拙者は友を利用したりはしないでござる！真名は拙者にとって大切な友であり、

仲間でござる！そして拙者達は共に勝ったのでござる！そうでござるな、真名？」

真名「…まあ…詳しい事を私に説明しなかったので、チームワーク

で行ったのかは分からんが、多分近いだろう。」「  
彼女は頬を掻きながらそう思った。

真名「しかし、お前から一つだけ聞きたい事がある。その護符、  
一体どこで手に入れ、誰から貰ったんだ？」

楓「ついこの前からキャンパス付近にある森で修行した時からでござるよ。お主が気付かなかっただろうが、

この護符は神鳴流の呪術師が作り出した物でござる。修行中に被害的な事態が起きた場合に、刹那から貰ったのでござる。

それまでに長い間ポケットの中に入っていた事を忘れてたでござるよ。」

真名「ならなぜ最初からそれを私に伝え、使わなかったんだ!？」  
楓「だから、忘れてたのでござるよ!！」

メカソニツクエィヴ「……………フツ……………ヘッヘッヘッヘッ……………」

その後、彼は不気味に笑いながら、ゆっくりと立ち上がった。それに気付いた二人の少女は、彼の方へ振り向いた。

メカソニツクエィヴ「……………友……………ダト……………? フツフツフツ……………  
クダラン……………無意味ナ言葉ダ……………」

所詮友ト言ウノハ……………役ニ立タヌがらくたナ道具同然ニ利用サレル物ニ過ギン……………」

人間ト言フ虫ケラトハソウ言ウ物ダ……………」

楓・真名「何っ!？」

二人は敵の悪意のある発言に対し、怒り出した。そしてメカソニツクエィヴは、そんな二人を睨み付きながらこう言った。

メカソニツクエィヴ「……………イイダロウ……………貴様ラガコノ俺ヲ倒セタ事ヲ褒メテヤロウ……………。ダガ……………戦イハ……………」

コレデ終ワツタ訳デハナイ!！」



楓「しかし…それだとお主も拙者達と供に死ぬ事になるでござるぞ？ 自分がまだここににいるのに全ての出入り口を封鎖しては、

意味がないでござるぞ？」

メカソニックE.V.『確力ニ…貴様ノ言ウ通りダ…。俺ガマダココニイルニモカカワラズ、全テノ扉ヲ封鎖シテハ、

イカニモ無意味デ愚力ナ行為ニ過ギナイダロウ。

ツマリ、俺ハ貴様ラトコノ基地ト供ニ塵トナル訳ダ…。」

彼はそう答えるが、その態度には戸惑いがなく、異様にも冷静であった。

メカソニックE.V.『ダガ、ソノ必要モナイ…。』

そして彼が指を鳴らした時、背後から黒い空間の扉が開いた。それを目の当たりにした楓と真名は、思わず驚いていた。

真名「なっ…！？ あ、あれは…扉ゲイトのつもりか…！？」

楓「それって…あ奴は魔法が使えるのでござるか！？」

メカソニックE.V.『ソウダガ…コレハ魔法デハナイ。コノ扉ゲイトハ亜空間ニヨルえねるぎーニヨツテ作ラレタ物デ、

コノ世界ノドコヘデモ行ケルヨウニナルノダ。

モチロン、ココカラ外ヘモナ。

全テノぷるぐらむヲこんとろーる出来ル機能ト供

ニ搭載サレテイタヨウデネ……………」

コレモ俺ヲ反乱軍ニ入隊サセ、結成シタ同志達ノ

オカゲダヨ。』

楓「反乱軍…！？」

『ファイナルエッグ、自爆マデ…2分！』

メカソニックE.V.『サテ、モウ直グココガ貴様ラノ墓場ニナル前ニ、俺ハソロソロお暇シヨウ…。』

本当ハ貴様ラガ生キタママ燃エテ、ソシテコノ屑



基地ト供ニ埋モレテ死ヌ様ヲ見タイ所ダガ、

俺ニハ新シイ主ト会イニ急ガネバナラナイノデネ  
…。ソノ分貴様ラノ葬式モ開カレナイダロウ…

特ニアノ小サイ教師ヲ含ム貴様ラノ友達トヤラモ、  
貴様ラガ既ニ死ンダ事スラモ氣付カナイダロウ…。

貴様ラハ戦イニ勝シタト言ツテイタガ…最終的ニ  
ハ、俺ガげーむニ勝ツタ事ニナルナ。□

真名「小さい教師…：…ネギ先生の事か！？まさか、ネギ先生や  
他の連中もこの世界に…！？ 貴様、なぜ先生の事を…！？」

メカソニツクEV『フンツ！ 貴様ラノクダラン質問ニ答エル必要  
ナドナイ。 寧口時間ノ無駄ダ。 ソンナ物ハ地獄ニ落チテ、

悪魔力死神ニデモ聞イテミルンダナ。 マア、ち  
やんすガアレバナ。 ソレマデニ、安ラカニ死ヌンダナ！

ハアー…ハッハッハッハッハッハッ…！！

！！！  
そして彼は嘲笑いながら、黒い扉ゲートの中に入り、闇の中へと消え去っ  
て行った。

真名「待てっ！！」

彼女は敵の後を追おうとするが、扉ゲートが閉じ、空中に消えてしまった。

その後、真名はトンネルブリッジの方へ繋がる出口へ駆け付けたが、  
憎むべき敵の言う通り、扉が硬く閉ざされていた。

もちろん何度も開閉ボタンを押してみたが、効果はなかった。そ  
して最後に二丁拳銃で扉を壊そうとしたが、

余りにも頑丈過ぎてビクともしなかった。

真名「くそっ！！ 全然効いていない！ 特に魔法でもビクともし  
ないなんて…！」

その後、彼女は二階でコンピュータを弄っている楓の所へ駆け付け  
た。

真名「楓！ どうかしてこの自爆機能を停止させ、全ての出口を開けられないか！？」

楓「ダメでござる！ 殆どの機械はさっきの奴に破壊されてしまったでござる！ 大半はまだ動けるが、

何を押ししても画面に『エラー』としか表示されないでござる！ あ奴め、もしかしたら拙者達の知らぬ間に、

全機械のパスワードか何かのコードを全部切り替えたのでござるよ！」

真名「脱出口は絶対どこかにはあるはずだ！ 何とかならないのか！？」

ポオン！！

しかし、体力を全て消化してしまった二人は、元の学生服に戻ってしまった。

楓「…すまぬ……………どうやら力と…拙者の運が…尽きたようで…ござる……………」

体力を全て使い果たしてしまった二人は、動く力を失ってしまい、そのまま床へ倒れてしまった。

二人のお腹は空腹の際に鳴り出し、酷く疲労していた。 真名自身は立ち上がるうとしたが、やはりダメであった。

真名「ぐっ……………ダメだ……………空腹のせいで…少しでも動けない……………」

楓「ああ、真名……………思えばお主とは短い間だったでござるが…」。 真名「バカ！！ こんな時に縁起のない事を言うな！ まだ諦めちゃいけない……………絶対に生きて…」

ここから脱出してみせる…！！」

『ファイナルエッグ、自爆マデ…1分！』

その後、建物全体が激しく揺れ出し、まだ動けそうだったコンピュータも途切れ始めた。

更に壊れた機械から激しい電流が飛び散り、二人の少女達はただそこで倒れたままだった。しかし、

二人は今でもここから脱出出来ると信じるほど、希望を捨てた訳ではなかった。だが時間はどんどん少なくなり、

正に絶望の時間が近付こうとしていた。

しかし、出口の方から何かが叩く音がした。その音はだんだん近付いて来て、

まるで封鎖された扉を一つ一つ破壊しているようであった。楓と

真名は、その音に気にしながら、

ゆっくりと出口の方へ振り向いた。

楓「な…何の音…でござるか………？」

真名「…さ…さあ………でも…こっちに近付いているような………

？」

そして、出口が突然破壊され、中から青い光に包まれた、高速に回転する球体であった。

楓と真名はその謎の物体の前に愕然としたが、その球体は二人の周囲に、

青く光る残像を出しながら光速で渦巻いていた。

楓「こ、これは何なんでござるか!？」

真名「そんなの私に聞いても知る訳ないだろ!!」

その後、謎の球体が楓と真名の手を掴み、破れた出口の方へ高速に走り出した。

当然ながら二人はその球体の存在と行動に混乱していたが、ただそれが二人を脱出させようとしている事だけ理解していた。



彼がそう言いながら二人に振り向くが、彼女達を見た瞬間、何かに気付く。彼は頭を下ろし、

啞然とした少女達をじっと見ながら、こう言った。

ソニック「…その服……………もしかして、ネギの友達か？」

真名「ネギ……………お前、ネギ先生の事知ってるのか！？」

彼女だけでなく、楓までも驚いていた。

ソニック「Hey！<sup>ヘイ</sup> 知ってるって事は、Yes<sup>イエス</sup>って言う意味だな！

ならハカセと言う女の子とカモって言う小動物も知ってるんなら、その二人は今ネギと一緒に、

俺の相棒ントコの研究所にいる。でもやっとこのジャングルでネギの友達を見付けたぜ！

あいつの話によると、友達全員同じ服を着てるって言うからさ、

そんなあんた達がネギの友達だつて言う事が分かったよ！  
もうあんた達をこんな寂れたジャングルで探し回るのに、

一日中掛かったんだぜ？ 別に迷ってた訳でもないけどさ。でもいい事が起こったよ……………

ビッグが同じ服を着た二人の女の子が家にやって来て、  
出口への道を教えてあげたって言うからさ。

でも誤って違う道を教えたらしく、最終的にはどこへ行ってしまったのか分からなかったみたいで…。」

楓「…お、お主…ビッグ殿を…存じているのか…？」  
彼女はだんだん疲労を感じながらそう問い掛けた。

ソニック「Yes<sup>イエス</sup>！ あいつは俺の友達さ……………滅多に会えない奴だけだな。まっ、それより、

俺は最初からあんた達が近くにある『ロストワールド』  
って言う遺跡の中に入っちゃったのかなと思っただけど、

扉が強く閉まってたから、まさかファイナルエッグにいるんじゃないのかなと思っただけど……………

俺がここに来た時、建物が揺れてたから、何か様子がお

かしいと思っただからさ。

そこで俺は『スピンドッシュ』で………って、あんた達大丈夫か？」

彼は話を一時途絶えると、完全に疲れ切った楓と真名を見詰めて問い掛けた。

真名「………わ………悪いが………話は………後にして………ここから………出して………くれないか………?」

楓「………は………腹が減って………動け………ないで………じびる………。」  
ソニック「………Great<sup>グレイト</sup>………。」

彼はため息を吹きながらそう答えた。

…ミステイククルーイン・ティルスの工房にて

時刻は夜になり、聡美は新しい友達のティルスと共に、ティルスのパソコンを弄っていた。

彼女はティルスが作り出した珍しい科学的なプログラムを拝見していて、

そんな見た事もない機能を感じしながら画面を見ていた。

聡美「わあ〜！ これはさすがに興味深いデータですね〜！ こんなデータ、人生の中では見た事もないですよ〜！」

ティルス「気に入ってくれて嬉しいよ！」

しかし、その間にネギは、他の生徒達の事を気にしながら、一人黙々と窓の外を眺めていた。

そんな彼の肩に乗っていたかもは、心配性な相棒を励まそうとした。カモ「心配すんなよ、兄貴！ みんなは無事だと俺っちは思うッス

よ！ それに、

今ソニックの兄ちゃんは外で他の生徒達を探してるから、余計な心配をしない方がいいツスよ？」

ネギ「ありがとう、カモ君。でも、どうも収まらないんだ。今日一日中家にいたつきりで何もしてないし、

余りにも無謀だと思ったんだ。他の生徒達の事が心配で仕方ないよ…特に、アスナさんも……………」

カモ「悔しいのは分かるツスけど、今は仕方ないツスよ。納得行かないだろうが、今はここで大人しくした方がいいツスよ。」

彼がそう言った後、窓の方へ振り向いた。

カモ「…それにしても……………あの兄ちゃんも遅えなあ…？ 何やってんだあ〜？」

その後、玄関のドアからノックが聞こえ、部屋にいる全員はその方向へ振り向いた。

ソニック「Hey<sup>ヘイ</sup>テイルス！！ 俺だあ！！ 開けてくれえ！！」

テイルス「ソニック！？」

ソニックの声に気付いたテイルス、ネギと聡美は、急いで玄関へ駆け付けた。

テイルス「どうしたの、ソニック？ 鍵なら開いて……………！？」

テイルスが玄関のドアを開けると、そこには汗だくに疲労状態のソニックが立っていた。

まるで何か重い荷物を担いでいたかのように、ソニックは激しく呼吸をしていた。

テイルス「なっ…！？ ど、どうしたのソニック！？ こんなに汗かいちゃって…！ しかもすごい疲れてるっばいよ…！」

ソニック「はあ…はあ……………Hey<sup>ヘイ</sup>！ ネギとハカセもいたか…！」

Good timing<sup>タイムINGK</sup>…！！

お前達のために…ちょっと客を連れて来たぜっ…！！」

その後、ソニックは完全に疲れ切った楓と真名を引つ張り出し、二人はそのまま床に倒れ落ちた。

ネギ「龍宮隊長!!! 楓さん!!!」

彼は驚いたかのように二人の名を大声で呼び掛けた。もちろん側にいた聡美とカモ、更にテイルスも驚いていた。

真名「…ネ…ネギ…先生…か…?」

楓「ハハツ……………やっと…会えた…でござる……………ネギ…坊主……………」

二人の体力がピークに近付いたのか、両者の視界が多少霞み掛けている様子だった。

ネギ「二人共、どうしたんですか!？」

彼は心配しながら倒れた二人に駆け付くが、その間に二人のお腹から大きな音が鳴り出し、ネギ達は一瞬に驚いた。

ソニック「説明は後だ。テイルス、晩飯はもう出来たか? もし出来たんなら、こいつらにも食わせるよ。

何があつたのか分からないけど、こいつらすっげえ腹減ってるみたいだからさ。」

…台所にて

夕食の準備が出来、ネギ達は台所へ集まった。そこで楓と真名は激しいほど、素早く料理を食べていた。

二人以外の一行は、そんな二人の激しい姿を見て、啞然としていた。

だが食事中、楓と真名が食べている間に、

ファイナルエッグと言う廃基地の出来事を説明した。

テイルス「…何だって…!? 君達はファイナルエッグでソニック



とそっくりなロボットと戦ったの!？」

楓「仰る通りでございます！」

真名「私は魔法で倒そうとしたが…残念ながら、奴は何らかの力を使って逃げ去ってしまった…。奴は私達を始末するために、

基地の自爆装置を起動させ、全ての扉を封じたのだが、最終的には失敗で終わってしまったようだがな。

正直、ソニックに感謝しているよ。彼が助けに来なかったら、私達にはここにはいなかった…。  
ソニック「なあくに、当然の事をしたただけだよ！」

テイルス「でもソニック、ファイナルエッグにあったソニック型ロボットって、もしかして…？」

ソニック「さあ…多分、メカソニックって言う、俺とそっくりな姿をしたロボットだと思うな。\*以前俺がそこに行った時、

確かにカプセルの中にメカソニックらしきロボットが飾られたのを覚えてるけど、

あの時はまるで必要なかったかのように、機能が停止されてたけどな。一体誰が起動させたんだろうか…？」

\*ドリームキャスト版『ソニックアドベンチャー』、ゲームキューブ版『ソニックアドベンチャーDX』より参照。

ネギ「でも、二人共無事でよかったです！僕、今まで心配してました！」

楓「かたじけない、ネギ坊主…だが、拙者は鳴滝姉妹の事が心配でございますよ。ここに来る前は、

拙者と一緒にいたのでござるからな。」

真名「私もザジの事が心配だ。学園にいた時までには一緒だったんだが…今でも心配だ。」

聡美「私も同じく、超さんの事が心配です。無事でいられるとい

いのですが……。」

カモ「まっ、今の所姉御と楓姉さんがこっち側に戻っただけでもよかつた事だぜ、兄貴？　だが鳴滝姉妹やザジの姉さん、

もちろん姐さん、このか姉さんに刹那の姉さん、そして超含めて、後28人の生徒達を探さなきゃならねえッスからね！

全員早く見付けるにはこっちが動かなきゃならねえッスからね！」

彼は生徒達の名簿手帳を手に持ちながら、ネギにそう言った。

ネギ「そうだね……でも、それよりも、一つだけ気になる物があるんだ……。」

彼がそう言いながら、真名の方へ振り向いた。

ネギ「龍宮さん、さっきその戦ったロボットが、僕や他のみんなの事を知ってるって言ってましたよね？」

真名「ああ……どうやって君の事を知ったのかは知らないが、奴があのまま放って置いたら危険かも知れんな……。」

ネギ「そうですか……。」

その後、彼は心の中からこう思い始めた。

ネギ（一体そのロボット、どうやって僕の事を知ったんだろう……？

別に僕はこの世界では有名になった訳じゃないけど……。

きっと誰かが何か僕を奴に知らせたのかもしれない……。

でも……一体誰が……？）

……漆黒の暗い闇の中

この暗黒の空間の中に、謎の集団が揃っていた。その間に黒い扉<sup>ゲート</sup>が開き、そこからメカソニックE.V.が出て来た。彼は影の中に包まれた集団の中に入り、彼らのリーダーの前に立ち止まると、拝み始めた。

メカソニックE.V.『ヤツテ参リマシタ、我が新タナ主様……。私ハ二ツノ世界ヲ衝突サセルト言ウ終末ヲ作り出スタメ、

貴方ノ配下トナリ、トテモ光荣デアリマス。』

???『オ前ハ相当損傷ヲ負ツタヨウダナ、我が弟ヨ……。ダガ無事ココニヤツテ来タ事、ヨカッタト申シ上げヨウ。』

次ノみっしょんノタメ、オ前ヲ早急的ナ修理、及ビ更ナルあつぶぐれーどヲ加エルヨウニシテアゲヨウ。』

目を不気味に赤く輝かせる謎の人物が、背後からメカソニックE.V.にそう言った。

メカソニックE.V.『俺ヲ起動シテクレタ兄者ニモ感謝スル……。俺ヲコノ組織、

及ビ旧主<sup>くりえいた</sup>ニ対スル反乱軍ニ入隊スルヨウ推薦シタ

事デ、光荣ニ思ツテイルゾ。』

彼が背後にいる謎の人物に話しかけた後、再びリーダーに向けてこう言った。

メカソニックE.V.『ダガ遅レテ来テシマイ、マコトニ申シ訳ナイ……。先程廃基地ニテ、多少ノトラブルニ巻キ込まレマシテ……』

異世界カラ舞イ降りタ『選バレシ者』ノ仲間デアル、『物質界』カラ来タ二人ノ侵入者ニ、

コノヨウニヤラレテシマイマシテ……。シカシゴ安心クダサイ……。私ハアノ二人ヲ建物ト供ニ破壊シマシタ。

今頃ハ灰トナツテ地面ニ埋モレテイルハズ……。決シテソノ二人ハ『選バレシ者』ト合流スル事ハ

ナイデシヨウ。』

「うむ…見事に敵を始末したとは、よくやったぞ。だが残念ながら、その二人組みは『選ばれし者』によって救われたそうだ。要するに、君は奴らを始末するのに失敗した。」

メカソニックE.V.『何ッ!?!』

組織のリーダーからその発言を聞いた後、メカソニックE.V.は驚きに立ち上がった。

???『キットアノ忌マワシイはりねずみデアリ、我が目障リナ分身ノ仕業ダ、我が弟ヨ。』

奴ガ才前ノ成功ヲ邪魔シタニ違イナイ。』

「だが気にするでない………例え失敗したとしても、それは我々の計画の一つではない。君はまだ生存している上に重要だ。」

我が組織には、失敗した敗者を裁きとして始末したりはしない。意味のない行為だ。だから心配する必要はない。」

その後、組織のリーダーは立ち上がった。

「さあ…我々は自らの計画に動かなければならない。それは全ての者達の願いを叶えるべく、『六つの力』を集めるために…!」

その『力』に関して、何か情報はないのか?」

その時、一人の謎の人物が前に立ち上がった。

???『はあ〜い 僕が手に入れた情報によると、『六つの力』の一つと思われる『力』は、

今『エンジェルアイランド』にあるみたいだよ! でも、

厄介な事に…

あの『ナックルズ・ザ・エキドゥナ』とか言う番人<sup>やっ</sup>に見張

られてるみたいだからねえ……。」「

「よかろう……。ならば明日からその島に襲来し、『力』を奪還しよう。だがそのために……。僕には成功への導きとなる、

この『力』が必要となるだろう……。」「

すると組織のリーダーは、手にある石を持ち上げていた。その石は、まるで何らかの力が発動するかのように、異様に輝いていた。そう……。その石の正体は……。あのスタークリスタルであった……。。

## 第7話 二人の姫君と探検隊

……モビウス大陸・ミスティックルーインでネギと聡美が楓と真名と再会してから翌日……キノコワールド大陸では、

いつもとは変わらぬ平和な日常を送っていた。その時森の中では、一本道を歩んでいる木乃香と刹那、

そしてマリオブラザーズのマリオとルイージがいた。二人の兄弟は配管工用の道具の入ったカバンを振りながら、

元気よく歩いていた。その間に木乃香と刹那は、彼らの背後から後を付いていた。

マリオ・ルイージ「キノコ王国の配管工だ  
SMB、最高ペアさ

スーパーマリオブラザーズ

土管締まってる？ 水流れてる？

それとも全部オールブロックン？ スーパー

ブラマーズが来たぜ 直せない物はないね」

二人は独特な歌を歌い、踊りながら前を進んでいたが、後ろにいた木乃香と刹那は、その歌詞の意味を知らぬか、静かに笑いながら兄弟の明るい行動を見ていた。

木乃香「アハハ、意外とユニークな歌やなあ。」

マリオ「ああ、しかも俺達のテーマソングさ！」

だがその後、ルイージはマリオの肩を引っ張り、耳元に小声で話し掛けて来た。

ルイージ「所で兄さん……本当にあの子達を僕達と一緒に付いて来てよかったの？」

マリオ「当たり前だろ、ルイージ？ あのまま留守番させちゃ退屈になるだけだろ？」

彼女達がせっかくこの世界に来たんだから、たまには観光

させてもいいだろ？

「この世界に関して何かいい勉強になると思うし！」

ルイーダ「そりゃそうだけど……僕達仕事があるんだよ？ 観光なんてやってる暇なんてないよ？」

刹那「あのお……」。

マリオとルイーダが小声で話し合っている最中、刹那が二人に声を掛けながら割り込んで来た。

刹那「話の途中申し訳ありませんが……私達は一体どこへ向かっているのですか？」

マリオ「あつ、ごめんごめん！ 言つのを忘れてた！ 俺達は君達をこの大陸の首都へ案内しようと思ってるんだ！」

そう……人々はこう呼ぶ……『キノコ王国』へ！」

……キノコ王国……キノコワールド大陸の君主国であり、世界で一番大きな規模を誇ると言われている王国である。

その国に住んでいる類は、マリオとルイーダのような人間は少々だが、殆どはキノコ族と言う、

キノコの帽子を被った小人らしき住民達が住んでいる。その王国には、『ピーチ城』……またの名は『キノコ城』と言う、

白と赤に染めた城があり、そこには王国を収める、とても清らかで心優しい姫君が住んでいると言う。その城のふもとに、

『キノコタウン』と言う、キノコ族達が平和に暮らす町があった。

四人の人間が森から出た後、無事にキノコ王国の入り口に辿り着いた。彼らが入り口を通過すると、多くのキノコ族が集まり、

彼らに挨拶や手を振ったりなど、明るく迎えていた。だがその間にマリオとルイーダの後を付いていた木乃香と刹那は、見慣れない環境を見て、多少引いていた。

住民A「ようこそ、マリオブラザーズ！ 今日も姫様を会いに城へ行くのですか？」

マリオ「ああ！ でも今回は仕事で来てるから、終わってから会いに行く予定だよ！」

彼は頷きながらそう答えた。

住民B「おや、後ろにいる方々は誰ですか？ もしかしてえ……

…彼女お！？」

ルイーダ「なっ……！？ じよ、冗談は止めよ！ 彼女達は……えっとお……どっかから来た観光客だよ！」

彼は慌てながらそう答えた。

木乃香「わあ……ここって結構……素晴らしい感じやな？ 住民達がキノコみたいな帽子被って……

キノコみたいな家があつてえ……」

刹那「何て言えばいいのでしょうか……何気に……可愛い町ですね……」

彼女は恥ずかしがりながらそう言った。

マリオ「まあ、見慣れないのは分かるよ。でもこの王国に取ってはキノコがシンボルの物なんだ。で、

こいつらは『キノピオ』って言うキノコ族で、キノコ王国とここ、キノコタウンの住民達なんだ！

それぞれは争いのない日々を願いながら平和に暮らしてたり、姫様のお手伝いしたり、

色んな役割を持って生活してるんだ。」

木乃香「姫様？ それって……ここには本物のお姫様が住んでるつちゅう事やん！？」



彼女は目を輝かせながら問い掛けた。

刹那「そのお姫様とはどんなお方ですか？」

マリオ「えっ……？ あ、ああ……。」

彼は少々頬を赤く染めながら話し始めた。

マリオ「え、ええ……と……彼女の名前は『ピーチ姫』で……

この国を収める、キノコワールドの美しい姫様なんだ。

人々は彼女の事を偉大な君主として尊敬して……そのお……まあ、俺達は彼女を友達として尊敬しているんだ。

彼女には愛と優しさに満ちた清らかな心の持ち主で……

とても心強くて……そしてえ……

ええ……と……。」

ルイーダ「何だよ、兄さん！ 何デレデレしてるんだよ！ 何でピ

ーチ姫は兄さんの彼女だって言わないのぉ？」

彼は意地悪そうに肘でマリオの肩に打ちながらそう言った。

木乃香「ええ……?!? そうなん!？」

マリオ「な、何言ってるんだ、お前はあ!？ 彼女はただの友達だよ

!!」

彼は完全に赤面しながら弟に反発した。

ルイーダ「誤魔化すなよ、僕のかあ……わいい兄さん 僕のいない

間からいつも付き合っているのを分かっているんだよぉ？」

いつも兄さんの鼻にキスしてんしょ？ この色男お

!!」

マリオ「何だと、おまつ……!？ そう言うお前こそどうなんだよ!？

お前だって『デージー姫』とよく一緒に楽しんでるじゃな

いか!?! あれを何て言うんだよ!?!

ただぶらついてるだけかあ!?!」

ルイーダ「な、何言ってるんだよ、兄さん!？ そんなの兄さんには

関係ないだろ!?!」

彼も赤面しながら兄に反発した。

マリオ「関係大有りだあ!!」

刹那「わわっ!! ちょ、ちよつと二人共、落ち着いて…!!」  
彼女は二人の口喧嘩を止めようと慌て始めた。

木乃香「せやけど、綺麗なお姫様かあ……」

彼女は懂れているかのように、上の空でそう呟いた。

木乃香「……ん? 待てよ? ちゆう事は、ウチらはそのお姫様と会いに行くって事なん?」

マリオ「えっ? あ、ああ…まあ、そうだけど…」

彼はルイージとの県下を止めた後、木乃香にそう答えた。

マリオ「でも、今は会えない。こつちの仕事が終わってから会いに行く予定だからね。」

「あつ!! そこにいましたかあ!!」

四人が声が聞こえた方向へ振り向くと、そこには赤い水玉模様が付いた白いキノコ型帽子を被り、

青い羽織を着たキノピオが駆け付けて来た。

キノピオ「やつぱりここにいましたか、マリオさん、ルイージさん! 僕はずーっと城で待っていたのですよ?

一体何をしてたんですか?」

マリオ「やあ、キノピオ! 悪いなあ…ちよつと色々言い合ってたもんで……でもそれも見事に解決! なつ、ルイージ?」

ルイージ「う、うん…」

彼はマリオの睨み付きに引きながら、頷いた。

キノピオ「ふむう……」

彼は指で顎を撫でながらそう呟いたが、そんな兄弟の側にいる木乃香と刹那に振り向いた。

キノピオ「おやつ!? これはまたどちら様で!? マリオさん達

のお友達でしょうか？」

マリオ「ああ！ 紹介するよ！ こっちの長い黒髪の方は近衛木乃香で、こっちのサイドテールの方は桜咲刹那って言うんだ！」

木乃香、刹那：こいつはキノピオ！ 俺達の友達で、ピーチ姫の頼もしい助手さ！」

キノピオ「ようこそ、キノコ王国へ！ 初めまして、僕はマリオブラザーズとピーチ姫のアシストをしている、

キノピオと申します！ 今後ともよろしくお願いします  
！」

木乃香「あら、可愛ええなあ〜。 こちらこそよろしゅうなあ〜！」  
刹那「こちらこそよろしくお願いします。」

二人はキノピオの前にお辞儀をするが、刹那は一つだけ疑問を抱えていた。

刹那「…とは言っても、キノピオと言う名前は人名か種族名でしょうか？ なぜなら我々から見ては、

皆同じに見えるので……………」

マリオ「ああ、確かに少しだけ混乱するよな？ でもこいつだけは他のとは違うんだ。 通常の一般的なキノピオは、

帽子に付いている水玉模様と羽織の色が同じになってるんだ。 でもこいつだけは水玉模様は赤で、羽織は青なんだ。

これはあくまでも、俺達の友達で仲間である事を分かりやすくするためになってるんだ。 なっ？」

キノピオ「まあ、そうですねえ……………」  
彼は軽く笑いながらそう答えた。

キノピオ「…あれ？」

そして彼が木乃香と刹那に振り向くと、彼女達を見て何かに気付いた。

木乃香「ん？」

その間に沈黙が走り、キノピオは頭を少しだけ傾げている二人の少女を見詰め続けた。

マリオ「おい、どうしたんだキノピオ？」

キノピオ「えっ！？ あ、いや、別に、何でも…！」

マリオに話し掛けられた事に気付いた彼は、我を取り戻した。

キノピオ「そ、それより、マリオさんとルイーダさんがここにいてよかったです！ 姫様とあの口うるさい執事が困る前に、

早く仕事を終えないと行けません！ 早速城まで案内しますが…その前にこのお二方をどうします？」

木乃香「あつ、それならウチらも一緒に行くえ！ ウチは本物の城を一度でもいいから見てみたいねん！」

刹那「よろしいでしょうか、マリオさん？」

マリオ「ああ、俺は別に構わないよ？ ルイーダはどうする？」

ルイーダ「まあ…厄介な事をしなければ別にいいけど？」

キノピオ「それでは、僕に付いて来てください！」

彼はそう言いながら、四人を目的地に案内しに行った。

…ピーチ城にて

マリオ一行はキノピオの案内により、ピーチ城に辿り着いた。その城は白に染まっていて、尖がった屋根は赤く染まっていた。

更にその城の正面には、長い金髪をしたお姫様が描かれたステントグラスが飾られていた。木乃香と刹那は、

その美しい城の姿に対し、思わず感激していた。

木乃香「うわあ~~~~!! ホンマに綺麗やわあ~~~~!!」  
刹那「そうですね……初めてですよ、西洋の城をこの目で見るのは……。」

その後、全員は途中で立ち止まり、キノピオは彼らに振り向きながら、ピーチ城に関する何かを語り始めた。

キノピオ「えつと……せっかくここに来るのが初めてな方々もいるので、改めてこの城に関する説明をしましょう。まず、

私達が今いる場所は、ピーチ城、またの名キノコ城の城門前です。この城には、僕達の偉大なる姫様と、

彼女に仕えるためのキノピオ達が住んでいるんです。

あ、もちろん僕もその一人ですが。

城内には凡そ百室のお部屋があり、それぞれは僕達キノピオ専用の寝室などがあります。

もちろんこの城にはある秘密も存在していますが、それはお教えする事は出来ませんので、悪しからず。

この城は、過去に様々な敵軍により襲撃されましたが、僕達の英雄である二人の兄弟や、

腕のいい大工達のおかげで、早急に修理されてきました。  
後……。」

マリオ「キノピオ……悪いけど、こっちは仕事があるんでね。説明は後にして、早速問題のある場所へ案内してくれないか?」

彼はキノピオの解説を強制的に終わらせながらそう言った。  
キノピオ「あ、そうでしたね! すみません、余計な時間を……では、この城の地下室までご案内しましょう。」

もう土管を直すのに大変でして……もうめちゃくちやになつてます! 現場に着くまでご注意ください!」

マリオ「大丈夫だよ! 始まってからちよちよいつと終わらせてやるよー!」

ルイージ「さつすがだね、兄さん！」  
キノピオ「分かりました。では、こちらへ……………」

…ピーチ城の地下室にて

キノピオの案内により、地下室に辿り着いたマリオ一行は、キノピオ以外の全員が愕然としていた。

赤・青・黄に分けられた多数の土管が、まるで絡まった糸のように散らかっていた。

緩められた土管からは水が大量にこぼれていて、床のあちこちには水が溜まっていた。

その土管は数え切れないほど多く、キノピオ以外の四人は多少眩暈を感じていた。

マリオ「M A M M A M I A！ 何て有様だっ！？」

キノピオ「まあ、仰る通り、めちゃくちゃになってます。なぜこ  
うなったのかは僕でさえも知りませんが、恐らく、

どっかの不良か何かによる悪戯でしょう。僕達では簡  
単に直せないので、

執事さんが修理のために貴方達を呼んだんです。依頼  
を引き受けてくれますか？」

彼がそう頼み込むと、マリオは自分の顎を指で擦りながら悩み始め  
た。

マリオ「うう~~~~ん……………こりやちよつと難しそうだけど…大丈  
夫！ 直ぐにでも終わらせてみせるよ！」

こう言う難関な仕事は俺達に任せな！」

キノピオ「ありがとうございます、マリオさん！ 色々手助けをし

てくれて感謝します！ 姫様も後ほど、

貴方とお会いするのを楽しみにしていますよ！」  
彼はお辞儀しながらそう言った。

マリオ「所で、一つだけ頼みたい事があるんだけど……。 まあ、見  
ての通り、木乃香と刹那は外国から来たんで、

この国の事をあんまり知らないんだ。 ……どっから来たの  
かは後で説明するけど……。 だから、

俺達がここで仕事している間に、こいつらをキノコタウン  
まで案内してくれないか？」

キノピオ「ああ、それなら構いませんよ！」

彼はそう言っただけで、その間に木乃香と刹那は彼らの前に立ち上  
がった。

木乃香「あの、マリオさん…？ 実は、ウチらもお願いしたい事が  
あんな…。」

刹那「実は、昨夜からお嬢様と話し合っただのですが……。 私達も二  
人のお仕事に協力してもよろしいでしょうか？」

マリオ・ルイージ「はあ！？」

木乃香と刹那の相談に対し、マリオとルイージは思わず驚いていた。  
ルイージ「な、何言ってるんだよ！？ 君達にそんな事をさせる訳  
には行かないよ！？」

マリオ「そうだな……。それに、この仕事は大変だよ？ 君達には  
配管の経験はある？」

木乃香「それはないけど……。習う事なら出来るえ？」

刹那「それは引き受け難い頼み事なのは分かりますが、私達はどう  
してもお二方の力になりたいんです。 貴方は先程、

この仕事を終えた後には、ここのお姫様とお会いすると言  
いましたよね？ 協力し合えば、短時間で終わると思います！

どうでしょう…。いいでしょうか？」

マリオ「うう~~~~ん……………」

彼は腕を組み、頭を下げながら考え始めた。

マリオ「……………まあ、君達がそう言うんなら、光栄に思うよ？」

ルイージ「ええ！？ 兄さん、まさか…！？」

マリオ「その通りだよ、ルイージ！ この仕事を終わらせるために二人も協力させてもらうんだ！ それとも弟よ、

これに関して意義があるとでも？」

ルイージ「いや……………でも、彼女達は素人だよ？ 配管の事なんて

何も知らないよ？」

マリオ「そんなの教えればいいって！ お前がこいつらの先生になればいいじゃんかよ？ それとも、昨日起こった事件の事で、

まだ気にしてんのかあ？」

弟のネガティブな部分に関するきつい事を言ったマリオ。その発言に対して黙り込んだルイージは、腕を組み、

頭を下げながら、深く考え始めた。

ルイージ「うう~~~~ん……………分かったよ！ でも、その代わりに…

！」

マリオ「もう、いい加減にしろよ、ルイージ！！ 厄介な事は絶対しないって！！ いつまで疑ってないで仲良くしろよ！！！」

彼がルイージに怒鳴り掛けた後、キノピオの方へ振り向いた。

マリオ「まつ、そう言う事だ！」

キノピオ「分かりました！ では、僕は早速城に戻って、この事を姫様に伝えて置きます！ 貴方達が仕事が終わるよう、

お待ちしております！ では、がんばってください！

僕はこれで…！」

彼がお辞儀をした後、四人を水に溜まった部屋に残し、そのまま地下室から出た。



…ピーチ城の外

キノピオが地下室から外へ出ると、一瞬に地下室の方へ振り向き、ふと考え始めた。

キノピオ「うう~~~~ん……………どうもどこかで見ただ事があるような気がするんだけど……………」

彼はそう考えると、もう一つの事を思い出した。

キノピオ「…そう言えば、あの二人の様子はどうなったのかな？  
多分姫様もそこにいるから、

ついでに様子を見てみよう！」

彼がそう言いながら、早速城内へ向かって走り去った。

…ピーチ城の地下室

一方マリオ達は、早速仕事を始めようとした。

木乃香「ほな、ルイーダ先生！　ウチらに配管の仕方を教えてくたさいな！」

ルイーダ「ル、ルイーダ先生！？」

木乃香に『先生』と呼ばれたルイーダは、少しテレ始めた。途中でマリオに振り向くが、彼は両肩を上げながら、

説明の方をルイーダに任させた。そしてルイーダはカバンの中か

らスパナを取り出し、説明し始めた。

ルイージ「え、ええ〜と……わ、分かった。まず、やり方は簡単。このスパナを使って、

外れてしまった土管を繋げて、直さなければならぬ。

でも適当に繋げちゃダメだよ！

赤・青・黄と言う色のした土管があるだろ？ これを全部同じ色に繋げる事。

あつ、でももう一つ。調子に乗って土管の中に絡まらないように気を付けて！

さもないと全部取り外す羽目になるから、絶対絡まらないようにするんだよ！ 分かった？」

木乃香・刹那「はい、ルイージ先生！！」

二人はルイージの説明を理解したかのように、明るく敬礼した。

ルイージ「ええ〜と、それとお…先生って呼ばなくてもいいよ。ちょっと恥ずかしいから…」

彼は頬を赤く染めている間に、木乃香と刹那は軽く笑った。

マリオ「オーキードーキーOkkie dokie！！ それじゃあ、早速始めようぜ！！」

木乃香・刹那・ルイージ「おお〜！！」

マリオがそう言うと、四人揃ってスパナを高く上げながら張り切り始めた。

早速仕事を始めた四人は、外れた土管を同じ色の土管を繋ぎながら、強く締め付けた。

マリオブラザーズの二人はプロのように素早く動いていたが、初心者である木乃香と刹那は自分達のペースで動いていた。

感覚の鋭い刹那は、土管の修理には慣れつつあったが、木乃香は同じ色の土管を探すだけで少々混乱していた。

しかし、刹那はそんなお嬢様を正しい色の土管を合わせるのを手伝った。それ以降から木乃香は、まだ慣れていないものの、仕事を楽しむようになった。

マリオ「おい、木乃香！ 楽しんでるか？」

木乃香「うん！ ちょっと大変やけど、大丈夫え！」

ルイーダ「刹那はどう？」

刹那「はい、大丈夫です！ しかし、この仕事は思った以上に大変ですね……。同じ色の土管を探し、

それを強く締めたりと……。いかにも、集中力と強い握力が必要とする仕事ですね。しかし、

そんなお二人は楽々と進んでいます。一体どれほどの間から配管工として勤めていたんですか？」

マリオ「うう〜ん……。数えてなかったから忘れちゃったね。

配管工としての仕事は結構長い間からやってたけど、

それ以外にも他の仕事もやってたな！ 冒険家だけじゃなく…ウイルスを撤去するための医者とか、ビルの解体屋とか、

クツキーを作るパティシエとか、ボクシングやテニスの審判とか、ゴルフの選手とか、

グランプリレースのドライバーとか……。」

刹那「えっ！？ そんな、一つ以上の職業を経験した事があるんですか！？ 信じられません……。だとしたら、

貴方には完璧なカリスマ性を持っているんですね！」

マリオ「いやあ、別にどうって事ないよ！ ただ人助けをするために経験を積んでいただけなんだ。

俺、人助けをするのが好きだから、そんな人々を喜んで満足させるためには、

色んな新しい物を学ばなきゃ行けないからね。」

刹那「すごい……。さすがに尊敬します……。信頼性と頼りがいのある男……。更に様々な職業を経験した男……。」

通りで貴方はこの町で人気者で有名になっている訳ですね。

きつと皆さんは、

貴方の活躍にとても感謝していると思います。」

マリオ「い、いやあ…別に…ねえ……………」

刹那が笑顔で褒めると、マリオは顔を赤く染めながらテレ始めた。

木乃香「…あんなあゝ…取り込み中悪いんやけど……………誰かウチを助けてえゝゝゝ!!」

彼女が大声で助けを呼ぶと、刹那とマリオは同時に彼女の方へ振り向いた。

すると木乃香は大量の繋いだ土管の中に埋もれていて、絡まっていた。

刹那「こ、木乃香お嬢様あ!?!」

マリオ「MAMMAMIA!! 一体何をしてまでそうなったんだ

あ!?!」

木乃香「ごめんなあゝ! ちょっと調子に乗ってもうて、気が付いたらこうなってもうたんやあゝ!

もう全然助けへんねん……………だから誰か助けてくれへんかなあゝ?」

ルイーダ「だから気を付けろと言ったでしょ?」

その後、刹那とマリオはルイーダの方へ振り向くと、突然愕然とした。

ルイーダ「さて…誰か僕を助けてくれないかな?」

何とルイーダも大量の繋がった土管の中に埋もれていた。そんなルイーダの哀れな姿を見て、刹那とマリオはこけた。

刹那「ル、ルイーダさんまでえ!?!」

マリオ「何だよ、ルイーダ!? 自分から言っというて今度はお前もかよ!?!」

これだとお前の教えは何の意味もないじゃないか!?!」

ルイージ「悪かったね、僕がドジで！ 文句言い終わっただんなら、僕をこっから出してよお！！」  
彼が反発的にそう言うと、マリオはため息を吹き、刹那に振り向いた。

マリオ「はあ~~~~~……………これどう言う意味が分かる？」  
刹那「ええ……………全部取り外す羽目になりましたね……。」

…ピーチ城内にて

城内には大きな部屋があった。その部屋の中は全面的にピンクと白に囲まれていて、豪華な家具が揃ってあった。  
その部屋の中心に設置されてある、ピンクのフリルが飾った大きなベッドには、二人の少女が寝ていた。

一人は目が隠れてしまつくらいに長い紫色の前髪をした少女で、もう一人は背が小さくも額が広く、  
鈴が飾ってあつた長い紫色の髪の毛をした少女であつた。そう、二人の少女の正体はネギの生徒、またはパートナーであり、図書館探検部の一員である宮崎のどかと綾瀬夕映であつた。そんな二人が寝ている間に、  
白い水玉模様の付いたキノコ帽子を被り、二つに分かれたピンクのお下げをした女キノピオが、  
鼻歌を歌いながら箒で床を掃除していた。

のどか・夕映「……………ん……………うう~~~~~ん……………。」  
二人が突然唸り出すと、同時にゆっくりと起き上がった。深い眠りから覚めた二人は、背伸びや欠伸をしたが、

自分達の思考だけまだ目覚めていない様子であった。

のどか「……ああ……ゆえゆえ……おはよう……。」

夕映「おはようです……のどかぁ……って、あれえ？　そう言えば、朝はもう過ぎたはずでは……？」

「きゃっ！！！」

突然聞こえて来た声に、のどかと夕映はその方向へ振り向いた。

そこには驚きの余りに、

誤って筭を落としてしまった女キノピオがいた。

女キノピオ「あ、あらあら……まあまあ……！！　お、起きてます……

……二人共起きてますう……！！　ど、ど、どうしましょう……？」

少女は慌て始めるが、のどかと夕映は見た事もない姿形をした人物を目の当たりにした事で、少々啞然としていた。

女キノピオ「は、早く姫様に伝えなきゃ……！！　あわわわ、は、早く、急がないとお……！！」

彼女は慌しくそう言いながら、急いで部屋から出て行った。

のどか「……な……何……今の……？」

夕映「さ、さぁ……。」

その後、二人は部屋全体を見回り始めた。

夕映「……と言うより……ここ、どこなんですか？」

のどか「さぁ……綺麗なのは綺麗なんだけど……ピンク色が何気に目立つね……。」

夕映「いや、そもそも私達はどうかやってここに来れたのですか？

私達は確か学園の図書室にいたはずでは……？」

のどか「確かにそうだけど……って、あれ！？　ハルナの姿がどこにも見当たらないんだけど……！？」

彼女は部屋中を見回してみたが、確かにハルナの姿はどこにも見当たらなかった。

夕映「……………とりあえず、一体何が起こったのか、これまでの出来事を思い出してみるしかないですね……………」。

まず、全ての始まりは、例の手紙の件でネギ先生が教室から出た時からです。

休み時間になるまでネギ先生は戻って来なかったの、

私とのどかとハルナは図書室で小説や資料を読む事にしたのです。しかし、私達がのんびりしている間に……………」

何かが起きたんですね…。」

のどか「うん…私もその時覚えてるよ？ 突然図書室のあちこちから変な電流が現れて、

それから本棚や入っていた本が全部倒れてしまっくらの地震が起きて……………。それから……………何て言うんだろう…？」

突然図書室の風景が変な形に歪み始めて……………そして何もかも真っ暗になって……………それから……………。それから……………」

彼女は先の事を思い出そうとしたが、無理であった。

のどか「ダメ…あの後何も思い出せないよ…」。あの変な事件の後、何があったのかさっぱり分かんないよ…。」

夕映「私もです……………でも…ただ一つだけ言えるのは……………」

のどか「私達はもう、麻帆良学園にいないって事？」

夕映「或いは……………私達は別の世界にいるのかもしれないです。」

のどか「え？ そ、それ、どう言う意味？ それって…まさか、私達また魔法世界に来ちゃったって言うの？」

彼女は少々混乱しながら夕映に問い掛けた。

夕映「いえ、そう言う意味で言った訳ではありません。もし私達は再び幻想世界に来てしまったのなら、

私達は廃墟となった麻帆良学園にいるはずですよ。しかし、この部屋と先程の少女から見て、

ここは明らかに別の空間に存在する異世界と思われれます。」

のどか「異世界？ それ…何かの研究資料や、ファンタジー小説で読んだ事あるけど、私達本当に異世界に来てしまったの？」

夕映「分かりません……………ここが一体どこなのか分からない限りは……………」

その後、部屋の扉が突然開き、お互いに話し合っていたのどかと夕映は、その扉の方へ振り向いた。

そこからは先程の女キノピオと、もう三人の人物がいた。 その中の一人は、手に杖を持ち、

白い髭と小さな眼鏡をかけた老人キノピオだったが、他の二人は明らかに人間だった。

一人は赤とピンクのドレス、頭に冠を被った長い金髪の女性で、もう一人は黄色とオレンジのドレス、

胸元に菊の花のブローチと、頭に王冠を被ったセミロングな茶髪をした女性であった。

その二人の女性が気品らしく登場した後、のどかと夕映は啞然とした。

女キノピオ「こちらです、姫様！」

彼女は二人の姫君を案内しながらそう言った。

桃色の姫「まあ、本当に起きてるわ！」

黄色の姫「でも無事みたいね！」

老キノピオ「これはこれは、無事で何よりですよ！ 突然どこから現れては、全く目を覚まさないで心配してましたぞ！

じゃが、心配する必要がなくなったようじゃな！」

彼は安心そうに喜ぶが、そんな見慣れない四人組に対し、のどかと夕映は啞然としたまま混乱していた。

夕映「な、な、何なんですか、貴方達は…!? 何者ですか!？」

老キノピオ「んなつ…!? この娘は…我が偉大なる姫様に向かっ



て何たる無礼な発言を……!!」

彼は混乱する夕映に怒鳴り掛けるが、桃色の姫君はそんな彼を止めた。

桃色の姫「まあまあ、落ち着いて。彼女達は今混乱してるのよ？」

「少しだけ落ち着かせないと……。」

黄色の姫「そうよ！あの娘達こがここに落ちて来てから、ここがどこなのか分かんないのよ！特に、私達が誰なのかもね！」

その間に、女キノピオがのどかと夕映の所まで歩いて来た。

女キノピオ「あ、あのお……さっき咄嗟に逃げてしまって申し訳ございません。」

突然お二方が目覚めた事で動揺してしまいました……。

私がお無礼な真似をしてしまって申し訳ございませんでした。」

彼女はお辞儀しながら、二人に謝った。

のどか「え、あ、いや、あのお……申し訳ございませんけど、貴方達は誰なんでしょうか……？」

キノコの帽子を被った小人さん達と……お姫様！？しかも……この……素敵な場所、何なんで……？」

そう問い掛けながら、のどかは更に混乱し始めた。その間に、桃色の姫君はそんなのどかを落ち着かせようと、話し掛け始めた。

桃色の姫「お、落ち着いて！とりあえず、全てを話す前に、自己紹介をさせて。私の名は『ピーチ』……ここ、

キノコ王国を収める姫君よ。で、こちらのお姫様は、

私の親友で、『サラサ・ランド』の姫君の『デイジー』よ。」

デイジー「私デイジーよ！よろしくね！」

彼女はウィンクをしながらそう答えた。

ピーチ「そしてこちらの方々は、私の愛らしい助手の『キノピコ』」

と、頼れる執事の『キノじい』よ。」

キノピコ「初めまして、キノピコと申します！ よろしくお願います！」

彼女はお辞儀しながら、のどかと夕映に挨拶した。

キノじい「ウオッホン！ ええ〜っ、先程の無礼な態度を取ってしまい申し訳ない。今後とも、よろしくお願いますぞ。」

のどか「あ、は、はい……………え、えっとお…宮崎のどかと申します。

よ、よろしくお願います…！」

夕映「え、ええ〜っと…あ、綾瀬夕映です。こちらこそ、よろし

くです…。」

二人同時にお辞儀しながら挨拶するが……………。

のどか・夕映「…って、キノコ王国…？」

二人はそう問い掛けると、ピーチは頷いた。

ピーチ「そう。もしかして、聞いた事がないの？」

彼女はのどかと夕映にそう問い掛けると、二人はしばらくの間お互いに見詰め合った。だがその行動に対し、

ピーチは二人にはキノコ王国と言う名を聞いた事がないと言う事を理解した。

ピーチ「では、そのために何が起こっていたのかを教えるわ。あ

れは確か数時間前の事だったかしら……………。

…ピーチが過去の出来事を話すために、少しだけ時間を戻さなければならぬ…。

…それは、マリオブラザーズと木乃香と刹那が仕事でキノコタウン

に訪れる数時間前の事……ピーチとデイジーは、  
ピーチの部屋にあるバルコニーで、キノコタウンと綺麗な庭園を眺  
めながらお茶を飲み、日常の事で笑いながら話し合っていた。

デイジー「アハハハ！へえ、あんたいつもあの亀の化け物に苦  
労してるのねえ！だとしたら、相当休んでる暇もないのね。

でもその苦労さ、何となく分かるなあ……私だって  
昔同じ目にあつた事があるから……。

あの頃を思い出すなあ……あれは結構昔の話だけど  
……。\*宇宙怪人『タタンガ』が私の国を乗っ取り、

そして私を攫つてから、まだ白馬の王子様のような  
マリオが助けに来て、

あの変態星人を星の彼方まで蹴飛ばしたんだよねえ。  
そしてその後、

飛行機『スカイポップ号』でマリオと一緒に空の旅……  
……はあ……ロマンチックな一時ひとときだったなあ……。

今もそうだけど、あの頃のマリオは本当に凜々しくてハ  
ンサムで……。」

彼女はそう言いながらときめくが、逆にピーチは嫉妬していた。

\*デイジー初登場の『スーパーマリオランド』より参照。

ピーチ「……ちよつとデイジー……何で貴女、まるでマリオが貴女の彼  
氏みたいに言うの？貴女にはルイーダがいるでしょ？」

デイジー「なっ！？な、何いきなり言うの、ピーチ！？」  
ルイーダの名前を耳にしたデイジーは、多少慌て始めた。

ピーチ「ああ、そう言えばあの頃を思い出すわねえ……確か\*ゴ  
ルフツアーに参加した時だったわ……。確か貴女とルイーダ、

初めて会った時結構お互い楽しんでたわよね？あの頃か  
ら二人共とっても仲の良くて、まるでカップルみたいだとか、

王国中に噂されてたわよ？ あっ、そうそう…それだけじゃなかったわ！

以前行われた\*\*『第8回マリオカートグランプリ』では、『デイジーサーキット』で貴女とルイージが楽しく踊っている姿をした銅像が飾ってあったわ！

あれってどう言う事かしらあ〜？」

ピーチは妖しげな笑みを浮かべ、デイジーをからかうかのようにそう言った。

\*『マリオオープンゴルフ』より参照。この時のデイジーはルイージのキャディーで、

ピーチはマリオのキャディーとして登場した。

\*\*『マリオカートWii』の事。

デイジー「え…あ…い、いや…そ、その…う……………」。

完全に赤面しながら、慌しくなったデイジー。だが、それでも彼女をからかい続ける鬼のようなピーチ。

ピーチ「あらあ〜、別に恥ずかしくなくてもいいのよ、デイジー？ 本当の気持ち私に告白してもいいのよ？

ルイージには黙って置くから！……………気分次第だけどね

え〜」

デイジー「ちよつとあ〜！！ 変な感じにからかわないで……………！」  
両手をテーブルの上に立たせ、反発しながら立ち上がる彼女だが、逆に何かを思い浮かべながら言い返し始めた。

デイジー「そう言うあんたこそどうなのよ！？ 最近じゃマリオと仲良く過ごしてるみたいじゃない！

あんたの周りにマリオがいるのに、そんなに恥ずかしくってるようには見えないんだけどあ〜？」

彼女がそう言い返すと、今度はピーチまで顔を赤くした。

ピーチ「なっ…そ、それは違うわよ!! あれはただ…マリオが遊びに来るだけで…そう、友達としての…!!」  
デイジー「それはどうかなあ〜? 本当はマリオの事を恋人と思っ  
て、

来ただけでドキドキとかモジモジとかしてたんじゃない  
のお〜?」

ピーチ「な、何ですって…!!?」

彼女も思わず反発しようと立ち上がるが、途中で止め、ため息を吹きながら座り込んだ。

ピーチ「はあ〜…こんな事言い合ってもキリがないわね…。」  
デイジー「うん…納得する…。」  
決着が付かぬまま、二人は落ち着きを取り戻し、座り込んだ。しかし、それでもまだ明るいデイジーは、  
ある事を思い浮かんだ。

デイジー「ねえ、これならどうかしら? ピーチはマリオで、私は  
ルイーザ…どちらが先に告白<sup>コウ</sup>られるか、

勝負してみない? どちらが勝っても文句なしって言う  
感じで…。」

ピーチ「えっ…な、何で急にそんな事を…。」  
彼女は再び赤くなりながらそう言った。

デイジー「いやねえ〜、私達って、親友だけど、色んな意味でライ  
バルでもあるじゃない? パーティゲームとかカートレース、

もちろんテニスやベースボールとかもそうだったけど…  
恋愛に関する勝負だけは一度もしてないのよねえ〜…。

だからさ、マリオが貴女に告白<sup>コウ</sup>るか、ルイーザが私に告  
白<sup>ク</sup>るか、どちらが先に決まるのか、

勝負してみようよ! きっとドキドキして楽しくなると  
思うなあ〜…。」

彼女は再びときめくが……。

ピーチ「…それ、無理だと思う。」

彼女が苦笑いでそう言うと、デイジーは固まった。

デイジー「ええ！？ どうしてよ!？」

ピーチ「だって……今のマリオブラザーズにそんな事する気あると思う?」  
あふたり

彼女がそう言うと、一瞬の間に沈黙が走った。そしてデイジーは、まるで落ち込むかのように黙り込んだ。

デイジー「……………そうよねえ……………今のあの二人じゃ、告白コケに来るのも時間の問題だよねえ……………」

仕事とか冒険とかで忙しい……………って言うか、恋愛感情とかまだ芽生えてなさそうだし……………」

そんなデイジーに対し、デイジーは紅茶を飲みながら苦笑した。

ピーチ「でもデイジー……………もしそれだったら……………その……………自分からやったら……………どうかしら?」

彼女は少々恥ずかしながら問い掛けるが……………

デイジー「ダメ!! そんなんじや話になんないわよ!! 例えこっちがそんな気があつたとしても、

向こうから先に聞かないと意味ないじゃない!! だって告白って向こうから先に言うもんでしょ!？」

彼女は微妙に燃え上がりながらそう言うが、逆にピーチは困っていた。

ピーチ「いや……………順番は関係ないと思うけど……………」

「これこれ、デイジー姫様! お行儀悪いですぞ!」

老人の声を聞こえたピーチとデイジーは、その聞こえた方向へ振り向いた。そこにいたのは、部屋に入つて来たキノじいと、クッキーを運ぶキノピオとキノピコであった。

ピーチ「キノじいや！」

デイジー「キノじいさん！」

キノじい「そのような態度を振舞っては、せつかくの気品さが乱れてしまいますぞ！ もっとお姫様らしく、優雅に…華麗に…

お上品とした……………」

デイジー「別にいいじゃない、元はと言えば遊びに来たんだからあゝ。別に国会演説とかする訳でもないんだから、

別にどうしたつていいでしょ？」

キノじい「これえ！！ 何ですじゃ、その言い方は！？ そんな無礼な言動を取っては…！！！」

デイジーの気品なさげな発言に対し、キノじいは怒鳴り掛けるが、キノピオはそれを阻止しようとした。

キノピオ「まあまあ、落ち着いてください！」

その間に、キノピコは手に持っていたクッキーを二人の姫君に差し渡した。

キノピコ「はい、お待ち致しました！ 焼き立てのクッキーをどうぞ！」

デイジー「わあゝ、実に美味しそう！！ キノピコの作るクッキーって本当に美味しいんだよね！」

キノピコ「恐縮です！」

ピーチ「いつももお疲れ様、キノピコ！」

キノピコ「はい！」

三人は笑顔で話し合ったが……………。

……………ピリッ……………ピリリッ……………！！

その後、突然空気中から紫色に光り出す電流が放って来た。 それ

に気付いたピーチ一行は、上を見上げてみた。

するとその紫色の電流が部屋全体に広がり、全員慌しくなってきた。

ピーチ「な、何、これ…!？」

デイジー「ちよ、ちよっとちよっと、何この変な静電気は!？」

キノじい「な、何ですじゃ、これは!？」

キノピオ「え!? キノじいはこれ何なのか知らないんですか!？」

キノじい「当たり前じゃ!! いくらワシは物知りだからと言って知る訳がなかるうが!!」

キノピオ「こ、恐いですう…!」

彼女は怯えながら、ピーチのスカートにしがみ付いた。

ピーチ「だ、大丈夫よ! きつと直ぐ収まるから…!」

しかし、謎の紫色の電流が収まらず、より激しくなり、だんだんと部屋中に広がり始めた。

デイジー「って、ちよっ…何これ!? だんだん酷くなってるけど!？」

キノピオ「ど、どうなってるんですか、これえ!？」

キノピオ「やっぱり恐いですう…!」

彼女は泣きそうな声で、必死にピーチのスカートにしがみ付いた。

ピーチ「キ、キノじい! 何とか出来ないの!？」

キノじい「いや、だからワシに聞かれても…!」

だが、空気中に発生する謎の紫色の電流が激しく進んでいる中、突然部屋の風景が歪み始めた。

デイジー「ええっ!?! こ、今度は何いつ!?!」

ピーチ「へ、部屋が…歪み始めてる…!?!」

キノピオ「キノじい!!! これは一体何なんですかあ!?!」

キノじい「知らん!!! こんな現象初めてじゃ!!!」

キノピオ「キャ〜〜!!! 一体この後どうなっちゃうんですかあ



「……!?」

しかし、全員がパニック状態に陥る間に、ピーチの大型ベッドから突然光が発生した。それに気付いたピーチ一行は、その光に振り向くが、余りにも眩し過ぎるせいで、自らの目を隠した。すると、光が収まる同時に、謎の現象も収まった。

そして全員がゆっくりと目を開けると、早速辺りを見回り始めた。

ピーチ「……………あ、あら…? 急に収まったわ…? みんな、無事!?」

デージー「う、うん…私は大丈夫…。」

キノじい「ふえ〜〜……………少々腰が抜けましたが、一応大丈夫ですじゃ。」

キノピオ「僕も大丈夫です……………キノピコは!?!」

キノピコ「は、はい…私も大丈夫です……………。」

デージー「ちよつと、さっきのは一体何だったの!?! 急に変な電気が放つたり、地震が揺れ出したり、辺りが歪んだり、

そして変な光が現れたり……………もう、何が何だっけ言うのよ!?!」

キノじい「いやあ……………ワシにもよく分かりませんですじゃ…。」

何せこんな奇妙な現象を体験するは初めてで……………。」

彼はハンカチで冷や汗を拭きながらそう言った。

キノピオ「あのお…そう言えばさっきの光……………姫様のベッドから現れたようでしたけど…。」

ピーチ「そう言えば…あれは一体何だったのかしら…?」

ピーチ一向が先程の光に気になりながら、大型ベッドの方へ進んで行った。そして全員同時に覗き込むと、

そこには二人の少女が寝込んでいた。そう、その少女達こそが、

のどかと夕映である。

全員「……………え……………？」

…そして現在の時間へ戻し……………ピーチはのどかと夕映に今までの出来事を説明し終わった。

ピーチ「…っと言う訳なの。気が付いたら、貴女達は私のベッドの上に寝ていたの。」

のどか「え！？こ、これ、貴女のベッドだったんですかぁ！？」  
彼女と夕映は慌てながらピーチのベッドから降りて、立ち上がった。  
夕映「も、申し訳ありません…！！ま、まさか、貴女のベッドの上に寝てたとは…知りませんでした…！！」

彼女とのどかはピーチの前に、慌てながらお辞儀した。

ピーチ「えっ、いや、いいのよ！大体突然の事だったんだし…気にする事ないわ！」

夕映「…しかし……………ここで発生した現象……………私達の所にも同じような事があつたですね…。」

のどか「そ、そうみたいだけど……………。」

デイジー「しかし、貴女達も変わってるね…。その服装……………この国では見掛けないわね？」

キノじい「さようですな。同じ服を着ている事から、どうやらお主達はどこかの学校から来たのですな？」

しかし紋章から見て、見た事もないのう……………さすがに

ダイヤモンドシティにはないと思うが……

お主達はダイヤモンドシティ……またはモビウス大陸のどこから来たのかね？」

のどか・夕映「ダイヤモンドシティ……？ モビウス大陸……？」

二人はその聞き覚えのない国名、及び大陸名を聞くと、頭を傾げた。夕映「いえ、私達は日本から来た、麻帆良学園の生徒ですが……。」

ピーチ「ニッポン？ マホラガクエン……？ じいや、聞いた事ある？」

彼女はキノじいに向きながら問い掛けた。

キノじい「いや、聞いた事もないですな……。」

キノピコ「私も知りません。」

デイジー「私も初めて聞くわね。」

のどか・夕映「えっ……！？」

ピーチ達の返答を聞いた後、二人はショックを受けた。

のどか「ちょ、ちょっと待ってください！！ じゃ、じゃあ……ここが日本ではないのなら、ここはどこなんですか！？」

夕映「さ、さすがに幻想世界に戻って来たとは有り得ませんですよね……？」

二人は不安に慌てながら、ピーチ達に問い掛けた。

ピーチ「幻想世界？ いえ、そう言う名前じゃないけど……ここはキノコワールド大陸の中心的な国、キノコ王国よ！」

そして貴女達が今いる場所は、私のお城、ピーチ城よ！」

のどか・夕映「キノコワールド……？ キノコ王国……？」

二人は更なる聞き覚えのない名前を耳にすると、更に混乱した。

キノじい「うむう……お主達の言動から察すると……もはやこの世界の者ではなさそうですね……。」

デイジー「はあ？ それってどう言う意味よ？」

キノじい「別の町、及び国から来た者ならばまだしも、どの国や大

陸の名を知らないと言うのならば、

もはやこの世界の住人ではないと言う事ですじゃ。ま

あ、簡単で言うと、別世界から来た者、ですな。」

キノピコ「別世界から!? それって有り得る事なんですか!?!」

キノじいの推理に対して驚くデイジーとキノピコだが、ピーチだけは平然とした表情で、何気に納得していた。

なぜなら彼女も\*以前数々の別世界に行った事がある。そのため、別の世界、または別の次元と言う物が存在するのは、

本人に取ってはおかしくない事であった。そして彼女がのどかと夕映に振り向き、再び問い掛けた。

\*『スーパーマリオUSA』、及び『スーパーペーパーマリオ』より参照。

ピーチ「ねえ、よかつたら、貴女達がここに来る前に何が起きたのか、詳しく教えてくれないかしら?」

夕映「え? あ、はい……わかりました……。」

その後、夕映は麻帆良学園で起きた事件を全てピーチ達に詳しく説明した。

キノじい「ふむ……なるほどお……お主達はその学園の図書室で本を読んでいた時、

突然ワシらが経験した現象とよく似た現象に巻き込まれ、ここに来てしまったのですな?」

夕映「はい……でも、あの子の事は何も覚えてないのです。視界が急に真っ暗になってしまい、

そこで急に記憶が途切れてしまい……。」

のどか「そうそう! 私達の他にももう一人の友達もいたんですけど

ど……………見掛けませんか？」

夕映「私達と同じ服を着ているのですが、背は私達よりちよつと高くて、眼鏡をかけていて、アホ毛が二本も立っている、

長い黒髪の子です。あの時その人も私達と一緒にだったので、供に現象に巻き込まれたと思うのですが……………」

彼女がハルナの特徴を詳しく説明した後、ピーチ達しばらくお互いに見合った。

デイジー「質問……………『アホ毛』って何？」

のどか・夕映「えっ……………」

デイジーの突然の質問に対し、のどかと夕映は啞然とした。

夕映「……………あの…頭から飛び出てる短い髪の毛の事です。」

のどか「…そ、そうそう…私のこれがそうなんです。」

彼女は自分のアホ毛を引つ張りながら、ピーチ達に見せた。

ピーチ「へえ、あれってアホ毛って言うんだあ……………」

感心するピーチだが、他は多少不満だった。

キノじい「実にけしからんのう……………これぞ『今風』と言う物じゃ

ろうか？ と言うより、それと寝癖とはどう違うのかね？」

デイジー「って言うか『アホ』って呼ぶ事自体何か嫌な感じよねえ

……………何か罵倒っぽく聞こえるし……………」

のどか・夕映「……………」

二人は啞然としたまま沈黙になっていた後、お互い向き合って小声で話し合った。

夕映「…まさかこの世界……………アホ毛が存在しないのでは……………」

のどか「…そ、そんな事はないと…思うけど……………」

確信はないが、彼女は苦笑いでそう言った。

コンッ！ コンッ！

その後、部屋の扉からノックが聞こえ、全員その扉の方へ振り向いた。すると扉が開き、そこからキノピオが入って来た。

キノピオ「失礼しまあ〜す！」

ピーチ「あつ、キノピオ！」

そしてキノピオはピーチ姫の所まで駆け付け、こう言った。

キノピオ「姫様！ ただいまマリオブラザーズの方々が到着しました！ 地下室の修理が終わり次第、

お会い出来ると思います！」

ピーチ「本当に？ ご苦労様！」

デイジー「ルイージも来てるの？」

キノピオ「はい、もちろん来てます……………つて、あれ？」

彼がデイジーにそう返答すると、思わず目がのどかと夕映の方へ向いてしまった。

キノピオ「あつ、お二人共、目が覚めたのですね！ よかったあ〜……………何度起こしても全然起きてくれなかったので、

心配しましたあ！ でも無事だったみたいで、よかったですう！」

のどか「あ、は、はい…ありがとうございます…。」  
安心そうな笑顔で寄って来るキノピオに対し、のどかと夕映は少々引いていた。

ピーチ「あ、この子の紹介もまだだったわね。これはキノじいとキノピコ同様、助手のキノピオよ。キノピオ、

こちらの方々は宮崎のどかさんと綾瀬夕映さんよ。」

キノピオ「のどかさんに夕映さん…ですね？ 初めまして、僕はお城に仕えるキノピオと申します！ 以後、

よろしくお願ひします！」

彼はお辞儀しながら、のどかと夕映に挨拶した。

のどか「あ、はい…こちらこそ…！」

彼女がそう言いながら、夕映と同時に挨拶した。

キノピオ「……………ん？」

彼がお辞儀から見上げると、のどかと夕映を見て何かに気付いた。

それに対して、のどかと夕映は少し頭を傾げた。

キノピオ「あれ…これって…。」

彼がそう呟きながら、無断に夕映のスカートを掴んだ。

夕映「えっ!？」

そんなキノピオの大胆な行動に対し、スカートを掴まれた夕映と、それを横から見たのどかは愕然とした。

もちろんその瞬間を見ていたピーチ達も愕然としたが、逆にキノピコはそれ以上にシヨックを受けていた様子。

その後、キノじいは怒りながら、手に持っていた杖をキノピオの頭に強く叩き込んだ。

キノじい「これえ、キノピオ!! お主は女性の大事な服に手を出すとは何たる無礼な真似を……………!？」

キノピオ「痛たたた…す、すみません! いや、ただ…この服、どこかで見た事があるような気がしたので……………」

彼は痛みを感じる頭を抱えながら、涙目で怒るキノじいにそう答えるが、それに対してのどかと夕映は何かに反応した。

のどか・夕映「えっ…!？」

キノピオ「……………あっ!! 思い出したっ!!」

先程の頭から感じた痛みのおかげなのか、キノピオは何かを思い出し、ピーチに振り向いた。

キノピオ「確かマリオブラザーズのお連れの方々も、このお二方と同じ格好をしていました!」

全員「えっ!？」

キノピオ以外の者達は、彼の発言に対して同時に反応した。

ピーチ「マリオブラザーズのお連れって…それってどう言う意味な

の？」

キノピオ「はい…何でも異国から来た二人の少女らしいのですが…  
詳しい事は僕にも分かりません。でも、

今は地下室でマリオさん達のお手伝いをしています。

本人からそう申したようでした…。」

のどか「ね、ねえ！ その、私達と同じ服を着た二人の少女って、  
どんな人なんですか!？」

夕映「名前とか聞きませんでしたか!？」

二人はキノピオに押し込みながら問い掛けた。

キノピオ「え、ええ…ええ…つと…確かあ…。」

しかし、キノピオが語り出す前に、外のバルコニーから何か落ちて  
来るような音が聞こえて来た。 全員外の方へ振り向くと、  
明らかに何か猛スピードでこちらへ向かっていた。

全員「わあああつ!!!」

それに気付いた全員は直ぐにその場から離れ、猛スピードで飛ぶ謎  
の物体はそのままその場へ衝突した。

デイジー「な、何っ、今の…!？」

キノジ「今度は何が起こったんじゃない?」

全員立ち上がり、その物体を良く見ると、白い腕に怒った目をした、  
黒い弾丸のような物体であった。

のどか「な、何…これ…?」

夕映「…弾ですか…? でも腕に目が付いてますけど…。」

キノピオ「!!! のどかさん!!! 夕映さん!!! そいつから離  
れてください!!!」

それが何なのか気付いたキノピオは、のどかと夕映に大声で叫び出  
した。 それに応じてのどかと夕映は驚きに引き、

キノピオはその弾丸らしき物体に掛け付けた。 そして彼はそれを  
持ち上げ、その瞬間を見たのどかと夕映は愕然とした。





全員「なっ……………!？」

…ピーチ城の地下室

一方マリオ達は、土管の海に埋もれた木乃香とルイーヂを助けるために、全ての土管を取り外した。二人を救出したものの、辺りは土管で散らかり、助けたマリオと刹那は疲労で座り込んでいた。

マリオ「はあ……………やっと助けられた……………」

刹那「…でも、余計に酷くなりましたね……………」

木乃香「ごめんなあ、ウチらのせいで……………」

刹那「いえ、お嬢様は何も悪くはありません。」

ルイーヂ「どうする、兄さん？」

彼が兄にそう問い掛けると、マリオはため息を吹いた。

マリオ「はあ……………しょうがない……。これは終わらせるのに相当時間が掛かるから、今日ピーチ姫と会うのを諦めよう。

そうだとしたら、早くキノピオに報告を……………」

チユドチユドチユドチユドオオオオオオオオン!!!

しかし、突然何かが城に激突し、その衝撃に城全体が揺れ始めた。

刹那「わわっ、な、何ですか今のは!？」

木乃香「今外で何かぶつかつたん!？」

マリオ「とりあえず、行ってみよう!！」

そして四人は立ち上がり、仕事現場を後にしながら、急いで地下室

から外へ出た。そして外まで辿り着いた一行は、空を見上げた。

全員「なっ……………!?!」

地上にいるマリオ一行、そしてバルコニーにいるピーチ一行が外を眺めると、

そこには大量の回転するプロペラで空を飛んでいる木製の船があった。その船の大砲から大量のキラーと言う弾丸を発砲し、ピーチ城に襲撃していた。そのため、地上にいるキノピオ達は、パニック状態に城内に避難し、辺りは砲撃により破損が増幅していた。

夕映「な、何ですかあれ!?!」

のどか「船が空を飛んでる……………!?!」

キノじい「い、行かん!! 敵襲ですじゃあああ!?!」

刹那「あ、あれは……………!?!」

木乃香「船が空を飛んどるえ!?!」

ルイーダ「に、兄さん、あれってまさか……………!?!」

マリオ「あ、ああ……………間違いない! 『クッパ軍団』だ!?!」

## 第8話 帰って来た迷惑大王

……キノコ王国・ピーチ城で土管修理にやって来たマリオブラザーズと木乃香と刹那……  
そしてそこでピーチ姫一行と出会ったのだかと夕映……。だが突然ピーチ城が謎の飛行船により襲撃され、全員はそれを外から眺めていた。

夕映「な、何ですかあれ!？」

のどか「船が空を飛んでる……!？」

キノじい「い、行かん!! 敵襲ですじゃあああ!!!!」

刹那「あ、あれは……!？」

木乃香「船が空を飛んどるえ!？」

ルイージ「に、兄さん、あれってまさか……!？」

マリオ「あ、ああ……間違いない! 『クッパ軍団』だ!!!!」

……謎の飛行船にて

飛行船の甲板には、腕を組みながらピーチ城を見下ろす人物が立っていた。その人物はかなりの巨体で、

刺だらけの甲羅を身につけ、頭に二本の角を生やした、まるで怪物のような姿をしていた。その横には、

青い尖がり帽子とローブ、そして眼鏡をかけた、まるで魔法使いのような亀と、

黒い甲羅に二本の角が付いた黒いヘルメットをした戦士らしき亀も

いた。

怪物「ガアッハッハッハッハッ！ 見よ、ピーチ城にいる愚かな平民共を！ まるで逃げ回る無能な虫けらのようだ！！」

亀魔法使い「さすが『クツパ』様！ 見事な攻略です！」

亀戦士「もはやクツパ様に立ち向かう愚か者などいないでしょう！  
クツパ「当然だ、『カメツク』、『ブロス隊長』よ！！ いつも平和ボケに暮らしてるこの無力な愚民共には、

この我輩に立ち向かうなんて一生不可能だ！！ 早速ピー

チ城占領のため、総攻撃開始だあ！！ 『コクツパ軍団』よ、

全砲台発射あ！！」

彼が指示すると、全ての砲台は城全体に砲撃し、所々爆発を起こした。

…ピーチ城バルコニーにて

のどかと夕映、そしてピーチ一行は、城付近に襲撃を行っているクツパの飛行船を愕然と眺めていた。

デイジー「うっそお！？ 何であいつがここに…！？」

キノじい「ああ、何て事ですよ！！ 城が奴の手に壊されてしま  
うっ~~~~！！！！」

夕映「ピ、ピーチさん！ あれは何なんですか！？」

ピーチ「あ、あれ！？ あれはクツパが率いるクツパ軍団の飛行船  
よ！！」

のどか・夕映「クツパ……………？」

二人はその名前を聞くと、呆気ない表情で、脳内には韓国料理しか思い浮かべなかった。

デイジー「この国とピーチ姫を自分の物にしようとしている悪亀よ！」

夕映「亀…ですか？」

デイジー「そう！ もうそりゃ不細工で我侂で、殆ど悪い事しか考えてない、通称『迷惑大王』よ！」

いつもピーチ姫を攫ってマリオに悪い事してんのよ！

ねっ、ピーチ！」

ピーチ「え、ええ…。」

彼女は不安げに少しだけ頷いた。

のどか「え？ そのクツパって言う人（？）、いつもピーチさんを攫ってるんですか？」

ピーチ「う、うん…そうね。私を強制的にお嫁さんにしようとしてるみたいだから…。」

夕映「…何で亀なんですか？」

ピーチ「え？ さ、さあ…。」

色んな質問を聞き出すのどかと夕映に対し、ピーチは多少困難していた。

キノじい「そんな事を聞いている場合ではないですよ！！ ああ

……

今仕事中のマリオ殿とルイージ殿はこの事に気付いてお

られるだろうかあ……………！」

…一方木乃香と刹那、そしてマリオブラザーズは、地上から城付近

に襲撃を行っているクツパの飛行船を愕然と見上げていた。

マリオ「くそお、あいつ！！ またピーチ城（ココ）を襲いに来たなあ！」

木乃香「ほえ？ マリオさんあれ何なのか知つとるんですか？」

刹那「あれは一体……動かしている敵は何者なんですか！？」

マリオ「あれはクツパだ！」

木乃香「クツパ……？ それって、韓国料理の事なん？」

少々惚けた表情をしながら、彼女はそう言った。

刹那「いや、それとこれとは違うと思います……。」

彼女はそんな木乃香にツツコミを入れるが、マリオとルイーダには少々理解していなかった様子。

マリオ「……クツパはこの王国に敵対する悪役で、カメ一族を率いる大魔王なんだ！ ピーチ姫を攫い、

この国を自らの手中に収めようと目論む、文字通り悪い奴なんだ！」

刹那「何ですて……！？ では、そのクツパと言う奴は、今もこの国を自分の物にするために、襲撃を行っているのですか！？」

マリオ「ああ……もう何度もやつけてるんだけど、あー見えても本当に懲りない奴でね……。」

刹那「え？ 何度も……って、それはどう言う……？」

マリオ「それより刹那、気を付けた方がいいよ！ 今は砲撃を繰り広げてるけど、奴は次の行動を取るつもりだよ！」

彼は険しい表情で飛行船を睨みながら、刹那にそう注意した。

…飛行船内部にて  
船内では、八人の亀達が砲台を使って、ピーチ城に砲撃した。しかし、その中の一人だけは、まるでリーダーかのように他を指摘していた。その人物は他の連中よりも小柄だが、刺付きの甲羅に恐そうな牙が描かれた涎掛け、短いオレンジ色の鬣、そして可愛らしい円らかな瞳を持った、まるでクツパを子供にしたかのような姿をしていた。

小亀「オラオラア〜！ 何してんだお前らあ〜！ 父さんの言う通り働け働けえ〜！」  
彼は他の亀達を指摘しながら、気軽に踊っていた。

亀A「だああああ！！ ウゼエエエエ！！ お前いちいち何様のつもりだあ！？ 親父ならともかく、  
何で俺達が『クツパ』<sup>ジュニア</sup>に扱き使われなきゃならないんだよお！！」

緑色の刺甲羅、牙一本、そして青い長髪をした亀が、クツパに対して怒り出した。

クツパ「何だとお！？ 『ルドウィッグ』兄ちゃんは僕に歯向かおうとでも言うのぉ！？」

これは父さんに代わって僕の命令だぞお！」

ルドウィッグ「言つとくがな、お前は俺らより一番下の弟だろうが！！ いくら親父のお気に入りだと言ってもな、

親父の代わりに俺達を指示しようと思ってんじゃね

えよ！！！」

クツパ「何い〜！？」

その後、二人はお互いにぶつけ合い、揉め始めた。

亀B「おっ！？ 早速兄弟喧嘩かあ！？」



茶色の刺甲羅、白い頭に左目に付いた星模様、そして頭に三本の毛を生やした亀は、張り切りながらそう言った。

亀C「兄貴、俺達も加勢するぜえ!!!」

赤い刺甲羅に赤い頭、さらにサングラスをかけた不良っぽい亀は、拳を鳴らしながら張り切り始めた。

亀D「やつちやえやつちやえ」

緑の顔に甲羅と虹色のモヒカン、更に焦点の合っていない目をした小柄の亀は、

青い星マークの付いたボールに乗りながら盛り上がっていた。

亀E「コラアツ!!!」 『モートン』 お兄様、 『ロイ』 お兄様に『レミー』 お兄様!!! そしてクツパジャー・とルドウィッグお兄様!!!

喧嘩は止しなさい!!!」

ピンクの甲羅にオレンジの頭、更に両腕に大きなリング、首に赤いネックレス、赤い口紅、ピンクのハイヒール、そして頭に白い水玉模様の付いたピンクのリボンと言った、オシャレな女亀が、喧嘩する四人の亀達に怒鳴り掛けた。

亀E「もう...何でこうみんなクツパジャー・と仲良くななんないのかしら...?」

亀F「しょうがないよ、 『ウエンディ』...。 クツパジャー・はあー見えても父さんのお気に入りなんだから...。」

緑色の刺甲羅に黒縁眼鏡、そしてレミーとよく似た虹色のモヒカンをした亀がそう言った。

亀G「そりゃあ兄ちゃん達だって嫉妬しちゃうよ...。」

緑色の刺甲羅、四本の牙、そして青いモヒカンをした亀が、苦笑いしながらそう言った。

ウエンディ「何よお、 『イギー』 お兄様と『ラリー』 まで、同じ兄弟なのにそう言うの!?!」

イギー「いや、僕達だって、同じ兄弟としてジャー・とは仲良くしたいと思うよ?」

ラリー」でも向こうが懐いてくれないからそれが出来ないんだよねえ〜……………まあ、悔しいつちや悔しいけど…。」

ウエンディ「もう、みんな!! 今はお父様のお仕事に付き合ってるのよ! つまり、今は仕事中的なの!

こんな時に喧嘩してる場合じゃないでしょ!」

モートン「何言ってるんだよ、ウエンディ!! 俺達と同じく悔しくねえのかよ!? クツパ<sup>こいつ</sup>ジャー<sup>。</sup>が現れてから、

俺達多くのマリオシリーズで何の音沙汰もなかったんだぜ!?!」

ロイ「そう!! 『スーパーマリオブラザーズ3』に初登場して、

その次に『スーパーマリオワールド』や『ヨッシーのロードハンティング』、

そして海外では教育ゲームの『マリオ・イズ・ミツシング!』にだって出たんだぜえ!?!」

それと何となく記憶にねえけど、『マリオ&ルイージRPG』にも十三年ぶりに再登場したんだぜえ!?!」

レミー「でもオイラたち、\*『スーパープリンセスピーチ』にだってでるよていだったのに、

きゆうにとりけされたんだよお〜!?!」

\*内容通り、『スーパープリンセスピーチ』ではボスキャラとして再登場させる予定だったが、理由が分からないまま、

取り消されたのだと言う。しかし、データとしては残されている。

ルドウィッグ「そうだぞ、ウエンディ!! 俺達が最後に登場してからこの六年間、全くゲームに出て来なくなっただぞ!?!」

だからこそその小説の作者が俺達のために、この時だからこそ登場させたんだぞお!?!」



クツパ「くおるああああああああああああ！！ お前達何  
喧嘩してんだああああああああ！！！」

モタモタしてないでさっさと仕事に戻れえエエええええ  
ええええええええ！！！」

どうやらコクツパ達の間起こった騒動が甲板の方まで聞こえたの  
か、クツパは大声でコクツパ達に怒鳴り出した。

それに応じてコクツパ達は固まるかのように喧嘩を止め、仕事に戻  
った。

…甲板にて

クツパは腕を組み、頭を振りながらため息を吹いた。

クツパ「全く……………どうしてあいつらはＪｒ．と仲良く出来ないの  
かなあ……………」

そう悩む彼だが、背後にいたカメツクとブロス隊長は小声で話し合  
った。

ブロス隊長「これもクツパ様が悪いと思わないか？」

カメツク「確かに……………いつもＪｒ．様のお相手ばつかしてるから  
な……………コクツパ様達が嫉妬しても当たり前だと……………」

クツパ「そこお！！ 何いらん事を話している！！！」

二人の小話がクツパの耳元に聞こえたのか、彼は勢いで後ろに振り  
向きながら、ブロス隊長とカメツクに怒鳴った。

ブロス隊長「あっ！？ い、いえっ、何でもありません！！！」

彼は慌てて敬礼しながらそう答えた。

カメツク（…本当に耳だけはいいいんだけどなあ……………）

クツパ「それよりもブロス隊長！！ 早速我が軍勢を地上に送り込ませい！」

ブロス隊長「は、はい！！ 了解しました！！」  
彼は再び敬礼しながら、クツパの指示に承知した。

ブロス隊長「全軍、出撃開始い！！！」

そして彼が大声でそう呼び掛けると、船内から数多くの軍勢が出動した。それぞれは腕のない白い胴体に大きな茶色い頭、

更に二本の牙と黒い眉毛をしたキノコのような姿形をした敵と、それに羽根を生やした敵と、

頭に刺付きのヘルメットを被った敵……………緑と赤に分けられた甲羅と靴をした亀と、それに羽根を生やした亀……………

頭にヘルメットを被り、手にハンマーを持った亀……………顔付きの雲に乗った黒縁眼鏡をかけた亀……………

刺の付いた銀色の甲羅とヘルメットを武装した亀……………全身骨で出来た亀ゾンビ……………

そして甲羅が鉄で出来た四速歩行する小さな可愛らしい亀であり、全員はパラシュートを開きながら船から飛び降り、または飛行する者は空を飛んで地上へ舞い降りた。

…ピーチ城バルコニーにて

のどかと夕映、そしてピーチ一行は、降下する敵軍を眺めながら慌て始めた。

キノピコ「き、来ましたあ！！ クツパ軍団の敵達が降りて来まし

「たあー!!」

キノじい「キ、キノピオ!! い、い、今直ぐに援軍を要請せよ!!  
! こ、こちらでも戦闘開始ですじゃあ!!」

キノピオ「ダメです!! 先程連絡しましたが、どれも準備を整つておりません!!」

キノじい「何ですとお!? おのれえ〜!! 何でこの者達はいつでも戦闘準備をせんのじゃあ!?」

彼はそう怒るが、後ろにいたデイジーは頬を掻きながらこう言った。  
デイジー「そりゃあいつもマリオ達に頼ってばっかだったからね  
...」

のどか「あ、あれがクツパの率いる敵軍なんですか...!?」  
ピーチ「う、うん...」

夕映「しかしホントに何で亀なんですか...? しかも何かマツタケ  
つばい奴もいますし...」

状況とは合っていないながらも、夕映は冷静に再びそう問い掛けた。

...一方マリオ一行は、目の前に降下して来る敵軍を待ち受けながら、  
地上から見上げていた。

ルイーダ「に、兄さん!! 敵が降りて来るよ!!」

マリオ「ああ、分かってるさ!!」

木乃香「へ? 分かってるって...まさか...!?」

マリオ「そう! 戦うのさ! 行くぞ、ルイーダ! 俺達マリオブ  
ラザーズがピーチ城を守るんだ!!」

彼はそう言いながら、大きなハンマーを取り出した。

ルイージ「う、うん!」

彼も同じく、頷きながらハンマーを取り出した。

木乃香「ええ!? そ、それで戦うん!」

刹那「マ、マリオさん! ルイージさん! 私も戦います!」

マリオ・ルイージ「えっ!」

刹那の突然な頼み事に対し、二人の兄弟は驚いた。

ルイージ「な、何言い出すの、急に!?!? 一緒に戦うって、そんな無茶な事をさせる訳には行かないよ!」

マリオ「そうだよ! この戦いは危険だ! 君達は一旦城内に避難して、ここを俺達に任せるよ!」

刹那「確かに私はこの世界の事を全く存じてない上に、相手の強さはどれほどの物なのかも分かりません……ですが、

私はお二人の思うように、この国と人々を守りたいのです!

いくら相手が何だろうが、

お二人だけでは戦力不足だと思います。私も協力すれば、

敵は難なく片付けられます!」

その後、彼女は愛刀『夕凧』を持ち上げ、それをマリオとルイージに見せた。

刹那「…それに、私の事はご安心ください。私には神鳴流の剣術

を持っています。私の力さえ使えば、

決して問題はありません!」

ルイージ「その刀は……?」

彼が『夕凧』を見ている間に、マリオは指で顎を撫でながら考えていた。

マリオ「神鳴流……そう言えば、昨日その事で色々話してくれ  
たな……? しかもその技の一部も、

以前見せてくれたな……。」

彼がそう言いながら、ある決意をした。

マリオ「よしっ、分かった！ 君がそこまで言うんなら、一緒に戦おうぜ！」

彼は親指を立たせながら、刹那に承知の答えを出した。

ルイーダ「に、兄さん!？」

マリオ「ルイーダ、刹那も一緒に戦わせよう！ 彼女も加えれば、この戦いもあつと言う間に終わるさ！ お前だって彼女の力、

どれほどの物なのか知ってるだろ？」

彼がそう言うと、ルイーダは昨日の出来事を思い出した。 彼に取っては嫌な思い出だが、

確かに彼女の力には凄まじい破壊力を持っていた。 ルイーダはそう思いながら、ある決意をした。

ルイーダ「分かった！ 一緒に戦おう！」

刹那「ありがとうございます！ あつ、でもその代わり……………」  
彼女はルイーダの性格を理解しながら、彼に何か言おうとしたが…

……………。

ルイーダ「分かってる！ でもこの際は別にいいから、思う存分派手にやるっよ！」

刹那「……………はい！」

彼女は頷いた後、次は木乃香に振り向いた。

刹那「お嬢様：ここは私とマリオさん達に任せてください！ そのためここは危険ですので、一旦この場から離れてください。」

木乃香「せつちゃん……………分かった！ せつちゃんも気い付けてな！」

自分も戦えない事で悔しがる彼女だが、それでも刹那に頷いてそう答えた。

刹那「はい！」

その後、クツパ軍団は無事着陸し、そのままピーチ城に向かって走



り出した。

キノコ「今日と言う今日こそピーチ城を叩き潰すぞお!!」

緑の亀「この国は我がクツパ軍団の物にするのだあ!!」

ゾンビ亀「ピーチ城……………壊ス……………」

ハンマー亀「野郎共、今日こそキノコ王国を我々が奪い取るぞお!!」

鎧の亀「クツパ軍団の強さと恐ろしさを弱者共に思い知らせてやれえ!!」

敵軍は張り切りながら前進するが……………。

クツパ軍団「!?!」

クツパ軍団は途中で立ち止まり、何かを見て驚いた。それは、ピーチ城の正面に、マリオとルイージ、そして刹那が待ち構えていたのだ。

マリオ「よお、お馴染みのクツパ軍団達い！ 今日もボコボコにされたいのかあ〜い？」

ルイージ「ピーチ城はお前達なんかには渡さないぞ!!」

刹那「亀だろ何が何だろ何が構いません！ この国の敵となる者は、排除する!!」

キノコ「ひいっ!! あ、あいつは…マリオだあ!!」

赤い亀「それにルイージ……………だっけ？」

緑の亀「って言うか、後ろにいる女は誰だ？」

ゾンビ亀「関係ナイ……………まリオ…倒ス……………全部…潰ス……………!!」

ハンマー亀「ええ〜い!! 野郎共、怯むなあ!! 相手が誰だろうが、邪魔する奴は容赦せずに叩き潰すぞお!!」

一気に突撃だあああ!!」

クッパ軍団「おおおおおおおおお！！！」  
敵軍は雄叫びを出しながら、一斉に走り出した。

マリオ「来るぞ、みんな！！」

ルイーダ「よおし、やるぞお！！」

刹那「いつでもいいです！！」

マリオ「行くぞお！！」

刹那・ルイーダ「おお！！！！」

刹那は『夕凧』の鞘を引き抜き、それぞれの武器を掲げながら、突撃して行く敵軍に向かって走り出した。

刹那・マリオ・ルイーダ「せりゃああああ！！！！」

ドガアアアアアアアアアア！！！！

三人はたった一振りで、多くの敵を叩き飛ばした。

敵数人「ぎゃあああああ！！！！」

ハンマー亀「な、何い！！？」

鎧亀「い、一発でえ！！？」

マリオ「よおしっ！！ この調子で行けば問題ないぜ！！」

刹那「…あ、あの…その前にマリオさん、ルイーダさん…ちよつといいでしょうか？」

ルイーダ「ん？」

刹那「私はこの世界の事を何一つも知らない上、敵の事も余り知らないのですが…どう言うタイプなのか、

教えてくれませんか？」

マリオ「あ、そうか…刹那はこいつらの特徴とか知らないんだよな。分かった、戦いながら教えるよ！！」

ハンマー亀「え、ええい！！ 怯むなあ！！ いくら叩き飛ばされようとも数はこっちの方が上だあ！！」

『クリボー隊』、かかれえ！！」

クリボー達「うおおおお！！」

ハンマーを持った亀がそう指示すると、クリボー達が突撃し掛けた。

刹那「マリオさん、あれは…！？」

マリオ「あれはクリボーって言う敵だ！ この王国の住民だったんだけど、殆どは寝返ってしまつて、

今はクッパ軍団の一員としてっているんだ！ でも大丈夫、こいつらは通称『キング・オブ・ザコ』！

軍団の中でも最も弱い敵だから、たつた足一踏みで倒せちゃうよ！ でもだからと言って、油断は禁物だよ！

頭突きや噛み付き攻撃を仕掛ける事もあるから、威力が弱くても注意した方がいいよ！」

刹那「では、あの羽根の生えた方や、兜を被った方は…？」

マリオ「羽根の生えた方は『パタクリボー』！ 羽根の生えて空を飛べたクリボーって所かな？ まあ、距離問題になるけど、

体力は普通のとは変わらないから、問題はないよ！ で、兜を被った方は『トゲクリボー』で、

こちらのジャンプ攻撃から防ぐためにあらかじめ武装したタイプなんだ！ でも、体力はやっぱり変わってないから、

普通に攻撃しても問題はないよ！」

刹那「…分かりました、普通に攻略すればいいのですね？ では、早速何ですけど、ここは私にやらせてくれませんか？」

マリオ「え？ ああ、別に構わないけど…」

刹那「では……………」

彼女がそう言いながら、マリオとルイーダの前に立ち、『夕風』を構えた。

クリボー「何だあ！？ 見知らぬ女が急に前に出たぞ！？」  
トゲクリボー「構うか！！ 誰だろうが俺達の敵だあ！！」  
パタクリボー「敵は皆ぶつ潰す！！ 遠慮なくやつちまええ！！」  
そう言いながら、クリボー軍団は一人構えている刹那に向かって走り出した。

刹那「秘剣… 『ひゃっかりょうらん百花繚乱』！！」

チユドオオオオオオオオオオオオ！！

刹那は『夕凧』を振り出し、そこから発した『気』で直線状にいるクリボー軍団を叩き飛ばした。

クリボー軍団「あぎゃあああああああああ！！」

クツパ軍団「な、何い〜〜！！？」

刹那が全てのクリボー軍団を倒した後、技の効果により花卉を撒き散らした。

マリオ「おお！！ こりゃまたもやすごい技を出したなあ！」

ルイージ「って言うか、この花卉どっから来たの…？」

緑の亀「な、何だ！？ 一体何が起こったんだ！？」

鎧の亀「クリボー隊が一撃で全滅しちゃったぞ！？」

赤い亀「あの女、一体何をしたんだ！？」

ハンマー亀「え、ええい！！ 構うな！！ 元はと言えばクリボー隊が弱いだけだ！！ こうなったら全員総攻撃で行くぞお！！

クツパ軍団、纏めて突撃いいいい！！！！

クツパ軍団「うおおおおおおおお！！！！」

敵軍は再び雄叫びを出し、刹那とマリオブラザーズに向けて走り出した。

刹那「今度は亀軍団ですね！ マリオさん、あの敵達は…!?!」  
マリオ「ああ！ 赤や緑の甲羅を付けた亀は『ノコノコ』って言う敵だ！ 甲羅を身に付いているだけで防御力は高いが、  
体力的にはそれほど強くないよ！ でも羽根の付いた『パタパタ』は空中に浮いているから、距離的には気を付けて！」  
刹那「陸上にいるのはノコノコで…空中にいるのはパタパタですか………分かりました！」

マリオ「さて、こつちもそろそろ動きましようかね？」  
ルイージ「了解、兄さん！」  
彼らは手袋を直しながら、やる気満々に前に出始めた。 そんな彼らを見る刹那は、少しだけ頭を傾げた。

マリオ・ルイージ「行くぞお!! 『ファイアボール』!!」  
二人がそう言うと、マリオは手のひらから、ルイージは指打ちから赤と緑の火球を放ち、複数の敵に攻撃した。  
敵数人「熱ちゃちゃちゃああ!!」

刹那「なっ…!?! て、手から炎が…!?! マ、マリオさん、ルイージさん！ それって、魔法なんですか!?!」  
彼女は驚きながらマリオブラザーズにそう問い掛けた。  
マリオ「魔法？ いや、これ俺達の必殺技の一つだよ！ 『ファイアボール』と言って、火球を敵に撃ち放つ技なんだよ！  
元々は『ファイアフラワー』って言うアイテムを手に入れないと使えない技だったんだけど………。」

ルイージ「に、兄さん!! 危ない!!」  
マリオ「えっ!?!」

彼は慌てるルイージの指す方向へ振り向くと、複数の刺の付いた鉄の甲羅が回転しながらマリオ達に襲い掛かった。

刹那・マリオ・ルイーダ「うわあっ!!」

三人は間一髪に敵の攻撃を避け、甲羅は元の鎧を着た亀に戻った。  
鎧の亀「ちっ! よくも避けやがったな!」

マリオ「くっ…こいつら『トゲノコ』…!! また厄介な奴らのお  
出ましか…!」

刹那「トゲノコ…?」

マリオ「刺の付いた鎧を武装したノコノコだよ! だがこいつは普  
通よりも防御力が高くて、

普通の攻撃じゃビクともしないんだ! 特に刺が付いてい  
るからジャンプ攻撃は無理だし、

もちろん『ファイアボール』にだって耐えられてしまうよ  
!」

刹那「…なるほど…:…鉄を身に付いているだけで防御力が高いの  
ですね…?」

彼女は不敵な笑みを浮かびながら、マリオの前に立ち上がった。

刹那「マリオさん、ここは私に任せてください。彼らの事は、こ  
の私が倒します!」

マリオ「えっ!? で、でも、大丈夫なのか!? お前の刀じゃ、  
奴を傷付ける事すら出来ないかも知れないぞ!」

刹那「大丈夫です! じっくり見ててください!」

彼女はそう言いながら、『夕凧』を構えた。

トゲノコ「おうおう!! 早速スタスタにされたい奴がいるなあ?

だったら綺麗に八つ裂きにしてやるぜえ!!」

彼はそう言いながら、他のトゲノコ軍団と共に甲羅に引っ込み、回  
転しながら、構えている刹那に攻撃を仕掛けた。

トゲノコ「ケツ!! そんな刀で俺らを倒そうつてのなあ!? 無

駄だあ!! 俺らがこの鉄の甲羅を付けている限り、

傷一つも作れねえぜ!!」

刹那「…『夕風』に斬れぬ物など……ない！！　奥義、『斬鉄閃』  
！！」

ズドガアアアアアアアン！！

刹那が再び『夕風』振り出し、そこから発生した螺旋状の『気』で  
複数のトゲノコ軍団を、

鎧をボロボロにさせながら叩き飛ばした。

トゲノコ複数「ぐぎゃああああああああ！！！！」

ノコノコ「な、何だあ！？」

パタパタ「今度はトゲノコもやられたぞ！？」

ハンマー亀「ば、バカな！？　あいつらの鎧は物凄く硬いんじゃない  
かったのか！？」

トゲノコ「………そ…そんな………な…なぜ………斬れ…た………  
？」

ボロボロになった一体のトゲノコは、その言葉を刹那に言い残し、  
気を失った。

刹那「言ったはずだ。　私の『夕風』には、斬れぬ物などないとな  
！！」

ルイージ「す、すごおい！！　すごいよ刹那！！　まさかあんな硬  
いとトゲノコを刀一振りで薙ぎ倒せたなんて……！！」

マリオ「でも、以前君が使ってた………『斬岩剣』だっけ？　あれ  
と何となく似てるんだけど………

どう違うんだ？」

刹那「『斬岩剣』は刀に『気』を入れ込み、その力で岩を両断する  
事が出来るんです。

逆に『斬鉄閃』は、鉄を両断出来ますから……。」

ルイージ「うわっ！！ に、兄さん、刹那！！ 上、上え！！」  
彼が再び慌てながら上を指すと、マリオ達の真上から雲に乗った亀達が現れた。

雲の亀「くそぉ！！ よくもやってくれたな！！ これでも食らえ！！」

彼がそう言いながら、軍団揃って刺の付いた赤い玉を、真下にいるマリオ達に投げ付けた。

マリオ「わっ、危ない！！」

彼がそう言いながら、三人同時にその場から離れ、攻撃から回避した。だがその刺の玉が地面に着くと、

玉の姿が赤い刺付き甲羅の亀に変身した。

刹那「な、何ですかあれは！？」

マリオ「あれは『トゲゾー』だ！ 『ジュゲム』って言う、あの雲に乗った亀達が投げた、

『パイポ』って言う刺ボールから生まれた敵だ！ こいつらには刺を持っているため、

ジャンプ攻撃には通用しないんだ！」

刹那「…と言う事は、武器による攻撃を仕掛ければいいんですね？」  
マリオ「まあ、それもそうだけど……ここは俺達に任せて！ ルイージ、行くぜ！！」

ルイージ「オッケー、兄さん！！」

マリオ「食らえ、『マリオトルネード』！！」

ルイージ「行くよぉ、ルイージサイクロン！！」

その後、彼らは竜巻のように身を高速に回転させ、周囲にいたトゲゾー達を次々に叩き飛ばした。

ジュゲム「げげっ！！ トゲゾーがっ……！！」

刹那「さすがマリオさん！！ では、残るは奴らですね……！！」

彼女は真上にいるジュゲム達に見上げながら、『夕凧』を構えるが



……。

ルイージ「刹那、次は僕にやらせてよ！ あいつらには僕の取って置きの技でやつけるからさ！」

刹那「え？ あ、はい、分かりました……………」  
彼女は頷きながら、ルイージを前に出させた。

ジユゲムA「げっ！！ あ、あいつは、ルイージ！！ こ、これはヤバイかも…！？」

ジユゲムB「何がヤバイのさ？ あいつブラザーズの中でも臆病者だろ？」

ジユゲムC「『永遠の二番手』とも呼ばれるほどだからな！ 弱っちいに決まってるだろ？」

ジユゲムA「バカ！！ お前達あいつの実力知らないだろ！？ お前達あいつを舐めたらとんでもない事に…！！」

ルイージ「悪いけど、もう聞こえてるんだけどねえ？」  
彼がそう言うと、ジユゲム軍団は彼の方へ振り向いた。

ルイージ「さつきから僕の事をバカにしてるけど、だからと言って何も知らないみたいだねえ？ ならせつかくだから、

お前達には僕の取って置きの技を味わってもらおうよ？  
こつ見えても僕は昔とは全然違うからねえ！！」

彼が不敵な笑みを浮かびながらそう言うと、両手から緑色に轟く電撃が流れ始めた。

ジユゲムB「な、何だ…？」

ジユゲムC「あのバカ、何する気だ…？」

ジユゲムA「や、ヤバイ！！ みんな逃げ……………！！」

ルイージ「逃がさないよお！！ 食らえ、『サンダーボール』！！」  
彼が両手に緑色の電気を溜め込んだ後、両手から電気の球を放ち、複数のジユゲム軍団を感電させた。

ジユゲム複数「あびやびやびやびやああああああ！！！」

その衝撃で乗っていた雲が消滅し、ボロボロになった複数のジユゲムはそのまま地面に墜落した。

ハンマー亀「何い！？ 何だ今の攻撃はあ！？」

トゲノコ「あの緑の髭から雷が……！？」

ノコノコ「何だよあれ！？ あんなの見た事もないぞ！？」

刹那「す、すごい！！ ルイージさんの手から雷が……！！」

マリオ「さすがルイージ！ あの技を使うとは懐かしいなあ〜！」

刹那「えっ、知ってるんですか！？」

マリオ「ああ、実はルイージには『サンダーハンド』って言う特殊な手袋を付けていて、

以前\*『マメーリア王国』って言う、キノコ王国の隣国に行った時に、『サンダーマスター』って言う奴から貰ったんだ。

その手袋を身に付けているだけで、雷属性の攻撃が使えるんだ。」

刹那「な、なるほど……。」

\*『マリオ&ルイージRPG』より参照。

ルイージ「って、兄さん！！ 後ろお！！」

マリオ「えっ！？ わっ！！」

ルイージの警告により、後ろへ振り向いたマリオ。そこで突然一本の骨が投げられ、マリオは素早くハンマーで弾き飛ばした。その骨が地面に落ちると、それを見た刹那は啞然としていた。

刹那「ほ、骨……！？」

彼女とマリオは見上げると、前方から複数のゾンビ亀達がゆっくりと前進していた。

ゾンビ亀「……ピーチ城……潰ス………まりおぶらざーず……倒ス………！！」



トゲノコ「刀一振りでやられただとおおお!?」

マリオ「うお〜、すっげえ!!! あのカロンでさえも倒せたと  
はあ!!!」

ルイーダ「しかも…どうなってるの? あいつら、バラバラになっ  
ても復活しないよ!？」

刹那「『斬魔剣』は物質を斬る『斬岩剣』と『斬鉄閃』とは違い、  
霊体などの非物質的な物を斬る事が出来るんです。

つまり、彼らを操っていた霊気を全て薙ぎ払ったのです。

言わば、悪霊退治などでよく使ってましたから……。」  
ルイーダ「悪霊退治って…何? 君って、ゴーストハンターか何か  
なの?」

刹那「あ、いや、別にそう言う訳では……。」

ハンマー亀「く、くそお!!! こうなったら……『ハンマーブロ  
ス』隊、行けえ!!!」

ハンマーブロス隊「おおおおお!!!」

彼らが再び雄叫びを出すと、手に持っていたハンマーを刹那とマリ  
オブラザーズに投げ飛ばした。

マリオ「わわっ、危ない!!!」

三人は雨のように降りかかるハンマーを見上げると、急いでその場  
から離れ、回避した。

だがハンマーブロス達は止める事なく、大量のハンマーを三人に投  
げ付けた。その間に刹那は『夕風』で、

マリオブラザーズはハンマーで降り続けるハンマーを追い払って  
いた。

刹那「こ、今度は何なんですか、あいつらは…!？」

マリオ「奴らはハンマーブロス! 名前の通りハンマーを武器に使  
う亀だ! ただこいつらはノコノコとは違って上位的な敵で、

大量のハンマーを投げ付けて来るんだ! そのため隙を出

さないから近付き難いんだよ!」

刹那「では、奴らがハンマーを投げるのを止めさせればいいんですね? それでしたら、ここは私に任せてください!」

いい作戦があります!」

マリオ「OK! 頼んだよ!」

刹那「はい!」

彼女が頷いた後、早速『夕凧』を構え、降り続けるハンマーを素早く避けながら、ハンマーブロス達に向かって駆け出し始めた。

ハンマーブロスA「ん!? な、何だ!?!」

ハンマーブロスB「あの女、俺達の攻撃を交わしながらこっちに向かって来るぞ!?!」

ハンマーブロスC「ヤ、ヤバイ!!! まさか、必殺技でも使うんじゃない!?!」

敵軍は多少慌てている間、刹那は突然高く飛び上がり、『夕凧』を振り上げた。

刹那「秘剣、『百花繚乱!』!」

ハンマーブロス達「ひっ!」

攻撃を仕掛ける刹那に対し、敵軍は思わず目を閉じ、実を防ごうとしたが……………。

スタツ!

攻撃を仕掛けようとした刹那は、『夕凧』を上げたまま、そのまま着地した。

ハンマーブロス達「……………へ?」

刹那「今です、マリオさん、ルイーダさん!」

マリオ・ルイーダ「よっしゃああ!」

刹那が彼らを呼び出すと、マリオとルイージは真上から高く飛び上がり、敵軍に襲い掛かった。

ハンマーブロスA「な、何いいいい!?!」

ハンマーブロスB「フェイントだとお!?!」

マリオ・ルイージ「ウルトラジャンプ!?!」

ハンマーブロス達の真上に飛び上がったマリオブラザーズは、次々の敵達の頭に踏み続けた。しかも一踏みでありながらも、威力が高いためか、倒される複数の敵もいた。

ハンマーブロス複数「いげげげぎゃあああ!?!」

マリオ・ルイージ「お次は『ヒップドロップ!?!』」

その後二人は身を回転し、お尻を出しながら急降下し、複数のハンマーブロス達を叩き飛ばした。

ハンマーブロス複数「うぎゃあああああ!?!」

ノコノコ「ひいひい!?! ハンマーブロスまでえ!?!」

トゲノコ「な、何て奴らなんだ!?!」

刹那「やりましたね、マリオさん、ルイージさん! 見事な攻撃でしたよ!」

マリオ「へへっ、でも刹那だってすごいかったよ! まさかフェイントで相手を脅かすなんて!」

刹那「いえ、その方が奴らも少しだけ怯むかと思ひまして!」

ジユゲム「こ、こいつらマジで強いぞ!」

ノコノコ「特にあの女、物凄く強え!」

トゲノコ「こりゃマジで歯が立たないかも!」

ハンマーブロス「え、ええい!! まだまだ引くな、野郎共お!!」

このまま引き下がればクツパ様に汚名をかかせるだけだあ!! こうなったら情け無用!!

全員容赦なく奴らを叩き潰せえ!!」

クツパ軍団「うおおおおおおお!!」

もはやヤケクソになったのか、敵軍は再び大きな雄叫びを上げ出し、刹那とマリオブラザーズに向けて駆け出し始めた。

ルイージ「また来たよ、兄さん！」

マリオ「へッ、数で勝とうだなんて、俺達はそこまで脆くないぜ！

こっからが大乱闘だ！ 行くよ、刹那！」

彼がそう言いながら、気合を入れながらハンマーを構え出した。

刹那「はい！！」

そんな彼女も、自信満々に『夕風』を構え出した。

…ピーチ城バルコニーにて

地上からでは多くの敵軍に囲まれながら、刹那とマリオブラザーズは次々の敵達を難なく薙ぎ倒し続けていた。

その間にピーチ城のバルコニーでは、のどかと夕映、そしてピーチ一行が遠くからその乱戦を観戦していた。

キノピオ「姫様、キノじいさん、あれを見てください！！」

あそこでマリオブラザーズがクッパ軍団を次々と薙ぎ倒しています！」

キノじい「おお、確かにそうじゃ！！ あの赤と緑の服、確かにマリオブラザーズですじゃ！！ これはありがたい……………」

このまま彼らに任せれば、この城と姫様もご安全になりますじゃ！」

のどか「あれが先程仰っていたマリオブラザーズですか？」

キノじい「そうですじゃ！ 彼らはこのキノコ王国と姫様を守るスーパー兄弟なんですじゃ！」

夕映「スーパー兄弟……ですか……。確かにこう見れば強そうですね、外観的にはちよつと……。」  
そんな彼女は戦うマリオとルイーダを見ながら、再び疑問を言い出し始めた。

キノピオ「でも……何でしょう？ マリオブラザーズと一緒に戦っているあの少女は誰でしょうか？」

彼女がそう言うと、のどかと夕映は、戦闘中の刹那の方へ見詰めた。

夕映「………つて、あれは刹那さんではないですか！？」

のどか「ホントだ！ あの黒いサイドテール、それに手に持つてるあの刀……確かに刹那さんだ！」

ピーチ「え、知ってるの？」

夕映「はい、私達と同じ学園に通っている同級生で、友達です！」

のどか「でも何で刹那さんがここに………つて、ちよつと待って！」

その後、彼女はキノピオの方へ振り向き、問い掛けた。

のどか「あの、確かさつき、あのマリオブラザーズって言う人達と一緒に、私達と同じ格好をした二人がいたと言いましたよね！」

そのもう一人つてもしかして、長い黒髪をしていましたか

！？」

彼女の言うには、刹那と言えば木乃香………常に二人は供に行動しているのです、それに連想しながらキノピオに問い掛けた。

キノピオ「え………ああ、確か木乃香さんって言う方ですね？ え

え、確かにマリオブラザーズと一緒にいましたよ！」

夕映「ホントですか！？」

のどか「やっぱり………刹那さんがここにいてるって事は、このかさんもここに居るんだ！」

夕映「でもどこにも見当たらないと言う事は………多分安全な場所へ避難したのでしょうか。」



キノじい「こうしてはいられませんぞ！！　クツパ軍団と戦うマリ  
オブラザーズのために、応援しますぞ！！」  
キノピオ「マリオさあ〜ん、がんばってくださいさあ〜い！！」  
キノピコ「ルイージさんもがんばってえ〜！！」  
ピーチ「がんばってマリオ〜！！」  
デイジー「ルイージもがんばれ〜！！」  
夕映「のどか、私達も応援するです！！」  
のどか「うん！　刹那さん、がんばってえ〜！！」  
夕映「がんばれですう〜！！」  
声は乱戦中の刹那とマリオブラザーズまで届かなかったが、それ  
も彼女達は応援した。

…飛行船にて

その間にプロス隊長が所持する無線に、地上にいる敵軍からの連絡  
が届いて来た。　その報告を耳にしたプロス隊長は、  
思わず驚愕した。

プロス隊長「な、何だってええええ！？」

クツパ「ん？　どうした、プロス隊長よ？」

彼は腕を組みながら、愕然とするプロス隊長に振り向いた。

プロス隊長「た、た、大変です、クツパ様！！　今地上からの連絡  
が来ましたが、

我が軍勢がマリオブラザーズに圧倒されています！！」

クツパ「な、何い！？」

カメック「マ、マリオブラザーズだとお！？」

プロス隊長「しかもそれだけではありません！　何やらマリオブラ  
ザーズ側には見知らぬ女もいて、

そいつもかなり強いとか……！」

カメック「見知らぬ女だと？ そいつは何者なんだ？」

クツパ「ええい、何がどうあれ、あの憎きマリオブラザーズが我輩の邪魔をしては、絶対に許さん！！」

今直ぐ『クツパクラウン』を用意しろ！！ 今から地上に

降りて奴らを蹴散らしてくれるわあ……！！」

カメック・ブロス隊長「了解……！！」

彼らはそう言いながら、クツパに向かって敬礼をした。

……地上にて

刹那とマリオブラザーズの活躍により、クツパ軍団はほぼ全滅となっていた。

刹那「ふう……どうにかして倒せましたね！」

マリオ「そうだな！ 後は………。」

ルイージ「あいつだけ……！！」

三人は振り向くと、そこには黒い鉄の甲羅を身に付けた、小さくて可愛らしい四速歩行の亀がいた。三人に見られた事から、

早速慌て始めた。ところが、何者かがその亀の背後に現れ、拾い上げた。その人物の正体は……… 木乃香であった。

木乃香「ありや……この亀めっちゃ可愛エエわあ……！ 顔が可愛らしゅうて溜まらんわあ……！」

彼女はそう言いながら、多少嫌がるその亀の顔に頬擦りをし始めた。

その瞬間を見ていた刹那とマリオブラザーズは、思わず啞然としていた。

刹那「お、お嬢様……!?!」

ルイーダ「ちょ、ちょっと大丈夫なの、そんな事して!?!」

マリオ「……まあ、向こうが何もして来ないから、多分大丈夫かと……」

刹那「あの、マリオさん……あの敵は……?」

マリオ「ああ、あれ? あれは『メット』と言って、クツパ軍団の中でも硬い甲羅の持ち主なんだ。甲羅は鉄で出来てるから、

俺の『ファイアボール』やルイーダの『サンダーボール』  
でさえもビクともしないんだ。ジャンプで踏み付けて、

そのまま甲羅の中に引っ込ませるだけが唯一の対処法なんだけど……まあ、あの様子だと害はなさそうだけどな……。」

刹那「は、はあ……。」

そう言いながら、二人はメットに懐いている木乃香を見て、苦笑いした。

木乃香「なあ、せつちゃん! これ飼ってもエエ?」

刹那「ダメです。」

ブロロロロロロロオ……………!

その後、上空からプロペラのような音が流れ、刹那と木乃香、そしてマリオブラザーズは空へ見上げた。

すると四人はある物を目の当たりにし、愕然とした。それはピエロのような顔が描かれた白い飛行物体で、

その機体の下に緑色の小さなプロペラを回転させながら飛んでいた。  
しかもその飛行船に乗っていたのは、

あのクツパであった。そんな彼は飛行船の降下中、両腕を組み、不敵な笑みを浮かびながらマリオ達を見下ろしていた。

ちなみにその間に木乃香が抱いていたメットは、隙を狙って木乃香

から離れ、逃げ出した。

刹那「マ、マリオさん！ あ、あれは一体……!?」  
マリオ「ク、クツパだ!!」

その後、クツパは着地したクツパクラウンから降り、四人の前に立ち上がった。そして彼の真上から、空飛ぶ箒に乗ったカメツクが降りて来た。カメツク「控え控えい、そして跪けい、愚かな人民共お!! この者を何方と心得る!？」

我らカメ族を率いる最強の王者であり、後にこのキノコ王国の天下を取るため、新たなる王となる……

偉大なるクツパ大魔王様だぞお!!

クツパ「クツクツクツ……久しぶりだな、我が宿敵ライバルマリオよ！」

彼は腕を組み続き、笑いながらマリオに睨み付けた。

マリオ「ああ……相変わらずだな、クツパ！」

彼も不敵な笑みを浮かばせながら、クツパに睨み返した。

クツパ「今日こそこの王国を我輩の物にしようと思ったのに、良くぞ我輩の可愛い部下共を痛み付けてくれたな！」

マリオ「フンッ！ この王国や姫様を守るためなら、いつだってお前の邪魔するぜ!!」

ルイージ「あわわわわ、ク、クツパだあ……!!」

彼は怯えながらそう言った。

刹那「あれがクツパと言う敵ですね……!!」

木乃香「へえ、あれがクツパっちゅー人(?)なんやあ……予想したのと全然ちやうなあ。」

ルイージ「へ？ 予想って、何に？」

木乃香「いやあ、もうちょっと可愛らしいんかなと思ったんやけど……後、韓国料理とか……」

ルイージ「はあ？」

彼は呆れた表情をしながらそう言った。

クツパ「ガツハツハツハツハツ！ しかもこれは何だあ？ 貴様らの方に二人の可愛い女がいるとはなあ。」

ピーチ姫やデイジー姫を諦めてとうとう他の女と付き合うようになったのかあ？」

彼はマリオとルイージの側にいる刹那と木乃香を見ながら、嘲笑うかのようにそう言った。そしてそれに対し、マリオ達は赤面した。

マリオ「なっ……ち、違う！！ こいつらは友達で、異国から来た客だ！！ ベ、別に何の特別な関係とか……！！」

クツパ「ハツ！！ まあ良い！！ 例え何が何だろうが、我輩にはどうでもいい事だ！ 貴様が我輩の邪魔をし、

我がクツパ軍団を好き放題にした以上、このまま許す訳には行かん！！ 今日と言う今日こそは貴様を倒し、

キノコ王国とピーチ姫を我輩の物にしてやる！！ もちろん例え誰であろうが、キノコ王国にいる者は全て我輩の敵！！

今直ぐこの場でぶっ潰すまでよ！！ カメック、お前は先に飛行船へ戻つてろ！

こいつらの始末はこの我輩がやる！！」  
カメック「ははあっ！！」

彼がクツパに押んだ後、箒で飛行船へ戻って行った。

クツパ「さあ、早速始めようぞお！！ 食らえ、『スピニングシエル』！！」

彼が威嚇した後、体を刺甲羅の中に引っ込み、急回転しながら猛スピードで四人に襲い掛かった。

マリオ「わわっ、みんな、避けるお！！」

ルイージ「ひい~~~~！！」

刹那「お嬢様、危ない!!」  
彼女は急いで木乃香を抱き上げ、その場から横へ飛び出した。その同時にマリオブラザーズも飛び出し、高速に回転するクツパの攻撃から回避する事が出来た。

木乃香「危ない所やったわあ……」。

彼女がそう言った後、刹那は彼女をゆつくりと下ろした。

刹那「けどこのままでは危険です……お嬢様、今直ぐこの場から離れてください! ここは私が……!」

木乃香「…嫌や! ウチもせつちゃんと一緒に戦う!」

刹那「な、何を仰るのですか!? 相手は危険です! お嬢様まで巻き込んで……!!」

木乃香「せつちゃん、この前ウチが言ったはずえ! 『せつちゃんだけ危険な目に遭わせるのは嫌や……』

ウチもせつちゃんを守りたい!』って! せやからウチもせつちゃんと戦う!!」

刹那「お嬢様……」。

彼女はその間に黙り込んだが、その後笑みでこう答えた。

刹那「分かりました、一緒に戦いましょう!」

木乃香「うん!」

彼女は笑顔で頷いた。

刹那「もしそうならば、魔法です!!」

木乃香「オツケー!!」

刹那・木乃香「『<sup>アテアット</sup>来れ』!!」

二人は呪文を唱え、『ネオ・パクティオカード』を発動させた。

発動中に二人の体が光り始め、

マリオブラザーズとクツパはその眩しい閃光に対し、目を手で塞いだ。

クツパ「むおっ!? な、何事だあ!?!」

マリオ「せ、刹那、木乃香!？」  
ルイージ「な、何い!？ 何が起こってるのお!？」

そして光が収まった後、木乃香と刹那は制服姿から違う姿に変身した。木乃香は陰陽師のような白い装束姿をしていて、

手に南京玉すだれを所持していた。そして刹那は白い道着を着ていて、背中に天使のような白い翼を生やしていた。

この姿によると、二人は『ネオ・パクティオカード』最強のカード、『アーマーカード』の姿になっていた。

刹那「この姿は……………」

木乃香「せつちゃん、これは『アーマーカード』の姿え！ ウチら『アーマーカード』を引いたんや！」

刹那「確かに……………これなら勝てるかもしれませんね！」

マリオ「えっ!？ せ、刹那…木乃香…なのか!？」

ルイージ「な、何その格好!？ しかもその羽根みたいなのは……………」

二人は初めて見る刹那と木乃香の『アーマーカード』姿に対し、動揺していた。

刹那「あつ、これですか？ これは『アーマーカード』と言う姿で、

『ネオ・パクティオカード』による魔法で変身した姿なんです。」

マリオ「魔法って……………君達、魔法使えるの!？」

刹那「え、ええ…いや、ただ、正確的には私達は魔法使いではないのですが……………あの、すみません、

この事は後で説明しますんで……………」

クッパ「何だあ!？ あの小娘共、急に光り出した上に違う格好に変わるとは…コスプレのつもりかあ？

フンツ、それがどうした!？ 例え姿が変わろうが、所詮

我輩の敵ではない!!

ギツタンギタンのボロ雑巾になるまでよお!! 『クツパ  
プレス』!!」

その後、彼は口から灼熱の火球を吐き、四人に襲い掛けた。

木乃香「何や!? 口から火が:!?」

マリオ「みんな、危ないっ!!」

刹那「お嬢様、捕まってください!」

彼女は再び木乃香を抱き上げ、マリオブラザーズと供に飛び上がり、火球を回避した。その後、着地した刹那は、再び木乃香を下ろした。

クツパ「逃さんぞお!! 『スピニングシエル』!!」

彼は再び体を刺甲羅の中に引っ込み、急回転しながらマリオと刹那に襲い掛かった。

マリオ「また来るぞ、刹那!!」

刹那「ならばあの甲羅を両断するまでです!! 奥義、『斬岩剣』!!」

彼女は『夕凧』に気を溜め込み、急回転するクツパに攻撃するが、逆に攻撃が弾き飛ばされた。

刹那「なっ!? うわっ!!」

マリオ「おわっ!!」

攻撃が弾き飛ばされた事で驚愕した刹那は、マリオと供に襲い掛かるクツパの攻撃を回避した。

刹那「バ、バカな!? 今のは効いたはずでは:!? くっ、こっ  
なったら:奥義、『斬鉄閃』!!」

次に彼女は再び気を『夕凧』に溜め込み、急回転するクツパに攻撃するが、またもや攻撃が弾き飛ばされた。

刹那「なっ:そ、そんなバカな:!? どんな硬い物を一気に両断出来る『斬岩剣』や『斬鉄閃』が効かないなんて:!:?」

マリオ「無理だよ! クツパの甲羅はノコノコとは違って物凄く頑



丈なんだ!!」

クツパ「グツハツハツハツ!! そんな安っぽい包丁みたいな刀など、我輩のダイヤモンドのように硬い甲羅に、

掠り傷でさえも作らんぞ!! こいつでも食らうがいい!

! 『クツパハンマー』!!」

彼は元の姿に戻り、無数の大きなハンマーをマリオと刹那に投げ付けた。

刹那「わわっ、いきなりハンマーですか!？」

マリオ「気を付ける! あのハンマー、ハンマーブ羅斯のよりでかいからな!!」

二人は慌てながらも、振り続ける大型ハンマーを回避続けた。

クツパ「どうした!? ハンマーのせいで自由に動けないか!？」

ならそのまま我輩の下敷きになるが良い!!」

彼がそう言った後、マリオと刹那の真上まで高く飛び上がった。

それに気付いたマリオと刹那は、

クツパがいる真上の方へ見上げた。

クツパ「『クツパドロップ』!!」

マリオ「わああああ、に、逃げるお!!」

刹那「うわあっ!!!!」

二人は急いでその場から離れ、クツパはそのまま急降下で地面に激突した。

木乃香「せつちゃん!! うう~~~~、もう怒ったえ!! これ  
でどうや!!」

彼女は南京玉すだれを振り出し、それを伸ばしながら、クツパの身を強く縛り付けた。

クツパ「ぐっ!？」

刹那「お嬢様!」

木乃香「せつちゃん、今の内に早よう!!!」

クツパ「何だ、この変な物はあ!?! こんな物で我輩をとっ捕まえ

ようとは……………片腹痛いほど甘いわあ!!」

彼がそう言った後、簡単に両腕を上げ、縛り付けていた南京玉すだれをぶち破った。

木乃香「なっ…!!?」

クツパ「甘ったれた貴様はバーベキューにでもなってるお!!」  
クツパプレス!!」

彼は再び口から火球を吐き出し、それを木乃香に向けて放った。

刹那「お嬢様あ!!!!」

ルイージ「危ない、木乃香あ!!」

その間に彼は木乃香の前に駆け出し、背負った『オバキウム』を取り出し、火球を吸い込んだ。

クツパ「何いつ!?!」

刹那「ルイージさん!!」

マリオ「ナイスタイミング、ルイージ!!」

ルイージ「このまま吸い込ませちゃったら悪いから、返してやるよ!!」  
『炎のエLEMENT』!!」

その後、彼はオバキウムから吸い込んだ火球を放ち、クツパに攻撃した。

クツパ「ぐおっ!?!」

そしてその火球はクツパに命中するが、ダメージは今一のようにだった。

木乃香「わあ、すごいやん、ルイージさん! その掃除機、一体何なん!?」  
すごい機能とか付いとるみたいやけど!」

ルイージ「これは『オバキウム』と言って、『オヤ・マー・サイエンス社』が開発した掃除機なんだ!

元々はお化けを吸い込ませるための幽霊退治専用道具だったんだけど、他にもエレメントを吸い込んで、

それを武器に使う事が出来ると言う優れ物なんだ! 今じゃ僕の愛用の武器として使ってるけどね!」

クツパ「んぐう……おのれえ……！ マリオブラザーズの日陰者の分際で汚い真似をお……！！」  
ルイージ「だ、誰が日陰者だあ！！ 緑だって人気者でもあるんだぞ！！」

それにお前だつて汚い真似を十分やり捲くつてるじゃないか！！」

クツパ「ハッ！！ 掃除機を背負った影の薄いお留守番主義者の貴様には言われたかないわあ！！」

彼は嘲笑しながらそう言い、それに対してルイージは更に怒り出した。

ルイージ「言わせておけばあ……！！」

彼はそう言いながら、身をしゃがんで力を蓄え始めた。

ルイージ「食らえ、『ルイージロケット』！！」

そして彼は自らの頭をクツパの方へ向け、ロケットのように猛スピードで飛び上がった。その瞬間を見た木乃香は、

思わず愕然とした。

マリオ「わっ、バ、バカ！！ 迂闊に奴に近づくな！！」

だが、結果は遅し。クツパは接近して来るルイージから素早く回避し、その隙に彼の襟元を掴み取った。

ルイージ「ぐわっ！？」

クツパ「隙ありい！！」

その後クツパはルイージを掴んだまま高く飛び上げ、回転し始めた。

クツパ「『ダイビングプレス』！！！！」

ドガアアアアアアアン！！！！

そしてクツパはルイージを体の下に敷かせ、そのまま急降下で地面に叩き付けた。

ルイージ「ぐぎゃああああ！！！！」

マリオ「ルイーダさん!!」  
刹那・木乃香「ルイーダさん!!」

その後、地面に大きな窪みが出来、そこからクツパが這い上がって来た。一方押し潰されたルイーダは、

その窪みの中に倒れたまま、気絶していた。

クツパ「フンッ、日陰者は日陰者らしく寝ているがいい!!」

刹那「何て酷い事を……………」

マリオ「くっ……………クツパめえ…よくも俺の相棒を……………!!」

彼はそう言いながら、強く握り締めた拳を震わせながら、クツパを睨んで怒り出した。

クツパ「どうしたマリオ、パーティはまだ終わってないぞ! 文句があるならとつと掛かって来るがいい!!」

彼はそう言いながら、マリオに挑発した。

マリオ「言われなくても掛かって来るさあ!!」

そして彼はハンマーを構えながら、刹那と共にクツパに駆け付けた。

…飛行船内部にて

一方、飛行船内部で仕事をしていたコクツパ軍団は、窓からマリオ達とクツパの戦いを観戦していた。

モートン「おい、見るよみんな! 父ちゃんがあのマリオブラザーズと戦ってるぜ!？」

ルドウィッグ「何い!? 親父が戦ってるだお!? なら俺達も応援しねえとなあ!!」

ロイ「って言うか、あの羽根の付いた姉ちゃん何だあ!? 知らね

えけどすつげえカツコイいな！」

レミー「とうちゃんがんばれえ〜！！ ヒゲオヤジなんかにまけるなあ〜！！！」

クツパ「ちよ、ちよっと兄ちゃん達い〜！ 僕にも父さんの戦い見させてよあ〜！！！」

彼は窓に囲いだコクツパ軍団の背後で跳ね回りながら、必死そうにそう言った。

ルドウィッグ「るっせえ〜な！ お前は反対側の窓でも見とけよ！」

クツパ「向こうじゃ見えないよ！！ ねえ、僕にも見させて

よあ〜！！ 僕にも父さんの戦いを見る権利あるんだよあ〜？！」

モートン「ねえから見させねえんだよ！！！」

ロイ「てめえは反対側に行ってるってんだ！！！」

レミー「いつてるいつてるお〜」

クツパ「ムキ〜！！！！ 見せるって言うてんだろあ〜

〜！！！！！」

彼はとうとうムキになりながら、ルドウィッグ達と兄弟喧嘩をし始めた。

イギー「ああ〜、また兄弟喧嘩が始まつちやったよあ〜！！！」

ラリー「ウエンディ、何とかしてよあ〜！」

二人は兄弟中の姉御肌であるウエンディに頼ろうとするが……………。

ウエンディ「きゃあああ！！ マリオ様だわあ〜！！！！ 私の

愛しのマリオ様ががんばってえ〜〜ん！！！」

彼女は目からハートを飛ばしながら、敵であるはずのマリオを応援していた。

イギー「出たよ、ウエンディの熱烈マリオファン魂が……………。」

ラリー「ダメだこりゃ……………」

二人はそんなメロメロ状態になっているウエンディに対し、呆れ切っていた。

…ピーチ城バルコニーにて  
地上からでは、マリオと刹那と木乃香は、クツパとの激しい戦いを  
繰り広げていた。その間にのどかと夕映、  
そしてピーチ一行は、バルコニーからその戦いを遠くから眺めてい  
た。

キノピオ「ルイーダさん、クツパにやられてしまいました!!」  
デイジー「そんなっ…ルイーダが……!!?」

彼女はその報告に対して、シヨックを受けていた。

キノピオ「ルイーダさん、今どうしてるの!?!」

キノピオ「分かりません…窪みの中で倒れたままです!」

キノじい「うむう…何て事ですよ!! あの見知らぬ少女  
達、急に姿を変えたようじゃが、

一体何が起こったのか分からん! いや、それは良しと  
して……

マリオ殿とあの少女達は今でも苦戦してある! まさか  
あのクツパめ、

あそこまで強くなったとは思わんかったですよ!!

このままでマリオ殿もあの少女達も、

ルイーダ殿同様にやられてしまいますぞ!」

ピーチ「マリオ、がんばって……!!」

彼女は手を強く組みながら、必死に苦戦中のマリオを応援していた。

その間にのどかと夕映は、

そんな困難中のピーチ達を心配そうに見詰めていた。

のどか「ど、どうしよう…このままだと、あのマリオとか言う人だ  
けじゃなく、

せつなさんとこのかさんがやられてしまっよあ…!!」  
夕映「ですね……………いくら向こうが『アーマーカード』を引いたと  
しても、あの怪獣には通用しないようですし……………

こうなったら私達も黙っちゃいられないです！ のどか、私  
達も魔法を……………!!」

のどか「うん!!」  
彼女は頷きながらそう言った。

のどか・夕映「『<sup>アテアット</sup>来れ』!!」

二人は呪文を唱え、『ネオ・パクティオーカード』を発動させた。  
発動中に二人の体が光り始め、

それに気付いたピーチ一行は、その眩しい閃光に対し、目を手で塞  
いだ。

ピーチ「きゃっ…!! な、何、この光は…!？」

デイジー「ちょ、ちよっと、いきなり何なのこれえ!？」

キノピコ「きゃあっ……………ま、眩しいですう…!!」

キノピオ「キ、キノじいさん、これ一体……………!？」

キノじい「わ、分からん!! さっきあの少女達も同じ事をしてお  
つたが、何なのかさっぱり……………!!」

そして光が収まった後、のどかと夕映は制服姿から違う姿に変身し  
た。 のどかはピンクの魔導師風の服装に、

ウサギリユツクを背負いながら、手に一冊の本を所持していた。  
そして夕映は黒い魔法使い風の衣装に、

頭に化け物風なとんがり帽子を被り、手に三日月が先端に付いたス  
テッキを所持していた。 この姿によると、

二人は『アーマーカード』を引いたようだ。

のどか「あっ! ゆえゆえ、この姿ってまさか……………!!」

夕映「ええ…恐らく、私達は『アーマーカード』を引いたようです！」

キノじい「な、何じゃ!? これはどう言う事ですよ!?」

ピーチ「の、のどかと…夕映…なの…!?」

デイジー「ちよ、ちよつと…何なのその格好は…!?」

ピーチ一行は、のどかと夕映の『アーマーカード』姿を見て、啞然としていた。

夕映「あつ、申し訳ございません…言い忘れましたけど、私達、

『ネオ・パクティオーカード』と言う魔法カードが使えるんです。」

のどか「これがあれば、魔法が使えるんです！」

キノじい「ま、魔法ですとお!?」

キノピオ「と言う事は…。」

キノピコ「お二人は魔法使いなんですか!?」

夕映「いや、正確にはそうじゃないんですが…。」

彼女は『ネオ・パクティオーカード』の事をピーチ一行に説明しようとするが、

状況的にはそんな事をしていないと判断し、会話を一時中断した。

夕映「と、とにかく! この姿さえなれば、敵の弱点を確認する事が出来るかもしれません! のどか、

アーティファクトの『ディアリウム・エーユスいどのえにつき』を使って情報を調べるです!

私は同じ効果を持つ『オルビス・セクスアリウム・ピクトゥス世界図絵』を使って、一緒に調べるです!」

のどか「分かった! 一緒に探せば早いもんね! それじゃ、始めるよ!」

彼女はそう言った後、空中に浮かぶ数冊の本を呼び寄せ、その中の



一冊を取り出し、ページを捲りながら調べ始めた。  
同じく夕映は一冊の本を取り出し、その開いた本から様々な情報が掲載されたホログラムのような映像を映し出し、それを触れながら調べ始めた。その間にピーチ一行は、魔法を使うのどかと夕映を見て、更に愕然としていた。

デイジー「な、何！？ 今度は何なの！？」

ピーチ「突然宙に浮かぶ本が現れたり……………本から変な映像が出て来たり……………」

キノじい「ちよ、ちよっとお主達！ これは一体何なのか教えて……………」

そんな彼は情報を調べている二人に割り込もうとするが……………。

夕映「すみません、今話している場合ではないです！ これに関しては後で説明しますから……………！」

のどか「でも……………なかなか見付からないなあ……………。」  
夕映「絶対にあるはずですよ！ この前なんてのどかは\*エヴァさんの情報を調べたではないですか！

あの時そこまで出来たのなら、この本にもあの怪獣に勝てる情報が載ってるはずですよ……………！！」  
二人は必死にページを弄りながら情報を探るが……………。

\*アニメ第二期、第20話より参照。

夕映「あ、ありました！！ 内容によると……………」  
『クツパの背後……………つまり橋の反対側にある斧を触れば、橋が突然と消滅し、

クツパをマグマの底へ沈み、その後はクリアです。』と書いてあります……………？」

のどか「……………橋？ 斧？」

夕映「……………それ……………どこにあるんでしょう……………？」

二人は少々混乱しながら、静まり返った。恐らく夕映が見付けた

情報は、

『スーパーマリオブラザーズ』によるボス戦の攻略法だと思われる。  
夕映「……………」と、とりあえず、これは違うですね！ もっと奥深く探るです！…！」

のどか「う、うん！！」

内容が役に立たなさそうと思ったのか、二人は再びページを弄り始めた。

のどか「あ、あつた！！ これならどうかな？ 『クッパの背後に移動し、尻尾を掴んでジャイアントスイングを行い、

そのまま爆弾の方へ投げ飛ばすと倒せます。』って……………」

夕映「……………爆弾？」

のどか「……………何の事だろ……………？」

二人は再び混乱し、沈黙になった。恐らくのどかが見付けた情報は『スーパーマリオ64』のクッパ戦の攻略法だと思われる。

夕映「……………まあ、とりあえず爆弾は置いて……………その攻略法、多分使えそうです！」

のどか「そ、そうだね！ 早速この事をせつなさん達に伝えよう！！」

二人はそう決めると、ピーチ達に振り向いた。

夕映「すみません、マイクとかメガホンとかないですか！？」

キノピオ「え？ あ、ええ、一応持ってますけど……………」

のどか「お願いします、貸してください！！」

…地上にて

一方マリオ、そして刹那と木乃香は、引き続き強敵クツパと戦っているが、三人とも少々ボロボロになりながら、苦戦していた。

マリオ「『ガツーンナゲーリ』!!」

刹那「『斬岩剣』!!」

マリオはハンマー、刹那は『夕凧』で、強力な攻撃をクツパに仕掛けようとするが……。

クツパ「甘いわあ!!!!」

彼は腕を強く振り出し、マリオと刹那を叩き飛ばした。

マリオ「ぐわっ!!」

刹那「うわっ!!」

木乃香「せつちゃん、マリオさん!!」

クツパ「ガア~~~~ッハッハッハッハッ!!」 どうしたマリオ、貴様の程度はそんな物かあ!?

いつもこの我輩をコケにしたその威勢、どこへ行ったのかなあ~? 今の貴様じゃ、

この我輩を空の彼方へぶっ飛ばす事すら出来んぞ!!」

彼はそう言いながら、ボロボロなマリオと刹那に対して嘲笑った。

マリオ「くそあつ……何て強さなんだ!!? このままじゃ俺達がやられちまう……!!」

刹那「くっ……こちらが『アーマーカード』になって、強力な技を繰り出しているはずなのに……

それでも奴を倒せないなんて……一体、どうすれば……

!??」

????『せつなさあ~~~~ん!!!!』

すると、突然どこから刹那の名を呼ぶ大きな声が聞こえて来た。

マリオ「な、何だ、今のは……………?」

刹那「こ、この声……………まさか…!?!」

マリオと刹那、そして木乃香はピーチ城の方へ振り向くと、そこにはメガホンを使って呼び掛けているのどかと夕映が見えた。

のどか『聞こえてますかあ~~~~!?!』

木乃香「のどか!? それにゆえも!?」

刹那「二人共、何でここに……………!?!」

マリオ「えっ…もしかして、友達!?!」

刹那「は、はい…そうです!」

夕映『刹那さん、よく聞いてください!! あの怪獣の背後に移動し、尻尾を掴んでジャイアントスイングするです!!』

奴を倒すにはこれしか方法はありません!!』

刹那「ジャ、ジャイアントスイング……………!?!」

彼女は啞然とそう言うが、その間にマリオは空中に浮かぶ飛行船の方へ見上げ、何かを思い付いた。

マリオ「刹那!!」

彼が彼女を呼ぶと、刹那はマリオへ振り向いた。そこでマリオが頭を上の方へ向かせ、それを辿るように刹那は飛行船の方を見上げた。

すると何かを理解したのか、彼女は笑みをしながらマリオに頷いた。刹那「分かりました!」

マリオ「じゃ、早速作戦スタートだ!! 頼むよ、刹那!!」

刹那「はい!!」

彼女はそう言いながら、翼を広げ、クッパに向かって飛び掛けて来た。

クッパ「フンツ、バカめえ!! さっきの話なら我輩にも聞こえたぞ!! だが残念ながらそう簡単に我輩の……………!!」

彼は不敵な笑みを浮かびながらそう言うが、突然前の前に飛び掛つ

て来た刹那が姿を消した。

クツパ「むうっ!?」

更に突然何者かがクツパの尻尾を引っ張り、クツパはその場で倒れ落ちた。そして彼が後ろへ振り向くと、

そこには尻尾を引っ張り上げる刹那がいた。

クツパ「なあっ…!? い、いつの間に…!? き、貴様…レポートでも使ったのか!?」

刹那「いえ、これは『瞬動術』! 足に『気』を集中させ、地面を蹴る事で短距離間を超高速で移動出来る技だ!

お前が隙を出している間に、私は超高速でお前の背後に移動したのだ!」

クツパ「な、何い!?!」

刹那「早速綾瀬さんが教えた通りの事をやるぞお!! つうおおおおおおおおおお!!」

そして彼女はクツパの尻尾を掴んだまま、自身を猛スピードに回転させながら、ジャイアントスイングをやり始めた。

クツパ「うおおおおおおああああああ!!」

マリオ「今だ、刹那!! そのまま飛行船へ向けて投げ飛ばせえ!!」

刹那「はい!!! そおおおおりゃああああああ!!」

そして彼女はクツパの尻尾を離し、クツパをそのまま飛行船の方へ投げ飛ばした。

クツパ「ぐああああああああ!!」

ドガアアアアアアアアン!!!

そして飛ばされたクツパは、飛行船に激突し、下半身だけが外にぶら下がっていた。

しかも甲板にいたカメックとブロス隊長は、その瞬間を見て愕然と

した。

カメック「ひい〜〜!!! ク、クツパ様があ〜〜!!!」  
ブロス隊長「い、一体何が………!?!」

木乃香「や、やったあ!!! うちの勝ちや!!!」

マリオ「いや、まだ終わってない! 刹那!」

刹那「はい!」

彼女が頷いた後、マリオの腕を掴んで、飛行船へと向かって空高く飛び上がった。

…飛行船内部にて

激突して気絶したクツパは、コクツパ軍団のいる部屋に突き刺さったまま目を回していた。

もちろんそこにいたコクツパ軍団は、そんな哀れな父を見て驚愕した。

ウエンディ「きゃあああ、お父様があ〜〜!!!」

ルドウィッグ「お、親父い…!?!」

クツパ「…と、父さん!!! どうしちゃったの!?!」

カメック「うわわわああああ!!!」

ブロス隊長「き、貴様何奴だあ!?!」

すると、甲板の方からカメックとブロス隊長が騒ぎ出し、それに気付いたコクツパ軍団は、甲板の方へ駆け付けた。

…甲板にて

そして甲板に駆け付けたコクツパ軍団は、カメックとブロス隊長の前にマリオと刹那が立っていた事に気付き、驚愕した。

ルドウィッグ「げっ！！ マ、マリオだあ！！」

クツパー「…そして……………誰、あの翼の生えたお姉さんは…？」

マリオ「さあ〜て、そろそろお祭りのグラウンドファイナーでもしなきゃな！」

さつき城をめちやくちやにしたお返ししなきゃ行けないからな〜！」

刹那「覚悟は出来てるか？」

マリオは拳を鳴らし、刹那は『夕凧』を構えながらそう言った。

ロイ「わっ、わっ、こ、攻撃して来るぞお〜！！！！」

イギー「…あれっ！？ ウエンディは！？」

コクツパ軍団は後ろへ振り向くと、そこにはウエンディがいない事に気付く。すると横からプロペラの音が聞こえ、

全員その方向へ振り向いた。そこにはクツパクラウンによく似ているが、ピエロの顔ではなく、赤いハートマークが描かれた、

自分専用の飛行船に乗ったウエンディが飛んでいた。

ルドウィッグ「ウ、ウエンディ！？」

モートン「お前何やってんだよ、自分一人で！？」

ウエンディ「オホホホ、ごめえ〜ん！ ちよつと用事を思い出しちゃってえ……………私、先に帰ってるね！」

ごめんあそばせえ〜！」

そう言った後、彼女はそのまま飛び去って行った。





彼は調子に乗りながらそう言うが、その間に刹那は先程のクツパの発言に気になりながら、額を片手で触りながら確認していた。クツパ「おのれえ〜〜！！！！ まあ良い！！ 今日所はこれぐらいにしてやる！！ だが次に会う時はこうは行かんぞ！！

覚えておれえ〜〜！！！！」

彼は悔しそうにそう言いながら、そのまま飛び去って行った。

刹那「追いましょう、マリオさん！！」

マリオ「いや、いいよ刹那！ そのまま放つとけ！ そっちの方が奴の好都合だ。」

刹那「い、いいんですか、奴を逃がしても？ もしまたここを襲ったらどうするんですか？」

マリオ「まあ、困るっちゃ困るけど、その時はその時だよ！ でも……………そこがあいつのいい所なんだけどなあ！」

彼は笑いながらそう言うが、逆に刹那はそれに理解せず、頭を傾げた。

…その後、刹那とマリオは無事着地し、木乃香はそんな二人を喜びながら出迎えた。

木乃香「せつちゃん〜ん！！」

彼女は刹那の名を呼びながら、喜びながら飛び付いた。

刹那「わわっ、お、お嬢様！？」

そんな彼女は木乃香に抱き付かれた事で、赤面した。

木乃香「せつちゃん無事でよかったわあ！ あの飛行船が爆発した時、せつちゃんどうなってもうたんか心配してたんよ！

せやけど無事でホンマによかったわあ！」

刹那「す、すみません、心配してくれて……………」。

マリオ「まっ、その分俺の事はどうでもいいと思ってるんだろ？」

彼は頭の後ろに腕を組み、目を細くし、多少笑みを浮かびながら木乃香にそう言った。

木乃香「そ、そんな事ないよ、マリオさん！　ウチもマリオさんの事も心配しとつたえ！」

マリオ「ハツハツハツ！　冗談だよ、冗談！」

彼は慌てる木乃香をからかいながら笑った。

???「せつなさあ〜ん、このかさあ〜ん！！」

刹那と木乃香、そしてマリオは声が聞こえた方向へ振り向くと、のどかと夕映、そしてピーチ一行が駆け付けて来た。

ちなみにのどかと夕映は、魔法を使うのを止め、元の制服姿に戻っていた。

木乃香「のどか、ゆえ！」

マリオ「ピーチ姫！！」

のどか「よかったあ〜、二人共無事でえ〜！」

夕映「今のはすごかったです！　あの怪獣を飛行船の方まで投げ飛ばすとは……………」。

刹那「いえいえ、これは戦略を覚えてくれたお二人のおかげです！」

ピーチ「よかったあ、マリオ！　私心配してたんだからあ！」

彼女は喜びながら、必死な思いでマリオを強く抱き締めた。その間にもマリオは、恥ずかしさの余りに赤面した。

マリオ「わわっ、ピ、ピーチ姫……………！？」

キノじい「いやあ〜、本当に無事でよかったですじゃ！　このキノじい、絶対にマリオ殿が勝つと信じておりましたぞ！」

キノピオ「ホントですかあ？　一番不安に思ってたのはキノじいさ

んだけかと思いましたがお？」

彼はじと目でキノじいに見向きながらそう言った。

キノじい「な、何を言うんじゃ、お主は！？　ワシはこう見えても……………！」

彼はそんなキノピオに怒り出すが、キノピコは途中で間に割り込み、キノじいを落ち着けさせた。

キノピコ「まあまあ、落ち着いてください！　みんな無事にいられたんだし、それでいいじゃないですか！」

???「……………ま……………まだ……………だよ……………」

突然どこから声が聞こえ、全員はその声の聞こえた方向へ振り向いた。すると窪みの中から、

先程クツパの一撃により気絶していたルイージが、完全にボロボロになりながらゆっくりと這い上がって来た。

マリオ「ル、ルイージ!？」

刹那「ルイージさん!？」

ルイージ「……………ま……………まだ……………無事じゃない……………奴が……………ここに……………いる……………よ……………」

マリオ（ヤベツ……………すっかり忘れてた……………。）

デイジー「ル、ルイージ!　だ、大丈夫!？」

彼女は正に大丈夫でもないボロボロなルイージに駆け付け、心配そうにそう言った。

ルイージ「……………ここ……………この……………どこか……………大丈夫……………な訳……………?」

キノピコ「こ、これは酷い重症だわ……………」

キノじい「うう……………む、これは治療するだけでも時間が掛かるの……………」

ピーチ「キノピオ、直ぐに担架を!」

キノピオ「は、はい!!」

木乃香「あっ、ちょっと待ってな! ここはウチに任せて!」

彼女はそう言いながら、ルイージの前にしゃがみ込んだ。すると南京玉すだれを持ち上げ、

横にいたデイジーは多少不安そうに頭を傾げた。

デイジー「ちょ、ちょっと、一体何を…?」

木乃香「まあまあ、見てなつて!」

そう言った後、彼女は南京玉すだれを振り回し、その先から暖かい光が灯り始めた。

横にいたデイジーはそれに対して多少驚いていたが、逆に何も言わなかった。

そして木乃香は光に包まれた南京玉すだれをルイージの体に当て、今度はその光はルイージの体全体に包み込んだ。

すると彼の怪我が徐々に消えて行き、まるで何もなかったかのような無傷の姿に戻った。

マリオ・ピーチ一行「えっ!?!」

麻帆良生徒の四人以外の全員はその瞬間に驚き、その光が消えた後、ルイージはゆっくりと目を開け、ゆっくりと立ち上がった。

その分痛みも感じていなかったため、彼は自分を見ながら少々啞然としていた。

ルイージ「あ、あれ? ぼ、僕……………大丈夫……………?」

木乃香「はい、治療完了やで!」

デイジー「……………よ……………よかつたあ、ルイージ!! 無事で本当によかつたあ……………!!」

彼女は涙目になりながら、ルイージを強く抱き締めた。そんなルイージはもちろん先程のマリオ同様、赤くなっていた。

ルイージ「ぐあっ!? デ、デイジー姫!?!」

マリオ「うおおっ！！ す、すごい！！ ルイージが元気になったぞ！？」

ピーチ「すごい……………これって本当に魔法なんだ……………」

キノじい「おお、実に素晴らしい！！ これは正に治癒魔法！ どんな傷や怪我を、

もちろん病などを一気に回復する魔法ですじゃ！ やはりお主達、かなりの優れた魔力を誇る魔法使いですな！？」

刹那「えっ、あっ、いや……………確かにこれは魔法ですが……………私達は別に……………」

ポオン！！

その後、体力を全て消化してしまった刹那と木乃香は、元の学生服に戻ってしまった。そして二人は突然地面に座り込み、

周囲にいた者全てはそれに対して驚いた。

マリオ「えっ！？ 木乃香、刹那！？」

ピーチ「ど、どうしたの、二人共！？」

キノじい「おお、いきなり元の姿に戻るとは、これはどう言う事ですじゃ！？」

夕映「ちょ、ちょっと待ってください。これってまさか……………」

グオオオオオオオオオオオオ！！

突然何かか唸る音が聞こえ、刹那と木乃香以外の全員はその音が聞こえた方向へ振り向いた。 どうかその音は、

刹那と木乃香のお腹から聞こえたらしい。

木乃香「……………アカン……………お腹空いてもうた……………」

刹那「長い間……………カード使ってみましたけら……………ね……………。 す、すみません……………な、何か食べる物とか……………ありますか……………？」

「……………」。

そんな二人に対し、周囲は沈黙となるが……………」。

「……………」プツ……………」アツハツハツハツハツ！！」

やはりみんなが無事にいて、戦いが終わったためなのか、全員は元  
気よく笑い出した。そんな空腹状態の刹那と木乃香も、  
顔を少々赤くなり、お腹を抱えながら、同じく笑っていた。

## 第9話 浮遊島の番人

……クツパとの戦いが終わった後、ピーチは王国を救った刹那と木乃香、そしてマリオブラザーズを招待し、共に食事をする事にした。刹那と木乃香、のどかと夕映、マリオブラザーズとピーチ一行は、ピーチ城内にある大きくて綺麗な食堂で食事を楽しんでいた。そのため、マリオブラザーズの間座っていた刹那と木乃香は、空腹の余りに美味しそうにたくさん食べていた。

木乃香「ふわぁ〜！ ホンマに美味しいわぁ〜！！」  
刹那「本当に美味しいです！ こんな料理を食べるのは生まれて初めてです！」

マリオ「おいおい、そんなに大袈裟にならなくても……」  
ルイーザ「そうだよ……大体姫様の前なんだから、もうちょっと落ち着いて……」  
二人は大食いな木乃香と刹那に対し、啞然としながらそう注意するが、逆にピーチは笑顔のまま気にしてはいなかった。  
ピーチ「いいのよ、二人共がんばった上にお腹が空いてたから……でもさっき言葉、

そう言ってくれるとウチのシェフも喜ぶわ。」  
デージー「とは言っても……よく食べれるわねえ……私じゃさすがに真似出来ないわ……」  
彼女は腕を顎に立たせながら、啞然とした表情でそう言った。

夕映「ホントに申し訳ございません……わざわざ料理をご馳走させてもらって……」  
ピーチ「大丈夫よ。今日は新しいお客様にお友達が出来たし、その上この王国を救ってくれたお礼だから。」

今日は遠慮せずたくさん食べて行ってね。」

のどか「ありがとございます！」

彼女は笑顔のピーチにお辞儀しながら感謝した。

キノじい「しかし……先程の話をもう一度言つと……木乃香殿と刹那殿はのどか殿と夕映殿同様、

麻帆良学園と言う学校から来た。ところが突然発生した空間の歪みに巻き込まれたせいで、

気が付いたらマリオブラザーズの家にいた……しかもそれはつい昨日の事……そう言う事ですな？」

刹那「ええ、まあ、大体は……。」「ピーチ「やっぱり、彼女達は別の世界から来たのかしら？」

キノじい「それしか考えようがないですな。元はと言えば麻帆良学園とか言う学校はこの世には存在しないし、

彼女達を使うこの『ネオ・パクティオカード』とか言う魔法アイテムさえも存在しない。

存在しない物が今ここにあると言う事は、やはりどう考えても彼女達は別の世界、

または異次元から来た者しか思えませんですじゃ。」

夕映「特にここはスタークリスタルによって創造された幻想世界でもなさそうですしね……。」

キノピコ「とは言つても、あの超常現象は一体何なんでしょう？あれが発生してから、

のどかさんと夕映さんが突如に現れたのですから……。」

キノピオ「やっぱりキノじいさん、あの現象の事、何もご存知ありませんよね？」

キノじい「全くじゃ！あの奇妙な現象、人生の中で初めてじゃ！もちろん、

一体何が原因であの現象が発生したのかも……。」



彼がキノピオに返答した後、刹那と木乃香に振り向き、話し続けた。キノジ「ただ言えるのは、恐らくあの現象はお主達の世界からこちらの世界に繋ぐ空間の入り口だったのかもしれない。」

何らかの拍子にその入り口が開き、お主達を強制的にこちらの世界に引き寄せられたのかもしれない。」

刹那「そう言う物なのでしようか……ただ、あれはあくまでも自然現象による物とは思えないのですが……。」

キノピオ「ところで、四人共この世界に訪れてしまったのですから、これからどうなさるおつもりですか？」

彼は刹那と木乃香、そしてのとかと夕映に向きながらそう問い出した。

刹那「そうですね……とりあえず、私と木乃香お嬢様はマリオさんとルイーダさんと共に、

他の仲間達の搜索活動を行おうと思っております。ネギ先生とアスナさんだけじゃなく、

もしかしたら他の者達もあの歪みに巻き込まれたのかもしれないし……。」

のとか「えっ！？ネギせんせいもここにいますか!？」

刹那「ええ、恐らく……ここに訪れる前から、私達と一緒にだったんですが……。」

夕映「確かに、ハルナも私達と一緒にいたはずでしたが、ここに来てから姿が見当たりませんし……。」

木乃香「なあ、それやったらのどかとゆえはこの先どないする？」

ウチらと一緒にみんな探しに行く？」

彼女は食べながらそう言うが……。

ルイーダ「えっ、ちよっと待って！それって、二人を僕達の家泊まらせるって事？」

木乃香「エエかな？」

ルイーダ「エエかなくて、そんな勝手な……！ に、兄さん、どうする？」

マリオ「うう……ん……確かに俺達の家は刹那と木乃香で精一杯だし……これ以上増やすには……。」

彼は腕を組みながら悩み、その後ピーチに見上げた。

マリオ「ピーチ姫……申し訳ございませんが、のどかと夕映をしばらくの間ここにいさせてもらいませんか？

ここで別々に行動すれば、彼女達の友達も直ぐに見付かると思いますが……。」

彼はピーチにそう頼み込むが、彼女はそれに応じて、迷う事もなく頷いた。

ピーチ「分かったわ。のどかちゃんと夕映ちゃんをここにいさせましょう。でもその代わりに、私達も協力させて。」

「こちららも搜索隊を送り込んで、二人の友達を探すように手伝うから。」

デイジー「私もサラサ・ランドの搜索隊を送るから、心配しないで！」

マリオ「ありがとうございます、ピーチ姫、デイジー姫！」

彼はピーチとデイジーに感謝のお辞儀をするが、逆に刹那は申し訳なさそうな表情でこう言った。

刹那「本当にありがとうございます……私達のために……。」

ピーチ「いいのよ！ 私達はもうお友達なんだから、困った時はお互い様よ！」

キノじい「それでしたら、のどか殿と夕映殿の面倒はこのキノじいにお任せくださいませ！」

彼女達を立派な女子にするために一生懸命教育させてさしあげましょう！」

のどか・夕映「えっ!？」

キノじいは胸を張りながら、自信満々にそう言うと、のどかと夕映はそれに対して愕然とした。

ピーチ「ちょ、ちょっとじいや！ そんな余計な事しなくていいのよ！ この子達はお客様で……………！」  
キノじい「なりませんですじゃ！ 先程彼女達の無礼さをお見えなさいませんでしたか？

あんな言動を外で振舞っては世間に乱れが見えて来ますじゃー！

こつ言う時こそお二人をもつとレディーらしくさせておかねば……………」

デイジー「だからそれが余計な事なんだってば！」

三人はそう言い合っている間に、のどかと夕映は少々不安に思えるようになった。

キノピコ「…まあ、話を戻しまして……………皆さんのお友達はどのような容姿をしているのでしょうか？

話によりますと、皆さんのお友達はたくさんいると仰つ

てましたし……………」

キノピオ「せめて写真とかがあれば、搜索するだけでも手間が掛からないと思うのですが……………」

夕映「確かに、みんな私達と同じ服を着ていても、人数は私達含めて32人ですから、探すのに大変ですね。」

刹那「ええ、特に顔写真はネギ先生が常に所持している名簿にしかないのです、それが無い限りは……………」

ピーチ「とりあえず、ゆっくりした方がいいと思うわ。余りにも焦り出すと見付からないと思うから。」

デイジー「そうそう！ 慌てず騒がず…何事も落ち着いて行動するのみ！ その内みんな見付かるわよ！」

刹那「……………そうですね。」

彼女は笑みを浮かびながらそう言った後……………。

木乃香「あっ！」

彼女は食事中のルイーダに振り向き、何かに気付いた。

ルイーダ「ん？」

すると木乃香はルイーダの頬に付いているお米を取り、それに対してルイーダは多少赤くなりながら動揺した。

ルイーダ「うわっ!? な、な、何だよいきなり!？」

木乃香「頬つぺたにお米が付いとったんや。驚かしてごめんなあ」。

ルイーダ「そ、そりゃ驚くよ! 急に手え出すから！」

刹那「何だかお嬢様とルイーダさん、すっかり仲良くなったような気がしますね。」

マリオ「へへっ、同意だな！」

二人はお互いに向き合いながら、木乃香とルイーダの行動に対して笑った。

しかしその間にその光景を見ていたピーチとデイジーは、何気に不安そうな表情をしながら眺めていた。

デイジー「……………何…このモヤツとした感じは…?」

彼女は多少仲の良い四人に睨み付きながら、小声でピーチにそう言った。

ピーチ「……………と、とりあえず、様子を見ましょ…。」

彼女は少々苦笑いをしながら、手元にある紅茶を飲んでた。

……………一方モビウスのミスティックルーン、テイルスの工房では、いつもとは変わらぬ日常が続いていた。

ソニックは引き続きジャングル内でネギ達の仲間を探し、その間にネギ達も生徒達の情報を探るべく何かをしていた。

その間にテイルスの部屋ではテイルスと真名がいて、二人共壁に貼ってあった地図を眺めていた。

真名「これがこの世界の地図か……あの基地にも見たが、思った以上に規模が大きいな……」。

近くても私達の世界より二倍ぐらいか……？」

テイルス「そう？ まあ、色んな地帯や国があるから、そこまで大きく見えるんだろっね。」

真名「しかし多少気になるが……この世界にいる人種はお前みたいな獣人しかいないのか？」

テイルス「いや、そうでもないよ？ 確かに僕みたいな小動物はいるけど、真名みたいな人間も存在してるよ！

でも逆にキノコワールド大陸にはキノコ族やカメ族などがあるから、

向こうの場合は人間は限られた場所にしかないみたいだからね。」

真名「キノコ族に……カメ族……？」

余りにも聞き慣れない種族名に対し、真名は耳を疑わせた。

テイルス「キノコワールド大陸にいる種族の事だよ。キノコ族は殆ど『キノピオ』って呼ぶんだけど、

小人ぐらいな大きさで、キノコみみたいな帽子を被ってる温厚で平和好きな種族なんだ。でもモビウスとは違って、

争い嫌いだからそこまでの武力は優れてないみたいだけど……逆にカメ族は名前通り亀ばかりの種族で、

聞いた話だと、キノコ族と対立し、今でも領土の奪い合いを行っているらしいよ。時には悪の軍団を結成して、

襲撃などを行っている事があるけど、大半のカメ族はそれに恐れ、何よりも平和を愛し、

キノコ族との共存を願う者も結構いるけど。 要するに、みんな悪い奴とは限らないんだよ。」

真名「悪の軍団…… いわば世を手中に収めようと目論む帝国か……。」

テイルス「真名の世界はどうなの？ 僕みたいな種族とかいるの？」

真名「いや、いるのは人間と普通の動物だけだが、裏の世界では魔物や妖あやしなどが存在する場合もある。

滅多に人前には現れないが、危害のある場合は私が仕留めている…… 依頼によってな。 しかしこの世界とは違い、

私達の世界はそう言う非科学的な存在には信ぜず、架空の世界だけしか存在しない物と認識している。」

テイルス「そうなんだ……。」

その後、真名は何かになり始めたのか、自分の腰を下ろして、再びテイルスに話し掛けた。

真名「なあ……もしかしたらこの世界にも……。」

テイルス「ん？」

彼女は隣にいるテイルスに話し掛けると、少々頬を赤くしながらこう言った。

真名「……小犬系タイフの獣人もいるのか……？」

テイルス「へ？」

真名は少々恥ずかしがりながらそう聞くと、テイルスは少々啞然とした。

テイルス「……ううん……多分いると思うけど……どうして？」

真名「……いや、何でもない……ただ聞きたかっただけで……。」

彼女は立ち上がり、再び地図の方へ振り向きながら、話を済ませた。

真名「しかしこれほどの規模が大きければ、さすがに他の仲間達を探すのに苦労するかもな……。」

テイルス「確かにそうだね。 一応ネギの話によると、その友達の

顔写真を持つてるみたいだから、

それを頼りにするしかないね。」

真名「……………ん?」

その時、真名は地図を見て何かに気付いた。　　ミスティックルーン、またはネギー一行の現在地点の近くに、丸い線が書かれてあった。　その部分は地上と海水の間に書かれていて、特に名前は記入されていなかった。

真名「なあ、この丸い線は一体何なんだ?」

テイルス「ああ、それ?　それは『エンジェルアイランド』のある場所なんだ。」

真名「エンジェルアイランド…?」

テイルス「うん。　ミスティックルーンの上空に浮いている島なんだ。」

かつてはミスティックルーンとは何らかの繋がりがあつたらしいんだけど、今では謎に包まれているんだ。」

真名「浮いている島だと?　しかし外から見てもそのような島なんて見当たらないが……………」

彼女は窓の外を眺め、空を見上げながらそう言った。

テイルス「そりゃ肉眼では簡単に見られないよ。　エンジェルアイランドは地上から物凄く掛け離れた大空に浮いているんだ。」

そのため侵入者は簡単にそこへは行けないけど、飛行機でならそこに行ける事が出来るよ。」

僕やソニックも、飛行機に乗ってよくそっちに行ったりしたから。」

その後真名は窓から離れ、テイルスの方へ振り向いた。

真名「と言う事は、あの島には誰かが住んでいるのか?　ジャングル内にいるあのビッグとか言う猫のように……………」  
テイルス「いや、もう大昔から島は大空に浮きっぱなしになってた

らしいから、今じゃ無人だろうね。でも強いて言えば、

あそこには『ナツクルズ』がいるけど……………」  
真名「ナツクルズ？」

テイルス「うん、本名『ナツクルズ・ザ・エキドウナ』！ 僕達の友達で、エンジェルアイランドの番人なんだ。

言わなかったけど、あの島には島を浮かばせるエネルギーを持った巨大な宝石、『マスターエメラルド』があつて、

ナツクルズは生まれた頃からあれを守り続けているんだ。  
何でそうなったのか本人も知らない様子だけど、

あの宝石はよく悪い奴に狙われてる事が多いから、その宝石と島を守るために番人として生きてるんだ。

でも時々事件が起こる時は、僕達の所へ駆け付けて、協力してくれる事もあるけどね。」

真名「フン……………じゃあ、今そいつはどうしているんだ？」

テイルス「うん、今でもエンジェルアイランドに滞在して、マスターエメラルドを守り続けてるよ。」

今まではよく僕達と一緒に冒険とかに出てたけど、やっぱり自分の役目が一番に大事らしいから、

最近会ってないけど……………」

……………エンジェルアイランド……………ミスティックルーンの上空に浮かぶ島で、古代から存在していた島でもある。

この島は無人とされているが、一人の男だけ、この島を守りながら住み着いている。その島のどこかには、

七つの壊れかけた柱に囲まれ、高台に納めた緑色に輝く巨大な宝石が設置されていた祭壇があり、そこには一人の男が、



空を眺めながら立っていた。その男は全身が赤く、長い髪の毛に鋭い目付き、二本の刺が生えた白いグローブ、そして鉄板が付いている赤い靴をしていた。そう、彼こそがエンジェルアイランドを守るハリモグラ、  
『ナツクルズ・ザ・エキドウナ』である。彼は広い大空を眺めながら、何かを感じていた。

ナツクルズ「……………やはり……………何かを感じる……………。微かではあるが、空間が奇妙に歪み始めている。

しかもこれはただの自然現象ではなさそうだ。一体……………何が起ころうとも言うつのか……………？」

「ああ〜らっ、そこで何一人で険しい顔で上の空になってるのかしらね？」

こんな何も無い島で一人暮らししてて退屈にでもなったのかしら？」

突然ナツクルズの背後から何者かの声が聞こえ、その同時にその人物の姿を現した。その人物は白い頭に大きな耳、大きな胸元にハート型のプレートに黒いズボン、白い長靴に手袋に黒い翼を持った、いかにも蝙蝠の姿をした、  
いかにもセクシーな女性であった。彼女はナツクルズをからかうかのように声を掛けて来たが、

ナツクルズ本人は相手が誰なのか感付いたのか、振り向かずにはいた。  
ナツクルズ「……………何しにここに来やがった、  
『ルージユ・ザ・バツト』。」

ルージユ「何しにつて、ご挨拶ねえ〜。せつかくあんたと会いに来たのに、そんな無愛想な言い方はないでしょ？」  
ナツクルズ「会いにだとお？ フンッ！ どうせマスターエメラル

ドを盗みに来たんだろ？ お前の事だ、

それしか目的がないんだろ？」

彼は少し頭を背後にいるルージユに振り向きながら、彼女に鋭い視線で睨み付けた。

ルージユ「違うわよ！ あたしは今休暇中よ、休暇！ 大統領直属のエージェントとしてだけじゃなく、

もちろんトレジャーハンターも怪盗としてのね！ せっかくの休暇なのにぐーたらしてるのも時間の無駄だから、

あんたの所へ遊びに来ただけなのよ！」

ナツクルズ「フンッ！ とか言つて、俺に騙まし討ちを仕掛けてマスターエメラルドを盗むつもりだろ？」

言つとくがな、俺はそこまで騙されるほど軽い奴じゃないからな！」

ルージユ「ああーら、よく言うわね？ いつもエッグマンの口車に乗りながら騙されてるくせに……。」

ナツクルズ「ツんだと、てめえ！？」

怒りながら喧嘩を売ろうとするナツクルズに対し、ルージユはからかうように笑っていたが、途中で止めた。

ルージユ「それに、あたしホントに休暇なんだから！ もしそうじゃなかったらあたしはあんたに話し掛けず、

黙つてこつそりマスターエメラルドを盗んでったはずよ？ それぐらいしてないって事は、

あたしはあくまでも遊びに来ただけよ？ そのため無駄な喧嘩もする気ないし、

たまには一緒に他愛のない世間話とかして……。」

彼女は話しながらナツクルズに振り向くと、彼は腕を組みながら、いつもの位置で再び空を眺めていた。

ナツクルズ「………」

は今忙しいんだ。」

俺

ルージユ「つて、話聞いてんの、あんたは！？ それに何が忙しいのよ！？」

「いつつもそこで突っ立って何もしてないじゃない！！  
寧ろ軍の依頼をこなしたりお宝を探したりしているあなたの方が忙しいわよ！！」

彼女は話を無視していたナツクルズに反発しながらそう言った。  
ナツクルズ「この島とマスターエメラルドをお前みたいなの泥から守るのが俺の仕事で日課だ。」

「だから俺は暇人に相手するほど暇じゃないんだよ。」  
ルージユ「どつちが暇人よ！？ 寧ろこの島とエメラルドを守るところか、ただ毎日何もしないで、」

「ここでずーっとな突っ立ってるあなたの方が暇人じゃないの！！」

彼女はそう言いながら、呆れてため息を吹きながらもマスターエメラルドの周りに歩き始めた。

ルージユ「はあ〜〜〜……………全く、避けようと思ったのにまた余計な喧嘩が始まったじゃない……………」

「ホントに理解出来ないわね、いつも意味なく背負ってるあなたの役目と言う物つて……………」  
「ナツクルズ「理解しなくて結構！ そう言うお前の物を盗むとか言う悪趣味の方が理解出来ないね！」  
ルージユ「悪趣味つて、あのねえ……………！ そりゃ、世界中の寶石を全て手に入れる事があたしの目的だけど、」

その大半は政府に依頼されたり……………」

ルージユがナツクルズに口喧嘩をし続けている間に、彼女はふと目を何かに向けた。それは祭壇の下、壁に寝そべっている、二人の少女であった。一人は鈴付きのリボンが飾った長いツインテールをしていて、

もう一人は色黒で短い淡い黄色のツインテールをした中国人だった。そう、

彼女達の正体はネギのパートナーである神楽坂明日菜と、ネギの武術の師匠である古菲であった。しかし、

そんな事も知らずに寝ている二人を目の当たりにしたルージユは、一瞬嫉妬したのか、ナツクルズに迫り込んだ。

ルージユ「ちよつとあんた……………あの二人は一体何なのかしらあゝ？ おおゝゝゝ？」

ナツクルズ「はあ？」

嫉妬で少々怒っているルージユに対し、ナツクルズは呆れそうにそう返事した。

ナツクルズ「……………お前何考えて俺にそう言っただ？ 俺は軽い奴じゃないってさつき言っただろ？」

ルージユ「第三者がこれを見たら誰だって怪しく思うじゃないの！！」

彼女がそう突っ込んだ後、ナツクルズはため息を吹いて、また空の方へ振り向いた。

ナツクルズ「……………落ちて来たんだよ。」

ルージユ「はあ……………？ 落ちて来たって……………どう言う意味で？」

ナツクルズ「俺の真上からだ。」  
彼がそう答えると、ルージユはナツクルズの真上にある空の方へ見上げた。

ルージユ「真上って…空から!？」

ナツクルズ「説明するだけでおかしいと思うだろうが……………数時間前にこの辺りで奇妙な怪現象が発生したんだ。」

それは所々に紫色に放つ電流が出現して、その同時に風景全体が歪み始めたんだ。

その後俺の真上から突然光が現れ、そこからこの二人

が落ちて来たんだ。

おかげでそのうちの一人が俺の頭に激突し、こんなコブが出来ちまったがな。」

彼は自分の頭にあるコブに指しながらそう言うが、体が赤いせいかなかなか見え難かった。

ルージユ「……………あんた赤いから見え難いわよ。」

彼女はナツクルズに再びツツコミを入れた。

ルージユ「で、何？ この二人はその奇妙な光から落ちて来たって言うの？」

ナツクルズ「みたいだが……………その後気になる物が出始めるようになったんだ。」

ルージユ「気になる物って？」

彼女がそう問うと、ナツクルズは再び空の方へ見上げた。

ナツクルズ「先程俺が言った歪みだよ。あの出来事が起こってから、微かではあるが、

あちらこちらに空間の歪みが発生してるようなんだ。

しかもこれは単なる自然現象じゃない……………

何なのか分からない力を感じるんだが……………。」

ルージユ「なるほど…それで険しい顔をしながら空を見上げてたのね。」

ナツクルズ「……………そう言う情報、お前の所に来ないのかよ？ こう言う怪現象の情報も、

あの『GUN』軍隊からも来てるはずだろ？」

ルージユ「まだそんな情報聞いてないわよ……………って言うか、あとし今休暇中だから、本部からの通信を今切った状態なのよ。」

彼女がそう答えると、ナツクルズは再び呆れながら黙り込んだ。

その後、

彼は祭壇の壁に寝そべっている明日菜と菲の方へ振り向き、ルージユにこう言った。

ナックルズ「……………まあ、とりあえず……………お前こいつら何なのか確認してくれないか？ 同じ格好をしているからには、

何らかの組織の一員かもしれない。人間の多い『セントラルシティ』出身のお前なら、

こいつらの事ぐらい知ってるだろ。」

ルージュ「何よその嫌味のありそうな頼み方？ 注文にしちゃ無礼あり過ぎるわよ！ ………………まっ、とりあえずそうしましょ！

その代わり、報酬は弾んでもらうわよ！」

ナックルズ「誰がお前に払うかよ！」

彼がそう突っ込んだ後、ルージュはそのまま祭壇から飛び降り、寝ている二人の少女を確認し始めた。

ただ見て調べるだけでもしばらくは経ったが、ルージュは二人の胸元に付いている麻帆良学園の紋章に気付く。

その後ナックルズも祭壇から飛び降り、様子を伺った。

ナックルズ「どうだ、何か分かったか？」

ルージュ「……………あんたバカねえ。この服、何かの組織のユニフォームじゃなくて、学校の制服よ！」

ナックルズ「学校の？」

ルージュ「そう、この紋章をよく見なさいよ！ 『MAHORA マホラ ACADEMY』<sup>アカデミー</sup> って書いてあるじゃない！ アカデミーって事は、

これはどっかの学園で着用している制服って事よ！」

ナックルズ「なるほど……………で、どこの学園だ？」

ルージュ「知らないわよ、こんな服見た事もないし、第一マホラって言う学園聞いた事もないわよ。」

セントラルシティだけでなく、ステーションスクエアにだってそんな学園なんてないと思うし……………。」

ナックルズ「じゃあ、こいつらはどこから来たんだ？ さすがにキノコワールド大陸から来た者じゃないだろ？」

ルージュ「ダイヤモンドシティならあるけど、さすがにあそこじゃないわね。」

「当然にもそのマホラとか言う学園もなさそうだし……………」。

明日菜・菲「……………う……………う……………ん……………」。

その時、二人は突然と唸り出した。

ルージュ「あっ、目が覚めようとしてるわ!」

ナックルズ「ちょうどいい。こいつらには色々聞きたい事があるからな。」

明日菜・菲「……………ん……………」

二人はゆっくりと目を開き、起き上がった。まだ完全に目が覚めていなかったが、

二人はそのままナックルズとルージュの方へ振り向いた。

ルージュ「よかったあ、二人共無事みたいね!」

ナックルズ「まっ、あれぐらいじゃ死にやしないだろ。」

明日菜・菲「……………」。

二人はナックルズとルージュを見詰め続き、しばらく沈黙になっていた。

明日菜・菲「うわあああああああああ!!!」

その後、二人は突然立ち上がり、驚きに叫び出した。それに対して、ナックルズとルージュも驚愕した。

明日菜「な、何あんた達!? ば、化け物お!??」

菲「モ、モンスターアルか!? そ、それとも……………ん?」

その後、彼女は何らかの違和感に気付いた。それに気付いて彼女は下を向くと、そこには地面がなく、

海水から数万メートルの高さから掛け離れた断崖絶壁だった。その状況を目の当たりにした菲と明日菜、

そしてナツクルズとルージユは、沈黙のまま驚愕した。

菲「わああああああああああああ！！！！」

明日菜「わわっ、くーふえ危ない！！！！」

菲が落ちる瞬間に、明日菜は素早く菲の足を掴んだ。そのため菲は、スカートが捲られ、パンツ見えたままぶら下がっていた。

菲「アイヤア~~~~！！！！ お、お、落ちるアルウ~~~~！！！！」

明日菜「く、くーふえ、しっかり！！ い、今助けるから！！」

ナツクルズ「ま、待ってる！！ 俺も助け……………！！」

ルージユ「あんたは向こうにいなさい！！！！」

ドカアッ！！！！

ナツクルズ「ごぶぐるッ!?」

ルージユは助けに行こうとしたナツクルズを思いっきり蹴飛ばし、彼をそのまま祭壇の壁へと激突させた。

その後ルージユは倒されたナツクルズを放って置いて、急いで明日菜と共に菲を助けに駆け付けた。

ルージユ「ちよつとあんた、辛抱しなさい！！ 今から助けるから！！！！」

菲「わわわあ~~~~！！！！ は、早く助けるアルウ~~~~！！！！ お、落ち、落ちるアルウ~~~~！！！！」

明日菜「ちよ、ちよつと、暴れないでよ！！ 余計手が離しそうじゃない！！！！」





明日菜「あの、二人は一体……何なん…ですか？ それに…ここは……？」

二人はそう戸惑うと、途中でお互いを見て、更に驚愕した。

明日菜「って言うか、何でくーちゃんここにいんの！？ 私、確かネギとこのかと刹那さんと一緒にいたはずじゃ……！？」

菲「アイヤアツ！？ そう言うアスナも何でここにいるアルか！？

私は確か『チャオバオス超包子』で五月特製肉まんを食べてたはずアルが…

……！？ それに……

ここは一体何なんアルか！？ さっき下見たけど物凄く海から離れてたアルよ！？」

ナツクルズ「ここはエンジェルアイランド……地上から遥かに高い大空に浮かぶ浮遊島だ。」

菲「浮遊……！？ それって……。」

明日菜「こ、ここって、空飛んでるの！？」

ナツクルズ「はあ？ 何言ってるんだ？ エンジェルアイランドの事は誰でも知ってる島だぞ？ 寧ろ常識的だが？」

菲「何言ってるアルかあ！？ 空飛ぶ島なんて見た事も聞いた事もないアルよ！？」

明日菜「そうよ！ 映画なら一度見た事あるけど……！」

ナツクルズ「……どうやらお前達、何か違うな？ その言い方によると……」

まるでこの世界の人間ではなさそうな気がする。」

ルージュ「え？ それってどう言う意味？」

明日菜「ま、まさか、私達……。」

菲「また魔法世界に戻って来たアルか……？」

二人はお互いに向きながら、青ざめた表情でそう言った。

ナツクルズ「魔法世界？ 何の事なのか知らんが……とりあえず、お前達がここに訪れる前に一体何が起こったのか、

説明してくれないか？」

明日菜「え……………は、はい……………」

二人の話によると、明日菜はネギ、木乃香と刹那と共に、スタークルスタルに関する会議を、麻帆良学園の屋上で行っていた。

その間に菲は五月が経営する『超包子』チャオパオスと言つ中華料理店にて、五月特製の肉まんを食べていたと言つ。

しかしその間に謎の電流が空气中に現れ、その後激しい地震と理解不能な空間の歪みが発生したと言つ。

それまでに辺りが真っ暗になり、その後何が起こつたのか、二人の記憶にはなかつたのだと言つ。

その話を聞いていたナツクルズとルージュは、黙つたまま話を聞いていたが、多少理解していた様子。

ナツクルズ「なるほど……………つまりお前達はその謎の現象に巻き込まれ、気が付いたらここにいたつて事か。」

明日菜「まあ……………そう言う事……………かな？」

ルージュ「と言う事は、あんた達はこことは全く違つ、別の世界から来たつて事？」

菲「…多分……………」

ルージュ「……………ねえ、ナツクルズ。これどう言う事かしら？」

ナツクルズ「さあ……………だがこいつらの経験の中では、先程の怪現象と同じ物が発生した。特に奴らは麻帆良学園とか言つ、

この世には存在しない所から来て、更にエンジェルア

イランドしまの事を知らない……………」

これはどう考えても、こいつらはこの世界の人間ではないつて事だな。」

ルージュ「要するに別次元から来た人間……………？ それつて有り得る事なの？」

ナツクルズ「さあな。俺には経験した事ないから、そこまで分かるんな。」

菲「つて事は、ここは魔法世界じゃないって事アルか？」

ナツクルズ「……………その魔法世界って何なのかさっぱり分からんが……………確かにこの世界には魔法と言う物は存在するがな。

だがそれはキノコワールド大陸にしかない物で、ここモビウス大陸は科学を中心に行っているんだ。

だろ、ルージユ？」

ルージユ「まあ、魔法もほんのちよつとぐらいならあるけどね。政府こうちじゃそれを研究している事もあるから……………」

明日菜「な、なるほど……………」

ルージユ「でも魔法の事を話してるって事は、あんた達の世界にも魔法が存在してるって事？」

彼女がそう問い掛けると、明日菜と菲は少し反応し、焦り出した。

その後二人はお互いに振り向き、小声で話し始めた。

明日菜「ちよ、ちよつと待てよ！？ よく考えたら、魔法って人前に言っちゃ行けないんだよね！？」

菲「そ、そうだったアルか！？ でも……………ここは私達の世界じゃないから別にいいアル？」

ナツクルズ「……………何コソコソと話してるのか知らんが……………ヤバイ物だったら、それはもう既に手遅れだと思えばいい。」

彼が鋭くそう言うと、明日菜と菲は固まり、多少冷や汗をかけながら話し始めた。

菲「……………んまあ…強いて言えば…魔法はある事はあるアルが……………」

明日菜「正直に言って、私達の世界では魔法の存在を世間に知らせるのは禁じられてるらしいの。」

もし知ってしまったらとんでもない事が起こるらしくて……………」

ナツクルズ「……………それがお前達の世界の掟とか言う物か。 案外理解出来ないが、

それでもお前達の世界には魔法は存在するんだな。」

ルージユ「ところで、あんた達さつき友達と一緒にいたとか言っていたらしいけど……………」  
彼女がそう言っていると、明日菜と菲はその事を思い出し、一瞬に立ち上がった。

明日菜「はっ！！ そうだった！！ 余りにも混乱してて、ネギヤこのかや刹那さんの事をすっかり忘れてた！！」

菲「アイヤア、そうだったアル！ あの変な物、チャオハオス『超包子』に現れたから、きつと五月も巻き込まれて……………」

二人が混乱している間に、その慌てっぷりに対してナックルズとルージユは多少引いていた。その後二人の少女は、二人の獣人に振り向いてこう問い掛けた。

明日菜「ねえ、私とくーふえがここに来るまで、他に誰か来なかった？ 一人は眼鏡をかけたガキンちゃんだけど、

後は私と同じ格好をした女の子……………」

菲「そうそう！ 五月も私と同じ格好アルけど、ちよつと太……………じゃなくて、可愛い感じな……………」

ナックルズ「それはないな。あの現象が発生してからここに訪れたのはお前達二人だけだ。それ以外誰も訪れてない。

それに、ここエンジェルアイランドは古の時代から天空に浮かぶ聖地だ。

そう簡単に人が気軽に足を踏み入れる場所ではない。」  
明日菜「天空に浮かぶ聖地……………二人共ここにいないじゃない。」

ナックルズ「俺はこの番人だ！ いても当たり前だろ！」  
ルージユ「私は遊びに来ただけ……………」

ナックルズ「お前は不法侵入だろ！！」

菲「……………とりあえず、どうするアルか？」

彼女は明日菜に向けてそう言った。

明日菜「どうするって、探すに決まってるでしょ！ あのバカネギやみんなを探しに行くのよ！」

菲「探すって言うっても、心当たりあるアルか？ この世界、私達の全く知らない世界アルよ？ 探す前にこっちが迷うアルよ。」

彼女がそう言った後、明日菜は少々落ち込んだ。

明日菜「…………… た、確かに…………… しかもここ、空に浮いてるから、どうやって地上に降りるのかも……………」。

二人はそう思いながら落ち込んでいると……………。

ルージユ「…………… ねえ、その友達ってのはどう言う子なのかは知らないけど、

よかったらあたし達も探すの手伝ってもいいかしら？」

明日菜「え！？ い、いいの…いや、いいんですか、そんな事して……………？」

ルージユ「いいのよ！ どうせあんた達はこの世界の事全く知らないんでしょ？」

そう言う時はあたしみたいな有能で親切的なレディーに任

せなさい！ そうすれば、友達探しながら軽い物よ！」

彼女は自信を持ちながら、二人の商事にウインクしてそう言うが、逆にナツクルズは腕を組み続けながら、

不機嫌そうにルージユにこう言った。

ナツクルズ「フンッ！ 何がレディーだ！ 本当は休暇中何もする事がないから、暇潰しに付き合っただけでやるうと思っただろ？」

ルージユ「なっ！？ し、失礼な！！ 誰がそんな事を……………！！」  
彼女は無礼なナツクルズに振り向き、怒り出した。

ナツクルズ「それに…………… お前さっき『あたし達』って言ったよな？ それって、俺含めてか？」

ルージユ「当ったり前じゃないの。 あんた以外誰がいるって言うのよ？」

ナックルズ「……………悪いが、俺は断らせてもらう。友達探しとか言う事にな。」

明日菜・菲・ルージユ「えっ!?!」

彼が目を閉じ、冷静そうにそう返答すると、三人の女性は思わず愕然とした。

ルージユ「ちよつとあんた!! 何勝手に拒否権挙げてんのよ!?!」

そんな事言ったらこの娘達可哀想じゃない!!」

ナックルズ「俺はこの島とマスターエメラルドを守ると言う仕事があるんだよ。」

それまでに俺はこの島を離れる訳には行かないんだ。

悪いが、その依頼はこちらから断言させてもらう。」

ルージユ「断言って……………あんた、よくそんな事言うわね?」

ついこの前なんてソニック達と一緒に冒険とか行ってたくせに……………」

ナックルズ「あの時はエッグマンがまた悪さをしていたから仕方なくついて来ただけだ!

あいつの悪さを知った以上放って置く訳には行かない

! だから仕方なく島を離れなければ……………」

ルージユ「そんなの言い訳に過ぎないわよ! いくらエッグマンが悪さをしてるからって、

それってただ人のせいにしてるだけじゃない? そんな

んで立派な番人とは呼ばないわよ!」

ナックルズ「何だとしてめえ!?!」

彼が怒り出すと、早速口喧嘩をし始めた。その間に明日菜と菲は、

状況を知りながらも困難していた。

明日菜「ちよ、ちよつと何か悪い感じになって来ちゃったみたいだけど……………」

菲「って言うかそのエッグマンとか何なんアルか?」

ナックルズ「!?!」

その時、彼はルージュと口喧嘩をしている間に何かを感じたのか、突然彼は違う方向へ振り向いた。

それに気付いたルージュは一旦立ち止まり、様子を伺った。

ルージュ「……ちよ、ちよっと何なのよいきなり……!? まだ話  
が……!」

ナックルズ「……何かがいる……。」

ルージュ「え?」

ナックルズ「……この島に何かがいる……しかもかなり強大な  
……!」

彼が険しい表情でそう言うと、突然立ち上がり、駆け出し始めた。

ルージュ「えっ!? あ、ちよ、ちよっといきなりどこへ行くのよ  
!?!」

ナックルズ「付いて来るな!! お前はそこの二人と一緒にここに  
いる!! 言っとくが、

俺がいない隙にマスターエメラルドを盗んだらタダじ  
や置かないからな!! 覚えとけ!!」

ルージュ「ちよ、ちよっと……!!」

彼女が止めようとしても、ナックルズは既に走り去って行った。

その後彼女は両手を腰に当てながら、  
ため息を吹いた。

ルージュ「……ったくも、何であいつあそこまで頑固なのかしら  
? 一体誰に似たのか知らないけど、

あいつのあー言う短所な部分を是非とも叩き直してほし  
いものよ!」

彼女がそう言いながらも、二人の少女はただ突っ立ったまま啞然と  
した。

菲「え、えっと……行ってしまったアルね、あの赤い人(?)…  
……。」

明日菜「あ、あの、これからどうすれば……。」



ルージユ「決まってるでしょ？ 後を追いに行くのよ！」

明日菜「えっ！？ でも、ここに残れって……………」

ルージユ「あんなバカの言う事なんて聞いてられないわよ！ どうせあいつ、何かの事で無茶ばかりするから、

ここはいつぺん蹴飛ばさないと気が済まないからね！

あんた達はどうすんの？ やっぱ奴の言う通りここに残る？」

彼女が明日菜と菲に、長靴を引つ張りながらそう問い掛けると、二人の少女はしばらくお互いに向き合い、

ルージユに振り返った。

明日菜「いえ、私達も一緒に行きます！ もし何かのトラブルがあるのなら、是非ともそれを対処するために協力します！」

菲「そゆ事アル！ それにさっき助けてくれたお礼もしたいし、私も一緒に手伝うアルよ！」

ルージユ「そう……………分かった、じゃあ一緒に行きましょう！ そうすれば、あのバカも少しだけ考え直してくれるかもね！」

明日菜「はい！」

ルージユ「あ、そうそう！ 一つだけ言いたい事があるけど、あたし達の事はタメ口で話しても構わないわよ！

これから一緒に行動するんだから、敬語は一切無用！

いいわね？」

明日菜「え？ あ、はい……………じゃなくて、うん、分かった！」

菲「じゃあ、私もそうさせてもらうアル！」

ルージユ「あつ、それと……………自己紹介もまだだったわね！ あたしの名前はルージユ・ザ・バット！」

そしてさっきのバカはナツクルズ・ザ・エキドウナって

名前よ！ よろしくね！」

明日菜「ルージユね！ 私は神楽坂明日菜！ よろしく！」

菲「私は古菲アルよ！ よろしくアル！」

ルージユ「明日菜と古菲ね？ わかった！ じゃ、早速行きましょ

！ あの石頭な番人さんのいる場所へ！」

明日菜・菲「了解！」

二人は頷いた後、マスターエメラルドの祭壇を後にし、早速ナツク  
ルズが向かった方向へ駆け出した。

## 第10話 凍て付く水の古代都市

…… ナツクルズの後を追っていた明日菜と菲、そしてルージユは、とある遺跡らしき場所へ辿り着いた。

そこは水に囲まれていて、所々に滝や噴水、更にシャトルループになっている通路や設置されたスパイクなどが存在していた。

そこで三人はナツクルズと合流するが、本人は嫌気そうな表情で、横目で三人を見ていた。

ナツクルズ「……… ったく、付いて来るなとさっき言ったはずだろ？」

ルージユ「バカねえ、あんたに従われるほどあたし達は大人しくないわよ！」

その間に明日菜と菲は、水に囲まれた光景を見回りながらこう言った。

明日菜「しかし何かすごい所だねえ……… 辺りが水に囲まれてて………」

菲「しかも何かすごい形をした道や刺とかあるアルな！」

ナツクルズ「ここは『ハイドロシテイ』と言って、大昔このエンジニアしまアイランドに設立された古代都市なんだ。

見ての通り滝や噴水などが多く囲まれているが、現在は無人の遺跡となっている水の都だ。

何のために設立されたのかは俺でも知らんが、今はどうでもいい事だな。」

ルージユ「……… で、何のためにここに来たの？」

ナツクルズ「ここで何か異様な気配を感じたんだ。」

ルージユ「異様な気配？」

菲「けどやつぱりあれアルな……………水に囲まれてるからここ結構涼しいアル！」

明日菜「涼しいって言うか、ここちょっと冷え込んでない？ 私ちよつと寒いんだけど……………」

彼女は腕を組みながら、寒そうにそう言った。

ナツクルズ「いや……………通常はこんなに冷え込んでないのだが……………」

その後、彼は再び走り出した。

ルージユ「あつ、ちよつとお！！ もう、さつきから何なのよ、あいつは！？」

彼女は多少ナツクルズの行動に対してイラつきながら、明日菜と菲と供に後を追い始めた。

明日菜・菲・ルージユ「なつ……………！？」

三人がナツクルズの元へ辿り着くと、水に囲まれていたハイドロシテイは、辺り一面氷に包まれていた。

滝と噴水は流れる事もなく完全に凍り付いていて、気温は先程よりとてつもなく冷え切っていた。

絶対零度によって氷河と化した水の都の光景を目の当たりにした三人は、思わず啞然としていたが、

その間にナツクルズは険しい表情をしたまま、その光景を眺めていた。

明日菜「……………な……………何これ……………？」  
菲「……………あ、辺り全体凍ってるアル……………」。  
ルージユ「ナ、ナツクルズ、これは一体……………！？」  
ナツクルズ「……………分からない……………気が付いたらこのエリアだけが氷結状態になっていた……………」。  
しかもそれだけじゃない……………時間が経つほど徐々に氷結が進み出しているようだ。」  
ルージユ「な、何ですってえ！？」  
明日菜「さ、寒う……………い！！　な、何でこうなってるのお！？」  
菲「一体どうしてこうなってるアルかあ！？」  
二人は寒がりながらも、ナツクルズは黙って凍りついた風景を眺め続けた。

ナツクルズ（……………やっぱり、これはただの自然現象の仕業じゃない！　特にこの冷気……………  
この先にあるのは遺跡地帯の『マールガーデン』と遊楽地帯の『カーニバルナイト』……………  
氷河地帯の『アイスクヤップ』はここから遥かに遠いはず……………！　あそこの冷気はここまで届くはずがない！  
この異様な気配……………空間が突然歪んだ時と同じ物だ！　しかし、これは一体何なのか……………！？）  
彼がそう思った後、再び走り出した。

ルージユ「あつ、ナツクルズ！！」  
ナツクルズ「お前達はここにいろ！！　或いはマスターエメラルドの祭壇へ戻るんだな！！」  
彼がそう言った後、そのまま走り去った。

ルージユ「もう、あのバカったら！！　どうしていつもこう勝手な事ばかりすんのよ！？」

彼女は地団駄しながら、去ったナツクルズに対して怒っていた。しかしそれを見ていた明日菜と菲は、少々何かを考えていた。

明日菜「……………あのう、一つだけ聞いていいかな？ ルージュとナツクルズって、何でそんなに仲悪いの？」

ルージュ「ええっ？ ああ、それね……………そう言えばあんた達、あたしが何なのか知らないんだったよね？」

あたしこっに見えても、宝石を狙うトレジャーハンターなのよ！」

明日菜・菲「トレジャーハンター！？」

ルージュ「そう！ 世界中のお宝を狙い、それをみい〜んなあたしの物にするために活動しているのよ！

そりゃもちろん、博物館などにある宝石までも狙い、それを盗むまでも手段を選ばないのよ！

狙った獲物は絶対逃がさない……………それがトレジャーハンターとして、もちろん怪盗としてのあたしのポリシーよ！」

明日菜「ルージュって、怪盗でもあるの！？」

菲「何か色んな意味ですごいアル……………」

ルージュ「まっ、その中ナツクルズが守っていたマスターエメラルドを盗もつとした事もあるからね。それが多分、

あたしと彼の仲の悪さを引き出した物とも言えるかしらね？」

明日菜「マスターエメラルドって……………さっきのデカイ石の事？」

菲「そう言えば気になってたが、あれ何なんアルか？」

ルージュ「あれはね、エンジェルアイランドの大昔から存在された、無限な力を宿る宝石なのよ。」

その力はこの島を空中に浮かばせるほどの物で、宝石の中でもより究極とも呼ばれてるのよ。

あたしはそんなパワーがある事も最初から知らなかったんだけど、その凄まじさは世界中に多く伝わっていて、

それを狙おうとするトレジャーハンターも結構いるのよ。  
まっ、

逆にナツクルズあのバカにボコボコされる羽目になるんだけどね。  
あたしも実はそうだったけど……………。」

明日菜「そんなにすごい物なの？」

ルージユ「もちろん！ あいつから聞いた話だけど、他にも『カオスエメラルド』の暴走を収める力も宿ってるらしいのよ！

あー言うすごい宝石があるんじゃ、今でも世界中の誰も  
が欲しがるわよ！ もちろん、このあたしでさえも！

でも今のあたしは休暇中だから、今はそこまでしないけどね。」

菲「カオスエメラルド？」

ルージユ「あつ、そっか。 それも知らないんだったね。 カオス

エメラルドと言うのは……………！？」

その時、彼女が話を進んでいる途中何かに気付き、氷結された風景の方へ振り向いた。

明日菜「ん？ どうかしたの？」

ルージユ「……………今、向こうから何か感じなかった？」

菲「向こう……………？」

二人の少女はルージユの向く方向へ振り向いてみると……………。

ボゴツ！！

突然氷結した水面から氷が盛り上がり、徐々に形を作り始めた。

その瞬間を目の当たりにした三人は思わず驚きに引き、

その氷はついに形を完成させた。 それは明らかに人型だったが、

その顔部分に仮面らしき物を被っていた。

そしてその仮面に付いた目が不気味に輝き始め、その後次々の同じ人型の氷が出現し始めた。

菲「アイヤアツ!? な、な、何アルか、あれ!? 何か変な物が突然氷から出て来たアルよ!？」

明日菜「ル、ルージユ! あ、あれは一体何なの!？」

ルージユ「えっ!? し、知らないわよ! あんな不気味な物初めて見るわよ!？」

???「キシヤアアアアアアアアアア!?!」

三人が動揺している間に、複数の氷人形達が奇声を上げながら襲い掛かって来た。

明日菜・ルージユ「わああああああああ!?!」

菲「たりやあああああ!?!」

しかし、菲は素早い回し蹴りで奇襲をかけて来た氷人形達を打ち破き、叩き飛ばした。そして最後に彼女が構えを決めた後、

明日菜とルージユは思わず腰を抜かしたまま、啞然としていた。

菲「二人共大丈夫アルか!？」

明日菜「えっ、あ、うん……………だ、大丈夫……………」

ルージユ「つて、あんた戦えるの!？」

菲「あつ、そか…言い忘れてたアル! 私、こう見えても中国武術の達人アル! だからこれぐらいの戦いには得意アルよ!」

ルージユ「チュウゴク……………つて、それってどこの事?」

「チユンナン」なら知ってるけど……………」

菲「ええっ!? ルージユ、中国知らないアルか!？」

彼女はそんなルージユに対して驚くが、途中で明日菜が割り込んで来た。

明日菜「ちょ、ちょっと待ってくーふえ! もしかしたらこの世界、中国とか存在しないんじゃないのかな?」

菲「えっ? そうアルか?」



ルージュ「ちょ、ちょっとみんな！！ あれ見なさいよ！！」  
彼女が砕かれた氷人形達の方へ指し、二人の少女はそれに振り向くと、下半身だけが残された氷人形達が徐々に再生し始め、元の姿に戻った。その瞬間を目の当たりにした三人は、更に愕然としていた。

明日菜「ええ〜っ！？ も、戻ってるう〜っ！？」

菲「バ、バカな！？ こいつら再生なんかするアルか！？」

明日菜「つて、くーちゃん危ない！！！」

彼女が菲に警告すると、背後から狼のような姿をした氷人形が飛び掛つて来た。その狼型の氷人形にも仮面を付けていて、

菲はそれに気付いて後ろへ振り向くが、その行動は既に遅過ぎていた。

「???」グオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

菲「わわっ……………！！！」

ルージュ「ドリルキック！！！」

しかしルージュは横向きに急回転しながら、ドリル状に回転するキック攻撃で狼型の氷人形を打ち砕いた。

その後彼女は着地し、唾然としていた二人の少女に振り向いた。

ルージュ「危ない所だったわよ！」

明日菜「あ、ありがとう……………」

菲「つて言うか、今のすごい蹴りだったアルな！ ドリルみたいに回転しながら相手に蹴りかかるとは、実にすごいアル！！」

ルージュ「まつ、伊達に軍によって特殊訓練を受けた訳じゃないからね！」

明日菜・菲「軍？」

しかし、その間に三人は振り向くと、砕かれて足だけが残った狼型の氷人形は徐々に再生し始め、元の姿に戻った。

明日菜「また元に戻ったわ!!」

ルージュ「何なのよあの変な生命体は!? 急に出て来て砕けたと思ったら勝手に再生するなんて……………!」

菲「つて、うわっ!! ルージュ、後ろ後ろお!!」

彼女がルージュに警告すると、背後から鷹のような姿をした氷人形が飛び掛って来た。

その鷹型の氷人形にも仮面を付けていて、ルージュはそれに気付いて背後へ振り向くが、その行動は遅かった。

???「キエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

ルージュ「しまった……………!!」

明日菜「とりやああああああ!!」

しかし明日菜は近くにあつたブロックを持ち上げ、それを襲撃する鷹型の氷人形に投げ付け、打ち砕いた。

多少驚きによつて座り込んでしまったルージュと菲は、ブロックを投げ付けた明日菜の方へ、啞然とした表情で振り向いた。

明日菜「みんな、大丈夫!」

菲「おお、ナイスアルアスナ! 助かったアルよ!」

ルージュ「つて言うか、あんたどうやってあのブロックを……………!」

しかし、その間に三人は振り向くと、砕かれて翼だけが残った鷹型の氷人形は、宙に浮いたまま徐々に再生し始め、

元の姿に戻った。そんな三人は再生する敵に対し、多少焦りを感じ始めた。

菲「また再生したアル!!」

明日菜「もう、何なのよ、このしつこい変な奴らは!」

ルージュ「一体こいつらはどこから……………!」

「おやおや……………どこの虫けらが暴れているのかと思いきや……………」  
突然どこかから声が聞こえ、三人はその声が流れて来た方向へ振り向いた。すると小さく渦巻く吹雪が空気中に現れ、そこから何者かが現れた。その姿は小さく、頭と手だけが浮いている、氷で出来た妖精らしき生命体であった。その妖精は姿を現した後、明日菜と菲はその妖精に対して驚きの顔を見せた。

「……………貴女達でしたか……………よくぞ私の可愛い手下達を傷付けましたね。まあ、所詮無謀な行為でしょうけど……………」

ルージュ「なっ……………何者なのあんたは!？」

菲「……………あ……………あいつは……………」  
ルージュ「え?」

彼女は二人の少女に振り向くと、明日菜と菲はまるでその妖精に対して恐怖心を持ちながら震えていた。

明日菜「ま、まさか……………」

「……………ん……………? これはこれは……………貴女達は確か……………ネギ・スプリングフィールドの下僕とか言う、

神楽坂明日菜と古菲ではないですか! まさかこんな所で貴女方とお会い出来るとは思いませんでしたよ?」

ルージュ「えっ!?! ちょ、ちょっと待ってよ!?! あんた達、こいつの事知ってるの!?!」

菲「いや、会うのは初めてアルが……………」

明日菜「あんた……………まさか……………スタークリスタルの妖精!?!」

「……………?」  
「……………いかにも……………私こそ、十個のスタークリスタルの一つから生まれた、言わば『氷の妖精』ですよ!

貴女達とお会いするのは当然初めてでしょうが、貴女達の事は他の妖精……………花・水・火の妖精から聞きましたよ?」

何でもネギ・スプリングフィールドの抹殺するためにも我々の邪魔をしていたとか……………」

ルージュー「スタークリスタル？ 何なのそれ？」

明日菜「私達の世界にある魔法アイテムよ！ 名前の通り宝石なんだけど、所有者でさえも扱える事すら出来ない、

物凄く危険で凶悪な石なの！ 以前私達は奴らが起こした事件に巻き込まれた事があって、

奴らが生み出した魔法世界に閉じ込まれた事があるの。

事件を解決するために、

何とかして奴らを封印したんだけど……………最近聞いた情報によると、その石は誰かに盗まれたらしく、

悪さのために使われてるかもしれないって……………」

ルージュー「じゃあ、あの氷の妖精とか言う変な生命体はその石から生まれたって事？」

菲「だと思っアル。 でも何で奴がここに……………！？」

スタークリスタルの妖精

それはスタークリスタルを所有する事で、その所有者の心の悲鳴にから誕生すると言う闇の存在。

その力は他人の心を支配するほどの物で、過去にネギの生徒達を操って襲い掛かった事がある。

当初はアーニヤが盗んだスタークリスタルの数により、花・水・火・闇と言った四体の妖精だけしか召還出来なかったが、

今回スタークリスタルには十個も存在していた事により、たくさんいると思われる。

明日菜「ちよつと、あんたなんでしょ！？ ここを全部凍り付けた悪党は！？」

って言うかあんた達妖精って言葉話せないはずなのに、何

であんたが喋ってるわけ!？」

氷の妖精「……………言葉が話せる事はとりあえず置いて置くとして……  
……いかにも……………ですが、

悪党と言う呼び名はよくありませんねえ……………。私は  
ただこの子達を住みやすくするために、

この水浸しな遺跡を凍り付いただけですよ？ それは何  
が悪いのですか？」

ルージユ「あんた人様の遺跡で勝手な事をしていいと思ってるの！  
？ それに何なのよ、この変な化け物達は!？」

氷の妖精「化け物お？ これもまた失礼な……………実に気に入ら  
んね、貴女方の態度は……………まあ、いいでしょう。

せっかくですので、無能な貴女達に特別にこの子達の紹  
介を致しましょう……………。」

彼がそう言いながら、謎の氷人形達の方へ飛んで行った。

氷の妖精「彼らの名は『デイメンション・ドウエラズ』……………我  
ら妖精達と、

我々を生み出したスタークリスタルの完成形から生み出  
された空間の魔族……………言わば、

この世には存在しない存在なのですよ！ そしてこちら  
の人型は『フリーズ・ドール』で、

狼型は『フリーズ・ファング』、そして鷹型は『フリー  
ズ・ウイング』と言って、私達の可愛い手下達なのですよ。

無論、この世の全てを襲うためにある、殺傷と破壊の道  
具ですがね。」

明日菜「デメション……………ドエラズ……………?」  
ルージユ「知ってるの、それ?」

菲「いや、聞いた事もないアル……………。」  
彼女はルージユに向けて頭を振りながらそう答えた。

明日菜「ちよっと何なのよ、その『出目金の小便、ドエロ』って言

う、何か汚い名前をした物は!？」

氷の妖精「デイメンション・ドウエラーズですよ、このバカタレが  
あ!!!!!!」

明日菜の空耳に対し、氷の妖精は起こりながら突っ込んだ。

氷の妖精「デイメンション・ドウエラーズ……全てのスタークリ  
スタルが十個共揃えた時、

空間の歪みと共に出現する空間魔族……通常では、こ  
の世には存在しないと言う存在でしょう……。

その魔族には様々な種類が存在しますが、どれもこの世  
に存在する全てを滅ぼす事を目的にしているのです。

当初は我が旧主のアーニヤ様<sup>マスター</sup>がクリスタルを所有してい  
ましたが、残念にも彼女の力が不足していた上に、

四つの石しか集めなかったために、魔族達を召還する事  
が出来ませんでした、

我が新たな主が十個全てのクリスタルを揃え、更にア  
ーニヤ様をも遙かに上回る強大な力を持っていた事から、

デイメンション・ドウエラーズを生み出せたのですよ!  
菲「空間の歪み……!？ じゃあ、学園で起こったあの現象は……

……!？」  
ルージユ「なるほど……ナツクルズが言ってたあの現象、その石

の仕業って事なのね？」  
明日菜「じゃあ誰なのよ、その新しい主とか言う奴は!？ そいつ

は何のためにスタークリスタルを使って、  
私達をこの世界に送らせたのよ!？」

氷の妖精「……残念ながら、そのことに関しては貴女達にお教え  
する訳には行きません。なぜなら、

我が主の計画<sup>マスター</sup>を貴女達に教えるのは我々妖精達の義務で  
はありませんから。または……

貴女達が今ここで死ぬ限り……知る必要がありません







明日菜・菲「<sup>アリア</sup>来れ」！！！！」

二人は呪文を唱え、「ネオ・パクティオーカード」を発動させた。  
発動中に二人の体が光り始め、

ルージュと氷の妖精はその眩しい閃光に対し、目を手で塞いだ。

ルージュ「うわっ!? な、何なのこの光は……………!?」

氷の妖精「むっ……………これはもしか……………!?」

そして光が収まった後、明日菜と菲は制服姿から違う姿に変身した。

明日菜は赤い服に銀色の鎧、

更に自分の名前が刻まれた大剣を所持していた。一方菲は黄色い  
武道家の衣装に、手に赤い紐で巻かれた瓢箪を所持していた。

この姿によると、明日菜は「アーマーカード」で、菲は「コスプレ  
カード」の姿になっていた。

明日菜「やった！ 運がよく「アーマーカード」を引いたみたいだ  
わ！」

菲「あゝ、私は「コスプレカード」アルよ！ でも、「スカカー  
ド」よりはマシアル！」

ルージュ「えっ!? ちょ……………あ、明日菜に……………古菲なの!?

そ、その格好は一体……………!?」

彼女は初めて見る明日菜と菲の「ネオ・パクティオーカード」姿に  
対し、動揺した。

明日菜「あ、ごめん、驚いちゃった？ これは「ネオ・パクティオ  
ーカード」と言っ、

私達を戦わせるために使われている魔法カードなの！」

菲「ちなみに私は「コスプレカード」で、アスナが一番強い「アー  
マーカード」の姿になってるアル！」

ルージュ「えっ、ま、魔法カード!? な、何それ？ それって、  
あんた達魔法が使えるって事!?」

明日菜「うう〜ん……………そこを何て言えばいいのかなあ……………  
正確的に言えば私達魔法が使えないだけで……………」

菲「まあ、あくまでもパワーアップするために使ってるだけアルな。  
彼女は多少自信なさそうに説明するが、それでもルージュにはまだ  
理解していなかった様子であった。」

氷の妖精「……………ほう……………なるほどお。これが他の妖精達が言  
っていた『ネオ・パクティオカード』と言う物ですか。」

確かに、初めて見る割には感心しますねえ……………」

明日菜「何よあんた、まるで強がってるみたいない態度を振舞って！  
ホントはビビッてんでしょ!？」

菲「この姿になればあんな蛇なんかへつちやラルよ!」

氷の妖精「ホホホホ……………何をおバカな戯言を……………」  
確かに  
私は貴女達の力には少々感心しましたが……………」

これとは話は別……………変身して力を高めても全く無意味  
と言う事ですよ!! さあ、フリーズ・サーペントよ!!

殺つてしまいなさい!!」

フリーズ・サーペント「シャアアアアアアアアアアアアア!!」  
氷の妖精はそう命じると、フリーズ・サーペントは再び三人に襲い  
掛かった。

明日菜「私達の力を舐めるなあ!! てりゃあああああああ!!」  
「!!」

ザッシュウウウウウッ!!!!

彼女は勢いで大剣を振り出し、フリーズ・サーペントの首を斬り飛  
ばした。

明日菜「やったあ!! これはどう……………!!?」



菲「ああ〜〜ちやちやちやちや、あちや〜〜〜〜！！  
！」  
更に彼女は猛スピードでフリーズ・サーペントに素早いパンチとキックを食らわし、体中に窪みや穴を作り出した。  
そして彼女が攻撃を終えた後、明日菜の前へ戻って構え出した。  
その結果、フリーズ・サーペントは姿は、  
いつ崩れてもいいくらいにボロボロになっていた。

菲「どうでアルか、私の華麗なる連撃はあ？ 目に見えないほどアルよあ？」

私の酔拳は相手を翻弄するほどの早さで打ち捲くってるアルよあ。 いかにも当たって砕けるアルう〜……………」  
彼女は酔っ払いながらそう決めるが……………」

明日菜「って言うかあんだあ！！ 元はと言えばあんだ未成年ですよ！？ お酒飲んじやダメじゃないのお！！」  
彼女は菲が持っていた瓢箪に指しながら怒鳴り掛けた。

菲「ああ、これアルかあ？ 平気アルう……………これ、中身は黒酢だから飲んでも大丈夫アルう……………」

しかし、明日菜と菲が話し終わり、敵の方へ振り向くと、何とフリーズ・サーペントは再び再生をし始め、  
窪んだり穴が出来た体を氷で埋め尽くし、再び元の姿に戻った。

菲「ええ〜〜！？ やっぱりこれでもダメアルかあ〜〜！？」  
再生した敵の姿を見た菲は、酔いを完全に醒ましたほど驚いた。

明日菜「やっぱり普通の攻撃じゃダメみたいね……………」  
ルージュ「だったらあたしの得意技でも食らいなさい！！」

彼女がそう言った後、明日菜と菲の背後から飛び上がり、翼を羽ばたきながら敵に立ち向かった。  
ルージュ「行くわよ、『ビューティーショック』！！」

彼女は特殊な発声法で超音波を放ち、それを敵に直撃させた。その結果、

フリーズ・サーペントの胸元に大きなひびの入った窪みが出来た。明日菜「うわっ、何今の！？ ルージュからすっごいのが出て来て、あの蛇に攻撃したわ！？」

菲「すごいアルなあ！ もしかしたら今の効いたアルか！？」  
ルージュ「……………いや、よく見て！」

彼女がそう言い出すと、敵の胸元に出来た大きな窪みは再生により消え掛かり、元の姿に戻った。

ルージュ「やつぱり……………特殊な技を使ってもビクともしないわ……………！」

明日菜「そ、そんなあ……………！」

氷の妖精「ホオ~~~~ツホホホホホ！！ どうです、ご理解頂けましたかなあ？ 例え貴女達が強化アイテムを使ったにしても、

完全無敵である彼らには通用しないのですよ！ だから言っただでしょ？ いくら変身して力を増したとしても、

結果は無意味だと言う事を！ もはや、『ネオ・パクテイオーカード』と言うやらは、

思っただ以上役に立ちませんでしたねえ？ さあ、どうします？ このまま我が子の餌になりますか？

それとも無謀で無意味に戦い続けますか？ まあ、どちらにせよ、貴女達には勝つ事も逃げる事も出来ませんからね。

なぜなら、貴女達はこのまま殺される運命だからですよ  
お……………！」

彼が不敵な笑いと共にそう言うと、三人は焦りを持ちながら、強く唾を飲み込んだ。

……一方、別のエリアにいるナツクルズは、凍った水面を調べていた。そこで彼は刺の付いた拳で穴を掘り、そこから出て来た氷の塊を取り出し、険しい表情と共に無言のまま調べ始めていた。

ナツクルズ（……やっぱり、この氷はおかし過ぎる……。実に自然現象で出来た物じゃないだけじゃなく、

人工的に出来た物でもない。この氷から異様な力を感じる……。あの空間の歪みと同じ物が……。

何と言う物だろうか……。まるで……。魔法？)

その後、ナツクルズは何かの気配を感じ、後ろへ振り向いた。すると凍った水面から三体のフリーズ・ドール達が出現し、その怪しげに輝く目でナツクルズに睨み付いた。だが怯える事も戸惑う事もなく、ナツクルズは敵達に睨み返した。ナツクルズ「ああ？ 何だお前は？」

フリーズ・ドール「ウオオオオオオオオオオ！！！」  
しかしその間に敵達がナツクルズに襲い掛かるが、ナツクルズは拳一突きで三対の敵の胴体を破壊した。

ナツクルズ「ケツ！ 人の島に勝手に上がり込んだ上に、挨拶なしで突撃かよ！？ どう見ても人間じゃなさそうだが、

俺を無防備に仕留めようとはいい度胸じゃねえか！」  
彼がそう言った後、下半身だけ残されたフリーズ・ドール達は碎けた上半身を再生させ、元の姿に戻った。

ナツクルズ「……ほう、再生までもしやがるのか。正に、『何度やっても蘇るさ』って言う奴か？

なら二度と蘇らないようにしてやるぜえ！！ 『デイ

「ブインパクト」！！！！」

チユドオオオオオオオン！！！！

ナツクルズは強力な拳一突きを繰り出し、その先から強烈な爆発を起こし、敵達に直撃した。

フリーズ・ドール「ギギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

攻撃を受けた敵達は、まるで激痛を感じたかのように、断末魔のような奇声を出した。

しかもナツクルズの攻撃により砕けた体の部分が再生されず、溶け始めていた。そして敵達は再生する事もなく、

水蒸気を噴出しながら、水溜りとなって溶けて行った。

ナツクルズ「フンツ！ 何なのかは知らんが、雑魚は雑魚らしく一生水溜りになつてな！」

その後、ナツクルズは遠くから女性の悲鳴や怪物のような雄叫びを聞き取り、嫌気そうにその方向へ振り向いた。

ナツクルズ「……………つたく…またあいつらか……………。面倒くせえ奴らも来たもんだな！」

……………一方明日菜達は、フリーズ・サーペントの攻撃を必死に交わしながら苦戦していた。

菲「ど、どうするアルかあ！？ このままじゃ私達やられるアルよ

お……………」

明日菜「分かんないわよ！！ 相手が再生してちゃ、こっちは何も出来ないわよ！！」

フリーズ・サーペント「シャアアアアアアアア！！」

次に敵は口から凍える青白い光線を放ち、三人に目掛けて攻撃した。明日菜・菲・ルージュ「わあっ！！！」

三人は同時に素早く攻撃から回避し、光線をはそのまま凍った水面に直撃した。しかし光線が消えた後、

そこから高い氷柱が出来上がり、それを見た三人は尻餅状態に愕然としていた。

明日菜「ひいつ！？ こ、氷が更に凍ってる……………！？」

ルージュ「冷凍ビーム……………！？ あんなの食らったらみんなお陀仏だわ！」

氷の妖精「ホオ~~~~ツホツホツホツ！！ どうしました、皆さん？ 先程の威勢はどうしましたか？

もはや我が子の強さに恐れ、攻撃する隙も出ないのでしようか？

そしてネギ・スプリングフィールドの下僕とやら……………

これが貴女達の実力と言う物でしょうか？

さすがに他の妖精達から聞いた話とは違い、何もかも衰えているようですが？

それではさすがに失望させてくれますねえ……………我々妖

精達を軽く倒せるかと思いきや、

ただ虫けらの如く逃げ回るだけ。いかにも、片腹痛い

ですねえ！」

明日菜「何ですってえ！？ だったらいい加減に降りて来なさいよお！！」

さつきから高い所から好き勝手な事ばかり言って！！

とつと降りて来て正々堂々と戦いなさいよ、



「この臆病者おー!!」

氷の妖精「臆病者ですと？ それも片腹痛い一言………言っただけでしょ？ 私は正々堂々とか、

そう言う戦法は好きではないと。 我が主マスターの計画を果たすためには、

邪魔者を消すためにもどんな手を使いますから。 それはもちろん汚い手でも、

早く済ませる物ならなんでもいいんですから。 それまで誰にも文句言われる筋合いはないのですよ！」

明日菜「何い……!?」

氷の妖精「何れにせよ、貴女方には死んでもらいます！ そうすれば、

貴女方は我が敵ネギ・スプリングフィールドに見付からずに済むし、難関も一つや二つも消えますから！

それまでに貴方はこの子の餌………餌は餌らしくくたばりなさい!!

さあ、フリーズ・サーペントよ!! 止めを刺しなさい!!」

フリーズ・サーペント「キシヤアアアアアアアアアア!!」その後、フリーズ・サーペントは口から青白い光を溜め始め、その狙いを三人に定めた。

その間に三人は戸惑いにより身動きも出来ず、ただ敵が力を溜めている瞬間を見ながら焦り出していた。

菲「あわわわわあっ!!!! さ、さっきのがまた出て来るアルう!!」ア、アスナ!! ど、ど、どするアルかあ!？」

明日菜「ど、どうするかって、そんな事私に言われても………!!」ルージュ「もう、こんな時にナツクルズはどこで何してんのよ!？」

「俺はここだあ!!!!」

全員「!?!」

ドゴオオオツ!!!

その時、突然何者かが上空から現れ、強烈な飛び蹴りでフリーズ・サーペントの顔に攻撃した。

その反動で敵は顔を向かせたまま、冷凍ビームを誤って発射した。  
しかもその光線は、

氷の妖精の方へ向かっていた。

氷の妖精「うああああつ!?!」

彼がそれに気付くと、急いで姿を消し、光線から回避した。そして光線が消えた後、彼は再び姿を現し、怒り出した。

氷の妖精「バ、バカモオン!!! どこに向かって撃っているのですかあ!?! つと言うより、貴様何奴う!?!」

謎の人物が敵に飛び蹴りを食らわした後、そのまま明日菜達の前に着地した。その人物の正体は、ナツクルズであった。

ナツクルズ「おいコラア!!! 貴様だな、人の島に勝手な真似をしやがる下衆野郎はあ!?!」

彼は怒りながら、自分の拳を氷の妖精に指しながらそう言った。

明日菜・菲・ルージユ「ナツクルズ!?!」

三人はそんなナツクルズの登場に驚きながら、思わず大声で彼の名を呼んだ。それに応じてナツクルズは、  
険しい顔をしながら三人に振り向いた。

ナツクルズ「つたく、マスターエメラルドの祭壇に戻れとさつき言つただろ!?!」

ルージユ「そう言うあんたこそ、一体どこへ行ってたのよ!?! こっちは大変な目にあってるって言うのに!」

ナツクルズ「こっちは色々調べ回ってたんだよ！ それに、お前らも何だその格好は？」

コスプレとか言う何か訳の分からない事でもしてんのかあ？」

彼は明日菜と菲の姿を見ながらそう言った。

明日菜「え、あ、いや、これは……………」。

菲「まあ、確かに私は『コスプレ』だけど、アスナはちょっと違うアルな。」

氷の妖精「おのれえ〜！！ せつかくあの三人が無惨に裁かれる瞬間を楽しみに見ていたのに、よくも邪魔をしましたねえ！！

許しませんよお！！！」

ナツクルズ「ケツ！ 許されないのは貴様の方だ！！ アポなしに勝手に上がり込んだ上、

この場を勝手に凍り付けにしやがって、とことん好き勝手な真似をした貴様には、

この俺が成敗してくれるう！！！」

氷の妖精「ほう、この私に挑戦するのですか？ ならいいでしょう、あの三人の代わりに、まずは貴方を始末致しましょう！！

フリーズ・サーペントよ、新しい餌ですよ！ 思う存分バラバラに蹴散らさない！！！」  
フリーズ・サーペント「シャアアアアアアアアアアア！！！」

ナツクルズ「フンツ！ 蛇なのか鰻なのか何なのか知らないが、俺の拳で粉々に砕けてやるぜ！！！」

ルージュ「ちよつとあんた、まさか戦うつもりなの！？」

明日菜「そんなの無理よ！ こっちも何度も相手を斬ったり砕いたりしたけど、何度も何度も再生しちゃうのよ！？」

菲「それでアルよ！ 普通の拳では通用しないアル！」

ナツクルズ「通用しないだあ？ ヘッ、俺を舐めんなよ？ 俺の拳

にはなあ……………不可能って言う戯言こじごなんてないんだよお！！

『ディープリンパクト』！！！！』

チユドオオオオオオオン！！！！

ナツクルズは強力な拳一突きを繰り出し、その先から強烈な爆発を起こし、敵に直撃した。

フリーズ・サーペント「ギジャアアアアアアアアアア！！！！」

攻撃を受けた敵達は、まるで激痛を感じたかのように、断末魔のような奇声を出した。

しかもナツクルズの攻撃により砕けた体の部分が再生されず、溶け始めていた。

氷の妖精「なっ……………！！？」

明日菜・菲・ルージュ「何い……………！！？」

余りにも予想外な展開を見たナツクルズ以外の者達は、驚きの声を上げてしまった。

ナツクルズ「どうだ！ これなら再生出来ないだろ！」

ルージュ「……………あつ、そっか！ 相手は氷だから、熱を与えれば溶けるんだ！ それが敵の弱点ね！？」

彼女は指を鳴らしながら、閃いたかのようにそう言った。

明日菜「って事は、熱を浴びさせて溶かせば、再生が出来なくなるって事ね！？」

菲「でも、私達火起こせる物ないアルよ？」

ルージュ「あんた達にはないかもしれないけど、あたしにはあるわよ！ そのために、この子達の出番よ！」

行け、『バットクラッカー』！！』

彼女は自分によく似た、大きな耳と小さな目、更に蝙蝠の翼を羽ばたきながら飛んでいる球状の機械を二体とも飛ばした。



なかつたわよ！」

彼女は威張りながらそう言うが、後ろにいたナツクルズは腕を組みながら、険しい表情でルージユに睨んでいた。

ナツクルズ「って言うか、誰のおかげで奴を倒せたって言うんだ！  
？ 寧ろ俺に感謝しろよ！」

菲「しかし、あんた意外と強いアルなあ！ 私気に入ったアル！  
今度私と勝負してみないアルか？」

彼女はナツクルズに興味津々になりながら彼に近付くが、付近にいたルージユはそれを見た時、何気に嫉妬した。

だがナツクルズ本人は、そんな事を気に持たなかった。

ナツクルズ「ああ？ 何で俺がそんな事を……って、そんな事よりも、まだ終わってないぞ！」

今度はいつを倒さないと行けないぞ！」

彼は自分の拳を氷の妖精に指しながらそう言った。

氷の妖精「お、おのれえ〜！！ まさか弱点で倒されてしまうとは……我ながら一生の不覚！！

だがよくも我が愛らしい子を溶かし尽くしましたね！？

許しませんよお！！」

ナツクルズ「フンッ、許さないで結構だが、その言葉をこちらから返してもらおうよ！ それはもちろん……。」

彼がそう言った後、刺の付いた両拳を地面に突き刺し、怪力で巨大な岩を掘り上げた。その瞬間を見た明日菜と菲は、

沈黙のまま啞然としていた。

ナツクルズ「こいつでなあ！！ 『ガンセキオトシ』……！！」

ドゴオオオオン！！！！

ナツクルズは岩石を氷の妖精に放り投げ、岩が粉々になりながら命中した。

氷の妖精「ぐふおあつ!?!」

ルージユ「奴が怯んだわ! 今の内に止めを……………!?!」

明日菜「OK!!! ここは私に任せてえ!!! とおおおりゃああああああ!?!?!」

ザシユウウウウウン!!!

明日菜は大剣を振り落とし、氷の妖精を真つ二つに両断した。

氷の妖精「そ……………そんな……………この私があああああ……………!?!」

彼はそう言い残し、消滅した。

明日菜「やったあ!!! スタークリスタルの妖精、倒したわあ!!!」  
菲「やったアルな、アスナア〜!!! お見事だったアルう〜!!!」

ルージユ「よくやったわねえ! あんたのその剣裁き、なかなかの物ね!」

三人は大喜びするが、一番取り残されたナツクルズは更に「ご機嫌斜めになっていた。

ナツクルズ「だから誰のおかげだってんだ、お前らあ!?! 俺を無視すんなああああ!?!」

「……………ふう……………確かに危ない所でしたね……………」

明日菜・菲・ルージユ・ナツクルズ「!?!」

突然四人の背後から声が聞こえ、後ろへ振り向くと、そこには倒されたはずの氷の妖精がいた。

その表情からかなり焦っていた様子だが、まるで何もなかったかのように無傷のままであった。

氷の妖精「さすがにこうなるかと思いましたが、予め分身を用意しましたよ。まさか予想通りの展開になるとは、

いやはや、間一髪でしたよ。」

明日菜「嘘お!? まだ生きてたのお!?」

ナツクルズ「くっ、何てしぶとい奴なんだ!？」

ルージユ「ちよつとあんた、汚いわよ!? 勝手に分身なんか作ったりして!！」

菲「そうアルよ!！」

氷の妖精「フンツ! 合い難く、貴女方が私に何を言われようと、貴女達には関係のない事……」

言われる筋合いはないのです。さて…我が子フリーズ・サーペントを殺め、

次のこの私を傷め付けようとした貴女達には、しっかりと制裁をして差し上げたいところですが、

残念ながら時間が来たので、私もそろそろこの島からお暇しなければなりませんので……」。

ナツクルズ「お暇つて、まさか貴様…逃げるつもりか!？」

明日菜「時間? 時間つて…何の時間……?」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオツ!!!

その時、突然地面が激しく揺れ始め、四人はその振動により倒れ落ちた。

明日菜「きゃっ、な、な、何よこれ!？」

菲「地震アルかあ!？」

ルージユ「何言つてんのよ!? この島は浮いてんのよ!? 地震

なんてある訳ないじゃない!」

ナツクルズ「この振動……まさか……!？」

何かに気付いたナツクルズは、再び氷の妖精の方へ振り向いた。

氷の妖精「おやおや、ようやく気付いたのですね? さすがはエン

ジェルアイランドの番人とやら……ですが、

もはや手遅れでしたね。」

ルージユ「手遅れつて、ちよつとナツクルズ、あんた何に気付いた



のよ!？」

氷の妖精「おや、そう言えばまだ言ってますでしたね？ 私はなぜこの島に現れ、この場を凍らせたのか……………」。

フフフツ、確かにディメンション・ドゥエラーズの住み心地の良い場所を作るために、

この遺跡を凍結したと私が仰いましたが、本当は貴女達をこの場で足止めをするために行った、

時間稼ぎだったのですよ！」

明日菜「時間稼ぎって、だから何なのよ、その時間ってのは……………!？」

ナツクルズ「まさか……………マスターエメラルドを……………!？」

氷の妖精「正解ですよ……………実は貴女達がこの場で油を売っている間に、我が主は祭壇<sup>マスター</sup>にて、

マスターエメラルドのエネルギーを吸収し、略奪していたのですよ！」

明日菜・菲・ルージュ・ナツクルズ「何だってえええええ!?!?!？」

…マスターエメラルドの祭壇にて

島が激しく揺れている間に、謎の人影がマスターエメラルドのエネルギーを素手で吸収していた。

そのエネルギーを吸収し終えた後、マスターエメラルドは輝きを失い、緑色から黒色に変色してしまった。

そしてその人物は、緑色に輝くマスターエメラルドのエネルギーを手中に収めながら、次のようにこう言った。

「……………フッフッフッフ……………よくやった、スタークリスタルの妖精よ……………。これで二つ目の『力』を手に入れた……………。残る『力』は後四つ……………!!」

…ハイドロシテイにて

氷の妖精「貴女達には残念でしょうね…特にそこにいるお三方も。

もし貴女方がその彼の言う事を聞いて、

祭壇に居残っていれば、エメラルドは守られ、このような事態から逃れたはずなのに……………

本当におバカでよかったですよ!」

彼は不敵な笑いをしながら、ナツクルズ以外の三人を見下してそう言った。

明日菜「何ですってえ!? 誰がバ……………!?!」

怒り出す明日菜だが、ナツクルズは彼女を黙らせるために、手で口を塞がせた。

ナツクルズ「貴様、マスターエメラルドのエネルギーを何に使うつもりだ!? 貴様らは一体何を企んでる!?!」

氷の妖精「残念ながら、それをお教える事は出来ません。寧ろ、貴女達には知る必要はありませんから。でも、

当初の目的であるマスターエメラルドのエネルギーを奪った以上、もうここは用済みでしょうね。

我が主ももう撤退したようですし、私もそろそろお暇しましょう。」

ナツクルズ「何い!?!」

氷の妖精「ホホホホッ、それでは皆さん…また機会があればどこかでお会いしましょう。そしてその時まで、

このような事にはなりませんよお？ 何れか、死に追い込ませて差し上げますから……………。それでは、

良い落としを……………」

ナックルズ「あつ、待ちやがれえ!!」

彼が氷の妖精を追おうとした途端、氷の妖精は一瞬にして姿を消した。

ちなみに周囲にいた他のデイメンション・ドウエラーズも、凍った水面に潜り、姿を消した。

ナックルズ「くそっ!! 逃げられた!!」

ルージユ「さっきの化け物達もいなくなっただわ!!」

その後、島全体が更に激しく揺れ始め、その激しい振動により足場を崩した四人は動けなくなってしまうた。

明日菜「って、ちょ、ちょっとお!? だ、だ、だんだん、ゆ、揺れが激しくなって来たんだけど……………!?!」

菲「ど、ど、どうなってるアルかあ!?!」

ルージユ「ナ、ナックルズ! これってまさか……………!?!」

ナックルズ「ああ……………祭壇からマスターエメラルドが奪われた、或いはそのエネルギーがなくなってしまった場合は、

その力によって浮いていたこの島が……………地上へと落

ちる!!」

明日菜・菲「ええええええええええっ!?!?!」

…ミスティックルーイン・テイルスの工房にて

一方のネギ一行は、他の生徒達の居場所を探すべく、情報を調べていた。

聡美はティルスのパソコンを使いながらインターネットをしていたが、その間に楓と真名は何やら闘志を燃やししながら、お互い激しく戦っていた。しかも何で戦っていたのかと云つと……。

……ゲームであつた。しかもゲームはWiiの『大乱闘スマッシュブラザーズX』で、楓は『シーク』、真名は『フォックス』と言つた、自分にぴつたりなキャラを操作しながら遊び、戦っていた。その様子は激闘であり、必死になりながらGCコントローラのボタンを連打していた。しかし最終的には楓が勝利し、それに対して楓は喜びにはしゃぎ、楓は敗北に悔しがっていた。

楓「よしっ!!! 拙者の勝利でござるっ!!!」

真名「何い!? くそおっ!!! って言うか楓、お前はこつ言う機械物は苦手なはずじゃなかったのか!？」

楓「ゲームは別でござる! ちなみにこつ言う物は鳴滝姉妹から教わつたので、遊び方ぐらい分かるでござる!」

真名「くっ……ならもう一勝負だ!!!」

楓「望むところでござる!!!」

二人は同じキャラを選び、再び戦い始めるが、横にいたネギとカモ、そしてティルスは呆れそうに二人の激闘を眺めていた。

ネギ「あ、あの、楓さん、龍宮隊長……。」

カモ「こんな時に何遊んでんだよ、おい……。」

ネギ「ほ、ホントに申し訳ございません……二人が迷惑をおかけしてしまつて……。」

彼は横にいたティルスに向けて謝るが、ティルスは笑顔でこつ返事

した。

ティルス「いや、迷惑だなんて、僕は別に構わないよ？ 何せこの二人、昨夜大変だったから、

たまにはこうして休息を味わいながらのんびり遊ぶのもいいと思うよ？」

カモ「しかしこの二人がたかがゲームで燃え上がると、どうもイメージが崩れそうに見えちまうんだけどな……………」

その後、ネギはインターネットで情報を調べていた聡美の方へ振り向き、話し掛けた。

ネギ「葉加瀬さん、そっちの調子はどうですか？」

聡美「ダメですね、ネギ先生……………インターネット上にある数々のブログやニュースサイトを調べてみましたが、

他の生徒達に関する目撃情報はどこにも見当たりません。」

ネギ「そうですね……………」

カモ「その間にソニックの兄ちゃんもまたジャングル内で搜索活動に行っただまま……………」

一体他の連中はどこに行っちゃったんだろうなあ……………」

ドスウウウウウウウウウウウウウウウウ！！！！

しかしその時、突然巨大な何かが衝突したかのように地面が激しく揺れだし、ネギ達は途中で崩れ落ちた。

全員「うわああああっ!?!」

激震はしばらく続いたが、少しずつ和らげるようになり、振動は完全に収まった。

それまでに本や書類などの物が棚から落ちてしまったが、倒れていたネギ達は無傷の状態で、ゆっくりと立ち上がった。

楓「な、何事でございますか、今のは!?!」

聡美「地震でした、今のは!?!」

真名「いや、地震にしては距離的には物凄く近かったぞ！」  
カモ「もしかしたら、外で何かデケエ物でも落ちて来たのか!？」  
ネギ「とにかく皆さん、外へ出て確かめに行きましょう!」

全員「!？」

ティルスの工房から飛び出し、自身が発生した場所へ辿り着いたネギ達は、目の前に大きな崖がある事に気付いた。

しかしそれは崖ではなく、浮遊の力を失って墜落したエンジェルアイランドであった。全員は驚きの眼差しをしながら、その島を地上から眺めていた。

ネギ「な、何ですか、この崖は!？」

カモ「でっけえなあ!! って言うかこんな所に崖なんてあったっけ?」

ティルス「ち、違うよ! あれはエンジェルアイランドだよ!」  
ネギ「エンジェルアイランド?」

彼は聞き覚えのない名前に対して、頭を傾げながらティルスにそう言うが、

唯一知っている真名は驚きながらティルスの方へ振り向いた。

真名「エンジェルアイランド!? それって、さっきお前が言っていた……………!？」

ティルス「そうだよ! このミスティックルーインの上空に浮かんでいる浮遊島の事だよ! でも、何でここに……………!？」

その後、ジャングル内で搜索活動に行っていたはずのソニックは、



ジユは倒れたままだった。恐らく先程の墜落による振動で、全員気絶してしまっただろう。その間に『ネオ・パクティオカード』により変身していた明日菜と菲は、気絶した事により、元の制服姿に戻っていた。

明日菜「……………う……………う……………ん……………」

だがしばらくすると全員が目を覚まし、ゆっくりと起き上がった。

明日菜「う……………痛たたた……………あ、あれ……………こ、ここは……………?」

菲「ふにゆ……………もう天国に来たアルかあ……………?」

ナツクルズ「く……………何バカな事を……………俺達ちゃんと生きてるぞ!……………って、何でお前ら元の姿に戻ってんだ?」

彼は制服姿に戻った明日菜と菲の姿を見てそう言った。

ルージユ「痛ったあ……………ん!? ちょ、ちよつとみんな!! あれを見てごらん!!」

全員が見上げると、凍っていたはずの風景は元の水に囲まれた景色に戻っていた。噴水は通常通りに噴出し、

滝も普通に流れていて、まだ凍っている箇所はどこにもなかった。

その風景を見た四人は、思わず啞然としていた。

明日菜「い、遺跡が……………元に戻ってる……………!」

菲「アイヤア〜! 氷が全部消えちゃったアル! これもあの妖精や化け物達がいなくなったからアルか?」

ルージユ「みたいね……………でもこれでハイドロシティも元通りになったから、めでたしめでたしってトコかしらね、

ナツクルズ?」

ナツクルズ「……………」

彼はルージユの問い掛けに返事しなかったが、その後無言のまま、どこかへ走り去って行った。



ルージユ「あつ、ちよつとナツクルズ！！　また勝手に……………もう、さつきから何なのよ、あんたはあ！？」

明日菜「あつ、ちよつと待ってえ！！」

菲「私達も行くアルう！！」

その後三人は、ナツクルズの後を追うため、元通りになったハイドロシテイを後にした。

明日菜・菲・ルージユ「！？」

マスターエメラルドの祭壇に戻った三人は、ある物を目の当たりにして愕然としていた。

それは祭壇に収められていたマスターエメラルドが、以前とは違い輝きを失い、完全に黒ずんでいた。

その近くに立っていたナツクルズは、残念そうな表情でマスターエメラルドを触れていた。

明日菜「あ、あれがさっきのマスターエメラルドって言うデカイ石……………！？」

菲「アイヤア、この前見た時より全然緑色に輝いてないアル！？」

ルージユ「ナツクルズ、これって……………！？」

ナツクルズ「……………あの氷の塊の言う通りだ……………マスターエメラルドのエネルギーが…完全に消えちまっている……………！」

ルージユ「何ですって！？」

その後、ナツクルズは悔しがるように、力を失ったマスターエメラルドを拳で叩いた。

ナツクルズ「くそっ！ あの訳の分からん妖怪共めえ……………！！  
一体何のためにマスターエメラルドを……………！！」  
明日菜「ナツクルズ……………」  
彼女は悔しがるナツクルズを心配そうに見詰めていた。

菲「アイヤア〜！？ ちょっとみんな、こっち来て見てみるアル！  
」

彼女が崖の下を覗きながら他の三人を呼び出すと、三人は同時に菲のいる所まで向かった。そして全員が崖の下を覗き込むと、そこにはミステイクルインの風景が見えていた。

明日菜「ちよっ、ちよっと待って！？ これって地上じゃない！？  
この島、確か上空に浮いてたはずじゃ……………！？」  
ルージュー「そっか……………あたし達が気絶している間に、エンジェルアイランドが地上に落ちて行っただのね？」

これも力を失ったマスターエメラルドが原因って所かしらね？」  
彼女は黒ずんだマスターエメラルドの方へ振り向きながらそう言った。

菲「でも、この島が地上に降りたって事は、どうなってしまうアルか？」  
ナツクルズ「エンジェルアイランドは古代から存在し続けた聖なる地だ。」

地上からの者には絶対に踏み入れてはならない禁断の地……………このまま放って置けば、  
マスターエメラルドが何者かに盗まれるだけでなく、  
この島を荒らされてしまうに違いない。

まあ、例えばマスターエメラルドが盗まれたにしても、その力が失った以上、なんの価値にならないだろうが……………  
それでも、どうにかしてこの島を再び大空に戻さなけ

れば……………」

明日菜「じゃあ、これからどうするの？」

ナツクルズ「確かミスティックルーインにはあいつらがいるはずだ。

奴らに会えば……………」

その後、彼は再びどこかへ歩き出して行った。

ルージユ「あつ、ちょっとまた……………!?!?」

ナツクルズ「付いて来い！ 地上まで案内してやる。」

明日菜「えっ、ホントに!?!?」

…ミスティックルーインにて

地上に落ちたエンジェルアイランドの前にいたネギ達は、

ティルスとソニックからエンジェルアイランドに関する話を聞いていた。

真名は以前ティルスから聞いたので十分に理解していたが、初耳なネギ達は頷きながらも話を聞き続けていた。

ネギ「…じゃあ、そのナツクルズって言う人(?!?)が、この島に住んでいるんですね？」

カモ(人って言うのかな、こう言うタイプの類って…?)

ティルス「うん。でもこの島が地上に落ちたって事は、マスターエメラルドに何かがあったに違いないんだよ。」

ソニック「つたく、一体\*何回落としいんだか……………」

\*メガドライブ版の『ソニック・ザ・ヘッジホッグ3』と『ソニック&ナツクルズ』、

ドリームキャスト版の『ソニックアドベンチャー』、またゲームキューブ版の『ソニックアドベンチャーDX』、更にニンテンドーDS版『ソニッククロニクル 闇次元からの侵略者』より参照。

聡美「しかし、島が空中に浮くなんて……私に取ってはさすがに非科学的ですが、この世界では有り得る事なんですな。」  
真名「まあ、私達の世界には当然ないだろうがな。」  
楓「けど感心するでござるなあ……こんな島が天空の彼方まで浮いていたなんて……」

以前見たアニメの映画とよく似てるでござるな。」

ネギ「とりあえず、そのナックルズさんをお呼びしてみましよう！ すみませえ〜ん、ナックルズさあ〜ん！！」

いたら返事してくださいあ〜〜い！！」

彼は大声でナックルズをお呼ぼうとするが、背後にいたテイルズとソニックは、ちょっと呆気なさそうに彼を見ていた。

テイルズ「いや、別に呼ばなくても普通に出てくると思うけど……」

…エンジェルアイランドにて

一方明日菜と菲、ナックルズとルージューは、地下へと進む洞窟の中にいた。しかし彼らが辿り着いた場所は行き止まりで、四人はその行き止まりの前に立ち止まった。

ルージュー「ちょっとお、行き止まりじゃない！」

ナツクルズ「いや、ここが正しいんだ。以前この壁の先にはミス  
ティックルーインの地上へ繋がる大穴があったんだが、

この島が空に浮かんだ後に、不必要と思い、封鎖した  
んだ。だが再び地上に降りてしまったと言う事は、

再びそれを開く時が来たって事だ。」

その間、菲は別の通路を目撃し、ナツクルズに呼び掛けた。

菲「おおーい、ナツクルズ！ こっちにも道があるアルが、こっちは  
どこへ繋がってるアルかあ？」

ナツクルズ「ああ、そっちは氷河地帯の『アイスキヤップ』に繋が  
ってる道だが、今はそこへ進む必要はない。

放つとくがいい。」

その間、ルージュは耳を壁に当てながら、外側から何かを聞き取っ  
ていた。

ルージュ「……………何かしら……………外側から子供と思われる声が聞こ  
えると思うけど……………」

ナツクルズ「きつとそれはテイルスだろう。そうしたら、ソニ  
ツクもいるはずだ！」

みんな、この場から離れてる！ 今直ぐ壁をぶっ壊す

！

彼がそう言つと、明日菜と菲、そしてルージュはナツクルズから離  
れた。

ナツクルズ「よしっ、行くぞお！！ とおおおおりゃあああああ  
……………」



だな！」

彼はお気楽にそう言うが、ナツクルズはそれに対して更に険しい顔をした。

ナツクルズ「別に好きでこんな顔してた訳じゃねえよ……………ん？」  
その後、彼はソニックの隣にいたネギ達の方へ振り向いた。

ナツクルズ「そこにいる連中は……………？」

テイルズ「ああ、この人達の事？ ちよつとした事情で僕達の所で泊まっている人達だよ！」

ネギ「あつ、は、初めまして！ 僕、ネギ・スプリングフィールドと申します！」

聡美「同じく葉加瀬聡美です、以後よろしくお願いします！」

二人は挨拶しながらナツクルズの前にお辞儀した。

楓「長瀬楓でござる。よろしくでござる！」

真名「龍宮真名だ。よろしく。」

ナツクルズ「ネギ……………？ その名前…どこかで聞いたようなあ……………」

……………。それに、そっちの女達の服……………確か……………」

彼はネギの名前と他の三人の服に関して何か思い出そうと顎を撫でるが、四人はそれに対して少しだけ頭を傾げた。

ルージユ「ちよつと、いつまで待たせる気よ！？ 悪いけど、勝手に

に出させてもらうわよ！」

彼女はそう言いながらナツクルズの背後から姿を現した。

ソニック・テイルズ「ルージユ！？」

明日菜「あつ、出口ちよつと出来上がったの！？」

菲「ちよつと出られるアル！ この洞窟、ちよつと暑苦しいアルよ！」

二人はそう言いながら、ナツクルズとルージユの背後から姿を現した。

ネギ「アスナさん！？ 古老子！？」

そんな明日菜と菲の姿を見たネギは、思わず大声を出すほど驚き出した。

明日菜「えっ……………ネ、ネギ!？」

菲「おお、ネギ坊主ではないアルかあ!! それに楓に真名、そして八カセまでもお!!」

聡美「明日菜さん!？」

楓・真名「古!？」

ナツクルズ「何っ!？」

ルージユ「えっ、知り合いなの!？」

ソニック「ホワットWhat!？」

テイルス「ま、まさか……………!？」

予想外な展開により、全員が驚愕した。

明日菜「あははははあ!! ネギい……………!!」

ネギ「やつと会えましたね、アスナさあくん!!」

二人は喜びながらお互いに向けて駆け出し、抱き合うが、その後明日菜はネギをしつかり掴み、彼の頭を激しく掻き出し始めた。

明日菜「全く、あんた今までどこへ行ってたのよお!? こっちは心配してたんだからねえ!？」

ネギ「痛たたたたたあっ!! ぼ、僕は一昨日からずっとここにいましたよ! 僕だってアスナさんの事…って、アスナさん!

ちよっ、ホントに痛いんですけどお!？」

カモ「まあ、元気そうで何よりってか?」

菲「いやあ、みんなここで会えてよかったアルよあ! みんな元気してたアルか?」

彼女は呑気そうに笑顔でそう言うが、三人はそんな彼女を見て多少啞然としていた。

聡美「いや、そう言う古菲さんこそ、元気そうで……………。」  
真名「って言うかお前……………神楽坂もそうだが、多少ボロボロじゃ



ないか!？」

楓「一体何かあったでござるか？」

菲「え、あ、まあ……ちよつと色々アルな……。」

彼女は少々困りながら、自分の頭を掻き始めた。

ナツクルズ「なるほど、あの二人が言つてた友達とはあいつらだったんだな？」

ルージュ「でもようやく会えたみたいね。あんなに嬉しそうだもの。」

ソニック「へへッ、よかつたな、ネギ! 更に友達と会えて!」

テイルズ「でもびっくりしたなあ……まさかエンジェルアイランドにも友達がいたなんて……。」

ネギ「ところでアスナさん! 見ての通りボロボロだそうですが、一体何があつたんですか!? いや、

その前にどうやってあの島に……?」

彼は一瞬明日菜から離れながらそう問い出した。

明日菜「あつ、そうそう!! その事なんだけどねネギ……実は大変な事に……!」

グオオオオオオオオオオオオ!!

突然何かが唸る音が聞こえ、明日菜と菲以外の全員はその音が聞こえた方向へ振り向いた。どうやらその音は、

明日菜と菲のお腹から聞こえたらしい。

テイルズ「……その前に、何か食べさせた方がいいみたいね。」

ソニック「何だかお約束みたいな感じになって来たな、こう言う展開って……。」

明日菜・ネギ「あはははは……。」

二人は頬を赤く染めながら苦笑した。

## 第11話 恐怖！ルイージマンション

……敵の侵略により、浮遊島エンジェルアイランドがミスティックルイージンの地上へ墜落した後、

明日菜と菲と合流したネギ達。時刻は夕方になり、ネギ達はティルスが用意した夕食を食べていた。

それに故、明日菜と菲は空腹の余りにたくさん食べていて、それを見ていたネギ達は少々啞然としていた。

更に食事中、明日菜と菲はエンジェルアイランドで起こった全ての出来事を、食べながらもネギに語り始めた。

ネギ「な、何ですてえ！？ エンジェルアイランドでスタークリスタルの妖精と戦ったあ！？」

彼は驚きの余りに、思わず大声を出してしまった。

明日菜「そう！！ しかもこれも見た事もない妖精やっでね、変な化け物達を呼び寄せて私達に襲い掛かったのよ！」

菲「しかも『ネオ・パクティオーカード』を使っても、敵が再生ばかりしてたから倒すのに苦戦したアルよ！」

でも、ナツクルズとルージュのおかげでどうにかしてやつけたアル！」

ネギ「しかも氷の妖精って……僕が以前出会った事のある妖精は確か…花、水、炎、

そして闇の四種類だけでしたけど……。」

カモ「いや、兄貴。スタークリスタルには全部で十個も存在するから、

その四体以外にもまだ他の妖精も存在しているかもしれないツスよ？」

聡美「しかも何でしょう、このディメンション・ドウエラーズと言

う存在は……？ カモさんは何かご存知ないのですか？」

カモ「いや、俺たちには何も知らねえよ……。妖精の力によって生み出されたって言う化け物達……」

以前は生徒達を操っていたけど、当時はそんな化け物なんていなかったしなあ……。とは言っても、

あの時は石の数は不完全だったから、そのような化け物達も現れなかったかもしれないねえな？」

真名「しかも『ネオ・パクティオーカード』の力を使っても倒せないほどの強敵なのか……。」

楓「スタークリスタル……。拙者達の知らない間に相当強化されたようでごさるな？」

ナツクルズ「で、俺達がそいつと戦っている隙に、そいつらの親玉がマスターエメラルドのエネルギーを吸収しちまったんだ。

何のためにそんな事をしたのかは知らんが、

そのおかげでエンジェルアイランドが今のザマになっちまったって事だ。」

ソニック「そう言う事か。」

彼はテーブルに足を乗せ、椅子を後ろへ傾いた状態に座り、手に林檎を食べながらそう言った。

カモ「うう〜ん……。でもこれで一つだけ分かった事があるぞ？ 俺達がこの世界に来ちまったのは、

きつとあのスタークリスタルの仕業ツスよ！ 姐さん達の話によると、

そのデイメンション・ドウエラーズとか言う化け物達、空間の歪みと供に出現したって言っただろ？ 空間の歪み……

それは俺達が巻き込んだあの怪現象と同じかもしれないツス！

特にスタークリスタルが全て十個集めるとそいつらが生み出されるって言うてたし、

これは間違いなくスタークリスタルが元凶かもしれないツス  
！」

ネギ「やっぱり…これもスタークリスタルのせいだったんだ……  
と言う事は、その所有者もこの世界にいるって事!？」

カモ「かもしれないエッス。」

聡美「でもその所有者は何者なんですか？ 何のために私達をこの  
世界に……？」

カモ「そこなんだよなあ……」。元凶はスタークリスタルだと  
言う事が分かったにしても、犯人は誰なのかはあ……。

まあ、アーニヤが犯人じゃないのは分かったとして、

さすがに兄貴との関連性のある人物かどうかも分からねえな  
あ……。

特に何のために俺達をこの世界に連れて来たのかも……。

テイルス「でも、とりあえずこれで更なる友達を見付けてよかった  
ね！ まさかエンジェルアイランドにいたなんて、

最初から思ってもいなかったけど……。」

ネギ「そ、そうですね……。とにかく、お二人ともが無事でよかつ  
たですよ！」

真名「そうだな、敵に襲われたにしても、今はこうして生きて会え  
たのだからな。」

二人は笑みで明日菜と菲にそう言うが、逆に二人の少女は不安そう  
に頷いた。

明日菜「う、うん……でも、今の所このかと刹那さんがどこにい  
るのかは、さっぱり……。」

菲「特に五月もどこにいるのかも分からないアル……もしかした  
ら、超も見当たらないアルか？」

聡美「ええ……工学部で一緒にいたはずだったのですが……。  
真名「こっちもザジを見失ってしまい、今はどこにいるかは……。」

」

楓「鳴滝姉妹の事も少々気になるでござる。あの二人、拙者と同じさんぽ部でありながら、

サバイバルには慣れていていると思うが、生憎食料も持たずに、この見知らぬ世界にいたのでござるからな……………。

今頃拙者を探しに迷っているかもしれないでござる……………。」

その後、少女達は不安な気持ちで落ち込み、暗い空気を漂わせていた。そんな状況の中、

ネギは一人慌てながら少女達にこう言った。

ネギ「だ、だ、大丈夫ですよ、皆さん！！ きっと他のみんなは無事ですよ！ 今はどこで何をしているかは知りませんが、

こっちが動かなければ見付ける事も出来ません！ そのためには、皆さんの力を合わせて、探すしかありません！」

ティルス「ネギの言う通りだよ！ 僕達も一緒に探すの手伝うから、元気出してよ！」

ソニック「余り深く気にしてちゃあ、何も始まらないぜ？ 俺達も一緒に探せば、全員集合なんてあつと言う間さ！」

三人は少女達を励まそうとすると、彼女達は少し元気を取り戻すようになった。

明日菜「そうだね……………余計に困難に陥ってちゃ、向こうも迷惑になるもんね！ よぉ〜しっ！！ そうと決まったら、

明日から搜索開始よお！！！」

菲「そうアルな！ 搜索開始アルう！！！」

元気を取り戻した二人は、勢いで立ち上がり、気合を入れ出した。

そんな二人を見た聡美、真名と楓も、それに応じて笑みを浮かべた。

楓「ハハハ、完全に元気を取り戻したでござるな！」

真名「まあ、神楽坂と古らしいけどな。」

聡美「でも何だかこっちも元気を取り戻した気がします。」

ソニック「……………で、お前はどうすんだ、ナックルズ？ 俺達と一緒にネギの友達を探しに行かないか？」

彼はナックルズに振り向きながらそう問い掛けた。

ナックルズ「ん？」

彼は腕を組みながらも、ソニックに軽く返事した。

ソニック「どうせここに来たんだから、何もしないんじゃ退屈になるだろ？ 久しぶりに一緒に冒険にでも行かないか？」

ルージユ「止めなさいよ、ソニック！ こんな奴、暇な訳ないじゃない？ あたしもついさつき同じ事で頼んだけど、

エンジェルアイランドとマスターエメラルドを守るのに忙しいから断りやがったのよ！

こんな石頭が人のために物事をやったりはしないわよ！

彼女は皮肉になりながらナックルズの事をソニックにそう言うが、逆にナックルズはただ腕を組みながら黙り込んでいた。

もちろんルージユの言葉に対して苛立っていたが、彼は何も言わなかった。しかし、その後彼はこう言い出した……………。

ナックルズ「……………いいだろう。」

ルージユ「ソニック「へ？」」

彼が一言を口にした後、ソニックに見上げた。

ナックルズ「俺も一緒に探すのを手伝ってやるう。」

ルージユ「ええっ！？ マジでえ！？」

ソニック「ホ、ホントかあ！？」

予想外な一言に、二人は思わず哑然とした。

ナックルズ「奴らはマスターエメラルドのエネルギーを奪ったんだ！ そしてネギ達もそいつらと関わりがある！

同行すればきっと奴の所へ辿り付くはず！ もしそうであれば、

マスターエメラルドのエネルギーを取り返すためなら、

何だつてやるぜ！」

ルージユ「なあんだ、結局それなのね……………」。

彼女は呆れた表情でナツクルズにそう言った。

ソニツク「まつ、でも一緒に協力してくれるなら、それでいいけどな！　じゃつ、よろしく頼むぜ！」

彼は親指を立てせ、ナツクルズにウィンクしながらそう言った。

そしてその後、彼はルージユの方へ振り向いた。

ソニツク「ならあんたもどうすんだ？」

ルージユ「もちろん協力するわよ！　何せ、明日菜と古菲と約束したからね！」

ティルス「これで仲間も増えた所だし、明日も搜索活動にがんばろう、ネギ！」

ネギ「はい！」

彼は頷きながらそう答えた。

明日菜「それはそうと……………おわかりい〜！」

菲「私もアルう〜！」

二人は食べ切った皿を持ち上げながら、明るそうにそう言った。

ティルス「あ、はいはい！　今直ぐ入れるから！」

彼はそう言いながら、明日菜と菲から皿を取り、ご飯を入れにキッチンの方へ行った。

ネギ「ちよ、ちよっと明日菜さん、古老子、ダメじゃないですか、

おかわりなんかしちや…！　遠慮ぐらいししないと……………！」

明日菜「だつてお腹空いたんだもおん！」

菲「腹減つては戦は出来ぬアル！」

その後、ティルスはキッチンから出て、おかわりした食事を明日菜と菲の所へ持つて行った。そしてそれを受け取った二人は、早速食べ始めた。



ルージユ「しつかしまあ、よく食べれるわね、あんた達……同じ女のあたしでもさすがに真似出来ないわね……。」  
彼女は多少引き気味になりながら、明日菜と菲を見てそう言った。  
カモ「まあ、無理はねえよ。『ネオ・パクティオーカード』は使用中にエネルギーを消費しちまうから、

それなりに食べないと回復しねえからな。」

彼がそう言った後、今度はルージユはカモの方へ振り向いた。

ルージユ「……って言うか、何で小動物のあんたが喋れる訳？」  
カモ「あんたまで聞くなよ。」

ティルス「所で、何でルージユがここにいるの？」  
ルージユ「休暇よ、休暇！」

……時刻は夜

辺りは暗闇に包まれていた。自分に意識はある物の、身動きが取れない。ここはどこなのか、自分は何をしているのか、少女はただそう思っていた。

『……さん……オさん……』

その時、突然どこかから声が聞こえ、少女は唸りながらも、少しずつ目を開き始めた。開眼するまで視界は少々ぼけていたが、しばらく経つとその視界は滑らかになった。そして気が付けば、少女の前にもう一人の少女がいた。それは短いツインテールをした、ちょっとポツチャリな少女で、彼

女は心配そうに少女を呼び掛けていた。

そう、彼女の正体はネギの生徒、またはパートナーであり、中華料理店『チャオバオス超包子』を経営している麻帆良一の料理少女、四葉五月であった。

五月「超さん!!」

彼女がその少女に声を掛けると、少女は完全に目を覚ました。少女はお団子に黒いお下げをしていて、

赤い頬をしていた中国人少女であった。そう、彼女の正体はネギの生徒、またはパートナーであり、親友の五月と共に中華料理店『チャオバオス超包子』を経営している麻帆良一の秀才、超鈴音であった。

彼女が五月の声により目を覚ました後、頭を抱えながらゆっくりと起き上がった。

鈴音「……………う……………う……………ん……………さ、五月か？」

五月「よかったあ、超さんが無事で！ 何度も呼び掛けても返事がなかったので、心配してたよ！」

彼女は安心そうにそう言うが、逆に鈴音はそんな五月を見て不思議そうに思い始めた。

鈴音「……………アレ…？ 何で五月がここにいるネ？ 私、確か八カセと……………!？」

彼女はふと周囲を見回ると、何かに気付いた。実は二人は、ある部屋の中にいた。その部屋はとても薄暗く、埃や蜘蛛の巣に包まれた洋風な家具が置かれていて、壁紙も所々破けていた。その風景はいかにも不気味だったが、逆に鈴音は見覚えのない部屋に対し混乱していた。

鈴音「つて、こゝここはどこネ!? 何で私達はここにいるネ!?」  
五月「そこが問題なのよ……………私達、気が付いたらこんな不気味な場所にいたの。」

鈴音「ど、どゆ事ネ、それって……………!? 私、確かハカセと一緒に工学部で、

ある開発中のプロジェクトを進ませようとしてたはずだけど……………」。  
その後彼女は途中で止まり、今までの出来事を思い出そうとした。

鈴音「……………その後、突然開発中の機械が爆発して……………その事で少し落ち込んだけど、その後他の機材も故障し始め……………」

次に空気中から奇妙な電流が現れ…地震も起きて……………何だか分からないけど、突然部屋が歪み始めて……………」

ダメネ! その後目の前が真っ暗になったから、何も覚えてないネ!」

五月「でも、その現象、私にも同じ事があつたよ? あれも確か授業が終わわり、休み時間に入った時……………」

私はしばらく『チャオパオス超包子』で働いていて、そこでくーさんに私特製の肉まんを食べさせていたよ。

その後、超さんと同じ怪現象が起き始めて、気が付いたら私は超さんと一緒にここに……………」。

彼女がそう言った後、鈴音は再び部屋の全体を見回った。

鈴音「……………けどここはホントにどこネ? 部屋が古そうに見えるからにして……………」

ここは明らかに麻帆良学園の物ではないと思うネ。」

五月「そうみたいだけど……………ただ一番気になるのは、くーさんは今どこにいるのかは……………」。

鈴音「そうネ…ハカセもどこにも見当たらないシ……………もしかしたら、

この異様な建物のどこかへ逸れてしまったかもしれないネ？」

五月「え、そうなの？」

鈴音「いや、あくまでも私の推測ネ！」

彼女は意味深に笑顔でそう言うが、逆に五月は呆れそうに肩を下ろした。

五月「じゃあ…これからどうするの？」

鈴音「とりあえず、まずは八カセと古を探すネ！ その後はここから脱出するネ！」

五月「探すって言っても……ここはどんな場所なのか分からないんだけど……。」

鈴音「その事はこの部屋を出てから……!!？」

しかし、彼女が部屋の扉の方へ振り向いた瞬間、出口付近から突然三体の幽霊が出現した。

一体はオレンジ色で少々小柄な幽霊と、次の一体は赤くて腕の長い幽霊、そしてもう一体は青くて大柄な幽霊であり、

どちらも不気味な笑みに怪しく黄色く光る目をしていて。 三体とも出現した後、不気味な笑い声を上げながら、  
徐々に二人の少女に接近し始めた。

幽霊・橙「ゲッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ!!」

幽霊・赤「ウッヒヨッヒヨッヒヨッヒヨッ!!」

幽霊・青「グッフェッフェッフェッフェッ!!」

五月「ひっ!?!? ちょ、ちょっと何あれ!?!? お、お化け!?!?」

鈴音「みたいネ…?!? だとしたら、ここは何かのお化け屋敷ネ?」

なら五月は離れてヨ! ！ここは私に任せるネ!」

五月「あ、う、うん!」

彼女が頷いた後、少し鈴音から距離を離れ、幽霊達に構える彼女を

見守る事にした。

鈴音「あんた達、何者なのか知らないけど、私達に手を出すと酷い目に会うヨ！」

幽霊・橙「ケヒヤ~~~~~!!!」

だがオレンジの幽霊はそんな彼女の言う事も聞かず、そのまま襲い掛けて来た。

鈴音「おっ？ やっぱり酷い目に会いたいネ？ なら私の蹴撃、得と受けてみヨ！！ はあっ！！！」

彼女は強烈な回し蹴りを仕掛け、襲い掛かる幽霊に攻撃するが、相手が幽霊であるためか、彼女の足はそのまま幽霊の顔から透き通った。

鈴音「えっ!？」

幽霊・橙「ケエエエエエエエイ!!!」

その後、オレンジの幽霊は腕を回し出し、その勢いで鈴音を殴り飛ばした。

鈴音「ぐあっ!？」

殴り飛ばされた鈴音は、そのまま古びた筆筈に激突した。

五月「超さん!!!」

鈴音の倒された姿を見た彼女は、急いで鈴音の方へ駆け付けた。

五月「大丈夫!？」

鈴音「うつ……くつ……へ、平気ネ……。」

幽霊・橙「ゲツヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ!!!」

幽霊・赤「ウツヒヨッヒヨッヒヨッヒヨッ!!!」

幽霊・青「グツフェツフェツフェツフェツ!!!」

そんな鈴音の有様を見ていた三体の幽霊達は、まるで気分爽快になったかのように笑い出した。

鈴音「……で、でもこいつら……こちらの攻撃が効かないのに、向

こちらの攻撃が通用しているネ…………。

さすがに普通では戦えないネ……………！」

五月「じゃあ、どうすれば……………」？」

鈴音「ここはしょうがない……………魔法を使うネ！」

五月「うん！」

彼女は頷きながら鈴音にそう答えた。その後鈴音はゆっくりと立ち上がり、五月と一緒に構え出した。

五月・鈴音「『アデ……………』……！」

「待てえ……………い……………い……………！」

ドオオオオオン……………！！

しかし、二人の少女が呪文を唱える前に、突然何者かが扉を蹴り開けて現れた。それは筆のような形をした白髪に、

牛乳瓶の底のような丸い眼鏡と白衣をした老人で、背中に赤い掃除機を背負っていた。

そんな見るだけでも怪しい老人が登場した後、三体の幽霊は彼の方へ振り向き、二人の少女は呪文を唱えるのを止め、

啞然としていた。

老人「おお、これは驚きじゃ！まさかこんな所で誰かがいたとは

！じゃが安心せい！今からこいつらを退治してやるう！」

彼がそう言うと、手に持っていた掃除機を構え出した。

幽霊・橙「ゲヒヤア……………！！！」

その後、オレンジの幽霊は突然老人に目掛けて襲い掛かって来た。

老人「ええ…い、この悪戯好きな『ヤプー』めえ！お前はこうしてやるう……………！」

すると彼は懐中電灯を取り出し、それをヤプーに照らし出した。  
ヤプー「エギヤアアアア!?」

敵は懐中電灯の光による眩しさにより、両手で目を隠しながら怯み出した。

老人「隙ありい!!」

ジュオオオオオオオオオオ!!!

そして老人は掃除機を起動させ、ヤプーを吸い込もうとした。

ヤプー「ギギヤアアアア!!」

だが吸引中に苦しんでいるヤプーは、吸引から解こうと暴れだし始め、老人を引き回し始めた。

老人はそれに対して引つ張り上げようとするが、それでも引き摺り回されていた。そんな異様な光景を見ていた五月と鈴音は、ただ無言状態で啞然としていた。

老人「ええ〜い、大人しくせい!!」

ヤプー「ギエアツ!!」

しかし突然ヤプーはその老人を殴り飛ばし、吸引から解放した。

老人「あうばあ!?!」

飛ばされた老人は、顔を抱えながら床へ転げ落ちた。

老人「痛たたたたあ……………うむう〜、やはり年寄りのワシにはもう無理みたいじゃなあ……………」

鈴音「ちょ、ちよつと大丈夫力!?!」

五月「しっかりしてください!!」

二人は痛め付けられた老人に駆け付け、心配そうにそう言った。

老人「おお……………君達がこの哀れな老いばれ爺を心配してくれるとは、何とありがたい……………って、

こんな事してる場合じゃなかったわい! 君達、急いでワシと一緒にここから脱出するのじゃ! さあ、早く!!」

彼はそう言いながら、鈴音と五月の手を握り、引つ張りながら開いた扉の向こうへ脱出した。

鈴音「おわっ!?!」

五月「きゃっ!?!」

ヤプー「ゲツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツ!?!」

幽霊・赤「ウツヒヨツヒヨツヒヨツヒヨツ!?!」

幽霊・青「グツフェツフェツフェツ!?!」

幽霊達は笑いながらも、三人を逃がさないつもりで追いつめた。

…謎の幽霊軍団から逃げ切れた五月と鈴音、そして謎の老人は、とある研究所らしき場所へ辿り着いた。

部屋の中には数多くの機材が置かれていて、鈴音はそれに対して多少興味津々であった。

老人「ふう……………ここなら安心じゃ。あの幽霊達はあの屋敷の外から出られんからな。」

五月「あ、ありがとうございます。私達を助けてくれて……………」  
彼女はその老人に感謝しながらお辞儀した。

老人「いやいや、気にせんでいい! 当然の事をしたまでじゃ!」

鈴音「しかし、ここすごいネ! 色んな機械が置かれて……………しかもどれも見た事もない物ばかりネ!

ここ、何かの研究所力?」

老人「何じゃ? 君はここがどこのか分からんのかね? ここは『ルイーザマンション』に住み着いている、

お化け達を研究するために設立した『お化け研究所』じゃよ



！そしてワシがその研究をする天才科学者で、

『オヤ・マー・サイエンス社』を経営する社長でもある、  
「オヤ・マー博士」じゃよ！」

鈴音「オヤ……マー……博士……？」

五月「ルイージ……マンシヨン……？」

二人は聞き覚えのない名前を聞いた後、呆然としていた。

オヤ・マー「何い？ 君達ワシの事も知らんのかね？ これは参ったのう……」

ワシはこれでも一応有名な科学者として知られているはずなんじゃが、まさか知らぬ者もいたとは驚きじゃ！」

鈴音「いや……って言うか、私達、ホントにあんたの事知らないんだけどネ……」。  
彼女は頭を掻きながらそう言った。

オヤ・マー「……まあ、確かに言えるな？ 何せそんな君達も、さすがにここの者とも思えんがな。」

鈴音「え……つまり、どう言う意味で？」

オヤ・マー「そうじゃな……君達のような人間は、さすがにここキノコワールド大陸には見掛けんなあ……」。

ダイヤモンドシティなら多少いる事はいるが……最もと言えばモビウス大陸の方じゃろうな。

君達はその出身かのう？」

五月「モ、モビウス……」。

鈴音「大陸……？」

二人はそう言った後、お互いに向き合って頭を傾げた。

オヤ・マー「何い！？ 君達、そのような国も知らんのかね！？ これはまた一大事じゃ！ 君達は一体どこから来たのかね！？」

いや、その前に……元はと言えば君達は何であるの屋敷にいたのかね？

まさか季節外れの肝試しでもしてたんじゃないかなろうな

？」

鈴音「いや、別に私達はそんな事を………！」  
五月「と、とりあえず、私達の話聞いてください！」

その後、鈴音と五月は今までの出来事を全てオヤ・マー博士に説明した。

オヤ・マー「ふむ、なるほど………君達はその麻帆良学園とか言う、日本にある学校から来て、

突然発生したその怪現象に巻き込まれ、気が付いたらあの屋敷内にいたとな？」

鈴音「まっ、そゆ事ネ。」

そして鈴音と五月は全てを説明し終わると、オヤ・マーは腕を組みながら考え始めた。

オヤ・マー「うう~~~~む……………麻帆良学園……………日本……………残念ながらどちらでも聞いた事もないのう……………」

鈴音「えっ!？」

五月「そ、それって、どう言う意味ですか!？」

オヤ・マー「いや、どう言う意味と言われても……………」

要するにそのような名前を持った学校や国はこの世界には存在しないと言う事じゃ。

ワシは以前に色々な学会に行った事があるが、その麻帆良学園と言う学校だけは行った事もない上、

聞いた事もないのう。」

鈴音「じゃあ、ここは一体何て言う国ネ？」

オヤ・マー「君達の話によれば、多分君達には聞いた事もないじやろうが……………」

ここはキノコワールド大陸にあるキノコ王国じゃ。

多くのキノコ族が住み着いている大国でな、

それなりに平和な国でもあるんじゃないよ。そして今君

達がいるこの研究所は、『テレサの森』にあつて、

お化けが多く生息している事から誰も近付けん無人の森なんじゃよ。 まっ、

ワシはその研究を行うためにこの森に住み着いてるんじゃない。」

五月「キノコワールド大陸にあるキノコ王国に……………」。

鈴音「テレサの森……………」？

二人は更なる困難に陥つたのか、再びお互いに向き合い頭を傾げた。

オヤ・マー「ふむう……………君達がそのような動作を取ると言う事は、どう考えても君達はこの世界の住民ではなさそうじゃな？

もしそうだとすれば、君達は別の世界から来た人間じやろうか？」

五月「別の世界？」

鈴音「それつてもしかして……………」。

二人はそう言った後、再びお互いに向き合い、小声で話し合った。

五月「ねえ……………やっぱ、言っちゃっていいかな？」

鈴音「うう〜ん……………多分大丈夫かな？ どうせここ、私達の世界じゃないし……………」。

その間にオヤ・マー博士は何の話をしてたのか気になっていたが、その後二人の少女は再び彼の方へ振り向いた。

五月「あの……………変な感じに思えるかもしれないけど……………」。

鈴音「ここつて、魔法で出来た、いわゆる幻想世界とか言う世界ネ？」

オヤ・マー「幻想世界？ 魔法で出来た？ 何を言っているのかは知らんが、恐らく違うと思うぞ？」

そう平然に答えた彼に対し、二人の少女は少々唾然としていた。

五月「ええ！？ じゃあ、ちょっと待つてください！」

鈴音「それつて、この世界では魔法は存在するネ！？」

オヤ・マー「まあ、ワシも一応それに関して研究をしているが、存在すると言えば存在するのう。ただし、

モビウス大陸の方では主に科学を中心にしておるから、向こうは滅多にないのう。」

五月「そ、そうなんですか？」

鈴音「これは驚きネ！ 私達の世界では魔法はタブーなのに、この世界では常識的になつてゐるネ！

それが私達の世界とこの世界の大きな相違点と言つべき物力？」

五月「じゃ、じゃあ、もう一つあります！ あの、私達実は、ここに来る前に二人の友達がいたんですけど……

一人は色黒で金髪の女の子と、もう一人は眼鏡をかけて、おでこが広くて黒いお下げをした女の子で、

二人共私達と同じ格好をしてたんですけど……見掛けませんでしたか？」

オヤ・マー「ん？ はてえ……そんな少女ら、見掛けなかったのう……？ 特にあの屋敷にも……。」

彼が考えている間に、ふと何かを思い出し始めた。

オヤ・マー「おお、そうじゃった！！ ワシはあの屋敷で何かをしていたんじゃない！！

そこで君達に関して色々あったからすっかり忘れてもつたわい！」

彼はまるで鈴音と五月に責任があったかのようにそう言ったが、二人は別に気にしてもいなかった様子だった。

五月「えっ！？」

鈴音「な、何ネ、いきなり……？」

オヤ・マー「君達、ちよつとワシに付いて来なさい。見せたい物があるんじゃない。」

彼がそう言った後、そのまま扉の方へ出て行った。そんな二人の少女は頭を傾げながら、老人の後を追った。

……鈴音と五月は、オヤ・マー博士の案内により、ある部屋に辿り着いた。

その部屋には絵が飾られていない数個の額縁が壁に貼られていて、いかにも殺風景な部屋であった。

二人の少女は不思議に思いながらも、その部屋にいるオヤ・マー博士に向いていた。

オヤ・マー「ではまず……ここは何の部屋なのか、分かるかおう？」

五月「何の部屋と言われても……」。

オヤ・マー「博士の質問により、二人の少女は部屋中を見回り始めた。鈴音「何もない額縁が飾られているだけの部屋にしか見えないネ？」オヤ・マー「まあ、確かにこの部屋には額縁がたくさん飾られておるが、肝心の絵画がないんじや。」

この部屋は『オバケ絵ギャラリー』と言ってな、

絵の中に封印した幽霊達を収めるために作られた部屋なんじやよ。」

五月・鈴音「オバケ絵？」

オヤ・マー「そうじや。実は君達が先程いた屋敷にはな、二種類の幽霊が存在するんじや。」

一つは先程君達を襲ったヤプーと、赤くて腕の長い『マプー』、そして青くて大きめな『モプー』がいてな、

そいつらは雑魚的なお化けなんじやが……もう一つ

は『肖像画のオバケ』と言って、

他の幽霊とは違って特別な幽霊なんじゃ。何でも雑魚に過ぎぬヤプー達とは違い、

ある条件を満たさないと出現しないと言うんじゃ。

特に不思議な力も持っているとも言われておる。

元々は肖像画の中に封印されていたんじゃが………ワシが留守にしている間に、

何者かがこの部屋に侵入し、幽霊達を解放し、逃がしたんじゃ！

特に幽霊の中でも最も危険とされている奴までも……

……。

彼は一番奥にある大きな額縁を見ながらそう言った。それを聞いた五月と鈴音も、少々青ざめていた。

五月「き、危険な奴って………！？」

鈴音「ちよ、ちよっと待つネ！もしかして、この幽霊、解放されると何かとんでもない事でも………！？」

オヤ・マー「とんでもない！ただ屋敷内にうろついて、通常の生活を嗜むだけじゃよ！まあ、危険な彼奴もいれば、

そうでもない彼奴もおるがな。そう言うタイプの幽霊はただ人を驚かすのが好きなだけで、

それ以外は何の害もないんじゃよ。自由になりたいと言う気持ちもワシにも分かるんじゃが、

このまま放っておいては悪霊になってしまう恐れもあるからのう。」

彼は何もない額縁を眺めながらそう言った。

五月「…あのう………あの屋敷、一体いつ頃から建っていたんですか？」

オヤ・マー「さあ………ワシは二十歳の頃からずーっこの森に住んでいたが………

あの屋敷はその頃から元々存在していなかったんじゃないよ。突然姿を現したのはつい最近でな、

ワシも気になってその屋敷と幽霊達の研究を行ってあったんじゃないよ。ところが、

この屋敷には以前に恐ろしい事件があつてな。何でもこの屋敷を豪邸と思われ、

それがある人物にプレゼントしたらしいんじゃないよ。

その人物はやがて被害者となり、

幽霊の魔の手によって肖像画の中に閉じ込められてしまったんじゃないよ。

そこで後から来たその被害者の弟であり、ワシの良き友人である『ルイーダ』が訪れてな。

異変を感じたためにワシと出会い、幽霊退治の依頼を引き受けてくれたんじゃないよ。

臆病ながらも勇敢だったそいつは、見事に事件を解決させ、兄を助け出したんじゃないよ。

それまでにこの屋敷を人が住めるように改築作業を行おうとしたが、予算不足だったのか、

或いはまだ幽霊達が住み着いていたのか、結果は今の状態に残したらしいんじゃないよ。そのため、

その屋敷は今でも放置されていながらも、ルイーダ君の勇姿を象徴させるために、

『ルイーダマンション』と呼ばれるようになったんじゃないよ。まっ、本人は別に光栄に思つたらんがな。」

彼は小さく笑いながらそう言うが、逆に二人の少女は黙ったまま話を聞いていた。

オヤ・マー「……………まあっ、それまでにルイーダ君が回収した肖像画の幽霊達をこの額縁に収め、

安全に確保させたのじゃが……………先程言ったように、何者かがこのギャラリーに侵入し、全部逃がしたんじゃないよ。

何のためにそんな事したのかは分らんが、彼らをそのまま放って置く訳には行かんのじゃ。

そのため一番活躍してくれたルイーダ君に代わって、ワシが全ての幽霊達を回収しに行こうとしたんじゃが……

ワシはもう年でな、もはや今の体力では幽霊を捕獲する事も出来ん。

あの雑魚のヤプーでさえも捕まえられなかったんじゃ。

今のワシにはもうどうしようもならん。」

その後、彼は鈴音と五月の方へ振り向いた。

オヤ・マー「そこで、君達に頼みがある。ワシの代わりに幽霊退

治の依頼を引き受けてくれぬかな？」

五月・鈴音「えっ!？」

彼の頼み事により、二人の少女は思わず啞然とした。

オヤ・マー「君達がこの世界に訪れたのも、そしてここでワシと出会えたのも、きっと何かの縁じゃ。唐突ですまんが、

幽霊達を元の肖像画に戻すのを手伝ってくれぬかね？」

五月「い、いや、ちよ、ちよっと待ってください!」

鈴音「そんないきなりとネ……。」

二人は慌てながら困り始めるが、オヤ・マー博士は話を続けた。

オヤ・マー「まあ、突然の事じゃからな。でも君達はワシ以上に若い。それなりに体力は十分あると思うんじゃ。

特に……。そこのお団子頭の少女。」

彼は鈴音にそう呼び掛けると、鈴音は自分に指すように応じた。

オヤ・マー「ワシから見て思ったんじゃが、君には相当な体力を持つておるようじゃのう? 何やら、

普通の人間とは思えん強さを誇つとるようじゃ。君

にこの依頼を頼れば、

きっと幽霊退治も速やかになると思うぞ?」

鈴音「それって……私に筋肉が出てるって事ネ?」



彼女は多少気になりながら、自分の腕を確認した。

オヤ・マー「まあ、何よりも、可能性が高ければ、君達の友達も見付かるじゃろ。ワシには見付からなかったが、

多分見過ごしたかもしれん。きつとあの屋敷内のどこかにおるはずじゃ。

幽霊退治のついでに友達搜索も悪くないじゃろ？　じやから、引き受けてくれんかね？」

彼がそう頼み込むと、鈴音と五月は再びお互いに向き合った。しばらく沈黙が走ったが、二人はお互いに頷きながら、オヤ・マー博士に振り向いた。

鈴音「分かったネ！　その依頼、引き受けたヨ！」

五月「私達で良ければ、お手伝いさせてもらいます！」

オヤ・マー「おお、ホントか！？　それはありがたい！　ワシはその答えを是非聞きたかったんじゃ！　そうだとしたら、

ちよつとすまん。　研究所に戻るぞ？」

彼がそう言った後、鈴音と五月を連れて研究所へ戻った。

…研究所にて

研究所に戻った三人は、オヤ・マー博士により、五月と鈴音に何かを授けた。

それは先程オヤ・マー博士が背負っていた掃除機で、それが二体もあつたので、それを二人の少女に背負わせた。

その間に二人の少女は、掃除機を背負いながら、呆然としていた。

鈴音「……………あ、あの、博士……………」

五月「この掃除機は一体……………」?

オヤ・マー「これは『オバキューム』と言ってな、幽霊を吸い込ませるために作られた、幽霊退治専用道具なんじゃ。

これを起動中に幽霊に向かせると、その幽霊は中に吸い込まれてしまうんじゃ！ また、

この掃除機を火、水、氷に関係する物を吸い込ませると、そのエレメントを武器として扱えるんじゃ！」

五月「これが幽霊退治専用の道具……………」?

鈴音「余りそうは見えないネ……………」

二人は『オバキューム』を眺めながら、不満そうにそう言った。

オヤ・マー「まあ、確かに見掛けはただの掃除機で中途半端に見えるが、これでもワシが発明したハイテクな機械なんじゃぞ！」

普通の掃除機では出来ないからすごいんじゃ！ じゃが背負うだけで苦勞するじゃろうが、我慢してくれ。

本当は『オバキュームミニ』と言う小型携帯式掃除機型の機械を開発したんじゃが、

それも何者かに盗まれてしまったんじゃ。 あれさえ

あれば一発で幽霊を捕獲出来て、

ワシみたいな老いばれでも楽に使えるんじゃが……………」

鈴音「うう……………」ん……………まあ、あれネ。 見た目より機能ヨ！」

これで幽霊退治が出来るんなら、それはそれで大丈夫ネ！」

オヤ・マー「そうか、それならいいんじゃ！ それとこれも持って行くといい。」

彼は二つの白い懐中電灯を取り出し、それを二人の少女に手渡した。オヤ・マー「屋敷内は暗いからのう。 これさえあれば前へ進む事も出来るぞ！ じゃが、これをただの道標に使ってないぞ？」

これも幽霊を退治するには重要な道具でもあるからな！ もし幽霊が出現したら、

必ずこの懐中電灯の光を幽霊きやうに照らすんじゃ！ そしたら幽霊は怯み、

吸い込める隙が出来るはずじゃ！ 良いな、絶対なくすでないぞ！」

五月「分かりました！」

二人の少女は懐中電灯を受け取りながら頷いた。

オヤ・マー「ああ、そうそう！ ついでにこれも持って行くがいいぞ！」

彼はそう言いながら、白衣のポケットから折り畳んだ機械を取り出した。その姿は、

現実で言うところのニンテンドーDSiのような物で、白い体色をしている。それを受け取った五月は、不思議そうに頭を傾げた。

五月「あの、これは……？」

オヤ・マー「これはワシが開発した『ゲームボーイホラー』シリーズの最新作、名付けて『ゲームボーイホラーDSi』じゃ！」

この発明品には二つの画面があつてな、上の画面は普通に映像が映るんじやが、

下の画面はタッチスクリーンになつとるんじや！ タッチペンは機械の後ろに設置してあるから、

使いたい時は取り出すと良いぞ！ 詳しい機能は屋敷に入ってから説明するから、

くれぐれも大事にするんじやぞ！」

鈴音「屋敷に入ってから？ 博士も一緒に行くの力？」

オヤ・マー「いや、ワシのような老いばれはここに残った方が安全じゃ。」

特に一緒に行っても足手纏いになるに過ぎんじやろ。

まあ、詳しい事は入ってからじゃ。

それまでに準備は出来ておるかの？」

五月「はい……」

鈴音「もちろんネ！」

二人はそれに答えるように、五月は頷き、鈴音は腕を上げながらウインクした。

オヤ・マー「良かろう！　ところで、君達の名前、まだ聞いてなかったな。　すまんが、教えてくれんかの？」

鈴音「あっ、そう言えばまだ自己紹介してなかったネ。　私、超鈴音って言う名前ヨ！　よろしくネ！」

五月「四葉五月です。　よろしくお願いします。」

彼女はそう言いながら、礼儀正しくお辞儀をした。

オヤ・マー「五月君にリ……リン……意外と難しい名前じゃのう……。　すまんが、超君と呼んでも良いかのう？」

鈴音「それなら別に構わないネ！」

オヤ・マー「そうか、なら分かった。　では、早速屋敷の門前へ……。」

……しばらく経つと、五月と鈴音、そしてオヤ・マー博士は、ルイージマンションと呼ばれる幽霊屋敷に辿り着いた。

その屋敷は緑色に塗られていたが、二つの窓と扉が怒りの表情を作るかのように寄せていて、異様な空気を漂わせていた。

特に木々は完全に枯れていて、雨も降りそうもないのに雷が鳴り続けていた。　その恐ろしい風景を改めて見た五月と鈴音は、顔を青く染めながら引いていた。

五月「……ここ……ここが……ルイージマンション……。」

鈴音「な、何か改めて見ると、確かに何か出て来そうなくらい恐ろ

しいネ……………」

オヤ・マー「良いか？ 屋敷内には色々な部屋があるが、その分色んな幽霊もいるぞ！」

人を驚かすと言う子供じみた悪戯心を持つてる者もいれば、時には命さえも奪おうとする危険な彼奴もいる。

特に屋敷内には多少の仕掛けもあるかもしれん。 屋

敷内で捜索を行う際、くれぐれも注意するんじゃぞ！」

五月・鈴音「はい！」

二人は頷きながらそう答えた。

オヤ・マー「では超君、五月君、気を付けて行くんじゃぞ！ ワシも行けなくてすまないが、陰から応援してるぞ！」

五月・鈴音「はい！ 行って来ます！！」

二人は再び頷いた後、早速ルイーザマンションへと向かった……………」

## 第12話 幽霊掃除大作戦

……お化け屋敷ルイージマンションにある書斎にて、部屋に置かれていたロッキングチェアが勝手に揺れていた。

その様子を深く確認して見ると、そこには髭を生やした男性の幽霊がいた。彼は手に小説を持ち、椅子に座りながら読書していた。

男性幽霊「ふう〜〜〜……ここで読書しているとさすがに落ち着く……。やはり絵の中では窮屈で退屈だ。

たまにはこう言う広くて静かな場所で読書したいものだ。おかげで読み終わっていない小説を久しぶりに読める。

このひと時をどうにかして大切にしないとな。」

「悪いけどお前にはそんな暇はないヨォ〜!!！」

男性幽霊「!?!？」

突然どこから声が聞こえ、それに気付いた男性幽霊は手に持っていた小説を下ろし、辺りを見回した。

すると壁から二体の白い玉のような、四本の牙を生やした可愛らしいお化けが現れた。

白いお化けA「ケエ〜ッケッケッケッ!! やっぱりここにいたゾォ〜!!！」

白いお化けB「どうせここにいると思ったヨォ〜!!！」

男性幽霊「な、何者だね、君達は!?!？」

白いお化けA「お前は黙って吸い込まれてロツ!! ソレエ〜っ!!！」

ビュオオオオオオオオ!!!!



でたゲームにも似たようなステージあったネ？」

五月「ああ、あのゾンビが出て来るホラーゲームでしょ？……  
と言うより、超さんはあのゲーム買ってから、

全然開封すらしなかったくらい遊ばなかったじゃない。」

鈴音「あ、あれは研究や発明とかで忙しかったからヨ！ 本当は遊  
びたかったんだけど、どうも時間が……。」

五月「まあ、唯一一人であるゲームをクリアしたのは私なんだけど  
ね……。」

彼女がそう言うと、鈴音はなぜか愕然とした。

鈴音「ええええええ！?!? あんた、私より先に終わらせたの力  
!?!?」

五月「えっ!?!? だ、だって超さん全く遊ぼうとしないから……。」

鈴音「酷いネ!! 私正直暇が出来た時にはあのゲームを一日中終  
わらせる事を楽しみにしてたのに!?!?」

五月「で、でも……ちゃんとラスボスの所までセーブしたから大丈夫

……

エンディングなら一緒に見られるし……。」

鈴音「そゆ問題じゃないヨ!?!?」

ピッピッピッピッ、ピッピッピッ……

二人がゲームの事で言い合っている最中、突然五月のポケットから  
着メロっぽい音楽が流れて来た。

それに気付いた二人はポケットの方へ振り向き、それに気になった  
五月はポケットから何かを取り出した。

それは先程オヤ・マー博士から授けた『ゲームボーイホラーDSi』  
で、音楽もそこから流れていた。



五月「これから来てみたい……………」。

鈴音「ちよつと開けてみてヨ。」

彼女がそう言った後、五月は機械の画面を開いた。すると上画面からオヤ・マー博士の映像が映り、

下画面から何らかのメニューらしき画面が映り出した。

オヤ・マー『フォツフォツフォツ！ どうやら無事に入れたようじやな！』

鈴音「オヤ・マー博士!？」

五月「えっ、一体どこから……………!？」

オヤ・マー『フォツフォツフォツ！ 驚いたじやろ？ 実はこの発明品には通信機としても使われておるんじやよ！

これさえあれば、研究所にいるワシと会話する事が出来るぞ！ まあ、時にはこの通信機を使って、

ワシに何かの情報を伝えたり、或いはワシが君達に何かのアドバイスを与えたりなど出来るからな！

どうじや、便利でいいじやろ？』

五月「え、ええ……………正直驚きましたけど……………」。

鈴音「しかしビデオ付きの携帯電話とは、結構進んでるネ、この世界の時代って……………」。

オヤ・マー『では、まずはこの機械に関して色々説明しよう。下の画面を見てみるんじや!』

彼がそう指示すると、五月と鈴音は下の画面を見た。画面には三

つのタッチボタンがあり、

それぞれには英文字で『フォンPHONE』・『マップMAP』・『カメCAMERA』と表示していた。

オヤ・マー『まず、真ん中のマップボタンをタッチペンで押してみるんじや!』

タッチペンは機械の後ろに設置してあるから、取り出

して使ってみなさい。』

五月「はい。」

彼女は頷いた後、機械の後ろに設置されていた小さなタッチペンを取り出し、言われた通りにマップボタンを押した。

すると下のタッチスクリーンがメニューからマップ画面へと変更した。しかもそのマップ画面は、

屋敷全体を3Dで再現されていて、数箇所に赤い点や一つの青い点が表示していた。

鈴音「おお！ メニュー画面が立体式のマップに変わったネ！」

オヤ・マー「そう！ これは文字通り屋敷内の地図を立体的に映し出すシステムになっておるんじゃ！」

青い点は君達の現在地点で、これを注目すれば、君達は屋敷内のどこにいるのかが分かるぞ！

更にこのマップ機能には探知機レーダーも搭載していてな、

たくさん表示されている赤い点が肖像画のお化けを意味しておるんじゃ！ しかも最もすごいのは、

タッチペンでその赤い点に触れると、上画面にそのお化けのデータが表示されるんじゃ！

これさえあれば、幽霊達はどこにいるのか、どんな彼奴なのか、一発で分かるぞ！ じゃが、

ヤブーなどと言った雑魚お化けはレーダーに表示しないから、なるべく注意するんじゃぞ！」

五月「はい、分かりました！」

オヤ・マー「次に、メニュー画面に戻り、今度は下のカメラボタンを押すんじゃ！」

彼がそう指示すると、五月はタッチペンで下画面の右下にある矢印ボタンを押し、元のメニュー画面に戻った。

その後指示通りにカメラボタンを押すと、上画面がカメラ画面に変更した。

鈴音「おっ、今度はカメラモードに変更したネ！」

オヤ・マー『いかにも！ これはあくまで写真を撮る物ではなく、幽霊を確認するための霊視カメラ機能なんじゃ！』

通常肖像画のお化け達はヤプー達とは違い、肉眼では見えない特殊な幽霊なんじゃよ。

じゃがこのカメラさえ使えば、彼奴らはどこにいるのか確認する事が出来るぞ！

更にこの上画面の背後にあるレンズを彼奴らに向かせ、Aボタンを押せば、

その幽霊のデータを確認する事も出来るんじゃ！ もし目の前に家具か何かが浮き始めたら、

それを使いなさい！ 絶対に上手く行けるぞ！』  
五月「分かりました！」

オヤ・マー『まあ、大体こんな物かのう？ もしワシに何か聞いた事があれば、

メニュー画面にある電話ボタンを押すといい。その時は必ずワシが応答するから、

是非使ってみると良いぞ！ では、くれぐれも気を付けて、がんばるんじゃぞ！』

五月・鈴音「はい！」

二人が頷いた後、オヤ・マー博士は受信を切り、上画面の映像を閉じた。

鈴音「とりあえず、早速そのマップ機能使ってみるネ！」

彼女がそう言うと、五月はメニュー画面にあるマップボタンを押し、再びマップ画面が映り出した。

それを見ていた鈴音は、何やら感心していた様子。

鈴音「それにしてもこう言う携帯機にマップやビデオ電話、特にレダーや霊視カメラが搭載してあるなんて……」

やっぱり進んでるネ、この世界って。もしこんな時に八カセがいたら是非見せてあげたいヨ。」

五月「超さんもこれぐらいな機械作れるでしょ？」

鈴音「まあ、確かにそうネ。でもあの博士……………見た目よりすごい男ネ！ 今度彼から一つ教わってみようカナ？」

五月「それよりも、まずどこから始める？」

鈴音「そうネ……………とりあえず、今私達のいる場所から一番近い幽霊を狙うネ！」

ちよつど一階の北側から二体の幽霊がいるみたいだから、まずそいつらを退治して……………」

しかし、鈴音が話をしている間に、マップ画面の二階に映っていた一つの赤い点が突然消えてしまった。

五月「…あれっ？ 何これ？」

鈴音「二階のマップに表示していた点が消えた？」

その後、今度は一階に映っていたもう一つの点も突然消えてしまった。

五月「あつ！ 今度は一階の……………！」

鈴音「どゆ事ネ、これ？」

五月「まさか、私達がここにいる事に勘付いて……………」

鈴音「いや……………そんな訳ないと思うガ……………とりあえず、オヤ・マー博士に聞いてみるネ！」

五月「うん！」

その後五月は元のメニュー画面に戻り、早速電話ボタンを押した。しばらく呼び鈴が鳴っていたが、

直ぐに上画面からオヤ・マー博士の映像が映り出した。

オヤ・マー「おやおや、意外と早く電話して来たのう？ どうかしたのかの？」

五月「あの、すみません！ ちよつと気になる物を発見したのです

が……………」

鈴音「さっきマップを見ていた時、画面に表示していた赤い点が突然消えてしまったネ！ これってどう言う事力？」

オヤ・マー『何？ つまり幽霊が忽然と消えたじゃと？ そんなバカな……………」

肖像画の幽霊達はこの屋敷にしかおらんのじゃ。つまり自縛霊のような物じゃ！

そう簡単にはこの屋敷から脱出出来んよ！」

五月「でも、急に消えたんです、マップ画面から突然……………」

オヤ・マー『ふむう……………機械の故障ではないのは確かなんじゃが……………とりあえず、

その事に関しては後で調べるとしよう。まずは君達の所から一番近い幽霊を退治するんじゃ！

では、君達の活躍を期待しておるぞ！」

彼がそう言った後、受信を中断し、上画面の映像を閉じた。だが状況に納得行かなかった二人の少女は、困った顔でお互いに向き合った。

五月「どうしよう……………」

鈴音「……………しょうがないネ。とりあえず、北側にあるあの大きな扉があるから、そこを抜けて……………」

しかしその時、彼女達の目の前に三体の幽霊が出現した。それは先程出会ったヤプー、マプーとモプーであった。

ヤプー「ゲッヒャッヒャッヒャッヒャッ！！」

マプー「ウッヒョッヒョッヒョッヒョッ！！」

モプー「ゲッフェッフェッフェッ！！」

五月「きゃっ！！ あれはさっきの……………！！」

鈴音「また出て来たネ、この雑魚お化け達！ でもグッドタイミンググヨ！」

ちようどこの『オバキューム』を使ってみる所だったネ！  
さっきのお返し、得と受け入れヨ！！

五月、行くネ！！」

五月「は、はい！！」

彼女が頷いた後、懐中電灯の光をヤプーに照らさせた。

ヤプー「ギヤアアアアアアアッ！！！！」

光に当たったヤプーは目を隠しながら怯み始めた。

鈴音「今ネ！ 行っけええええ！！！！」

ビュオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

鈴音は『オバキューム』を起動させ、それでヤプーを吸い込み始めた。  
た。

ヤプー「ワギヤアアアアアアアアアアッ！！！！」

鈴音「絶対に逃がさないヨ！！」

彼女は両足を床に強く押さえ、身を強く引っ張り上げながら、

まるでバスフィッシングをするかのようにヤプーを吸引していた。

そして最終的にヤプーは『オバキューム』の中へ吸い込み、姿を消した。

鈴音「やったネ！！ 私にくれたパンチ、ちゃんと返してやったヨ  
！！！！」

五月「さすが超さん！！ 上手く行ったね！！」

鈴音「つて、危ない！！！！」

五月「えっ！？」

マップ「ウヘアアアアッ！！！！」

鈴音の注意により、五月は背後へ振り向いたら、マップは長い腕で  
五月に殴り掛かるうとした。

五月「きゃあっ！？」

だがそれに気付いた彼女は素早く攻撃から交わした。

鈴音「くっ、よくも五月を………！ 食らえ！！」  
そして彼女は懐中電灯の光をマプーに照らした。  
マプー「ウヒョアアアアアアアアッ！！！！」  
光に当たったマプーは目を隠しながら怯み始めた。

鈴音「今ヨ、五月！！」

五月「う、うん！！ それえっ！！！！」

ビュオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

五月は『オバキューム』を起動させ、それでマプーを吸い込み始めた。

マプー「ウボアアアアアアアアッ！！！！」

五月「んっ………くっ………！！！！」

彼女は両足を床に強く押さえ、身を強く引つ張り上げながら、マプーを吸引していた。

そして最終的にマプーは『オバキューム』の中へ吸い込み、姿を消した。その後、

身を引つ張り過ぎた五月はそのまま尻餅をしてしまった。

鈴音「おお！！ よくやったネ、五月！ お見事だったヨ！！」

五月「う、うん！ な、何とか出来たみたい………！！」

鈴音「さあ、残るは……… あいつだけネ！！」

彼女と五月は振り向くと、そこには残されたモプーがいた。 だが

そんなモプーは焦りを見せていなかった。

モプー「グッファッファッファッファッ！！！！」

そんな敵が笑い出した後、突然両手を上げ始めた。

五月「な、何する気なの！？」

鈴音「！？ まさか………五月、ジャンプヨ！！」

五月「えっ！？」

鈴音が何かに気付いたのか、五月は途中で戸惑った。

モプー「グツフオオオオツッ！！！！」

そして敵は両手を地面に強く叩き付け、地面に強力な振動を起こした。

鈴音「ほっ！！」

五月「きゃっ！！」

しかし二人の少女はタイミングよく跳び上がり、衝撃波を回避した。五月「えっ！？ な、何今の！？」

鈴音「やっぱり、思った通りネ！ 両手を地面に叩き付け、そこで衝撃波を放つって言う戦法ネ！

でも私にはバレバレだったヨ！ 五月！」

五月「うん！」

彼女が頷いた後、鈴音と共に懐中電灯をモプーに照らした。

モプー「グエエエエエエエエエエエツ！！！！」

鈴音「今ヨ！！」

五月「はい！！」

ビュオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

二人は『オバキューム』を起動させ、強力な吸引力を作りながら、モプーを吸引した。

モプー「グギヤアアアアアアアツ！！！！」

二人係の吸引は二倍であったため、モプーは簡単に逃げたりもがいたりする事も出来ず、

そのまま素早く吸い込まれてしまった。しかも五月の『オバキューム』の方へ吸い込まれ、姿を消した。

鈴音「やったネ！ これで全員片付けたヨ！！」

五月「あれっ、でも最後の奴は私の『オバキューム』に……………。」



鈴音「別にいいネ！ 元々あの化け物を吸い込むためにやったから、  
そのためでも誰の『オバキューム』に吸い込まれてもドンマ  
イネ！ さあっ！

用が済んだら早速向こうへ行くヨ！」

五月「うん！」

……一階の扉を開け、先へ進んだ鈴音と五月は、廊下に辿り着いた。  
その廊下は薄暗く、

数多くの部屋に繋がっていた。特に床には多くのネズミのお化け

『ミミー』を見掛けたが、

害がなかったのでそのままスルーにしておいた。そんな二人は廊下を進みながら、

少々焦りを見せながら辺りを見回した。

五月「…な、何か……何度も言ってるようだけど…本当に不気味だね、こっつて……。」

鈴音「そうネ……このネズミのお化けはともかく、実にいつ何が  
出て来てもおかしくなくらい不気味ネ。」

五月「そ、そうだね……。それにしても……。」

そんな恐る恐ると進む彼女が下を向くと、一体のミミーが興味津々に彼女の足元へ近付いた。

ミミー「チュツ？」

そんなミミーは頭を傾げながら、五月の顔へ見上げていた。それに何か和みを感じたのか、

五月は微笑みながらしゃがみ、ミミーに触れようとした。

五月「何か可愛いね、このお化け。私の事が気になってるのかな？」  
彼女はミミーの頭を撫でようとするが、所詮相手は触れる事も出来ないお化け。

手を当てようとしても透き通るだけだが、撫でているかのようにただ手を動かしていた。

しかしミミーは五月の手から温もりを感じているのか、気持ち良さそうな表情で五月に懐いていた。

しかしその間に鈴音は、両手を腰に当てながら、五月にこう言った。  
鈴音「ちよつと五月！ 何遊んでるネ！？ 相手はお化けだから近付いたらダメヨ！」

五月「ええ、でもこの子何もして来ないよ？ 何か私の事が気に入ったみたいだし……」

特に恐そうにも見えないし……」。

ミミー「チュチュ」

そんなお化けネズミは喜びながら、五月の足元に擦り寄って来た。その間にも鈴音は呆れそうに五月とミミーを見詰めていた。

鈴音「……まあ、確かにその様子だと害はなさそうに見えるし……」  
って言うか、

何でネズミがお化けになってるの力……ん？」

鈴音と五月は廊下の先へ振り向くと、そこには宙に浮かぶ、火の付いていないローソクスタンドがあった。

五月「ひいつ！？ ロ、ローソクスタンドが浮いてるう！？」

彼女が驚いた同時に、近くにいたミミーも驚き、その場から逃げ去った。

鈴音「目に見えない幽霊……もしかして……！ 五月、例の機械を使うネ！」

五月「う、うん……！」

彼女は急いでポケットから『ゲームボーイホラーDSi』を取り出し、蓋を開き、

タッチペンでカメラモードに切り替えた。その後レンズを浮いているローソクスタンドに向かせ、

五月と鈴音は画面を確認した。するとそこには赤いドレスを着た金髪の女性の幽霊と、

手にローソクスタンドを持った執事らしき老人の幽霊が映っていた。更にスピーカーから二体の幽霊の声も聞こえて来た。

女性幽霊『貴方あゝ！ どこにいるのおゝ!?』

執事幽霊『奥様、少しは落ち着いて……………!』

鈴音「おお！ ホントに映り出したヨ！」

五月「しかも音声付き！ すっごおゝい！」

その後、五月は試しにAボタンを押してみた。すると画面に二つのウィンドウが開き、

それぞれは幽霊のデータが映り出した。

鈴音「おお、これもすごいネ！ ボタン押しただけで幽霊のデータまで読み込めるとは！」

あの博士、やるネ！」

五月「ええゝつと、データによると……………女性の方は『ママーラ』……………綺麗な髪の毛が自慢の肖像画オバケ。

その隣にいる老人は『セ・ノバスチャン』……………屋敷の警備役である執事さんだね。

でも何だろう……………よく見るとあの二人、何かを探してるみたいだけど……………」

鈴音「そう言えばさっきスピーカーから誰かを探してるように聞こえたネ……………」

その後、二体の幽霊は二人の少女に気付き、彼女達の方へ振り向い

た。

ママーラ「まあ、あそこに人が……！ あの子達に聞いてみるわ！」

セ・ノバスチャン「いや、奥様！ お待ちくださいませ……！」

鈴音・五月「えっ……？」

そしてその後、二体の幽霊は姿を現し、二人の少女に接近して来た。五月「きゃああああっ！！ き、来た来たあああ！！！」

鈴音「ちよっ、は、早く懐中電灯を……！！！」

慌て出した二人は懐中電灯を取り出そうとするが……。

ママーラ「ごめんなさい、お二人共！ 私達を助けてくださらない！？」

彼女は両手を組みながら、困った表情で二人の少女に頼み込んだ。

それに対し、鈴音と五月は慌てるのを止めた。

鈴音・五月「えっ……？」

セ・ノバスチャン「奥様、行けませんですぞ！ 相手はワシら幽霊を退治するためにやって来た生身の人間！

姿を現して接触してはなりませんぞ！」

ママーラ「でも、だからこそ聞かなければならないじゃないの！

もしかしたらどこかで見掛けたかもしれないわ！」

鈴音「あ、あのう……。」

五月「な、何でしょうか……？」

ママーラ「あっ、ごめんなさい！ 私の名前はママーラ……そしてこの方は私の執事、セ・ノバスチャンよ。」

セ・ノバスチャン「ウォッホン！ ええ、セ・ノバスチャンですよ。以後、お見知り置きを……。」

彼は喉を鳴らした後、礼儀正しく二人の少女にお辞儀をした。だがそんな少女達も、ただ啞然としていた。

鈴音「あ、あの……その頼み事とは、何カナ？」  
ママーラ「あつ、そうそう！ 実は私、夫の『パパーラ』を探しているの。」

せつかく久しぶりに肖像画から出られたのだから、お互い夫婦水入らずな事をしようと思っていなのに……。」「  
彼女は両手を頬に当てさせ、恥ずかしがりながら揺れ始めるが、逆に二人の少女と執事はある意味引いていた。

ママーラ「いつも彼のいる書斎に行ってみたら、夫が見当たらなくなって……。そこで屋敷中あちこち探し回ったのだけど、

どこにも見当たらないし……。大声で呼んでも返事して来ないし……。一体どこへ行ってしまったのか……。」「

セ・ノバスチャン「まあ、そんなワシも奥様のお手伝いとして、パパーラ旦那様を探し回ったのじゃが、

どこを探しても見付からなくて……。」「

彼はポケットから取り出したハンカチで頭を拭きながらそう言った。五月「それって、いつぐらいからいなくなったと気付いたんですか？」

ママーラ「そんなに長く経ってないと思うわ。数十分前の事かしら……。？」  
それまでに私はセ・ノバスチャンと供に、

屋敷中あちこち調べ回ったわ。でもこれもおかしな事なのよね……。その部屋にしかない他の連中も、

なぜか姿を見当たらなくなっただし……

特に我が子である『ベビーラ』や『ウオン』と『テッド』

までも見当たらないし……。」「

セ・ノバスチャン「本当に不思議な事じゃよ。ワシら幽霊達は全員肖像画から抜け出したんじゃないが、

なぜか殆どが見当たらなくなってしもつたんじや！ さすがにこの屋敷から出たとは思わんし、

一体どこへ行ったのやら……。」「

ママーラ「そこで、私達は貴女達を見付けて、頼み込もうとするの。お願い、

私の夫を探すの手伝ってくれないかしら？」

鈴音「えっ！？ で、でも何で私達に……………！？ 私達、元々あんな達を退治するためにここに来たネ！？」

ママーラ「だからこそよ！ 貴女達がここで私達を退治しに来たのなら、それなりに探す機械とか持つてるはずよ！

そう、貴女の持つてるその携帯ゲーム機のような機械！」

彼女は五月の持つ『ゲームボーイホラーD.S.i』に指しながらそう言った。

ママーラ「その機械には、他の幽霊達を探知する機能が付いてるんでしょ？ だとしたら、

それで夫を見付け出す事が出来るわ！ お願い、私達と

一緒に夫や子供達を捜すの手伝ってちょうだい！

私からの一生のお願い……………！」

彼女は必死になりながらも頼み込み、その間に二人の少女はお互いに向き合いながら悩み始めた。

五月「どうする……………？」

鈴音「うう……………この際、助けてみる力？」

五月「そうねえ……………こんなに頼み込んでるんじゃ、何気に放っておけないもんね……………」

鈴音「そうネ……………特に危険な幽霊でもなさそうだしネ。」

ママーラ「えっ！？ じゃあ……………」

鈴音「まあ、一応ネ！ 手伝ってあげるヨ！ でもその代わりに、見付けた場合はしばらくあんな達を見逃してやるけど、

気が済んだら肖像画に戻る事を約束してくれるカナ？」

ママーラ「ええ、もちろん！ 約束するわ！」

鈴音「ホントカナ？ もし嘘付いたら今直ぐここで仕留めるヨ？」

彼女はそう言いながら、予め『オバキューム』を用意していた。それを見たママーラとセ・ノバスチャンは、少々焦りを見せた。

ママーラ「い、いや、嘘じゃない…ホントに約束するから……………ねえ、セ・ノバスチャン？」

セ・ノバスチャン「え、ええ……………も、もちろんですじゃ……………！」

鈴音「じゃあ、交渉成立ネ！ 五月、早速マップを調べるネ！」

五月「うん、分かった！」

彼女は頷いた後、タッチペンで『ゲームボーイホラーD.S.i』のカメラモードをマップモードへと変更させた。

すると下画面にマップ映像を映し出した。

五月「えつとお……………そのパパーラって言う人は、いつも書齋にいたんですよ？」

ママーラ「そう、二階にある書齋よ！」

彼女はそう言った後、五月は二階のマップを確認してみたが、書齋にはパパーラの物と思われる赤い点が表示していなかった。

五月「ホントだ。映ってない……………」

鈴音「じゃあ、その子供とか言うのはいつもどこにいたネ？」

セ・ノバスチャン「ベビーラ坊ちゃまはいつも二階の幼児部屋にいます、

ウオン坊ちゃまとテッド坊ちゃまはいつも同じ階の子供部屋にいたのう。」

彼の言う通り、五月はマップで幼児部屋と子供部屋のマップを確認したが、

もちろん彼らの物と思われる赤い点がどこにも見当たらなかった。

五月「やっぱりいない……………って言うか、超さん。このリーダー、ちょっとおかしいと思わない？」

鈴音「そうネ……………さつき見た時より点の数が減ってるようネ……………」  
「  
そう、マップ画面を良く見たら、先程エントランスで見た時とは違い、赤い点の数が大分減っていたのだ。  
予めその点をタッチペンで触り、上画面に映るデータを確認してみたが、どれも違う幽霊しか映っていなかった。  
これに気付いた五月と鈴音は、二体の幽霊にこう問い掛けた。

五月「あの、すみません。その夫や子供達がいなくなった事に気付いた時、他にも何か変わった事ありませんでしたか？」

ママーラ「変わった事……………？」

彼女はセ・ノバスチャンの方へ振り向くと、執事は顎を撫でながら何かを思い出そうとした。

セ・ノバスチャン「そう言えばここ最近異様に屋敷内が騒がしくなつて来たのう……………？」

それもお前達がここに来る前の時間じゃ。急

に部屋のあちこちから悲鳴が聞こえたり、

何かが暴れ出したり……………まるで何かと戦つて

いたような騒動を起こしてたようじゃのう？」

鈴音「それって、一体何なのネ!？」

「おつとお!! お喋りタイムはそこまでだゾォ!!」

全員「えっ!？」

すると、壁から二体の白いお化けが出現し、ママーラとセ・ノバスチャンの背後に移動した。

白いお化けA「ケエッケッケッケッ!! またもや獲物発見だゾォ!!」

白いお化けB「今日も大獵だゾォ!!」

ママーラ「だ、誰!？」



セ・ノバスチャン「き、貴様ら何者じゃっ!?!」

白いお化けB「答える義理はないネエ〜!!」

白いお化けA「とりあえず挨拶代わりに吸い込んだじゃエエ〜!!」

ビュオオオオオオオオ!!

すると白いお化けは小型の携帯掃除機を取り出し、ママーラとセ・ノバスチャンを吸い込ませようとした。

ママーラ「きゃああああああ!!」

セ・ノバスチャン「ひええええええええ!!」

強力な吸引力で逃げる所か身動きも出来なかった二体の幽霊は、素早く掃除機の中へ吸い込まれてしまった。

鈴音・五月「なっ!?!」

白いお化けA「ケエ〜ツケツケツケツ!! 捕獲完了だゾオ〜!!」

白いお化けB「絶好調だゾオ〜!!」

五月「あ、あの機械って…まさか、『オバキユーム』!?!」

鈴音「ちよつとあんた達! あの二人に何するつもりネ!?!」

白いお化けA「ケケケツ!! お前達には知る必要はないヨオ〜!!」

白いお化けB「でえ〜もお! 代わりに見付けてくれたお前達に『褒美あげちゃうヨオ〜! ほれ、受け取んな!』

彼がそう言いながら、コインを二枚放り投げたが、二人の少女はそれを受け取れず、そのまま床に落ちた。

白いお化けA・B「じゃっ、ああ〜ばよお〜!! ケエ〜ツケツケツケツケエ〜!!」

彼らは笑いを飛ばしながら、姿を消した。

鈴音「あっ、待つネ!!」

彼女は白いお化け達を追おうとするが、手遅れだった。

鈴音「くっ……あいつら、一体何のためにあの二人を……!!？」  
五月「と、とりあえず、この事を博士に伝えないと……!!」  
彼女はそう言いながら、タッチペンで『ゲームボーイホラーDSi』  
のカメラモードを電話モードに切り替えた。  
そして呼び鈴が鳴り出した後、上画面からオヤ・マー博士の映像が  
映り出した。

オヤ・マー『はいはい、こちらオヤ・マー博士ですぞ！ どうかし  
たのかね？』

五月「た、大変です、オヤ・マー博士!!」

鈴音「ちょうど私達の前に二体の肖像画の幽霊が現れたケド……  
！」

オヤ・マー『おお！ それはすごい事じゃ！ で、早速捕まえたの  
かね？』

五月「いえ、逆に捕まれたんです!!」

オヤ・マー『ほう？ それはどう言う意味じゃ？』

鈴音「そ、それが……」。

鈴音と五月が詳しい話を説明すると、オヤ・マー博士は思わず驚い  
た。

オヤ・マー『な、何じゃとお!？ 謎の白いお化けが『オバキュー  
ム』らしき道具で肖像画の幽霊を捕獲したのじゃとお!？』

鈴音「そう言う事ネ!」

オヤ・マー『ふむう、その『オバキューム』らしき道具とは、恐  
らくあれじゃな!』

ワシがさっき研究所で言ってた『オバキュームミニ』

じゃよ!』

五月「『オバキュームミニ』?」

オヤ・マー『『オバキュームミニ』とは、ワシが開発した『オバキ

ユーム』の最新型なんじゃ。

今君達が使っている『オバキューム』は旧式タイプでな、通常は今のようには背負うじやろ？

特にお化けを吸い込むだけで苦戦する事もある。ワシはそれを取り除くために、

小型で携帯式の新型『オバキューム』を開発したんじや。その方が手軽に持ち歩けるし、

難なくお化けを一発で吸い込む事も出来るからのう！  
じゃが……

肖像画の幽霊達が何者かに脱出された同時に、その『オバキュームミニ』までも何者かに盗まれたんじゃ！

犯人は一体何者で、何のために肖像画の幽霊達を脱出させ、

『オバキュームミニ』を盗んだのかは知らんが……まさかそれを『テレサ』達に渡り、

幽霊達を捕獲しようとは……。』  
鈴音「テレサって、あの白いお化けの事ネ？」

オヤ・マー『そうじゃ！ この森によく住み着いているお化けなんじゃが、

その大半はある肖像画の幽霊の配下として使用されている者もおるんじゃ。

そいつは肖像画オバケ達の中でも最も危険な彼奴でな、元々屋敷内に封印されておったんじゃが、

以前ここに来たルイーダ君を惑わせ、誤って封印を解かしてしまったんじゃ。

もしかして、これも彼奴の仕業かもしれんなあ……。』  
五月「彼奴って……？」

オヤ・マー『うむ……テレサ達の王……その名の通り『キングテレサ』じゃ！ ほれ、

ギャラリーで大きな額縁があつたじゃろ？ あれが彼奴の額縁だつたんじゃ。

彼奴は以前この屋敷で起きた事件の黒幕である同時に、この屋敷を作り出した者でもあるんじゃ。

その理由は被害者とルイーダ君を絵に閉じ込ませ、コレクションにしようと企んでおつたんじゃ。

元々この地に封印されたお化けらしいんじゃが、ルイーダ君の活躍のおかげで、

どうにかして肖像画に封印する事が出来たんじゃ。

じゃが、何者かが肖像画の幽霊達を脱出させた同時に、

彼奴も脱出させたんじゃ。』

鈴音「以前の事件の黒幕で……………」

五月「この屋敷の創造者……………！？」

オヤ・マー『彼奴は何のためにテレサ達を使い、幽霊達を捕獲しようかは知らんが、

もはや彼奴をこのまま放つて置く訳には行かん！ どうにかして彼奴を捕獲せねばならん！ じゃが、

彼奴は元々肖像画に封印されていなかったから、彼奴の居場所はリーダーには反応せんからな。そのため、

彼奴は今どこにいるのかは分らんのだ。』

鈴音「何か奴を探せる方法はないか？」

オヤ・マー『ふむう……………とりあえず、そこはワシが何とかしよう！』

ワシの研究所（ラボ）にも同じお化け探知機があるんじゃ！

そいつをより改良すれば、キングテレサはどこにいるのか確認出来るかもしれん！

その間に君達は他の幽霊達の捕獲に進んでくれ！ もし彼奴らがその幽霊達に何か悪用に利用するのなら、

それを回避するためにこちらから先に捕獲した方が良  
い！ そうとなれば、

今君達のいる場所から一番近い幽霊を捕獲するんじゃない！  
こちらも何か分かったら、直ぐに連絡するからな！

それまでに、気を抜かずにがんばるんじゃないぞ！」

鈴音・五月「はい！」

彼女達が頷いた後、オヤ・マー博士は受信を中断し、上画面の映像を閉じた。

五月「……………何か厄介な仕事を引き受けちゃったね……………」

鈴音「まあ、これもしょうがないネ。どんな悪い奴がいろいろが、やっぱり放っておけないヨ！」

そうとしたら、一刻も早く敵より先に幽霊達を捕まえなければネ！ 五月、ここから一番近い奴を調べるネ！」

五月「分かった！」

彼女がそう言った後、タッチペンで『ゲームボーイホラーDSi』の電話モードをマップモードに切り替えた。

五月「えっとお……………ここから近い場所は……………音楽室みたいね。」

そこには一体の幽霊がいるみたいだよ。」

鈴音「じゃ、早速その音楽室に行ってみるネ！」

…音楽室にて

そこへ辿り着いた鈴音と五月は、扉を開け、中に入った。そこに

は埃や蜘蛛の巣に包まれたベース、サククス、

ハープ、三つのドラム、鉄琴、そしてピアノなどと言った楽器が配置されており、

見た目はいかにも不気味な空間になっていた。そんな部屋に入り込んだ二人の少女は、多少怯えながらも、

勇気を持ちながら部屋の周囲を見回した。

鈴音「ここが音楽室ネ……………」

五月「や、やっぱり何だか不気味な感じね……………」

鈴音「それよりも、早く幽霊を探すネ！ 五月、例の奴を……………」

五月「う、うん。」

その時、彼女が背負っていた『オバキューム』は、誤まって背後にあつたハープにぶつかった。

すると、そのハープが勝手に音楽を奏で始めた。

五月「ひいつ！？」

楽器が勝手に奏でた事に気付いた五月は、驚きに引き下がった。

五月「な、な、何これ！？」

鈴音「ハ、ハープが勝手に……………！？」

更にそんな彼女も、思わず背後にあつたサククスに足をぶつけた。

するとそのサククスも勝手に奏で始め、

鈴音も思わず驚きに引き下がった。

鈴音「うわっ！？ こつちも！？」

五月「ま、まさか、肖像画の霊！？」

彼女は急いで『ゲームボーイホラーDSi』を取り出し、カメラモードで勝手に奏でる楽器を確認したが、

その楽器には上画面に何も映らなかつた。

五月「あれ？ 何も映らない……………？」

鈴音「と言う事は……………幽霊じゃない？」

彼女はそう思い、近くにある三つのドラムの内の一つを試しに触れてみると、そのドラムも勝手に奏で始めた。

鈴音「……………どうやらこれ、触る事で勝手に奏でるようになってるみたいネ？」

五月「えっ！？ じゃ、じゃあ、これは幽霊の仕業じゃなく、何か

の機械!？」

鈴音「それでもなさそうネ。さすがにこう言う楽器には自動演奏機能は付いてないと思うケド……………」  
彼女はそう言った後、ふと考え始めた。

鈴音「でも……………面白ソ! ちょっと他の奴も触ってみるネ!」

五月「う、うん……………」

そして二人の少女は、他の楽器を遊び半分で触り回った。すると触れた楽器も勝手に演奏するようになり、

その音楽は何気に恐怖心を吹っ飛ばせるほどの、明るくて楽しい感じになっていた。

鈴音「あははは、これ結構面白いネ!」

五月「そうだね。けど何だろう……………この音楽を聴くと、何だか恐怖心を忘れて明るくなる感じがする……………」

鈴音「でも何でこれが勝手に……………ん?」

彼女が後ろへ振り向くと、そこには勝手に演奏をしている黒いグラウンドピアノがあった。それに向けた彼女は、何やら気になり始めた。

鈴音「……………なあ、五月。あれ、さっき触ったネ?」

彼女がグラウンドピアノの方へ指すと、五月はそれを辿るようにそのピアノに振り向いた。

五月「え? いや、触ってないけど……………」

鈴音「だヨネ? もちろん私も触ってないヨ? なのに何であれが勝手に……………五月、試しに例の奴を使ってみるネ!」

五月「うん、分かった。」

彼女が頷いた後、『ゲームボーイホラーD.S.i』のレンズをグラウンドピアノの方へ向かせた。

すると上画面に、ピアノを演奏している幽霊の姿が映り出した。

鈴音・五月「あっ!!」

二人の少女がそれに気付いた後、幽霊は自らの姿を現した。それは赤いドレスを着て、長くて綺麗な金髪をした少女の霊で、その姿は優雅でありながらも楽しそうにピアノを弾いていた。そんな霊の姿を目の当たりにした二人の少女は、恐怖に怯える所か、逆に見惚れていた。

少女幽霊「……………良くぞこの私を見付けましたね。お見事ですわ。せつかくのご対面ですので、

自己紹介を致しましょう。まず、貴女達のお名前をお聞き致しましょうか？」

彼は少々不敵そうな笑みを浮かびながら、鈴音と五月の方へ覗き込んだ。すると二人の少女は、一瞬我を取り戻した。

鈴音「えっ!? あっ、えっとおっ……………私、超鈴音と申すネ! 超と呼んでも構わないヨ!」

五月「よ、四葉五月です! よ、よろしくお願ひします……………!」

彼女は多少慌てながらも、幽霊少女にお辞儀した。

少女幽霊「チャオに……………サツキ……………? 随分と変わったお名前ですわね? まあ、良いでしょう。

私の名は『ピアノ』……………人は私を華麗なるピアニストと呼びますわ。そのため、

色んな音楽を弾けますが…最もと言えばゲーム系が多いですわね。ところで、

素敵な演奏でしたわね。最初は貴女達を楽器を弾けるタイプには全く見えませんでした、

久しぶりに感動しましたわ!」

そう言う彼女だが、内容の中にキツイ一言があったためか、鈴音と五月は一瞬にムツと怒った。

だがそれは事実なのかどうかは不明である。(なぜならまだ誰も見



た事もないから)

その後、ピアノはピアノを弾くのを一時止め、そんな二人の少女に振り向いた。

ピアノ「見直した所、貴女達には音楽的な才能をお持ちなのね。私のピアノソナタを是非聞いて欲しいものですわ！」

よろしければ、私がこれから弾き出す音楽が何なのか、当ててみませんか？」

鈴音「えっ、当てるって………?」

五月「それって、音楽系のクイズって事？」

ピアノ「そうですね！しかし、私はこれでもゲームが大好きです、それ系の音楽しか弾けませんわ。

なので、これから出す音楽はどのゲームから来たのかを、当てて欲しいのですわ！」

果たして、上手く答えられますかしらね？」

まるで長髪のように言う彼女だが、二人の少女は多少困りながらお互いに向き合い、小声で話し始めた。

五月「ねえ………ゲーム系の音楽って……もしかして、この世界のゲームの事かな？」

鈴音「そうみたいけど、どうするネ？ 私達、この世界のゲーム全然知らないヨ？」

ピアノ「では………行きますわよ。」

二人の少女が小声で話し合っているにもかかわらず、彼女は問答無用に音楽を奏で始めた。

もちろんそれに気付いた二人も、こちらの拒否権もなしに勝手に進ませた事で啞然とした。

その間にピアノは華麗にも楽しそうにピアノを弾いていたが、その音楽は何気にハードで、

近くてもロックのような音楽であった。そして彼女が途中で弾き

止った後、  
再び二人の少女達に振り向いた。

ピアノ「さて、ここが問題ですわよ？ この音楽はあるロードアクションゲームに使用されたBGMですよ。」

そのゲームのタイトルは何なのか、当ててみてくださらない？」

五月「あれ？ って言うかこの音楽……………」

鈴音「どこかで聞いたような……………」

聞き覚えがある音楽に対し、二人は考え始めた。すると鈴音は正解が分かったのか、自分の拳を片手に軽く叩いた。

鈴音「ああ、思い出したネ！ これは『ゾンビライダー（婿養子編）』のメインテーマネ！」

ピアノ「……………へ？」

その答えを聞いた彼女は、啞然とした。

五月「ああ、そう言えば！ 確かアスナさんやこのかさん、よくあのゲーム遊んでたね！」

鈴音「そうそう！ 何かよく分からないゲームだったけど、確かこの音楽、あのゲームに出て来たネ！」

ピアノ「……………いや、あの……………な、何ですの、それ……………？」

鈴音「あれ？ 答え違ったか？」

彼女はポーカーフェイスになりながらもそう問い掛けるが、逆にピアノは怒りながらピアノを叩き始めた。

それに対して二人の少女は、何気に驚きに引いた。ちなみに正解は『マツハラライダー』である。

ピアノ「ムカア……………！！ 全然違いますわあ！！ 心を込めて弾いたのに、すっかり気分がブルーだわ……………」

女心は水色よっ！！」

鈴音「えっ、やっぱり間違ってたネ？」

五月「いや、あの、そんなに怒らなくても……………」

ピアノ「もう気分最悪だわっ！！ 外で頭冷やしておいでっ！！」  
ご立腹状態になった彼女は、そう言い残し、姿を消した。

五月「あっ、ちょっと待っ……………！！」

鈴音「あっちゃく…………怒らせちゃったネ……………」

彼女は自分の頭を掻きながらそう言った。

五月「どうしよう……………？」

鈴音「とりあえず、説得してみるネ。 姿を消してもまだここから

出た訳でもないシ……………」

五月「うん……………」

彼女が頷いた後、鈴音と供に誰もいないグランドピアノの方へ振り向いた。

五月「あ、あの、さっき怒らせて本当にごめんなさい。 でも、正直言つて、本当は知らなかったの。」

鈴音「そうネ！ 私達、元々この世界の人間じゃないから、答え全く知らなかったネ。」

彼女がそう言った後、腕を組みながらご立腹になっているピアノが再び姿を現した。

ピアノ「……………この世界の人間じゃない？ それってどう言う意味かしら？」

鈴音「実は……………」

……………しばらく経って、三人は椅子に座っていて、鈴音と五月は今までの出来事を全てピアノに説明した。

ピアノ「へえ……………貴女達、別の世界から来た人間でしたの。」

五月「ええ、多分……………」

ピアノ「うう〜ん……………そう言う異次元的な物にはまだ理解出来ませんけど、

音楽を完全に間違える所から何気に理解出来ますわね。

しかしこれもまた不思議な事に……………

貴女は私のような幽霊を見ても全く怯えないのはどう言う事ですか？」

五月「ああ、それ？ まあ……………何て言うかなあ……………とても怖いと言うよりも、とても綺麗に見えたから……………」

彼女は恥ずかしそうに頭を掻きながらそう言った。

ピアノ「まあ、それは聞いて嬉しい褒め言葉ですわ！」

鈴音「それもそうダガ、他にも幽霊の友達がいるから、結構慣れるネ。」

ピアノ「……………はい？ 幽霊の友達？」

鈴音「そうヨ！ 名前は相坂さよって言う娘で、何でも60年前から幽霊になっていたと言うクラスメートネ！」

理由は本人も知らないらしいガ、それでも気にしないくらい明るい子ネ！」

五月「まあ、幽霊でありながらちよつとネガティブな一面を持つてるけど、根は優しい子だけだね。」

始めは友達が欲しくて途方にくれてたんだけど、私達全クラスメートが友達になってから、

本人は喜びながら元気になったからね。」

ピアノ「ふう〜ん……………それもおかしな話ですわね。 何せ人間と幽霊とはお互い交じり合わぬ関係ですわ。」

なぜなら幽霊は人を驚かしたり呪ったりして、人間はそれに恐怖に怯えて逃げ去る……………」

そんなアンバランスな事でお互いを仲良く結び合うなんて有り得ませんわ！」

五月「確かにそう言ってるかも……………なぜなら私達も最初の頃はびっくりしたもんね……………」

鈴音「そうネ……………最初は目の前に誰もいないのに誰かが\*肉まん

食べたから、当然驚いたネ。

まさかそれがさよサンだったとは、その当時知らなかったナ。

「

\*アニメ第二期の第7話より参照。

鈴音「でも…例えそれが有り得なくても、やってみないと分からないネ！もしかしたら、

その有り得ない事が有り得る事になるかもしれないヨ？」

五月「そうだよ！私達も最初は有り得ないと思ったんだけど、実際やってみたら有り得る事になったんだから！

そのおかげでさよさん、私達含めた友達たくさん作れて元気になったもんね！」

そんな二人の会話を黙々と聞いていたピアノは、何気に不思議に思っていた。

ピアノ「……………何でしょうか。相手が幽霊であろうにもかかわらず、

貴女達はそれでも構わないかのように友達にしている……………

…。それを聞くと何だか……………

羨ましいと言っか…何と言っか……………。」

彼女がそう言っくと、黙々と彼女を見詰める二人の少女に気付き、慌て始めた。

ピアノ「あっ、いやっ、べ、別にそう言っ…何でもありませんわよ！

特に何の意味ない…そうそう、

単なる私の無意味な独り言ですわ！べ、別に…その…な、

何て言っか…ええつとお……………。」

そんな慌てる彼女を見詰めた鈴音と五月は、お互いに振り向き、頷いた。

鈴音「なあ……………もしよかつたら、私達と友達にならないネ？」

ピアノ「……………え？ 今、何と……………？」

その言葉を耳にした彼女は、一瞬に慌てるのを止め、鈴音に振り向いた。

鈴音「そんなに幽霊と人間は友達になれないと思うなら、試しになつてみたらどうネ？」

私達、是非あんたと友達になりたいと思うヨ！」

五月「私も同じくそう思う！ 特に、貴女は幽霊でも悪い幽霊でもなさそうだし、

音楽とか詳しくて上手いし、そんな貴女と是非友達になりたいいな！」

二人が笑顔でそう言うと、ピアノは沈黙のまま、頬を一瞬に赤く染めた。 そんな自分の感情に気付いたピアノは、

それを隠すかのように再び慌て始めた。

ピアノ「な、な、何を仰つて……………！？ わ、わ、私は別に、そんな事なんて……………」

だ、だ、第一！ わ、私はこのように実体のない幽霊、そして貴女達は生身の生きた人間！

先程仰つたようにそう簡単に交じり合えるなんて出来ませんわ！」

「そうそう、そいつの言う通りだヨオ〜！」

全員「！？？」

突然どこかから声を聞こえ、それを耳にした三人は室内を見回り始めた。

「ケケケケツ、人間と幽霊は交じり合わない関係……………なぜなら力としては俺達お化け達の方が上！」

生身の人間はその力で呪われてしまえばいいのサ!!」

その時、壁の方から二体のテレサが出現し、その中の一体は『オバキュームミニ』をピアノに向けた。

ピアノ「なっ……………!?!」

五月「テレサ達だ!!」

鈴音「ヤバイ、ピアノまでも吸い込む気ネ!!」

テレサB「さあ、お前も吸い込ませてもらうヨォ!!」

テレサA「無理矢理でもこっちに来なサア~~~~イ!!」

ビュオオオオオオオ!!

するとテレサは『オバキュームミニ』を起動させ、ピアノを吸い込ませようとした。

ピアノ「きゃあああああ!!」

五月「そうはさせない!! えいつ!!」

彼女は素早く懐中電灯を取り出し、その明かりを『オバキュームミニ』を持ったテレサに照らした。

テレサA「ウワツ!!? な、何だ、眩しいツ!!」

敵は片手で目を光から防ぎながら怯み出した。

鈴音「よくやったネ、五月! 次は私の番ヨ!! はいやああああ

ああ!!」

ビュオオオオオオオオオオオ!!

鈴音は『オバキューム』を起動させ、それでテレサを吸い込み始めた。

テレサA「ゲツ!! し、しまったあああああ……………!!

!!」

鈴音は両足を床に強く押さえ、身を強く引つ張り上げながら、テレサを吸引していた。

そして最終的にテレサは『オバキューム』の中へ吸い込み、姿を消した。

そのおかげで『オバキュームミニ』は自動的に停止し、吸い込まれそうになったピアノは解放された。

その後残されたテレサは、先程吸い込まれたテレサが落とした『オバキュームミニ』を素早くキャッチし、慌て始めた。

テレサ「ヒッ!!! ヤ、ヤバイ……………!!」

鈴音「さあ、次はあんたの番ネ!」

五月「逃がさないよっ!!」

テレサ「うっ……………フ、フンツ!! まあいい!! どうせ一体だけ残っても、これぐらいで十分!!」

後はこれをキングテレサ様に渡すだけダ! まっ、と言う

訳デ……………さいならあ~~~~!!」

敵はそう言いながら、『オバキュームミニ』を抱えながら、姿を消した。

鈴音「あっ、また逃げられたネ!」

その後、鈴音と五月は床に倒れていたピアノの方へ振り向き、駆け付けた。

五月「大丈夫、ピアノさん!」

鈴音「怪我はないカ!」

ピアノ「うっ…え、ええ……………だ、大丈夫ですが……………」

彼女はゆっくりと起き上がった後、少しだけ二人の少女の方へ振り向いた。

ピアノ「なぜ…この私を助けたのですの……………? 生きた人間が…



幽霊であるこの私を……………」

五月「助けるの当たり前じゃない！ 私達、友達でしょ？」

鈴音「友達を助けるのに理由なんているか？」

二人がそう言うのと、ピアノはその言葉に対して何かを感じた。その後、五月は鈴音の方へ振り向き、こう言った。

五月「そ、そう言えば……………確かあのお化け、こう言ったよね？  
『どうせ一体だけ残っても、

これぐらいで十分』って……………。それって……………。」

鈴音「まさか……………五月、例の奴を！！」

五月「う、うん！」

彼女が頷いた後、再び『ゲームボーイホラーDSi』を取り出し、タッチペンでマップモードに切り替えた。

するとマンシヨン全体のマップには、ピアノ以外全ての赤い点がなくなっていた。

五月「な、ない！？ ピアノさん以外の赤い点が全部ない！！」

鈴音「しまった、先を取られたか！！」

ピッピッピッピッ、ピッピッピッ~~~~

その時、オヤ・マー博士からの着メロが鳴り出し、

それに気付いた五月は直ぐにタッチペンでマップモードから電話モードに切り替えた。

そこで上画面からオヤ・マー博士の映像が映り出した。

オヤ・マー『おお、君達！ 無事のようにやな！』

鈴音「オヤ・マー博士！ ちょうどよかったネ！ 実は大変な事になってるヨ！」

五月「今マップに調べただけで、殆どの幽霊は奴らに捕まったら

しいんです!」

オヤ・マー『うむ、分かっておる! 先程こちらの探知機にも調べたぞ!』

殆どの肖像画の幽霊達はマップから消えておった……  
…が、どうやら一体だけ残されておるようじゃが、

そいつは大丈夫なのか?』

五月「えっ、あ、ええ、先程助けましたから。」

彼女はピアンの方へ振り向きながらそう答えた。

オヤ・マー『そうか、なら良い! ちょうどこちらの探知機も改良し終えた所じゃから、

早速キングテレサの居場所を突き止めたんじゃ!』

鈴音「で、そいつは今どこにいるネ!？」

オヤ・マー『バルコニーじゃ! 彼奴はバルコニーの方におるんじや! そこで何をしているのかは分らんが、

恐らく何か良からぬ事をやらかすに違いない! バル

コニーは三階にある!

急いでそこへ向かい、彼奴を阻止するんじや!』

鈴音・五月「はい!」

彼女達が頷いた後、オヤ・マー博士は受信を中断し、上画面の映像を閉じた。その後、

二人の少女はピアンの方へ振り向いた。

鈴音「とりあえず、これであんたも狙われずに済むネ!」

五月「でももしかしたら、さっきのお化けもまたここに戻って来るかもしれない……」

ピアンさんはここに残って、奴に見付からないよう隠れて!

ピアン「えっ……って、貴女達はどうするつもりですか!？」

鈴音「決まってるネ! 何のために悪さをしているか分からない悪霊を懲らしめに行くネ!」

五月「私達は大丈夫だから、ピアノさんはここで安全にいて！」

その後、二人の少女はお互いに振り向き、こう言った。

鈴音「じゃっ、五月！」

五月「うん！」

そして二人はピアノを残し、音楽室から飛び出した。その間にピ

アンは、そんな二人を心配そうに見送り、

下を向きながらこう呟いた。

ピアノ「……………友達……………」

### 第13話 悪霊王の逆襲

……ルイージマンションに潜む肖像画の幽霊達がキングテレサに捕らわれてしまった事に気付いた鈴音と五月は、

オヤ・マー博士から授けた情報を頼りにし、バルコニーへと向かった。道中に何体もののヤプー、

モプーやマプーが邪魔をするために出現したが、先を急ぐ二人の少女はそれを退けるかのように、

『オバキューム』で一掃した。そしてしばらく経つと、彼女達は三階のバルコニーに繋がる扉の前に辿り着いた。

鈴音「ここがバルコニーへの扉ネ？」

五月「うん…マップによると、この扉の先に進めば、バルコニーに行けるはずよ！」

彼女は『ゲームボーイホラーD.S.i』のマップモードを見ながらそう答えた。

鈴音「よしっ！ だったら早速行ってみるネ！ 準備は出来たか？」  
五月「もちろん！」

二人は『オバキューム』を構えながら、ドアノブを回し、扉を開けた。

そしてバルコニーに足を踏み入れた二人の少女は、ある物を目の当たりにした。

バルコニーの左右に設置された二体のユニコーン像……そしてその中央に後姿で佇む謎の大きな人影……。

夜空に浮かぶ大きな満月の光のせいである人物の姿は見えないが、そんな二人は少しずつ前に進んでみた。

するとその人物の前に『オバキュームミニ』を抱えた一体のテレサが出現し、それに気付いた二人は途中で足を止めた。

テレサ「ケツケツケツケツ！！ お待たせ致しましタア〜！」

お望み通りに肖像画の幽霊の入った掃除機を持って来ましたゾォ〜！」

「ケツケツケツケツ！ よくやった、俺の子分ヨ……………そして遅かったな、その二人のお嬢さん達イ？」

後もう一步でも早ければ俺を止められたと思ったのに……………

…まあ、おかげで手間を取らずに済んだガナア！」

彼が振り向くと、その姿を二人の少女に現した。その姿は、普通のテレサとは変わらないが、逆に普通よりも大きく、頭に王冠を被っていた。その外観は実に可愛らしく、逆に恐怖心を感じなかったが、その代わり威勢を感じていた。

そう、彼こそがテレサの王、キングテレサであった。

五月「あれがキングテレサ……………？ 何か思ったより可愛らしい……………」

鈴音「お前がキングテレサネ!？」

キングテレサ「イカにモォ〜！ 俺こそはこの屋敷を作り上げた主で、テレサ達の王者となるお化け、

キングテレサ様ダア〜！ ケケケケツ、どうだ、驚いたか、震え上がったか、

恐れ入ったカア〜！！ 世界で一番恐いお化けだゾォ〜！！」

鈴音「そんな事より、お前は何を企んでるネ!？ 何のために肖像画の幽霊達を捕らえるネ!？」

キングテレサ（うつゝ…む、無視!?)

恐がらすつもりにも二人の少女に無視されたキングテレサは、シヨツクを受けた。

キングテレサ「…………ま、まあいい…せつかくだから教えてやるう  
じやない力！

どうせお前達にはあの爺さんから聞いただろうが、  
そしてさっきも言ったが、

俺はこの屋敷を生み出した、テレサの王様なのだ！  
だが、

俺の罫を乗り越えて来たあの緑のおっさんルイージ  
のおかげで、俺は肖像画の中に封印され、

計画を丸潰れにしゃがった！ それから長らく俺は  
肖像画の中に閉じ込められていたが…………

ある時何者かが研究所に侵入して来て、俺含む肖像  
画の幽霊達を解放してくれたのだ！

だがそいつは俺に用があったらしくてナ……………奴は  
俺にある計画を与えてくれたのだ。

それは逃げ出した全ての幽霊達を捕獲し、そいつら  
の力を利用して史上最大の悪さをするのだとナ！」

五月「捕らえた幽霊達の力を利用して、何のために使うつもり  
なの！？」

キングテレサ「決まってるサ。もちろんお前達も一度はあの爺さ  
んから聞いたはずだロオ〜？ 肖像画の幽霊達は、

テレサやヤプーなどの一般のお化け達とは違い、特  
殊な魔力を持っている。

肉眼では見えないくらいに透明になるだけでなく、  
ポルターガイスト現象を攻防用を使うなど、

ありとあらゆる力を秘めているのだ！ そいつを使  
えば、俺は完全なお化けへとパワーアップし、

この世の支配者となるのだア〜！ そうすれば、俺  
を痛い目に合わせたあの憎きルイージや、

その間抜けな兄貴のマリオに復讐し、この世の全て  
を肖像画に封じ込め、

俺様のコレクションにするのダァ〜！」

鈴音「それがお前の目的ネ!？」

キングテレサ「そう言う事サア!　だが幽霊達を集めるためには無防備のままやる訳には行かないからナ!

だから俺達を解放した奴からこの『オバキュームミニ』を授け、

幽霊達を片っ端から集める事にしたのサ!　おかげで短時間で集める事が出来たヨ!

ケツケツケツケツケツ!」

五月「誰よ、あんた達の言うその『奴』って!？」

キングテレサ「フンツ!!　お前達にこれ以上教える権利はないネ!!　だがせつかく俺が復活し、

お前達もここまで来れたんだ!

よかつたらお前達が俺のパワーアップする姿を見届ける客になってくれヨ!　もちろん、

最初のコレクションの一部にもなってナ!!　おい、

例の奴をよこせツ!!」

テレサ「あいヨォ〜!!」

キングテレサがそう指示した後、テレサは『オバキュームミニ』をキングテレサに投げ付けた。

五月「『オバキュームミニ』がつ!!」

鈴音「させないネ!!」

二人の少女はキングテレサが『オバキュームミニ』を受け取る前に駆け付けるが……………。

キングテレサ「アァ〜ン」

彼は口を大きく開き、『オバキュームミニ』を食べた。それを見た鈴音と五月は足を止め、愕然とした。

鈴音「な、何!？」

五月「た、食べたあ!？」

その後、キングテレサの体から青白いオーラが湧き出し、その同時に黒い瞳を不気味そうに黄色く輝かせ、笑い出し始めた。

キングテレサ「ケエ〜ツケツケツケエツ!! 感じるウ…感じるゾオ〜……………」

肖像画の幽霊達の絶大なる力ガア〜……………! 実に気持ちいいゾオ〜!!

これならもはや誰も俺を止められナイ……………あの髭の兄弟でさえも俺を止める事も出来マイ……………

もちろんお前達も俺を止める事も出来マイツ!!

これで俺は真のお化けの帝王様ダア!!

全てが俺の前に跪き、俺の物となるのだア〜!!

サア、今から始めよう…

真のお化けの帝王になった俺の真の力を目覚める時ヲオ! そしてお前達も見て怯えるがイイ…

泣くがイイ…腰抜けてチビるがイイ!! なぜなら

俺のコレクション第一号になるのは、

お前達だからナア〜!! ケハアアアアアアアア

アアアアアアアアアアア!!」

彼が突然叫び出すと、体から噴出する青白いオーラが大きくなり、強い空気を噴出しながら眩しく光り出した。

その前にいた二人の少女は、風に吹かれながら、光から目を塞いだ。

鈴音「うわっ!？」

五月「きゃっ!!」

…そして光が収まった後、二人の少女はゆっくりと目を開け、前を見上げた。



すると二人はキングテレサの新たな姿を見て愕然とした。その姿はあのマリオブライザーズの宿敵、クツパと同じ姿のままだったが、唯一の違いは、全身骨になっていた。その体から青白いオーラを湧き出し、不気味に光る黄色い瞳を輝かせながら、二人の少女に睨み付いた。

???「グワツハツハツハアツ!! ドウダ、見タカア!?  
コレガ俺様ノ真ノ姿……」

ソノ名モ『骨クツパ』様ダア!!! サア、才前達ハソコ  
デジットシテイルガイイ……」

今カラ才前達ヲ叩キ潰シテ、俺ノこれくしょんニシテヤル  
! 覚悟シロオ〜!!!」

鈴音「あ、危ない!!! 逃げるネ!!!」

五月「きゃあつ!!!」  
骨クツパとなつたキングテレサは、骨で出来た巨大な足を上げ、鈴音と五月を踏み潰そうとした。

だがそれに気付いた二人は急いでその場から離れ、間一髪に回避した。

骨クツパ「コラア〜!!! ジットシテロト言ツタハズダロオ!?  
俺カラ逃ゲル奴ハ許サナインダヨナア〜!!!」

ソウ言ウ虫ケラハ才置キダベエ〜!!! 『骨クツパ  
レス』!!!」

その後、彼は口を大きく開き、青い火炎を二人の少女に向けて吹き出した。

五月「きゃあ!!! ほ、炎があ!!!」

鈴音「あつ、そうだ!!! 『オハキユーム』を使えば……!!!  
そおれええええええ!!!」

ビュオオオオオオオオ!!!

鈴音は『オバキューム』を前方に構えながら起動させ、青い炎を吸い込ませた。

骨クツパ「何イツ!？」

鈴音「よしっ、次はこれヨ!! 食らえ、『炎のエレメント』!!」  
その後、彼女は『オバキューム』に吸い込ませた炎を放ち、骨クツパに攻撃した。そしてその火球は、

骨クツパに命中し、爆発した。

骨クツパ「グオツ!？」

五月「ほ、炎で反撃した!？」

鈴音「やっぱり、博士の言う通りネ! この掃除機、炎を吸い込むと武器として扱えるネ!

これなら炎なんて恐くないヨ!」

骨クツパ「……………ソレハドウカナア？」

鈴音・五月「!？」

爆発によって出て来た煙が消えると、骨クツパはその場で立っていた。しかも攻撃を受けたにもかかわらず、

無傷のままだった。

五月「うそっ!？ 全然効いてない!？」

鈴音「バ、バカな!？ 今のは確実に当たったはずヨ!？」

骨クツパ「グツハツハツハツ!! バカメエ!! 俺ハ幽霊デモ骨デ出来テルンダゾォ!!」

体ガ骨デアレバ、返サレタ炎ナド痛クモ痒クモナイワア

!! ソンナ貴様二八才返シシナイトナア!

アリガタク受け取レエ!! 『スピニングボーンシエル』

!!--!!--

彼は甲羅の中に身を引っ込み、急回転しながら、二人の少女に目掛

けて突進して来た。

鈴音「うわっ!!!」

五月「きゃっ!!!」

だが二人は間一髪にその攻撃を交わした。

鈴音「くっ、ダメネ！ このまま戦ってはこっちがやられてしまうネ！ ここはやっぱり例の奴で！

五月、行くヨ!!!」

五月「うん！」

彼女は真剣な表情で鈴音に向けて頷いた。

鈴音・五月「<sup>アテアット</sup>来れ!!!」

二人は呪文を唱え、『ネオ・パクティオーカード』を発動させた。

発動中に二人の体が光り始め、

骨クツパはその眩しい閃光に対し、目を手で塞いだ。

骨クツパ「ヌオツ!? ナ、何ダア!? 眩シイ!!!」

そして光が収まった後、鈴音と五月は制服姿から違う姿に変身した。

鈴音は赤いチャイナ服になっていて、

両手に鉄扇を所持していた。一方五月は可愛らしい白いチャイナ帽子と服に、大きなお玉を背負っていた。

この姿によると、鈴音は『アーマーカード』で、五月は『コスプレカード』の姿になっていた。

鈴音「おお!!! これってもしかして、『アーマーカード』の姿ネ!!! これはラッキーヨ!!!」

五月「私は『コスプレカード』を引いたみたい……でも、『スカカード』よりマシかな?」

鈴音「でもこれなら戦えるネ！ 五月、一緒に戦うヨ!!!」  
五月「うん、やってみる！」

骨クツパ「アア？ 今度八何ダア！？ 急ニ光リ出シタ後ニ服ヲ着替エルトハドウ言ウ事ダア！？

マアイイ、ドツチニシロ俺ノ敵デハナイワア！！ ミンナ纏メテ黒コゲニ焼キ尽クシテヤルウ！！

『骨クツパプレス』！！！！』

彼は再び口から青い炎を吹き出し、二人の少女に目掛けて攻撃したが、その時鈴音の前に五月が立ち上がった。

五月「そうは行かないよ！ それっ！！』

彼女は背負っていた大型のおたまを取り出し、それを前に向かせた。すると炎はおたまに命中し、

二人を守りながら炎を打ち消した。

骨クツパ「何イ！？』

五月「今だよ、超さん！！』

鈴音「OK！！』

彼女が頷いた後、骨クツパに目掛けて駆け出し始めた。

骨クツパ「オノレエ〜！！！！ 俺ノ炎ヲ打ち消ストハイイ度胸ジヤナイカア！！

ナラ次ハ避けラレナイホドイイ物ヲアゲテヤルウ！！

食ラエ、『クツパボン』！！』

彼は無数の大きな骨を取り出し、それを鈴音に向けて投げ飛ばした。

鈴音「こんなの軽い軽い！』

彼女はそう言いながら、次々降って来る骨を軽々に避けて行った。

鈴音「でもこれは避けられるカナ！？ せやああああ！！』

彼女は敵に向けて飛び蹴りを仕掛けるが……………。

骨クツパ「アラヨットオ！！』

しかし彼は一瞬に上半身と下半身を分離させ、鈴音の飛び蹴りを回避した。

鈴音「なっ！？』

五月「ぶ、分離した!？」

鈴音「くっ、何の!! そいやあっ!!」

次に彼女は鉄扇で骨クツパに攻撃するが……。

骨クツパ「ホイサツ!」

すると彼は頭と首を分離させ、鈴音の鉄扇を回避した。

鈴音「なっ!？」

五月「こ、今度は首まで……!？」

骨クツパ「グワツハツハツハアッ!! バカメエ!! 言ツタ  
ハズダロ、コノ俺ハ幽霊デアリナガラ、

骨デ出来テルトナア!! ダカラ俺ノ体ハ自由自在ニ分  
離スル事ガ出来ルノダア!!

ドウダ、参ツタカア! コレデハ貴様ノ攻撃ナド屁ノ河  
童ニ過ギンワア!! ザマア見ヤガレエ!!」

鈴音「くっ……!!」

彼女は歯を食いしばりながら、悔しさに戸惑いを感じ始めた。

骨クツパ「ソソンジャ、貴様ノたんもココマデト言ウ事デ……コ  
コカラガ俺ノたんダア!!」

彼がそう言った後、鈴音の真上まで高く飛び上がった。

五月「超さん!! 危ない!!!!」

骨クツパ「骨クツパドロップ!!!!」

鈴音「うわっ!!」

攻撃に気付いた鈴音は、急降下する骨クツパから素早くその場から  
離れた。すると急降下する骨クツパは、

そのまま床に激突し、大きな窪みを作り上げた。しかし着地した  
骨クツパに振り向いた鈴音は、

何かに気付いた。

鈴音「! 今がチャンスネ!! 五月、懐中電灯を!!」

五月「う、うん!!」

彼女は自分のと、鈴音から借りた二つの懐中電灯を取り出し、それを骨クツパに向けた。

???「おつと、それもおゝらい!!」

しかし、突然目に見えない何かが五月から二つの懐中電灯を奪い取った。

五月「えっ!?!」

そして宙に浮かぶ二つの懐中電灯は骨クツパの方へ飛び、姿を現した。その目に見えない何かの正体は、

先程キングテレサに『オバキュームミニ』を渡した手下のテレサであつた。

テレサ「ケエ〜〜ツケツケツケツ!! ざまあ見口オ!!」

これさえなければキングテレサ様は捕まえられないヨオ〜  
ダア!!」

骨クツパ「グツハツハツハツハツ!! デカシタゾ、我ガ子分ヨオ!!」

鈴音「しまった!! あれがないと奴らを怯ませられないネ!!」  
五月「『オバキューム』だけじゃ奴らを捕らえないよ!!」

骨クツパ「グワツハツハツハツハア!! サア、コレカラドウスルヨ、小娘共ヨオ!!」

懐中電灯サエナケレバ俺ヲ怯ム事モ出来ナイ! モチロ  
ン掃除機一体ヤニ体ダケジャ、

俺ヲ仕留メル事モ出来ナイ! 更ニ俺ニ攻撃ヲ当テル事  
サエモ出来ナイ!

モハヤ貴様ラハ無謀デ無力ダア!! ドンナニガンバツ  
テモ、俺ヲ倒ス事モ決シテナイ!!

ナラオトナシクシテイレバイイ……………俺ガ貴様ラヲこれ  
くしょんノーツニスルヨウニ、

楽ニシテヤロウ!!」

鈴音「くっ……………!!」

二人の少女は絶望を感じながらも、ゆっくりと接近して来る骨クツパに対して戸惑い始めた。

……………

ところが、突然どこかからピアノの音色が流れ始め、鈴音と五月、そして骨クツパとテレサはそれに気付き、立ち止まった。

骨クツパ「ンガ？」

テレサ「な、何だこれハ？」

鈴音「…ピアノ……………？」

五月「でも…どこから……………？」

そしてその時、流れて来る音楽と共に突然どこかから大量の紙が波のように出現し、

二人の少女と敵達のいるバルコニーの方へ飛んで行った。

骨クツパ「ナ、何ダアレハ!？」

テレサ「な、何か変な紙がこっちに向かってルウ!？」

大量の紙の出現により驚愕した二人の敵だが、その紙が突然骨クツパに襲い込み、顔から始め、

体中に張り付き始めた。

骨クツパ「グオツ!？ ナ、何ダコノ紙切レハア!？ 前ガ見エ…

ツテ、シカモ体中……………!？」

謎の紙が敵を包み込もうとしている間に、啞然としていた鈴音と五月はそれを眺めていた。

しかもその紙を良く見たら、楽譜である事が分かった。

鈴音「ちよ、ちよっと待つネ! あれ、楽譜ネ!？」

五月「じゃあ、この音楽と楽譜を出しているのは……………!？」

テレサ「…ま、まさか……………あの幽霊の仕業じゃ……………!？」

音楽を流し、楽譜を飛ばしている人物は何者か気付いたテレサは、一瞬に青ざめた。

骨クツパ「何イ!? アノ幽霊ツテ…チョット待テエ!! 貴様ア、

モシヤ肖像画ノ幽霊ヲ全部捕マエナカツタノカア!？」

テレサ「あ、いや…実はと言って…一体だけ残っても十分かなと思つて……………」

骨クツパ「バカモオ〜〜ン!! 誰ガ一体ダケ残ツテモ大丈夫ト

言ツタア!？」

イクラ俺ガコノ姿ニナレタニシテモ、俺ハ全部ト言ツタ  
ンダゾ、全部!…!」

鈴音「やつぱり! これはピアンさんの仕業ネ!」

五月「と言う事は、彼女は私達のためにこれを……………!？」

…音楽室にて

安全のために部屋に残されたピアンは、バルコニーにいる鈴音と五月を応援するべく、

激しいスピードでピアノを弾いていた。しかもその激しい音楽が流れる同時に、

空気中から無数の楽譜が出現し、窓の外からバルコニーへと飛んで行った。

ちなみに彼女が弾いていた音楽は、『スーパーマリオワールド』に登場した『お城BGM』である。



ピアノ「超さん……五月さん……貴女達は私に言いましたよね？私達、友達だと……」

そして友達を助けるのは当たり前だと……なら私も貴女達をお助けしますわ！

貴女達の友達として！ さあ、私の華麗なる音楽と供に立ち上がる楽譜達よ！

優雅に舞い、華麗に踊り、我が愛しき友を守り、敵を惑わせるのよ……」

……バルコニーにて  
ピアノが弾き出す音楽によって出現した大量の楽譜は、骨クツパの体を完全に包ませた。

そのため敵の動きも鈍くなり、視界を失った事で戸惑い始めた。

骨クツパ「フンガア……！！ 何モ見エン……！！」

シカモ体ガ強ク締め付ケラレテルセイデ分離モ出来ン……！！！！

誰カコノ紙ヲ止メテクレエ……！！！！」

テレサ「キ、キングテレサ様……って、フゴツ！？」

キングテレサを助けるために駆け付けようとしたテレサだが、一枚の楽譜が勢いにテレサの顔面に被せ、

誤って盗んだ二つの懐中電灯を落とした。

五月「あつ、ライトが……！！」

それに気付いた彼女は、急いで駆け出し、落下する二つの懐中電灯をキヤッチした。

その後五月は座り込みながら、安心そうに一息吹いた。

鈴音「ナイスキャッチネ、五月！」

彼女は五月に向けて親指を立てせ、ウィンクしながらそう言った。

鈴音「でもこの状態だと、奴も分離して回避出来ずに済むネ！　そうだとしたらチャンスヨ！」

身動きも失った愚かな悪霊……………この一撃で決めるッ！！」

彼女はそう言った後、楽譜に包まれて戸惑っている骨クツパに向けて駆け始めた。

骨クツパ「ン！？　ナ、何ダ！？　一体何ヲ！？　見エナイカラ何が何ダカ……………！！！」

鈴音「これで終わりネ！！　はいやああああああ！！！」

ドゴオオオオオオオン！！！！

鈴音は勢いを持った強力な飛び蹴りで、骨クツパの胸元に直撃し、粉碎した。

骨クツパ「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！？」

断末魔をあげた骨クツパは、楽譜に解かれ、体中の骨をバラバラに散らばりながら倒れ落ちた。

その同時に骨クツパの体の中にいたキングテレサも、ボールのようにそのまま転げ落ちた。

キングテレサ「痛タタタタ……………くっそお……………よくもやってくれ……………っテア！？」

頭を撫でながら起き上がったキングテレサは、周囲に散らばった骨クツパの骨を見て愕然とした。

キングテレサ「し、しまったあ！！　は、早く元の骨クツパに戻らないと……………！！！！！」



そして鈴音はそれを両手で受け取ると、その物体はキングテレサが食べて吸収した、

『オバキュームミニ』だと分かった。

鈴音「…まあ、この通り、回収したネ！」

テレサ「ああ〜！！ キ、キングテレサ様があ〜〜！！！」

ようやく顔に張られていた楽譜を取り外したテレサは、キングテレサを捕獲した鈴音と五月を見て愕然とした。

しかしそれに応じて二人の少女が彼に見上げると、テレサは一時固まった。

テレサ「アツ……………えっ、うっ……………え、えっとお……………アハハハ……………と、とりあえず、

今日の所はこれぐらいに勘弁するって事で……………サ、サイナラア……………！！」

誤魔化すかのように焦りを出したテレサは、急いでその場から飛び去った。

五月「いいの？ あのお化けを捕獲しなくて……………」

鈴音「雑魚一体じゃ何も出来ないヨ。放つといっても大丈夫ネ！ まっ、それよりも…」

キングテレサの捕獲と『オバキュームミニ』の回収も完了したし、これで一件落着ネ！」

パチパチパチパチッ！

その時、突然どこかから拍手の音が聞こえて来た。それに気付い

た鈴音と五月は、辺りを見回すが、

その音を辿る事で上を見上げてみた。するとそこには不気味な笑

みを浮かんだ白黒仮面を被った、

紫色の道化師ヒョロが宙に浮かんでいて、大きな満月の前に照らされながら、二人の少女に拍手をしていた。

「????」「ブラボーブラボー！ いやあ、お見事お見事、実にお見事！ まさか君達が本格的に奴を捕まえるとは、

実に予想外だったけどね。」

五月「な、何あのピエロ……!? しかも飛んでる!?!」

鈴音「あ、あんた何者ネ!? あんたもお化けカ!?!」

「????」「おっと、これはレディー達に対しては失礼しました！ 改めて紹介しよう。初めまして、

僕の名前は『デイメーン』……人は僕の事を『空間の魔術師』と呼ばれているよ……

自分が勝手に決めた呼び名だけど。以後、お見知り置きを……。」

デイメーンと名乗るピエロはお辞儀しながら自己紹介した。

鈴音「デイメーン……?」

五月「空間の……魔術師……?」

デイメーン「そして悪いけど、僕はお化けなんかじゃないよ? ……いや、

もしかしたらそれに近いかもしれないね?」

鈴音「は? それってどう言う意味ネ?」

デイメーン「まあ、そんな事よりも……君達の活躍、じっくり見させてもらったよ?」

よくあのキングテレサを倒し、捕獲する事が出来たね? いやいや、正直びっくりしたよ!

でもキングテレサもさすがに<sup>あいつ</sup>がっかりさせてくれたね……

せっかく彼に史上最強のお化けになるためのアイディアを授けたって言うのに、

大失敗で終わってしまうとは……ホント、実に情けないなあ。」

彼は腕を組み、頭をゆっくり振りながらそう言った。

鈴音「キングテレサにアイディア……………？　ま、まさか、あんたが肖像画の幽霊達を脱出させた犯人ネ！？」

五月「しかも『オバキュームミニ』をテレサ達に渡したのも君なの！？」

デイモン「ピンポーン　正解　そう、肖像画の幽霊達を脱出させ、

そんな彼らを捕獲するために『オバキュームミニ』をテレサ達に授けたのも、この僕さ！

なぜかと言うと、実は僕、ある組織と組んでいてね…

……

そりやすつごく強くて悪い奴ばかりしかない組織でさあ……………

でもその理想的な計画が物凄く興味深くて、僕も協力してるって訳だよ。　でね、

そいつらはどうしてもキングテレサを組織に加えて欲しいと頼まれてね、

早速僕は自分の魔力でキングテレサを解放してやったんだよ。

でもさすがに脱出させるだけじゃつまらないから、ついでという意味で、

彼をパワーアップさせてから仲間に加えようと思ったんだ。　そこで目に入ったのは、

肖像画の幽霊達なんだよ。　彼らの魔力は人間離れした凄まじい物ばかりで、

それをキングテレサが利用すれば、どれほどの価値があるのか……………

だから僕は彼にアドバイスしたのさ。　肖像画の幽霊達を全て捕獲し、吸収すれば、

自分は史上最強と言う名を持つ、真の幽霊王になれる

つてね！」

鈴音「でも普通では幽霊を捕獲する事が出来ない……………そのためには懐中電灯の光で敵を怯ませ、

『オバキューム』で吸い込ませる事で捕獲出来る……………でもそれだけでは手間を掛けてしまうだけネ。

だから『オバキュームミニ』を盗んだって訳ネ！」

デイメーン「またもや正解だよお！ そう、『オバキュームミニ』には旧式に過ぎない『オバキューム』より、

強力な吸引力を持っている……………ライトがなくても一撃で吸い込めるし、

それなりに手間を掛ける必要性もなくなる。手っ取り早くキングテレサをパワーアップさせるには、

『オバキュームミニ』が必要だったって訳だよ！」

鈴音「一体何ネ！？ あんたが言うその組織は！？ あんた達は一体何を企んでるネ！？」

デイメーン「残念だけど、それは言えないねえ」。 何せ僕達の計

画は、

敵には知らせないように機密的トップシークレットになってるからねえ

……………

まっ、例え幽霊が一体だけ残してしまったにしても、結果通り奴は最強ほねクッパのお化けに変身したんだ。

でもそれでも奴は負けてしまった……………非常に期待外れだったよ。 いかにも絶望した……………」

彼は両手を腰に当て、下を向いて頭を振りながら、がっかりそうにそう言うが、その後姿勢を上げ出し、

不気味な笑みを浮かべながら鈴音と五月の方へ見下ろした。

デイメーン「でもお……………その代わり、すっごい興味深い物を見付けちゃったもんねえ……………」。

鈴音・五月「えっ……………」

その不気味な笑みを見た二人は、思わず悪寒を感じていた。

デイメーン「フッフッフッフ……………」君達の活躍を拝見させたおかげで、

キングテレサよりももっともつと相応しい奴を見付けたよ。それは君だよ、そこのお団子頭ちゃん？」

彼はそう言った後、鈴音の方へ指した。

鈴音「わ、私……………」

デイメーン「そうだよお……………」悪いけど、一緒に来てもらおうよお……………」

そして彼は自分の目を不気味に光らせると、それを見た鈴音は一瞬気が遠くなり、背負っていた『オバキューム』と、

手に持っていた『オバキュームミニ』を落とし、倒れ始めた。

五月「超さん!？」

しかし鈴音はそのまま床に倒れるのではなく、そのまま気を失った状態で宙に浮かんだ。

これは恐らくデイメーンの魔法による物で、彼は気を失った鈴音を自分の所まで飛ばした。

デイメーン「そうそう、そうやって大人しくていればいいんだよお……………」

五月「ちょ、ちよつとあなた!! 超さんに何をしたの!? 一体

超さんに何するつもり!？」

デイメーン「別にい……………」ただ彼女を眠らせたただだよ? それにしばらくこの子を僕が預けるだけだからね。」

五月「預けるって、それってどう言う意味!？」

デイメーン「さあね? そう言う事は自分で考えてみたらどうかな? 一々教えてあげるほど僕は優しくないし、

寧ろ彼女がいればこっちも忙しくなるからね。もち



ろん、

彼女も色々僕のために何かやらせてもらっけど……  
まっ、そう言う事で、

僕もそろそろ仕事に戻らなくちゃ！ 君と無駄話をし  
てる暇はもうないもんねえ！

それじゃ……チャオ！」

五月「あつ……ま、待って……！」

彼女は駆け出すと、ディメーンは指を鳴らし、自分と気を失った鈴  
音の周りに謎の四角い空間に包まれ、姿を消した。

手遅れにもかかわらず、ディメーンのいた場所に立ち止まった五月  
は、慌てるかのように見回り始めた。

五月「そ……そんな……超さん！ 超さん……超さん……！」

もうそこには鈴音がないのも分かってはいるはずなのに、彼女はそ  
れでも鈴音の名を呼びながら、

不安と困難になり、見回り始めた。しかしその間に、キングテレ  
サが倒された事に気付いた。ピアノは、

音楽室から飛び出し、戸惑う五月のいるバルコニーへ飛んで行った。

ピアノ「五月さあ……ん……！」

彼女の掛け声に気付いた五月は、彼女の方へ振り向いた。

五月「……！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！」

ピアノ「よかったあ、ご無事で！ 先程音楽室の窓からキングテレ  
サの手先らしきテレサが飛び去った所を見たので、

急いで駆け付けて来ましたわ！ どうやら見事にキングテ  
レサを捕獲致しましたね！ ところで、

超さんはどうしました？ それとその格好……。」

彼女は五月の『コスプレカード』姿を見て気にしていたが、五月は  
その事を気にせず、

困った表情でピアノに駆け付けた。

五月「ピアノさん………大変なの……！ 超さんが……超さんが………」

超さんが変なピエロに捕まってしまつて……！！

私、奴を止めて超さんを助けようとしたんだけど……奴は超さんを連れてどこか消えてしまつて……！！

もう、何が何だか分からなくて……！！

余りにもパニックになつていゝ五月に対し、ピアノは多少混乱していたが、そんな五月を落ち着かせようと、

ピアノは声を掛け始めた。

ピアノ「お、落ち着いてください、五月さん！！ 確かに超さんがここにいないと言ふ事は、

彼女の身に何かあつたつて事ですわね？ でも状況はまだ分かりませんが……とりあえず、

ここは一旦あの博士の研究所に戻つてみてはどうでしょうか？ そしてこの話は、

あの博士に伝えましょう！ もちろん私も付いて行きますが……。」

五月「う、うん……。」

……オヤ・マー博士の研究所にて

研究所に戻つた五月とピアノは、早速オヤ・マー博士に今までの出来事を伝え始めた。

その前にオヤ・マー博士は五月の側にピアノがいた事に驚いたが、話を終えた後、

彼は再び驚きに大声を上げてしまつていた。

オヤ・マー「何じゃとお！？ 超君は謎のピエロによつて攫われたじゃとお！？」

五月「そうなんです……何のためなのかは私にもさっぱりです……」。

オヤ・マー「ふむう……しかし、何じやろうなあ……なぜ彼奴は超君を攫ったのかは謎じやが、」

これで彼奴が肖像画の幽霊達を解放した犯人だと言う事だけは分かったぞ！

キングテレサを自分の組織に加えるために、盗んだ『オバキュームミニ』で他の幽霊達を捕獲し、

それをキングテレサのパワーアップの素に利用したと言う事じやな？ じやが、

彼奴が君達の活躍に敗れてしまったおかげで、計画は失敗してしまったと言う事か……」。

ピアン「博士、このデイメーンとか言うピエロと、彼が言う組織の事に関して、何か心当たりはありませんか？」

オヤ・マー「いや、さっぱりじやよ！ デイメーンとか言う輩なんぞ聞いた事もないし、

組織の事も余り詳しくない！ じやが、以前に『メガバッテン』とか言う、

世界制服を企む変な組織はおったが、あれはマリオ君達の活躍で、もう既に壊滅しておる。

復活したと言う情報も聞いた事もないし、さすがに彼奴らの事ではないだけは確かじや。」

五月「じゃあ、奴は何のために超さんを……」。

彼女は下を向きながら悩み始めた。

オヤ・マー「ところで、君はキングテレサを倒したんじやろ？ と言う事は、

彼奴は今も『オバキューム』の中に収められてるんじやろつな？」

五月「え？ あっ、はい……でも私じやなく、超さんが捕まえた

ので、超さんの『オバキウム』の中に……………」

彼女は鈴音が落とした『オバキウム』と『オバキウムミニ』を取り出し、オヤ・マー博士に渡した。

オヤ・マー「おお！ その『オバキウム』の中に彼女がキングテレサ入っているんじゃない？

それとその『オバキウムミニ』にも、肖像画の幽霊達までも入っておるんじゃない！

いやあ、お見事じゃ！ 幽霊達の捕獲と『オバキウムミニ』の回収、ご苦労じゃった！

では早速こ奴らを元の肖像画に戻さんとな！ さて、ワシに付いて来なさい。」

彼は鈴音の『オバキウム』と『オバキウムミニ』を抱えながら、五月とピアノを研究所の奥に連れて行かせた。

その部屋の奥には大きな機械があり、五月には何なのかは分からなかったが、

ピアノは不安そうにその機械を眺めていた。

オヤ・マー「さて、五月君や。これは何の機械か分かるか？」

五月「え？ な、何の機械かと言われても……………」

彼女は困りながらもそう返答した。

オヤ・マー「フェツフェツフェツ！ こりやすまん！ 君にはちと難しかったようじゃな？」

これはワシが20年かけて作り上げた発明品……………」

オバケ絵になるマシン』じゃ！

これさえあれば、捕獲した幽霊を肖像画に戻す事が出来る上、

再び元のお化けに戻す事も出来るんじゃない！ じゃが、

ヤブーやテレサのような雑魚お化けは絵に戻せんから、後で野放しせんとな。

以前はルイーダ君がやっておったんじゃが、今回はワ

シがその手本をお見せするでしょう！

さて、まずこうやって……………」

彼は『オバキューム』と『オバキュームミニ』を横にある機械に差し込み、両方の掃除機から幽霊達を流し込んだ。

すると流し込まれた幽霊達はお起きのポッドの中に移され、洗濯機のように激しく掛け回し始めた。

その後、ベルトコンベアから額縁が飛び出し、ポッドから噴出された、まるで布のような平べったい姿となった幽霊は、

その額縁に乗り、先に進ませた。その後額縁に乗った幽霊は、先に進む事でプレスにより潰され、

次に電気を浴びさせ、最後にオーブンらしき機械の中に入れてさせた。オヤ・マー「まず水洗いで形を変えて……………完全に額縁に圧縮する

ように……………一気に乾かす！」

その後、額縁に乗せられた幽霊は、完璧な肖像画となって出て来た。完成した肖像画の中には、

ママーラとセ・ノバスチャン含めて様々な幽霊が写り出していたが、最後に出て来た肖像画には、

お互いに見詰め合うキングテレサと骨クツパの姿が写り出していた。

オヤ・マー「ふむ！これで幽霊達は見事に肖像画に封印する事に成功したな！特にこのキングテレサの絵……………」

以前はクツパと一緒に写っていたが、今度はその骨バージョンが写つとるのう？

もしかこれが先程言ってたキングテレサのパワーアップ版かろう？ 実に興味深い！」

五月「へえ……………こうやって幽霊達を封印するんだあ……………」  
オヤ・マー「そうじゃ！実に面白いじゃろ？ワシはこれを使って、幽霊達の研究をしとるんじゃ！」

こうしておいた方がもっと楽に研究が捗るからな！」

彼がそう言っている間に、五月はママーラとセ・ノバスチャンの肖像画を見て、哀れみを感じながらこう思った。

五月（…結局この二人を最後まで助けなかったな……………何か悪い事しちゃったなあ……………。）

オヤ・マー「さて、これで捕獲済みの幽霊達を封印する事が出来たが……………次はそのピアノの番じゃな！」

彼はピアノの方へ向きながらそう言うが、逆にピアノは動揺し始めた。

ピアノ「えっ…！？」

五月「えっ…ちょ、ちょっと待ってください！ まさか、彼女も封印を……………！？」

オヤ・マー「そうじゃぞ？ 元々彼女は肖像画の幽霊じゃ。そのため肖像画に戻らなければならない。

さあ、そうと決まれば大人しく……………。」

彼は予め『オバキウムミニ』を取り出すが、その前に五月は彼の前に立ち上がった。

五月「ま、待ってください、博士！ あの、私からのお願いです！  
しばらくの間、

ピアノさんをこのままにしておいてください！」

ピアノ「さ、五月さん！？」

オヤ・マー「な、何を言うてるんだね、君は！？ 彼女は肖像画の幽霊、

肖像画に戻らなければならない貴重な幽霊なんじゃぞ？ それを野放しにすると言うのは、

ある意味危険な行為でもあって……………。」

五月「それは分かっています！ でも、ピアノさんは私と超さんを助けてくれたんです！」

私と超さんがキングテレサとの戦いでピンチになっていた時、

彼女は魔法か何かを使って、

私達を助けてくれたんです！ もちろんキングテレサを捕まえてくれたのも、ピアノさんのおかげなんです！

だから私……これを言うのもおかしいと思いますが……ピアノさんの友達になりたいんです！

だからお願いします！ 彼女を封印しないでください！ お願いします……！

彼女は必死な思いで、オヤ・マー博士の前で頭を下げた。そんな彼女を背後から見ていたピアノは、思わず感動していた。

ピアノ「五月さん……。」「  
オヤ・マー「う、う……むう……。」

彼は腕を組みながらしばらく考えていたが、その後彼はこう言った。

オヤ・マー「……まあ、ピアノの研究によると、確かに彼女は危害を加えるほど危険ではないからな。

分かった、君が言うように、彼女をこのままにしてあげよう。」「

五月「ホントですか!?!」

その答えを聞いた彼女は、オヤ・マー博士の方へ見上げた。

オヤ・マー「ただし、もし彼女の身に何か起こったら、それなりの責任を持てるかの?」

五月「はい、もちろんです!」

オヤ・マー「うむ！ ならよろしい!」

そう言った彼は、笑みを浮かばせながら頷いた。

ピアノ「五月さん……ありがとうございます！ こんな私ですが

……これからもよろしくお願いします!」

五月「ううん！ 私こそ……あの時は本当にありがとう!」

二人は両手で握手しながら、満面笑顔を浮かばせていた。その

間にオヤ・マー博士は、  
何気に興味津々にそんな二人を眺めていた。

オヤ・マー「うむ……………人間と幽霊との交流……………幽霊は目に見え  
んが、これも滅多に見れぬ物じゃ！」

フォツフォツフォツ、ワシの新たな研究に役立つかも  
知れんなあ！」

彼は笑いながらそう言うが、その間に五月は、密かに不安そうな表  
情に変わり、こう思った。

五月（……………超さん……………一体どこへ……………？）



## 第14話 Welcome to Station Square

……キノコワールド大陸・ルイージマンションの事件が終えてから翌朝……モビウス大陸・ミスティックルーンでは、

いつもと変わらぬ明るい朝を迎えていた。そしてティルスの工房にて、眠りから覚めたネギは、

パジャマからスーツ姿に着替え、まだ眠たそうに欠伸びながらも、  
寝室から出た。

ネギ「ふあ〜〜……皆さん、おはようございますう〜……………」

聡美「あっ、おはようございます、ネギ先生！」

ネギは台所にいる聡美の方へ振り向くと、少しだけ啞然としていた。

それは聡美がいつもの学生服を着ているにも関わらず、

珍しくもエプロン姿になっていて、更にテーブルの上に朝食を用意していた。

ネギ「うわあ〜！！ 美味しそうですねえ！ これってもしかして、

聡美さんが作ったんですか!？」

聡美「えっ、は、はい！ 皆さんのために自信持って作ってみたんです!」

彼女は頬を赤く染めながら、恥ずかしそうにそう答えた。

カモ「しかしこりや珍しいなあ……………まさかあの天才科学者の八カ

セさんが料理も出来るなんて……………」

こりや珍し過ぎてきつと何か起こりそうな気がするなあ……………」

……………」

聡美「ああ〜！！ 酷いですう〜！！ 私だって料理ぐらいは出来ますよお！ 滅多に作りませんが……………」

これでも伊達に『チャオハオス超包子』で超さんや四葉さんのお手伝いしてた訳じゃありませんからねえ!」

ネギ「でも本当に美味しそうだなあ……………僕、葉加瀬さんの料理食べた事ないから、楽しみですよ!」

聡美「えっ……………そ、そうですか? え、えつとお…そう言われると、何でしようか……………ええ……………」

彼女はネギの笑顔と褒め言葉に対し、赤面しながら慌て始めた。しかしその間にカモは、

そんな二人の関係を怪しまれながら、興味津々に眺めていた。

カモ(おお?) 何だあ、俺っちの前にしてこの異様な感じはあゝ? この二人……………ムフフツ、妙な関係だねえ?)

ネギ「あれ? そう言えばアスナさんやソニックさん達は?」

彼は部屋中を見回りながらそう言った。確かによく辺りを見回ると、部屋の中にいたのはネギとカモ、そして聡美の三人。

明日菜や菲、楓と真名、更にソニック達の姿が見当たらなかった。

聡美「ああ、確かみんな外にいます。朝食も出来上がったんで、そろそろ呼びに行こうと思ひまして……………」

ドゴオオオオオン!!

その時、突然外から何かが爆発したような音がした。

ネギ「うわっ、な、何今の!？」

カモ「外から来たツスよ、兄貴!」

ネギ「行ってみよう!」

聡美「あ、ま、待ってください、ネギ先生!」

そして三人は、急いで外へ飛び出した。

…ティルスの工房から飛び出したネギとカモ、そして聡美は、外で激しく戦い合っている菲とナツクルズを目撃した。お互いは素早いパンチやキックを繰り返しながら、激しいぶつけ合いをしていた。一方ソニツク以外のメンバー達は、工房付近にいながら観戦していた。

ネギ「な、何これ！？ 何で古老子とナツクルズさんが……………！？」  
カモ「おお、こりや朝っぱらながらもすっげえ戦いを繰り返してんなあ！」

明日菜「あつ、おっはよう、ネギ〜！」  
ティルス「ああ、ネギ！ おはよう！」

二人がネギに気付き、挨拶をした後、ネギは二人の所まで駆け付けた。

ネギ「あつ、アスナさん！ これは一体どう言う事ですか！？ 何で古老子とナツクルズさんがケンカを……………！？」

明日菜「バカねえ〜…これはケンカじゃなくて朝練よ、朝練！」

楓「何でもナツクルズ殿の実力が気になってたらしくて、是非彼と供に修行をしたいと、古が言ってたでござる。」

ネギ「へえ〜…………でも何でいきなり…？」

ルージユ「昨日ナツクルズが例の化け物に攻撃した以来、あいつの力に興味を持ったからよ。」

なぜか不機嫌そうにも、彼女はそう答えた。

真名「まあ、要するに強い奴と戦ってみたいだけなのだろう、古の奴は。」

ネギ「そうなんですか……………」

彼は理解しながらも、多少不安そうにも菲とナツクルズの戦いを眺めていた。

菲「ふむ、お主結構なかなかやるアルな！ そのパンチ、結構効いてるアルよ！」

ナツクルズ「フンッ！ そう言うお前こそ、思ったよりいい攻撃出してんじゃねえか！ だが、

いつまで経って耐え切れるかなあ！？ 『メガトンフック』！！」

彼は一回転しながら強力なフックを繰り出し、菲を叩き飛ばした。菲「ぐはっ！！！」

しかし飛ばされた菲は両足を地面に押し出し、体勢を整え直した。

菲「うう~~~~~……………今の効いたアル！ でも次はどうアルか！？

『パオチュワン  
炮拳』！！！」

ナツクルズに目掛けて駆け出した菲は、中段突きでナツクルズを叩き飛ばした。

ナツクルズ「ぐおっ！？」

だが飛ばされたナツクルズは両足を地面に押し出し、体勢を整え直した。

ナツクルズ「くっ……………やるな！ まさかそこまで耐えられるとは……………やっぱり、思った以上やる女だな！

だが…次は避け切れるかあ！？」

ドゴオオオオン！！

その後ナツクルズは穴を掘り出し、地中に潜りながら姿を消した。

菲「えっ！？」

地中に潜ったナツクルズの姿を完全に見失った菲は、辺りを見回りながら慌て始めた。

菲「じ、地面に潜た！？ し、しかもこれは一体何アルか！？ 相手の気配すら感じない……………！！

ど、どこ…どこにいるアルか！？」

彼女は必死になりながら周囲を見回すが、ナツクルズの気配を感じ

ないためか、多少混乱していた。

ナツクルズ「俺はここだあ!!! 『ダイフンカ』!!!!」

ドガアアアアアアアアン!!!

すると菲の真下からナツクルズが飛び出し、アッパーで菲を叩き飛ばした。

菲「うわああっ!?!」

そして叩き飛ばされた菲は、そのまま地面に倒れ落ちた。

菲「痛つつつ……………い、今の…マジ効いたアル……………」

彼女が少し頭を上げると、彼女の所まで歩き、笑みを浮かびながら手を伸ばすナツクルズの姿が見えた。

ナツクルズ「今日はここまでにしよっぜ、菲!」

彼がそう言った後、菲も笑みを浮かばせながら、彼の手を掴んだ。

そしてナツクルズは彼女を引っ張り上げ、

お互い握手した。

菲「いやあ、思ったよりあんた強いアル! まさか気配を完全に消して地中に潜るとは、予想外だたアルよ!」

ナツクルズ「まあ、これも派手な修行をしたおかげとも言えるが、お前も結構強かったぜ?」

特にその優れた耐久力もな!」

戦いが終わった後、啞然としていたネギや聡美、そして不機嫌そうなるルージュ以外のメンバー達は一斉に拍手した。

楓「いやあ、見事な戦いっぷりでござった!」

真名「二人共なかなかすごかったぞ。」

菲「ハハハハ……………あっ! よう、ネギ坊主! 起きてたアルか!」

彼女がネギに振り向くと、元気よく手を振りながら挨拶した。

ネギ「く、古老子! 大丈夫ですか!? 怪我はありませんでした

か!？」

菲「なあくに、あれくらいの物なら大した事ないアルよ!」

その間にルージュは、一緒にいるナツクルズと菲を見て、まだ不機嫌な表情を浮かべていた。

ティルス「どうしたの、ルージュ? やけに不機嫌そうだけど……」

ルージュ「えっ!? あ、いや、別に何でもないわよ!」

ティルス「そう?」

慌てるルージュは横へ目を反らす、ティルスはそれでも気に掛けていた。

ルージュ(……もう……何よ、このモヤモヤ感は!?)

べ、別にあたしはナツクルズの事なんか何とも思ってもいないわよ!)

ネギ「あれ? そう言えばソニックさんが見当たりませんが……」

彼は周囲を見回りながらそう言った。

ティルス「ソニックなら君達の友達を探すためにまたジャングルへ向かったけど……」。

その後、ソニックが猛スピードでネギ達の所へ戻って来た。

ソニック「Hey guys! I'm back!」

カモ「って早っ!?!」

ティルス「あつ、お帰りソニック! 早かったねえ?」

ソニック「ああ、まあ……おっ? Yo、ネギ! Good morning!」

よく寝れたか?」

彼は挨拶するにも、ネギはなぜかソニックを見て唾然としていた。

ネギ「えっ!? あ、はい……Good morning……」と言

うより、あのう、

ちよつと聞いてもよろしいでしょうか？」

ソニック「ん？ 何だ？」

ネギ「あの、さっき戻って来ましたよね？ しかも物凄く見えないスピードで戻って来たみたいなんですけど、

一体何をして……………」

ソニック「は？ 何って……………ただ普通に走っただけだぞ？」

カモ「いや、ありやどう見たって普通じゃねえよ！？ 一体どうやってそんなスピードを会得したんだ！？」

真名「そう言えば、以前あの基地で私と楓を助けに来た時も、かなりのスピードで駆け付けて来たな……………」

楓「そうでござるな……………一体何をしてまであんなスピードで走れるようになったでござるか？」

ソニック「いや…別に？ ただ、生まれた頃から素早く走れるようになったぐらい……………」

明日菜「ええっ、マジで！？ 生まれた頃からそんなスピードで走れるようになったの！？」

何のトレーニングもせずに！？」

聡美「それってすごいですねえ！ 正に超人的ですよ！」

二人は驚きながらもソニックに迫り来るが、逆にソニックは別に気にしてもいないかのように、混乱しながら少々引いていた。

菲「ナックルズとルージユはどうアルか？」

ナックルズ「俺はマスターエメラルドを守りながらも、日々修行をしていたよ。」

俺に取っては欠かせない事だからな。 体力を腐り掛けて欲しくないからな。」

ルージユ「あたしは軍の特殊訓練で鍛えてるから……………」

明日菜「軍？　そう言えばこの前にも何かそんな事言ってたような………それって、

ルージユは軍の人（？）なの？」

ルージユ「ええ、そうよ！　モビウス大陸の連邦政府軍『GUN』の直属エージェント………」

それはあたしの事よ！　でも今は休暇中だから、今の所は任務を引き受けられないけどね。」

明日菜「へえ、何か意外とカッコイイね！　だからあんな強力なキックが使えるんだあ………」

じゃあ、あれでしょ？　必殺仕　人みたいに、蹴るだけで敵の首を捻り回して殺したりも出来るんでしょう？」

彼女がどす黒い質問をすると、ルージユはそれに対して青ざめながら引いていた。

ルージユ「えっ！？　ちょ、な、何それ！？　い、いや、いくらあたしでも、

そんな無茶過ぎる殺生なやり方は………。」

ナツクルズ「ハッハッハッ！　そりゃ見てみたい物だぜ！」

彼は笑い飛ばすと、ルージユは鋭い視線でナツクルズの方へ睨んだ。ルージユ「何ですってえ！？」

ナツクルズ「やるか、この蝙蝠女！？」

彼はそう言いながら、ルージユの前に戦闘体勢に構え出したが、途中で明日菜が二人の間に割り込んで来た。

明日菜「ま、まあまあ、二人共落ち着いて！」

菲（元はと言えばアスナが始めた事アルよ………。）  
彼女は遠い目で内心にそう言った。

聡美「テイルスさんはどうなんですか？　ソニックさんみたいに何か特殊な能力とかありますか？」

テイルス「特殊な能力と言われても………ああ、そうそう！　空を飛べる事ぐらいなら出来るよ！」



聡美「空を飛べる……………」？」

その言葉を聞いた聡美は、頭を傾げた。

テイルス「うん！ 見て！」

彼がそう言うと、二本の尻尾を急回転させながら、空を飛び始めた。

その瞬間を見たネギー一行は、

思わず驚きに引いていた。

明日菜「うわっ！？ ホントに飛んだあ！？」

ネギー「す、すごい……！」

カモ「なるほど……………」二本の尻尾をプロペラのように回転させながら空飛んでんのか……………」

前々から何で尻尾が二本に分かれてんのか気になってたが、そう言う役割なのか。」

彼がそう言った後、テイルスは回転する尻尾を止めさせ、着地した。テイルス「いや、本当は僕にも分からないんだ。何で僕の尻尾はこんな感じになったのかは……………」まあ、

以前に僕はよくこの尻尾を恨んだりしたな。昔はこの

尻尾のせいでよくみんなから虐められたけど、

逆にこの尻尾のおかげで、僕はみんなには出来ない事が出来たって感じがするんだ。

ちよつと自慢っばいけど、今じゃ僕の唯一のトレードマ

ークみたいな物だよ！」

聡美「そうなんですかあ……………」。

その後、テイルスはソニックの方へ振り向いた。

テイルス「ところでソニック、ネギの友達探しはどうだった？」

彼がそう問い掛けると、ソニックは両手を上げながら頭を振った。

ソニック「ダメだ、お手上げた。昨日も一昨日もだけど、何度も

同じ所へグルグル回っても見当たらなかったよ。

一応エンジェルアイランドの方へも行ってみたが、そっちにも誰もいなかったよ。

もちろんビッグにも聞いてみたが、この前会った楓と真名以外誰も会ってないってよ。」  
テイルス「そつかあ……………じゃあ、ネギの友達らしき人物は、多分もうここにはいないって事だね？

だとしたら、早速移動する必要があるね。」

ネギ「移動……………？」

テイルス「うん！ ミス<sup>ここ</sup>ティックルーンよりもっと情報がある、  
『ステーションスクエア』へ！」

…菲とナツクルズの修行を終えた後、ネギ達は早速聡美が作った朝食を食べ終え（ちなみに好評だった様子）、テイルスに誘われながら工房を出た。そこでネギー一行が辿り着いた場所は、高台に設置された駅であった。その駅を見上げていたネギ達は、啞然としていた。

ネギ「こ、これは、駅ですか！？」

テイルス「そう！ この駅はステーションスクエアへ行くための直通電車になってるんだ！

ミスティックルーンにはよく、

ステーションスクエアやセントラルシティからの考古学者や探検隊が来るから、

いつでも来れるように建設されたんだ。 まあ、僕もこ

こに住んでから、

部品とか何か買うために街に行く必要もあるし、あつて便利だよ！」

明日菜「こんな所に駅があつたなんて…全然知らなかった……………」

カモ「まあ、特に……………」

ネギ達は後ろの方へ振り向くと、そこには空から墜落して来たエンジェルアイランドが見えていた。

カモ「……………まさかエンジェルアイランドの直ぐ前にあつたなんて…全然気付かなかつたぜ……………」

テイルス「まあ、あの時は島の事で夢中だったからね。気付かなかつたのも仕方ないよ。」

ソニック「まつ、今は電車が滞在中らしから、今の内に乗った方がいいぜ？」

ネギ「え、でもお金はどうするんですか？ 払わずには乗れませんよ？」

テイルス「ああ、僕達はVIPだから、払わなくてもタダで乗せてくれるけどね。」

聡美「VIP？」

テイルス「うん。僕だけじゃなく、ソニック、ナックルズとルージュもそうなんだ！」

僕達はこう見えても何度も世界を救った事があるから、政府からの許可で、

乗車や入場無料の称号を与えてくれたんだよ。VIPとして認定された以上は、

どんな乗り物や施設などを無料で入れさせてくれるからね！」

ソニック「俺は走るだけで行きたい場所には直ぐ着くから、別に乗り物には乗らないけど……………」

ルージュ「あたしも。移動は空を飛ぶだけでも十分だけど、やっぱり遊園地とか遊びに行く時は必要だけどね！」

ナックルズ「俺は元々島を守る立場でね、そう言う物には興味ないが……………」

テイルス「でも、ネギ達の場合はこの世界の住民でもVIPでも何でもないから、乗車料金を払わなきゃダメだからね。

一人225リングもするけど……………」

彼がそう言っている間に、ネギは自分の財布の中身を確認していた。ネギ「えっ…リング……………って？」

テイルス「この世界のお金だよ。持ってる？」

彼がそう言った後、ネギは再び自分の財布を確認した。そして彼はテイルスの方へ見上げ、こう言った。

ネギ「…あ、あの……………日本円じゃ…ダメですか？」

テイルス「へ？ ニホンエンって……………？」

カモ「兄貴…この世界じゃ俺達の世界の金は使えねえッスよ。」

ネギ「やっぱり……………」

彼はそう言いながら、落ち込んだ。

ルージュ「…しょうがないわね。ちょっと待ってなさい！」

彼女がそう言った後、駅の階段を登り、走り去った。ネギ達は彼女が何をするのか分からないまま、

駅の方へ見上げ続けていた。そしてしばらく経つと、彼女は何か手に持ちながら階段を下りて来た。

ルージュ「ほら、これを持ちなさい。」

彼女はそう言いながら、何かのカードをネギ達に渡した。

ネギ「これは……………？」

ルージュ「フリーパスよ！ これを持って駅員に見せれば、無料で電車に乗せてくれるわよ。」

テイルス「フリーパス！？ って、それ、一枚五千リングもするほど高い奴じゃない！？」

しかもネギ達の方で合計三万リングも……………！？」

ルージュ「あぁくら、忘れてないかしら？ あたしは連邦政府直属のエージェントよ！」

その分給料も高いんだし、こんなカードなんてあたしに取っちゃ安物よ！」

ネギ「って、これ僕達に！？ い、いいんですか、わざわざ僕達のために……………」

ルージ「いいのよ！ 困った時はお互い様！ 別に後で払わなくてもいいから安心して！」

後であいつからお金返してもらってから。」

彼女はナツクルズに指しながらそう言った。

ナツクルズ「何で俺がだあ！？」

ティルス「と、とにかく！ これで全員電車に乗る事が出来たし！

早速ステーションスクエアへ出発だあ！」

ネギ&ソニック一行「おおーうー！！」

全員一斉に腕を上げながら盛り上がった後、早速駅の階段に登って行った。

駅員はVIPであるソニック達をそのまま通してあげたが、ネギ達はルージユから貰ったフリーパスを見せた事で、

彼らも通してくれた。そして全員電車に乗った後、電車が発車し、ステーションスクエアへ向かって走り出した。

……………ここはステーションスクエア……………モビウス大陸にある大都市。この街には数多くの人間達が住んでいて、

殆どはビルに囲まれた都会である。その風景は現実世界で言うところのアメリカのニューヨークのようで、

殆どはアメリカ人のような人種ばかりであった。だがこの街は観光施設としても有名であるため、

豪華なホテルに真夏のビーチ、更に遊園地やカジノなどがある。実に楽しさと明るさに満ちた、賑やかな大都会である。

そして電車でこの街に辿り着いたネギ達は、ステーションスクエア駅の前に立ちながら、賑やかな風景を眺めていた。眩しい太陽の下に、賑やかな人込みの前で、ネギ達は多少啞然としていた。

ネギ「うわあ〜！！ す、すごい！ ここがステーションスクエアなんですね！？」

明日菜「ホントだ！ しかもソニック達とは違って私達みたいな人間がたくさんいる！」

真名「しかし殆どは白人と黒人のようだが…ここはアメリカに近い街なのか？」

テイルス「アメリカ？ うう〜ん……………そこはどこかのかは知らないけど……………」

とにかく、改めて言うと、ここはステーションスクエアと言って、多くの間達が住んでる街なんだ！

殆どは高層ビルの多いコンクリートジャングルだけど、中でもこのエリアは観光地として有名なんだ！

ビーチもあれば、遊園地やカジノだってある！ 安らぎと楽しさを求める観光客に取っては、

持って来いの場所だよ！」

ナックルズ「まあ、以前にエッグマンはこの街を奴の遊園地『エッグマンランド』にしようと企み、

『カオス』を利用してこの街を洪水によって破壊したが、今じゃすっかり何もなかったかのように、

元通りになってるがな。」

菲「そう言えば、そのエッグマンとか言うの、以前にも言てたアルな？ それで誰…或いは何アルか？」

ソニック「ああ、エッグマンな？ エッグマンと言う奴は、世界制服を企む悪の天才科学者の事だよ。」

ロボットを戦闘兵器に使い、街を壊しながら、あちこち悪さをしながら荒らし捲くってる、

言わば傍迷惑な奴だよ。俺はこれでも何度も奴をやつて、何度も計画を丸潰れにしたけど、

あー見えても奴はしつこくて懲りもしないオッサンでね………何度も立ち上がったは、

何度も悪さをするんだよ。まっ、逆に俺に取っては退屈から凌ぐための遊び相手みたいな奴だから、

別に何回やつけても構わないんだけどねえ。」

聡美「そんな悪い人がこの世界にいるんですか！？ しかもロボットを使って悪さだなんて………」

何か、同じ科学者としては許せないなあ………」

ティルス「とにかく、これほどの人が多くいるんだから、きっと誰かがネギ達の友達を見掛けたに違いないよ！

ここは情報が多い街でもあるんだし、少しだけでも手掛かりは見付かると思うよ！ でも、

ネギ達はこの世界の事をまだ知らないから、この街の事も余り詳しくもない。

街は広いからね、途中で道に迷ってしまう恐れもあるよ。だからまず、

このエリアから始めて、手分けして探してみようよ！」  
ネギ「そうですね、そっちの方が迷わずに済みますね！ では、僕とアスナさんは、

ソニックさんと一緒に行きます。いいでしょうか、ソニックさん？」

ソニック「ノープロブレムNo problem! 俺は構わないぜ?」  
彼は腕枕をしながらそう答えた。

楓「では拙者はルージユ殿と供に行動するでござる。」  
菲「じゃ、私はナツクルズと一緒に行くアル!」  
彼女がナツクルズに接近すると、ルージユはなぜかまた嫉妬を感じ始めた。

聡美「じゃあ、私はテイルスさんと一緒に行きます。」  
真名「私もお供しよう。」

テイルス「オッケー! じゃ、早速チーム別に分かれよう! ソニック・ネギ・明日菜は、

ホテルと『エメラルドコースト』の方へ! ナツクルズ・ルージユ・楓・菲は、

この駅の手前にある遊園地の『トゥインクルパーク』へ!  
! そして僕・聡美・真名は、

この駅の裏にある『カジノポリス』へ向かうよ! もし  
終わったら、

全員この駅に戻って、最終的に見付からなかった場合は、  
次のエリアへ向かう!」

ネギ「分かりました!」  
彼が頷いた後、全員はチーム別に解散し、指定された施設へ向かった。

………辺りは暗闇に包まれていた………。自分に意識はある物の、  
身動きが取れない。



ここはどこなのか、自分は何をしているのか、少女はただそう思っていた。

『……………さん……………めさん……………』

その時、突然どこかから声が聞こえ、少女は唸りながらも、少しずつ目を開き始めた。

開眼するまで視界は少々ぼけていたが、しばらく経つとその視界は滑らかになった。そして気が付けば、

少女の前にもう一人の少女がいた。それは長い緑色の鉄製の髪、アンテナのような耳、

そして緑色の機械的な瞳をしたロボット少女で、彼女は心配そうに少女を呼び掛けていた。

そう、彼女の正体はネギのパートナーで、エヴァの従者、更に鈴音と聡美が製作した少女型ロボット、絡繰茶々丸であった。

茶々丸「千雨さん！！」

彼女がその少女に声を掛けると、少女は完全に目を覚ました。彼

女はポニーテールに眼鏡をしていて、

手元にノートパソコンが落ちていた。そう彼女の正体はネギのパートナーで、

『ちづ』と言うあだ名を持ったネットアイドルとスーパーハッカー、長谷川千雨であった。

彼女が茶々丸の声により目を覚ました後、頭を抱えながらゆっくりと起き上がった。

千雨「う……うう……ん……………な、何だ…茶々丸さんか…？」

茶々丸「よかった…千雨さんがご無事で…。何度も呼び掛けてい

ましたが、

余りにも目覚めそうにもなかったので……。」「  
彼女は安心そうにそう言うが、逆に千雨はそんな茶々丸を見て不思議そうに思い始めた。

千雨「……はあ？ あんた……何言ってるんだ……？ って言うか、大体何であんたがここに……！？」

彼女はふと周囲を見回ると、何かに気付いた。実は二人は、ステーションスクエアのどこかにある、路地裏にいた。その通路の幅は狭く、日陰によって辺りは暗く、近くに倒れたゴミ箱や、壁に落書きが描かれたほど、かなり汚れた場所であった。そんな風景を見回していた千雨は、混乱し始めていた。

千雨「な、何だここは！？ 何で私がここに……！？ 確か私は確か、

誰もいない部屋の中にいたはずじゃ……！？」

茶々丸「そこも私も悩んでいるのです。私も確かマスターと一緒にいたのですが、

気が付いたら私は千雨さんと共にこの路地裏に……。」「

千雨「マスター？ ああ、あのエヴァンジェリンの事だな？ って言うか、何で私達はこんな所に……？」

茶々丸「そこは私にも分かりませんが、現状ではこう起こりました……。」「

彼女は早速、以前の出来事を千雨に説明し始めた。

茶々丸「ネギ先生が例の手紙に関してクラスを飛び出した後、先生は戻らずに授業が終えました。

その後私はマスターと共に、いつもの屋上で滞在していま

した。しかし、

その間に突然謎の怪奇現象が発生しました。空气中に放  
つ謎の紫色の電流……………

突如に揺れ出し始めた地震……………そして空間を歪み始めた  
謎の現象……………

私はその現象を詳しく分析してみたのですが、どれも理解  
不能でした。

そして突然目の周りが真っ暗になり……………気が付いた時は  
……………」。

千雨「なるほど……………私と一緒にここにいたって事か。 と言う事  
は、

あのエヴァンジェリンはあんたから逸れてしまったって事に  
もなるな。」

茶々丸「千雨さんの場合はどうなんですか？」

千雨「同じだ。 誰もいない部屋でいつものようにパソコンを弄っ  
ていたら、

茶々丸さんと同じ現象に巻き込まれて、気が付いたらここに  
来てたよ。」

茶々丸「そうなんですか……………」。

千雨「まあ、それよりも……………ここは一体どこなんだ？ どっかの路地  
裏にしか見えないが……………」。

彼女は周囲を見回りながらそう言った。

茶々丸「さあ……………私もちょうど目覚めたばかりなので、今は何とも……………」。

千雨「じゃあ、さっさとここから出ようぜ。 私はこんな汚い場所  
には長居したくないからな。」

茶々丸「そうですね。 出口はあちらのようですよ……………では千雨  
さん、私とご一緒に……………」。

彼女は光が差す方へ向くと、千雨の手を握りながら、出口の方へ向

かった。

千雨「って、何で私の手を掴んだよ……別にこんなちんけな所で迷子になんか……。」

茶々丸・千雨「!?!」

二人は路地裏から出ると、ステーションスクエアの街中に歩く多くの人込みを見て驚いた。

見た事もない外人らしき住民達は賑やかに歩き、道路にはたくさんの車が、

クラクションを鳴らしながら走っていた。辺りは高いビルばかりで、色んな店や施設もあった。

ちなみに場所的にはネギ達がいる場所からかなり離れている様子で、恐らく茶々丸と千雨の今いる場所は、

ステーションスクエアの都心だと思われる。

千雨「な、な、何だここはあ!?! な、何でこんなに外人が盛りだくさん……って、

何だこのビルばかりの街はあ!?!」

茶々丸「分かりません……少なくとも、ここは明らかに麻帆良学園の一部ではなさそうです。」

千雨「じゃあ、ここはどこなんだ!?! 外人がこんなにいるって事は……」

アメリカのニューヨークかどっかか? さすがに東京都内にいる訳でもないし……。」

茶々丸「それでしたら、少々お待ちください。この街のデータを

照合してみます。」

彼女はそう言った後、早速街の周囲を見回り始めた。通行する賑やかな住民達から始め、高い高層ビル、道路に走る車、レストランやお店と言った施設などを見回り、

自分のハイテクな目線からデータを照合していた。そしてしばらく経つと、彼女は立ち止まり、こう言った。

茶々丸「データ照合完了しました……が、残念ながら現在位置不明です。」

千雨「現在位置不明って、それってデータにはないって言うのか！？ じゃあ、

ここはアメリカとかじゃないって言うのか！？」  
茶々丸「分かりません……データがない以上、どうやっていいのか……。」

二人はしばらく考え始めたが、千雨は両手を腰に当て、ため息を吹いた後にこう言った。

千雨「……しょーがねっ。とりあえず情報を探ってみよう。こんな所で一日中立っても意味ないからな。」

茶々丸「そうですね。何か色々探してみましよう。」

彼女が頷いた後、二人は早速情報を探りに人込みの中に入り、歩き始めた。

…二人は歩いてしばらく経つが、これと言った情報もまだ何一つも

入手していないそうだった。

その分、辺りを見回りながら、ただひたすら路上を歩いていた。

千雨「しかし……こんなに外人が腐るほどいるんだから、どう見てもアメリカにしか見えないんだが……。」

茶々丸「そうであればデータ照合に判明されているはずですよ。ですが、データにはないと言う事は、

私達は知らない街に来てしまったとしか考えられません。」

千雨「違う街？ それって……まさか、ここは私達の世界ではないって言うのか？」

茶々丸「定かではありませんが、確実にここは幻想世界ではないと思われませぬ。」

幻想世界は私達の住む世界の鏡面空間……無人に廃墟と化した麻帆良学園を舞台にしています。

もし私達は再びその世界に戻っていたとしたら、このような人間達は存在していないはずですよ。

特にこの街も……。」

千雨「だな……。じゃあ、ここは一体……ん？」

彼女が立ち止まると、目の前に新聞屋があった。そこで数多くの新聞や雑誌が並べており、

カウンターには一人の女性が元気よく大声を出しながら宣伝していた。

女性「はあ〜い、いらっしやいらっしや〜い！ 今日も特ダネ満載の新聞発売中だよ〜！」

これを見逃したら損しちゃうよ〜！」

千雨「新聞屋か……きつと何か情報があるかもな。行ってみよう、茶々丸さん。」

茶々丸「はい。」

彼女が頷くと、二人は新聞屋の方へ向かった。

女性「はあゝい、いらっしやい！ 本日の新刊いかがでしょうか？ 今日だけしか見られないビッグニュースが掲載してるよあゝ！」

千雨「えつと、じゃあ…今日の奴を……………」

女性「はあゝい！ 一冊で150リングをいただきまあゝす！」

千雨「…へっ……………？ リ…リング……………？」

彼女が財布を取り出し、カウンターの女性の話を聞いた後、一瞬に固まった。

その間に彼女は茶々丸の方へ振り向いたが、茶々丸はそれに応じて頭を振った。

女性「あれ？ もしかしてお金ないの？ じゃあ、残念だけど売れないねえゝ。

もしお金があつたら、また来ておいでよ！ 売れ切れになる

前にね！」

千雨「は、はあ……………」

彼女は残念そうにも頷いた。

…その後、茶々丸と千雨は道路の中央にある小さな公園にいた。

千雨は頭を抱えながらベンチに座り、

茶々丸はそんな彼女の近くで立ち止まっていた。

千雨「くっそあゝゝゝ、何なんだよ、この街は！？ 場所も全く分からない上に情報も見付からない……………」

…って言うかリングって何だよ！？ それがないと何も買えないのかあ！？ はあゝゝゝ……………」

これじゃあ本ツツ当に何も分からねえ……。……。」  
彼女は深いため息を吹いた後、茶々丸はこう言った。

茶々丸「ご安心ください、千雨さん。こんな事もあるうかと、  
予め新聞屋のスタンドにあった新聞をスキヤニングでコピー  
しました。」

千雨「何い!? マジかよ!? じゃあ、今あんたの頭ん中に記事  
のネタが入ってるって言うのか!?!」  
茶々丸「はい。ですが表紙部分のみですので、詳しい内容が書か  
れていない恐れもあります。」

印刷は不可能なので、私が直接読んで差し上げましょうか  
?」

千雨「ああ、頼む!」  
茶々丸「分かりました。では保存した新聞の内容を解読いたしま  
す。」

彼女がそう言った後、ハイテクな目線からコピーした新聞のページ  
をダウンロードした。  
内容は全て英語で書かれていたが、翻訳機能でそれを日本語に解読  
した。

茶々丸「ステーションスクエアタイムス　〜エンジェルアイランド  
再び墜落!?!」

昨日の昼頃、ミスティックルーインの上空に浮遊していた  
エンジェルアイランドが、  
再び地上へ落下した事が分かった。原因は不明だが、落  
下の際に被害者は出ていない模様。

エンジェルアイランドとは、ミスティックルーインの中で  
も数千年前から大空に浮かんでいた、

伝説とも呼ばれている浮遊島である。その歴史は現在も  
不明ではあるが、



かつてはミスティックルーンとは地上で結ばれたと言う説がある。

以前はあの悪の天才科学者、Dr・エッグマンの襲来により地上へ滞在していたが、

我が英雄ソニック・ザ・ヘッジホッグの活躍により、大空へと上昇。しかし、

過去にも謎の生命体『カオス』と謎の組織『マローダー』に関する襲来により、

何度も地上に落下した事もあったが、この二件もソニックの活躍により、再び上空へと浮上。

しかし、今回は事件も発生していないにも関わらず、地上へ落下した。

これにて調査隊は原因を捜査するべく出動したい所だが、エンジェルアイランドの番人である、

ナックルズ・ザ・エキドゥナにより、進入を拒否された模様。更に彼とのインタビューも、

拒否された模様で、現在時点ではエンジェルアイランドの落下の原因は掴めていない。』

千雨「ステーションスクエアタイム…？　って事は、ここはステーションスクエアって言う場所なのか？」

茶々丸「そのようです。しかし、世界のどこにあるのかは不明ですが……………」

千雨「ステーションスクエアだけじゃなく、ミスティックルーンにエンジェルアイランド……………？」

それも一体どこの国の事なんだ？　それに浮遊島だって？　ハッ、バカな。

島なんて空に浮く訳ないだろ？　例のアニメ映画でもあるまいし……………」

茶々丸「しかし、新聞に堂々と掲載されているのですから、事実か

と……………」  
千雨「……………じゃあ、ここは幻想世界じゃないとしたら……………」  
は、何の世界なんだ……………」

…その時人込みの多い路上では、一人の少女が買い物袋を抱えながら歩いていた。

その少女はピンクの体にセミロングな髪、緑色の瞳、赤いワンピースドレスにヘッドバンドとブーツ、

そして白い手袋と金色の腕輪をしていた。だがその少女は人間ではなく、

あのソニックと同じハリネズミであった。彼女は買い物袋を抱えたまま、退屈そうな表情を浮かびながら、路上を歩いていた。

???「はあ……………退屈……………」

彼女がため息を吹くと、周囲を右から左まで見回り始めた。

???「あっち見ても……………こっち見ても……………どっちも同じ風景……………」

……………」  
しかし彼女はその後、ときめき始めた。

???「あの頃は楽しかったなあ……………あたしの愛しのソニックを追い掛けて、

毎日刺激的な大冒険……………ハチャメチャでありながらも、ドキドキワクワクの多い日々だったなあ……………」

しかし、現実に戻った彼女は、再びため息を吹いて、不機嫌そうに歩き続けた。

「????」はあ~~~~.....のにあいつつたら、またあたしを残して旅に出ちゃってさ.....

ああ、あ、何かこう...ドキドキワクワク、ハラハラしそうな出来事とか起こらないかなあ?」

例えば知らない世界から来た人とであったり、悪い奴をコテンパンに懲らしめたり、

新しい場所へ行ったり.....その時はきっとソニックと会ってラブラブモードになったりしてえ〜

「いやん、もう あたしったら恥ずかしい」

彼女は恥ずかしながら、身を揺らし始めた。

「????」.....ん?」

しかし、再び我を取り戻した少女は、道路の中央にある小さな公園で何かを発見した。

それはベンチに座りながら困っている千雨と、立ったまま彼女と話している茶々丸であった。

彼女は二人を見て、一瞬険しい表情に変わった。

「????」あそこにいるのは.....何かに困っている少女と.....何あれ? 耳? アンテナ?

.....もしかして.....エッグマンのロボット!? .....はあ~~~~ん.....

さてはあのメカオタク、女の子に化けたロボットを使ってか弱い少女を困らせようとしてんのね!?

とうとうその線に入ったわね、あのマッドサイエンティスト!! か弱い少女を痛み付けようとは.....

同じ女として許せない!! でもいい退屈凌ぎになるわ! 早速悪を懲らしめましょう!」

彼女は買ひ物袋を投げ捨て、どこから出て来たのか分からない大きなピコピコハンマーを取り出し、構え始めた。

…一方、少女の行動に気付いていない千雨と茶々丸は、今後の事を話し合っていた。

千雨「とりあえず、どうするか……さすがに私達の金では何も買えそうにもないし……」

どこに行けばいいのかも分かりやしな……」

茶々丸「しかし、ここで長居する訳にも行けません。こちらが行動しなければ何も始まりません。」

お金の事はともかく、まずは市民に聞き込みをした方がいいでしょう。」

きつと私達を親切に助けてくれる人がいるかもしれませ……」

千雨「親切につて、何言つてんだよ。そんなお人好しなんか世の中腐るほどいる訳が……」

???「とりゃあああああああ!!!」

千雨・茶々丸「!?!」

突然茶々丸の背後から、ハンマーを上げながら飛び掛つて来た少女に気付いた二人は、  
勢いで彼女の方へ振り向いた。

茶々丸「千雨さん、危ないッ!」

千雨「うわあッ!?!」

茶々丸は千雨を抱き上げながら、間一髪に地面に叩き込む少女のハンマー攻撃から回避した。

千雨「な、な、何だいきなり!?!」

その後、少女はハンマーを茶々丸に指しながら、凜々しそうにこう言った。

「???」ちよつとそこのおんた!! か弱い乙女を平気に困らせようとは、いい度胸してるわね!?

同じ乙女として許さないわよ!!

茶々丸「は? な、何の事で……?」

千雨「はあ……? 何言ってるんだあいつは……って言うか、何なんだあいつは!？」

茶々丸「分かりません。少なくとも人間ではなさそうですし、着ぐるみでもなさそうです……。」

「???」乙女を痛み付ける愚かなエッグマンロボット…このあたしが成敗してくれる!!

覚悟おおおおお!!!

そして彼女はハンマーを構えながら、茶々丸に向かって駆け出し始めた。

茶々丸「えっ、ちよ、ちよつと待つ……。」

そんな彼女は身動きをしないまま、襲い掛かる少女に対して戸惑い始めた。

千雨「ちよつと待ったああああ!!!

突然襲い掛かる少女と戸惑う茶々丸の間に千雨が飛び出し、二人の行動を阻止した。

その後彼女は非常に怒った表情で、ハリネズミ少女の方へ振り向き、怒鳴り掛けた。

千雨「ちよつとあんた、いきなり何しやがんだ!? 突然背後から襲い掛かって来やがってえ!!!

「???」え、何って…助けに来たに決まってるでしょ!?! あの口

ポット、

貴女を困らせたじゃないの！」

千雨「はあ！？ 何言ってるんだ、あんたは！？ 確かにこいつは口ポットだが、少なくとも私の友達だ！」

ただ単に話し合っただけだろうか！」

彼女は後ろにいる茶々丸に親指で指しながら、少女に怒鳴り掛けている。

そしてそれを知った少女は、持ち上げていたピコピコハンマーを半分まで下ろし、呆然としていた。

????「えっ……………？」

…その後、ハリネズミ少女の案内により、三人はファーストフード店『McNoshitas<sup>ス</sup>』にいた。

そこで少女はお詫びと言う意味で、千雨にハンバーガーセットを奢らせた。

そして三人はテーブルの前に座り、話し合い始めた。

????「アハハハハ…ごめんねえ〜！ あたしったら、飛んだ勘違いしちゃったみたい〜い」

彼女は苦笑いをしながら手に持ったコーラを飲んでいたが、逆に千雨は腕を組みながら、

そんな少女に対してまだ怒っていた。

千雨「勘違いしちゃったみたい〜い 『じゃねえだろ、ったく…！ 大体人様の後ろから襲い掛かるなんて、

非常識だろうが！」

????「いやあ〜…相手を倒す事しか考えてなかったから、つい先

の事を考えずに行動しちゃって……。」「  
言い訳に過ぎなかったものの、彼女は茶々丸の方へ振り向いた。

???「ホントにごめんねえ。あたし、貴女の事をエッグマンの  
ロボットかと思ったから、つい……。」「

茶々丸「いえ、気にしないでください。私は大丈夫ですから。」  
彼女は軽く笑みを浮かびながら頭を振った。

???「ところで、ホントに何もいらなくてよかったの？ せっか  
くこつちがお詫びとして、

何か奢ってやるうと思ったんだけど……。せめてフライド  
ポテトとか食べたらどう?」

茶々丸「いや、私は……。」「

彼女は再び頭を振りながらそう言うが、代わりにコーラを飲んでい  
る千雨が返答した。

千雨「無理だよ。茶々丸さんはロボットだから、こつ言う物は食  
べないんだよ。」

???「あつ、そつか! 食べ物じゃなくて、機械オイルの方がよ  
かったのね? ごめえくん!

あたしそう言うのあんまり買わないから……。」「  
茶々丸「いや、別にそれも飲まないんですが……。」「

???「あつ、そつだ。大事な事を忘れてた……。改めて自己紹  
介するね! 初めまして、

あたしの名前は『エミー・ローズ』! こつ、ステーション  
スクエアに住むハリネズミよ!

よろしくね!」

千雨(ハリネズミ!? どう見てもハリネズミには見えないぞ!?)  
彼女は内心そう思ったが、とりあえず彼女も自己紹介しながら、軽  
くお辞儀をした。

千雨「え、えつと…長谷川千雨です。よろしく……。」「

茶々丸「絡繰茶々丸です。よろしくお願いします。」  
エミー「千雨と茶々丸ね？ 変わった名前だけど…とりあえずよろしくね！」

茶々丸「あの、聞いてなんでしようが……貴女が先程私に対して『エッグマンのロボット』と言っていましたか、

その『エッグマン』とは一体何なんでしょうか？」

エミー「ああ、エッグマンね……彼はこの世界を自分の物にしよ  
うと企んでる、世界一悪い天才科学者の事よ！」

何でも周りに迷惑を掛ける事しか考えてなくて、自分で作  
ったロボットを使って、人を襲ったり、

建物を壊したり、色んな悪さをしているのよ！ とにかく  
しつこくて懲りないオッサンなのよ！

ホント、メカオタクって最悪う〜って感じい〜！」

茶々丸「ロボットを使って悪さをする……だから私をそのロボッ  
トだと思ったのですね……。」

千雨「しかし世界制服を企む悪の天才科学者だあ？ バカな……  
そんな漫画や映画、

寧ろゲームに出て来るような奴なんて、そう簡単にいる訳な  
いだろ？ 超や葉加瀬とかは別だろうが……。」

エミー「何言ってるの？ エッグマンはもう世界的に噂されている  
大悪党なのよ？」

奴を知らない人間なんて、誰一人もいないはずよ？」

千雨「そんな事言われても……私達はこの世界の人間じゃないか  
ら、知る訳ないだろ？」

彼女は頭を掻きながらそう言うが、逆にエミーはその言葉に対して  
啞然としていた。

エミー「えっ？ この世界の人間じゃないって……どう言う意味  
？」



茶々丸「ええ、その事なんですけど、実は……………」  
彼女は全ての出来事をエミーに説明し始め、それを終えた後、エミーはコーラを飲みながらこう言った。

エミー「ふう〜〜ん……………貴女達はその麻帆良学園って言う学校から来たんだ……………」

千雨「そうなんだが…聞いた事はあるか？」

エミー「ううん、全然ッ！名前すら初めて聞くわ。って言うか、あたし学校とかそう言う所には通った事ないし、

学校の事に関しては余り知らないからね。まあ、ぶつちやけて言うつと、

あたし難しい事は考えたくない方だから、そこまで何も詳しくくないけど。自慢じゃないけど。」

彼女がそう答えると、千雨は思わず啞然としていた。

千雨（な、何いっ！？こいつ、学校に通った事がないだとお！？ちよつと待て……………）

それって私以上に不登校してるって言う意味か！？しかも理由もなしで！？こ、これはどう言う事だ！？）

彼女の言うには、千雨は自称『帰宅部』で、元々人との付き合いが悪過ぎる彼女は、

理由（または言い訳）付けて早退すると言う主義を持っていた。

そのため、寮に引き籠もりながら、ネットアイドル『ちゅ』に変身して、自分のコスプレ写真をネット上に投稿したり、愚痴を掲示板に書き込んだりなど、自由な事をしていた。だがネギの訪問により、それを改善するために毎日登校するようになったと言う。

しかし、そんな彼女は学校経歴の全くないエミーに対し、非常に愕然としていた様子。

茶々丸「と言う事は、ここは私達の世界ではなく、魔法によって生み出された幻想世界と言う事でしょうか？」

エミー「魔法？」

千雨「うわっ！？ バカッ！！ それを言っちゃダメだろうが！！」  
彼女は慌てながら茶々丸の口を塞いだが、逆にエミーは何とも思っていないようだ。

エミー「それはないわよ！ 確かにこの世界には魔法はあるけど、それによって生み出されたなんて、

有り得ないって！」

彼女は軽く笑いながらそう言うが、逆に千雨と茶々丸はその返答に對して啞然としていた。

千雨「えっ！？ ちょ、ちょっと待て！ この世界に魔法があるのか！？」

エミー「もちろん！ まあ、ここには滅多にないけど、キノコワールド大陸の方なら山ほどあるわ！

ここは主に科学を中心に行っているから、魔法は余りないけど、それを研究している人とかいるからね。」

千雨「マジかよ……………」

茶々丸「しかし、魔法は禁断的な物ではないんですか？ 私達の世界では、

それを世間に知らせるのは非常にタブーとされていますが……………」

エミー「それもないね！ 魔法は人によって自由に使われてるのよ？ 作物を育てるために雨を降らしたり、

怪我人を回復させたり、厄介なモンスターと戦ったり、色々使われてるのよ？ それがタブーだなんて、

初耳だわ！」

千雨「じゃあ、この世界では魔法が常識なのか……………」

茶々丸「しかも幻想世界でもないと言うと、私達は明らかに違う世界にいるとしか考えられませんね。」

千雨「でも、そうだと行ってここは一体どこなんだ…？ 何で私達はこの世界にいるのか、

さっぱり分かんねえ…。

彼女は頭を抱えながら、困難し始めた。

エミー「うう〜ん…そうねえ…こう言う時はティルスに聞いてみるしかないね。」

彼女はポケットから携帯電話を取り出しながらそう言った。

茶々丸「ティルス？」

エミー「うん、あたしの友達！ だけどティルスはすごいんだよ！ 何がすごいのかよく分かんないけど、

とにかく頭がすごいいい！ 色んなメカを開発したり、何かあたしより難しい事を言ったり、

色んな事が出来るのよ！ まっ、あのメカオタクよりマシエッグマンの方よ。」

千雨（何か葉加瀬に似ているな、そう聞くと…？）  
彼女は内心にそう思った。

エミー「とりあえず、ちょっと待ってね！ 今ティルスの家の方に電話してみるから！」

彼女はそう言いながら、ティルスの工場の電話番号を携帯電話に入力した。受信機からは発信音が聞こえるが、

何回鳴っても返事が出て来そうもなかった。しかし、突然発信音が消え、そこからティルスの声の流れて来た。

ティルス「はい、こちらティルスです！ 真に申し訳ございませんが、ただいま留守にしております。」

ご希望のある方は…。

流れて来たのはティルスの声が録音されていた留守番電話であった。エミー「あれ？ いないの？ もう、一体どこに行ったのかしら…」

……。」

彼女は受信を切りながらそう言った。

千雨「そのテイルスとか言う奴の携帯はどうなんだ？」

エミー「持ってないわよ。似たような奴なら持ってるけど、余りにもチンプンカンブンな奴だから、

そう言う物が苦手なあたしには持ってないのよ。」

茶々丸「では、直接そのテイルスと言う方の家まで行ってみるしかないですね。」

エミー「そうねえ…それしか方法が……。」

チユドオオオオオオオオン！！！！

その時、外から何かが大爆発した音が聞こえ、それに気付いた三人は窓の方へ振り向いた。

すると多くの人達が何かから逃げるかのように、大騒ぎになっていた。

千雨「な、何だ今のは！？」

茶々丸「どこかからか爆発音が……。」

エミー「まさか、エッグマンの仕業！？ こっしちやいられない！！！」

彼女がそう言った後、急に立ち上がった。

千雨「えっ、ちょ、ちよつと待てよ！ 一体何を……！？」

エミー「あたし、ちよつと外へ出て様子を見に行つて来る！ エッグマンだったら懲らしめに行かないとね！

そのため危険でもあるから、二人はここに残って身を防いでちょうだい！ じゃっ、

終わるまでまた後で！！」

そして彼女はピコピコハンマーを手に、そのまま店を飛び出して行った。

千雨「あ、おい！ ちよつと待てて！！」

彼女はそんなエミーを呼び止めようとするが、既に遅かった。

茶々丸「……………千雨さん、私達も行きましょう！」

千雨「えっ！？ 行くって、ここに残れってさっきあいつが……………！！！」

茶々丸「エミーさん一人だけでは危険です！ 私達も加勢に行きましよう！」

千雨「加勢って……………って言うか、私はこう言うのに関わりたくは……………！！！」

茶々丸「いいから、行きましょう！！！」

千雨「って、お、おい！？」

茶々丸は嫌がる千雨の手を握り、引っ張り上げながら、二人はエミーを追って店を飛び出して行った。

第15話 E・G・G・M・A・N・

………ステーションスクエアの都心にて、一体の巨大なサソリ型のメカと、

その周辺にいる無数の赤くて胴体の幅が大きい人型ロボットと、同じ形をした赤と緑に分けられた、

空中に飛行しているロボット達が、街中に大暴れしていた。その巨大な足や鋏、更に尻尾で車や建物を破壊し、

それを目前とした多くの市民達はパニック状態に叫びながら、逃げ回っていた。そしてそのメカに乗っていたのは、

ある一人の男であった。その男は黒くて丸いサングラス、頭に黒いゴーグル、長くて茶色い髭、

赤い上着に黒いズボンなのかブーツなのか分からない履物をしていた。彼は高飛車のように笑いながら、

街全体を荒らし捲くっていた。

???「ホオッッホッホッホッ!! 叫べ喚け逃げ回れえ!!」

貴様ら愚民共、

このワシが完全に引き下がったと思ったら大間違いじゃあ!!  
ワシはこう見えても、

まだこの街を破壊して、我が理想郷『エッグマンランド』を建設させる夢を捨てとらんわい!!

今日と言う今日こそこの街を徹底的に破壊し、夢と野望のテーマパークを建設するのじゃ!!

ホオッッッホッホッホッ………!!」

バコオン!!!

その時突然何かが男の顔面に投げ付けられた。

????「フンガアツ!?!」

その物体が男に命中した後、そのまま回転しながら、ある人物の手元まで戻って行った。

その人物はエミーで、彼女が投げ付けたのは、自身の自慢のピコピコハンマーである。

それに気付いた男は、痛みを感じる鼻を手で押さえながら、彼女の方へ睨み付いた。

エミー「やっぱりあなたの作業ね、『エッグマン』!?!」

彼女はハンマーを彼に指しながらそう言った。

エッグマン「んぬうつ!?!? 貴様はっ…エミー・ローズ!?! おのれえ、

またもやワシの邪魔をしに来やがったのか、この小娘めえっ!?!」

エミー「あなたが悪さをする以上、何度も邪魔してあげるわ!?! この正義のプリティガール、

エミー・ローズ様がいる限り、悪事なんか徹底的に成敗してくれる!?!」

エッグマン「なあゝにいゝ!?!? このワシに向かって偉そうな戯言を吐きよってえ!?!」

まあいい…あの憎きハリネズミがないのなら貴様だけで十分じゃ!

このワシが貴様を徹底的に始末して………!?!」

バシユウウウウウン!?!?!

その時、突然どこかからビームが放たれ、それをエッグマンのメカに命中した。

エッグマン「ぬおっ!? な、何じゃ今のは!?!」

エミー「えっ!?!」

二人はそのビームが放たれた方向へ振り向くと、そこには茶々丸と、彼女の手に掴まれた状態で息切れになっている千雨がいた。

茶々丸「悪いが、エミーさんに指一本は触らせまい!?!」

千雨(……………い…今……………目からビーム…出なかつたか……………!?!?)

エミー「茶々丸!?! 千雨!?!」

エッグマン「な、何じゃ貴様らは!?! って言うか今の攻撃はどこから…!?!」

彼が少々戸惑っている間に、エミーは二人の少女の所まで駆け付けた。

エミー「ちょっと、何で貴女達までこんな所に…!?!」

茶々丸「私達もエミーさんのお手伝いするために加勢しに来ました。」

エミー「加勢って、何言ってるのよ!?! これは危険な事なのよ!?!」

貴女達まで一緒に戦わせる訳には……………!?!」

千雨「言っとくが、私は別に参加したいともこれっぽちも思っちゃいないからな!」

このバカが勝手に……………!?!」

エッグマン「ええ〜い!!! こんな時に無駄話などしとる場合かあ

!!! その小娘があ!!!

よくもこのワシに攻撃しよつたなあ!?! 一体何の攻撃だったのかは知らんが、

その代償は死ぬほど非常に巨大じゃぞあ!?!」

茶々丸「エミーさん、奴は一体…?」



エミー「ああ、あいつ？ あいつこそがさっき話してた、いい年したメカオタクよ！」

エッグマン「誰がメカオタクじゃあ！？ ワシこそ、この世で並べる者のない、

IQ300を超える頭脳を持つ超天才科学者、ドクター『Dr. エッグマン』様じゃあ！」

彼は片方の足をメカに乗せ、カッコ付けて威張りながら自己紹介した。

茶々丸「あいつがエッグマンですか……………」

千雨（IQ300！？ 何だその尋常でもないバカ高え知能はあ！？ 私でさえもそんな知能ねえぞ！？）

エミー「それより、あんたここでまた何してんのよ！？」

エッグマン「決まってるわい！ ワシは自らの理想都市エッグマンランドを建設させるために、

このステーションスクエアを破壊しに来たんじゃよ！」

エミー「何ですってえ！？ あんたまだそんなバカバカしくてつまらない物のためにこの街を狙ってるの！？」

って言うかあんた、\*別の場所でもう既に出てたんじゃなかったの！？」

エッグマン「あれはソニックと『ダークガイア』のせいで取り壊されたんじゃ！！

あのハリネズミが入園した時、殆どの施設や機械が奴のせいで壊されてもうた！

とは言っても、後で修復出来る程度の破損じゃったから別によかったんじゃが、

全体的はワシに反抗したダークガイアが叩き潰しよったんじゃ！！

おかげで記念すべきエッグマンランド第1号がそいつ

らのせいで壊滅されたわい!!」

エミー「あゝら、それは聞いてお気の毒ねえ〜!」

彼女はピコピコハンマーを地面に立たせ、高飛車のような体勢で振り舞いながらそう言った。

\*『ソニックワールドアドベンチャー』参照。

エッグマン「ええい、黙れ!!　じゃがワシはこうしてエッグマンランドの再建設のために、

かつて狙っていたこのステーションスクエアにやって来たのじゃ!

以前『カオス』が暴走したせいでしばらくここを後にしたが、今度こそ実現させてくれる!!

我が理想となる、夢と野望に満ちた大都市、エッグマンランドを完成させるために、

このステーションスクエアを完全に破壊させてくれるぞおー!!」

エミー「そんな事はあたしがさせないわよ!!」

彼女は再びピコピコハンマーをエッグマンに向けながらそう言った。エッグマン「フンツ!!　貴様には何ができる!?　ソニックや他の仲間のいない今、

貴様は所詮無力に過ぎんわい!　ワシに歯向かい、そしてワシの野望を阻止しようとする貴様には、

こいつらに裁かれるがよいわ!!　行け、『エッグポーン』と『フラッパー』軍団よ!!

目の前にいる敵を叩きのめしてやれい!!」

彼がそう指示すると、エッグポーンとフラッパー達が全員一斉にエミー、茶々丸と千雨に襲い掛かり始めた。

エミー「おお、戦<sup>や</sup>るつもりね!?　言つとくけど、女だからと言っ

てナメンじゃないわよ!!

茶々丸、千雨、ちょっと下がってちょうだい!　ここはあたしが片付けるわ!!」

彼女はピコピコハンマーを構えながら、背後にいる二人の少女にそう言った。

茶々丸「えっ!?　でも、それではエミーさんは……………!?」

エミー「大丈夫!　こう言う雑魚は何度も粗大ゴミに出し捲くつてから、そこまで心配する必要はないわよ!

特に貴女達は別の世界から来た大切なお客様だから、傷一つ付けさせる訳には行かないわ!

だから、ここはあたしに任せなさい!」

彼女が二人の少女にウインクをした後、襲い掛かる敵達の方へ振り向いた。

エミー「さあ、一気に片付けさせてもらうわよ!!　バラバラに碎けなさい!!　『ピンキータイフーン』!!」

ビュオオオオオオオオオオオオ!!

彼女がハンマーを横に持ち、勢いよく一回転すると、そこから竜巻を起こし、

前方にいた複数のエッグポーンやフラツパー達を吹き飛ばした。

しかもそれを目前にした二人の少女は、

思わず目を大きく開きながら驚いていた。

茶々丸・千雨「!?!」

しかしまだ残されていた敵達は、再びエミーに襲い掛けて来た。

エミー「まだやる気!?　しつこいガラクタは嫌いなんだけどお!

?　『オトメトルネード』!!!!」

ドガドガドガドガドガアアアアン!!!

彼女は再びハンマーを持ちながら回転するが、今度は竜巻を起こさない普通の回転攻撃を仕掛け、

周囲にいた複数の敵達を叩き飛ばした。もちろんこれを見ていた二人の少女も、吃驚仰天であった。

千雨「な、何だあいつは!? あんなでかくしたオモチヤのハンマーで敵を次々と薙ぎ倒してるぞお!?!」

茶々丸「あのピコピコハンマー、見た目より頑丈ですね。特に彼女自身にも、相当なパワーも持っています。

もはやエミーさん、只者ではありませんね。でも……いくら彼女でも限界はあると思いますが……。」

千雨「えっ……ちょ……まさか……!?!」

エミー「ほらほらあ!!! どうしたのお!? あんた達の力、そんな物なのお!?!」

「こんなんじゃ退屈凌ぎにはならない……!?!」

彼女はそう言っている間に、上空の背後から複数のフラッパ達襲い掛かり始めた。

それに気付いた彼女は振り向くが、手遅れであった。

エミー「!?! し、しまった……!?!」

バゴオオオオオオオオオン!!!

しかし、突然どこかからワイヤーの付いた腕が放たれ、襲撃して来るフラッパ達を一撃で叩き飛ばした。

そしてエミーがその腕が放たれた方向へ振り向くと、その腕は茶々丸の物だと気付く。その後、

ワイヤーの付いた腕はそのまま茶々丸の所まで戻り、それを見たエミーやエッグマンは思わず驚いていた。

エッグマン「な、何じゃ今のは!?! 腕が伸びたあ!?!」

エミー「ちゃ、茶々丸!?」

茶々丸「すみませんが、いくら貴女に任せる事にしても、私達はこので黙って見る訳には行きません。」

供に戦います!」

千雨「ええっ!?!」

それを横から聞いた千雨は、思わず大声を出した。

エミー「ちょ、な、何言ってるのよ!? さっきも言ったけど、これは……………!!」

茶々丸「分かっています! でも先程のようにエミーさんは危うく襲われる所でした!

貴女が私達を守りたい気持ちは分かります。だから、私達も貴女をお守りしたいのです!

ですから、ここは私達にも戦わせてください!!」

エミー「茶々丸……………」

千雨「つて、ちょっと待て!! 私達つて、何でそこで私まで含まれてんだ!?!」

それにいつまで私の手を握るつもりだ!? 言つとくが、私も一緒に戦うなど一言も言つてねえぞ!?!

関わりたくもないのに勝手な事ほざいてんじゃねえよ!!」

そう、実は茶々丸は、ここまで来てからずっと千雨の手を握っていたのだ。しかし、

茶々丸自身はそれに自覚していない様子。

茶々丸「しかし千雨さん、一度下りた船はもう戻りませんよ?」

千雨「てめえが勝手に私をここまで連れて来たんだろが、この口ポケットがあ!!!!」

エッグマン「ええい、貴様ら何怯んどるんじゃ!? モタモタしてないでとつとと掛かれい!!」

彼は一時止まっていたエッグポンとフラッパー軍団に指示すると、

敵達は再び三人に襲い掛かり始めた。

千雨「わわっ、また来やがったぞお!!」

茶々丸「エミーさん、少し下がってください!!」

エミー「えっ!?!」

茶々丸「消え失せるお!!!」

バシユウウウウウウウウウウウウウウウ!!!

彼女は目からビームを放ち、前方にいる全ての敵を一掃した。それを  
を見たエッグマンや、  
彼女の側にいた千雨やエミーも、目を大きく開きながら唖然として  
いた。

エッグマン「な、何じゃ!?! 目からビームが!!?! もしか、さ  
つきの攻撃はあの小娘から………って!?!

あの耳に変な物を付けた小娘、まさかロボットなのか  
あ!?!」

エミー「す、すごい………敵を一瞬にして破壊した………。」  
茶々丸「次は貴様の番だ、Dr. エッグマン!! 覚悟するがいい  
!!!」

千雨「だから、いい加減に手を離せてえ!!」  
彼女は必死に自分の手を握り締める茶々丸の手から離れようとする  
が、  
握力が強過ぎてなかなか離れそうにもなかった。

エッグマン「え、ええい、よくも我が軍隊を軽々と破壊しよつた  
なあ!?! 特に貴様、

相当の技術を組み込まれるようじゃな!?!

さすがに貴様がロボットだったとは最初から気付かん  
かったが、だからと言って手加減はせんぞお!!

どこのどいつが貴様のような高技術のあるロボットを作ったか知らんが、

この世でワシに並び付けようとする科学者は誰であろうとも決して許さん！！

貴様のようなガラクタなど、このワシの最強戦闘マシン、

『エッグスコープィオン』で叩き潰してくれるわあ！！  
食らえい！！」

彼があるボタンを押すと、エッグスコープィオンの両銃が大きく開き、そこから大きな火炎を噴出した。

千雨「わあああ！！ あ、危ねええええ！！！」

茶々丸「千雨さん、エミーさん、捕まってください！！！」

エミー「きゃっ！！！」

茶々丸が千雨とエミーを両腕で抱え、素早く火炎から回避した。

茶々丸「次はこれでも食らえ！！！」

彼女は再び目からビームを放つが、メカに命中したものの、そのまま弾き飛ばされた。

茶々丸「なっ…！？」

エッグマン「ホォッ ホッ ホッ！！ バカめえ！！ いくら破壊力抜群の貴様のビームなど、

ワシの『エッグスコープィオン』には通用せんわ！！

じゃがそんな貴様には特別に一つ教えてやろう！

ビームとはなあ……………こう言う物じゃよあ！！！」

バシユウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！！！！

エッグマンがあるボタンを押すと、尻尾の先から大きなビームを放った。

茶々丸「あ、危ないっ！！！」

千雨「うわっ!?!」

エミー「きゃあっ!?!」

茶々丸は千雨を捕まりながらその場から離れ、その同時にエミーは別方向でその場から離れた。

だがビームが地面に激突した時、その衝撃で三人を吹き飛ばした。

しかしエミーが地面に倒れた瞬間、

手に持っていたピコピコハンマーを誤って手放してしまった。

エミー「あっ、ハンマーがっ!?!」

エッグマン「おっと、貴様はそこにいろっ!?!」

彼がそう言った後、メカの鉄を思いつきり振り出し、周りであった廃車を吹き飛ばした。そしてその廃車は、

エミーの周辺に落下し、更に彼女の真上から蓋を閉じるかのように廃車が落下して来た。そのため、

エミーは廃車に囲まれた状態に閉じ込まれてしまった。

茶々丸「エミーさん!?!」

彼女はエミーを助けるために駆け付けようとするが、エッグマンはそんな彼女の前に割り込んで来た。

エッグマン「おっと、そう簡単に助けさせはせんぞお!?! 貴様の相手はこのワシじゃ!?!」

小娘を助けたくば、このワシを倒してみる事じゃな!?!」

エミー「茶々丸!?! 千雨!?! あたしの事はいいから、早くここから逃げてっ!?!」

茶々丸・千雨「くっ……!?!」

二人は最悪な状況の前に、戸惑いを感じながら歯を食い縛った。

茶々丸「…千雨さん……ここはどうします?」

千雨「くっ………フッ…本当は言われた通りにこっからトンスラしたいが、やっぱりどう考えてみても、



放って置く訳には行かねえな！！　ここはしょうがねえ……  
… 本当は嫌だが、私も戦うぞ！！

そうとしたら、早速魔法だ！！」

茶々丸「はい！！」

彼女は頷きながらそう言った。

茶々丸・千雨「『<sup>アテアット</sup>来れ』！！」

二人は呪文を唱え、『ネオ・パクティオカード』を発動させた。  
発動中に二人の体が光り始め、

エミーとエッグマンはその眩しい閃光に対し、目を手で塞いだ。

エッグマン「ぬおっ！？　な、何じゃこの光は！？」

エミー「な、何なのこれ！？　眩し過ぎて見えない……！！」

そして光が収まった後、千雨は制服姿から違う姿に変身した。そのため彼女の頭に黒い猫耳、

青いセーラー服にピンクの上着、更にピンクと黒いストライプのニ  
ーソックスに茶色の長靴の姿をしていた。

この姿によると、彼女は『アーマーカード』の姿になっていた。

そしてそんな姿を目の当たりにしたエッグマンとエミーは、啞然と  
していた。

エミー「えっ！？　ち、千雨！？」

エッグマン「な、何じゃあれは！？　姿が変わりよった！？」

千雨「この姿は…『アーマーカード』か！　へッ、ちょうどいい！

これでチートとか色々やりたい放題にしてやる！！

茶々丸さんはどの姿に……！！？」

彼女が茶々丸の方へ振り向くと、茶々丸は制服姿から違う姿に変身  
していた。しかし身長が一瞬に小さくなり、

キリンの着ぐるみを着ていた。この姿によると、彼女は『スカカ  
ード』の姿になっていた。

そんな彼女の何とも言えない姿を見た千雨は、思わずショックに大声を出した。

千雨「つて、『スカカード』かよおっ!？」

茶々丸「……………メエ……………」

千雨「しかも鳴き声違えええええ!!!」

エッグマン「うぬぬう……………さっきの光は一体何で、何のつもりで姿を変えたのかは知らんが、

ただそれだけではこのワシを怯む事すら出来んぞ!!!」

千雨「フンツ、それはどうかな!? 茶々丸さん、戦える状況じゃないあんたは私に捕まれ!」

茶々丸「はい……………」

彼女が頷いた後、千雨の肩まで登った。その間に千雨は手に持っていたノートパソコンを開き、

それに付いていたレンズを『エッグスコピーオン』の方へ向かせた。千雨「さあ……………まずはこいつの中身を調べさせてもらおうか!!!

『データハッカー  
ちう特製機能操作光線』!!!」

彼女がパソコンのボタンを押すと、レンズから光線を放ち、メカに命中した。

エッグマン「ぬお!?! な、何じゃこの光線は!?!」

茶々丸「ちさめさん、いまのは……………」

千雨「敵の機械のデータを自在にコントロールするためのハッキング光線を放ったのさ!

これならあのメカをこっちが操作する事が出来る! そのためには、

まずその内臓データに刻まれたコードを書き換えるだけで……………!?!」

しかし、彼女はパソコン画面に映るメカのデータ内容を確認すると、そのデータには見た事もない記号に書き込まれていた。それを見

た千雨は、思わず啞然としていた。

千雨「な、何だこの変なコードは！？ めちゃくちゃになってるぞお！？」

茶々丸「たしかに、これはみたこともないコードですね。」

現在『スカカード』姿になっているためか、彼女はポーカーフェイスのままそう言った。

千雨「茶々丸さん、これ何なのか分かるか！？」

茶々丸「いえ、さきほどおっしゃったように、みたこともないコードです。なので、かいどくふのうです。」

千雨「い、一体何なんだ、この訳の分からんデータは……………！？  
余りにもコードが全部複雑過ぎて、

弄るところか読む事すらも出来ねえ……………！！ これは下手に間違った所を弄ったら、

逆にこつちがやられちまうかも……………。」

彼女は困難に陥りながらも、エッグマンの方へ見上げた。

千雨「くっ……………これはこの世界だけしか読み取れない物なのか…

……………

それともバカみてえに頭が良過ぎるあのオッサンだけしか読めない物なのか……………

これではハッキングしても意味がない！」

エッグマン「何じゃその眼鏡の責様あ！？ 変な光線を放つてま  
で何もせんのかあ！？

ならこつちから先に行くぞお！！ 食らえい！！」

千雨「うわっ！！」

エッグマンがスイッチを押すと、尻尾の先を千雨の方へ向かって攻撃した。

だが千雨は茶々丸を肩に乗せたまま、直ぐその場から離れ、攻撃から回避した。

千雨「くっ……………ダメだ！ いくら『アーマーカード』の姿になったと

しても、

相手のデータを読み取れないんじゃない意味がない!! ーここは一旦元の姿に戻って、

もう一度カードを引くしかない!! 茶々丸さん!!」

茶々丸「それしかありませんね。わかりました。」

茶々丸・千雨「<sup>アヘアット</sup>『去れ』!!」

二人は呪文を唱えると、体が再び光り出し、元の制服姿に戻った。もちろん茶々丸も、

元の大きい姿に戻った。

エッグマン「ん!? 何い!?!」

エミー「あつ、元の姿に戻った!!」

千雨「よし、元に戻った! 今度は出来れば『コスプレカード』を引かないと...!」

茶々丸「でも体力には気を付けた方がいいですよ。

『ネオ・パクティオカード』は使用する度に体力を消耗

してしまいますから。」

千雨「ああ、分かっている! とにかくもう一度行くぞ!」

茶々丸「はい!」

彼女が頷きながらそう答えた。

茶々丸・千雨「<sup>アヘアット</sup>『来れ』!!」

二人は呪文を唱え、『ネオ・パクティオカード』を発動させた。

発動中に二人の体が光り始め、

エミーとエッグマンはその眩しい閃光に対し、目を手で塞いだ。

エッグマン「ぬおっ!? またかあ!?!」

エミー「一体何なの、これえ!?!」

そして光が収まった後、千雨は制服姿から違う姿に変身した。そのため彼女の髪がピンク色に染まり、

眼鏡もかけておらず、頭に何らかの機械を飾り、紺色の水着に長靴、そして黒いコードをぶら下げた姿になった。

この姿によると、彼女は『コスプレカード』の姿、またはネットアイドルの姿である『ちづ』になっていた。

エッグマン「何!？」

エミー「また姿を変えたわ!？」

千雨「やつほ、マジカル ラジカルなバーチャル ガール、スーパーアイドルのちづ参上だぴょん」

エッグマン・エミー「へ……?」

ネットアイドルちづになった千雨は可愛らしくポーズと台詞を決め、それに対してエッグマンとエミーは唾然としていた。もちろんその後、千雨は我を戻し、自分を見詰め直した。

千雨「うおっ!? これってもしかして、『コスプレカード』か!? よしっ、

これなら『アーマーカード』より何とかなりそうだ!! 茶々丸さんはどう……!？」

彼女が再び茶々丸の方へ振り向くと、茶々丸は何と再び『スカカード』の姿になっていた。

千雨「つて、また『スカカード』かよお!？」

茶々丸「……メエ……」

千雨「だから鳴き声違えええええ!!」

彼女は大声でそう言いながら、違う鳴き声を言う茶々丸に対しツッコミを入れた。

エッグマン「何じゃ、元に戻ったと思えばまた変身しよったのかあ!？」  
しかも今度は違う姿になった上に、

恥ずかしそうな言動を取りよって!! 今度は何するつもりじゃ!？」

千雨「恥ずかしそうで悪かったな!! だけど今度こそさつきみた

いいには行かないからな!!

あんたには取って置きの奴をお見舞いさせてもらうぞ!!」  
彼女が強気にそう言っている間に、茶々丸は再び千雨の肩に乗り掛かった。

茶々丸「こんどはなにをなさるんですか？」

千雨「『アーマーカード』では敵のデータを読み取る事が出来なかったが、今度は召還術で戦う！」

けど……………」

茶々丸「けど？」

千雨「……………実は情けない事に、まだ試した事がないんだ。」

この姿になると殆ど個人の事しかやってねえから……………」

そう、実は千雨は、『ネオ・パクテイオーカード』を自分のサイトに使用する事が多かったため、

『コスプレカード』になると必ずと言って写真撮影を行い、それをファン達のためにサイトに掲載していたのだ。その分、ま

ともな練習も行っていなかったらしく、

魔法に関しては多少ネギから教わったものの、殆ど試していなかったと言う。彼女はその事を思い出すと、少々不安を感じ始めていた。

千雨「…でも、やってみないと分かんねえからな!! 行くぞ!!」

彼女がそう言い出すと、地面から魔法陣のような光が現れた。

エッグマン「な、何じゃあの光は!？」

エミー「あれってもしかして……………魔法!？」

千雨「バーチャル・コンソール・シューマン・プログラズ 『アップロード 電腦精霊』 高跳びの兄弟、召還』!!!」

彼女が呪文を唱えると、頭に付いている機械から光が現れ、

そしてその光の中からドット絵で作られた二体の精霊が現れた。

その姿はどちらも体が小さく、髭を生やしていて、

帽子とオーバーオールをしていたが、一体は赤と茶色で、もう一体は白と緑と言った色を持っていた。

エッグマン「な、何じゃありゃ!?!」

エミー「ドット絵!?!」

茶々丸「…みためよわそうですね…?」

千雨「やってみるしかねえだろ!?! 行け、ジャンプマン・ブラザー『ジャンプマン・ブラザー』高跳びの兄弟』!?! あそこにいるオッサンを倒せ!?!」

彼女が指示を出すと、二体の精霊は独特の効果音と共にジャンプしながら、エッグマンの方へ向かって行った。

しかしその間にエミーは、その精霊を見てふところ思っていた。

エミー（…って言うか、あのドット絵…どう見てもあのマリオとルイージに似てるんだけど……………。）

そう、彼女の言う通り、その精霊の正体はファミコン時代のマリオとルイージのドット絵姿である。

パフパフパフパフ!!

そして二体の精霊は、メカの缺部分を独特な効果音と共にジャンプで踏み付けていた。

しかし、これでもダメージは受けておらず、エッグマンも啞然とした表情でそれを眺めていた。

ブルウツ ドウデツデエデデンドウツドウドウ

そしてエッグマンはスイッチを押し、缺でその二体の精霊を軽く突くと、独特な効果音と音楽と共に、

二体の精霊は正面に向きながら両手を挙げ、そのまま落ちて姿を消した。

千雨「あぁっ!! 精霊がつ!!」

茶々丸「…まけましたね…。」

皮肉になりながらも、茶々丸はそう言った。

千雨「ぐっ…………ま、まだまだこれからだ！！ 今度はこいつで行くぞー！！」

彼女がそう言うと、再び地面から魔法陣を作り出した。

千雨「バーチャル・コンソールフル・ボンバー『アップロード 電脳精霊』正義のロボット』、召還』！！！！」

彼女が呪文を唱えると、頭の機械から再び光が現れ、

そしてその光の中からドット絵で作られた一体の精霊が現れた。

その精霊はヘルメットを被っていて、

全身青と水色に染まっていた。 そう、その精霊の正体は、ファミ

コン時代の『ロックマン』のドット絵姿である。

エミー「今度は違うドット絵が出て来たわ！？」

千雨「今度は遠隔攻撃だ！！ 撃ち捲くれえ！！」

彼女がそう指示すると、精霊の腕はバスターに変形し、無数の黄色いエネルギー弾をメカに撃ち放った。

しかし殆どの攻撃は、命中したにもかかわらず、跳ね返された。

ティウンティウンティウンティウン…

そしてエッグマンがスイッチを押し、尻尾の先を軽く精霊に攻撃すると、独特の効果音と共に、

精霊は青い光の欠片となつて散った。

千雨「あああああ！！ またあああああ！？」

茶々丸「またしつぱいしましたね…。」

エッグマン「…貴様あゝゝ…………ふざけんなあああああああああ  
ああ！！！！！！」

とうとう怒り心頭になったエッグマンは、メカの鋏や尻尾を操作しながら、派手に暴れ始めた。

千雨「うわああああ！？」





聡美「しかしカジノの割にはすごい所でしたよ？ 何と人を玉にして遊べる巨大ピンボールや、

ポーカーとピンボールを合わせたゲームとかもありましたし、遊べませんでしたけどすごかったですよ!？」

真名「正に、凄まじい技術が進んでいる訳だ、この世界は……。」「腕を組み、冷静にしながらも、彼女は感心しながらそう言った。

ネギ「まあ…それはそうと…こつちも残念ながら、何も情報を得られませんでした。 ホテルやビーチの方では、

誰も見掛けなかつたみたいで……。」

テイルス「そつかあ……ここに来れば、何か得られると思ったんだけどな……。」

明日菜「何言ってるのよ！ これはあくまでも序章に過ぎないわよ！ まだ始まったばかりだし、

今度は別の場所に行って探してみようよ!」

ソニック「おつ？ へへッ、あんた意外といい事言うんじゃないわね？」

明日菜「なあくに、私はこれくらいの事でへこたれないタイプよ！ 彼女は威張りながらそう言った。

カモ「まあ、姐さんらしいっちゃ姐さんらしいな!」

ネギ「でも、アスナさんの言う通りですね。 テイルスさん、今度は違う場所に移動しましょう!」

テイルス「そうだね。もしかしたら、ダウンタウンの方で情報がまだあるかもしれないね。

となると、『スピードハイウェイ』付近にいる可能性もあるかも……。」

とりあえず、僕が案内するから、一緒に……!」

市民A「きゃあああああ!……!」

市民B「逃げるお……!……!」



怒りで大暴走するエッグマンは、メカの鋏と尻尾、更に鋏から放出する火炎や尻尾から放つビームで、次々の車や建物を破壊した。そんな無謀な茶々丸を抱えたままの千雨は、必死になりながらも逃げ回っていた。もはや次の攻撃を仕掛ける隙もなくなったのである。もちろん廃車の中に塞がったエミーも、ただ苦戦する千雨を見る事しか出来なかった。

エミー「千雨！！早くこっから逃げてえ！！」

千雨「い、言われなくても分かかって……うわっ！？」

ズガシャアアアアアアン！！！！

しかし、エッグマンは鋏でトラックを投げ飛ばし、千雨の真ん前に落下した。そのため、

道は完全に塞がってしまった、逃げ場を失った。

千雨「し、しまった！！」

エッグマン「ホオ……ッホッホッホオツ！！！！」

彼の高飛車的な笑い声を聞いた千雨は、接近して来るエッグマンの方へ振り向いた。

エッグマン「もうこれで逃げ場も失ったぞ、この小娘めえ！！これこそワシを完全に怒らせた天罰じゃあ！！」

そのまま大人しくしていれば貴様だけでも見逃せたと言うのに……あの戦いでワシを怒らせた以上、

情け完全無用じゃあ！！！！今から貴様を打ち消し、

この場を貴様の墓場にしてくれるわあ！！！！

覚悟せい、小娘え！！！！これが貴様の最後じゃあ！！

！！！！

逃げ場も完全に失った上に、接近して来る強敵に対し、千雨は茶々



ソニック「へッ、随分と派手にやってくれたんじゃないのお？ 街をめちゃくちゃにしたとは言え、

まさか女の子のケツまで追い回すとは……………

しばらく見ない内にすっかり立派な悪役になったんじゃないのお？」

エッグマン「おのれえ〜、またしてもよくもワシの邪魔をしようとな、我が永遠の宿敵！！

じゃが貴様だけではこのワシを止められるとも思っ  
とるのかあ！？」

ソニック「悪いけど、ここに来てんのは俺だけじゃないぜ？」

エッグマン「何…！？」

???「『サギタ・マギカ魔法の射手・ウチ・ルークス光の一矢』！！」

次の瞬間、どこからビームが放たれ、エッグマンのメカに命中した。

エッグマン「ぬあっ！？ 何じゃ！？」

茶々丸「いまのは…まほう…！？」

千雨「サギタ・マギカ魔法の射手！？ ま、まさか…！？」

全員ビームが放たれた方向へ振り向くと、そこには杖に乗りながら飛行しているネギと、

戦闘体勢に構えている仲間達がいた。 その間に『ネオ・パクティ

オカード』も発動していたため、

明日菜と聡美は『アーマーカード』、楓は『コスプレカード』の姿をしていた。

ちなみに聡美の『アーマーカード』姿は、袖を短く巻いた茶色の上着に赤い蝶ネクタイ、

そして黒い短パンと言った、まるで発明少年のような姿で、背後に

大きなロボアームズに、  
前方にそれを操作するコントローラーを背負っていた。

ネギ「千雨さん、茶々丸さん、助けに来ましたよ!!」

千雨「……………ネギ……………先生……………?」

聡美「茶々丸!! 大丈夫!？」

茶々丸「ネギせんせい、ハカセ!？」

ネギと仲間達の登場により、千雨と茶々丸は啞然としていた。

エッグマン「んぬう!? そこにいるのはテイルス、ナツクルズに  
ルージユ!! ……って言うか、

他の奴らは誰じゃ!？」

エミー「まさか……………千雨が言ってた友達って……………!？」

テイルス「やつぱりエッグマン、また悪さをしに来たね!？」  
ルージユ「相変わらず派手な事をしているわね? しつこいたら  
ありゃしないけど。」

明日菜「あれがみんなが言ってた患者のエッグマンね!？」

楓「とは言った物の、人間にしては随分と変わった姿形でござるな  
?」

ナツクルズ「今日と言う今日こそコテンパンのボロ雑巾にしてやる  
ぜっ!!」

戦闘に構えるネギ達に対し、エッグマンは多少戸惑いながらも、そ  
れでも高飛車な態度で振舞い出した。

エッグマン「…フ…フ…フ…フ…!! 貴様ら全員何が出来ると言っんじ  
や!？」

何か見知らぬ輩もおるようじゃが、そいつらまで加わ  
っただけでも、

このワシに歯向かえる事など百年……………!!」

明日菜「悪いけどくーふえ、行けえ!!」

楓「御免、真名!!」

その時、二人はエッグマンの上まで何かを投げ飛ばした。それは虎の着ぐるみを着た小型の少女と、

熊の着ぐるみを着た小型の少女である。そう、この二人の正体は、

『スカカード』姿の菲と真名であり、

それを見上げていたエッグマンは啞然としていた。

真名「とう!!」

菲「アチヨ!!」

エッグマン「な、何じゃ!? 小動物かあ!？」

しかし二人がそのままエッグマンの頭に着地すると、真名は彼の頭を噛み、

菲は彼の顔に乱れ引つ掻きを繰り返した。

菲「アア〜タタタタタア〜!!」

エッグマン「いぎゃああああああ!!??」

ネギ「皆さん、今です!!」

菲と真名の攻撃により身動きが出来なくなったエッグマン。それに応じてネギが指示を出した後、

明日菜は大剣で、楓は巨大手裏剣で、聡美はロボアームズで、ティルスは右腕に装着した赤いバスターで、

ナックルズはパンチで、そしてルージユはキックで、メカの足を全て破壊した。そのため、

機体はそのまま地面に落下し、その反動で菲と真名はその場から飛び離れた。

エッグマン「んぐお!? し、しまった!! レッグパーツが…!!」

エミー「やったあ!! これで身動きが出来なくなったわ!!」

彼女が喜びながらそう言うと、突然何か彼女の上を塞いでいた廃



車を叩き飛ばし、

それに気付いた彼女はそこから脱出出来た。そして彼女が振り向くと、

そこにはナツクルズとルージユが立っていて、どうやらナツクルズが彼女を救出させたらしい。

エミー「ナツクルズ！」

ナツクルズ「まったく、閉じ込まれる羽目になるくらいなら、戦いに顔すら出すなっつてんだ！」

エミー「ちよつと、それ助ける時に言う台詞う！？」

ルージユ「でも、彼には少しだけ一理はあるわねえ？ 愛用のハンマーを落としてしまうようじゃねえ〜。」

彼女はエミーのハンマーを振り回しながらそう言った。

エミー「何ですっ……………つて、何であんたがここにいんの！？」

ルージユ「休暇よ、休暇！！」

エッグマン「くそお〜！！ じゃがまだ終わつたらんぞお！！ ワシにはまだ武器が残つとるわい！！

このシザーアームズで貴様らを丸焼きにして……………！！

テイルス「そうはさせないよ！！ 『チュー2ボム』！！」

彼は二体の青い耳を持った二足歩行の白いネズミ型ロボットを投げ込み、メカの鋏に入り込んだ瞬間爆発し、

両鋏を破壊した。

エッグマン「なあっ！？」

ソニック「OK！ オケ 早速止めを刺すとしますつかあ！！ ネギ！！」  
ネギ「はい！！」

彼が頷いた後、杖を構え出し、呪文を唱え始めた。その同時にソニックは身を急回転し、

無数の青い光を溜め込み始めた。

セブテンデキム スピリトゥス・ルーキ本ウンテース サギテント・イニミカム  
ネギ「光の精霊：17柱：集い来たりて：敵を射て！！」

エッグマン「ゲツ！！ ま、まずい！！ 早くこの場を…！！」  
攻撃態勢に整えているネギとソニックに気付いたエッグマンは、脱出に慌て始めた。 その間に、

ソニックは自らの体を青く光らせながら、元の体勢に戻った。

ソニック「よおし、準備完了！！ 行くぜ、ネギ！！」

ネギ「はい！！ 『魔法の射手・連弾・光の17矢』！！」

ソニック「『ライトスピンアタック』！！」

ズガガガガガアアアアアアン！！！！

ネギは杖から17本の光の矢を放ち、エッグマンのメカに貫通しながら攻撃した。

その同時にソニックは超光速で回転し、メカに貫通しながら連続的に攻撃した。

エッグマン「ふんぎゃ あああああああああ！！！！」

チウドオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

そして十分のダメージを与えられたメカは、エッグマンと併に大爆発した。

ネギ「やったあ！！ やりましたね、ソニックさん！！」

ソニック「へへッ、Too easy！ 楽勝だぜ！！」

その後、ネギは急いで千雨と茶々丸の所まで駆け付けた。

ネギ「千雨さん！！ 茶々丸さん！！ 大丈夫ですかあ！？」

彼は心配そうに駆け付けた後、千雨はネギに見上げながら啞然としていた。

茶々丸「ネギせんせい…！！」

千雨「……………ネギ……………先生……………なのか……………?」  
ネギ「はい、僕です！ すみません、遅くなりまして……………。」  
彼は安心そうに笑みを浮かべせると、千雨の目から涙が出始めた。  
しかし彼女の性格のためか、  
それを堪えるように涙を拭き取り、ネギの前に立ち上がった。

バコオン!!!

更に泣きそうになっていた千雨の表情は怒りに変わり、強力な拳骨をネギの頭に殴り付けた。

ネギ「はぼとつ!?!」

その瞬間を見た明日菜達やソニック達は思わず驚愕し、次に怒り出した千雨はネギの両頬を強く引つ張り始めた。

千雨「バツカ野郎!!! このクソガキイ!!! 今までどこへ行ってやがったんだあ!? ああ!?!」

私たちはこう見えてもこんな訳の分からん街でアホみてえにてめえを探し回ってたんだぞお!?!」

人がどんだけ苦労してたか分かってんのか、コラあ!?!」

ネギ「あへへへへへっ!!! す、すみませえ〜ん!!! ほふほほくもさがしてたんですが、  
さがひへはんへふが、

なかなかはがはがひじょうほうがょうほうがえられはふへえ〜!!!」

聡美「でも、千雨さんも茶々丸も無事でよかったあ!」

彼女は茶々丸を抱きながらそう言った。

茶々丸「しかし…どうしてみなさんがここに…?」

明日菜「私達、最初は駅の近くにいたんだけど、突然都心から爆発が聞こえたから、

何があつたのか気になったのよ。」

楓「そこで慌てる通行人を捕まえて聞いてみたら、

何やら眼鏡をかけた少女と耳に変な物を付けた少女がエッグマ

ンとやらと戦つてると聞いて、

急いで駆け付けたのでござるよ。」

明日菜は菲を抱え、楓は真名を抱えながらそう答えた。

茶々丸「…みみにへんなものは…これのことですか…？」

彼女は自分のアンテナに触れながら、複雑そうにそう言った。そ

して千雨はネギの頬を引つ張るのを終えた後、

エミーはネギ達に近付きながら問い掛け始めた。

エミー「…あ、あのう…君達つてもしかして…千雨と茶々丸の知り合い…？」

ネギ「痛たたた…え、あ、はい。僕の生徒であつて、友達ですけど…。」

彼は痛みを感じつつある頬を撫でながら、涙目でそう答えたが、逆にエミーはそれに対して啞然としていた。

エミー「へっ？ 生徒…？ っていうか…千雨と茶々丸の友達つて事は…君達も、同じ別の世界から…？」

ネギ「ええ…そう言う事になりますか…。」

エッグマン「おお〜のお〜れえ〜！！！！」

しかしその時、上空からエッグマンの声が聞こえ、それに気付いた全員は空の方へ見上げた。

するとそこには、ボロボロな状態でありながらも、空飛ぶ機械に乗りながら悔やんでいるエッグマンがいた。

ネギ「なっ！？ エッグマンさん！？」

千雨「あいつ、まだ生きていやがったのかあ！？」

ソニック「まあ、そりゃそうだろ。あれくらいの爆発でも生き延びれるほど、タフだからなあ。」

エッグマン「ソニック！！ そしてその眼鏡をかけた小僧！！

よくもワシの『エッグスコープオン』を破壊し、

エッグマンランド再建設作戦の邪魔をしてくれたなあ  
！？ その罪、決して許さんぞお！！！！」

ソニック「へッ、悪者の悪巧みを邪魔するのは俺の取り柄なんでねえ！ それに、

エッグマンランドは俺が取り壊した奴だけで十分だよ！  
エッグマン「何じゃと、貴様あゝゝゝ！？ くうゝゝゝ………何で  
こう言う時に限って踏んだり蹴ったりなんじゃ！？

『メタルソニック』が再びワシを裏切っただけじゃなく、

ソニックの他に見知らぬ小童共にやられるとはあ……

……！！」

彼が悔やみながらそう言うと、ソニックはある言葉に反応した。

ソニック「メタルソニックが再び裏切った……！？ って、ちよつと  
待て……！ それどう言う意味だ……！」

エッグマン「ああ？ 知るかそんなもん……！ 最初は機能強化のために奴をチューニングカプセルに保管させていたが、

ワシが見ない内に勝手に出て来て、ワシを裏切りよつた……！ しかも\*以前の事件以来、

二度と暴走させないように改造された機能を撤去したはずなのじゃが、

なぜかその機能が再び搭載されてたんじゃ……！ 更に  
ワシが昔使っていたデータを全て盗み出し、

そのままどこかへ逃げ去ったんじゃ……！ おかげでワシの基地とロボット軍団は、

暴走した奴により大半も破壊されしもうたわい……！！」

\*『ソニックヒーローズ』、及びソニックシリーズ公式サイト『SONIC CHANNEL』より参照。

ナツクルズ「逃げ去ったって、奴はどこへ逃げたんだ!？」

エッグマン「そんな事、一々ワシに言っても知る訳なかるうが!!  
じゃがそんな事より、

今回は負けてしまった事で、大人しく引き下がるとし  
よう……。じゃが!!

ステーションスクエアを破壊し、エッグマンランドに  
変えると言う計画は永久不滅じゃ!!

今日の所はこれぐらいにしてやるわい!! じゃが次  
はこうは行かんぞ!!

ソニック、そしてそこにいる見知らぬ小童共!! 覚  
えておれえ~~~~!!

彼はそう言いながら、そのままどこかへ飛び去って行った。

明日菜「ネギ!! 奴が逃げるわよ!!」

ネギ「追い掛けましょう!!」

ソニック「Leave him be、ネギ! そのまま逃がして  
やんな。」

ネギ「えっ!? でも、いいんですか、奴を逃がして…!？」

カモ「またあのオツサンがここを襲いに來たらどうすんだよ!？」

ソニック「その時はまた相手にしてやるさ!」

彼は両腕を頭の後ろまで組みながら、樂觀的にそう言った。

ポオン!!

その後、体力を全て消化してしまった千雨と茶々丸は、元の学生服  
に戻ってしまった。

そして二人は突然地面に座り込み、周囲にいた者全てはそれに対し  
て驚いた。

エミー「えっ!? 千雨、茶々丸!？」

千雨「…し…しまった……ずっとカードの姿になってたから…腹

が減ったあ……………」

彼女は自分のお腹を鳴らしながらそう言った。

茶々丸「…私もエネルギー切れです……………」

聡美「大変！！早く体力を回復させないと……………！！」

楓「その前に拙者達も元の姿に戻らないといけないでござるな。」

明日菜「そうね。戻りましょ！」

明日菜・楓・聡美・菲・真名「アヘアット去れ！！」

五人共呪文を唱えると、体が光り出し、元の制服姿、及び大きさに戻った。

そしてその瞬間を見ていたエミーは、更に唾然としていた。

エミー「なっ！？他のみんなも！？って、何なのこれ！？今までの戦い見てったけど、

変身したり戻ったり、何か変な物が出て来たり、おかしい事ばかり起こってたけど、

何なの一体！？」

ティルス「お、落ちて着いてよ、エミー。これは別世界から来た彼らの魔法なんだよ。」

エミー「魔法！？」

パチパチパチパチパチッ！！

しかし、何だかんだあつてか、気が付いたらネギ達の周囲に多くの市民が集まり、

彼らに拍手と名声を浴びさせていた。

市民A「やったあ〜！街は救われたぞあ〜！！」

市民B「これも君達のおかげだよ！ありがとう〜！！」

市民C「さっきのとてもすごかったわ！カッコよかったわよ！」

市民D「本当にありがとう！助かったわ〜！！」

千雨「…な、何だ…この聞き慣れない拍手と名声は………って言うか、

こいつらどっから沸いて来て………?」

明日菜「でも、何かこうしていると、ちょっと照れちゃうなあ………。

「  
彼女は頬を赤く染め、頬を掻きながらそう言った。

ソニック「でも、これで俺と並べる新たなヒーローの誕生って事になるな!」

ネギ「えっ!? そんな、僕達がですかあ!?!」

カモ「何照れてんだよ、兄貴!? ヒーローになる事ぐれえ悪くはねえツスよ?

俺達がここで駆け付けてなかったら、何れこの街はお終いになる所だったんスよ?

これぐらいの名誉、ありがたく受けとんなよ!」

ネギ「そ、それはそうだけど………。」

彼は恥ずかしそうに、肩に乗っているカモに向きながらそう言った。カモ「まっ、でもおかげでちうつちと茶々丸も見付けたし、あのオツサンも追っ払ったし、

これで一件落着ツスよ!」

ネギ「そ、そうだね………。」

???「すみませえ………ん!!」

その時、突然何者かがネギ達に声を掛け、ネギ達はその方向へ振り向くと、

マイクを持ったアナウンサーやカメラを担いだカメラマンなどと言った、

数多くのテレビ局からのスタッフが集まって来た。

アナウンサーA「私達『ステーション・スクエア・ニュースSSN』の者ですが、よろしければインタ

ビューさせていただきますい!!」



アナウンサーB「こちら『MNN』です！ ソニックさんとはどう  
言うご関係ですか!？」

アナウンサーC「『セガ・チャンネル・ニュース  
SGN』の者です！ 是非お名前を!!」

アナウンサーD「『ニンテンドー・チャンネル・ニュース  
NCN』です！ 戦いのご感想を:!!」

ネギ「わわっ!? な、何ですかこれはあ!？」

ソニック「Oh no!! めんどくせえ奴らが来たっ!!」

みんな、とにかく逃げるぞ!!」

明日菜「えっ!? に、逃げるって、どこへっ!？」

接近して来る取材班に対し、ネギ達は慌て始めた。

ネギ「千雨さん、乗ってください!!」

彼は杖を跨ぎ、千雨に向けて手を伸ばしながらそう言った。

千雨「はあっ!? な、何で私が:!!?」

ネギ「いいから早く!!」

彼は急ぎながらも千雨の手を引つ張り上げ、宙に浮かび上がる杖に  
乗せた。 それに対し、

千雨は頬を赤く染めさせながら、彼の行動に恥ずかしがっていた。

茶々丸「…あ、あのう………私は………?」

聡美「あっ、そうだった! エネルギー切れになると体が動けなく  
なるんだっ!」

ど、どうしよう!？」

彼女は慌てながらそう言うが、そこでナックルズが茶々丸に接近し  
て来た。

ナックルズ「ったく、しょうがねえな………俺がおぶってやつから、  
しっかり捕まれよ!」

茶々丸「あ、はい……すみません………。」

聡美「あっ、ちよっ、ダメですナックルズさん!! その子は……  
……!!」

ナツクルズが茶々丸の両肩を持ち上げようとしたその時、彼の背中からとてつもない重みを感じ、苦痛を感じ始めた。

ナツクルズ「ずおあつ!? な、何だこれ!? めっちゃ重ツ!?」  
聡美「それは重いですよ! 何せ茶々丸はロボットですから!」  
ナツクルズ「ロボットオ!? こいつロボットなのかあ!」

茶々丸「すみません…重くて……。」  
菲「私も手伝うアル!」

ナツクルズ「あ、ああ…そりゃ助かる…!」

菲はナツクルズと共に、茶々丸の肩を抱えながら一緒に持ち上げていた。

しかしそれを見ていたルージュは、またもや嫉妬していた。

ソニック「よしっ!! とりあえず、Let's get out  
ウタ ヒア  
ta here!!」

彼がそう言った後、全員急いでその場から逃げ出した。

アナウンサーA「あつ!! 逃げた!! 待つてくださあ!!」

アナウンサーB「せめて名前だけでもあ!!」

アナウンサーC「出身地は!? 年齢は!」

アナウンサーD「教えてくださあ!!」

そんな取材班も、逃げ去るソニックとネギー一行を追い掛けて行った。

## 第16話 クツパ戦隊、ノコブロス参上！

レポーター『午後8時になりました。 『M<sub>三</sub>i<sub>一</sub>iニユース』をお伝えします。

今日昼頃、ステーションスクエアの都心に、あのDr・エッグマンが再び襲来しました。

そのため、多くの建物は敵により破壊され、街は多くの損害も受けた模様です。 しかし、

そこでモビウス大陸の英雄であるソニック・ザ・ヘッジホッグと、

彼と供に行動した謎の少女少女の活躍により、Dr・エッグマンの暴走を食い止め、

追い払ったようです。 尚、この少女少女は何者なのかは不明ですが、

現場を目撃した一般市民達によると、彼らは魔法を使用していた事から、

キノコワールド大陸から来た者ではないかと思われるようですが、まだ定かではない様子です。

取材班は彼らにインタビューを試みましたが、当人が逃走したため、

インタビューが出来ませんでした。 そのため、その少女少女らの名前などの詳細を、

まだ確認されておりません。』

…… ニュースは、ステーションスクエアにある、エミーが住んでいるアパートのテレビで放送されていた。

そしてそれを見ていたのはエミーだけでなく、明日菜、聡美、菲、真名、楓、そして茶々丸であった。

全員パジャマ姿になっており、どうやら明日菜達はエミーの誘いに

より、  
一晩彼女のアパートで泊まる事になっていたようだ。もちろんガ  
ールズオンリーと言う制限のため、  
ネギやソニックなどの男子はいない。とは言っても、企画的には  
幼いからか、ルージユは参加していなかった。  
その間に女子達は、今日起きた出来事を、真剣そうにテレビを見て  
いた。

エミー「ほら、みんな聞いた!? 謎の少年少女って、貴女達の事  
じゃない!？」

明日菜「そ、そうかな…?」

彼女は少々照れながら、疑うかのようにそう答えた。

真名「そうしか思えないだろ。あの現場で敵を追っ払ったのは私  
達だからな。」

明日菜「まあ…確かにそう言う事になるわね…。」  
彼女は苦笑いをしながらそう言った。

聡美「しかしエミーさん、ホントにいいんでしょうか? 私達を一  
晩ここに泊まらせてもらって……。」  
彼女は申し訳なさそうにそう言うが、逆にエミーは笑顔でこう答え  
た。

エミー「いいのよ! せっかくみんなが別世界からここに来たんだ  
し、たまにはこう言うペア…ツとする

面白い事をやらないとね!」

茶々丸「とは言っても…わざわざパジャマまで貸してくれてよかつ  
たんでしょ?」

楓「しかもどれもエミー殿とは違うサイズばかりでござるな……。」

エミー「別にいいのよ! 大体制服姿のまま寝かせる訳には行かな  
いし、それにそれ予め用意したお客用だから、

遠慮なく使っちゃってちょうだい！」

明日菜「それにしてもこのニュース番組も面白いねえ？ 何か3Dみたいなキャラを使ってるみたいだけど……………」

彼女は面白げにテレビを見ながらそう言った。

エミー「ああ、これ？ 去年から始めたニュース番組らしいよ？

何でも『Mii』って言うキャラを使ってニュースをやってるみたいけど、

これが面白い奴ばかりだね！ 他のニュース番組と比べ物にならないくらい、

面白い情報を教えてくれたりするのよ！」

レポーター「次のニュースです。 にかわさんの頭にアイスクリームが生えました。」

その異様な内容のあるニュースが流れた瞬間、エミーはリモコンでチャンネルを変えた。

エミー「…まあ…たまに変な奴もよくやるけどね。」

明日菜「…ああ…そう……………」

そう言った後、お互い苦笑いをした。

しかし、その間に同じくパジャマ姿をした千雨は、部屋の片隅にあるテーブルで、

背を向けながら自分のノートパソコンを弄っていた。 その画面にはネギヤテイルスが映っていて、

どうやら彼女はビデオ通話機能を利用しながら、ネギヤテイルスと会話しているようだ。

茶々丸「…千雨さん、一緒にテレビ見ませんか？」

千雨「悪いが、こっちは重要な話をしてんだ。 邪魔しないでくれ。」

彼は話し掛けた茶々丸に見向きもせず、無愛想にそう答えた。

ティルス『しかしこうやって君と会話出来るなんてすごいね！君って本当にパソコンに詳しいんだね！』

千雨『まあな……でもあんたのトコにもビデオ通話機能があつてよかつたよ。』

電話番号を交換したおかげでこうやって会話出来たからな。」

ネギ『でもティルスさん……本当によかつたんですか？アスナさん達をエミーさんの所にお泊らせて……？』

ティルス『別にいいんじゃないかな？エミーがそうさせてるんだし……』

でもルージユはこう言うのに参加しなくていいの？』

ルージユ『何言つてんのよ？私はいい大人よ？そう言う子供っぽい物には興味ないわよ！』

ネギ『後ティルスさん、千雨さんと茶々丸さんも見付けた事で、今はエミーさんの所にお泊りしてますが、

この先どうします？明日にはここに泊まらせるのは……

無理でしょうか？』

ティルス『そうだねえ……もうこの工房も十分だし……さすがにこれ以上は無理かな……？』

明日エミーに頼んで、千雨と茶々丸を彼女の所でしたら  
く預かってもらつてみるよ。

千雨はそれでいいかな？』

千雨『え、私か？私は……まあ……そうだな……聞いた話では、

この世界には私達以外にも他の生徒達も来てるかもしれないんだよな？』

ネギ『ええ、そうと思いますが……』。

千雨『ならそうしよう。お互い別行動した方が、それなりに情報

が見付かるかもな。

何か見付かったら、この通話機能で情報交換出来るしな。」  
ティルス「うん、千雨の言う通りかもしれないね。とりあえず、  
明日の予定は、

僕達がステーションスクエアに戻って、君達と合流して、  
また情報探しに行くよ！

今日の騒動で余り情報を集めなかったからね！」

千雨「そうだな。そのためには早く寝……………」

ポフツ！！

その時、千雨の頭に枕が投げ付けられた。別に痛みは感じなかったが、

突然の襲撃により、千雨は頭を掻きながら後ろの方へ振り向いた。  
そこには先程の枕を投げ付けたエミーと、たくさんの枕を所持している明日菜達が立っていた。

千雨「痛って…何なんだよ、いきなり!？」

エミー「何なんだよじゃないでしょ!？ せつかくのガールズオンのパジャマパーティだって言うのに、

一人でどんよりパソコンやってないで遊ぼうよ!! 即ち、  
お泊り会の基本は何てったって、

枕投げ対決よ!! それえっ!!」

彼女がハイテンションでそう言うと、明日菜達と共に千雨に向けて  
枕を投げ捲くつた。

千雨「わわわっ!？ ちょ、ちょっと待てえ!？ それ、通常修学  
旅行とかやる事だし、

私そう言うガキくせえ遊びはやらない主義で……………!!」

エミー「問答無用!!! 行くよ、最後の切り札の枕雪崩え!!!」

明日菜・菲「それえ!!!」

千雨「ぎゃあああああああ！！！！」

明日菜達は大量の枕を千雨に落とし、千雨は断末魔と共に枕の山に埋もれた。だが逆にブチギレた彼女は、

枕の山から立ち上がり、大きな抱き枕……………ではなく、

胡麻のような目が付いた白いサンドバッグを両手で持ち上げていた。

千雨「てえめえ〜〜〜らあ〜〜〜……………！！！！」

エミー「ちよっ、ちよっと待って！？　そ、それ、あたしのボクサ

サイズ用のトレーニンググッズ、

『サンドバッグくん』！！　しかもそれ硬くて重いのに…

……………！？」

明日菜「って言うかそれどっからあ！？」

千雨「うるせえええええ！！！！　問答無用おおおお！！！！」

女子一同「きゃあああああ！！！！」

暴走する千雨はサンドバッグを持ち上げながら、逃げる女子達を追い掛け回った。

ネギ『あれっ！？　あの、千雨さん！？　千雨さあ〜〜〜ん！？』

テイルス『…どうやら取り込み中みたいだね…。』

…翌日

ここは『キノコシティ』……………キノコワールド大陸・キノコ王国にある大都会。

有名なレストランやデパート、更に映画館やゲームセンターなどが並んである、

キノピオや他の種族達から愛されている街である。　そんな街に訪れたのは、木乃香と刹那、のどかと夕映、



マリオブラザーズ、ピーチとデイジー、そしてそのお付きであるキノピオ、キノピコ、そしてキノじいである。そんな街に来た木乃香含めた四人の少女達は、街の風景を見て感心していた。

木乃香「うわあ~~~~!! ホンマすごい街やわあ~~~~!!」  
のどか「ホントだあ~~~~! 建物とかは何か可愛らしいけど、色んなお店があつてすごいですねえ~~~~!」

刹那「確かにここはすごい街ですね。まさかキノコ王国にこんな大きな街もあつたとは……………」  
マリオ「そりゃそうだよ! こう言う世界でも街だけは欠かせないからね! 何せ、

キノコタウンより色んな物がたくさんあるからな!」

夕映「まあ、建物の屋上がキノコの帽子になっているだけが変わりませんね……………」

彼女の言う通り、建物は現実のとは変わらないが、やはり唯一の相違点は、

建物の屋上にキノコの帽子が飾つてあるくらいである。

キノピオ「どうですか? お気になりましたでしょうか?」

木乃香「ええ、もうすっかり気に入ったえ!」

彼女は笑顔でそう答え、それを聞いたピーチも笑顔でこう答えた。

ピーチ「よかった、気に入ってもらえて!」

デイジー「まっ、若い子にはこう言う場所がお似合いだけどね!」

刹那「しかし、ここは何と言う街なんですか?」

マリオ「ここはキノコシティと言って、キノコ王国の一番の大都市なんだ。」

多くのキノピオや他の種族もここに訪れ、社会や遊樂のためによつて来るんだ。」

ルイージ「そのためデパートやレストランはもちろん、ゲームセンターや映画館、

書店やホテルなど、色んな店や施設がたくさんあるんだ  
！」

のどか「書店!？」

夕映「書店もあるんですか!？」

二人は目を輝かせながらピーチに問い掛けた。

ピーチ「ええ、新書から古本、またはそれぞれの専門店もあるけど  
…ひよつとして、本が好きなの?」

のどか「はい! もう大好きです!！」

夕映「しかもこの世界の本、一度でもいいから読んでみたいところ  
です!！」

デイジー「後この街はね、昼間はこんな感じなんだけど、夜になると  
ホントに綺麗なのよ!

建物や街灯の明かりで、美しい夜景が見れるの! その  
ため、

この街はデートスポットとして有名でもあるけどね!」  
木乃香「へえ、ここはデートスポットでもあるんやあ、……………そ  
れやったら、

一度でもエエから、せつちゃんと一緒にこの街で一日中デ  
ートしてみたいなあ、……………」

刹那「お、お嬢様……!！」

マリオ・ルイージ・ピーチ・デイジー「えっ……!？」

木乃香の一言に対し、刹那は恥ずかしそうに赤面するが、逆に百合  
属性を感じたマリオ一行は啞然とした。

そんな彼らを見た刹那は、慌てながら誤解を防ごうとした。

刹那「い、いや、違います!！ 何でもありませんから!！」

のどか「でも、今日私達がここに来たのは一体何の理由ですか?」

キノピコ「はい！ 我が王国の捜索隊やサラサ・ランドの捜索隊が皆さんのお友達を捜索している間に、

私達も情報を集めるためにこの街にやって来たんです。」  
キノピオ「この街は結構情報通ですから、きっと何か見付かると思っています。」

夕映「えっ、いいんですか、皆さんが手伝ってくださって……？」  
ピーチ「もちろんよ！ だって私達も協力するって約束したから！」  
デイジー「そう！ 遠慮なく私達に頼りなさい！」  
彼女は胸を張りながらそう言った。

木乃香「せやけど、今まで気になってたけど…エエんですか？

姫様達がこんな所でウチらと一緒にいても……。」  
キノじい「何、心配せんでも良い！ ワシらやマリオブラザーズがいる限り、

姫様にはどんな無礼の輩から指一本触らせまい！」  
彼も胸を張りながらそう言った。

刹那「でも…そう言うマリオさん達もよかったですでしょうか？ お仕事とかまだあるんですね？」

マリオ「ああ、別に大丈夫だよ！ 配管工の仕事はそんなにある訳でもないし、気にしなくてもいいよ！」

ルイーダ「と言うより、兄さんはいつも冒険に出掛けたりするから、代わりに留守番してる僕が全部仕事やってるけどね。」

マリオ「な、何だよルイーダ！？ 皮肉で言ってるのか！？」  
ルイーダ「べつつにい〜？」

マリオは突っ込むものの、ルイーダは遠い目で兄から反らした。

夕映「…あのお……書店があるのはいいとして…ここにドリンクとかありますか？」

彼女はピーチの方へ見上げながらそう問い掛けた。

ピーチ「え？ ドリンク？ ええ、コンビニや喫茶店なら少々あるけど……………」

夕映「では、何か不思議なドリンクも売られていますか？」

ピーチ「不思議なドリンク？ 例えば何かしら？」

夕映「えつと……………例えば、塩ゴーヤジュースとか、チョコ抹茶ミルクとか、

玄米柚子ドリンクとか……………」

ピーチ「えつ…！？ 何それ……………！？」

微妙な素材が使われていたドリンクの名を聞いた彼女は、そんな夕映に対して愕然としていた。

マリオ「でも買い物とか食べ物に行くとかは任せてよ！ 俺達が代わりに奢ってやるからさ！」

刹那「えっ！？ そんな…いいですよ！ そう言うのは私達が支払いますから…！！」

マリオ「何言ってるんだよ？ 大事なお客である君達にはそんな事させるわけには行かないよ！」

第一、この国の金銭単位はコインだから、それしか払えないよ？ 君達にはそんなお金、

持っていないだろ？」

刹那・木乃香「あっ……………」

彼にそう言われた二人の少女は、予め自分の財布を確認した。確認した所、お金なら十分あるのだが、

それは全て日本円であり、当然ながらこの世界では使えない。不便と感じた二人は、啞然としていた。

刹那「……………た、確かに……………お金ならありますが……………」

木乃香「この世界では使えへんな……………」

彼女は苦笑いをしながらそう言った。

マリオ「だろ？ だから欲しい物があつたら、遠慮なく俺達に頼んでくれよ！」

刹那「…す、すみません、私達のために色々と……。」「  
彼女は申し訳なさそうにお辞儀しながらマリオに謝った。  
マリオ「いいんだって！ 困った時はお互い様！ 気にする事なん  
て全然ないさ！」

デイジー「まつ！ そうと決まれば、せっかく来たんだし、みんな  
でどっか行つてパークと遊ぼうよ！」

ねっ、パークと！」

彼女は張り切りながらそう言うが、逆にキノじいは困りながら割り  
込んで来た。

キノじい「これえ、何を仰るのでありますか、デイジー姫様！？」

ワシらはここで木乃香殿達のご友人達をお探しに来たの  
ですぞ！？」

こんな時に遊んでる場合ではありませんですぞ！」

デイジー「何よお〜！？ これでも私は彼女達のためにそう言った  
のよ！？」

そりゃ確かに彼女達の友達を探すのは一番だけど、せっ  
かく彼女達がこの世界に来たって言うのに、

ただ人探しをするだけで終わるなんて可哀想過ぎるわよ

！ ねえ、ピーチ？」

彼女がピーチに問い掛けると、その同時にキノじいは呆れながらた  
め息を吹いた。

キノじい「はあ〜……………ピーチ姫様、何とか言ってくださいいま  
し。」

ピーチ「いや、デイジーの言う通りかもしれないわ。 せっかく彼  
女達が別世界から来たんだし、

色々楽しみながら友達探しをするのも悪くないと思うわ。」

キノじい「ピ、ピーチ姫様！？」

彼女の発言に対し、キノじいは啞然とした。

デイジー「そうそう！ そう来なくちゃ！ 友達探しも大事だけど、

何よりも楽しむ事も大事！

シヨッピングにゲーム、喫茶店で世間話に映画鑑賞！

もうとにかく楽しむわよぉ！！」

ハイテンションになる彼女だが、その間に木乃香達はそんな彼女を見て啞然としていた。

のどか「…あ、あのお…ホントにいいんでしょうか？ 楽しんでも

……………」

彼女は深く気にしながら、マリオに問い掛けた。

マリオ「まあ、姫様達が言うんだから、別にいいんじゃない？ 確

かに君達もこの世界に来たんだし、

せつかくだから友達探しのついでに、遠慮なく楽しもうよ

！」

刹那「…そうですね。 そうしますか、お嬢様？」

木乃香「うん、もちろん！ ウチ色んな場所に行つて、色々楽しみたいわ！」

夕映「ホントにすみません、私達のために…。」

マリオ「いいんだって！ まっ、色々楽しんで行こうよ！」

???「あら？ マリオではありませんのお〜！」

その時、誰かに呼び掛けられた事にマリオ達は、その声が聞こえた方向へ振り向いた。

そしてそこにいたのは、浮遊する二体のテレサである。 だがそのテレサは、

以前ルイージマンションにて五月と鈴音が出会ったテレサとは違い、  
一体は頭に二本の赤いリボンをつけた薄緑の女性テレサと、  
もう一体は白い髪と髭を生やした細目の老テレサだった。

???「こんな所でお会い出来るとは、奇遇ですわぁ！」

マリオ「ああ！！ 『レサレサ』！！ それに『セバスチャン』さん！！」  
レサレサとセバスチャンと言う名のテレサに気付いたマリオは、喜びながら駆け付けて来た。

セバスチャン「お久しぶりでございます、マリオ様。」

彼はお辞儀しながら、喜ぶマリオに挨拶した。

マリオ「うわあ、ホントに久しぶりい！！ 二人共元気してたかあ！？」

レサレサ「オオッホッホッホッ！ 元気してたかと言われても、

あたくしはもう困るくらい毎日元気ですわよ！！」

彼女は赤い扇子を構え、高飛車の笑い方をしながらそう答えた。

ピーチ「本当にお久しぶりね、レサレサ！」

レサレサ「あら、ピーチ姫！ それにお付きのキノピオも！ お久しぶりですわね！」

ルイージ「僕の事も覚えてる？」

レサレサ「えっと、貴方は確かあ……………」

彼女はルイージの顔を見て、彼の名前を思い始めた。しかし、思い出せないのか、

お互いがたじたじになり、二分間も沈黙が続いていた。そして最終的に思い出せなかったのか、

ルイージは後ろ向きに体育座りをしながら絶望した。

ルイージ「……………いいんだよ……………元はと言えばあの時僕は兄さんと一緒に冒険に行つてなかったから、

僕の事なんて誰も知らないのさ……………どうせ僕はお留守番主義な永遠の二番手だよ……………」

レサレサ「…えっと…ごめんなさい……………」

彼女は酷くも落ち込むルイージに対し、冷や汗を垂らしながら謝った。

デイジー「マリオ、ピーチ、知り合いなの？」

ピーチ「あ、うん！ 『迷いの森』にある『テレサのおやしき』に住んでいるテレサで、

以前私を助けてくれたマリオの仲間なの！ ほら、以前クツパがピーチ城ごと奪取した事件、

覚えてるでしょ？」

デイジー「ああ、聞いた事があるわね。クツパが自分の城を使ってピーチ城を奪い、

そのまま大空に浮かばせた事件でしょ？ へえ、彼女

その事件に関わってたんだあ……………」

レサレサ「マリオ、この方々は？」

マリオ「ああ、そう言えばまだ会ってなかったんだな？ この方はサラサ・ランドのお姫様で、

ピーチ姫の友達のデイジー姫様だよ！ そしてこの人達はピーチ姫のお付きのキノじいとキノピコだ。」

デイジー「初めまして、レサレサ！」

キノピコ「えっと、キノピコと申します！ よろしくお願い致します！」

彼女はお辞儀しながら自己紹介した。

キノじい「ウオツホン！ ええ、ワシこそはピーチ姫の執事、キノじいですじゃ。以後、お見知り置きを。」

彼は喉を鳴らしながら自己紹介した。

レサレサ「ああ、そう言えば貴女達、一度ベースボールにも出場してましたわね？ 実はあたくし、

観戦しに来た事があるんですの！ その時にお見えたのでしょうかね！ まっ、とりあえず、

よろしくですわ！」

刹那「…あ、あの、マリオさん……………」

他の少女達と供に啞然とした刹那がマリオに話し掛けると、彼はそ



んな刹那の方へ振り向いた。

刹那「この方は一体…？」

マリオ「ああ、そう言えば刹那達はまだ彼女と会ってないんだっ  
な。彼女はレサレサと言って、

俺の仲間として行動していたテレサだよ。」

夕映「テレサ？」

マリオ「まあ、要にお化けかな？」

のどか「ひいっ！？ お、お化けえ〜！？」

彼女がそれを耳にすると、怯えながら引いていた。

刹那「で、では彼女は…！？」

彼女は予め『夕凧』を構えるが、マリオはそんな彼女を抑え出した。  
マリオ「大丈夫だよ！ 彼女は普通に善意のあるお化けだから、呪  
ったり驚かしたりはしないよ！」

レサレサ「それに、テレサはみんな悪霊だの怨霊だの、そんな悪質  
な存在とは限りませんわ！

それを得と覚えときなさい！」

彼女は両手を腰に付きながら、刹那達にそう注意した。

レサレサ「それはそうと…マリオ、この方々は？」

マリオ「ああ、彼女達は遠い国から来た大切な客人なんだ。長い

黒髪の方は近衛木乃香で、

サイドテールの方は桜咲刹那、前髪の長いショートな子は

宮崎のどかで、

こつちの小さい方は綾瀬夕映だ。」

刹那「あ、はい…さっきのは失礼しました。 は、初めまして…。」

彼女含めた少女達は、レサレサにお辞儀しながら挨拶した。

レサレサ「まあ、遠い国から来た観光客だったのですの！ 確かに  
ここの者には見えませんわねえ……………」

もしや、ダイヤモンドシティかモビウス大陸から来た方  
々なのでしょう。

なら、改めて紹介致しますわ！ あたくしの名はレサレサ！

そしてこの方はあたくしのお付きのセバスチャンですわ！ 以後、お見知り置きを……………」

彼女とセバスチャンは挨拶しながら、刹那達にお辞儀した。

木乃香「せやけど、この子お化けにしてはホンマ可愛エエなあ？ ちよつと抱いてもエエ？」

レサレサ「えっ…！？」

興味津々な木乃香は、許可もなくそのままレサレサを抱き始めた。

刹那「なっ！？ お、お嬢様！？」

セバスチャン「ぬおっ！？ こ、これお主、お嬢様に何を！？」

木乃香「ああ〜、この子プニプニしてて気持ちエエなあ〜！

ホンマお化けとは思えへんくらい柔らかいわ〜！」

レサレサ「ちよ、ちよつと貴女何するんですの！？ 馴れ馴れしくあたくしに抱かないでくださらない！？」

彼女は少々赤面しながら、必死に木乃香から離れた。その後、刹

那はそんなレサレサの前に駆け付き、

謝り始めた。

刹那「す、すみません！ 木乃香お嬢様、可愛い物には目がなくて

…！」

木乃香「ああ〜、それってどう言う意味なあ〜ん！？」

彼女は頬を膨らませながら、刹那に怒り出した。

レサレサ「え、お嬢様？ 貴女お嬢様でしたの？ と言う事は、貴

女はその子のお付きですの？」

彼女は刹那に向きながら問い掛けた。

刹那「え？ あ、はあ…まあ……………」

彼女はそう言って頷ぐが、木乃香は横から刹那の腕に抱き付き、こ  
う言い出した。

木乃香「違っわ！ せっちゃんはウチの親友や！ お付きでもボデ

イーガードでも何でもあらへん！」

刹那「お、お嬢様!？」

彼女は抱き付く木乃香に対して赤面しながら慌て始めた。

レサレサ「あ、ああ……そう……。」

彼女は啞然としながらそう答えた。

マリオ「まあ、それよりも！ レサレサは何しにここへ？」

レサレサ「あつ、ええ……余りにも屋敷にいるのも退屈でしたので、

一日中満喫するために久しぶりに街にやって来たのですの。 予定ではデパートでお買い物して、

喫茶店で飲みに行つて、ゲーセンでたっぷり遊び捲くつて、ペットショップで動物達と戯れに行つて、

本屋で立ち読みとかして……もうとにかく一日中過すためにやつて来たのですわ！」

のどか「デパートでお買い物つて、何を買うんですか？」

レサレサ「決まってるじゃない！」

あたくしに超ピッタリなリッチでゴージャスなドレスやジュエリーを買いに行くのですわ！」

夕映（……この人（？）……どこか委員長さんとよく似てるです……。）  
彼女は少々引き気味になりながら、心の中からそう思った。

レサレサ「しかしそう言うマリオ達こそ、ここで何しに来たのですの？」

マリオ「ああ、ちょっとこいつらのために何か探し物をしてな……

……

その同時にこの街を観光しに来ただよ。」

レサレサ「そうなんですの……でしたら、あたくしも一緒にお付き合ひしてもよろしいかしら？」

あたくし推薦のお店がたくさんありますし、よろしければご案内してさしあげますわ！」

木乃香「え!?! ホンマに!?! すんごいエエトコなん!?!」

レサレサ「ええ、セレブなら誰もが立ち寄るお店ですわ！ 後、機会があれば、

あたくし推薦の喫茶店で一緒にお茶でも飲んでお話しませんか？ あたくし、

皆さんの事も是非知りたいですし、女同士の世間話でも楽しみたいですわ！」

刹那「え、いいんでしょうか、お付き合いしても………？」

彼女はセバスチャンに向きながら問い掛けた。

セバスチャン「まあ、お嬢様がそう仰るんなら、そうさせてくださいまし。」

のどか「じゃ、じゃあ……お勧めな書店とかありますか!？」

レサレサ「ええ、あたくしのお気に入りな雑誌や小説がたくさん揃ってる、

あたくし推薦な書店がありますわよ!」

夕映「では、不思議なドリンクとかも売ってますでしょうか？」

レサレサ「はい？」

レサレサと木乃香達がワイワイと話し合っている間に、キノじいはマリオに小声で話し掛け始めた。

キノじい（マリオ殿！ ホントによろしいのですかな!？ 人探しをすっぱかして遊びに行くのは……!?!）

マリオ（いいだろ!？ 別に目的を忘れてる訳でもないんだから！ 遊んでいる間に人探しをしても別に悪くないだろ!?!）

キノじい（そうじゃが、マリオ殿………。）

キキキイイイイイイイ!!

その時、道路の方からタイヤの音が響き渡り、それに気付いた全員はその音が聞こえた方向へ振り向いた。

するとそこには二体の車が、他の車にぶつかったり、悲鳴を上げなが

ら逃げる通行人を襲うとしたりなど、  
無差別にも激しく暴走していた。一体は赤いパタパタの甲羅の姿をした車で、それに運転していたのは、  
赤いバンダナを付けた赤いノコノコと、黒いバンダナを付けた黒いノコノコである。  
次は緑のノコノコの甲羅の姿をした車で、それに運転していたのは、  
緑のバンダナを付けた緑のノコノコと、  
黄色いバンダナを付けた黄色いノコノコであった。四人は楽しそうに笑いながら、  
荒い運転の仕方ですれ回っていた。

赤ノコノコ「オラオラオラアアア!!! 退けや退けやああああ  
!!!!」

黒ノコノコ「轢かれたくなければ退きやがれええええ!!!」  
緑ノコノコ「邪魔だ邪魔だ俺らの邪魔だあああ!!!」  
黄ノコノコ「道作らねえんなら轢き潰すぞおおお!!!」

夕映「な、何ですか、あの連中は!?!」  
刹那「あれは…ノコノコ!? さてはあのクツパの……!!?!」  
彼女は『夕凧』を構えながらそう言った。  
のどか「でも何でこんな所に!?!」  
木乃香「それよりもキノピオちゃん達が危ないわ!?!」

レサレサ「マリオ!! あれは確か…!?!」  
マリオ「ああ!!! あいつら、また悪さしに来やがったか!!! こ  
うなったら……!!?!」  
レサレサ「お待ちなさい、マリオ! ここはあたくしが!」  
彼女がそう言った後、一瞬にして姿を消した。  
マリオ「えっ!?!」  
セバスタン「お、お嬢様!?!」

そしてその後、彼女は暴走する二体の車の前に姿を現し、突然可愛い顔から怖い顔に一変した。

レサレサ「バアアアアアアア！！！」

ノコノコ達「ぎよえええええええええ！?!?!?!」

それに驚愕したノコノコ達は、ハンドルを一気に回転させ、車を転倒させた。

ノコノコ達「わぎやあああああああ！！！！」

そしてその衝撃により、乗っていたノコノコも同時に転げ落ちた。

その間にレサレサの突如なる変貌を見たマリオとピーチ以外の全員は、目と口を大きく開きながら啞然としていた。

赤ノコノコ「痛ててて……………だ、誰だ!? 急に俺達を脅かした野郎はあ!?!」

レサレサ「あああ、それってあたくしの事かしらあ?」

ノコノコ達「!?!」

起き上がるノコノコ達は見上げると、そこには両手を腰に当てながら彼らを見下ろすマリオと、

扇子を構えながら彼らを見下すレサレサが立っていた。

赤ノコノコ「ゲゲツ!? お、お前は…マリオ!? そしてその仲間のレサレサ!?」

彼らに気付いたノコノコ達は、彼の距離から離れながら驚いていた。レサレサ「ああ〜ら、よくあたくしの事をご存知な事！でもあたくしの場合、

貴方達とは以前クッパ城で少しの間しかお会いしませんでしたので、

余り知りませんけどねえ〜?」

マリオ「まったく、久しぶりに見掛けたと思ったら、相変わらず悪さだけは懲りてないようだなあ?」

赤ノコノコ「この野郎…ここで会ったが百年目え!!!」

黒ノコノコ「よくも俺達のゆったり気ままな暴走ライフを邪魔して

くれたなあ!？」

黄ノコノコ「絶対に許さねえぞ!!」

ピーチ「マリオ!!」

彼女がマリオの名を呼び掛けた後、他のメンバー達と供に駆け付けて来た。

それに気付いたノコノコ達も、更に驚きを見せた。

赤ノコノコ「うおっ!？ あ、あんたは…ピーチ姫!？ 何でピーチ姫までここに……!？」

黒ノコノコ「レッド! これはいい機会じゃないのか？」

黄ノコノコ「そうだ! 俺達が再び活躍する時だぜ!!」

赤ノコノコ「お、おう! 分かってるぜ!」

彼は勝気な笑みを浮かばせながらそう答えた。

デ이지ー「何あいつら? 見た事もないノコノコね？」

刹那「マリオさん、奴らは一体…!？」

マリオ「ああ、あいつらは……」。

彼が刹那に答えようとしている間に、赤いノコノコはそんな彼女を見て更に驚き出した。

赤ノコノコ「ぬおおっ!？ お、お前は…もしや!!」

以前クツパ様がピーチ城に襲撃した時に邪魔した女だなあ!？」

木乃香「クツパやて!？」

夕映「やはり貴方達、クツパの手下なんですね!？」

赤ノコノコ「ヘッ!! いかにも、俺達はクツパ軍団直属の最高四人衆!!」

泣くキノコも黙らせるクツパ戦隊!! 『ノコレッド』

黒ノコノコ『ノコブラック』!!」

緑ノコノコ『ノコグリーン』!!」

黄ノコノコ「『ノコイエロー』!」

ノコノコ達「四人揃って、『ノコブロス4兄弟』、参上!!!」

彼らは決めポーズを出し、同時に大声でそう答えた。だがその間にマリオ達は、

そんな彼らを呆気なさそうに眺めていた。

刹那「……………あ、あのう……………ホントに奴らは何者なんですか?」

マリオ「……………あ、ああ……………先程奴らが言ったように、ノコブロスって言う、

クツパが雇ってる戦隊っぽい四人衆なんだ。」

デイジー「…にしても、ダサいわね。」

彼女があっさり本音を吐くと、ノコブロスはその場でこけた。

ノコレッド「ダ、ダサいとはなんだあ!?! これでもノコノコに取っちゃカツコイイポーズなんだぞお!?!」

キノピオ「そうなんでしょうか? 僕の知っているノコノコとはそういう事はしらないと思うんですが……………」

キノピオ「私、女として正直そう言うの受け入れられません!」

キノじい「うむ、実に女性には好かぬ行為ですな!」

ノコレッド「んだとお、コラア!? キノコの分際で言いたい放題吐き捲くりやがってえ!!!」

ノコグリーン「落ち着け、レッド。」

彼は冷静になりながら、怒るノコレッドを抑えた。

ノコイエロー「そうだよなあ……………やっぱどう見てもカツコ悪いよなあ……………」

どうせモテモテになるんならもっところキリツとしてズバツと決めた方が……………」

時代だから新しいポーズも考え……………」

レッド・ブラック・グリーン「お前は黙ってるお!!!」

三人は甲羅攻撃でイエローに激しく突っ込んだ。

ノコイエロー「どげざっ!?!」



マリオ「そんな事よりも!! お前らこんな所で何しに来やがったんだ!?!」

ノコレッド「ああ!?! 何しにつて、決まってんじゃねえか!?! 以前のピーチ城襲撃作戦が完全に丸潰れになっちまったから、

落ち込んでるクツパ様を喜ばせるためにここを襲撃したんだよ!?!」

木乃香「あれ? そう言えばこの亀ちゃん達、この前の戦いにはおれへんかったな?

あの時はどうしたん?」

ノコブラック「どうしたつて…城で留守番してた以外何したと思っただよ?」

ノコレッド「そんな事より!! マリオ!! せつかくこの場で貴様と再会したんだ!?!」

その記念つて言う事で、今直ぐこの場で戦おうじゃないか!?!」

マリオ「おお、やろうじゃないか!?! もう悪さが出来ないようにしてやるよ!?!」

刹那「私も協力します!?!」

木乃香「ウチも手伝うえ!?!」

ノコブラック「おう、やろうじゃねえか!?!」

ノコグリーン「手加減なしだ!?!」

そしてしばらく六人共お互い睨み合いながら構え出すと、ノコレッドは突然構えるのを止めた。

ノコレッド「………と言いたい所だが………せつかくこの街でお前らと会えたんだから、

ちよつと勝負の方針を変えてみたらどうだ?」

マリオ「はあ？ 何をいきなり……………？」

ノコレッド「分からないのかあ？ ここキノコシティは、  
かつてカートレースのコースとして使われた街でもあ  
るんだぞ！？ だから今回の勝負を、

カートレースで決着ケリを付けるってのはどうだあ！？」  
マリオ「カ、カートレースだって！？」

夕映「あの、何ですか？ そのカートレースと言うのは……………？」  
彼女は気になりながらキノピオにそう問い掛けた。

キノピオ「あ、夕映さん達には知りませんでしたね？ 実はここキ  
ノコ王国には、

『マリオカートグランプリ』と言うカートレース大会が  
あるんです。

開催される期間は異なりますが、キノコワールド大陸各  
地になる場所をレースコースにし、

大会によってルールも異なりますが、

最もと言えば時間無制限でアイテム使用可のガチンコレ  
ースを行っんです。

マリオブラザーズやピーチ姫とデイジー姫、もちろん私  
やキノピコも選手として参加してますが、

何でもあのクツパも一緒に参加しているんです。」

夕映「えっ！？ それマジですか！？」

彼女はクツパまでもレースに参加していた事を耳にした瞬間、愕然  
とした。

マリオ「カートレースで決着ケリを付けるって、一体どう言うつもりだ  
！？」

ノコレッド「別にいゝ？ 俺はただ場所に応じて肉弾戦よりレース  
対決を要求してるのさ！

特にこっちはそれ専用のカートに乗って来たんだし、

せつかくだからお前らとレースしたいって訳よ！」  
マリオ「……………で、どう言う風にレースしたいって言うんだ？」  
ノコレッド「そうだなあ……………ここは一つ賭けをしたい所だな。」  
マリオ「賭け？」  
ノコレッド「そう！ その賭けはもちろん、もし俺達ノコブロスが勝ったら、

我が偉大なるクツパ様がお望みのピーチ姫を頂くとしよう！」

彼はピーチに指しながらそう言った。

ピーチ「えっ!？」

キノじい「な、何じゃとお!？」

のどか「ピ、ピーチ姫を……………!？」

夕映「頂くですと……………!？」

ノコレッド「ついでにそこにいる見知らん姫も頂くとしよう。」

彼はデイジーに指しながらそう言った。

デイジー「なっ!?!? ちょっとついでって何よ、ついでって!?!?

って言うか何で私まであんたらに……………!?!?

キノピコ「お、落ち着いてください、デイジー姫様！」

彼女は慌てながら怒り出すデイジーを抑え出した。

マリオ「…じゃあ、もしお前らが負けたら、大人しく引き去るんだな？」

ノコレッド「おう、いいぜ？ 大人しく尻尾巻いて帰るさ！ もし

俺達が負けたらな！」

マリオ「……………いいだろう、その勝負、受けて立とうじゃないか！」

レサレサ「マリオ!？」

刹那「マリオさん!？」

ノコレッド「おう、そう来なくちゃな！ さすがにお前、一度挑戦が来ては無視出来ない方だからな！」

そりゃ引き受けてくれないとこっちも困るがな！」

マリオ「…で、レースと言っても、どう言うレースを行いたいんだ？」

ノコレッド「そうだな……………」

確かこの街は『\*第4回マリオカートグランプリ』の『スターカップ』で使われたのだから、

その大会通りのルールをやるうぜ？ そのルールはもちろん、チーム戦だ！

俺達ノコブ羅斯は二組に分かれ、一つのチームとしてレースを行う！

そう言うお前らマリオブラザーズともう一組で一チームを結成させ、

二組対二組と言う形でレースをするんだ！ チームの中で一組がリタイアしても構わないが、

逆に両方共リタイアした場合が生き残ったチームが勝利となるからな！

そしてチームのどちらか一組だけでもゴールしたら、そのチームが勝利となる！

アイテムは各大会に使用された奴全て使用可だ！ どうだ、引き受けるか？」

マリオ「ああ、もちろんだ！」

刹那「ちょ、ちょっと待ってください！ ホントに引き受けるつもりなんですか！？」

もしこれが奴らの罠だとしたら……………！！！」

ノコレッド「心外だねえ…今回は正々堂々で競<sup>や</sup>るつもりだ！ いくら俺らが悪役でも、

レースのルールだけはきちんと守りたい方なんぞね！」のどか「けど、もし彼らが一チームとして結成したら、こちらは誰と組むんですか？」

マリオ「そうだな。マリオブラザーズともう一組って奴が言うて

「だから、俺はルイージと組む事にするよ。」  
デイジー「じゃあ、私達も協力するわ！一緒に行動すれば怖い物なんてないわよ！ねっ、ピーチ？」  
彼女はピーチと肩を並べながら、勝気でピーチにそう言った。

\*『マリオカート ダブルダッシュユ！！』の事。

ノコレッド「おっと、残念ながらそれはダメだな！」

ピーチ・デイジー「えっ？」

ノコレッドがそう言い出すと、二人の姫君は同時に耳を疑いながら彼に振り向いた。

ノコレッド「あんたらは俺達の賞品なんでね…そうである以上参加させる訳には行かないぜ！」

デイジー「はあ！？ちょっと何それ！？何次から次まで勝手な事を……………！？」

キノピコ「姫様、落ち着いて！！」

再び怒り出すデイジーに対し、キノピコは再び慌てながら彼女を抑えた。

キノピコ「では誰がマリオブラザーズと組むんですか！？」

無論私とキノピコでは力不足で足手纏いになりますか…

……………」

ノコレッド「フンッ！そんなの決まってるだろ！マリオブラザーズの次に参加するのは、その二人だ！！」

彼はマリオの隣にいる刹那と木乃香に差しながらそう言った。

刹那「えっ！？」

木乃香「ウ、ウチらが…！？」

ノコレッド「そう！お前達は以前の事件でマリオブラザーズと加担し、我々クッパ軍団を難なく薙ぎ払えた。

だからその代償としてお前達をこのレースに参加させてもらう！それまでに意義は認めないぜ！！」

マリオ「ちょ、ちょっと待てよ!! こいつらは元々カートレースの事なんて全く知らないんだぞ!？」

そんな勝手に決めては困るだろ!？」

ノコレッド「そんなの男女で乗って行きゃあいいだろうが？」

別にマリオブラザーズと女二人と言う組み合わせでいいってな訳ねえだろ？

マリオと女の誰かで、お前の緑の弟と女の誰かと言う組み合わせもあるだろうが。」

マリオ「そ、そりゃそうだが……………」

彼は隣にいる刹那と木乃香に向きながらそう答えた。

マリオ「…どうする、二人共?」

刹那「どうすると言われても……………お嬢様はどうしますか?」

木乃香「うう~~~~ん……………でも確かにウチはそのカートレースの事あんま知らへんし、

是非経験しても悪うないと思うなあ……………。それに、一

度引き受けてしもうた物はもう避けられへんし、

ここはOKオケイとしようかな?」

刹那「OKオケイって…しかしお嬢様! もしこれが危険な事でしたらどうするんですか!？」

特に私がお側にいられないと言う事だけで……………!!」

木乃香「大丈夫やん! ウチはマリオさんとルイーダさんのどちらかと乗る事になるんやろ?」

それならウチ大丈夫やから、心配せんといて!」

刹那「し、しかし……………」

彼女は木乃香の事を非常に心配するが、隣にいるマリオは腕を組みながらこう言った。

マリオ「…まあ、彼女がそこまで言うんなら、そうするしかないだろうな。とすれば、

彼女はルイーダに任せて、刹那は俺と一緒に組む事にしよ

う。いいな、刹那？」

刹那「……………そ、そうですね。ここは仕方がないですね。そう  
しましょう。」

彼女は不安でありながらも、頷きながらそう答えた。

ノコレッド「よぉ〜し！！　そうと決まれば早速レースの準備をす  
るぞー！！　ノコブロスー！！

倒れた『ノコノコダツシユ』と『パタパタダツシユ』  
を立て直すぞー！！」

ノコブラック「おうー！！」

ノコグリーン「おい、イエロー！　いつまで寝てんだ！？　とつと  
と起きて準備に掛かるぞー！！」

彼は先程突っ込まれて倒れたノコイエローを無理矢理起こした。

ノコイエロー「…ふぉあ？」

ピーチ「刹那、木乃香、本当にごめんなさい。私達のために参加

してしまつて……………」

刹那「いえ、そんな。姫様をあの輩に譲る訳にも行きませんから。

」  
のどか「でもこれだと私達もサポート出来なくなるね……………」

夕映「ホントにすみませんです。」

二人は申し訳なさそうにそう言うが、逆に木乃香は笑顔でこう言っ  
た。

木乃香「大丈夫やて！　その代わりに、ウチらの活躍をしっかりと見と  
つてな！」

レサレサ「マリオさんも大丈夫ですか？　奴らの言う通りにレース  
など行つて……………」

マリオ「大丈夫だよ！　こう見えても何度も優勝した事があるんだ  
から、勝つ自信なら十分あるよ！」

レサレサ「それはそうと……奴らには自らのカートをお乗りのよ  
うだけど、

そう言うマリオもカートありますの？」

マリオ「えっ……………」

彼女がそう言った後、マリオはしばらく黙り込んだ。

マリオ「……………ああああ！！　そうだったあっ！！　レースを  
やるにもかかわらず、

肝心なカートを忘れてたあ！！　これじゃあレースなんて  
出来ないぞお！？」

彼は両手で頭を抱えながら、うつかりとした表情でそう叫んだ。

しかし、そんな彼の前にキノじい<sup>い</sup>が立ち上がり、  
喉を鳴らしながらこう言い始めた。

キノじい「ウオツホン！　マリオ殿、その事に関してはご心配なく  
！　こんな事もあるうかと、

じいはいつでも用意しておりましたぞ！」

マリオ「えっ？」

その時、キノじい<sup>い</sup>はポケットから無線を取り出し、誰かに通話し始  
めた。

キノじい「ええ、こちらキノじい！　例の物を頼みましたぞ！」

????「あいよお！　承知しましたあ！！！」

ギギギギギギッ！！！！

その時、突然曲がり角からトラックが猛スピードで走行し、マリオ  
達の前に止まった。

それを見たマリオ達は固まった状態で啞然としたが、その間にトラ  
ックから一人の男が降りて来た。

その男はキノピオであったが、キノコ帽子と上着は黒くて炎模様が  
描かれていて、



サングラスと無償髭をしていた。

「????へい、お待ちい!!」ご注文通りの品、持って来ましたぜい!!!」

マリオ「ああ!! あんた確か…『バーレル火山』の『ヒノピオ』」

ヒノピオ「おお、マリオさんじゃないですかあ! それにピーチ姫様も! いやあ、」

「長らくお久しぶりです!」

ピーチ「そう言うヒノピオさんもお久しぶりね!」

彼女は笑顔でそう答えた。

刹那「え、知り合いなんですか?」

マリオ「ああ、ちよつとな……………」

キノじい「まあ、それより…例の奴を出してくれんかの?」

ヒノピオ「まあまあ、そう急かさんでくださいよ! 今から出しますから! マリオブラザーズの愛車、

『レッドファイアー』と『グリーンファイアー』、ただ

いまお届けに参りましたよ!」

彼がそう言いながら、トラックのシャッターを開き、中から二体の車を引き出した。

一体は『M』と書かれた赤い車で、もう一体は『L』と書かれた緑の車であり、

それぞれはマリオとルイーダの愛車としてイメージされていた。

マリオ「おお! 『レッドファイアー』と『グリーンファイアー』」

! 懐かしいなあ〜!」

キノじい「で、ちゃんと動けるんじゃない?」

ヒノピオ「もちろんですと! ちゃんと整備しましたから、問題一切ありませんよ!」

マリオ「ありがとう、ヒノピオ! おかげで助かったよ!」

ヒノピオ「いえいえ! 当然の事をしたままでですから!」

その後、マリオは刹那と木乃香に振り向き、こう言った。  
マリオ「よしっ！ 先程打ち合わせした通りに行くぞ！ 刹那は俺と一緒に、

木乃香はルイージと一緒に組んで走るぞ！」

刹那「はい！」

木乃香「うん！」

二人は同時に頷きながらそう言った。

マリオ「…とその前に……………おい、ルイージ！！ いつまで絶望モードに入ってたんだ！？

とつとと正気に戻って準備するぞ！！！」

ルイージ「…はい……………？」

マリオが今までずーっと落ち込んでいたルイージに呼び掛けると、ルイージは体育座りをしたまま、ゆっくりと兄の方へ振り向いた。

こうして、刹那と木乃香の初めてのカートレースが始まるのであった……………。

## 第17話 ダブルダッシュュー！！

………マリオ達がノコブロスとのカートレース勝負を引き受けてからしばらく経つと、

それぞれの車に乗ったマリオブラザーズと木乃香と刹那、そしてノコブロスは、

赤信号の前に待機していた。その間にレースの事を聞いた市民達は、観戦のために集まって来た。

もちろんのどかと夕映、ピーチとデイジー、そしてキノピオ達も、その観客達の中にいた。

のどか「わあ……何かすごい人達が集まりましたね！」

レサレサ「どうやらマリオ達がレースをするって言う風の噂を聞いて、ここに集まって来たのですわね。」

夕映「早いですね、風の噂って……。」

デイジー「それはそうと………何でアー言う組み合わせな訳……？」

彼女は何か嫉妬しているのか、マリオと刹那、

そしてルイージと木乃香と言う組み合わせを細くした目で見詰めながら、隣にいるピーチにそう言った。

ピーチ「……と、とりあえず、見守りましょ……。」

彼女は苦笑いをしながらそう答えた。

マリオ「で、どのようなコースにするんだ？」

ノコレッド「おう、こう行こうぜ？ あの信号が青になったらスタートだ！ 大会通りのコースで行くが、

途中で『キノピオハイウェイ』に入る！ そこで『ムーンリッジ』から降りて、

『キノコブリッジ』を通過し、ここまで戻って来ればゴールだ！ 勝負は一周戦で行くぞ……！！」

マリオ「おう、望む所だ！ 刹那、準備はいいな？」

刹那「はい！！」

マリオは背後にいる刹那にそう言うと、彼女は頷きながら自信満々にそう答えた。

木乃香「はわわわあゝ……………何かホンマに緊張して来たわあゝ……………」

ルイージ「大丈夫だよ！ しっかり捕まって置けば問題ないって！」

ノコレツド「よおし、位置に付けよ！！ 間もなく青に変わるぞお！！」

彼がそう言い出すと、全員ハンドルを強く握り締め、赤くなっている信号を睨み付けていた。

マリオ「刹那、しっかり捕まれよ！ こっから一気にロケットスタートで行くからな！」

刹那「はい！ 分かりま……………！」

彼女がそう言おうとしたその時、一体の車がそのまま横切り、それに気付いた彼女は、

一瞬にして冷静から慌てる表情に変わった。

刹那「えっ！？ ちよ、ちよっと待ってください、マリオさん！！

ほ、本当に大丈夫ですか、これは！？」

マリオ「大丈夫だって！ ロケットスタートのタイミングはバッチリだから、

しっかり捕まってるんだよ！」

刹那「違う！！ そうじゃなくて、走行中の車が……………！！！」

ドギューウウウウウン！！！！

そして信号が青に変わった時、四体の車はロケットスタートを行い、物凄いスピードで走り出した。

その事に気付かなかった刹那と木乃香は、ハンドルを強く握り締め、

身を浮かばせながら飛んで行った。  
スタートしてから観客達は大いに歓声を上げ出し、その声からにして当然ながらマリオ達を応援していた。

ピーチ「レースが始まったわ！」

デイジー「しかも全員ロケットスタート！ あの亀、やるわねえ」

「……………！」

夕映「でもこれではレースの状況が分かりません！ のどか、『  
ディアリウム・キユス  
いどのえにつき』で調べた方がいいと思いますよ！」

のどか「うん！ そのために『コスプレカード』を引かないと…！」

『来れ』！！』

彼女は呪文を唱え、『ネオ・パクティオーカード』を発動させた。

発動中にのどかの体が光り始め、

それに気付いたピーチ一行は、その眩しい閃光に対し、目を手で塞いだ。

レサレサ「きゃっ!? な、何ですの、この光は!?!」

セバスチャン「ま、眩し過ぎて見えんですじゃ!?!」

ヒノピオ「な、何なんだこれは!?!」

キノピオ「こ、これってもしかして、この前クツパと戦った時に使った魔法では…!?!」

そして光が収まった後、のどかは制服姿から違う姿に変身した……  
…と云いたい所だが、

実は制服姿のままになっていた。ただ彼女の身に付いて来たのは、赤縁眼鏡と一冊の本であった。

見た目通り違和感がなさそうだが、この姿によると、彼女は『コスプレカード』の姿になっていた。

のどか「やった！ 『コスプレカード』を引いたよ！」

ピーチ「見て！ また姿を変えたわ！」

デイジー「ホントだあ……………って、全然変わってないじゃない？」

眼鏡をかけてるトコ以外……。」  
夕映「いえ、これでも一応は変身したのです。　以前は『アーマーカード』を引いた事で、

あのような格好に変身出来たのですが、今回は『コスプレカード』を引いたので、

変身はこれだけです。　一応この眼鏡が証拠です。」

デイジー「マジで？　全然違和感がしないんだけど……。」  
ピーチ「どう違うの？」

夕映「前回ののどかは、敵の情報を調べるための辞典を使用していました、

今回は読心術が可能な本を使用しています。　ただし、絵日記ですが……。」

レサレサ「えっ、読心術！？　では、これは魔法か何かですか？」

キノピオ「そうみたいです。　彼女達、一応魔法使いですから。」

ヒノピオ「へえ、これが魔法って奴かあ！　生で見ると結構すごい物だなあ！」

セバスチャン「しかし読心術が使える本とは、さすがに珍しい物ですな？」

魔法の事に関しては少々ご存知ですが、このような魔法は初めて見ますな！」

キノジ「それもそうであろう。　なぜなら彼女らは別の世界から来た人間じゃから、

珍しい魔法を持つても当然じゃからな！」

彼がそう言うと、レサレサは耳を疑った。

レサレサ「え？　別の世界？　それってどう言う意味ですか？」

夕映「あの、説明はまた後にしますので……。」  
「とりあえず、のどか！　さっそく読心術を使うです！」

のどか「うん！　ええと……。」  
「いどのえにつき……簡易小型版  
4分冊……来れ！」

思考追跡……マリオ・ルイージ・刹那・木乃香……！！」

彼女が呪文を唱えると、手に持っていた本が四つに分裂した。更に各種の本には、

マリオ達の名前が表紙に刻まれていた。

デイジー「うわっ、何これ！？ 本が分裂した！？」

ピーチ「しかもマリオ達の名前が書き込まれてるわ！？」

その瞬間を目の当たりにした二人の姫君は、啞然としていた。

夕映「相手の名前が刻まれている本は、その相手の心を読む事が出来るんです。

しかも絵日記ですので、相手の思考までも覗く事が出来るんです。

ただし、ちょっと絵が雑っぽく見えてしましますが……。」「  
のどか「とりあえず、これでマリオさん達の状況を見ますね！」  
彼女がそう言った後、全員はマリオ達の心の中を写す日記を見始めた。

…その間にマリオチームとノコブロスチームは、走行中の一般車を避けながらレースを続けていた。

通過する事で一般車はマリオ達にクラクションを鳴らすが、全員気にせずそのまま走り続けた。

ちなみに現在の順位は…1位：ノコレッド&ノコブラック…2位：マリオ&刹那…

3位：ノコグリーン&ノコイエロー…4位：ルイージ&木乃香…となっている。

刹那「マ、マ、マリオさん！！ こんな状況ではレースが出来ませんよ！！」

「ここは車が全ていなくなるまでやった方が……!?!」

マリオ「そんな事してる暇はないよ! それに、これもレースコースの一部なんだから、」

「気にせず走るしかないよ!」

刹那「えっ!? この車もレースの一部なんですか!? つまり障害物扱いですか!?!」

マリオ「疑問があるのは分かるけど、これもこのレースのルールなんだ!?!」

とにかく今は他の車を気にしないでレースに集中するんだ!?!」

刹那「は、はい!?!」

その後、道の先に複数の虹色に輝く『はてなマークの付いたブロックが出現し、

それに気付いた刹那は早速慌て始めた。

刹那「!? マ、マリオさん!! 危ない!! 避けて、避けて!」

マリオ「大丈夫だよ! 安心しな!?!」

彼が平然にそう言うと、全員そのままブロックに突っ込んだ。だがそのブロックはただ軽く散り、

刹那は後ろへ振り向きながら唖然としていた。

刹那「あれ……? い、痛くない……って言うか、何も感じなかった……?」

マリオ「あれは『アイテムボックス』と言ってな、あれに通過するとアイテムを入手出来るんだよ!

ほら、手に何か持ってるだろ?」

彼がそう言うと、刹那は自分の左手を上げてみた。するとその手には、赤いノコノコの甲羅を持っていた。

その甲羅を持っていた事に気付かなかつた刹那は、逆に驚いていた。刹那「なっ!? あ、赤い甲羅!? い、いつの間に!?!」



マリオ「そうやってブロックに通過すると、必ず戦略になるアイテムを手には入れるんだ！」

それぞれは攻撃用、トラップ用、パワーアップ用などがあるって、

ガチンコレースには欠かせない物ばかりなんだ！ で、今君が持っているのは『アカこうら』！

追尾機能を持った甲羅だ！ それを前後どちらかにいる相手に投げ付ければ、

標準した相手に追撃するんだ！ ほら、前方にいるあいつらに投げってみろ！」

刹那「は、はい！ それっ！！」

彼女が頷いた後、前方にいるノコレットとノコブラックに向かって『アカこうら』を投げた。

すると微妙な方角に投げられた『アカこうら』は、回転しながら前方にいる相手に追い掛け始めた。

刹那「あ、本当だ！！ 相手を追い掛けている……！！！」

マリオ「よしっ！！ このまま当たれば俺達が行けるぞ……！！！」

ノコレット「そうはさせるか！！ ブラック……！！！」

ノコブラック「おう……！！！」

彼が頷いた後、突然車の周囲に三つの緑色の甲羅が出現し、周囲を旋回し始めた。

そして追尾していた『アカこうら』が一つの甲羅にぶつけると、その甲羅と供に破壊された。

マリオ・刹那「なっ……？！」

ノコレット「ヘッヘエ……！！ ざまあ見やがれえ……！！！」

ノコブラック「そう簡単に俺達がくたばるかよ……！！ ついでにこいつも食らいな……！！！」

二人が後ろにいるマリオと刹那に舌を出しながら嘲笑した後、

ノコブラックは周囲に旋回していた甲羅を二人に目掛けて発射させ

た。

マリオ・刹那「わわわあっ！！」

攻撃に気付いたマリオは必死にハンドルを回し、発射された甲羅を回避した。

刹那「な、何ですか、今の甲羅は！？ しかも先程私が投げた甲羅とは全く違いましたよ！？」

マリオ「くそっ、まさか『ミドリこうら』を持っていたとは…！  
『ミドリこうら』は『アカこうら』とは違い、

一直線でしか攻撃出来ないタイプなんだ！ しかもどちら  
も一つから三つまでのセットがあり、

使用するとストック状態に使えるんだ！ ストック状態に  
成れば、三発連続で発射するだけじゃなく、

他の攻撃から守つたり、体当たりで相手に攻撃したり、色  
々使えるんだ！

「だけどそのせいでチャンスを逃してしまった…！！」

刹那「…とりあえず、マリオさん！ 今はレースを始めたばかりで  
す！ チャンスならまだまだあります！

「今はレースに集中して走りましょう！」

冷静さを取り戻した刹那は、悔やむマリオに助言を伝えた。 それ  
を聞いたマリオは、

「先ず落ち着きを取り戻した。」

マリオ「…フツ、まさか君に言われるとはな。 そうだな…まだ始  
まったばかりだ！

「絶対に負けないぜ！！」

気合を取り戻したマリオは、ハンドルを強く握り締めながら、前方  
の相手を追いながら先を進んだ。

…一方彼らの後ろから走り続けていたノコグリーンとノコイエロー、  
そしてルイージと木乃香は、

先に進むためにお互い競い合いながら苦戦していた。

木乃香「あゝん、全然追い付かへゝん！」

ルイージ「くそあ、あいつらが邪魔ばつかするから先に進めない！

！」

ノコイエロー「へへゝんだあ！ お前らなんかにはそう簡単に先へ進ませないぜ！

その間にお前らはこいつでも食ってな！」

彼が後ろにいるルイージと木乃香に罵倒した後、顔の付いたバナナの皮を投げ落とした。

ルイージ・木乃香「うわわわわあゝゝゝ！？」

そして二人の車がバナナの皮を轢いた瞬間、車が滑ってスピンし始めた。

ノコイエロー「ハツハツハアゝ！ ざまあ見ろお、バアゝゝゝカア！！」

ルイージ「くそっ！！ 『バナナ』を使うなんて、汚い真似をお！！」

木乃香「せ、せやけど、全然進まれへんし、このままやと、ウチの負けやあゝゝゝ……………」

彼女は先程のスピンによって目を回しながらそう言った。

ルイージ「まだ諦めるの早いよ！ 木乃香、さっきアイテムボックスを通過した時、

何を手に入れた！？」

彼が後ろに立っている木乃香に振り向きながらそう言うと、彼女はそれに応じてアイテムを取り出した。

そのアイテムは、白い水玉模様の付いた赤いキノコ帽子に、小さな黒目の付いた可愛らしいキノコであった。

木乃香「あれ？ 何やこのキノコ？ 可愛らしいなあ？」

ルイージ「『キノコ』！？ それだ！！ それをエンジンに投げ付けて！！！」

木乃香「え！？ くないすんの、これ！？」

ルイーダ「いいから早く！！」

木乃香「わ、分かった！」

彼女が言われた通りにキノコをエンジンに投げ付けると、突然エンジンがブーストアップし、

彼女を再び身を浮かばせながら、物凄いスピードで飛び出して行った。

そして先程より高いスピードで走り出した二人は、見事にノコグリンとノコイエローを通過した。

ノコグリーン・ノコイエロー「な、何い！？」

二人が追い抜いたルイーダと木乃香を見た瞬間、愕然とした。

木乃香「わわわわ、な、何やのこれ！？ 急にスピードが…！？」

ルイーダ「あのキノコはスピードアップさせてくれるパワーアップアイテムなんだ！」

おかげで奴らを追い抜く事が出来たよ！ この調子でゴールを目指すよ！！」

木乃香「うん！！」

ノコイエロー「くそお〜！！ 負けてたまるかあ〜！！！！」

…一方のどか一行は、『ディアーリウム・エトユスいどのえにつき』でマリオ達の活躍を確認していた。

その同時にのどかは体力温存のためか、

キノピオが近くのコンビニで買って来たポテトチップスを食べながら魔法を使い続けていた。

のどか「マリオさんと刹那さんは2位で、ルイーダさんこのかさ

んは3位になってます!」

夕映「どうやら木乃香達は一つ追い越したようですね?」

キノピオ「いやあ、しかしこれが魔法なんだなあ〜! こんな魔法を見るのは初めてだよ!」

レサレサ「そうですね…今まで見た魔法の中でも初めてですわ! でも何でポテトチップスを食べながら確認してるんですの?」

キノピオ「はい、何でも彼女達の場合、魔法を使う度に体力が消耗してしまうようなので、

温存のために食べているのだとか……………」

のどか「マリオさん達、間のなく高速道路に突入します!」

ピーチ「キノピオハイウェイね? あそこは車が多いから、なかなか大変なコースだと思うけど……………」

デイジー「でもここことは変わらないでしょ?」

キノピオ「いえ、逆に反対車線がないため、幅が狭いだけです。狭い状態だと、

他の車との通過はやや困難だと思います。」

夕映「とりあえず、見守り続くしかないですね。」

…一方マリオ達は、たくさん車が走行している高速道路、キノピオハイウェイにいた。

そんなマリオ達は、クラクションを鳴り捲る多くの車を避けながら、レースを続けていた。

刹那「マ、マリオさん！！　ここ、さつきより車が多過ぎて危ないですよ！？」

マリオ「しょうがないだろ！？　ここもコースなんだから！！」

刹那「ここもレースコースなんですかあ！？　ちよつと常識から掛け離れてません、

このレースのルールって！？」

ノコレット「チツ！　あいつら、まだ追い続けるつもりか！？　ノコブラック！」

ノコブラック「おう！　それえ、『パイ』でも食らえー！！」

彼が頷いた後、突如に取り出した『パイ』を後ろにいるマリオに投げ付けた。

そしてその『パイ』は見事にマリオの顔に命中し、視界を失わせた。マリオ「うわっ！？」

視界を失ったマリオは、ハンドルを派手に回し始めた。そのため、車はジグザグに動き、危うく車や壁にぶつかるころであった。

刹那「わわわっ！！　マ、マリオさん！！　あ、危ないですよ！！　マリオ「わ、分かってるけど、か、顔があ……！！」

彼がそう答えた後、刹那は慌て始めた。

刹那「えつと……何か拭く物、拭く物………そうだ！！」

彼女がふと思い出すと、一つの『キノコ』を取り出し、それをエンジンに投げ付けた。

するとエンジンがブーストアップし、車は猛スピードで飛び出し始めた。

そのため、マリオの顔を被らせていた『パイ』は突風により拭き取られ、視界を取り戻せた。

その同時にマリオと刹那は、ノコレットとノコブラックを通過し、先頭に移動した。

ノコレッド・ノコブラック「な、何い!？」

刹那「やった!! 追い抜いた!! 大丈夫ですか、マリオさん!？」

マリオ「あ、ああ…スピードアップによる突風のおかげで視界を取り戻せたよ。」

ありがとう、刹那! よく『キノコ』を使ってまで思い浮かべたな?」

刹那「走行中マリオさんが色々教えてくれたおかげですよ!」  
彼女は微笑みながらそう答えた。

一方ルイージと木乃香は、ノコグリーンとノコイエローと互角のスピードで走りながら、  
お互いにぶつけ合っていた。

ノコイエロー「オラオラ、落ちやがれえ!!」

木乃香「うわっ!?! ちょ、ちょっとそれ危ないえ!?!」

ルイージ「くっ…さっきから汚い真似を…って、うわっ!?!」

ルイージが前を見ると、道の先に二体の大型トラックが走っていた。

しかも二体とも両車線に走っていて、

道は完全に塞がっていた。そして四人は、そのままトラックに接近しようとしていた。

ルイージ「わあわわわわっ!!! ト、ト、トラックが…!!! これじゃ前に進めない…!!!」

木乃香「ルイージさん、映画みたいにあれの真ん中から通り抜けられへん!?!」

ルイージ「無茶言わないでよ!?! そんな神技が出来るほど僕は上手くないよ!?!」

それにこのカートじゃ、そんな事出来ないよ!!!」

ノコグリーン「イエロー、奴を使え!!」

ノコイエロー「おうよ!! それえっ!!」

チュドオオオオオオオオオン!!!

ノコグリーンの指示により、ノコイエローを白い目と小さな足、そして背中にゼンマイの付いた爆弾を取り出し、

それをカートの後ろに投げ付けた。するとその爆弾は爆発し、その爆風により二匹のノコノコは、

二体のトラックの上を飛び越え、そのまま前へと着地した。それを目の当たりにしたルイージと木乃香は、

目を大きく開きながら愕然としていた。

ルイージ「な、何い~~~~!!?」

ノコイエロー「ヘツヘ~~~~!! 逆転だぜえ〜! おっ先い〜  
~~~~!!」

木乃香「な、何やの、今の!? 爆弾!?!」

ルイージ「あいつら、『ボム兵』を持ってたのか!? しかもそう言う使い方があったなんて……」

く~~~~、またもや卑怯な真似をお~~~~!!!!」

彼は歯を食い縛りながら悔やみ始めた。

木乃香「せやけど、トラックのせいで前に進めへんわ……このままやとウチらの負けやあ……。」

ルイージ「う~~~~ん……何とか出来ないかなあ……? 木乃香、

このトラックを飛び越えられるようなアイテム、何か持っていないかな?」

木乃香「堪忍な……さっきアイテムボックスに触れへんかったから、何も持つてへんわあ……。」

ルイージ「く~~~~……しょうがない……時間は掛かるけど、これが隙

間を作るまで待つしかないか……。」「
彼はがっかりしながら、トラックの位置が変わるまで、そのまま運
転し続けていた。

…一方のどか一行は、まだ日記に写るマリオ達の活躍を見守り続け
ていた。

のどか「マリオさんと刹那さん、1位になりました！ けどルイー
ジさんとこのかさん、

4位じになっちゃいました……。」「

ピーチ「やっぱり、高速道路だと道の幅が狭い上に車も多いから、
レースコースにしては最悪ね……。」「

夕映「車を全てストップする事は出来ないのですか？」

キノじい「それは不可能ですじゃ。一般車を障害物として扱うの
もレースのルールですじゃ。

それは危険なのは承知じゃが、これも仕方がない事です
じゃ。」「

のどか「マリオさん達、高速道路から出て、崖のある道に入りました！」

デイジー「崖のある道って、確かムーンリッジだったよね？」

ピーチ「そうね…あそこは崖があるから、落ちたら即効アウトだわ
……。」「

キノピオ「マリオさん、刹那さん、がんばってください！」

キノピコ「ルイージさんと木乃香さんもがんばって！」

：一方マリオ達は、曲がり角になっている崖のある道路、ムーニリツジにいた。

この道にも当然クラクションを鳴らす車が走行していたが、マリオ達は引き続きそれを回避しながら走り続けていた。その間にビリになっていたルイーダと木乃香は、ようやくノコグリーンとノコイエローの所まで追い付いた。

木乃香「待てえ〜〜〜!!」

ルイーダ「やっと追い付いたぞお〜〜〜!!」

ノコイエロー「あいつら、しつこい奴らだな!? ならこいつでも食ってる!!」

ドガアアアアアアン!!!

ノコイエローが雷のような形をしたアイテムを取り出した時、落雷がルイーダと木乃香に直撃した。

ルイーダ・木乃香「あうわああああああああ!!」

そして落雷を受けた二人は、突然小さくなった。

木乃香（高音）「な、何や!? あの亀ちゃん達、急に大きくなったあ!?!」

ルイーダ（高音）「いや、違う!!! 僕達が小さくなっちゃったんだよ!!! あいつら、

『サンダー』を使って僕達を小さくさせちゃっ

たんだよ!」

ノコイエロー「へへへ〜!!! しばらくその姿でゆっくりしてな、鈍間共お〜!!」

彼は舌を出しながら、そのまま先へ走って行った。逆にルイーヂと木乃香は、小さくなってしまった事でスピードが落ちてしまい、彼らの後を追えなかった。

ルイーヂ（高音）「くそお、あいつらあゝゝゝ！！ 木乃香、何か持ってない！？」

木乃香（高音）「え、ええゝつとお……………！！」
彼女は焦りながら何かを取り出そうとした。

ノコイエロー「ハツハツハツハツ、絶好調だぜえ！！ このまま行けば俺達の勝ちだあ！！」

ノコグリーン「…ん？ おい、あそこにいるのは……………？」
彼がそう言うと、ノコイエローは道の先を眺めてみた。

するとそこには小さくなったノコレッドとノコブラックがいて、彼らもその姿になってしまった事でスピードが落ち、他の二人の所まで接近して来た。

ノコイエロー「ゲッ！？ レ、レッドにブラック！？」

ノコレッド（高音）「バカヤロー！！ やっぱりお前らの仕業かあ！？」

ノコブラック（高音）「俺達も巻き添えにしてどうすんだよ、このバカタレがあ！！」

ノコイエロー「あっ、そうか！！ 『サンダー』は使った奴以外の奴に攻撃するんだった！！」

アハハハ、悪い悪い！ すっかり忘れてたわあゝ！！
彼は苦笑いをしながら、小さくなったノコレッドとノコブラックに謝った。

ノコレッド（高音）「笑って許せると思ってるのか、このボケエ！？
おかげでスピードが落ちちまったんだぞ！？」

ノコブラック（高音）「元の状態に戻るのにどれほど時間が掛かるのかお前ら分かって……………！？」

しかし、ノコレッドとノコブラックが怒鳴っている間に、突然ノコブ羅斯の背後から巨大な何かが迫って来た。

ノコブ羅斯「ガメルツ!？」

そしてその巨大な何かは、そのままノコブ羅斯を轢き潰し、走り続けた。その巨大な何かの正体は、

何と巨大化したルイージと木乃香であった。

木乃香（低音）「ほわあ~~~~!! ウチら急に大きくなってもうたわあ~~~~!？」

ルイージ（低音）「『きよだいキノコ』のおかげだよ! あれを使うと僕達が巨大化して、

より早く動けるんだあ! でも正直びっくりしたよお……………」

まさかホントに持ってたとはねえ!

木乃香（低音）「いやあ…これも運かなあ? せやけど、さつき亀ちゃん達轢いちゃったみたいやけど、

大丈夫かな…?」

ルイージ（低音）「心配ないよ! この程度で潰れてもまだ生きてるし…それに、

潰れた状態だと相手もスピードが落ちるから、

こっちに取っては好都合だよお!」

ノコレッド（高音）「ぐつぞあ~~~~!! あの緑と小娘、やりや

がったなあ!？」

ノコイエロー「必ず倍返しにしてやらあ~~~~!!!」

彼らは潰れた状態でそう悔やんだ。

その間にマリオと刹那は、やはり二人も先程の落雷に当たったのか、彼らも小さくなっていった。

刹那（高音）「な、何で私達が小さくなったんですか!? さつき

雷が落ちて来ましたが…!？」

マリオ（高音）「きつと誰かが『サンダー』使ったんだ！早く元に戻らないと、

このまま後ろにいる誰かに……!？」

彼がそう言いながら刹那と供に後ろへ振り向くと、巨大化したルイージと木乃香が接近して来た。

しかもマリオと刹那が小さくなってしまっているため、ルイージと木乃香は彼らが前にいる事に気付いていなかった。

木乃香（低音）「あれえ〜？ そう言えばマリオさんとせつちゃんどこにおるんやろお〜？」

ルイージ（低音）「さあ…多分先にいるんじゃないかなあ？」

刹那（高音）「わわああああ!？ ルイージさんにこのちゃん、でかなつとるう〜!？」

マリオ（高音）「しかもあいつら、俺達がここにいる事に気付いてない!？ おい、ルイージ!!」

ちよ、止まれ止まれええええ!!!!」

慌てるマリオ達とキョロキョロしながら運転するルイージ達だが、効力がなくなつたためか、

四人共元の姿に戻つた。そのためか、お互いに気付いた四人は一瞬にして驚きを見せた。

ルイージ「わわっ!？ 兄さん!？」

木乃香「せつちゃん!？」

刹那「お嬢様!! 元に戻つたんですね!？」

マリオ「ルイージ!! お前危なかったぞ! 俺達が小さくなつていたのを気付かなかつたのか!？」

後もう少しで潰されるところだったぞ!!」

ルイージ「ああ、ご、ごめん、兄さん! こっちも巨大化してたから気付かなかつたよ!」

刹那「でも、これで私達チームはトップに入りましたね! このま

まゴールすれば、私達の勝利ですよ！」

マリオ「まだ早いよ、刹那！ この先にあるキノコブリッジを通らないと、キノコシティには戻れないからね！」

だからもう辛抱がんばろう！！」

ゴールを目指すために気合を入れたマリオ達は、キノコブリッジへと向かうトンネルの中に入った。

マリオ「みんな、ここを抜ければキノコブリッジだよ！！」

しかし、彼がそう言った後、突然目の前に浮遊する白いイカが現れた。 それを見たマリオ達は、

思わず驚き出した。

刹那「な、何ですか、あのイカは！？」

木乃香「宙に飛んどうるえ！？」

マリオ「あ、あれは…『ゲツソー』！？ つて事は、まさか…！？彼の不安が的確だったのか、ゲツソーと呼ばれるイカはそんなマリオ達に墨を大量に吐き出した。

そのため、四人共真っ黒に染めてしまった上、視界を失ってしまった。そして役目を果たしたゲツソーは、

そのままどこかへ飛び去って行った。

ルイージ「わあ~~~~！！！！ やっぱりい~~~~！！？」

木乃香「ひゃっ！？ な、何やこれえ！？」

刹那「す、墨のせいで何も目が…！？」

マリオ「ま、まさか、あいつらの仕業じゃ…！？」

ノコレッド「正解~~~~！！！！」

マリオ達が視界を失っている間に、ノコブ羅斯は猛スピードで戸惑っているマリオ達に通過した。

ノコイエロー「へへへ~~~~、倍返しにしてやったぜえ！」

ノコブラック「俺達をナメる奴はこうなるんだよ！！」

ノコレッド「安心しな！ 俺達が先にゴールしてやつから、その間

にお前らはそこでゆっくりしてなあ！」

刹那「い、今の声…ノコブロス!?」

木乃香「ああ〜ん、何も見えへえ〜ん！」

マリオ「くそっ!! 奴がゲツソーを使ったから、墨のせいで何も見えない…!!」

これだと前が全然…!!」

そうしている間に、マリオ達とノコブロスはトンネルを抜け出し、キノコブリッジと言う赤い橋に到着した。

ノコブロスはそのまま余裕に橋を渡るが、その間にマリオ達は橋を渡る前に道の真ん中でジグザグに走っていた。

木乃香「わわ、ル、ルイーダさん、しっかり…!!」

ルイーダ「ダメだ…全然見え…うわっ!？」

彼が思わずハンドルを強く回した事で、隣にいたマリオと刹那にぶつかった。

マリオ「うわっ!? ちょ、ルイーダ!! どこ見て運転してんだよ!?」

ルイーダ「ご、ごめん! ただ見えなくて…!!」

しかし、ぶつかった反動が強かったのか、マリオと刹那は橋桁の方へ向かっていた。

しかもその橋桁にダッシュパネルがあり、その上に走ったマリオと刹那は、

猛スピードで橋桁を駆け上がり始めた。しかもその突風により、マリオと刹那が被っていた墨は拭き取られ、

綺麗になった上に視界を取り戻せた。

マリオ・刹那「うわっ!？」

猛スピードまで橋桁の頂上まで上ったマリオと刹那は、地上にいるノコブロスを追い越し、

橋の出口まで辿り着いた。もちろんそれに気付かなかったノコブ
ロスは、そんな二人に愕然とした。

ノコブロス「な、何い~~~~!?」

刹那「わっ、マリオさん！ 見てください、私達奴らを追い越しま
したよ!？」

マリオ「そ、そうか…確かこの橋桁はショートカットとしても使
われてたんだ……。

これはラッキーだ…ルイージがあそこでぶつからなかった
ら、ここまで来れなかったかもしれない…。」

刹那「事故でも後でルイージさんに感謝しないといけませんね。」

マリオ「ハハッ、そうだな。」

彼は少々苦笑いをしながらそう答えた。

ノコブラック「な、何て奴らだ!? 橋桁を使ってここまで来ると

は…!？」

ノコイエロー「ど、どうするよ、レッド!? このままだと奴らが
勝っちゃうぜ!？」

ノコレッド「ぐぬぬぬう………そう簡単に奴らを勝たせてたまる
かあ!！」

…一方のどか一行は、引き続き日記に写るマリオ達の活躍を見守り
続けていた。

のどか「マリオさんと刹那さん、1位に入りました！ その同時に
全員橋を渡り抜き、街に戻って来ています!！」

キノピコ「ルイージさんはどうなんですか!？」

のどか「…残念ながら4位です……………」。

デイジー「4位!? もう、ルイージったら何してんのかしら!?」

夕映「でも、このままマリオさんと刹那さんがゴールすれば、こちらの勝ちとなります!」

ヒノピオ「そうとすれば、敵がこれ以上邪魔しなければいいのでは?」

レサレサ「いえ、それ以前に障害物となる一般車が問題ですわ?」

そもそも一般車の数が多いために、

回避するだけでも進むのに時間が掛かりますわ?」

セバスチャン「何とかありませんかのう…?」

ピーチ「……………あっ!」

突然何かを思い出したのか、ピーチは思わず声を出した。それに
気付いたのどか達は、

一斉に彼女の方へ振り向いた。

のどか「どうかしましたか?」

ピーチ「……………ねえ、今マリオ達、どこから入って来るの?」

のどか「え……………えっと…東にある高速道路の出口ですけど……………」

?

彼女は日記を調べながらそう答えると、ピーチは冷や汗を垂らしながら不安になり始めた。

夕映「どうかしたんですか?」

ピーチ「……………あそこ…反対車線なんだけど……………」。

のどか・夕映「えっ!?!」

…キノコブリッジから渡り抜け、キノコシテイに戻って来たマリオ達は、早速反対車線の道路に突入した。そのため、多くの一般車はクラクションを鳴らしながら、まるでマリオ達を襲い掛かるかのように、逆方向へ走っていた。そんなマリオ達も、必死になりながらハンドルを回し、何度も多くの車を回避し続けていた。ちなみに順位からにして、ノコブ羅斯は再び先頭に走り、マリオ達は再び後ろの方にいた。

刹那「マ、マリオさん！！　ここ、反対車線ですよ！？」
マリオ「分かってるよ！！　でもここもレースコースなんだから、我慢してくれ！！」

そんなマリオ達が車を必死に避けながら先を進んでいる間に、道の前にアイテムボックスが現れた。しかしノコブ羅斯は一個だけのボックスを通過し、マリオ達は二つに繋がっているボックスに通過した。

刹那「あれ？　今のボックス、先程とは違って二つに繋がっていたような…？」

マリオ「あれは『ダブルアイテムボックス』！　普通のととは違ってアイテムを二つ入手する事が出来るんだ！

つまり君だけじゃなく、俺にもアイテムを手に入れたって事だよ！」

刹那「本当ですか！？　でも、運転している間は少々使用は無理では…？」

マリオ「大丈夫！　その時は見てなって！」

しかし、ノコブ羅斯が十字路を通過した後、突然横の通路から芋虫のような形をした長い緑色のバスが通り掛り、通路を塞がった。そのため、マリオ達はそのままバスに向かって

走ろうとしていて、

それに気付いたマリオ達は早速パニックになり始めた。

マリオ・刹那・ルイーダ・木乃香「わあああああ！！！！　バ、バ
スウウウウウウ！！！！」

刹那「どどどど、どうします、マ、マリオさん！？」

マリオ「おおお、落ち着け刹那！！　さっきボックスからアイテム
取っただろ！？」

彼も慌てながらそう言うと、刹那も慌てながらアイテムを取り出し
た。そのアイテムは、

先にオレンジが染まった一羽の白い羽根であった。

刹那「え、何ですかこれ！？　羽根みたいですけど…？」

マリオ「『羽根』！？　それだあ！！　それを使え！！！！」

ルイーダ「木乃香も何かアイテムとかない！？」

木乃香「え、えつとお…！！」

彼女も慌てながらアイテムを取り出した。そのアイテムは、何と
テレサだった。

木乃香「あれ、何やこれ？　レサレサちゃんみたいな可愛エエのが
…？」

ルイーダ「それ…『テレサ』だ！！　今直ぐそれを使って！！」

木乃香「えっ！？　せやけど、これ何やの！？」

ルイーダ「いいから早く！！！！」

刹那と木乃香はアイテムを使うと、マリオと刹那は突然高く飛び上
がり、横切るバスを飛び越えた。

そしてルイーダと刹那は透明化し、バスをそのまま通り抜け、元
戻った。

マリオ「ふう〜、実に危機一髪だったあ！」

刹那「な、何ですか今のは！？　車が突然飛び上がったんですが…
！？」

マリオ「ああ、あの『羽根』はジャンプ効果があつてね、障害物や攻撃を回避したり、

ショートカットしたりする事が出来るアイテムなんだ！

しかも懐かしいなあ……………」

＊ 第1回のグランプリ以来だよ！」

＊ 『マリオカートシリーズ』の一作目、『スーパーマリオカート』より参照。

ルイージ「た、助かったあ……………」

木乃香「い、今の何やったの！？ ウチら、急に透けてもうたけど……………」

ルイージ「あの『テレサ』は、レースだと体が透明化して、どんな物を通して事が出来るんだ！」

もちろん攻撃も受けないし、結構便利なんだよ！」

木乃香「そうなんや……………」何かウチ、さよちゃんになった気分やつたなあ……………」

ルイージ「え？ さよちゃん？」

木乃香「あ、ううん、何でもあらへん……………」ん？」

彼女は頭を振りながらそう言つと、手元に何かに気付いた。

木乃香「あれ？ そう言えば、ウチさつきアイテム使つたのに、何かまたアイテムが……………」？」

ルイージ「あ、そうそう！ それも『テレサ』の効果なんだ！ 透明化の同時に相手のアイテムも奪えるんだよ！」

木乃香「へえ、それもまたすごいなあ……………」

その後、マリオと刹那は見事にノコグリーンとノコイエローを追い越した。

ノコイエロー「ああっ！！ あの野郎！！ また追い越しやがった！！」

ノコグリーン「あいつらの事はレッドに任せる！俺達は後ろの奴を片付ける！」

彼がそう言っていると、ノコイエローは後ろの方へ振り向いた。すると後ろの方からルイージと木乃香が接近して来た。

ノコイエロー「…ははあゝ、なるほど？そろそろラストスパートだから、

こいつらと決着^{ケリ}を付けるって事だな？ヘッヘッヘ、それもいいねえ？

ちようどあいつらに色々世話になつたし、返すべき物を返さないとなあ…！」

木乃香「ルイージさん、あの亀ちゃん達、何かやらかすらしいえ！」
ルイージ「最後の攻撃でも仕掛けるつもりだな！？なら木乃香、さつき誰かから奪ったアイテムを使うんだ！」

木乃香「分かった！」

ノコグリーン・ルイージ「勝負は………。」

ノコイエロー・木乃香「これで決める……！」

…一方2位まで辿り着いたマリオと刹那は、先頭にいるノコレッドとノコブラックの所まで追い付いた。

ノコブラック「レッド、奴らが来たぞ！！ここで仕留めるか！？」
ノコレッド「バカ、この位置じゃ意味ないだろ！？とりあえず保留しとけ……！」

マリオ「よあゝし、こつから決めるよ！刹那、操縦交代だ！」

刹那「えっ！？交代って…私運転出来ないんですが…！」

マリオ「大丈夫だよ！そのままペダルを押しっ放しにして、ハンドルを固定していればOK^{オケ}だよ！」

「そんじゃ、頼むよ……！」

刹那「えっ、で、でもっ……………!?!」

拒否権がないまま、マリオは強引にも刹那を運転席に移し、マリオは後ろに立ち上がった。

そんな刹那は多少慌てながらも、マリオに言われた通りにペダルを押し放しにし、

車体が曲がらないようにハンドルを固定した。

ノコブラック「レッド、奴らが交代しやがったぞ!!」

ノコレッド「何い!?!」

マリオ「これで…決めるぜ!! 『ファイアボール』!!!!」

彼は五つの火球を手から放ち、前方にいるノコレッドとノコブラックに攻撃した。

ノコレッド・ノコブラック「熱ぢゃああああああ!!?!?!?!」

火球に命中した二匹のノコノコは、炎に包まれながら慌て始めた。

その間にマリオは急いで刹那と運転席を交代し、

そのまま燃えるノコノコ達を置いて先に進んだ。

マリオ「イッハア~~~~!! これで逆転したぞお!!」

刹那「さ、さすがマリオさん!!」

…一方のどか一行は、まだまだ日記に移るマリオ達の活躍を見守り続けていた。

のどか「マリオさんと刹那さん、逆転しました!! このまま真っ直ぐこちらへ向かって来ます!!」

ピーチ「ホントに!?!」

そしてのどか達は、ゴール地点となったスタート地点の反対側の道の方へ振り向き、

遠くからゴールへ向かっているマリオ達の方を眺めた。

キノピオ「ホントだ！ 遠くからですが、確かにマリオさん達の姿が見えます！！」

キノじい「ホツホツホツ、これも当然ながらマリオ殿達の勝ちですな！」

デイジー「で、結局ルイーダ達はダメだったの？」

のどか「えっと、ちよっと待つてください……………」

彼女はそう言いながら、ルイーダの日記を確認し始めた。

…その頃、マリオと刹那は余裕な表情で、最大速度でゴールを目指していた。

マリオ「よぉ〜し！ このまま抜ければ俺達の勝ちだ！！」

刹那「やりましたね、マリオさん！！」

しかし、二人が喜んでいる間に、黒焦げ状態なノコレッドとノコブラックが後ろから走り続けていた。

ノコレッド「くっそお！！ このまま勝たせるかあ！！ ノコブラック、例の奴を使え！！」

ノコブラック「おう！！ これでくたばんなあ！！！！」

彼はそう言いながら、羽根の付いた青いトゲゾー甲羅を取り出し、それをマリオと刹那に向けて投げ飛ばした。

するとその甲羅は高速で空を飛び、マリオと刹那の真上まで飛んで行った。それに気付いた二人は、

頭上から飛んでいる甲羅の方へ見上げた。

刹那「な、何ですかあれは！？」

マリオ「トゲゾーこうら！！？ し、しまっ……………！！！！」

ボガアアアアアアアアアアアアアアアアアン！！！！

甲羅は突然マリオと刹那に落下し、青色に大爆発した。
マリオ・刹那「ぐあああああああああ！？」

のどか・夕映「ああつ！？」

ピーチ・デイジー「ああつ！！」

キノピオ・キノピコ・キノじい「ああつ？！」

レサレサ・セバスチャン・ヒノピオ「ああつ！！！！」

その瞬間を目前にしたのどか達は、大声を出すほど驚愕した。

そしてマリオと刹那が爆発によって吹っ飛ばされている間に、
ノコレッドとノコブラックはそのまま彼らを追い抜き、先へと猛ス
ピードで進んだ。

マリオ「……しまった……！！」

ノコレッド「ヘッヘッヘェ〜！！ ざまあ見やがれえ！！ 俺達を
ナメる奴はみんなこうなるのだあ！！」

ノコブラック「悪は必ず勝つんだよお！！ 覚えときなあ！！」

ヒノピオ「ヤバイ！！ このままだと奴らが勝ってしまう！！」

キノピコ「そんなあ！！ マリオさん、刹那さん、立ってえ！！」

デイジー「もう、こんな時にルイージは何してんのお！？ のどか、
日記の方はどうなってるのお！？」

のどか「え、えつと、ちよ、ちよつと待つ……………！！」

ポオン！！

しかし、彼女が日記を調べながら慌てる、そのせいか体力が完全
に消耗し、元の学生服姿に戻ってしまった。

更に空腹状態になってしまったため、そのままお腹を抱えながら地
面に座り込んでしまった。

のどか「…す…すみません…：…もう、時間切れのようで…：…」
デイジー「ウソオオオオオオオオ!?」
彼女は頭を抱えながらシヨックを受けた。
夕映「そりゃもう全部食べちゃいましたから…：」
彼女は空っぽになったポテトチップを持ちながらそう言った。

その間、マリオと刹那は急いで倒れた車を立て直そうとした。
マリオ「は、早く刹那!!! 急いで車を立て直さないと…!!!」
刹那「でも、これでは時間が…：…!!!」

しかし、そんな事で言い合っている間に、突然巨大な何かが猛スピードで二人を横切った。

それから発生した風を感じた二人は、その物体が飛んで行った方向へ振り向いた。

刹那「な、何ですか今のは!?!」
マリオ「い、今のは…まさか…：…!!!?」

その間にゴールを目指しているノコレットとノコブラックは、笑いながら余裕に運転していた。

ノコブラック「もう直ぐゴールだけ、レッド!!!」
ノコレット「ハア…ッハッハッハッ!!! 遂に俺達はあの憎きマリオブラザーズに勝ったんだあ!!!」

これでピーチ姫（とそのおまけ）は俺達クッパ軍団の物だあ…!!!」

しかし、彼がそう笑っている間に、突然巨大な何かが猛スピードで彼らを横切り、先にゴールした。

その物体の正体は、何と巨大化したキラーだった。
ノコレット・ノコブラック「な、何iiiiiiiiii!?!?!?」

のどか「な、何ですかあれえ!?!」

夕映「あれは確か…この前城を襲った弾丸では……………?」

キノピオ「あれは『キラー』です!! 一時的にキラーに変身して、猛スピードでトップへ飛行すると言う強力な変身アイテムです!!」

夕映「えっ!? あれアイテムだったんですか!?!」

キノピオ「このレースだけでは……………」

レサレサ「と言う事は、後方にいる誰かが使ったのですわ!!」

ピーチ「で、でも、誰!? 誰なの!?!」

デイジー「もしかして、ルイーダさん!?!」

ノコレッド「だ、誰だ、あのキラーは!?!」

ノコブラック「グリーンとイエローか!?!」

全員は色々予想する中、ゴールを通過したキラーは元の姿に戻った。

そのキラーの正体は……………

ルイーダと木乃香だった。

のどか「ルイーダさんとこのかさんですう!!」

マリオ・刹那「えっ!?!」

ノコレッド・ノコブラック「何iiiiiiii!?!」

元の姿に戻り、ゴールを通過したルイーダと木乃香は、急ブレーキをかけながら車を止めた。

もちろんその瞬間を見た多くの観客達は、喜びに歓声を上げた。

ルイーダ「やったあ〜!! 僕達が勝ったぞ〜!!」

木乃香「やったやったあ、ウチらの勝ちやあ〜! ホンマによかったな、ルイーダさん!」

ルイーダ「何、元はと言えば君のおかげだよ! 君が『テレサ』を使っただけで、

誰かの『キラー』を奪って使う事が出来たんだ! 正直君が『テレサ』を持っていなかったら、

逆転は出来なかったよ！ ありがとう、木乃香！」

木乃香「そんなあ、ウチは別に……………」

ルイージから感謝された木乃香、頭を掻きながら照れていた。

木乃香「…せやけど、今の何かすごかったなあ……………」

ウチらが急にあのでっかいロケットみたいな何かに変身したから……………」

ルイージ「ああ、あれは『キラー』と言って、最下位かそれに近い順位になると、

入手する事が出来るアイテムなんだ。使用すると自分がキラーに変身して、

トップまで飛んで行く、正に逆転アイテムなんだよ！」

のどか「このかさあ〜ん！！」

デイジー「ルイージィ〜！！」

そしてルイージと木乃香が振り向くと、のどか達は喜びながら彼らの所まで駆け付けて来た。

その後、デイジーは喜びながらルイージを強く抱き締めた。

デイジー「よかったあ、ルイージ！！ 私信じてたよ！ ルイージは絶対に勝つて！！」

優勝おめでとぅー！！」

ルイージ「わわっ、デ、デイジー姫……………」

のどか「ホントによかった、このかさんが無事で……………」

夕映「よくがんばったですね！ おめでとぅですー！」

木乃香「アハハハ、ホンマありがとなあ！」

そんな彼らが喜んでいる間に、ゴール前に止まったノコレッドとノコブラックは啞然としていた。

ノコブラック「んなバカな……………あの緑と小娘が勝つなんて……………」

ノコレット「んぎいゝゝゝ！！！ 何でだちくしょう！？ イエローとグリーンは何してたんだあ！？」
負けた悔しさで地団駄しながら、彼はそう怒鳴り出した。

ノコイエロー「レットオゝゝゝ……………お待たせえゝゝゝ……………」
そしてノコレットとノコブラックは後ろの方へ振り向くと、ノコグリーンとノコイエローが遅くも辿り着いた。

しかし、そんな彼らの姿は、まるで何かにぶつかつたかのようにロボロになつていた。

ノコレット「コリア、お前らあ！！！！ 一体何をしてたんだあ！？」
ノコブラック「つて言うか、何だその姿は！？ 一体何があつたんだ！？」

ノコイエロー「それが……………逆転しようと思つて『キラ』を使おうとしたら、

その『キラ』が手元から消えてて……………」
ノコグリーン「そして気付けば、まさか奴らが『テレサ』を使って俺達から奪つてて、

そこでキラになつた奴らが俺達に激突してて……………」

ノコブラック「ぐわああああ、何て事だあ！？ それってラストスパートにして超最悪な結果じゃねえかあ！？」
彼は頭を抱えながらそう言った。

レサレサ「…あら？ そう言えばマリオはどうしたのですの？」
木乃香「あっ、そう言えば……………せつちゃんはどこ！？」

彼女はそう言いながら、のどか達と一緒に辺りを見回り始めた。

マリオ「ルイージ！」

刹那「お嬢様！」

そして全員振り向くと、マリオと刹那はようやくゴールの前に辿り着いた。

それに気付いたのどか達は、一斉に彼らの所まで駆け付けた。

ルイージ「兄さん!!」

刹那「せつちゃん!!」

マリオ「ルイージ、お前すごいじゃないか! まさか『キラー』で逆転勝利するなんて……」

見直したぞ! さすが我が弟、よくやったな!

ルイージ「いやあ、それほどでも……」

彼は頭を掻きながら照れ出した。

木乃香「せやけどせつちゃん、大丈夫!? さっき飛ばされたのを見たけど、

怪我はあらへん!?

彼女は心配そうに問い掛けるが、逆に刹那は笑顔でこう答えた。

刹那「いえいえ、大した事ではありませんよ。それに私よりお嬢様のご無事でよかったです!

優勝おめでとうございます!」

木乃香「もう、何言ってるの、せつちゃんったら……!」

ピーチ「マリオ、刹那……ルイージ、木乃香……よくがんばりました。本当におめでとう!」

彼女は笑顔でそう言うが、逆にマリオは申し訳なさそうな表情で下を向いた。

マリオ「いえ……ピーチ姫……申し訳ございませんでした。

せつかくピーチ姫のために全力尽くしてがんばったのに、最終的にはゴール出来ませんでした。

こんな情けない自分が恥ずかしいです……本当に申し訳ございませんでした!」

彼は頭を下げながらピーチに謝った。

刹那「マ、マリオさん……!!」

ピーチ「そんな、謝らなくていいのよ！ 私は何よりも、マリオ達が無事に戻って来ただけで十分よ。」

例え私のためであっても、誰が優勝しようが脱落しようが、そんなの関係ないわ。

みんな無事に戻って来ただけでも、私は本当に嬉しいわ。

四人共、私のために、本当にありがとう！」

彼女は笑顔で感謝すると、レースに参加した四人はそれに見惚れた。マリオ「姫……………」。

ノコレッド「ちつくしよおおおおお！！！」

突然悔しさで大声を出したノコレッドに気付いたマリオ達は、ノコブロスの方へ振り向いた。

ノコレッド「またしてもマリオに負けたあ！！ 皆の時だけでなく、今度はカートレースにまで負けちまうなんて……………だ

あああああ！！！」

超ムカつくぜ、こなくそお！！！」

彼は頭を抱え、激怒しながら大声でそう言った。

ノコブラック「それに、大体からと言って汚えぞ！！ 必殺技を使うなんて、

反則じゃねえかあ！！！」

マリオ「えっ、何言ってるんだ？ あれは必殺技じゃなくて、『スペシャルアイテム』なんだけど……………」。

ノコブロス「えっ！？」

マリオがそう答えると、ノコブロスは唖然とした。

ノコレッド「……………いや、そうだった……………確か第4回のレースでそんなアイテムがあったんだっただ……………」。

彼は再び頭を抱えながら、シヨックにそう言った。

ノコブラック・ノコグリーン・ノコイエロー「そんなあ……………！！！」

他のノコブロス達も、それを聞いてショックを受けた。

刹那「あの…何ですか？ そのスペシャルアイテムって…？」
マリオ「ああ…第4回の大会だけ使用されたアイテムで、

特定の選手だけしか使えないって言う専用アイテムなんだ。
例えば俺とルイーダは『ファイアボール』で、

ピーチ姫とデージー姫は相手のアイテムを奪い取れる『ハ
ート』、

キノピオとキノピコは連続的にブーストが出来る『パワフ
ルキノコ』と言ったアイテムも、

専用アイテムなんだよ。」

ノコブラック「くっそおおお！！！！ やっぱどう考えても納得行
かねえ！！

「ここはやっぱ力尽くでもピーチ姫を攫わないと意味
ないぜ！！」

ノコイエロー「こうなりや肉弾戦で決着を付けてやらあ！！ 俺達
が勝つまでコテンパンにしてやるぜえ！！」

ノコグリーン「レッド、例の必殺技を使うぞ！！」

ノコレッド「バッキヤロオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！
！！！！！！！！」

しかし、卑劣にも肉弾戦を要求するノコブロスの三匹に対し、ノコ
レッドは彼らに大声で怒鳴り出した。

しかもその怒鳴り声が余りにも巨大だったためか、その場全体に響
き渡り、マリオ達も驚いた。

ノコレッド「誰が肉弾戦をやるっつうた！？ ええ！？ 特に俺
の許可もなしで何勝手に仕切ってたあ！？

ああ！？」

ノコイエロー「レ、レッド…?」

ノコレッド「勝負はもう決まってるんだ!! 俺達の負けだ!! だからこれ以上の手出しは無用だ!!」

マリオ「えっ………な、何で拒否するんだ?」

ノコレッド「言ったはずだ! 今回は正々堂々で競^やるつもりで、レースのルールだけは守ると!

だから俺達が負けたい上、ピーチ姫を攫^{さら}う必要はない! それで賭けの内容だったろ!？」

マリオ「そ、そりゃそうだったが………」

ノコブラック「レ、レッド、いいのかよそんな事で!？」

ノコイエロー「悔しくないのかよ、またマリオに負けてよ!？」

ノコレッド「バカヤロー!! 負けて悔しくても、それを認めるのが真^{マコト}の亀^{カメ}だろうが!？」

帰^{かえ}って鍛^{たくわ}え直^{ただ}してまた掛^かかりやい^いだろうが!! それとも何だあ!？」

俺の意見に文句でもあ^あんのかあ!？ ええ!？ そう言^いいたいのかあ!？」

ノコブラック・ノコグリーン・ノコイエロー「い、いえ………何でもないません………」

ノコブrossの三匹に怒鳴^{どな}り掛^かけるノコレッドに対し、三匹は冷^{ひや}や汗^{あせ}を垂^たらしながら引^ひいていた。

もちろんそんな彼らを見詰^まめていたマリオ達も、啞^あ然^{ぜん}とした表情で引^ひいていた。

ノコレッド「おい、マリオ!! 今日と言^いう今日はこれぐらいにしてやる!!」

だが次にまた会^あう時は必ず俺^俺達が勝^かつんだからな!!」

ノコブross「覚えてるお………」
彼らはそう言^いいながら、自分^{自分}達の車^{くるま}に乗り、そのまま走^まり去^いって行^いった。

夕映「……………何だったんですか、今のは……………?」
レサレサ「あいつら、あんな方々でしたっけ…?」
マリオ「…さ、さあ……………」
彼らはただ呆然としながら、走り去ったノコブロスを見送った。

マリオ「…でも……………これで俺達の勝ちだああああ!!!」
彼が喜びにそう言い出した瞬間、のどか達含めた多くの市民達は大喜びにはしゃぎ出した。

デイジー「ねえ、せっかくマリオ達が勝った事だし、この際レース優勝のパーティーでもしようよ!」

キノじい「えっ!?!」

ピーチ「そうね! 特に刹那と木乃香も初めてレースに参加した上に優勝したんだから、

そのお祝いもしないかね!」

キノじい「ええっ!?!」

二人の姫君が喜びながら話し合っていると、それを聞いたキノじいは啞然とした。

刹那「え、い、いいんですか、私のために祝つても…!?!」

マリオ「まあ、姫様が言うんだから、そうしようよ!」

木乃香「そうや! セっかくやから遠慮せんでもエエよ!」

刹那「そ、そうですか……………では、お言葉に甘えて…。」

レサレサ「ならあたくしの行き着けのクラブがありますの!

そこで優勝祝いのパーティーでも開きましょう!」

デイジー「そうそう! それがいい!!」

ヒノピオ「あの、私も参加してもいいでしょうか?」

ピーチ「もちろん! 何せマリオ達のカートを運んでくれるのに活躍したからね!」

のどか「パーティーだなんて…何だか楽しみたい…!」

ルイージ「えへへ、今日はたくさん食べたりするぞお〜！」

夕映「あの、そこで何か不思議なドリンクとかもありますか？」

セバスチャン「…貴女はさっきから何を仰ってるんですか？」

レースに勝った事で大はしゃぎするマリオ達と市民達。 そんな彼らが盛り上がっている間に、

キノじい「ただ一人、困った表情をしながら取り残されていた。

キノじい「ちよ、ちよっとお主ら、刹那殿達の仲間探しはあ〜〜〜

!？」

第18話 ネギ達の愉快な一日

……………キノコワールド大陸のキノコシティでマリオと刹那達がノコ
ブロスとカートレーヌ対決を行っていた同日……………

モビウス大陸のステーションスクエアの午前十時頃、エミーと明日
菜達は、

街中にあるファーストフード店『マクノシタ McNoshitas^ズ』の前に
立っていた。元々女子限定のお泊り会だったため、

ネギやソニックと言った男子はいなかった。寧ろ、現在の彼女達
は彼らと待ち合わせしているのだった。

しかし、そんなエミーと明日菜は、他の女子と違って腕を組み、不
機嫌そうに片足を鳴らしながら、ネギ達を待っていた。

エミー・明日菜「遅い……………」

聡美「遅いって、明日菜さんにエミーさん…約束の時間までまだ後
十分しか……………」

エミー「十分よ！！ こう言う時は約束の時間の数分前に会うのが
常識でしょ!？」

明日菜「そうよそうよ！ ったく、あのバカネギったら、レディを
待たせるなんて底が見えたわね!!」

真名「…そんな常識聞いた事もないのだが…。」
彼女は無意味に怒る二人に呆れながらそう言った。

千雨「…とは言えど、あの二人妙に仲がいいな。 昨日知り合った
ばかりだって言うのに…。」

茶々丸「どうやら昨夜の件で色々話し合って仲良くなったのでしょ
う。」

千雨「昨夜って、私に枕の雪崩を食らわせた後、私がサンドバッグ
で逆襲した時の事か？」

茶々丸「とは言っても、まさか千雨さんはあそこまで怪力だとは思
いませんでしたか…。」
千雨「誰が怪力だ!？」

菲「しかし、ネギ坊主もホントに遅いアルな？」

楓「落ち着くでござるよ。あー見えてもステーションスクエアと
ミスティックルーインの距離は遠い。」

電車で来るだけでも時間が掛かるでござるよ。」

「皆さあ~~~~ん!!!」

エミーと明日菜達が声が聞こえた方向へ振り向くと、ネギとカモ、
ソニックとテイルス、

ナックルズとルージユが駆け付けて来た。

ネギ「おはようございます、皆さ………!」

エミー・明日菜「遅い!!!」

ネギが笑顔で挨拶しようとしたその時、エミーと明日菜は怒りなが
ら大声で彼らに怒鳴り出した。

ネギ「ええ!?! な、何ですか!?! 約束の時間までまだ十分し
かないのに!?!」

ソニック「ネギ、エミーはあー言う奴なんだから、本気になんなよ。
」

エミー「ああ~!! ひつどあ~い!! 何よそれえ!?!」

本気になるネギに突っ込むソニックに対し、エミーは無機になつて
そう言った。

ナックルズ「おいおい、こんな所で無意味なケンカしてる場合じゃ
ないだろ?」

彼は頭の後ろに腕を組みながら、慌てるネギにそう言った。

ネギ「あつ、そうでした! で、今日は何をするんですけどっけ?」

エミー「あつ、そうそう！ 実はね…これからみんなで一日、このステーションスクエアで楽しく満喫しようと思ってるの！」

ネギ「えっ!？」

耳を疑ったネギは、思わず大声を上げた。

ネギ「た、楽しく満喫って、それってどう言う意味ですか!？」

明日菜「つまり、この街を色々回って遊ぼうって言う事なの！」

カモ「遊ぼうって、姐さん！ そんな事してる場合かよ!？」

ネギ「そうですよ！ 僕達は他の生徒達の行方を捜さなければ行けないし、こんな時に限って遊びに行こうだなんて…！」

明日菜「別にサボるとは言っていないでしょ？ 遊んでいる間に情報収集とかするから、それでもいいでしょ？」

ネギ「うう……でも、何でそう決めたんですか？」

エミー「だって、みんな別世界から来たんでしょ？ 別世界から来たって事は、この世界とは距離物凄く遠いって事じゃない！」

それって、もしみんな元の世界に帰っちゃったら、この世界だけしかない物を、

行ったり見たりする事が出来ないって事でしょ？ 人探し

だけで済ましちゃ余計寂しいじゃない！ だから、

せめて思い出作りと言う事で、みんなと一緒に色々やって

遊ぼうって事にしたの！」

明日菜「そうそう！ 私達、この世界の事全然知らないから、せめてどんな面白い物があるのか、

ここだけしか見れなかったり行けなかったり、色々やりたり学んだりしたいのよ！ もちろん私だけじゃなく、

みんなだってそうしたいのよ！」

ネギ「ええっ!？ 皆さんも!？」

彼は後ろにいる他の女子達に向きながらそう言った。

聡美「え、ええつと…まあ…確かにこの世界の科学技術に興味あるので、どんな物があるのか色々調べたいので…」

真名「私は別にいいのだが…事実上この世界の銃器とか興味あるからな。」

楓「拙者はさんぼ部として色々見回りたいので、どこで何をするか別に構わないのでござる。」

菲「私、この世界の食べ物とか興味あるアル！　どんな奴あるか是非食べてみたいアルよ！」

茶々丸「私は…その…オシャレとかに興味あるので…是非どんな物があるのか、見てないなと思ひまして……………」

千雨「私は逆に反対したんだが…逆に思えばこのパソコンの機器とかソフトとか色々興味深くなつてな、

せつかくだから付き合ってみようかと思つてな……………」

カモ「な、何と…普段なら絶対断るはずのクール達が珍しく賛成するとは…！？」

ネギ「…つて、ちょっと待つてください！　テイルス、まさかこの事を知つてたんですか！？」

彼は横にいるテイルスに向きながらそう問い掛けた。

テイルス「あ、うん…実は昨夜、ネギが寝て行った後またエミーから電話して来てね、それで色々打ち合わせしたんだ。

ホントは伝えるべきだったんだけど、色々チャンスがなかったから……………」

ネギ「でも、いいんですか、こんな事してもらつても？」

テイルス「僕も最初は色々意義はあつたんだけど、確かにエミーの一理はあるからね。　人探ししている間に遊ぶのも、

悪くないと僕も思つた。　それに、もし君の友達が全員見付かつて、

何もせずにそのまま元の世界に帰っちゃったら、それはそれで寂しいと思うんだ。　だから、

人探しも大事だけど、遠慮せずに遊んでつてよ！」

ネギ「で、でも、だからと言って……………ソニックさん達はどうなん

ですか!？」

彼は後ろにいるソニック達に向きながら問い掛けた。

ソニック「俺は別に構わないぜ? みんなが遊びたいなら、それでいいんじゃないのか?」

ナックルズ「確かに人探しをしてる最中遊ぶつてのは正直納得行かないが、まあ、別にいいんじゃないのか?」

せつかくこの世界に来たんだしな。」

ルージユ「あら、石頭のあんたがそこまで言うなんて、珍しいわね?」

ナックルズ「何だよ…そう言うお前はどなんだよ? 意義とかないのか?」

ルージユ「ぜえくんぜん! 私は同じ女として、大賛成よ! 女は何より買い物とかお喋りとか、

そう言うひと時を過ごすのが好きなのよ! そりゃ人探しも大切だけど、遊びも必要だからね!

もちろん、休暇中の私みたいだね!」

ナックルズ「お前は逆にサボってるんじゃないのか?」

ルージユ「休暇中つてさつき言ったでしょ!?! あんたちゃんと聞こえるように耳掃除してんの!?!」

彼女は呆れそうな表情をしているナックルズに突っ込んだ後、ネギの方へ振り向いた。

ルージユ「その代わり、私達は他のエリアに行つて情報収集してるから、その間にみんなはゆっくり楽しんでらっしゃい!」

ネギ「えっ!?!? そんな、いいんですか、そんな事しても!?!?」

ソニック「Don't ドント Worry! ウォーリー 遠慮すんなつて! こう言う時でも頼つても別にいいんだぜ?」

ナックルズ「お前達の仲間を探す事を約束したからな。だから、遠慮せずに楽しんでな。」

ネギ「で、でも……………」

ゴチインッ！！！！

ネギが不安に思い続ける中、背後にいた明日菜はネギの頭に拳骨を食らわした。

ネギ「ブビィッ!？」

明日菜「もう、一々遠慮しないの！　そこがあんたの一番悪い癖なんだから！」

子供のくせに子供らしく遊んじやいなさいよ！」

ネギ「で、でもアスナさん……！」

彼は痛みを感じる頭を抱えながら、明日菜に向けてそう言った。

明日菜「でもじゃない!!　大体から言うとな、今回の目的は思い出作りや友達探しだけじゃなく、

あんたのその欠けてる部分を完全に埋め尽くすためなのよ!？　全く子供の分際で偉そうに振舞って、

世間から変な目で見られてるの知らないの!？　だから今日と言う今日は、あんたを子供らしくさせるために、

死ぬ気で遊び捲くらせてやるわよ!!！」

ネギ「えっ!？　ちよつと、死ぬ気ってどう言う意味ですかあ!？」

ティルス「……明日菜って、いつもこうなの?」

カモ「まあ、あー見えても色々苦労してっからな、兄貴は……。」
二人は小声でそう話し合った。

ソニック「まつ、それはそうと………みんなはゆっくり楽しんで行きな！」

もちろんこのエリアで情報収集するつもりで遊んでつてもいいぜ?　俺は『スピードハイウェイ』に行つて、

色々探し回ってみるさー！」

ナックルズ「なら俺はここの下水道でも探ってみるぜ。　もしかし

たら下水道に隠れてる可能性もあるからな。」

ルージユ「じゃあ、私は屋上を次々飛び回って、上から地上を探ってみるわ。」

テイルス「じゃあ、ここで二手に分かれるとして！もし何か分かったら、駅前に集合するって事で！」

ネギ「皆さん、本当にすみません…僕達のために…。」

彼は申し訳なさそうにソニック達に向きながらお辞儀をした。

ソニック「別に気にするなって！俺達友達だろ？困った時はお互い様さ！」

ルージユ「そうよ！その間にゆっくりしてらっしゃい！」

ナックルズ「何か分かったら、駅前で集合な。」

ネギ「はい、分かりました。」

ソニック「そんじゃ、See you later！」

彼がそう言った後、ナックルズとルージユと共にその場から離れた。

ネギ「…テイルスさんは？」

テイルス「僕も一緒に付き合うよ！友達探しのついでに色々楽しみたいからね！」

ネギ「そうですか…分かりました。」

彼が申し訳なさそうに頷いた後、他の女子達の方へ振り向いた。

ネギ「では、早速どこに行きますか？」

エミー「そうね…やっぱり女の子の憩いの場と言えば……。」

エミー・明日菜「デパート……。」

ネギ「デ、デパート……ですか……？」

二人同時に腕を上げながらそう言ったエミーと明日菜に対し、ネギ

は少々引き気味になった。

エミー「そう！ 色んな物が売られているお買い物天国、ショッピングデパート！ お洋服からアクセサリ、

生活用品から食料、家具や家電、オモチャやゲームなどがいっぱい揃ってる、何でもありの場所なのよ！

まつ、ネギ達の世界にもあると思うけど、ここだけしか手に入れない物もたくさんあると思うよ！

特に女の子に取っては、オシャレなお洋服とかアクセサリとか、色んな物があるから、

もうどこへ行けばそう言う物を手に入れるのかと言えば、そこしかないって事よ！」

ネギ「は、はあ……………」

彼は理解していたかどうかは不明だが、とりあえず頷いた。

テイルス「…デパートか……………確かにそっちの方が情報がたくさんあるかもしれないし、

もしかしたらネギの友達も何かを探し求めるのにそこに訪れてるかもしれないね？

それはもちろんお金がなくてもね。」

ネギ「なるほど…確かに女の子が集まる場所と言えばデパート！他の生徒さんが訪れる可能性も十分ありますね！

何せ女の子はオシャレとか好きだと聞きました……………」

エミー「そう……………そこお……………」

彼女はネギに指しながら、彼の顔面近くまで迫り込んで来た。

ネギ「ひゃいつ!?」

エミー「今回デパートに寄るのは、あくまでもオシャレよ！ オシャレ・レ！ だって明日菜達を見なさいよ！

学校の制服だって言うけど、みんな同じ格好でしょ？ しかもこれ一着しかないじゃない!?

こんなのオシャレとは言わないわよ!? 女の子はね、何

よりもファッションが必要なの！

どこへ行く時は、ファッションだけは欠かせない必需品なの！ だから、今日はあたしの奢りと言う事で、

みんなが欲しいと思う服を買ってあげる！」

ネギ「ええっ！？ い、いいんですか、そんな事しても…！？ つて言うより、服って種類によりますが、

高いんじゃないですか！？ しかも人数分だとかなり高額になりますし…！」

エミー「平気平気い〜！ こう言う時は困った時はお互い様！ 遠慮なんて全然いらないわよ！

それに、あたしこう見てもお金たくさん持ってるし、あたしはティルスやソニックみたいに同じVIPだから、

特別に半額してくれるから問題ないわよ！ 大体お金であるリングは道中で腐るほど拾えるから、

心配なんて全くないわ！」

ネギ「へっ…？ 道中で…拾える…？」

説明すると、モビウス大陸の金銭単位であるリングは、人が住む街から離れたフィールドにたくさんあると言われている。

その出生は謎だが、自然的に出現し、回収する事が出来ると言われている。ただし、

ソニックやその仲間だけしか通行出来ないほど危険地帯になっているため、一般人はなかなか近寄れないらしい。

実はキノコワールド大陸も同じように、国の金銭単位であるコインはフィールド上にあり、

多くてもブロックの中に収められている物もあると言う。逆にこの世界にまだ慣れていないネギに対しては、

初耳どころか混乱する事実だった。

明日菜「でっ、そのオシャレに関して注目する人物は…ズバリ！！

「貴女よ！！！」

彼女はそう言いながら、後ろにいる女子達に振り向き、誰かに向けて人差し指を指した。

その人物は………聡美だった。

聡美「えっ！？ な、何で私ですか！？」

明日菜「だつてハカセ…これ言っちゃ悪いと思うけど、殺風景なんだもん！ 私、

中等部に入ってからハカセのオシャレな所見た事ないんだもん！ あると言えば征服と白衣姿だけで、

それ以外全然ないんだからね！」

聡美「で、でも…以前*相坂さんと初めて会った時、ちゃんと私服着てましたが…？」

明日菜「あれはノーカウント！！ 外出中の服は見た事もないわよ！？ 寮ん中で着てるようじゃ、

オシャレとは言わないわよ！？」

聡美「そ、そんなあ…。」

*アニメ第二期、第7話より参照。

菲「そう言えばよく考えたら、私もハカセのオシャレ見た事ないアル！ あると言えば征服や白衣だけじゃなく、

チャオバオス 超包子で働いてる時の中華服しかないアルな。 私もハカセの

オシャレ見たいアル！」

茶々丸「わ、私も是非、ハカセのオシャレ、見てみたいです…！」

二人は期待の目をしながら、慌てる聡美に向けてそう言うが、逆に聡美はそんな二人を見て啞然とした。

聡美「ええっ！？ そ、そんな、古さんはともかく茶々丸までえ！？ み、皆さんはどうなんですか！？」

彼女は慌てながらも、まだ意見も聞いていない真名達に振り向いて問い掛けた。

千雨「まあ…私に取っちゃどうでもいい事だが…改めて考えてみたら、確かに気になるっちゃ気になるな…」

楓「確かに今の八カセ殿は欠けてる箇所が非常に多いでござるな。」
真名「正に…多少弄り回るのにいい機会だな…」

三人の意見を聞いた聡美は、更に啞然とした。

聡美「ええっ!? そんなっ…!? って言うか、何ですかその意見は!？」

私皆さんから何か恨みを買わせるような事しましたかあ!？」

真名・楓・千雨「いや…別に…」

三人はポーカーフェイスのまま、まるで恨みがあるかのような雰囲気
を漂わせながらそう答えた。

ネギ「でも、確かに僕も葉加瀬さんのオシヤレな所、一度でもいい
から見てみたいですね!」

聡美「えっ!? ネ、ネギ先生までも…!？」

笑顔で言うネギに対し、聡美は顔を少々赤くなりながら啞然した。

しかし、そんな態度を見たカモは、

何かに気に掛け始めるようになった。

明日菜「さて、意見が決まったって事で!」

エミー「早速デパートへGO!!」

張り切りながらそう言った二人は、聡美の両腕を抑え、そのまま引き
摺りながら歩き出した。

聡美「えっ!? ちょ、ちよつと、エミーさん、神楽坂さん、何を
っ!? ちよつ、茶々丸、助けてえ〜!!」

そんな彼女は助けを呼びながら、そのままエミーと明日菜によって
引き摺られて行った。

その間に楓と菲は、そんな哀れな聡美に対して笑いながら後を付い
て行き、千雨と真名は呆れながらも、

真名だけ少しだけ笑みを浮かばせながら、後を付いて行った。

ネギ「…本当にこれで…よかったのかな…？」
カモ「…って言うかあのエミーって言う姉ちゃんと姐さん、妙に仲が
いいな…。」
テイルス「ハハハッ…昨夜のお泊り会のおかげかな…？」
三人は盛り上がる少女達を眺めて、ただ苦笑いをしていた…。

…ステーションスクエアの大型ショッピングモール、『JUNGO』
一般からブランド物の洋服やアクセサリはもちろん、書店から雑
貨屋、オモチャ売り場からゲームセンター、
スーパーマーケットからフードコート、スポーツ店から銃器専門店、
音楽からパソコン専門店など、
様々な店や施設が並んである、ステーションスクエアの人間なら誰
もが訪れる巨大ショッピングパートである。

そしてこのデパートに訪れたネギ達は、現在洋服店『NEW NA
VY』にいた。

明日菜とエミーは聡美を無理矢理試着室に誘い込み、彼女達が選ん
だ服を聡美に着させようとした。

もちろんそれに対する聡美は、嫌そうに抵抗するものの、体力の強
い相手には当然敵わず、逃げる事が出来なかった。

その間にネギは、一人の店員を捕まえ、名簿に載っている生徒達の
写真を見せながら情報を集めていた。

しかし、結局情報が掴めず、半分落ち込んでいた。

ネギ「…そうですか…。」

店員「申し訳ございません、何のお役に立てなくて…。」

ネギ「あ、いえ！ ありがとうございます！」

二人がお辞儀をした後、店員はその場から離れて行った。

ネギ「…どうやらこの店に来てないみたいだね…。」

カモ「何落ち込んでんだよ、兄貴？ まだ捜査は始まったばかりツスよ？ まだまだ調べる所が腐るほどあるから、

もつと探し回るツスよ！」

ネギ「…そうだね、まだ始まったばかりだもんね！ ありがとうございます、

カモ君！」

カモからの励みのおかげで、ネギは笑顔を取り戻せた。

「ネギイ〜〜〜！！！」

ネギが声が聞こえた方向へ振り向くと、入り口からテイルスが駆け付けて来た。

ネギ「テイルスさん！ どうでした、そっちの方は？」

テイルス「ダメだった…隣や向かい側にあるお店に立ち寄ってみたけど、

誰も君の友達と思われる少女を見掛けなかったみたいだ

よ。」

彼は頭を振りながらそう言った。

ネギ「そうですか…‥‥‥こっちも、何も情報を得られませんでした。」

テイルス「なら次のお店に立ち寄ってみるしかないね。」

楓「おお〜い、ネギ坊主！ 準備が出来たようでごさるよ！」

ネギ「え？ 何がですか？」

楓に呼ばれた彼は、そのまま試着室の前に立ち止まった。

エミー・明日菜「ジャ〜〜ン！」

試着室の中にいた二人がカーテンを開くと、そこには学生服からオシャレな服装をした聡美が立っていた。

その服装は林檎の絵柄が付いたピンクのTシャツにピンクのパーカー、リボン付きのフレアスカート、

そしてピンクのボアスノーブーツと言った、全身ピンク色のキュートな姿で、

更にお下げだった髪を赤いゴムで結ばれたツインテールになっていて、眼鏡も外されていた。

そんな姿をした聡美は、困った表情をしながら赤面していた。

ネギ「わあ〜〜〜！これが葉加瀬さんなんですか！？」

明日菜「そう！キュートにコーディネートした新しいハカセよ！」

聡美「か、神楽坂さん、エミーさん、やっぱりこれ恥ずかしいですう！！止めた方が……！！」

エミー「何言ってるのよ！？せっかく新しく可愛らしい姿になったんだから勿体無いでしょ！？」

テイルス「ホントなあ！さっきより一段と可愛くなってるよ！」

菲「すごいアル、ハカセ！今までよりも可愛くなたアルよ！」

楓「ホントでござるな！一瞬見間違えたでござるよ！」

真名「確かに、葉加瀬の割には意外と似合うな……」

茶々丸「素敵です、ハカセ！とってもお似合いです！」

五人は興味深い視線で聡美を見ながらそう言うが、逆に聡美は恥ずかしくて慌てるようになった。

聡美「そ、そんな、何皆さん揃ってそんな事言うんですか！？こんな格好、私にはとっても……！」

ネギ「いいえ、とっても似合いますよ！」

聡美「えっ……？」

ネギが笑顔でそう言うと、聡美はゆっくり彼の方へ振り向いた。

ネギ「僕、初めて葉加瀬さんのオシャレな所を見ますけど、前よりも今の葉加瀬さんはとっても可愛いですよ！」

聡美「そ…そんな…せ、先生まで……………」

彼女がネギにそう言われた時、より顔を赤く染め出した。だがそれを見たカモな、更に怪しく思うようになった。

カモ（ん…？ 何だ、ハカセさんのあの表情は…？ 今までそうだったけど、もしかして……………？）

エミー「ところで、次のもやってみたいけど、みんなは何が見たい？ クール系？ ムーディー系？」

それともラブリー系かポップス系かエレガント系？」

真名「クール系が一応見てみたいものだな…。」

楓「エレガント系はどうでござるか？」

菲「ああ！ 私はポップス系に一票アル！」

聡美「ちよ、ちよっと皆さん、私は着せ替え人形じゃないんですけどお！？」

盛り上がるメンバーズの中、聡美は更なる恥ずかしさで慌て始めた。

明日菜「あれ？ そう言えば千雨ちゃんは？」

彼女が辺りを見回すと、確かに千雨の姿が見当たらなかった。

茶々丸「千雨さんならこのお店の角にあるコスプレコーナーに行きましたか…。」

真名「そんなコーナーがあったのか…？」

エミー「コスプレかあ………………よしっ、それに決めた！」

聡美「えっ！？ な、何がですか…！？」

：一方、コスプレコーナーにいた千雨は、棚に飾ってあった様々なアニメやゲームキャラのコスプレ服を、興味津々に見ていた。

千雨「：これはいいコスプレ服だな…？ でも何のゲームかアニメのキャラの服なのか分からねえな…。」

やつぱり、これが私の世界との大きな違いなのかね…。」

エミー「千つ雨え〜〜！！」

ネギ達と供にコスプレコーナーにやって来たエミーは、千雨の背後から呼び出し、

それに気付いた千雨は驚きながら振り向いた。

千雨「うわあっ！？ な、何なんだよ、びっくりしたあ！？ 急に背後から驚かすなあ！！」

エミー「ごめえ〜ん！ でもそんな千雨はこんな所で何してんの？ もしかして、コスプレとか興味あるの？」

千雨「えっ！？ い、いや、別に、私はコスプレなんか全然…！」

彼女は顔を少しだけ赤く染め、頭を振り出しながら拒否した。

明日菜「何言ってるのよ、千雨ちゃん！ いつもネットアイドルとして色々コスプレしてるくせにい！」

千雨「はあっ！？ ちよっ、おまつ、何を言っ…！？」

明日菜の発言に対し、千雨は戸惑い始めた。

エミー「えっ、そうなの？」

明日菜「うん！ うちの世界では彼女は超有名なネットアイドルで、『ちつ』って言うHNで活躍ハンドルネームしてるらしいのよ！」

特に色んなコスプレを着て、それを写真に撮ってネットに掲載したり、掲示板で色んなファンと話したり、

インターネット内では超大人気らしいのよ！」

エミー「へえ〜、そうなんだあ！ そう言えばこの前それっぽい姿で魔法使ってたみたいけど、

そう言う事だったんだあ！」

千雨「だから私はネットアイドルなんかじゃないって言うてるだろお！？」

彼女は反発しながら必死に誤魔化そうとした。

茶々丸「千雨さん、隠しても意味ないと思いますよ。なぜなら最初からクラス全員にバレてましたし…。」

千雨「違うっつってんだろがぁ！？」

ちなみに千雨は、自分がネットアイドル『ちづ』である事を、世間から隠していたのだ。

しかし、授業中などの他人に見られそうな所で自身のホームページを更新したりなどの行動で、

彼女の正体は既に3-A生徒全員に見抜かれてしまっている。も

ちろん本人はそれを必死に誤魔化そうとしているが、

当然ながら無効化であった。特に魔法世界にいた時は、その事で千鶴に度々弄られていたと言う。

エミー「まつ、そんな事よりも！千雨にちよつとお願いがあるんだけどぉ……………」

千雨「な、何だよ…！？って言うか、聞いてんのかよ！？」

彼女は怒りながらそう言うが、その間にエミーはキュートな服装を着たままの聡美を前に押し出した。

千雨「えっ！？って、ハカセ！？な、何なんだ、その格好！？

予想以上にピッタリじゃねえか…！？」

聡美「そ、そんな事言わないでくださいよぉ…！！」

彼女は再び赤面しながらそう言った。

エミー「実はね、聡美をもっと色々オシヤレたくて、今度はコスプレに挑戦したいんだけど、

何かピッタリな衣装とかないかな？」

聡美「えっ！？ちよ、ちよつと待つてください！？私にコスプ

レって…!？」

彼女は背後にいるエミーに向きながらそう言うが、逆に千雨は興味深く聡美を見詰めていた。

千雨「コスプレエ？ ほっ？ それは面白い……………このコスプレの女王であるこの私にそう申し出るとは、

いい度胸じゃないか？ いいだろう、特別に私があんたのためにピッタリなコスプレを着させてあげようじゃないか!!」

聡美「ええっ!? そんなあ!？」

彼女は涙目になりながらそう言った。

菲「って言うか、自分で言ってるアルよ？」

楓「あんなに否定してたのに…。」

真名「天然だな…。」

三人はそう言いながら、遠い目で千雨を見ていた。

…数分後

千雨「これでどうだっ!!」

彼女が試着室のカーテンを開くと、そこにはキュートな服装からコスプレ姿になった聡美が立っていた。

その姿はグレーの襟付きに袖なしシャツと青緑のネクタイ、黒いミニスカートに長いブーツ、

長袖のような黒い手袋、頭にハイテクなヘッドホン、手に長ネギ、そして鬘だが明日菜と同じツインテールをした青緑の髪をしていた。

お分かりのように、現実で言うと、

聡美はあの『初音ミク』の姿になっていた。

聡美「いやあ~~~~ん!!!」

彼女は再び涙目になりながら恥ずかしがっていた。

菲「おお!!! これも意外と似合うアル!!!」

明日菜「ホントだ…改めて見ると更に可愛い…! 何か同じツイン

テールなのに悔しいなあ……………」

エミー「さすが千雨! ナイスチョイスよ!!!」

楓「これもまた見違えたでござるなあ〜」

真名「正に何でも似合いそうだな、葉加瀬は…」

茶々丸「ホントに可愛いですよ、ハカセ!」

テイルス「うん! 僕も正直びっくりだよ!」

聡美「ちよつと皆さん、そんな目で見ないでくださいよお〜!!!」

余計恥ずかしいじゃないですかあ!!!」

彼女は興味深い目で見ている明日菜達に対し、更に恥ずかしさに戸惑った。

聡美「長谷川さん、何なんですかこの衣装は!? それに何で長ネギなんですかあ!?

全く訳分らないんですけどお!?

千雨「全国的に大人気なネットアイドルの服とか書いてあったから、それにしたんだよ。」

それに長ネギはしょうがないだろ。元からセットで付いて

たんだから…」

聡美「だからと言って恥ずかしいですよ、この格好!!!」

ネギ「でも、とっても可愛いですよ、葉加瀬さん! ホントに似合ってますよ!」

聡美「えっ!? そ、そんな、ネギ先生も言わないでくださいよお…!!!」

彼女は再びネギの優しい言葉に対して恥ずかしがるが、そんな力も更に聡美の行動を見て怪しく思い続けた。

カモ（やっぱり…さつきから様子が変だな？ これってやっぱり…！？）

千雨「じゃあ、次は何するか？ こっちは夢の妖精の服（『ナイツ』シリーズの『ナイツ』）とか、

バトルアイドルの服（『ファイティングバイパーズ』の『ハニー』）とかあるが…。」

明日菜「あつ、こっちの赤い修道女シスターの服（『サクラ大戦』シリーズの『エリカ』）とか可愛いね…？」

エミー「ホントだあ！ でもあたし、この花の妖精の服（『パネルでポン！』の『リップ』）の方が可愛いと思うよ？」

楓「そうでござるか？ こっちの黄昏の姫君ドレス（『ゼルダの伝説』シリーズの『ゼルダ』）がいいと思うが…。」

菲「ええっ！？ 私、このサファイアの服（『ポケモン』シリーズの『ハルカ』）がいいアル！！」

真名「何を言う？ こっちのゼロスーツ（『メトロイド』シリーズの『サムス』）がいいと思うぞ。」

茶々丸「私はこの宇宙レポーターの服（『スペースチャンネル5』シリーズの『ウララ』）がいいと思いますか…。」

聡美「ちよつと皆さん、いい加減にしてくださいよお〜！！」
新しいコスプレ服を選ぶ明日菜達に対し、聡美は更なる恥ずかしさ

の余りにも涙目で反発した。
その間に横にいたネギとティルスは、ただ苦笑いをしていた。

…聡美の着せ替え計画を終えた後、ネギ達は洋服店を後にし、他の
お店や施設に立ち寄ってみた。

そこで明日菜達が遊んでいる間に、ネギとテイルスは引き続き情報収集のために店員や来客、更に警備員などに聞き込みをしたが、結果的には何も得なかった。

そしてしばらく経つと、ネギ達はデパートを後にし、ステーションスクエアの駅前にいた。

明日菜達の手元にはデパートで買った品物の入った紙袋があり、もちろんこの状態で聡美は元の学生服に戻っていた。

エミー「あゝ、デパートは楽しかったねえ〜！」

明日菜「ホント！ 色んな物も買ったし、特にハカセも楽しんでたからねえ！」

聡美「何がですかあ！？ 正直疲れましたよお〜！」

彼女はまだ赤面しながら反発した。

ネギ「ホントにすみません、エミーさん。わざわざ明日菜さん達のためにお金使って…。」

彼はお辞儀しながらエミーにお礼を言った。

エミー「いいのよ！ みんなのためにやった事だから、お金の事は気にしないでいいって！」

彼女はお辞儀するネギに手を振りながらそう言った。

ネギ「でも次はどこへ行きますか？ まだ時間がありますし、ソニックさん達もまだ来てないみたいですけど…。」

エミー「フフツツ、よく聞いたね？ 次に向かう場所は…あそこよおっ！！！！」

彼女が気合を入れながら指を指すと、ネギ達はその方向へ振り向いた。

そこにはエレベーターのような入り口があり、『トウインクルパーク』と書かれたネオンサインが飾ってあった。

明日菜「何あれ？ ト…トウイ…トウインク…何か変な英語だ

ね…？」

ネギ「トウインクルパークですよ、アスナさん！ 和訳すると『煌く公園』ですよ！」

カモ「兄貴、無理に和訳しなくてもいいッスよ…。」

茶々丸「そこで何するんですか？」

エミー「何って、決まってるでしょ！？ ここで遊びに行くの！」

千雨「遊ぶ？ 一体何なんだそこは？」

楓「確かあそこは室内遊園地だったような気がするでござるが…。」

菲「そそっ！ 確かこの前ナツクルズとルージユと一緒にみんな探してる時に寄ったアルよ！」

千雨「室内遊園地…？ どう見ても小さいじゃないか？」

確かに彼女の言う通り、建物は外観通り小さく、さすがに室内遊園地と呼ばれるほどの大きさではなかった。

エミー「まあ、それは入ってみたいと分からないって！ ちなみにこここの入場料の事だけど、

イカしたカップルやVIPだと無料で入れるようになってるの！ 逆にみんなは払わなきゃならないけど、

ここはあたしがお願いで無料にしてみるね！」

明日菜「えっ！？ そんな事が出来るの！？」

エミー「多分出来ると思うけど、実際は分からないけどね。でも、昨日の件もあるし、

さすがにみんな貴女達の事を知ってると思うから、特別に無料にしてくれると思うわ。

まっ、試しにやってみないと分からないけどね！」

ネギ「テイルスさんはどう思います？」

テイルス「そうだねえ…昨日調べに行った事のあるナツクルズや古菲達によると、あそこには誰もいなかったらしいけど、

もしかしたら今日は来てるかもしれないね。ただ、入

場料を考えると、入ってない可能性もあるから…。」

エミー「とりあえず、早速トウインクルパークへレッツゴー!!」
明日菜「おお〜!!」

エミーが張り切りながらそう言うと、明日菜は彼女と共に腕を上げて盛り上げ、全員揃って入り口に入った。

入り口に入った後エレベーターに乗り、カウンター前に辿り着いた。

そこで従業員と会い、

エミーとティルスを無料に入れさせる事にしたが、ネギ達は有料にする事になった。だがエミーの説得で、

昨日の件もありながら、従業員はマネージャーに連絡し、結果的に無料にしてあげた。それを聞いた明日菜達は喜び、

手荷物を全てカウンターに預け、園内へ通じる入り口に入った。

…トウインクルパークに入ったネギ達は、その園内の風景を見て早速唖然とした。その風景は、

外から見た時は狭そうだったが、中に入ると予想以上に広く、まるで別の空間にいるような雰囲気だった。

しかも外は昼にもかかわらず、室内は夜のように暗かったが、街灯やネオンによって室内全体は明るかった。

室内にはメリーゴーラウンドやジェットコースターなどの遊園地ならではの乗り物や施設が多くあり、

そんな風景を目の当たりにしたネギ達は驚きにも感心していた。

ネギ「うわあ〜!! すごい綺麗な場所ですねえ!!」

千雨「って言うか、何だこの遊園地は!? 外で見た時とは全然違うぞー!？」

エミー「驚きでしょ？ こことウインクルパークはね、実は……
ええ〜〜と……ごめん、テイルス、

ちよつと説明してくれないかな？」

彼女は頭を掻きながら、テイルスにそう頼んだ。

テイルス「あ、うん、いいよ？ この室内遊園地はね、実はこの街から少し離れた別の場所に建設されてるらしいんだ！

ホントは街中に設置するつもりだったんだけど、高層ビルの数が余りにも多過ぎて、

建設が出来なかつたらしいんだ。そこで遊園地ごと違う場所に建設する事になつただけど、

観光客だけでなく地元の人も来場出来る様に、

さっきの入り口を光化学によって開発した物質瞬間移送装置（テレポーター）を設置したんだ。そうすれば、

わざわざ無駄な遠距離から来る必要がないからね！」

聡美「テ、物質瞬間移送装置！？ じゃあ、さっきの入り口はワイプトンネルだったんですか！？」

テイルス「うん！ 通ってる間は何も感じないだろうけど、そういう仕組みになってるんだよ！」

聡美「で、でも、物質瞬間移送装置（テレポーター）って…あれは理論だけで誰も実現しなかつた物のはずでは…！？」

テイルス「うう〜〜ん…そこはよく分からないな…。多分それが君達の世界とこの世界の違いかもしれないね。

なぜならあれ、結構昔から開発された物みたいだから…。

聡美「昔からですかあ！？」

真名「何と…この時代では既に物質瞬間移送装置を開発されてたとは…さすがに進んでるな、この世界…。」

千雨「って言うか…何て言うSFの多い世界なんだ…さすがに私にはまだ信じ難い…。」

エミー「とにかく！今日はとことんここで遊び捲くるわよ！みんな、遠慮せずにドォーンと遊んじゃおう！！」

明日菜「おお〜！！！」

二人は盛り上げながらそう言うが、他の女子達はまだ戸惑っていた。ネギ「では、僕とテイルスさんは従業員から情報を……………」

彼はそう言いながらテイルスと供にどこかへ行こうとするが、背後にいた明日菜は直ぐに彼の頭を鷲掴みした。

明日菜「あんたは子供らしく一緒に遊びなさいっつうのっ！！」

ネギ「痛だだだだだあっ！？　ちよ、ア、アスナさん、痛い！！　痛いですよ！？」

彼が頭から感じる痛みで暴れながら、そのまま明日菜に頭を鷲掴みされた状態で引き摺られて行った。

その間にテイルスは、冷や汗を垂らしながらそれを眺めていた。

…トウインクルパークに来てから、ネギ一行はたくさん遊んでいた。

スリル満点な高速ジェットコースターに乗ったり、

愉快的気分になれるメリーゴーラウンドに乗ったり、高速回転する事で目を回したティーカップに乗ったり、

高速でぶつかり合ったり競い合ったりするバンパーカーに乗ったり、前後に揺れる海賊船に乗ったり、

高い所から楽しく眺める観覧車に乗ったりなど、様々な乗り物に乗った。

他にも壁にぶつかったり出口を探すのに手間を掛けたミラーハウスに入ったり、

様々な怪物の出現により恐怖心を高めるお化け屋敷に入ったりなど、様々な仕掛け満載な施設に入った。

後なぜか遊園地内にあつたが、ボーリングを楽しんだり、射的や輪投げで賞品を当てたり、最新型のもぐら叩きを遊んだりなど、お祭り気分に遊べる施設もあった。そのため、いつも楽しそうに遊んでいるエミーやティルス、明日菜や菲だけでなく、いつもクールでいた真名や楓や茶々丸、そしてこう言う物を苦手としていた聡美や千雨も、少しでありながら楽しんでいた。もちろん、元々生徒探しに専念していたネギも、子供らしい楽しそうな表情を浮かばせていた。

そんな楽しい時間を満喫している最中、ネギー一行はフードコートでエミーの奢りで買ったハンバーガーやジュースを味わいながら、一休みをしていた。

明日菜「あぁ、楽しかったぁ！」

菲「ホント、疲れるくらいたくさん遊んだアルウゥ……」

真名「まあ、たまにはこう言うのもいいかもしれんな。」

楓「これも提案したエミー殿のおかげでござるよ。」

エミー「えへへ、それほどもお！」

彼女はテレながらそう言った。

ティルス「ネギもどうだった？ 君も結構楽しんでたみたいだけど……」

ネギ「え、僕ですか？ そ、そうですね………確かに、楽しかったのは楽しかったですよ！」

何せ、こう言うのには滅多に行きませんし………何しろ初めてでしたから……」

聡美「え？ ネギ先生、遊園地に行った事がないのですか？」

ネギ「ええ……僕、父を探す事だけを専念してまして、魔法学校に通

つてた頃からずーっと勉強に励んでました。

そのため、友達を作る機会も全くなくて、遊びに行く暇すらなかったの、

いつも一人で魔法の勉強をしてました。父を探すのが僕のたった一つの人生でして、

それ以外僕には何もありませんでした。寧ろ、それで十分と僕は今まで思いましたが………やっぱり、

アスナさんの言う通りですね。僕、十歳のくせにこう言う性格ですから、子供らしさが欠けているのですね。

今になってやっと分かったような気がします。「
ティルス「父を探すって……？」

カモ「実は兄貴の親父さんはな、ウチの世界では『サウザンドマスター』と呼ばれるほど最強の魔法使いだったんだよ。

でも十年前、突如に姿を消した上に、世間では彼は死んだと思われたんだが、

七年前に兄貴が住んでいた村が魔物に襲われた最中にその親父が現れ、

魔物を倒した上に村を救ったって言うんだ。まあ、それ以来再び姿を消して行方不明になっちまったが………。」

彼がそう語った後、ネギは自分の杖を取り出した。ネギ「これが、その当時父から授かった杖なんです。この杖が、

彼がまだ生きてる証拠でもあるんです。これを持ってから、僕は父を探す事を決意し、彼のような『

立派な魔法使い』になるために、魔法学校で魔法の勉強をやり始めたんです。」

千雨「でもそのせいで今の性格になったって事か……。」
ネギ「ええ……恥ずかしながらも……。」

彼は頭を掻きながら苦笑いをした。

聡美「……でも、何となく分かりますね、そう言う子供らしさを持た

ない所が…。」

ネギ「え？」

聡美「私も、いつも工学部の研究所で新たなる発明品を開発するの
に夢中で、

その事ばかりしか考えてなかったせいか、友達作りとかどこ
かで遊びに行くとか、

そう言う普通の女の子がやる事をしませんでした。 科学者
だからそれが当たり前だと思いましたが、

今になってからやっと気付きました。 こう言う時間を過
すのも、

科学者としてでも最も大切な事なんだなって…。」

千雨「…そう言えばそうだな…。 私もいつも部屋に籠ってパソコ
ンばっかしてたから、

友達とか誰一人もいなかったな……。 特に誰かと付き合
ってどこかへ遊びに行くつても、

そんなの全く興味も持たなかった…。 でもこう言う機会が
あったから、

少しだけ分かったような気がしたんだ。 こうやって誰かと
付き合つて楽しくするのも、

人として大事な事なんだなってな。 おかげでネットアイド
ルをする事以外の楽しさを覚えちゃったよ。」

ネギ「葉加瀬さん…千雨さん…。」
真名「…確かに言えるな。 私も依頼とかを専念したために、友達
など一人もいなかったな。

そのため、こう言う楽しくするような機会など全くなかった。
しかし、

今のおかげで少しだけ童心に戻ったような気がする。」

楓「拙者も同じでござる。 さんぽ部としてよく鳴滝姉妹とあちこ
ち行つたが、

殆どは山に籠って修行してたでござる。 そのためこう言う機

会に滅多に参加しなかったでござる。

でも、改めて今度鳴滝姉妹と供にこう言う場所で遊びに行くのもいい考えでもあるでござるな。」

菲「私も同じアル！　いつも拳法の修行してたから、なかなか友達と遊びに行く機会なかつたアルよ！」

こうしたおかげで改めて今度誰かと遊びに行きたい気持ちが沸いて来たアル！」

ネギ「真名さん…楓さん…古老子…。」

茶々丸「私も同じく…いつもマスターの側にいたため、こう言った場所に来た事ありませんでした。」

もちろん友達作りも余りなかつたので…。」

聡美「まあ、他にも実験に付き合ってもらっちゃった事もあるから、そう言う機会もあげなかつたからね。」

茶々丸「はい…。でも、こう言う機会を初めて経験したおかげで、今までなかつた楽しさを覚えるようになりました。今度出来れば、

マスターをこう言う場所に連れて行きたいと思います。

………あつ………逆に思えば、

マスターは呪いのせいのせいの学園から出られませんし、もちろん学園には遊園地もないですし………。」

千雨「それじゃ無理だな。」

彼女がそう言った後、お互い会話をしていたエミーと明日菜以外全員笑い出した。

明日菜「え、何？　どうしたの急に笑い出して？」

エミー「何か面白い話でもあるの？」

ネギ「あ、いや、別に何でもありません！」

明日菜「あ…そう…？」

ネギが頭を振りながら拒否した後、明日菜とエミーは再びお互い楽しく会話をし続けた。

ネギ「…でも、これも僕達をこうやって楽しむのも、

この計画を提案したアスナさんとエミーさんのおかげかもし
れませんか。」

テイルス「いや、寧ろ明日菜の方が一番だと思うよ？ 何せ、

彼女の方が君達の事を一番に考えたかもしれないからね。」

千雨「そうかもしれないな………あいつ、あー見えてもお節介だが、
友達思いだからな。」

聡美「神楽坂さんには感謝しないとイケませんね。」

ネギ「…そうですね。」

彼は笑みを浮かべながらそう答えた。

エミー「さあ〜って！ まだまだ時間も残ってるし、次の乗り物に
乗ってみようよ！」

明日菜「ねえ、次は何に乗る？」

二人の会話を終えた後、二人揃ってネギ達に問い掛けた。

ネギ「ええっ！？ まだ遊ぶんですか！？」

明日菜「当つたり前でしょ！？ まだエネルギーが残ってるんだか
ら！」

エミー「そうそう！ 完全に切れるまで遊び捲くるんだから！」

ネギ「そんな、完全に切れるまでって、まるで自己犠牲みたいな…
……！」

ドオオオオオオオン！！

その後、突然天井の方から爆発音が聞こえた。ネギ達は空のよう
に高い天井の方を見上げてみると、

何と室内なのに花火が打ち上げられていた。しかし、使用されて
いるのは本物の花火ではなく、

立体的な映像のような科学的な物だった。ネギ達は次々に打ち上げられて行く花火を見上げながら、
感心していた。

明日菜「わあっ！！ 見て見て！！ 花火よ、花火！！」

ネギ「うわあ~~~~！！ 綺麗な花火ですねえ！！」

千雨「花火！？ 室内なのに！？」

真名「いや…待て。花火にしては火薬の臭いがしないのだが…。」

聡美「…あれは…本物の花火ではないですね。」

彼女は眼鏡を直しながら花火を観察していた。

ティルス「ああ、よく知ってるね！ あれはホログラムで出来てるんだ。」

さすがに室内で本物は使えないけどね。」

菲「でも綺麗アルウ〜！」

楓「実に遊園地にピッタリな物でござるな！」

茶々丸「まるで本物みたいですね…。」

明日菜「どう？ 今日楽しんでよかったと思っただ？」

彼女はネギに向きながらそう問い掛けたら、ネギは笑顔でこう答えた。

ネギ「はい！ よかったと思います！」

明日菜「そう、よかった！」

彼女も満足気な笑顔でそう言った。

…日が暮れ始め、ネギ達は満足そうにトウインクルパークを後にした。そして彼らが駅前に着いた後、

そこで待ち伏せをしていたソニック、ナックルズとルージュと出会った。

ネギ「あつ、ソニックさん！ ナックルズさんにルージュさん！」
ソニック「Hey ^{ハイ} guys！ ^{ガイズ}結構楽しんでたみたいだな！」
ルージュ「しかも結構たくさん買い物したみたいね？」

彼女は女子達の手元にある買い物袋を見てそう言った。

明日菜「えへへ、まあね！ 色々いい物がたくさんあったから！」

テイルズ「ところで、そつちの様子はどうだった？」

ソニック「Sorry ^{ソリー}…スピードハイウェイに行ってみたけど、どこにもいなかったよ。」

ナックルズ「こつちも下水道を調べてみたが、ホームレス以外誰もいなかったよ。」

ルージュ「こつちも屋上を次々飛び回って探ってみたけど、やっぱりいなかったわ。」

ナックルズ「そう言うお前達も、何か手掛かりでも見付けたのか？」

ネギ「えっ……………」

ナックルズがそう問い掛けた後、ネギはしばらくテイルズと向き合い、最後に頭を振った。

ネギ「いえ、残念ながら……………」

ナックルズ「…とは言っても、実際は色々楽しんでだから調べる暇もなかったって事だな。」

ネギ「アハハハ……………すみません。」

彼は頭を掻きながら苦笑いをした後、ナックルズにお辞儀した。
ナックルズ「いや、気にするな。楽しんだんならそれでいい。

悪い事じゃないからな。」

聡美「でも、結果的には誰も見付からなかったって事ですよね？」
ルージュ「そう言う事ね。」

ソニック「But hey! まだ街の全部は調べてないぜ? まだまだネギの仲間がどこかにいるはずさ!

また明日ここに戻って探し回ろうぜ!

ネギ「...そうですね! もうこんな時間ですし、そろそろ帰りましよう!」

明日菜「そうね! 今日はたくさん遊んだし、疲れちゃったなあ!」

彼女は腕を高く伸ばしながらそう言った。

菲「その上ちよつと眠くなたアルよ...」

彼女は欠伸をしながらそう言った。

茶々丸「今日は皆さん楽しんだみたいですね。」

ネギ「はい。たまにこう言う時を過ごしても、悪くありませんね!」

彼は満面の笑顔を浮かばせながら、嬉しそうにそう言った。

第19話 囚われた恐竜島

……翌日…キノコワールド大陸のキノコ王国では、いつもと変わらぬ平和な日常になっていた。

そんな日の中、ピーチ城にある食堂にて、のどかと夕映はキノじいによりある稽古をしていた。

二人の少女は頭に一冊の大きな本を乗せ、両手にフォークとナイフを握りながら、白い皿に乗せたテーブルの前に座っていた。

キノじい「では、稽古を始めるとしましょうぞ！」

夕映「…あの………何で私達がこんな事に……？」

キノじい「決まっておりますじゃ！ お主達は女子おなごでも、礼儀が足りんですじゃ！ 立派な女子おなごになるには、

上品に、礼儀正しく、凛としなければなりませんですよ！ 今の状態では、

立派な婿殿とお会いする事など出来ませんですよ！」

のどか・夕映「む、婿殿……？」

二人がその言葉を耳にすると、一瞬想像し始めた。脳内に笑顔を見せるネギの映像が浮かび上がり、

想像した二人は赤面するが、頭を振り回しながら我を取り戻した。

夕映「そ、それより、大体何ですかこの本は！？ 頭に乘せて何か意味あるんですか!？」

彼女は頭に乘せた本を指しながらそう言った。

キノじい「本を頭に乗せる事………これは己のバランスを保つためにある物。最近の女子おなごは乱れた姿勢をしておる。

凛とした姿勢を取るには、頭に物を乗せて、バランスよく立たなければなりませんですよ！」

途中で落としたり、または離したりした場合は許しませ

んぞ！ 罰としてもう一冊乗せますからな！」
のどか・夕映「そ、そんなあ……………」。

「ちよっとじいやー！」

三人が振り向くと、そこには怒るピーチ姫と、背後に立つデイジー姫、そしてキノピオとキノピコがいた。

キノじい「これはこれは、ピーチ姫様！ どうかなされ……………」。
ピーチ「じいや、のどかと夕映に何て事してるの！？ 頭に本なんか乗せて……………」。

キノじい「何って、決まっておりますぞ？ のどか殿と夕映殿には礼儀正しさが足りなさ過ぎるのですじゃ。

そのために礼儀正しさを学ぶためのお稽古を……………」。
ピーチ「だからと言ってこんな酷い事させるって言うの！？ のどかと夕映は私の大切なお客様で、友達なの！」

変な事をさせないで……………」。

キノじい「変とはなんですじゃ！？ ワシはお二方のためにと……………」。
「！」

キノピオ「まあまあ、お二人供落ち着いて……………」。
彼は言い合う二人を抑えながらそう言った。

キノピコ「のどかさん、夕映さん、本当に申し訳ございません！
キノコ王国の大切なお客様であるお二人を、

無理矢理こんな事をさせてしまった……………」。

彼女はのどかと夕映に謝りながらお辞儀した。

のどか「いや、別にいいですよ……………」。
夕映「でもさすがにこの本は余計だと思いますが……………」。

デイジー「まあねえ……………」キノじい「はよく余計な事をするから……………」。
キノじい「余計とは何ですじゃ！？ 余計とは……………」。

彼はデイジーに反発しながらそう言った。

キノじい「全く、近頃の女子おなしは弛み過ぎてますぞ！ 奇妙な言葉遣いを使うわ、派手な姿になるわ……………」

上品に礼儀正しさが全く欠けて……………。」
彼が文句を言っている間に、途中で口を止め、キノピオの方へ振り向いた。

キノじい「そう言えば……………例の調査隊の事はどうなったんじゃ？
何か情報来たかの？」

キノピオ「あ、はい……………キノコ王国とサラサ・ランド周辺を隈なく搜索してみたらしいのですが、

のどかさんや夕映さんの友達らしき人物を一人も見付かりませんでした。

キノピオ「予め、『マメーリア王国』にも協力を願い、自国の搜索も行っていますが、

そちらの方からもまだ何も……………。」

キノじい「そうか…まだ見付かつとらんのか……………」

キノピオ「現在の所、もつと幅広い所へ搜索してみようと、王国から離れた島々に出動したそうです。

何か見付け次第、報告すると……………。」

キノじい「しかし困った物じゃ……………まだのどか殿と夕映殿のご友人達が見付かっていないとは……………」

マリオブラザーズの所には刹那殿と木乃香殿がいると言
うのに、他の者もまだ行方知らずとはなあ……………。」

とは言えど、我が調査隊を派遣したのはまだしも、お主
の友達とやらも派遣したようじゃが、

本当に大丈夫なのかね？ 信用出来る者なのかも不安に
思っんじゃ……………。」

キノピオ「だ、大丈夫ですよ！ 彼らは元々キノコ王国の味方です
から、悪い事なんて決してしませんよ！

それに、彼らは我々と一緒にスポーツやカートレース、もちろんパーティーゲームで遊んだ仲ですから、

友達の頼みなら何でもしますよ！ だから彼らを信じて

ください！」

キノじい「しかしじゃな……………」

デイジー「もう、一々疑ってちゃ埒が合わないわよ！ 疑ってちゃ

見付からないのも当たり前なのよ？

信じてあげれば、きっと見付かるって！ ねっ、ピーチ

！」

ピーチ「そうね、デイジーの言う通りだわ。それに…急いでる訳

でもないし、時間もまだたっぷりあるわ。

彼らの活躍を静かに見守りましょ。」

キノじい「う、うう……………」

彼は腕を組み、頭を傾げながら、悩み始めた。

夕映「……………」しかし、ネギ先生達も本当にどこにいるんでしょうね

……………」

のどか「みんな無事だといんだけど……………」

二人は不安そうにそう言った。

……………一人の少女は夢を見ていた……………。麻帆良学園制服を着た、

ピンク色のツインヘアをした少女が、

同じ制服を着た、身長高めな長い金髪の少女と対面していた。そ

んな金髪少女は険しい顔をし、

桃髪少女に指しながらこう言った。

金髪少女「貴女は失格ですわあ！！！」

????「ガア~~~~ン!!!!」

彼女は頭を抱え、真っ白になりながら、渦巻く暗い空間の中へ落ちて行った……。

……太陽の光が木の葉を照らし通すとある森の中で、桃髪の少女が草むらの上で寝ていた。

しかし、先ほど見ていた意味不明な夢のせいか、彼女は酷く魔されていた。そう……彼女はネギの生徒の一人であり、運動部五人娘の一人でもある新体操部門、佐々木まき絵であった。

まき絵「……うう~~~~ん……………失格はもうやだ~~~~……………」

????「まき絵！ まき絵！！！」

その間に、まき絵の傍にいるもう一人の少女が、寝て魔されているまき絵を起こそうと、体を揺さ振り始めていた。

その少女はグレーのショートヘアをしていて、同じ麻帆良学園制服を着ていた。そう……

彼女も同じくネギの生徒の一人であり、運動部五人娘の一人でもあるサッカー部門、和泉亜子であった。

まき絵「……ん……………ううん……？」

亜子により揺さ振られた彼女は、目をゆっくり開け、欠伸と目を擦りながら起き上がった。

亜子「あっ、ようやく起きた！ よかったあ……まき絵がホンマ無事で……………」

まき絵「……あれえ……？　何で亜子がこんな所に……？　確か私はいいんちよと………？」

彼女が寝惚けながらそう言うと、辺りを見回し始めた。

まき絵「………ほえ？　そう言えば……ここ……どこ……？　……ここ………
…麻帆良学園じゃ………？」

その時、彼女は近くに亜子以外の何かしらの気配を感じた。　そんな彼女が背後の方へ振り向くと、

そこには赤、青、黄色に分けられた、背中にサドルと足にブーツを履いた、三体の恐竜らしき生物が立っていた。

しかし、恐竜とは思えないほど優しそうな顔立ちになっていて、三匹の恐竜は心配そうな表情をしながら、
静かに啞然するまき絵を見詰めていた。

赤恐竜「ああ、やっと起きたんだねえ〜！」

青恐竜「よかった、君が無事で……！」

黄恐竜「もし起きなかったどうなるかと思ったよお〜！」
安心そうに喜ぶ恐竜達だが、しばらくの間沈黙が走った。

まき絵「………ひゃああああああああ……！！　きよ、巨大トカゲEEEEEEEEEEEEEEEEEE！」

彼女は恐怖に怯えながら、猛スピードで後ろ向きに恐竜達から離れた。　それを傍から見ていた亜子は、
思わず啞然としていた。

ドンッ！！

まき絵「痛たつー！！」

しかし、彼女が後ろ向きに逃げている間に、背後から何かにぶつかり、転げ落ちた。

まき絵「痛たたた……ご、ごめん！　大丈夫………？」

彼女は転んだ時に痛んだお尻を撫でながら振り向くと、そこには赤、緑、黄色の服に分けられた、

埴輪のような顔立ちをした白いマスクを被った小人らしき人物がいた。その中、

赤色の小人は尻餅状態になりながら、自分の頭を撫でていた。

赤小人「痛たたた……だ、大丈夫……。」

緑小人「ああ、お姉さんがやっと起きたんだねえ〜！」

黄小人「全然起きないから僕達心配してたよお〜！」

安心そうに喜ぶ小人達だが、しばらくの間沈黙が走った。

まき絵「……………きゃあああああああ！！！！は、埴輪の妖怪
いいいいいいいいいい！！？」

彼女は再び恐怖に怯えながら、猛スピードで後ろ向きに小人達から離れた。しかし、

亜子は背後から逃げるまき絵を捕まえ、両手でまき絵の口を塞いだ。
亜子「ちよっと、まき絵！ そんなに大声出したらアカンって！

誰かに見付こうてまうわ！」

まき絵「んむっ!?!」

亜子「落ち着いて、まき絵！ この子らは悪い子やあらへんて！
確かに見慣れない連中やけど、

みんなエエ子や！ せやから恐がらなくてエエよ！」

まき絵「……………」

亜子はゆっくりまき絵の口を解くと、まき絵は騒ぐ事を止め、落ち着きを取り戻した。そして彼女達は、
少しずつ心配そうに寄って来る恐竜と小人達の方に振り向いた。

亜子「ホンマにごめんなあ、急に驚かせてもって……………悪気はあら
へんけど、

まき絵ちよっとみんなの事で驚いottaから……………」

赤恐竜「いや、気にしなくていいよ！ 亜子だって同じだったんだ

し、その気持ち分かるよ！」

青恐竜「そうだよ。無事であっただけでも良かった事だよ！」

黄小人「それにしても…まき絵って言うんだあ〜！ いい名前だねえ〜！」

緑小人「うん！ 僕達気に入っちゃったよあ〜！」

喜ぶ彼らだったが、逆にまき絵は啞然としていた。

まき絵「…あ…亜子……………これって……………？」

亜子「あ、そやった…まき絵はこの子達知らへんかったね？ この子達はこの島の住民らしいんねん。

恐竜の方は『ヨッシー』で、小人の方は『ハイホー』 ちゅうねん。」

黄ヨッシー「僕達ヨッシーだよあ！」

赤ハイホー「ハイホーだよ！ よろしくねえ〜！」

まき絵「…ヨッシー……………ハイホー……………？ それに……………島……………？？」

彼女は眉間に皺を寄せながら、再び周囲を見回り始めた。

まき絵「…島って……………ここ、島なの？」

亜子「うん。『ヨッシーアイランド』 ちゅう島らしいんやけど、ウチもよう分からん島やねん。」

まき絵「ヨッシー…アイランド…？ 図書館島じゃなくて？」

亜子「ううん…ちゅうか、ウチら麻帆良にはおれへんみたいなんよ。」

まき絵「えっ…？」

その時、草むらから何者かが現れ、それに気付いたまき絵と亜子は振り向いた。そこには二体の恐竜がいて、

一体は青いヨッシーだが、サングラスと刺付きの首輪を付けた、不良のような風貌をしていた。

もう一体はヨツシーではないが、タコのような大きな口と頭に赤いリボン、そして指にダイヤモンドの指輪をはめた、ピンク色の恐竜であった。そんな二匹を目の当たりにしたまき絵は、再び唾然としていた。

??? A「何だ？ 妙に騒がしいと思ったら、ようやく起き上がったのか。」

??? B「あらあゝ、それは聞いて安心したわあゝ！ 起きなかつたらどうしようかと思って心配してたのよ！」

亜子「あつ、『ワツシー』さんに『キャサリン』さん！ お帰りなさい！ この通りまき絵は元気でした！」

ワツシー「そりゃ聞いた良かったな。 まき絵って言う名前だな？ 俺はワツシーだ。 よろしくな！」

キャサリン「ハアゝイ、あたしキャサリンって言うの！ 『キャシ』って呼んでもいいのよ？」

ワツシー「言つとくが、見た目に騙されんなよ！ こいつこつ見えでも、漢おすだからな。」

キャサリン「誰が漢おすですつてえ！？ あたしは心も体もピュアな女の子よー！」

ワツシー「そう思つてるが公式だろうが、このオカマ怪獣ー！」
キャサリン「誰がオカマですつてえー!?」

赤ヨツシー「ふ、二人共！」
赤ハイホー「落ち着いてつてー！」

二人は言い争うワツシーとキャサリンを止めようと、間に割り込んだ。 だがそんな状況の中でも、

まき絵の唾然とした表情は変わらなかつた。

まき絵「…な…何なのこれ……？ 私…まだ夢でも見てるのかな？
いつも失格ばっかり受けてるから、

こつ言つ悪い夢でも見てるのかな……？」

彼女は片手を額に当てながら、苦悩にそう言った。

亜子「…何言つてんのかよう分からんけど、これは夢ちゃうで。どう見てもこれは現実や。」

まき絵「じゃあ、何で私達、ここに居るの？ 私は確か休み時間にいいんちよと一緒にいたはずなのに……」

気が付いたらこんな所にいたから……。」

亜子「それはウチも同じやて。ウチもチアリーダー部の三人と一緒にバンドの打ち合わせをしとつたら、

気が付いた時にはここにおつたんや。確か、ネギ先生が教室から飛び出してから休み時間が始まって、

全員解散してからしばらくウチは音楽部でチアの三人とバンドの打ち合わせしてたんや。けど、

突然何か変な現象が起きて……。」

まき絵「あつ、それ私にも同じ事があつたよ！ 私もいいんちよと一緒にいた時、変な事が起きたよ！

確か…変な電気があちこち出て来るようになって……そして突然地震が起きて……」

そして……なんだつたんだろう、あの変な感じ？ 何か目の周りが変に歪んでたし……」

それから……それから……。」

彼女は上の空になりながら思い出そうとするが、最終的には何も思い出せなかった。

亜子「うん…気が付いたらウチらはここにいた……そう言う事やねん。」

ワッシー「……その話なら、俺達もさっき亜子から聞いた。ど

うやらお前ら、この世界の住民じゃないらしいな。」

彼はキャサリンと言い争う事を止めた後、まき絵にそう言った。まき絵「えっ!？ そ、それってどう言う意味!？」

亜子「つまり、ここは麻帆良でも、ウチらの世界でもないっちゆう

事や！」

まき絵「ええ！？ それでもまだ分かんないよ！？ じゃあ、ここは魔法で出来た世界だって言うの！？」

ほら、この前私達が訪れた幻想世界みたいに…！？」

亜子「いや、それも違うらしいねん！ ウチもよく分からへんけど………ただ言えるのは、

もしここが魔法世界やったら、この島や、この子達は存在せえへんかったよ？ でも存在しとるっちゅう事は、

どう考えてみても魔法世界やないっちゅう事や。」

ワツシー「そこんトコもよう分からんが、そう言う事だ…。」

彼は頭を掻きながらそう言った。

ワツシー「それよりも、お前は今も混乱しているのも分かるが、とにかく静かにしてくれないか？

もし敵に見付かっちゃったら洒落にならねえぞ！」

まき絵「えっ？ 敵って…？」

亜子「ウチもよう分からへんけど………どうやらこの子達、ある敵から身を隠してるらしいんねん。」

まき絵「え、どうして？ 何で追われてるの？」

彼女がそう問い掛けると、ワツシー達は下を向きながら黙り込んだ。

赤ヨツシー「…このヨツシーアイランドはね、僕達ヨツシーやハイホー達が住んでる島なんだ。」

キノコ王国から少し離れた小さな島だけど、それでもこの島は自然豊かで住み心地のいい、

正に楽園のような島なんだ。」

青ヨツシー「けど…あれは確か五日前の事だったよ………突然島の上から変な形をした巨大な飛行船が現れて、

僕達の島に襲い掛かったんだ。 余り見た事もない攻撃を仕掛けて来て、僕達はパニックに陥ってたよ。」

黄ヨツシー「そしてその船から変な奴らが降りて来た時、僕達の仲間を次々と捕らえ、奴隷扱いし始めたんだ。

ただ、何を探しているのかはよく分からないけど、ヨツシー達を地面に穴を掘らせるように命じて、

今でも穴掘りの作業をさせているんだ。そのため、ズーッと休まずにやっていて、

今も酷く苦しんでるんだよ。」

赤へいホー「僕達の仲間達も、同じくその変な奴らに捕まっちゃって、他の捕まったヨツシー達と一緒に、

穴掘り作業に出さしてるんだ。」

緑へいホー「今ここにいる僕達は、捕まる前に逃げ切れたから………。」

亜子「せやけど何で反撃とかせえへんかったの？ 反撃とかしていたら他の仲間達も助かったはずやないの？」

黄へいホー「無茶言わないでよ！ 僕達、悪戯以外な事とか出来ないし、そもそも体力的にはそんなに強くないんだよ！？」

特にヨツシー達はこう見えても心優しい恐竜だから、

争い事とか絶対しないんだ。」

ワツシー「ああ…同じ種族としては情けねえ事だがな…。」

赤ヨツシー「でも、ヨツシーの中で一番頼りがいのある『緑ヨツシー』は、一応反撃してみたんだけど、

相手は見た事もない敵だし、その見た事もない攻撃でやられちゃって、最終的に捕まっちゃったんだ。

つまり相手は僕達より物凄く強くて恐いんだよ！」

ワツシー「それに、俺達も何度も救出を試みたが、相手の半端ない強さには手に負えず、失敗ばかり続いていた。

その分俺達も、まだ敵から逃走中だ。簡単に見付かる

ような真似は出来ない…。」

まき絵「ねえ…その敵ってどんな奴らなの？」

黄ヨツシー「さあ…僕達も見るのも初めてだけど……とにかく変な奴らだったよ？ 斧を持っていたのは確かだけど、

それ以外は変な形をした奴らで、何なのかよく分からないんだ。」

ワツシー「まあ、特徴と言えば、キャサリンみてえなタコ顔をしてたけどな。」

キャサリン「誰がタコ顔ですってえ!？」

彼女は再び悪口を言うワツシーに対して反発した。

亜子「その飛行船もどんな形なん？」

赤へいホー「それも僕達もよく分からないんだ。ただ船の先に目と眉毛があるくらいで、

見た目はとにかく変な感じだったよ?」

ワツシー「とにかく、俺達はどうにかして他のヨツシー達とへいホー達を助けなければならぬ。

そのためにこつちも行動しなければならぬ。

いつまで経っても逃げたり隠れたりする訳には行かない

からな。」

赤ヨツシー「ええ!？ そんなの無理だよお!？ 僕達だけじゃ何も出来ないよ!」

青ヨツシー「そうだよ! もし逆に見付かって僕達まで捕まったらどうするの!？」

黄ヨツシー「捕まって道具扱いされるために行くんだったら僕は絶対に嫌だよ!」

赤へいホー「僕達も同じだよ! もし見付かったとしても戦えるほどの力なんてないし、

絶対負けるに決まってるよ!」

緑へいホー「そう言う時に何か対策とかあるの!？」

黄へいホー「無理無理! 絶対無理!」

ワツシー「お前らなあ…!」

徹底的に否定するヨツシー達とハイホー達に対し、ワツシーも怒り始めようとするが……………。

まき絵「ちよつと、何よその言い方!? あんた達それでいいでも思ってるの!？」

ヨツシー達・ハイホー達「えっ…!？」

突然怒鳴り出したまき絵に対し、ヨツシー達とハイホー達は彼女に向きながら啞然とした。

もちろんワツシーとキャサリン、そして亜子も、そんな彼女の行動に対し、啞然としていた。

まき絵「あんた達さつき言ってたでしょ!? その一番頼りがいのある緑ヨツシーって言う子は反撃してみたって!

何でその子みたいな事をしようと思わずに勝手に無理だつて決め付けるの!？」

あんた達このまま負け犬になりたいの!? ずーっつと失格になりたいの!？」

まだやってもいないのに勝手に無理とか言うんじゃないよ!?!」

亜子「ま、まき絵…?」

まき絵「結果つて言うのはね、自分が何かをやらないと分からない事なんだよ!？」

それなのにまだ何もしてないのに勝手に無理だと決め付けちゃ、意味なんて全くないんだよ!？」

私だつて以前何かをやる前に無理だと思つた事は何度もあったけど、

私の友達はその乗り越えてまでやり遂げたんだよ!？」

私はそんな友達を見て、改めて分かつたんだよ!？」

自分が望む結果を得るためには、何かをやり遂げなければならぬ…

いつまで逃げたり隠れたりしちゃうダメだつて! あんた

達は友達を助けたいんでしょ!? 助けたいんなら、

勇気を持ってこつちから行かなきゃダメだよ!! 無理だ
と言って逃げてるばかりじゃ、

絶対助からないよ!? 友達を助けるためなら、逃げずに
最後まで何かをやり遂げなさいよ!!!」

彼女は怒りながらも、自分の拳を握り締めながらヨツシー達とハイ
ホー達に説教した。

そんなヨツシー達とハイホー達は冷や汗を垂らしながら引くが、最
も引いていたのは亜子である。

まき絵が普段から絶対やらない、正に自分らしくない事をしている
ために、亜子は啞然する同時に感心していた。

もちろんそんなまき絵の説教を聞いていたワツシーは、腕を組みな
がら感心そうに頷いていた。

ワツシー「…フツ、さすがだな姉ちゃん………女の割にはいい威勢
を持つてるじゃねえか? 気に入ったぜ!」

まき絵「えっ…?」

彼女が耳を疑った後、ワツシーは他のヨツシー達とハイホー達に向
けて立ち上がった。

ワツシー「おい、お前ら! 今の話、ちゃんと耳の底まで届いただ
ろうな!?

確かにヨツシーは平和主義者で争いを好まない! 特に
ハイホーは悪戯をする事以外体力的には弱い!

だがそれがどうした!? 緑ヨツシーも争いを好まなか
ったが、それでも敵に立ち向かったんだぞ!!

お前らもそいつを見習うべきだろうが! まき絵の姉ち
やんの言う通り、

こつちが動かなきゃ他の連中を助ける事が出来ないんだ
ぞ! 無理だろうが何だろうが、

自信持って立ち向かうこそ強い奴だろ!?

キヤサリン「そうねえ、まき絵ちゃんとワツシーの言う通り、カツコイ漢は何が何でも無理と決めずに行動する物よ！」

逃げたり隠れたりしないで、捨て身でも仲間を助けに行くのも、カツコイ漢と言う証拠だわ！

緑ヨツシーちゃんもあたし達を助けてくれたんだから、今度はあたし達がみんなを助ける番よ！」

赤ヘイホー「す、捨て身って……。」

赤ヨツシー「そ、そんな事言われても……何をすればいいの……。」

二人は引つ込みながらそう言った。

ワツシー「決まってるだろ！いくらヨツシー達やヘイホー達が捕まっても、まだ捕まってる奴もいるだろ！」

第一、この島にはヨツシーとヘイホーだけじゃなく、他の種族だっているんだぜ？ そいつらの力を借りて、

仲間を増やせば、恐い者なんてないはずだ！」

亜子「え、まだ他にもおつたの？」

キヤサリン「そうねえ……ヨツシーちゃんとヘイホーちゃんだけじゃなく、結構色んな種族も住み着いてるのよねえ……。」

でもちよつと心配だわ……確かに彼らの力を借りれば戦略的にいいけど、

みんなまだ捕まってないかしらねえ……？」

ワツシー「そんなのこつちが会いに行かないと分からないだろ！？」

絶対無事のはずさ！ 例え捕まっても、

俺達みたいに逃げ切れた奴も数人いるはずだ！ そいつらを仲間に加えさせれば、

捕まった奴らの救出だけじゃなく、もしもの時に敵が襲い掛かって来たら、こつちも戦う事が出来る！

今は敵に対抗するための仲間が必要だ！」

彼がそう言った後、多少引き気味なヨツシー達とヘイホー達に振り向き、こう言い出した。

ワッシー「よしっ!!　そうと決まれば、早速他の連中を探すぞ!
お前達は島中回って、

まだ捕まってる奴らを集めるんだ!　その間に俺達は
捕まった連中のいるエリアの前で待機し、

状況を確認するぞ!」

青ヨツシー「捕まってる奴らって…誰でもいいの?」

ワッシー「当たり前だろ!?　それ以外誰がいると思ってんだ!」

キヤサリン「ちょっと、ワッシー!　それだったらこの子達はど
うするの?」

彼女は亜子とまき絵に指しながらワッシーに問い掛けた。

ワッシー「ああ、そっか…そうだなあ…ここは一緒に行動させ
るべきか…

それともヨツシー達と一緒に仲間探しに行かせるか…
…。」

キヤサリン「でもこの子達、別世界とか言う世界とこから来たんでしょ
?　そんな特別な世界から来たこの子達を、

こんな危険な事をさせていいのかしら?」

彼女がそう聞くと、ワッシーはしばらく考え始めた。　しかし亜子
は立ち上がり、二匹に向けてこう言った。

亜子「あ、あの!　よかつたら、ウチらも一緒に手伝ってもエエや
るか?　ウチらも、

ヨツシー達やみんなを助けたいと思います!」

ワッシー「え、いいのかよ、お前達!」

キヤサリン「でもこれ危ないかもしれないわよ?　敵も手強そうだ
し、ヨツシーちゃんやエイホーちゃん達はともかく、

力がなさそうな貴女達にはちょっと危険じゃ…。」

彼女がそう言った後、今度はまき絵も立ち上がった。

まき絵「わ、私達は大丈夫だよ!　だって私達、こう見えても魔法

が使えるんだから！」

ワッシー・キャサリン「えっ!？」

二人がまき絵の発言に耳を疑うと、それを聞いた亜子は突然慌て始めた。

亜子「ちょ、ちょっとまき絵!! それ言ったらアカンちゃうんか!？」

まき絵「別にいいんじゃないの? どうせここ私達の世界じゃないんだし、言ったって何ともないんじゃないかな？」

亜子「そ、それは、そうかもしれへんけど……………」

ワッシー「ちょ、ちょっと待て…お前達、本当に魔法使いなのか!？」

まき絵「うう〜ん……………正確にはちょっと違うんだけど……………でも、魔法が使えるのは本当だよ!

亜子にはどんな傷を治す魔法を持つてるし、私も色々とかサポート出来るけど……………」

それでも色々助けになると思うよ! だからお願い、私達もみんなを助けるのに協力させて!

彼女が両手を合わせながら頼み込むと、ワッシーとキャサリンはしばらく黙り込んだ。

キャサリン「…どうする…?」
ワッシー「うう〜ん……………」

彼は腕を組みながら、考え込んだ。

ワッシー「……………その魔法ってのはよく分からないが、そこまで言うんなら一緒にやっても構わないぜ?

でもこれも危険な事だから、自己責任として要注意するんだな!

まき絵「うん、分かった!」

彼女は頷きながらそう返事した。

赤ヨツシー「じゃあ、僕達は他のみんなを探しに行つて来るよ！」
赤ハイホー「もし十分な人数を集めたら、後に例の場所です！」
ワツシー「ああ、頼むぞ！」

彼がそう言った後、他のヨツシー達とハイホー達は森の茂みに潜り込み、歩き去つた。

ワツシー「よし…：そうと来れば、俺達も早速例の場所に向かおう。」

お前達も、危険を伴うつもりで覚悟するんだな。」

亜子「う、うん、分かつた！」

まき絵「大丈夫、任せて！」

ワツシー「それじゃ、俺に付いて来い！ けど、なるべく静かにな
！」

彼がそう言い出した後、キャサリン、亜子とまき絵と共に、捕らわれたヨツシー達がいると思われる場所へ向かつた。

…出発してからしばらく経ち、ワツシー達の後を追うまき絵と亜子は、まだ草木を除けながら森の中を進んでいた。
しかしそんな最中、亜子はまき絵にこう話し始めた。

亜子「せやけど、まき絵。 さっきのすごくよかつたなあ！」

まき絵「え、何が？」

亜子「ほら、さっきヨツシー達に説得したやろ？ あれ見て、正直
ウチ驚いたわ！」

まさかまき絵がそこまで説得力のある子やつたなんて、思わ
んかつたわ！ 改めて関心したわ！」

まき絵「そ、そっかなあ…：？」

彼女は頬を掻きながら照れ始めた。

亜子「そやな……いつもいいんちよに『失格』とか呼ばれてるけど……。」

まき絵「ガア~~~~ン!?」

彼女が『失格』と言う二文字を耳にすると、真っ白に染まった状態に固まった。

そんな彼女の声を耳にしたワツシーとキャサリンは、少し気になりながら彼女達の方へ振り向くが、その後再び前を見て進み続けた。

亜子「……なあ、まき絵……その失格に関してちよつと聞きたい事があんねんけど……。」

まき絵「ええ!? それって私やっぱり失格だって事あ!?!」

亜子「違うつて! その『失格』ちゆう言葉や! いいんちよはよくまき絵の事を失格だのよう言うてるけど、

一体何が失格なん?」

まき絵「え?」

亜子「その言葉に関してまき絵に聞くと、まき絵は少しだけ上の空になりながら考え始めた。

まき絵「……はて、そう言えばよく考えたら、私って何が失格なんだろ?」

亜子「ほら、そやる? よく考えたら何に失格なんか意味分からへんやろ? まあ、ウチからにしては、

まき絵はよういいんちよと絡む事があるから、

いつも物事を深く考えへんまき絵がいいんちよの思い通りに動けへんから、そんな事を言われるやろうけど、

せやかて関係ない時にそれを悪口のもりで言われたって意味あらへんからな。ウチやったら、

誰かに意味なく失格と言われても、どう対応すればよう分か
らへんしな。でもまき絵の場合、

いいんちよの言葉通りに動いとるから、そのようにな……

つとシヨックになつとるとちやうかな？　もしそやったら、

あれはただの虐めやで？」

まき絵「い、虐めつて……。」

彼女は冷や汗を言いながら、亜子の話を聞き続けていた。

亜子「せやけど、ウチはまき絵の事、失格やと思つてへんよ？　だつて意味ないもん、何が失格なのか。

そりやまあ、まき絵は余り物事を深く考えへんけど、だから言つてウチはまき絵の事を失格と思わへんよ？

それに、あの説教……ウチが思うには、あれはヨッシー達だけやのつて、まき絵自身に対する説教やと思つなあ。」

まき絵「え、私自身に対する……？」

亜子「そや！　さつき言つたやないの！　『結果つて言うのはね、自分が何かをやらないと分からない事なんだよ』つて！

それつて、自分も何かをやり遂げれば、失格と呼ばれずに済むうちゆう事やない？　もしそやったら、

そう信じて、何か自分に取つて、相手に取つて正しい事をやつてみたらエエと思つよ！」

まき絵「…自分や相手に取つて正しい事をやれば…失格と呼ばれずに済む……。」

彼女がそう言つと、少し自信が湧いて来るようになった。

まき絵「…そ…そうかな…？」

亜子「うん、絶対そう思つて！」

ワッシー「おい、もう着いたぞ！」

二人の少女が話し合つている内に、囚われたヨッシー達とハイホー達が納められているエリアに辿り着いた。

そのエリアにいるヨッシー達とハイホー達は、さつきほど会つたヨッシー達やハイホー達とは違い、

様々な色を持つていたが、殆どは足首に囚人用の錘が装着してあつた。

更に全てのヨツシー達とヘイホー達にはつるはしやスコップを持っていて、エリアのあちこちに穴を掘っていた。

そのためエリアは穴によって荒れていて、いかにも自然破壊に過ぎない状態であった。

その間にエリアに辿り着いた四人は、エリア前にある草木の中に隠れながら覗き込んでいた。

まき絵「ここがそうなの？」

キャサリン「そう！　ここにいるヨツシーちゃん達とヘイホーちゃん達はみんな敵によって捕まった子達よ！」

亜子「せやけど可哀想…みんなすっごく疲れてそうやし、飲食や一睡もしてへんように見えるわあ…。」

彼女の言う通り、作業を長期間も続いていたために飲食や一睡もしていないせいも、顔色がとても悪く見えた。

ワツシー「くそお……………あいつら、俺達の仲間をこんな目に合わせやがって…！！　絶対に許せねえ！！」

この俺が叩きのめしてやる！！」

キャサリン「ちよつと、何も考えずに突っ走らない方がいいわよ！　もしかしたら、

誰かが監視してるかもしれないわよ！？」

まき絵「そう言えば、その敵って言うのはどこにいるの？」

ワツシー「ん？　そう言えば見当たらないな……………？」

「ワツシー、キャサリン！！」

静かでありながらも、突然どこかから声が聞こえ、全員その方向へ振り向くと、そこには赤ヘイホーと、

ヘイホーに似た他の人物達がいた。　一体は手に槍を持った民族風のヘイホー、

もう一体はガスマスクのような仮面を被った赤い小人、

そしてもう一体はヘイホーとは違う顔が描かれた仮面を被ったやや

長身の青い小人であった。

ハイホー「こつちこつち!!」

ワツシー「お前、赤ハイホー!! 何やってんだよ、こんな所で!」

ハイホー「いや、仲間探しの最中、偶然見掛けたからちよつと声を掛けちゃつて...」

キャサリン「仲間つて、その子達の事?」

ハイホー「うん! みんなも本当は仲間達と一緒に敵から逃げたみたいだけど、途中で逸れちゃつて、

この辺りを彷徨つてたみたいなんだ。すると僕が事情を伝えると、一緒に行動してくれるんだつて!」

ワツシー「となると、お前が集めた仲間はいいつらだけか...」
彼はため息を吹きながらそう言った。

亜子「その子達は何やの?」

ハイホー「あつ、紹介するよ! こつちの民族風のハイホーは『ヤリホー』で、槍の使い手なんだ!

こつちのガスマスクみたいな仮面の方は『ムーチョ』で、口から砲弾を飛ばせるんだよ!

そしてこつちが『ポロドー』で、物を盗む事が出来るんだ!」

ポロドー「話は聞いたぜ! 俺達の島を乗っ取つて好き勝手な事をしてる奴らをどうにかしようとしてんだよな!」

ムーチョ「力とか余り自信ないけど、僕達も一緒にヨツシー達やハイホー達を助けるために手伝つよ!」

ヤリホー「オラ達に任せるだあ!」
まき絵「へえ...結構個性的な子だねえ...」

彼女は感心しながらそう言った。

ハイホー「あつ、そうそう。実はみんな以外にももう一人いるん

「ただど…。」
「ワッシー「何？ もう一人いたのか？」

その時、近くの草木から何者かが現れた。その人物は同じハイホーだが、頭に大量の葉っぱを被り、パチンコやハンマーなどの武器やオモチャを装備した、迷彩服を着たハイホーであった。

そのハイホーの登場に気付いたワッシー達は、驚きに引いた。???「ただいま戻りました!!」

ワッシー「うおっ!? な、何だお前は!？」

ハイホー「あつ、戻つて来たんだね!」

亜子「えっ!? この子も仲間なん!？」

ハイホー「うん！ 名前は『コマンドハイホー』！ 軍人っぽい格好をしたハイホーなんだけど、

潜入作戦とかが得意だよ!」

「
亜子「軍人っぽいハイホーかあ…何か裕奈が好みそうな子やなあ…。」
彼女がそう言うと、未だに行方が分からない裕奈の事を思い出した。

「
キヤサリン「そんな事よりも、あんた急に出て来んじゃないわよ!

「ビックリしたじゃない!」

「
コマンドハイホー「申し訳ございません、これも任務なんで…。」

「彼は頭を掻きながらそう答えるが、逆にキヤサリンは更に反発した。キヤサリン「何が任務よ!? あんた人を驚かせるのが仕事なの!？」

「ワッシー「だあ、もう!! ちょっと黙れよ、お前は!!!」

「彼は怒るキヤサリンの大きな口を両手で塞ぎながらそう言った。

「ハイホー「ところで、様子はどうだった?」

「コマンドハイホー「ハッ!!! ご指示通りにエリア内を隈なく確認した所、

敵と思わしき人物はどこにも見当たりません

でした！」

彼は敬礼しながらそう答えた。

ワツシー「どこにも見当たらない？　つて事は、今は留守なのか？」

まき絵「だとしたら、今がチャンスなんじゃない？　今の内にみんなを助ければ……………！」

亜子「ちよつと待って！」

チャンスを狙うまき絵に対し、亜子はそんな彼女を呼び止めた。

亜子「まき絵、このままやと力不足や。　ここは変身した方がエエと思うよ！」

まき絵「あ、そっか！　魔法ね！　分かった、やろう！」

亜子・まき絵「アテアット『来れ』！！」

二人は呪文を唱え、『ネオ・パクティオーカード』を発動させた。

発動中に二人の体が光り始め、

ワツシー達はその眩しい閃光に対し、目を手で塞いだ。

ワツシー「うわっ！？　な、何だこの光は！？」

ハイホー「ま、眩しいよ……………！！」

キャサリン「ちよ……………何が起こってるの！？」

そして光が収まった後、亜子とまき絵は制服姿から違う姿に変身した。　亜子は青いジャケットに黄色いマフラー、

白い提灯ブルマーに青いサッカーシューズ、更に右頬に赤い星マークと右太腿に緑のクローバマーク、

そして手に羽根の生えたやかんのような球状の青い救急箱を持っていた。　一方まき絵は水色のドレスに白いリボン、

そして手にピンクの棍棒とフラフープを持っていた。　この姿によると、

亜子とまき絵は『コスプレカード』の姿になっていた。

まき絵「あつ！ これつてもしかして…！」
亜子「『コスプレカード』の姿や！」

ポロドー「な、何だったんだ、今の光は!？」

ムーチョ「よく分かんないけど、何あの格好!？」

ヤリホー「おお!？ 何かよう分かんねえけど、姉ちゃん達の服が変わっただあ!？」

コマンドヘイホー「こ、これは何事でありますか!？」

まだ二人の少女と会ったばかりのヘイホーの仲間達は、亜子とまき絵の姿を見て愕然としていた。

キャサリン「え、ちょ、ちょっと…亜子ちゃんとまき絵ちゃんなの!？」

まき絵「え？ あ、うん、そうだけど？」

ワッシー「何なんだその格好は!？ 急に光り出ただけじゃなく、姿まで変えやがったぞ!？」

亜子「せやから、これ魔法や。」

ヘイホー「ええ!？ 魔法!？ 二人共魔法使いなの!？」

亜子「まあ…近いうちゆうたら近いかな？」

彼女は頬を掻きながらそう言った。

まき絵「とりあえず、この姿になれば、みんな助けられるね!」

亜子「せやけど『コスプレカード』やとちょっとだけ力足りへんかな？」

彼女は手に持っている救急箱を見ながら、不安そうにそう言った。

まき絵「やってみないと分かんないし、『スカカード』を引くよりマシだよ!」

亜子「せやな…まき絵の言う通りや! ほな、これでやってみよ!」

ワッシー「ああ…何だかよく分からないが、とりあえず、敵が今い

ない内に、救出開始だ!!」

全員「おお!!」

全員気合を入れた後、早速草木から飛び出し、エリア内に突入した。

……ワツシー達がエリア内に突入している間に、一匹の緑色のヨツシーがいた。そのヨツシーはとても顔色が悪く、今も倒れてしまいそうな状態になっていた。しかし、そんな彼はそれでもつるはしで穴掘り作業を続けていた。

ヨツシー「……はぁ……はぁ……疲れたよぉ……喉乾いたよぉ……お腹空いたよぉ……」

このままずーっと続いたら……僕もうダメかも……。

「君、大丈夫!?!」

ヨツシーの背後から声が聞こえ、彼は振り向くと、そこには心配そうな表情を浮かべたまき絵が駆け付けて来た。

まき絵「うわっ、顔色がすっごく悪そう!　もしかして、何も食べてないんでしょ!?!」

ヨツシー「えっ……だ、誰……君は……!?!」

見知らぬ相手から声を掛けられた事で、彼は不審に思いながらまき絵に疑い込んだ。

まき絵「あっ、心配しないで!　私まき絵って言うの!　君達を助けに来たの!」

ヨツシー「えっ……僕達を……!?!」

まき絵「あれ…?」

彼女は改めてそのヨツシーを見直すと、ふとある事を思い出した。

まき絵「……………ねえ、君つてもしかして……………ここを襲った敵に反撃しようとした、とつても頼もしい緑のヨツシー?」

ヨツシー「え……………た、頼もしいかどうかは分かんないけど……………そうだけど…?」

まき絵「やっぱり!? この島のヒーローって君の事だったんだね!? じゃあ、待ってて!」

直ぐにこっから出すから!!」

彼女はそう言いながら、日本の棍棒を取り出した。

ヨツシー「無理だよ! この鎖、とても頑丈だし、鍵がないと開けられない上に壊す事すら出来ないんだよ!?

そんな物を使つたつて……………!!」

まき絵「大丈夫! 見てて! えい!!」

バキヤアン!!!

彼女が棍棒を鎖に攻撃すると、その鎖は一撃で軽く破壊された。

ヨツシー「ええっ!?!」

その瞬間を目の当たりにしたヨツシーは、目を大きく開きながら愕然とした。

まき絵「うん、これで大丈夫だね! さっ、ここは私達に任せて、早く安全な場所へ避難して!」

ヨツシー「あ、う、うん…!!」

彼は小さく頷いた後、ヨロヨロと動きながら急いでその場から離れた。

一方亜子は、一体の緑色のヘイホーの救出を試みていた。

亜子「安心してな、今直ぐこっから出したるさかい!」

彼女は救急箱を構えながらそう言った。

緑へイホー「えっ、それで壊すの？ 無理なんじゃないの？」

亜子「…そこが気になるねん……………ウチ、これあんま使ってへんから……………試しに…えい!!」

バキヤアン!!!

彼女が強く救急箱を鎖に攻撃すると、その鎖は一撃で軽く破壊された。

緑へイホー「えっ!？」

亜子「おお、ホンマに壊れたあ!？ この救急箱…意外と頑丈やなあ!!」

彼女は驚きながら、救急箱を見てそう言った。

一方ワツシーは、一体の水色のヨツシーの救出を試みていた。

ワツシー「いいか、じっとしてるよ!!」

水ヨツシー「う、うん…!!」

ワツシー「それ、『ヒップドロップ』!!」

バキヤアン!!!

ワツシーは高く跳び上がり、一回転後に急降下した後、鎖を一撃で破壊した。

水ヨツシー「あっ、壊れた!! ありがとう、ワツシー!!」

ワツシー「礼は後だ! 早くこっから避難しろ!!」

一方キヤサリンは、一体の桃色のへイホーの救出を試みていた。

キヤサリン「じゃ、行ってみるねえ〜!!」

彼女は卵を抱えながらそう言うが、逆に桃色のへイホーはそれを不安視していた。

桃へイホー「：ホントにその卵で大丈夫？」
キヤサリン「やってみないと分かんないわよ？ そんじゃ、行くわよ！… そりゃっ…！」

バキヤアン…！！

彼女が卵を鎖に攻撃すると、その鎖は一撃で破壊された。

桃へイホー「あっ、ホントだ！ 壊れた…！」

キヤサリン「ほお〜ら、やってみると結構たぬになるわよお？」

一方へイホーは、一体のオレンジ色のヨツシーの救出を試みているが、

へイホーは岩を使って何度も鎖を壊そうとしていた。

橙ヨツシー「：ホントにそれで壊せるの？」

へイホー「だからこうしてやってんじやないの！」

バキヤアン…！！

努力があつてか、へイホーは何とか鎖を壊す事が出来た。

橙ヨツシー「えっ！？ 壊れた!？」

へイホー「ほ、ほら！ だから言つたじやない…！」

彼は息切れになりながらそう言った。

一方ヤリホーは、一体の水色のへイホーの救出を試みている。

ヤリホー「ほんじゃ、行くだあよ！ 気を付けるだあ！」

彼はそう言いながら、槍を掲げ始めた。その間に水色へイホーは、その瞬間を見ながら焦り始めていた。

水へイホー「ホ、ホントに大丈夫だよね!？」

ヤリホー「オラを信じるだあ！ 行くだあよ…！ おりゃあ…！」

バキヤアン!!!

彼は槍を強く鎖に突くと、鎖は一撃で破壊された。
水へイホー「うわっ、ホントに壊れた!」

ヤリホー「ほら見る、オラの槍は伊達じゃねえだあ!」

一方ムーチョは、一体の紫色のヨツシーの救出を試みていたが、なぜかそのヨツシーはムーチョに対し怯えていた。

紫ヨツシー「し、慎重にだよ!!!」

ムーチョ「分かってるって! 行くよ!!! フンツ!!!」

バキヤアン!!!

彼は口か砲弾を放つと、鎖を一撃で破壊した。

紫ヨツシー「よ、よかった!無事みたい!!!」

ムーチョ「ほら、僕を信じればいいって言ったじゃない!」

一方ポロドーは、一体のオレンジ色のへイホーの救出を試みるため、彼はピックラしき道具を使って、

鎖の鍵穴を抉じ開けようとしていた。

橙へイホー「ホントにそれで開けられるの?」

ポロドー「うっせえな!これが泥棒としての鍵の開け方なんだよ!」

カチャッ!

彼がそう言った後、鎖の鍵が開けられ、オレンジのへイホーを解放させた。

橙へイホー「あっ、ホントだ!外れた!」

ポロドー「そら見る、俺の言った通りだろ!」

一方コマンドヘイホーは、一体の桃色のヨツシーの救出を試みていた。

コマンドヘイホー「じっとしてくださいよ！ 今から解放して差し上げます！！」

彼はそう言いながら、ハンマーを振り上げた。

桃ヨツシー「あわわわ、見てらんない……！！」

彼女は目を両手で防ぎながら怯えていた。

コマンドヘイホー「それっ！！」

バキヤアン！！！！

彼はハンマーを強く振り下ろすと、鎖は一撃で破壊された。

桃ヨツシー「えっ！？ 壊れたの！？ やった！！ やつと解放されたんだ！！」

コマンドヘイホー「救出完了！ 速やかに避難してください！！」
彼は敬礼しながらそう言った。

こうしてまき絵達は、次から次へと、ヨツシー達とヘイホー達を救出し続けていた。

………それからしばらく時間が経ち、まき絵達は見事に全てのヨツシー達とヘイホー達を救出し、
一箇所に集めさせた。

まき絵「ふう〜………これで全員助けられたね！」

彼女は腕で額に付いた汗を拭き取りながらそう言った。

亜子「ワツシーさん、ハイホーちゃん、助けられたワツシー達とハイホー達はこれで全員かな？」

ワツシー「ああ…改めて数えてみたら、これで全部だ。減った数はいないみたいだ。」

ハイホー「こつちも誰一人も減ってないみたいだよ！」

キャサリン「それじゃ、みんな無事に生き残れたって事なのね！それを聞いて安心したわ！」

もちろんワツシーちゃんも無事でよかったわ！ あたし、こつち見えても心配してたのよ！」

彼女は喜びながら緑のワツシーに向けてそう言うが、逆にワツシーはお腹を鳴らせながらため息を吹いていた。

ワツシー「でも……お腹が空いてて……動けないよ……。」

ワツシー「そりゃそうだろ…こつち見えても何日も食ってないみたいだからな。」

ボロドー「ヘッヘッ…安心しな！」

コマンドハイホー「そんな事もあるうかと思ひまして…。」

ヤリホー「飯たくさん持って来ただ！」

三人がそう言うと、突然どこから大きな風呂敷を取り出し、その風呂敷を開かせた。その風呂敷の中には、

バナナや林檎、マスカットやメロンなどと言った、様々な果物が大量に入っていた。

ワツシー達・ハイホー達「!!! 食べ物だあああああ!!!」

それを目の当たりにしたワツシー達とハイホー達は、一斉に果物に食い込み始めた。

その間に亜子とまき絵は、その光景を見て啞然としていた。

亜子「…す…すごい…。」

まき絵「すごい食べっぷりだね…。」

キャサリン「これもみんなお腹が空いてた証拠ね！」

ワッシー「とは言えど、あんたらには感謝してるぜ。あんた達も一緒に行動していなかったら、

俺達はここまで進んでいなかったかもしれない。改めて例を言っぜ。」

亜子「いや、別にエエよ、お礼なんて！　ウチらは当然の事をしたまでよ！　けど、

みんなをここまで進めさせたんはまき絵の方やから、まき絵に感謝した方がエエよ！」

まき絵「え、そ、そんな、て、照れるよ……！」

彼女は顔を少しだけ赤くしながら照れ始めた。

ワッシー「でも、いくら全員救出に成功したと言っても、まだやるべき事が残ってるからな。

今はここにいないが、こんな事をした奴らを何とかしなきゃならねえ。

そいつらをこの島から追っ払うためには……………」

ムーチョ「うわあああああああ……！」

その時、ムーチョは空を見上げながら突然悲鳴を上げた。

ワッシー「……？　な、何だいきなり……！」

ヘイホー「どうしたの、ムーチョ……！」

ムーチョ「う、上！　上……！」

まき絵「上……？」

全員「……？」

ムーチョが指した方向へ全員が見上げると、大空から巨大な飛行船が浮いていた。その飛行船は、

先頭が斧のような形をした刃物で出来ていて、それになぜか濃い眉毛を持った目が描かれていた。

それを目の当たりにしたまき絵達は、一瞬に愕然とした。

まき絵「な、何あれ!？」

亜子「大きな飛行船!？」

キャサリン「ワ、ワッシー!! あれってまさか…!？」

ワッシー「あ、ああ………奴らだ…! 奴らが戻って来やがった!

!..」

第20話 復活のカジオー戦隊

……ヨッシーアイランドで謎の敵によって囚われたヨッシー達を救出したまき絵と亜子達だったが、

突然敵の物と思われる巨大飛行船が、彼女達の真上に現れた。

まき絵「な、何あれ!？」

亜子「大きな飛行船!？」

キャサリン「ワ、ワッシー!! あれってまさか…!？」

ワッシー「あ、ああ………奴らだ…! 奴らが戻って来やがった! ……!」

その時、飛行船から何かが飛び降り、後ろ向きでありながらまき絵達の前に辿り着いた。その人物達は五人もいて、

それは赤・黒・緑・桃・黄と言う色に分けられていた。どちらも同じタコのような口と刺の付いた頭、鋼鉄のボディ、

そして手に斧を持っていたが、黒い方にはサングラスをかけていて、緑の方が痩せていて、黄色い方が太っていて、

桃色の方が女性だった。

???A「この世の悪を守るため!」

???B「人々の心に、憎しみと悲しみをもたらし!」

???C「混沌とした破滅の世界を作るのよ!」

???D「それが、私達の儂くも美しい理想郷!」

???E「我ら、カジオー戦隊!」

???A「『オノレッド』!」

???B「『オノブラック』!」

???C「『オノグリーン』!」

???D「『オノピンク』!」

???E「『オノイエロー』!」

オノレッド「五人揃って………!」

全員「『オノレンジャー』!!!!」

ドオオオオオオオオオオオオオオ!!!

オノレンジャーと名乗る彼らがポーズを決めると、背後からスペシヤルエフェクトのつもりか、爆発が起きた。

だがそんな彼らを目の当たりにしたまき絵達は、啞然としていた。

亜子「……………な、何やの、あれ？」

まき絵「何か可愛いかも…？」

キヤサリン「感心てる場合じゃないわよ!!! あいつらがヨッシーちゃん達とハイホーちゃん達を攫った犯人よ!!!」

オノレッド「これは驚きだな。 たった十分間で留守にしていたのに、

もう既に囚人達を解放しようとする侵入者が現るとはな。」

オノブラック「早く戻って来てよかったぜ! さもなければ余計探す羽目になるところだったがな!」

まき絵「こら、あんた達だね!? この子達を酷い目にさせた悪い奴らは!?!」

彼女はオノレンジャーに指しながらそう言った。

オノピンク「あら、そうよ? それがどうかしたの?」

オノグリーン「あたし達は任務のためにその子達をしもべにしたのよ! それが何か悪いのかしら?」

まき絵「何も食べさせたり飲ませたり、しかも休ませたりさせないなんて酷いじゃないの!!!」

あんた達がやってる事、人として最低だと思わないの!?!」

オノイエロー「残念ながらワシらは人ではないでゴウス!

それにワシらのやり方には文句など言わせないでゴ

ウス!!!」

なぜならワシらは偉大なる悪の戦隊でゴワス!!」
彼は威張りながらそう答えた。

ワツシー「てめえら、一体何の目的で仲間を攫い、島を荒らし回りやがるんだ!？」

オノレッド「残念ながら、それを答えるのは我々の義務ではない!」
オノイエロー「そうでゴワス! この島に隠れていると言われている秘宝を探し来たなど言わないでゴワス!!」

バコオン!!!

オノイエローが威張りながらそう答えた後、オノレッドとオノブラツクは斧で彼の頭を殴った。

オノレッド「言ってるじゃないか!!」

オノブラツク「勝手にバラしてんじゃねえよ、このタコ!!」

オノイエロー「…すまんてゴワス…。」

ワツシー「はあ? この島に隠されてる秘宝?」

亜子「え、そんなのあるんか?」

ワツシー「いや、聞いた事ないが……。」

彼は頭を振りながらそう言うが、近くにいた緑ヨツシーは、何か心当たりがあるかのような顔をしながら、
林檎を齧ったまま黙り込んでいた。

オノレッド「…フ、フンツ! バレてはしょうがない……なら特別に教えてやろう!

我々カジオー戦隊オノレンジャーは、この世を破滅と
絶望に陥らせるため、

ある宝を探している! その宝は世界中のどこかにあると言われているが、

その内の一つがこの島にあると言つ情報が来たのだ！
だがせっかく来た物の、

どこにあり、どう探せばいいのか検討が付かないので
ね……………

きつと地面に埋まっているのだる考えた我々は、この
島にいる住民共をしもべにし、

見付けるまで発掘作業を行わせてもらったのだよ！」

キヤサリン「何よ、そのお宝つてのは！？ あたし達にはそんなお
宝知らないわよ！」

ヘイホー「そうだぞ！ もしホントにあつたとしたら、とつくに僕
達が見付かつてるよ！」

ボロドー「或いは俺が盗んでるぞ……！」

ムーチョ「誰も君の意見を聞いてないんだけど……。」

彼は白けた顔をしながらボロドーに突っ込んだ。

オノブラック「何だあ？ 島民の分際で知らねえのかあ？」

オノグリーン「仕方ないわよ！ 攫つた奴らだって同じ事しか言わ
なかつたんだから！」

オノピンク「どうせ秘宝だから秘密にしてんでしょ？」

オノイエロー「嘘など通用せんでゴワス！」

ワッシー「知らない物は知らないってえの……！」

彼は反発しながらそう答えた。

ワッシー「とにかく……！ 俺達の島を荒らし、仲間を攫つた以上、

決して許さねえ……！」

例えどんなに謝つても絶対許さねえぞ……！ お前らのよ
うな訳の分からん存在感を持った悪党など、

全員纏めてぶつ倒してやらあ……！」

オノレッド「ほほう、我々に挑戦を申し込むと言つのか……。」

オノブラック「おうおう、売られたケンカならありがたく買い取る
ぜ……！」

オノイエロー「ワシらが謝るわけないでゴウス！ 邪魔する奴は全員ボロ雑巾にしてやるでゴウス！！」
オノグリーン「とにかくお宝はあたし達が頂くわよ！ 何が何でもあたし達の物よ！！」
オノピンク「後で後悔しても知らないわよお〜？ とことん痛い目にしてあげるんだから！」

ワツシー「俺達の島のためだ！ 徹底的にぶっ潰してやる！！」
キヤサリン「あたしもやるわよ！！ ヨツシーちゃん達の恨み、思い知らせてやるわ！！」

ヘイホー「戦うのは嫌だけど…僕もやるよ！！ 仲間を虐めたあいつら、絶対に許さない！！」

ボロドー「俺達も付き合うぜ！！」

ヤリホー「悪い奴らには祟りだあ！！」

ムーチョ「絶対に勝つぞお！！」

コマンドヘイホー「私も応戦します！！」

ヨツシー「僕も戦うよ！！」

彼はそう言いながら立ち上がるが、逆にワツシー達は驚きながら彼の方へ振り向いた。

ワツシー「えっ！？ お前までもか！？」

キヤサリン「ヨツシーちゃんはダメよ！！ あんた、あんな事をさせてからボロボロでしょ！？」

そんな状態で戦っちゃ危険過ぎるわよ！！」

ヨツシー「大丈夫！ さつき食べたおかげで元気が戻ったし、疲れも完全に吹っ飛んだよ！

それに、みんなを虐めたあいつらを、僕は許せないんだ！！
だからお願い、

僕も一緒に戦わせて！！」

ワツシー「ヨツシー……………よしっ、分かった！ なら一緒に戦^やろう

ぜ！　だがヤバくなったら逃げるんだぞ！

いいな！？」

ヨッシー「うん！」

彼は頷きながらそう言った。

まき絵「私達も一緒に戦うよ！　みんなを虐めた奴なんか、お仕置きしちゃうんだから！」

亜子「ウチも一緒に戦うでえ！」

ワッシー「よし、なら他のヨッシーやハイホー達は今直ぐ安全な場所へ避難しろ！」

彼が解放されたヨッシー達とハイホー達に振り向きながらそう言うのと、言われた通りに全員その場から走り去った。

オノレッド「我がオノレンジャーの強さを恐ろしさ、得と見るがいー！！　行くぞー！！！」

オノブラック・イエロー・グリーン・ピンク「おうー！！！」

彼らは斧を構えながら同時に大声で返事した後、ワッシー達に目掛けて襲い掛かり始めた。

オノレンジャー「せいやああああああー！！！」

ワッシー「みんな、避けるおー！！！」

亜子・まき絵「うわあっ！！！」

オノレンジャーが素早く斧で斬り掛かると、ワッシー達は急いでその場から離れ、回避した。

亜子「あ、危ない所やったわ……！」

まき絵「ちよっと、危ないじゃないの！？」

オノブラック「文句言ってる暇があんなら、とっとくたばりやがれえ！！　『ばくだんゴロゴロ』！！！」

トトトトトトオン……！！

彼はそう言いながら、大量の小型爆弾を投げ落とし、爆発させた。
亜子・まき絵「きゃああああ!!!」
その爆発により、二人の少女は爆風に巻き込まれ、飛ばされた。

ヨッシー「よくもやったなあ!? 『たまご投げ』!!!」

ワッシー「こつちも『たまご投げ』だあ!!!」

キャサリン「ならあたしも卵攻撃よ!!! フンッ!!!」

ヨッシーは緑の水玉模様の付いた白い卵、ワッシーは青い水玉模様の付いた白い卵を取り出し、

敵に向けて投げ飛ばした。その同時にキャサリンは口から桃色の水玉模様の白い卵を、

敵に向けて口から吐き飛ばした。しかし、そこで現れたオノグリーンにより、斧で卵を素早く切り裂いた。

ヨッシー・ワッシー・キャサリン「なっ!?!」

オノグリーン「何よこれ、卵で攻撃するのぉ!? もう、おかげで大事な斧がベトベトじゃないの!?!」

お返しに黒焦げにしてやるわ!!! 『ほうでんげんしょう』!!!」

彼は斧を掲げ、振り下ろした瞬間に大きな雷が、ヨッシー達に向けて落ちて来た。

ヤリホー「『ヤリヤリダンサーショット』!!!」

ドガアアアアアアアン!!!

だが突然ヨッシー達の前にヤリホーが現れ、槍から雷球を飛ばし、落雷を打ち消した。

ヤリホー「大丈夫かあ!?!」

ヨッシー「あ、ありがとう、ヤリホー!」

オノグリーン「きい~~~~!!! 何よあんた!?! あたしの邪

魔をするつてえの!?

もしそうだとしたら許さないわよ!?

ヤリホー「おめえの相手はこのオラだあ! 掛かって来るだあよお!」

オノイエロー「ドスコオオオオオイ!」

ドガアアツ!!!

しかし、ヤリホーの横からオノイエローが激突し、ヤリホーを軽々と突き飛ばした。

ヤリホー「ゴキイツ!」

ヨツシー「ヤリホー!」

オノイエロー「ファッファッファッファッ! 愚か者めえ!」

乱闘には相手選びなどないでゴワス!」

ヘイホー「よくもヤリホーを! 食らえ、パチンコ攻撃!」

コマンドヘイホー「こちらもパチンコで応戦します!」

ボロドー「ええい、こっちは石ころで!」

ムーチョ「大砲攻撃だあ!」

ヘイホーとコマンドヘイホーはパチンコで、ボロドーは投石、そしてムーチョは口から砲弾を放ちながら、

オノイエローに攻撃するが、攻撃に気付いたオノイエローは斧を素早く回転しながら、全ての攻撃を弾き飛ばした。

ヘイホー・コマンドヘイホー・ボロドー・ムーチョ「ええっ!」

四人は頭を抱えながら愕然とした。

オノイエロー「フンツ!! その程度の攻撃ではワシを倒す事も出来んでゴワス!!」

反撃にこれでも食らうでゴワス!」

バシヤン!!

オノイエローが水球をハイホー達に投げ飛ばし、ぶつかつた事でハイホー達は水浸しになった。

ハイホー・コマンドハイホー・ボロドー・ムーチヨ「うわあっ!?!」
ヨツシー「あつ、みんなっ!?!」

ハイホー「うわあ、何これえ!?!」

ボロドー「気持ち悪い!?!」

コマンドハイホー「何なんですか、この液体はあ!?!」

ムーチヨ「びしょ濡れだよあ!?!」

オノイエロー「ファツファツファツ!?! 実に他愛もない上に片腹痛いでゴワス!?!」

まき絵「亜子! ヨツシー達が大変だよ!」

亜子「ホンマや! 早よ助けへんと……!?!」

オノレッド「とりやあああああ!?!」

二人の少女がヨツシー達の助太刀に行こうとしたその瞬間、背後からオノレッドが斧で斬り掛かろうとして来た。

亜子・まき絵「きゃっ!?!」

だが殺気を感じた二人は、直ぐに攻撃を交わし、その場から離れた。オノレッド「他の仲間を助けに行こうと思つたら、そうは行かない!?!」

オノピンク「貴女達は私達の手で倒されるのよ!?!」

亜子「くっ……どないしよう……ヨツシー達を助けなアカンっちゅうのに……!?!」

まき絵「亜子、ここは戦うしかないよ! ヨツシー達は多分大丈夫だと思つから!」

亜子「そ、そやな……それやったら、ウチらはリーダー格のあの赤い奴を倒すでえ!?!」

まき絵「行くよあ!?! それえっ!?!」

彼女は二本の棍棒をオノレッドに向けて投げ飛ばすが、オノレッド

は斧でそれを弾き飛ばした。
オノレッド「ハッ、バカめ！ そんなへなちよこな小道具で俺を倒せるとても……………!？」

ドゴオンツ!!!

しかし、彼が油断をしていると、亜子は救急箱を蹴り飛ばし、オノレッドの顔に命中した。

オノレッド「フゴツ!？」

亜子「隙が多過ぎやで!！」

彼女がそう言いながら、蹴り飛ばした救急箱が彼女の手元に戻って来た。

オノレッド「痛つでえ〜き、貴様あ!! よくも俺の顔に変な玉を…!？」

まき絵「隙ありい〜!! それそれぞれえええええ!! !」

バコバコバコバコオツ!!!

隙を狙ったまき絵は、無数の棍棒をオノレッドに投げ付けて攻撃した。

オノレッド「ナムゴブロツ!？」

まき絵「やったあ!! クリーンヒットオ!!」

殆どの攻撃を受けたオノレッドは、斧を杖代わりにしながら、ボロボロな姿で起き上がった。

オノレッド「お、己…貴様ら…調子に乗りおつて……………!!」

まき絵「何だあ、リーダー格の割には結構大した敵じゃないじゃん! これなら勝てるかもしれないよ、亜子!!」

亜子「そうかもしれないけど、だから言うて油断しない方が…!!」

オノピンク「きゃああああ！！ 私達のリーダーであるレッドがボコボコにされてるう~~~~！！！！」

彼女は両頬を抱えながら、シヨックにそう言うが、その後不敵な笑みに一変した。

オノピンク「でえ〜も、私にはこれがあるもんねえ〜！ 『かいふく』！！」

キラアアアアン！

彼女がオノレッドに向けて投げキッスをすると、桃色の煌く光がオノレッドの体中に包み込み、全ての傷を癒した。

オノレッド「うおおおおおおおお！！！！」

亜子・まき絵「えっ!?!」

体力が完全回復した事で気合を入れ出したオノレッドに対し、それを見た亜子とまき絵は愕然とした。

まき絵「な、何!?! 今何が起きたの!?!」

亜子「嘘!?! 相手の体力が回復しよった!?!」

オノピンク「残念でしたあ〜 私はこう見えてもオノレンジャーの回復担当隊員なのよ!」

仲間が傷付いたら必ず回復させる！ それが私の戦略！ だからあんた達には何をしようかと、

勝ち目はないのよ!!!」

オノレッド「へっへっ、助かったぞピンク!! 礼を言うぞ!」

彼がオノピンクに感謝の一言を言うと、二人の少女達に振り向き、睨み付いた。

オノレッド「さあ〜て、そうと来たら早速お返ししないと行けないな！ 俺に与えたこの痛みを、

特別に二倍返しにしてやる!!! 『きあいアップ』!

!!!」

ビュオワワワワワァン!!!

彼が必殺技名を唱えると、赤い光が彼の体を包み込み、体力を増強させた。

オノレッド「ウオオオオオアアアアアアアアアア!!!」

亜子「な、何やねん、今のは!？」

まき絵「な、何かもつと強くなったような気がする…!？」

オノレッド「さあ…反撃開始だ!!! そりゃああああ!!!」

亜子「うわっ!!! 避け…!!!」

まき絵「きゃあっ!？」

ドガアアアアアアアアアアアアアア!!!

亜子とまき絵は急いで斬り掛かるオノレッドから離れるが、その後オノレッドは斧を地面に斬り込んだ。

しかし、これは斬り込むと言うより殴り込んだような物で、地面に切り目を作るより大きな窪みを作り出した。

その衝撃的な光景を目の当たりにした亜子とまき絵は、更に愕然とした。

まき絵「ええええええ!?! な、何これえ!?!」

亜子「斧で地面が凹んだあ!?!」

オノレッド「どうだ、見たかあ!!! これがオノレンジャーのリーダー、オノレッドの真の力だあ!!!」

『きあいアップ』は自分の攻撃力を増強させ、破壊力抜群の攻撃を繰り返す事が出来るのだあ!!!

今ので運よく避け切れただろうが、次こそそうは行かない!!! お前達は今この場で、

ズタズタに斬り裁かれたばら肉にしてやる!!! 覚悟

おおおおおお!!!」

亜子・まき絵「きゃあああああ！！！！」

オノレッドは闇雲に斧を振り回すが、二人の少女は慌てながらもそれを避け、逃げ回り始めた。

亜子「ア、アカン！！ 余りにも危な過ぎて近付けへん……！！ これやと攻撃が……！！」

まき絵「だ、大丈夫だよ！ 近付かなくても、こっちは遠い所から攻撃出来るよ！ それえっ……！！」

彼女は無数の棍棒を敵に向けて投げ飛ばすが、オノレッドはたった一振りですべてを全て斬り払った。

まき絵「ええっ……？」

オノレッド「へッ、バカめ！！ 二度も三度も同じ物を食らうか！！」

まき絵「嘘おっ……？ 遠くからの攻撃じゃ無理なの……？」

亜子「それやとウチの攻撃もアカンわ！ 何か別な方法を探さへんと……！！」

オノピンク「ちよつと、逃げ回ってばかりじゃつままないわよ！

これでじつとしてなさい！！

『さくららぶぶき』……！！』

ビュオオオオオオオ！！！！

彼女が呪文を唱えると、突然桜の花弁が大量に飛び散り、二人の少女に覆った。その後、

二人は突然眠気を感じ始め、体を揺さ振り始めた。

亜子「……！！？ な、何やこれ……！！？」

まき絵「急に……眠くなつて……！！？」

オノピンク「驚いたあ？ 『さくららぶぶき』は桜に覆われると眠くなってしまうのよ！」

これであんた達も自由に動けないわ！ どう、面白く

なっただでしょ？」

オノレッド「でかしたぞ、ピンク！！　これならお前達も自由に逃げ回れまい！！」

大人しく俺の斧の餌食になるがいい！！」

亜子・まき絵「うわっ！！！！」

オノレッドは再び斧を振り回すが、眠気に陥った亜子とまき絵は必死になりながら攻撃を交わし、揺さ振りながらも逃げ回った。

亜子「ア、アカン……！！　眠気のせいで……体が動き難い………何も出来へん……！！」

彼女は襲い掛かる眠気に苦しみながらそう言った。

まき絵（ど、どうしよう………眠たくて体が自由に動けない………こっちの攻撃も相手に通用しないし………

このままだと……私達がやられちゃう………うっん！！　そうなんじゃダメ！！　そう思っちゃダメだよ、

まき絵！！　きつとどこかに突破口があるはずだよ！！

相手に勝つ方法が！！

そのためにこの眠気を何とかしなくちゃ！！　ええ〜い、目を覚まさない、まき絵！！

こんなんだとあんた失格だよ！！！！）

彼女はそう思いながら、頭を振り回したり、両手で頬を叩いたりして、自分の目を覚まそうとした。

亜子「ま、まき絵……！！」

オノブラック「オラア！！！！　隙あり過ぎだぜえ！！！！」

その時、オノブラックは斧を上げながら乱入し、眠気状態の亜子の背後から襲い掛かり始めた。

しかし亜子はそれに気付き、後ろへ振り向こうとするが、眠気のせいで自由に動けなかった。

そして敵の襲撃に気付いたまき絵は、驚きで目を覚ました。

まき絵「！！！！ 亜子！！！！」

亜子「し、しまっ……………！！！！」

ズシャアッ！！！！

オノブラックは素早く斧を振り下ろし、斬り掛かった。そしてオノブラックと亜子の前に、

大量の血が飛び散った。しかし、その血は亜子の物ではなかった。その血は、

彼女に飛び込み、庇うつもりで背中が斬られた、まき絵の物だった。そんな彼女の苦痛な姿を目の当たりにした亜子は、沈黙のまま驚愕した。

オノブラック「何いつ！？」

そして二人の少女が倒れた後、亜子は眠気から覚まし、急いで起き上がり、

背中から血を流したまま倒れたまき絵を抱き上げた。

亜子「ま、まき絵！！ まき絵！！！！」

まき絵「…うっ……………くっ……………！！」

彼女は背中 of 激痛を感じながら苦しみ、目からその痛みによる涙が出始めた。

その間に亜子は必死になりながら、何度もまき絵に呼び掛けた。

亜子「まき絵、大丈夫！？ しっかり！！」

まき絵「……………ぐっ……………あ…亜子……………だ、大丈夫……………？」

亜子「ウチは大丈夫やけど、まき絵が……………！！」

まき絵「そ、そう……………よかった…亜子が無事で……………。」

亜子「まき絵…何でウチを庇ったん！？ 何でウチのためにこんな無茶な…！？」

彼女は必死に心配しながら、目から涙がこぼれ始めた。

まき絵「…えへへ…だ…だって……………亜子が…危なかったんだよ？

ただ眠気のせいでは……

「これしか考えられなくて……。」

亜子「まき絵……。」

まき絵「……な……何があっても……友達を助けるのが……当たり前でしょ……？ それとも……」

無謀……… だったのかな……？ 助ける方法なんて………いくらでもあったのに………

……… やっぱ………こんな事しか出来なかった私って………失格かな……… 八八ハツ………。」

亜子「な、何言ってるんの、まき絵！？ あんた失格違う！！ 失格なんか違うよ！！」

友達を助けるために、正しい事をした！！ まき絵は失格なんかやない！！

まき絵！！ しつかり！！ まき絵！！！！」

オノブラック「貴様……！！ 狙った獲物を庇いやがって、よくも邪魔してくれたなあ！！？」

オノレッド「まあ、いいだろう。 おかげで身動きも出来なかったよ。うだし、もはや逃げる事も出来まい！」

オノピンク「そうね。 眠気は覚めちゃったけど、こっちの方がもっと楽かもね？」

まき絵が死に掛けているにもかかわらず平然とした三人に対し、亜子はそんな敵達に睨み付いた。

亜子「あんた……… よくもウチの大切な友達を………！！」

オノレッド「ん？ 何だ？ 負け犬一匹仕留めただけで何か文句でもあると言うのか？」

亜子「！！！！ まき絵は失格でも負け犬でもない！！！！ まき絵はウチの大切な友達や！！！！」

「そんな友達を傷付けたあんたら、絶対許さへん！！！！」

オノブラック「フンッ！ 許されなくて結構！ 俺達は悪の戦隊だ

！！ それに、俺達と戦^やろうつてんなら、

女でも容赦しないぜ！！」

オノピンク「そうそう！ 私達は臭い友情ドラマなんか全く興味ないんだから、

とつとと終わらせてもらおうよ！！」

亜子「くっ……………！！」

明らかに逃げる隙もなくなった亜子は、歯を食い縛りながら、死に掛けているまき絵を守ろうと抱き締めた。

まき絵「…あ…亜子…………… 亜子だけでも……………！！」

亜子「何言つてんねん！？ まき絵だけ残して逃げるなんてウチには出来んわ！！」

一方オノグリーンとオノイエローと戦っていたヨッシー達は、ピンチになっている亜子とまき絵に気付いた。

キヤサリン「！！ ヨッシーちゃん、ワッシー、亜子ちゃんとまき絵ちゃんが危ないわ！！」

ワッシー「何だと！？」

ヨッシー「早く助けないと……………！！」

ハイホー「コマンドハイホー、ヤリホー、ボロドー、ムーチヨ、こ

こは僕達に任せて、早く亜子とまき絵を！！」

コマンドハイホー「了解！！」

ヤリホー「今行くだよお！！」

ボロドー「じゃ、そつち任せませ！！」

ムーチヨ「絶対助けるぞお！！」

四人はそう言つて亜子とまき絵を助けに行こうと飛び出すが……………。オノグリーン「おつと、そうは行かないわよ！！ 『カチカッチン』

……………！！」

カチイイイイイイン！！！！

オノグリーンは腕を上げながら呪文を唱えると、地面から氷の刺が発生し、

駆け出したコマンドハイホー達を凍らせた。

ハイホー「ああ!! みんな!!!!」

オノイエロー「フンヌア!!!!」

ズガスガスガアン!!!!

その後、イエローは斧を使って凍ったコマンドハイホー達を殴り飛ばし、それをヨッシー達に直撃させた。

ヨッシー達「ぐわあっ!?!」

オノグリーン「ちよつと、抜け駆けしようだなんて、そうは行かないわよ!!!!」

オノイエロー「逃げたければワシらを倒してからにするんでゴワス!!!!」

ワッシー「くそっ!!!! こいつらが邪魔してる以上、何も出来ないぜ!!!!」

ヨッシー「でも、早くあの子達を助けないと!!!!」

オノレッド「さあ、これで終わりだあ!!!!」

オノブラック「真つ二つに切り裂いてやらあ!!!!」

二人はそう言った後、斧を振り上げた状態で、亜子とまき絵の前に飛び上がった。そんな亜子は必死になりながら、

まき絵を守るように彼女を強く抱き締めた。

亜子（…助けて…ネギ君…!!!!）

ドゴオオオオン!!!!

その時、赤い水玉模様の付いた白い卵が飛び出し、オノレッドの横顔に直撃した。

オノレッド「ベゴンツ!？」

衝撃を受けたオノレッドは、そのまま横へ飛び、倒れ落ちた。

亜子「えっ…!？」

オノブラック「なっ!？ レッド!？ くっ、だ……!？」

彼は卵が飛んで来た方向へ振り向いたその時……!

ズゴオツ!!!

突然大きな石が飛び出し、オノブラックの口の中に入り込んだ。

オノブラック「フゴオツ!？」

石が口の中にはまったため、オノブラックはそれを取り出そうと暴れ始めた。

オノピンク「ええ!？ レッド、ブラック、どうしたの!？」

亜子「い、今は……!？」

オノグリーン「え!？ 何!？ 何が起こったの!？」

オノイエロー「敵襲でゴワスか!？」

ヨッシー「い、今は……!？」

ハイホー「もしかして……!？」

全員がその卵と石が飛んで来た方向へ振り向くと、そこには仲間を探しに出ていたはずの赤・青・黄のヨッシー、そして緑と黄のハイホーが立っていた。ちなみに緑ハイホーが手にパチンコを持っていた事から、先ほどの石は彼の物と思われる。

赤ヨッシー「ヨッシー、みんな、無事かあ!？」

緑ハイホー「助けに来たよお!！」

ヨッシー「えっ!？ 赤ヨッシー、青ヨッシーに黄ヨッシー!？」

ハイホー「緑ハイホーに黄ハイホー!! 戻って来たんだ!!！」

亜子「あの子達は…ウチらと会った子達や!! みんな助けに来た

んやー!!」

オノグリーン「ええ!? ちょっと、何なのあいつらは!?!」

オノイエロー「まだ敵が残ってたでゴワスか!?!」

オノピンク「嘘お!? そんなのってありがたい!?!」

キャサリン「よかった、ちょうどいいタイミングに助けに来たのね!」

ワツシー「おい! お前らが戻って来たって事は……………!?!」

黄へいホー「うん! ちゃんと仲間を連れて来たよ! それもたっくさん!?!」

青ヨツシー「全員集合!?!」

彼が合図を出すと、突然木々から大量の集団が立ち上がった。

それぞれは先ほど避難したはずのヨツシー達とへいホー達、他のヤリホーやポロドーやムーチョ達、

更になら布を被り、カンテラを持ったお化けのような小人集団、
一頭身の白い鳥集団と毛が三本生えた羽根なしの九官鳥集団、

野球グローブやバットを装備したポロドーに近い小人集団、覆面を付けた紫色のネズミ集団、

そして可愛らしい花のような姿をした小人集団であり、

全員立ち上がった瞬間オノレンジャー達の方へ睨み付いた。それを目の当たりにしたオノレンジャーは、

正直驚愕した。

オノブラック「うおおお!? 何じゃありやああ!?」

オノレッド「こ、こんなにいつぱい……………?」

オノピンク「嘘お!? まだ捕まってもいない島民ってこんなにたくさんいたの!?」

オノイエロー「な、何でゴワスか…あの数……………?」

オノグリーン「ちよつと、これ予想外なだけ……………?」

ヨツシー「す、すごい……………こんなに集めて来たなんて……………!」

ハイホー「しかもさつき逃げたはずのみんなや、ヤリホー達の仲間まで、こんなにくさん……!!」

亜子「まき絵、見てみ!! こんなに助けがやって来たで!!」
彼女は喜びながらそう言うが、息が切れそうなまき絵はただ黙り込んでいた。

キャサリン「すごいわ! 『カンテラくん』に『チューさん』、『あほーどり』に『キューちゃん』、

『ミットさん』に『バットさん』、そして『パンジーさん』まで!

こんなにたくさん集めたなんてすごいじゃない!!」
ワッシー「やったなお前ら!!! でかしたぜえ!!!」

チューさん「話はヨッシー達から聞いたツチュ!! 島やみんなを取り戻すために敵と戦うんチュ!?」

ミットさん「あの野郎…俺達の島を好き勝手な真似をしやがって……!!」

バットさん「追っ払うまで徹底的にぶっ倒してやる!!」
カンテラくん「ケケケツ、地下にいた僕達には関係なかったけど、

同じハイホーとしては放って置けないよねえ……!!」
パンジーさん「私達、争いは嫌いですが、私達の島を荒らし、みんなを傷付ける人は決して許しません!!」

一緒に戦います!!」
あほーどり「クワア……!!」

キューちゃん「キュウ……!!」
ヨッシー「みんな……!!」

応戦しに来た住民達の掛け声を耳にしたヨッシー達は、感動していた。

青ヨッシー「みんな、今から助けに行くよお!! 全員突撃いいいい!!」

全員「おおおおおおおおおおお！！！！」

青ヨツシーの合図によって大声を出した住民達は、一斉にオノレンジャーに向かって突撃した。

オノグリーン「ひいいいい！！！！ 一斉に来たわあああああ！！！！」

オノレッド「ええい！！ 何やってるんだ！？ あんな雑魚共にビビってどうする！？」

全員片付けちまえ！！！！

オノピンク「片付けちまえって、こんな数じゃ無茶過ぎるわよ！？」

バキヤアアアン！！

その間にバットさん達は、バットで凍ったコマンドヘイホー達の氷を割り、彼らを救出した。

バットさんA「大丈夫か！？」

コマンドヘイホー「…え…あれ…？ ここは…？ って、貴方達は確か…？」

バットさんB「ヨツシー達が俺達と一緒に戦ってほしいと言って、助けに来たぜ！」

バットさんC「お前達の仲間も、全員ここにいるぞ！」

ヤリホー「んあ！？ オラ達の仲間までもかあ！？」

ボロドー「他の奴らも見付けたのか！？」

ムーチョ「よかったあ、これでみんなの所まで戻れるよお！」

コマンドヘイホー「でも、これほどの人数なら、我々もきつと勝てます！！！！」

なら我々も反撃開始です！！！！

ヤリホー・ボロドー・ムーチョ「おお！！！！」

三人は片手を高く上げながら、大声でそう答えた。

カンテラくん「ケケケツ！！ とりあえず温めないとねえ！ それえ〜！！」
カンテラくん達は手に持っていたカンテラをオノピンクの前に投げ落とし、
そこから出た火で彼女の周囲を炎上させた。
オノピンク「熱ちゃあああ！！ 熱ち熱ち、ホントに熱いつ！！
ちょっと、

私熱いのが苦手なだけど…！！？」

すると、彼女の顔が熱により溶け始め、それに気付いた彼女は手鏡を取り出し、自分を見た。

オノピンク「きゃああああ！！ レッドオオオオオ！！」
レッド「ん！？ 何だ！？」

オノピンク「火のせいで私のお化粧が乱れちゃったわ！！」

せつかく二時間半も掛けて決まったお化粧なのにい〜

〜！！！！」

オノレッド「バカモオ〜ン！！ 出勤前に厚化粧するなとあれほ
ど言っただろお！？」

コマンドハイホー「ハイホー軍団！！ パチンコ一斉発射！！！！」
ハイホー「反撃開始い〜！！！！」

コマンドハイホーがそう指示すると、ハイホー達は大量のパチンコをオノブラックに連射するが、

オノブラックは斧を振り回しながら全てのパチンコを弾き飛ばした。
オノブラック「ケツ、そんなへなちょこ攻撃なんざ効く訳ないだろ
うが！！」

コマンドハイホー「ならばこれならどうだ！？ ムーチョ軍団、大
砲一斉発射！！！！」

ムーチョ「了解！！！！」

コマンドハイホーがそう指示すると、ムーチョ達は口から大量の砲弾をオノブラックに連射した。

オノブラックもそれを斧で弾き返そうとするが、先ほどとは違って必死になっていた。

オノブラック「おわっ!? ちょ、ちょっと待て!!! これだとちよつと無理が……って、ゴバアツ!?!」

一瞬の間が出てしまったためか、一つの砲弾がオノブラックの顔面に直撃した。

オノブラック「痛ててて……野郎……調子に乗りやが……!?!」
彼は顔に痛みを感じながら起き上がると、身に着けていたサングラスにひびが入っている事に気付いた。

オノブラック「ぎゃあああああ!!! レッドオオオオオ!!!」

オノレッド「何だあ!?!」

オノブラック「俺の大事なグラスンにひびがあ……新品ばかりのグラスンにひびがああああ!!!」

オノレッド「バカヤロー!!!」
『^{ドンキ}DK・ホーテ』で安物のグラスンを買うからだろうがあ!!!」

オノピンク「いやあ〜ん、せつかくの自慢のお化粧があ……もう、作り直しだわ!!!」

私『オノフォース』に帰る!!!」

オノブラック「俺も帰る!!! こんなんじゃ何も出来やしないよ!!!」

二人は泣きながらそう言った後、空中に滞在しているオノフォースと言う飛行船へ戻るために、姿を一瞬に消した。

オノレッド「あつ、こらつ、おまつ、勝手に帰るなあ!!!」

ミットさん「野球の痛みと苦しさを思い知れえ!!!」

バットさん「総攻撃だあああ!!!」

ミットさん達は投球、バットさん達は打球でオノイエローに攻撃す

るが、

オノイエローも斧を素早く振り回しながら、全ての球を弾き飛ばしていた。

オノイエロー「ファツファツファツ、そんな軟弱な小細工、ワシには通用せんでゴワ……………!!」

グウ……………!!

しかし、オノイエローのお腹が突然鳴き出し、動きが徐々に遅くなり始めていた。

オノイエロー「うおっ!? し、しまった……………腹が減って……………力が出な……………!!」

チューさん「突撃ツチュウ……………!!」

パンジーさん「突撃です……………!!」

その後チューさんとパンジーさん達は一斉に空腹状態のオノイエローに突撃し、下敷きにした。

オノイエロー「アイゴオオオオオオオオオ!!」

オノレッド「何やってんだお前はあ!? ここに戻る前に『ヨツシーズハウス』で牛丼食っただろお!?」

ヤリホー「次はあいつだべ!! 一斉に掛かるだあ!!」

あほーどり「クワアツ!!」

キューちゃん「キュキュツ!!」

ヤリホーはオノグリーンに指しながらそう言った。

オノグリーン「ひっ……………!! な、何よ、あんたら!? やろっつてえの!?! ………………って、あれ?」

彼は斧を振り上げようとしたその時、手に持っていたはずの斧がなくなっている事に気付いた。

そして彼は振り向くと、彼の斧を持ち去って逃げるボロドーの姿を目撃した。

オノグリーン「あぁっ!? あたしの斧があ!？」

ボロドー「今だぁ!! 思いつきり叩き潰しちまえ!!!」

ヤリホー「あんがとなぁ!! 突撃い~~~~!!」

彼がそう指示すると、早速他のヤリホー達やボロドー達、そしてあほーどり達とキューちゃん達は、

無防備になったオノグリーンに向けて襲撃を掛け始めた。

オノグリーン「ひいいいいい!!! ちよつとこつち来ないでえええええ!!!」

彼は早速その場から逃げようとするが、そんなに時間も掛かっていないはずなのに、

早速息切れと疲労を感じ始めた。

オノグリーン「あぁ……………ダ、ダメだわ……………貧血で……………眩暈が……………」

彼はそう言った後、後ろから迫って来たヤリホー達に突撃され、下敷きにされた。

オノグリーン「ウボアアアアアアア!!!」

オノレッド「バカタレがあ!!! お前は運動不足なんだよお!!!」

しかし、オノレッドが次々とやられ行くメンバー達にツツコミを入れていく間に、

気が付いたら彼の前に亜子とヨツシー、ワツシー、キャサリン、ヘイホー、

そして他のヨツシー達が立ち上がっていた。

亜子「さぁ、そろそろ堪忍せえや! もう逃げられへんで!!!」

ヨツシー「お前の仲間はみんな戦闘不能になったよ!」

キャサリン「二人はお家に帰っちゃったみたいだけど、もう二人は下敷き状態になってるわ!」

ヘイホー「残るはお前一人! 絶対に逃がさないよ!!!」

ワツシー「さて、そうとしたら、どのようにコテンパンにしたいん

だろつなあ〜?」

彼はそう言いながら、自分の拳を鳴らし始めた。

オノレッド「フ、フンツ!!! それがどうした!? いくら仲間がやられたとしても、

俺はまだここにいる!!! リーダーである俺がここに立っている限り、

我々オノレンジャーは不滅だ!!! 数が多いからって俺を舐めるなよ!!!

今直ぐここで一人ずつ髑り……………!!!」

しかし、そんな彼が斧を構えている間に、彼の真上からフラフープが落ちて来た。

そして彼がその落ちて来たフラフープの中に入った瞬間、フラフープが突然縮み込み、彼の両腕を塞ぎ、身を縛り込んだ。

オノレッド「ぬお!? な、何だこりや!?!」

キャサリン「え!? 何あれ、フラフープ!?!」

ワツシー「しかもあの野郎の両腕を塞いだぞ!?!」

ヨツシー「でも、一体どつから!?!」

亜子「あのフープ……………まさか!?!」

そのフラフープに見覚えがあった亜子は、ある人物に振り向いた。

そう、そのフラフープの持ち主は、傷で弱まっているまき絵の物だった。

亜子「まき絵!?!」

まき絵「…や…やったあ……………成功…したね……………!」

オノレッド「なっ!? き、貴様、まだ動けたのか!?!」

まき絵「…へへっ……………油断したね……………私…もう見えても……………

魔法使いなんだから……………!」

特にそのフープ……………長さも大きさも…自由自在に操れるんだよ……………!」

ネギ君から……そう教わったんだから……!!」

亜子「まき絵、アカン!! そんな事したら傷が余計悪化するで!」

まき絵「…私の事は大丈夫!! それより…今の内に早く…奴をやつけて…!!」

赤ヨツシー「…そうするしかない! ヘイホー、行くよ!!」

ヘイホー「うん!」

彼が頷いた後、早速赤ヨツシーの背中に乗った。その後緑ヘイホ

ーは青ヨツシー、

黄ヘイホーは黄ヨツシーに乗り始めた。

ヘイホー「『伝説の三色ヨツシー作戦』、決行!!!!」

緑・黄ヘイホー「おお!!」

その後、三人のヘイホーは緑ノコノコの甲羅を取り出し、それを赤・青・黄ヨツシーの口に入れさせた。

亜子「!? あの子達、何する気や!」

ヨツシー「あのパターン…まさか…!」

その時、甲羅を加えた青ヨツシーの背中から白い羽根が生えた。

亜子「えっ!? あの子ヨツシー、背中から羽根が…!」

緑ヘイホー「よしっ! 離陸開始!!」

彼がそう指示した後、青ヨツシーは空を飛び始めた。そして青ヨ

ツシーは赤ヨツシーを捕まり、

赤ヨツシーは黄ヨツシーを捕まりながら、オノレッドの真上まで高く飛び上がった。

オノレッド「な、何だ!? 何する気だ!」

黄ヘイホー「黄ヨツシー、投下!!」

ヘイホー「投下!!」

ズシイイイイイイイン!!!!

赤ヨツシーが黄ヨツシーを手放した後、そのままオノレッドの前に着陸した。しかし普通に着陸した後、

突然地震が発生し、その振動でオノレッドは浮かび上がった。

オノレッド「どわっ、何だぁ!？」

亜子「え、何やこれ!? あの子が着陸した瞬間急に地震が…!？」

ヘイホー「赤ヨツシー、発射!!!」

ポポポポポオツ!!!

彼がそう指示した後、甲羅を加えていたはずの赤ヨツシーの口から火球が放たれ、

地震によって浮かび上がったオノレッドに攻撃した。

オノレッド「熱ちやちやちやあぁあぁ!？」

亜子「ちよ、ちよっと、どないなってるの!? 今度はあの子の口から火が…!？」

ヨツシー「いや、それがヨツシー、特にあの三匹の特殊能力だよ!」

亜子「え!? どう言う事ねん!？」

ヨツシー「実は僕達ヨツシーには、色によってノコノコって言う亀の甲羅を加えると、

あらゆる能力を發揮する事が出来るんだよ! 特にあの

三匹は僕より特別で、

青は羽根で空を飛ぶ、赤は火を吹く、黄は着地する事で

地震を起こせるんだよ!」

亜子「そ、そうなん!？」

ワツシー「よし、今の内に、一斉『たまご投げ』攻撃だぁ!!!」

キヤサリン「私も協力するわよ!!!」

その後、ワツシーと他のヨツシー達は卵を投げ付け、その同時にキヤサリンは口から卵を飛ばし、

それを全てオノレッドに攻撃した。
オノレッド「ぐわっ!? こ、この…き、貴様らあ…!!!」

ヨッシー「今がチャンスだ! ねえ、亜子って言う名前だったよね、君!? 一瞬しか見なかったけど、

君はキックとか得意よね!？」

亜子「え? あ、うん…サッカー部のマネージャーやっとなから…」

ヨッシー「ならこうしよう! 僕は今から卵に変身するから、その間に君は奴に向けて、

僕を強く蹴り飛ばして!」

亜子「えっ!?! 蹴飛ばすって…しかも卵に変身って、それどう言う意味な…!?!」

ヨッシー「質問はいいから! これで奴に止めを刺そう! 出来るよね!?!」

亜子「……………うん、分かった! やってみる!?!」
彼女は頷きながらそう返事した。

オノレッド「ぐっ、くそおっ! どいつもこいつも舐めた真似を…
……………!?!」

ボロボロになっていたオノレッドが振り向くと、攻撃を整えるヨッシーと亜子の姿に気付いた。

ヨッシー「行くよ、『ゴロゴロたまご』!?!」

その時、彼は大きな緑の水玉模様の付いた白い卵に変身し、その場で急回転し始めた。

亜子「…覚悟しや、オノレッド!! これが友達を傷付けた罰やあ
!?!」

オノレッド「いいっ!? ちょ、ちよつと待っ…!?!」

亜子「行っけええええええええええ!?!」

彼がそう言った後、オノイエローとオノグリーンを連れて姿を消し、上空にいるオノフォースに帰艦した。するとオノフォースの前に扉ゲイトが開かれ、その中に入った後、扉ゲイトと供に姿を消した。

亜子「なっ!? また消えた!?!」

ヘイホー「しかも何、今の扉ゲイトみたいなのは!?!」

キャサリン「でもこれって……………」

ワツシー「逃げた…って事だよな?」

彼らは大空を見上げながら、不思議そうにそう思った。

まき絵「…そ…そっか……………これで…終わったんだね……………よ…よか……………った……………」

彼女は—安心しながらそう言った後、突然意識を失い、その場で倒れた。

亜子「!?! ま、まき絵!?!」

まき絵が倒れた事に気付いた亜子は、急いで彼女の方へ駆け出し、抱き上げた。

亜子「まき絵!?! まき絵!?! しっかりせや!?! まき絵!?!」

ヨツシー「そ、そうだ!?! あの子怪我をしてたんだ!?!」

キャサリン「早く手当てしないと…!?!」

ワツシー「おい、誰か薬草とか持ってないのか!?! ヤリホー、コ

マンドヘイホー、パンジーさん、

薬草とか何か治療出来るような物、持ってないか!?!」

ヤリホー「…そんな物、持ってねえだ。」

コマンドヘイホー「も、申し訳ありません。ただいま治療道具が

切れてて……………」

パンジーさん「ご、ごめんなさい! 私、持って来るの忘れまして

……………」

ワツシー「だああああ!?!?! こんな時に何で誰も…………!?!?」

亜子「まき絵、待つといてな!! 今直ぐその傷治すから!!」

彼女はそう言うと、急いで救急箱を開き、中から包帯を取り出した。そして彼女はその包帯をまき絵の体に巻き付け、

傷口を塞いだ。

ワツシー「お、おい、何やってんだお前!? それだけじゃ助かる訳が……………!」

しかし、彼がそう言っている間に、まき絵の体に巻かれた包帯は突然光り出し、彼女の傷を癒え始めた。

ヨツシー「!? な、何これ!?」

キャサリン「包帯が光り出したわ!?」

ヘイホー「こ、これ、どう言う事!?」

亜子(……………お願い…無事でいて……………!!)

彼女は心の中から必死にそう思いながら、手を組みながら祈っていた。

…そしてしばらく経つと、包帯から発した光が収まり、傷を完治させた。

まき絵「……………ん……………うん……………?」

そしてそれが終わった後、意識を失っていたまき絵は少しずつ目を開け、ゆっくり起き上がった。

亜子「まき絵!!!!」

ヨツシー「えっ!?」

ワツシー「お、起き上がった!?」

キャサリン「まさか、傷が治ったの!?」

三匹の恐竜達は驚きながらそう言った。

まき絵「…あ、あれ……………わ、私……………?」

亜子「まき絵え!!!!」

彼女は目から涙をこぼしながら、まき絵に抱き付いて来た。

亜子「まき絵! もう怪我は大丈夫!? 何も痛くない!?!」

まき絵「う、うん…大丈夫だけど……。」

亜子「よかったあ…まき絵が無事で……包帯巻いて傷口を治そうとした時、一時どうなってまうか心配してて……」

せやけどよかった…ホンマによかった…間に合って……。」

彼女は涙を拭きながらそう言い出し、その間にまき絵は自分の体に巻かれた包帯を見詰めていた。

まき絵「…そつか、これ亜子がやってくれたんだ……ありがとう、

亜子！ 私の傷を治してくれて！」

亜子「ううん！ お礼を言うんはウチャ！ 助けてくれてありがとう！」

二人は喜びながらも、お互い抱き合った。

その間に、多くのヨッシー達や島民達は喜びにはしゃぎ出した。

チューさん「やったツチュー！！ 僕達勝ったツチュー！！」

ポロドー「島を取り返せたぜえ！！」

パンジーさん「でもよかったあ…あの人が無事で……。」

カンテラくん「ケケケツ、まあ無事で何よりだねえ。」

ミットさん「これでみんな無事だな。」

バットさん「ああ、おかげさまでな。」

ムーチヨ「これで島の平和が戻ったあ…！！」

ヤリホー「みんな踊るだよあ…！！」

キューちゃん「キュキュウ…！！！！」

あほーどり「クワア…！！！！」

コマンドハイホー「これでミッション終了ですね！」

ハイホー「うん！ おかげでまき絵も助かったみたいだし！」

ヨッシー「ねえ、君ホントに大丈夫？」

まき絵「うん、大丈夫！ ありがとう、心配してくれて……。」

キャサリン「ホントによかったわねえ…一時どうなるかと思ったわ！」

彼女は目から涙を拭きながらそう言った。

ワッシー「けど驚きだな…包帯を巻いただけで傷が癒えるなんて…」

「…一体どうやって……………」

亜子「ああ、あの包帯、魔法の包帯なんよ。一般の傷薬や小道具と違って、

包帯を巻いただけで治癒してくれるんよ。特に残された傷

口も一瞬に消してくれる……………」

治癒効果抜群の救急道具さかい！」

ワッシー「何い！？ これ魔法なのか！？」

キャサリン「すごい！？ あたし、魔法の事は少ししか知らないけど、傷を一瞬に治す包帯なんて初めて見るわ！？」

まき絵「あつ！！ そう言えば、さっきの奴らは…！？」

彼女はオノレンジャーの事を思い出した瞬間、勢いで立ち上がった。ヨッシー「ちよ、ちよっと、ホントに大丈夫なの！？ 急に立ち上がるなんて…！」

まき絵「傷ならもう治ったから大丈夫だよ！ それより、さっきの可愛らしい敵達は…！？」

青ヨッシー「か、可愛いのかはよく分かんないけど……………」

赤ヨッシー「さっき船に戻って逃げちゃったよ。」

黄ヨッシー「覚えてないの？ 君が気を失う前に…。」

まき絵「あつ…そ、そっか…そう言えばそうだったね。」

パンジーさん「けど、さっきの敵さん達、またここに戻って来るのでしょうか…？」

ポロドー「んな訳ねえだろ？ ここはもう諦めると奴らが言ったんだしさ。」

ムーチヨ「でもさっきの奴ら、この島に隠されてる秘宝を探してるって言ってたけど、結局その秘宝って何なの？」

ハイホー「ねえ、誰か心当たりはないの？」

チューさん「僕達知らないツチュ！」

カンテラくん「ケケケツ、そんなのあったら僕達が貰ってたよ……。」

ミットさん「大体この島にある秘宝なんて聞いた事もないな。」

バットさん「誰かが流したデマなんじゃないのか？」

ヤリホー「やつぱり誰も知らねえべか？」

コマンドヘイホー「では奴らは一体何の事を言っていたんだろうか……？」

全員が悩みながらお互いに話し合つと、ヨッシーはそんな彼らを眺めながら何かを思っていた。

ワッシー「……ん？ どうしたんだ、ヨッシー？」

ヨッシー「……さっきの奴ら、その秘宝とか言つ物を探しにこの島にやって来たんだよね？」

ワッシー「ああ、そうだが？」

ヨッシー「……僕、心当たりがあると思う……。」

全員「えっ!？」

ヨッシーが思わぬ一言を言い出すと、彼以外の全員は彼に振り向きながら耳を疑った。

ワッシー「こ、心当たりがあるって、どう言つ意味だよ、それ!？」

ヨッシー「いや、よく分かんないけど……ただ、もしかしたらこんな事が起きたのは僕のせいだと思うから……。」

ワッシー「んなの見てみないと分からないだろうが!？ 一体何なんだよ、

お前の知ってるその秘宝って言つ奴は!？」

キャサリン「もしかして、今も持ってるの!？」

ヨッシー「う、うん……家に……。」

彼は不安そうに頷きながらそう答えた。

……しばらく経つと、ヨツシー達はある建物の前に集まっていた。
しかし、それは建物とは言え、

一室が四つの木に囲まれていて、その木から生えていた赤くて丸い木の実付き葉っぱを屋根代わりにしていた。

更に部屋の中には家具と暖房があり、外には『ヨッシー』と白文字に書かれた赤い郵便箱があった。

そう、ここは『ヨツシーの家』で、緑ヨツシーが住み着いている家である。全員家の前に辿り着いた後、

ヨツシーは早速家の中に入り、箆笥の中を調べ始めた。ちなみにこの間の亜子とまき絵は、元の制服姿に戻っていた。

ヨツシー「これなんだけど……。」

彼はそう言いながら、箆笥の中からある物を取り出した。それは緑色に輝く星の形をした宝石であり、

それを目の当たりにした全員は愕然としていた。

ワツシー「な、何だそれは!？」

キャサリン「うわあ、綺麗な宝石ねえ……!」

亜子「ホンマや……!しかもあんなに輝く石、初めて見るわ!」

まき絵「ねえ、それどこで見付けたの!？」

ヨツシー「ここ二週間前から……僕がいつも朝の散歩をしてた時、草むらから緑色に輝くこの石を見付けたんだ。

しかもいつもそこを通る場所だったんだけど、最初はそこにこんな石はなかったんだ。

何の石なのかは僕にはさっぱり分かんなくて……余りにも綺麗だったから、家に置いとく事にしたんだ。」

ワツシー「何でそんな事を俺達に知らせなかったんだ?」

キャサリン「そうよ、あたしだったら是非プレゼントとして貰って

たのに……。」

ワツシー「誰がお前にあげるかよ。」

彼はそう言いながらキャサリンに突っ込んだ。

ヨツシー「し、仕方ないよ！ だって、これ何なのかさっぱり分かんないし、飯に見せても、

ワツシーが勝手に持つてつちやうし……。」

ワツシー「おい待て、それって俺を信用してないって事か？」

キャサリン「ああ〜らあ、それは正しいわねえ〜？ だってワツシー、

いい年してガキ大将やつてる不良だもんねえ〜。」

ワツシー「何だこのホモンスター！？」

キャサリン「誰がホモですつてえ！？」

ヘイホー「ま、まあまあ、二人共落ち着いて……！！！」

ワツシーとキャサリンがケンカをし始めると、ヘイホーはその間に割り込み、抑えようとした。

ヨツシー「それに……もしさっきの奴らが探してる秘宝つてこれの事だつたら、

何もせずに取つといた僕のせいだから……そうと分かつていれば、直ぐに捨てられたのに……。」

亜子「な、何言つてんの？ 奴らが襲つて来たんはあんたのせいやないで？」

まき絵「そうだよ！ だって、それ何なのか知らないんでしょ？

だとしたら尚更だよ！ それに、

もしかしたら奴らが探してたお宝はそれじゃないかもしれ
ないし、

或いはそれはただ単に輝くただの石ころかもしれないじゃ
ん？ もしかしたら偶々で……。」

ヨツシー「ううん、僕はそう思わないよ！ こんなただの石ころ
には見えないし、

それにこんなに輝いているって事は、何か不思議な力が宿ってるかもしれないよ!？」

コマンドハイホー「確かに常に光っているのも怪しいですね?」

ポロドー「だとしたら相当な価値じゃねえのか?」

ムーチョ「えっ、売るの!？」

ヨッシー「もしこれが奴らが探していた物だとしたら……」。

彼がそう呟くと、しばらく静まり返り、何かを決心したかのように見上げた。

ヨッシー「僕、しばらくの間この島から出るよ。」

全員「えっ!？」

ヨッシーがそう言い出すと、彼以外の全員は耳を疑った。

ワッシー「し、島を出るって、何でいきなり!？」

ヨッシー「僕、確実に思うんだ。奴らが狙ってるお宝はきっとこれだって。

だから僕がこれを持っている以上、奴らは必ずこの島に戻って来るかもしれない。

そうならないように、僕はこれを持って島を出るよ!」

ミットさん「おいおい、だからと言って誰も追放するとは言っていないだろ?」

パンジーさん「そうですよ!　そこまで責任を持たなくても……!」

ハイホー「でも、島を出るって言うても、行き先は分かるの?」

ヨッシー「うん、キノコ王国の方へ行こうと思うんだ。そこにマリオ達がいるし、もしかしたらマリオ達なら、

この石は何なのか分かるかもしれない。それと、今回の事件の事も、マリオ達にも知らせたいしね。」

ワッシー「マリオ……そうか、そう言えばキノコ王国にはマリオがいたな。

多分そいつなら何とかしれくれるかもしれないな。」

亜子「あの、キノコ王国とかマリオって……?」

赤ヨッシー「ああ、キノコ王国は、キノコワールド大陸の本国の事だよ。そしてマリオは、

キノコ王国とキノコワールド大陸の英雄^{ヒーロー}で、ヨッシーの友達なんだ!」

キャサリン「それならあたしもヨッシーちゃんと一緒に行くわ!

ちよつどピーチちゃんやデイジーちゃんと久しぶりに会いたいしね!」

ヨッシー「いや、別に僕は遊びにキノコ王国へ行くんじゃないんだけど……。」

しかし二匹が話し合っている間に、ヤリホーが割り込んで来た。

ヤリホー「へえ、おめえ達都会のキノコ王国に行くのかあ? けど、その前にどうやって行くんだべ?」

彼がそう問い掛けると、周りは一瞬に静まり返った。

ヨッシー「……そう言えば、考えてなかった。」

ワッシー「おいおい、普通それを考えるのが先だろ? この島には船もないし、

直通の『ワープ土管』だってないんだぞ?」

ハイホー「筏を作るだけでも時間が掛かるどころか、そのための道具だってないんだし……。」

ヨッシー「そ、そう言えばそうだったね……。」

亜子「えっ!? この島には船とかないの!?!」

青ヨッシー「うん……向こうから用がないと来ないからね……。」

まき絵「ど、どうしよう……それって私達、ずーっとこの島に留まるって言う事なのかな?」

亜子「ど、どないしよう……。」

二人は不安に思いながらそう言うが……。

「み、みんなあゝゝゝ!!!」

その時、一匹のチューさんがヨツシー達の所まで急ぎながら駆け付けて来た。

ワツシー「ん？ どうしたんだ、チューさん？」

チューさん「ふ、船が…船がこの島に向かって来てるツチュー!!」

ヨツシー「えっ!? 船!？」

バットさん「おい、それってまさか、さっきの奴らか!？」

チューさん「違っツチュー! この船はちゃんと海に浮かんでるツチュー!」

ボロドー「じゃあ、普通の敵襲か!？」

チューさん「それも違っツチュー! 何か王冠みたいなマークの付いた船だっつツチュー!」

ヨツシー「王冠みたいなマーク? ……それって、キノコ王国の物じゃ…!？」

……島の浜辺にて

砂浜の上に、一隻の船が停まっていた。その船には先ほどチューさんが言ったように、

王冠のマークが描かれた丸いプレートが付いていた。そしてそこから降りて来たのは、

白い水玉模様の赤いキノコ帽子を被り、グラスとライフジャケットを身に付いたキノピオ達だった。

彼らは無線やロープなどのサバイバル道具を整えながら、一箇所に集結していた。

隊員「隊長、準備が整えました！」

彼は隊長と思われる一人のキノピオに敬礼しながらそう言った。

隊長「よしっ！ では出発するぞ！ まずはヨッシー達の集落を指す！ そこで情報入手するぞ！」

その時、突然森の奥から地鳴りが流れ出し始めた。

隊長「！？ な、何だこの音は…！？」

隊員「も、森の方から…！？」

キノピオ達は全員森の方へ恐る恐ると振り向くと、森の中からヨッシーや他の島民達が駆け付けて来た。

もちろんまき絵はヨッシー、亜子はワッシーに乗りながら、島民達の中に紛れ込んでいた。

隊員達「どわあああああああ！？」

ボロドー「こら、この野郎…！！ 何者だあ、ああ！？」

ヤリホー「敵襲だったら出てってもらうだよ！？」

バットさん「断るつもりなら一人残らず叩き潰すぞお…！！」

隊長「わわ、ちょ、ちょっと待つ…！！」

ボロドー達がキノピオ達に攻め込もうとすると、彼らの間にヨッシーとまき絵、

そしてワッシーと亜子が駆け付けた。

ヨッシー「ちょっと待ってよみんな！ この人達は悪い奴じゃないよ！？」

ワッシー「相手はキノピオだ！ 見りゃ分かるだろうが！？」

亜子「え、何この子ら？ 小人…？」

まき絵「あ、これもまた可愛いのが……………」。

ヨッシー達は攻め込む島民達を抑えようとするが、

その間に亜子とまき絵は不思議そうにキノピオ達を眺めていた。

しかし、その間にキノピオ達は、

二人の少女を見てある事に気付き始めた。

隊長「！？ ま、待てよ！？ 君達は…！？」

亜子・まき絵「？」

隊長「おい、例の奴を…！」

隊員「あ、はい…！」

隊長がそう指示すると、彼の後ろにいた隊員はカバンからある資料を取り出し、それを隊長に渡した。

隊長「……………うむ…赤い上着にスカート……………更に胸元に紋章……………
…うむ、間違いない…！」

この子達だ…！」

亜子「え、な、何がですか？」

隊長「君達、もしかして…のどか殿と夕映殿のお友達でしょうか？」

まき絵「えっ！？ の、のどか殿と夕映殿って…本屋ちゃんとゆえちゃんの事…！」

亜子「な、何であんた達が二人の名前を…！？」

隊長「ハッ！！ 申し遅れました！！ 我々はピーチ姫のご使命により、

キノコ王国から派遣された搜索隊でございます…！」

彼は他の隊員達と共に敬礼しながらそう言った。

ヨッシー「搜索隊？ 何の？」

隊長「ハッ！ 実は我がキノコ王国には、そこにいるお二方と同じ容姿をした少女達を預かっているのです。

ピーチ姫側には先ほど仰ったように宮崎のどか殿と綾瀬夕映殿、

そしてマリオブラザーズ側には桜咲刹那殿と近衛木乃香殿がいます。」

まき絵「えっ！？ 刹那さんとこのかも…！」

隊長「ハッ！ それで、彼女らのお友達を探すよう、ピーチ姫からご命令されて、

キノコワールド大陸中あちこち回って行ったのですが、なかなか見付からなくて……………

そこでキノコ王国から離れた場所であるヨッシーアイランドに立ち寄り、

検索を行おうと思ったのですが……………。」
コマンドハイホー「運良く見付かったって事ですね。」

亜子「あ、あの、その四人…桜咲さんにこのか、そしてのかと綾瀬さんが、

そのキノコ王国つちゆう所におるってホンマですか!?!」

隊長「はい、仰る通り……………」

まき絵「じゃあ、そこに行けば会えるんだよね!?!」

隊長「もちろん! 我々と同行すれば、直接お会い出来ますよ!」

亜子「ホンマに!?! よかったなあ、まき絵! やっぱりこの世界に来たんはウチらだけやなかったんだなあ!」

まき絵「うん! これでみんなに会えるよお!!!」

二人はお互いの手を組み合いながら喜びにはしゃぎ始めた。

無線「……………ええ〜っ、こちらブラボーチーム! こちらブラボーチーム! アルファチームに告ぎます!」

至急応答せよ! 至急応答せよ!」

その時、隊長が所持していた無線から声流れ出し、それに気付いた彼はそれを取り出し、話し始めた。

隊長「はい、こちらアルファチーム! ちょうどいい時に連絡してくれました! たった今、

キノコ王国に滞在中の四人の友達と思われる人物を二人確保しました!」

無線「ホントですか!?! 実はこっちもちょうど二人を確保したところなんですよ!」

まき絵「えっ!?! そっちもち?!」

亜子「ホ、ホンマに!？」

隊長「本当ですか!? それは奇遇……! ならば一刻も早く彼女達をキノコ王国に送らなければ……!

こちらも至急、キノコ王国に二人の少女と共に帰還するつもりです! そちらも二人を乗せて、

帰還してください!」

無線「あの……そこが問題なのですが………実はこの二人には保護者がいまして、

どうやら我々の事を信用していないみたいなんです。敵と勘違いしてるようなんで、

出来ればサポートが必要なのですが………。」

隊長「そうですか………分かりました! では、その無線を保護者の方々に聞こえるよう、

代わってください!」

無線「分かりました!」

隊長「ええ〜っと………皆様、私達はキノコ王国から派遣された捜索隊です! 我々はピーチ姫のご使命により、

ある少女達を捜索しています! 捜索しているのは、現在キノコ王国にご滞在中の桜咲刹那、近衛木乃香、

綾瀬夕映、そして宮崎のどかのご友人方々であります! 合い難く写真は持っておりませんが、

外観特徴としては赤い服にスカート、そして胸元には学園の物と思われる紋章が付いている事だけです!

そちらには二名の方々がいると言う情報が聞きましたが、よろしければそのお二方を我が捜索隊の船に乗船させてくだ

さい! ただし、拒否する場合は、

予め保護者の方々も乗船しても構いません。何卒、ご協力をお願い致します!」

まき絵「向こうにも他のみんなもいたんだ!」

亜子「せやけど、誰の事なんやろ…?」

無線「ええ、こちらブラボーチーム！ 乗船を許可してくれました！
ただし、

予め保護者の方々も同行する事になりましたんで、彼らもキノコ王国へ帰還する事にします！」

隊長「了解！ では我々も至急帰還する事にします！」
彼がそう言った後、無線を切った。

隊長「では、早速行くとしましょう。 貴女方のお友達もお待ちしていますし…。」
ヨツシー「あつ、ねえ。 僕とキャサリンも一緒に行ってもいいかな？ 僕達、

マリオ達と会いに行きたいんだけど…………。」

隊長「ええ、それなら構いませんよ？」

キャサリン「あらそう？ そんじゃあ、よろしく頼むわね！」

隊長「それでは皆さん、我々は出発の準備をしますので、そちらも準備してください！」

亜子「はい、分かりました！」

彼女が頷いた後、隊員達は整えたはずの荷物を全て船に戻し、出発の準備を整え始めた。

亜子「あ、そや！」

何かを思い付いた彼女とまき絵は、後ろにいたワツシーや他の島民達に振り向いた。

亜子「ワツシー、ヘイホー、そして島のみんな、色々ありがとう！

おかげでウチらは他の友達みんなと会いに行けるようになりました！

ホンマにありがとうございました！」

まき絵「うん、本当にありがとうございました！」

二人はワツシー達の前にお辞儀しながら、感謝を持ってそう言った。

ワツシー「お、おいおい、別にお辞儀なんていいだろ！ お礼を言うのは俺達の方だよ！」

ヘイホー「そうだよ！ 君達のおかげで、僕達の島を取り戻す事が出来たんだよ！」

黄ヨツシー「もし君達があの時僕達に説教しなかったら、僕達はここにはいなかったよ！」

青ヨツシー「そうだよ！ あの時何も言わなかったら、僕達ずっと逃げてたよ！」

赤ヨツシー「そんな僕達を動かしてくれたのは、君達のおかげだよ！ 本当にありがとう！」

緑ヘイホー「君達は僕達の恩人だよ！」

黄ヘイホー「その同時友達だよお！」

ポロドー「おお、あんたらのおかげで俺達全員助かったんだからな！」

ヤリホー「この恩は何百年経っても忘れねえだ！」

ムーチョ「僕達を助けてくれてありがとう！」

パンジーさん「私達も感謝しています！ 本当にありがとうございます！」

チューさん「ありがとうツチュ！」

カンテラくん「ケケツ、こっちも一応感謝してるよ！」

ミットさん「あんたらのおかげで助かったぜ！」

バットさん「色々サンキューな！」

あほーどり「クワア~~~~~！」

キューちゃん「キュー~~~~~！」

亜子・まき絵「みんな……………」

二人は島民達の感謝の声を浴びながら、感激していた。

青ヨツシー「けど、ホントに短い間だったけどね。」

赤ヨツシー「しばらく会えないと寂しくなるけど……………」

黄ヨツシー「もし機会があったら、またこの島に遊びに来てよ！」

へいほー「そうだよ！ 僕達もいつでも待ってるからさ！」

緑へいほー「また遊びに来てよ！」

黄へいほー「そうだよ！ また来てね！」

まき絵「うん！ そうするよ！」

ワツシー「後、ヨツシーとキャサリンの事もよろしく頼むな。」

亜子「うん、任しといて！」

隊長「そろそろ出航しますよ〜！！！」

彼の声に気付いた二人の少女は、船の方へ振り向いた。するとヨ

ツシーとキャサリン、

そして他の隊員達は既に乗船していた。

亜子「あ、そろそろ行かへんと！ ほな、みんな！ さよならあ！

色々ありがとう！！！」

まき絵「また遊びに来るからねえ〜！！！」

ワツシー「気を付けて行けよあ〜！！！」

へいほー「元気でねえ〜！！！」

二人の少女と島民達がお互いに手を振った後、亜子とまき絵は急いで船に乗り込み、別れの言葉を残した。

そして船は出航し、亜子とまき絵は引き続き島民達に手を振りながら、ヨツシーアイランドを後にした。

まき絵「……………遠く離れちゃったね……………」

亜子「そやな……………けど、みんなエエ人（？）達やったわ！」

まき絵「また遊びに行きたいね！」

亜子「うん！」

彼女は笑顔で頷きながらそう答えた。

亜子「ところで、ヨツシー、キャサリン、そのキノコ王国までどれくらい掛かるん？」

ヨツシー「うう〜ん…そんなに掛からないと思うよ？」

キャサリン「そうね……………しばらくの間は退屈になるでしょうけど、その内着くと思っわ。」

まき絵「そうなんだ……………まっ、とりあえず！ 改めて、これからもよろしくね、ヨッシー、

キャサリン！」

ヨッシー「うん！ こちらこそよろしく！」

キャサリン「よろしくね！」

その後、まき絵と亜子、ヨッシーとキャサリンは、船の先頭まで駆け出し、海の手先を眺め始めた。

まき絵「このまま先に行けば、みんなと会えるんだね…！」

亜子「みんな無事だとエエなあ……………」。

まき絵「よおし…！ キノコ王国を目指して、レッツゴー——

——！！！」

彼女は張り切りながら大声でそう言い出し、そして船はそのままキノコ王国を目指して、

大海原を渡って行った……………。

第21話 吸血鬼と魔女見習い

……………キノコワールド大陸・ヨツシーアイランドで亜子とまき絵が
遭難していた同時刻……………。

辺りは暗闇に包まれていた……………。自分に意識はある物の、身動
きが取れない。

ここはどこなのか、自分は何をしているのか、少女はただそう思っ
ていた。

(……………どこだ……………ここは……………？……………何も見えない……………フフ
ッ……………いくら私が闇を好むと言っても……………)

これはさすがに暗過ぎるな……………。)

彼女は静かに笑いを飛ばしながら、心の中でそう言った。

『……………ん……………？ 今……………笑った……………？』

その時、どこから声が聞こえた。

(……………？……………？……………この声は……………誰だ……………？)

そう思った彼女は、少しずつ目を開けてみた。開眼するまで視界
は少々ぼけていたが、

しばらく経つとその視界は滑らかになった。そして気が付けば、

少女の前にもう一人の少女がいた。

その少女は短い茶髪と言ったボーイッシュな髪型をしていた。そ
う、彼女の正体はネギの生徒、

またはパートナーであり、運動部五人娘の一人でもある陸上部門、
春日美空であった。

美空「あっ！ やつと起きたみたいだね！」

彼女がその少女に声を掛けると、少女は完全に目を覚ました。少女はネギと同じくらいの背丈をしていて、その同時にとても長い金髪を持っていた。そう、彼女の正体はネギの生徒、またはパートナーであり、
その同時に彼の魔法の師匠でもある、通称『ダーク・エヴァンジェル闇の福音』、
エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルであった。

美空「いやあ、エヴァちゃんやっとききたよお！ 私何度もエヴァちゃんを呼び起こしてみたんだけど、

全然起きないから一応心配してたよお！ でも無事みたいでよかったあ！」

彼女は笑顔でそう言うが、逆にエヴァは露骨になりながらそんな彼女を睨んでいた。

エヴァ「……………誰だ貴様？」

彼女が低い声でそう言うと、美空はそれに応じてこけた。

美空「ちよつと、そりやないでしょ！？ 私三年間もあんたと同じクラスにいたって言うのに、

『誰だ貴様』はないでしょ！？」

エヴァ「私はそこまで貴様の存在に気にするほど情を持つとらんわ。」

美空「かあゝ…ホントに冷たいねえ、あんたって……………こりゃネギ君の苦勞も分かるなあゝ。」

こんな困ったさんの弟子になってちゃ、ストレス溜まるのも当たり前前って事ねえ。」

エヴァ「何だと貴様あ！？」

彼女は美空に反発しながら勢いで立ち上がった。

美空「まっ、それはそうと。私の名前は春日美空だよ！ ちゃん

と覚えてもらわないと、困るんだけどね！」

エヴァ「フンツ、そんな物0.01秒で直ぐに忘れるわ。」

美空「はあ……こりゃホントに困るわねえ……。」

彼女は腕を組みながらため息を吐いた。

エヴァ「そんな事より、ここは一体どこなんだ!？」

彼女の言うように、エヴァと美空はとても暗い部屋にいた。その部屋には辺りを照らす電球すらなく、

埃に被っていた。だが彼女達の周囲には、白いシートに被された家具や、

中に何が入っているのか分からない木箱、紐に巻かれた古い本などが置かれていた。

どうやら彼女達は屋根裏にいるみたいだが、偉そうに質問するエヴァに対し、

美空は頭の後ろに両手を組みながら、捻くれてるかのようにこう答えた。

美空「知らないよ、そんな事……。気が付いたら私達こんな所にいたんだよ！」

エヴァ「どう言う意味だ!? 何で貴様はそんな事も知らないんだ!?!？」

美空「あのねえ……大体からと言って、私は教会の方に行っただけだからね！」

ネギ君が教室から飛び出した後、休み時間が来たから、

私はシスターとして教会でちょっと仕事しに行ったんだよ!

でも気が付いたら、

変な所から変な電気が出て来たり、地震が起きたり、景色が歪んだり、

急におかしな事が起こって……。」

エヴァ「……それ、確か私の所にもあったな……? 確かあの時、

坊やが最終的に戻って来なかったから、

私は茶々丸と一緒に屋上で昼寝してたんだ……。けどその時、確かに感じた……………

空間からの歪みが……………。その時も貴様が言っていた奴と同じ現象が起こり、

気が付いた時には……………。

美空「私達がここにいたって事だね。」

エヴァ「しかし…今思えば、あの現象は一体何だったんだ…!？
確かにあの歪みから禍々しい物を感じたが、

魔法でもなかった……………。

美空「もしかして、私達また幻想世界に来てしまったんじゃない？」

エヴァ「それは有り得んな。いくらここが幻想世界だとしても、こんな所は見た事もない。

さすがに、私の家の物とは思えんな。」

美空「じゃあ、一体ここは……………ん？」

彼女が辺りを見回すと、床に梯子付きの扉を発見した。しかもその扉から微かな明かりが見えていて、
彼女はそこを調べてみた。

美空「ああ、これ梯子なんだ！もしかしたらこれ、下に行けるかも…？」

エヴァ「そんなのがあったんならなぜ気付かなかったんだあ!？」

美空「いやあ、何か色々面倒臭かったからねえ〜。」

彼女が気楽そうにそう答えると、エヴァは呆れるかのようにため息を吹いた。

エヴァ「……………まあ、とりあえず出口を見付けたんだし、とつととこっから出るぞ。」

そつと分かれば早く開ける。」

美空「分かってるよ!」

彼女がそう言った後、早速床の扉を開き、その同時に梯子を下ろした。

………屋根裏から下りた二人は、明かりの付いた廊下に辿り着いた。その廊下はどこか古めかしかったが、明かりが付いている上に綺麗でありながら、まだ使われている事が分かる。二人はその廊下に着いた後、辺りを見回し始めた。

美空「ここは………？」

エヴァ「………どうやら誰かの屋敷みたいだな。しかも見た事もない

………

どう見てもこれはさすがに麻帆良の物ではなさそうだな。」

美空「………って事は、ここはやっぱり幻想世界じゃないって事？」

エヴァ「………みたいだな………。」

二人がそう話し合った後、二人は大広間に辿り着いた。

天井には多少蜘蛛の巣が被ったシャンデリアが飾られていたが、その部屋全体は明かりがあるにもかかわらず、とても薄暗かった。正面には玄関と思われる大きな扉があり、恐らくここはメインエントランスだと思われる。

ちなみに二人はこの大広間の二階に立っていた。

美空「うわぁ………広い所だねえ………！ 正に豪邸ってな感じだねえ………！」

エヴァ「………とは言ってもそんなに綺麗には見えんな。まだ使われて

いるのは確かだが、

古惚けていて不景気だ。」

美空「けどそれにしちゃあ、すごい屋敷だよねえ……………一体誰が住んでるんだろう?」

エヴァ「そんな事はどうでもいい。だがどうやらここはエントランスのようだ。

だとしたら、あそここの扉は外へ通じているらしいな。」

二人はそう話し合いながら階段を下り、エヴァは真っ直ぐ玄関の方へ向かおうとするが、

その間に美空は何かに気付いた。

美空「エヴァちゃん、エヴァちゃん! あそこ!」

エヴァ「ん?」

彼女は振り向くと、美空は少しだけ開かれた扉の方へ指していた。

その扉の先から明かりが見えていて、

その同時に人の声と思われる音が聞こえて来た。

美空「あそこに誰かいるみたいだ! もしかして、ここの人かもしれない……………」

ちよつと聞き込みに行こう!」

エヴァ「おい、コラッ、何勝手な……………!?!」

彼女は扉の向こうを覗き込みに行こうとする美空を止めに行くが、やはり気になっていたのか、

彼女も美空と共に扉の先を覗き込んだ。

すると扉の先には大きな部屋があり、その中央には熱で沸騰している大きな鍋があった。

更にその周りには二人の人物がいて、一人は赤いドレスに黒いストッキング、

そして黒くて長いツインテールをした少女と、もう一人は二本の角を生えた赤い小悪魔であった。

少女は何らかの本を読んでいる小悪魔の指示に従いながら、棒で鍋の中にある奇妙な液体を混ぜていた。

小悪魔「ええ〜っと……………次はネズミの尻尾に蝙蝠の牙……………それとカエルの肝にマンガースの生き血や。」

後はよく混ぜ込めば完成や。」

少女「分かった……………」

彼女が頷いた後、小悪魔が言った材料を鍋の中に入れ、棒でかき混ぜた。

ドオオオオオオオオオオオン！！！！

しかし、鍋の中から突然爆発が起き、爆風に巻き込まれた二人は、頭をアフロ状態にした同時に真っ黒になった。もちろんその瞬間を見た美空とエヴァは、声を出さなかったが、思わず驚いていた。

小悪魔「何や、失敗したあ！？ おかしいなあ…ちゃんこの本の通りにやっただつちゆうのに……………あ？」

彼が本を再確認してみたその時、読んで何かに気付いたのか、その少女の方へ振り向いた。

小悪魔「……………なあ…牛の舌、ちゃんと入れたよな？」

少女「……………牛タンの事…？」

小悪魔「まあ…そゆこつちや。」

少女「入れたよ……………？」

小悪魔「さよか……………ほなら何であんな……………？」

少女「……………『UMA棒』のだけど……………」

彼女がそう言うと、その小悪魔はこけ落ちた。

小悪魔「それは味やないかあ！？ その物違うやろあ！？」

彼は少女にツツコミを入れながらそう言った。

少女「でも……………探したけどない……………あつたとしても高い……………。

「
小悪魔「つちゆうか、それを承知の上でこれやっとするやないか……………。」

彼はそう言った後、爆発によって空になった鍋の方へ振り向き、ため息を吹いた。

小悪魔「はあ……………結局失敗してもうたかあ……………しゃあない。

また材料集めに行くかあ。」

少女「でも……………材料買うためのお金ない……………。」

小悪魔「それやったらバイトして稼いだらどうなんや?」

少女「メンドイ……………。」

小悪魔「おい。」

そんな二人の漫才を覗き込んでいた美空とエヴァは、多少引き気味になっていた。

美空「な、何今の!? って言うか、何あの二人……………!?!」

エヴァ「あの小さい奴は……………もしかや使い魔か? だとしたら、あの小娘は魔女か何かか……………?」

美空「えっ!? あの子、魔女なの!?!」

エヴァ「分からん。だが微妙にあの小娘から魔力が感じる……………とは言っても、そんなに強くはないがな。」

美空「じゃあ、あの二人がやっていたあれって、魔女がよくやるあのパターン……………?」

そんな二人は小声でそう話し合うが、その間に魔女と思われる少女とその使い魔は、

後ろ目で二人の気配に気付いた。そして二人がお互いに頷くと、小悪魔は赤い水晶玉が着いた杖に変身し、

少女の手元まで飛んで行った。

美空「!? 何!? 今あの小悪魔、変身した!？」

エヴァ「!!! ヤバイ!!! 離れ……………!!!」

チユドオオオオオオオオオン!!!

少女は杖から火球を放ち、扉を爆発させるが、それを先に気付いたエヴァは急いで美空の腕を掴み、その場から離れさせた。おかげで爆発に巻き込まれずに助かったが、

その瞬間を目の当たりにした二人は愕然としていた。

美空「な、何今のは!？」

エヴァ「あの火球……………やはり魔法か!？」

二人が驚いている間に、少女は爆発によって砕けた扉から飛び出し、身動きも出来ない二人の前に立ち止まった。

そして杖に変身した小悪魔も元の姿に戻り、二人の少女に対立した。

小悪魔「おい、お前ら!!! 人ん家に勝手に上がり込みよって、一体何者や!？」

こそ泥やつたら許して帰らす訳には行かんでえ!!!」

エヴァ「な、何だ…!？」

彼女は反発しようとするが、そんな彼女の前に美空が慌てながら割り込んで来た。

美空「わわわっ、ちょ、ちょっと待ってください!!! わ、わ、私達、決して怪しい者じゃありません!!!

私達はこう…見ての通りただの女学生で…こそ泥じゃありません!!!」

小悪魔「ほならどっから入って来たんや!？ さすがに玄関からやないやろっし、もちろん窓からでもあらへんで!」

なぜならどっちも鍵掛けたんやからな！」

美空「そりゃ、えつと、屋根裏から……………つて、あつ…！」

小悪魔「屋根裏だあ〜！？ やっぱりこそ泥やないか！！ 屋根裏に忍び込むとは、

正にこそ泥らしゅう事やないか！！」

美空「いやいやいやいや、ち、違います！！ 私達、侵入したんじやなくて、元からそこにいたんです！！

り、理由は分かりません！！ 気が付いた時にはそこにいて…！！ け、け、

決して悪さをするためにここに来たんじやないんです！！

ホ、ホントの事ですう！！

ゆ、許してください！！ お願いします！！」

彼女は必死になりながら、少女と小悪魔の前に土下座をした。しかしその間に、

少女はそんな美空を静かに見詰め、こう言い出した。

少女「……………いいよ。許してあげる。」

小悪魔・エヴァ「えっ！？」

彼女がそう言うと、小悪魔とエヴァは耳を疑った。

美空「ホ、ホントですか！？ あ、ありがとうございますう！！」

彼女は感謝を言いながら、再び土下座をした。

小悪魔「おい、いきなり何やねん！？ そう簡単に許してもエエん

かいな！？ こいつらはもしかして……………！」

少女「こそ泥じゃない……………ホントの事…言ってる……………」

小悪魔「そんなの分かる訳が……………！」

少女「それに……………」

彼女がそう言い出すと、彼女は人差し指で美空の方を指した。

少女「……………少しだけ……………」

美空「え？」

その次に少女はエヴァの方を指した。

少女「……………とても大きい……………」

エヴァ「は？」

少女「……………魔力…感じる……………」

美空・エヴァ「えっ…!？」

少女がその一言を言い出すと、美空とエヴァ、特にその小悪魔は耳を疑った。

小悪魔「魔力やお!？　ちゅう事は、こいつら、魔女か何かか…？」

美空「えっ…い、いや……………私は場合は…そう……………でもないんだけど……………」

あつちのエヴァちゃんは魔法使いなんだよね。　しかもごっ

ついのを持つてるから……………」

エヴァ「誰がごっついだ。」

小悪魔「ホンマかあ!？　せやけどどう見ても魔法使いには見えへんけど……………」

あんたら、ホンマに一体何者なんや？」

美空「え、えつと…それはねえ……………」

……………ダイニングルームにて

美空とエヴァ、そして少女と小悪魔は、ダイニングルームでお互いに向き合いながら椅子に座り、

紅茶を飲みながら話し合っていた。　その話は、美空がエヴァと供にこの世界に来る前までの出来事であった。

小悪魔「へえ〜……………あんたらそのマホラっちゅうトコから来たんや？」

美空「うん、そう言う事。」

小悪魔「せやけど、聞いた事ないな、そのマホラっちゅうトコ。聞いた事ないよなあ？」

彼が隣にいる少女に聞いてみると、彼女は返事として頭を振った。
エヴァ「やはり、ここは明らかに別世界らしいな……………もしこの世界が幻想世界であれば、

私達は鏡面世界である、廃墟と化した麻帆良学園にいるはず。だがそうでないとすれば、

私達は幻想世界とは関係ない異世界に訪れたと言う事だな。

「

美空「そう言う事かな…？」

小悪魔「しかし、あんたらの話によると、あんたらのトコで何か変な現象に巻き込まれて、

ここに来たんやつてな？」

美空「そうだけど、何か心当たりないかな？」

彼女がそう問い掛けると、小悪魔は少女の方へ振り向くが、彼女は再び頭を振った。

小悪魔「残念やけど、俺達もその現象が何なんか、よう分からへんのや。何せ、

見た事も経験した事もあらへんから……………。」

エヴァ「確かに、あの現象は自然的に出来た物ではなかったな。特に、魔力を感じなかったため、

魔法の一種でもなかった。」

美空「自然現象でもなければ魔法でもない……………何かホントによく分かんないんだけど……………。」

小悪魔「それやったら、『Dr・クライゴア』^{ドクター}に聞いてみたらどうなんや?」

美空「え? ドクター……何?」

小悪魔「この街の天才科学者や! 彼に聞けば、何か分かるかもしれへんで?」

エヴァ「街? ここは街なのか?」

小悪魔「まあ、この『ホラーマンション』^{ホラーマンション}におるからには分かり難いやろうけど、

ここは『ダイヤモンドシティ』^{ダイヤモンドシティ}つちゆう街なんや。で、

そのDr・クライゴアはこの街の沖にある島の研究所におるさかい。

そこに行けば、きっとドクターと会えるで?」

美空「どうするエヴァちゃん? 行ってみる?」

エヴァ「何で私に聞くんだ? ……とは言っても、確かにその科学者とやらに聞けば、

何か分かるかもしれんな。いいだろう、聞きに行くとするか。」

小悪魔「ほな、俺達が案内してやるか? あんたらこの街の事知らへんやろうし、

道に迷ったら溜まったもんやないからな! 俺達があんた

らをその研究所に連れてってやるわ!」

美空「えつ、いいの!? ホントにそんな事してまで!?!」

小悪魔「当たり前や! 困ってる時はお互い様や! それにまあ、何ちゆうか、

さっきのお詫びみたいな物やからな!」

美空「ああ…ありがとう! えつとお……………」

小悪魔「あ、そやった。まだ自己紹介とかせえへんかったな。

俺は『レッド』!

そしてこっちは俺の相棒の『アシユリー』や!」

アシユリー「…アシユリーだよ……………」。

美空「私春日美空！で、こっちはエヴァンジェリンって言うんだ！エヴァちゃんって呼んでもいいよ」

エヴァ「勝手に呼ぶな！」

レッド「美空にエヴァやな？ほな、改めて…これからもよろしゅうな！」

美空「うん、こちらこそよろしく！」

彼女はレッドの小さな手を握りながら握手した。

……………ここはダイヤモンドシティ……………キノコワールド大陸にあるキノコシティ並みの大都市。

だがキノコシティとの相違点は、在住している人種はキノピオではなく、多くても人間と獣人と言う、

モビウス大陸のステーションスクエアとほぼ近い物となっている。

更にこの街はゲームの流行に人気があり、

それに興味を持った他の街や国から来た者もよく訪れるらしい。

その流行を生み出しているゲーム会社はもちろん、アメフトスタジアムやディスコ、更に日本風の城など、

様々な施設が存在する。アシユリーの家と思われるホラーマンションと言うお化け屋敷から出た美空達は、

アシユリーとレッドの案内によって街中を歩いていた。

美空「へえ……………ここがダイヤモンドシティかあ……………！」

レッド「そや！ここは色んなゲームの流行で人気がある街なんや！特にこの街、結構オモロイでえ？」

めっちゃ美味しいピザ屋があったり、楽しくダンスが出来る

ディスコ、スリル満載なタクシー会社、

激しい戦いが見れるアメフトのスタジアム、とにかく色んなオモロイ物がたくさんあるんや！

せやかてアシュリーはこんな事をせえへんなんて、損ばかりやあ〜。」

アシュリー「……………覚えてなさいよ……………」

彼女はそう言いながら、黒髪が一瞬に白く変色し、鋭い眼差しでレッドに睨み付いた。

それに気付いたレッド、そしてそれを目前にした美空とエヴァは、ドン引きした。

レッド「ひいつ…!?!?」

エヴァ「…それにしても……………まさかあの屋敷が街中にあるとは…

……………

普通は離れた場所にある物じゃなかったのか？」

レッド「ああ、俺もそう思ったんやけど、唯一廃墟となつとる家はあそこしかなかったから、

そこに住み着く事にしたんねん。　せやけど、買い物とかするんにはちようどエエから、

結構気に入つとるで？　特に家賃とか払わずに済むし、解体される予定も一切ないから、

安心して住めるで。」

エヴァ「そう言う物なのか…?」

その間に、美空は振り向くとある建物に気付いた。

それは建物の中心に大きな『W』が飾つてある白い建物で、その外観から何気に気になっていた。

美空「ねえ、あの建物は何？」

彼女はその建物を指しながらそう問い掛けた。

レッド「ああ、あれか？　あれは『ワリオカンパニー』っちゅうて

な、この街のシンボルみたいな物なんや。

殆どの流行ゲームはあそこから来とるし、この街に取ってはとても有名なんやで！」

エヴァ「よく知ってるんだな……。」

レッド「そりゃそうや！ なぜなら俺達あの会社で働いとるんやからな！」

美空「えっ!? ふ、二人共、あそこの社員なの!？」

レッド「そや！ けど……社長は物凄いケチな方でな……一銭の給料貰った事ないねん。」

美空「えっ……マジで……?」

給料を貰ってない事で落ち込むレッドに対し、美空は多少引いていた。

エヴァ「……じゃあなぜ辞退しないんだ?」

レッド「辞めさせてくれへんねん、その社長が！ 金を大儲けにするにはゲームを作り、

そしてそれを作るには俺達の力が必要やと言っやんや!

そのため俺達には辞める権利は一切ないっちゅうて……

その上夜逃げも許されへんっちゅうんやで!？」

美空「何て言う鬼会社だ……。」

レッド「せやけど、その会社は今休みさかい。何でも社長はお宝探しの冒険に出てったらしくてな、

そのため俺達社員はズーッと休みやねん。」

エヴァ「お宝探しの冒険? トレジャーハンターなのか、そいつは?」

レッド「そうみたいやで? あんま詳しく知らんけど……。」

アシユリー「……レッド……。」

彼女がレッドに呼び掛けると、彼はそれに気付いた。

レッド「おお、そやった! こんなトコで油売っとる場合やなかったな! ほな、

引き続き研究所の方へ向かうでえ！」

彼はそう言いながら、再び研究所へ向かって歩き出した。

美空「……………あつ、そうだ！」

二人が歩いている間に、美空は何かを思い出した。

エヴァ「？」

美空「そう言えばエヴァちゃんにはまだ言ってなかったなあ……。」

エヴァ「何がだ？」

美空「えつとねえ……………さっき、私を助けてくれたでしょ？ あれ、まだお礼言つてなかったね。」

ありがと、助けてくれて！」

彼女は笑顔でエヴァに感謝の一言を言うが、エヴァはそれに応じて赤面し、そっぽを向いた。

エヴァ「な、何バカな事を言ってるんだ、貴様は！？ べ、別に貴様がどうなるうと、

私には関係ない事だろうが！」

美空「またまた、そんな事言っちゃってえ……………ホントに素直じゃないんだね、あんたって。」

でもいいもおゝん あんたが何を言おうと、それでも私は

感謝してるんだけどねえ〜」

エヴァ「貴様、茶化すな！！」

彼女はムキになりながらそう言った。

……………ここはダイヤモンドシティの沖にある孤島……………そしてその孤島には研究所があった。

その研究所の中には様々な機械が設置されており、それを弄ってい

る一人の男がいた。

その男はサイボーグのようなバイザーを被り、黄色いジャンプスーツ、

そして背中にロケットを身に着けていた。そしてその隣にはカラオケボックスのような体を持った、

青いロボットが立っていた。その男の正体は、先ほどレッドが言っていた『Dr. クライゴア』であり、

ある薬を作っていた。そして彼がその薬を完成した時、それを掲げながらポーズを決めていた。

クライゴア「うおおおおお!!! 出来たぞおおおお!!!

私が長年苦勞して開発した、

若返り薬をおおおおお!!!」

???「サスガDr. くらいごあ! 才見事デアリマス!」

ロボットは拍手しながらそう言った。

クライゴア「うむ、ありがとう『マイク』よ! いやいや、実に長かった.....

こんな老いぼれになってから、私はもはやダメになると思った.....。

だが、これさえ飲めば、私は何でも出来る!!! 若かった頃と同じ事が出来るぞお!!!」

マイク「ソレツテ女子ノなんばデアリマスカ?」

クライゴア「な、何を言つとる!? 私はそんな破廉恥な事をする訳なかるうが!!!

私の若き時代は.....美形! 運動神経抜群!!! 知識万能!!! 正に私は、

天下一だった!!! だが時の流れは惨い.....こんな

なに老いぼれになったこの私は.....
もはやボロ雑巾の如く.....しかも老人ホームに招待されてしまうほどの.....。」

マイク「アレハといれノ修理ニ頼マレタダケデアリマスガ？」
彼は悲しむクライゴアに対し、露骨になりながらもそう答えた。

クライゴア「だが!!! これさえあれば、私はあの頃に帰れる！
私が眩しく輝いていたあの頃に……!!!」

これさえあれば、私は永久に不滅だあ……!!!」

マイク「シカシ、どくた!。イクラソウ言ッテモ、コレマデニ何
度も失敗シタデアリマスカ。

今回こそ成功スルトハ思エナイデアリマスガ……。」

クライゴア「何を言う!? 今回こそは成功する!! 私はそう信
じとるぞ! では………参る!!!」

彼がそう言った後、早速その薬を飲み干した。

クライゴア「……………ゲオツ!?!」

その時、彼の体から何か反応したのか、思わず手に持っていたフラ
スコを床に落とし、割らしてしまった。

更にその後、彼は両手で腹部を押さえながら、苦しみ始めた。

クライゴア「ゲオオオオオオオオ!!! は、腹が…腹がああ
あああああ……!!!」

マイク「ホラ見口。ヤツパリ失敗シタデアリマセンカ。」

クライゴア「ウボアアアア………も、漏る…漏れるううううう!
!!!」

彼はそう叫びながら、急いでトイレに入った。

マイク「全ク、イツマデ経ッテモ下剤シカ出来上ガラナイデアリマ
スネ…。サテ、

ソウシテル間ニコツチハからおけノ練習デモシテルデアリ
マス。」

……クライゴアの研究所前にて
ダイヤモンドシティから孤島へ通じる橋を渡った美空達は、研究所
の玄関前に立っていた。

美空「ここがDr・クライゴアの研究所……雑っばいね。」
レッド「まあ、みんなもそう言うとするで。ほな、早速呼んでみる
さかい。」

ピンポーン

彼は扉の横に設置されているドアベルを鳴らしてみた。しかし、
返事がなかった。

エヴァ「返事がないな……。」

美空「留守かな？」

レッド「……いや、きつと発明品の失敗でトイレに籠っとるんや
ろ。」

特に助手のマイクはカラオケの練習で音が聞こえへんかつ

たんや。こりゃちよいと無理やな……。」

エヴァ「……ここまで来て無駄足をしてしまつとはな……。」

レッド「うわっ……キツイ事言うな、あんた……！ま、まあ、せやけ
ど、安心しいや！ここがダメなら、

まだ別なのがあるで！ここよりも工工科学者の所が！」

美空・エヴァ「え？」

……ここは『ダイヤモンドアカデミー』……ダイヤモンドシ
イの有名な大学であり、
屋根に付いている大きなアンテナが特徴的。 様々な科目がある大
学だが、
殆どは科学中心とされている大学でもある。 美空達はレッドとア
シユリーの案内により、
この大学の門前に着いた。

レッド「ここがダイヤモンドシティの名門大学、ダイヤモンドアカ
デミーや！」

美空「うわぁ〜〜すっごぉ〜い！ 何か東大みたいな場所だね
え！」

エヴァ「そうか？ 私から見ても小さいぞ？」

レッド「まあまあ……ここは科学を中心にした大学さかい。

ここにいるDr. クライゴアのお孫はんなら、何か知つと
るかもしれない！」

美空「へえ〜そのクライゴアって言う人に孫がいたんだあ……。

「
エヴァ「ならさっさと会わせろ。 話はそれから。」

レッド「そう急かせんといてや！ ……っちゅうか……その前に色
々覚悟した方がエエと思うな？」

美空「え、何の？」

レッド「そのお孫はんなあ……天才なんは確かなんやけど……ちょ
っと変わり者でな。

色んな意味で引くかもしれんが……。」

エヴァ「そんなの会ってみないと分からんだろ。 早く会わせろ。」

レッド「へいへい、分かるとるわ！ はあ〜……アシユリーみた
いにキツイ奴やのう〜……。」

彼が小さくそう呟くと、アシユリーは横目で彼に睨み付いた。

アシユリー「……………何か言った？」
レッド「あいやいやいやいや、なな何でもありません！！」

……………レッドとアシユリーの案内によってアカデミーの中に入った美空とエヴァは、とある研究所の中にいた。

…とは言っても、様々な機材が置かれている事から、研究所である事には確かだが、

なぜかミラーボールやマイクセットが置かれていた。そしてその研究所にいたのは、一人の少女だった。

その少女は茶色い三つ網のツインテールをしてて、大きくて丸い眼鏡、ピンクのコートに黒いスパッツをした、何気に聡美とよく似た容姿をしていた。

???「ああ、アシユリーさんにレッドさん！ こんにちはあゝ！
！よくここに来れましたねえ！

と言うより、お二人ともこんな所に来るなんて珍しいですねえ！」

レッド「ああ、ちょっと用があつて来たんや。ごめんな、電話で連絡せずに来てもうて…。」

???「いえいえ、気にしないでください！ 皆さんが来るだけでも大歓迎ですから！」

彼女は笑顔でそう言った後、多少引いている美空とエヴァの方へ振り向いた。

???「あれ？ こちらの方々は…？」

レッド「ああ、紹介するわ！ この二人はちょっと客でな、春日美

空とエヴァンジェリンっちゅうんや。」

「???」「美空さんと…エヴァさんですね？ 初めまして！ 私このダイヤモンドアカデミーで科学を専攻にしている、

『ペニー』と申します！ これからもよろしくお願いします！」

美空「え、あ、は、はい…こちらこそ…！」

彼女は少し緊張しながら、ペニーと握手した。

美空（…何だろう、あの子……何かよく見たらハカセとよく似てるね…。）

エヴァ（いや、確かに似てるが、ここまでハイテンションじゃないだろ…。）
なぜか心が通じ合う二人であった。

ペニー「ところで、ご用件は何でしょうか？」

レッド「ああ、そやった。実は、この二人に関してなんやけど…。」

ペニー「え？ 二人って、美空さんとエヴァさんの事ですか？」

そして全員がペニーに出された椅子に座った後、レッドは美空とエヴァに関する全ての出来事を説明した。

ペニー「ええ！？ お二人共、別の世界から来たんですかあ！？」

美空「う、うん、そう言う事…。」

ペニー「すごいです！ でもそんな事って有り得るんですか！？

この世界の他にも違う世界が存在して、

しかもその世界から来た人間がこの世界に来るなんて…

…非科学的とは言えど、

とてもすごいですう…！」

レッド「でなあ、この二人はさっき言った変な現象に巻き込まれて、この世界にやって来たらしいんや。」

ペニーはこの現象に関して、何か知らんかな？」

ペニー「いえ、残念ながら、その現象が何なのかは、私にもよく分かりませんので……………」

レッド「さよか……………」

ペニー「……………」

美空・エヴァ「……………」

ペニーの発言に対し、三人は耳を疑った。

レッド「こ、心当たりって、何やねんそれって!?!」

ペニー「関連性はあるかどうかは分かりませんが……………」

彼女はそう言いながら、机に置いてある資料を取り出し、ページを捲りながら何かを探っていた。

ペニー「実はここ最近、自然環境科学研究部の方から、奇妙な情報が届いたんです。

それはこの世界の各地に何らかの異常現象が発生しているとの事です。」

エヴァ「異常現象?」

ペニー「はい。何やら……………景色が微かに歪むと言う、奇妙な現象です。」

美空・エヴァ「歪み?!?!」

レッド「それって、二人が経験した奴と同じ物じゃ……………!?!」

ペニー「分かりません。ただ、この歪みはキノコワールド大陸だけでなく、モビウス大陸の方にも、

少しだけですが、発生しているらしいのです。」

レッド「ほな、それに被害者とか出たんか!?!」

ペニー「いえ、未だにそう言う情報はありません。ただ……………」

この現象には微かにマイナスエネルギーをキャッチしたらしいので、今の段階では分かりませんが、

危険だと思われれます。」

レッド「そう言えば、その情報は自然……何とから来たんやっ
たな？　つちゆう事は、

これは自然現象の一部なんか？」

ペニー「いえ、この現象も、例の研究部の方々も知らないそうです。
でも、

これは確実に自然の物ではないのが分かります。」

美空「じゃあ、魔法とかは？」

彼女が咄嗟にそう言くと、隣にいたエヴァは少し耳を疑った。

ペニー「いえ、これも魔法の仕業でもありませんね。もしこれが
魔法だとしたら、

これほどの高度な現象は起こらないと思います……。」「
彼女がそう言った後、美空はなぜか固まっていた。

ペニー「……あのう……何か？」

美空「あ、いや、意外と反応が普通だったなあ……。」「
彼女は頭の後ろを掻きながらそう言った。

ペニー「はい？」

彼女は不思議そうに頭を傾げながら耳を疑った。

ペニー「い、いや、あの、そのお……何て言うかな？」

アシユリーちゃんと会ってから何とも思わなかったんだけ
ど……もしかして、

この世界に魔法とかあるの？」

彼女は少しだけ前に出ながら、ペニーに向けてそう問い掛けた。

ペニー「魔法……ですか？　うう……ん……正直、詳しくはよく
知りませんけど、

確かにこの世界には魔法と言う物がありますよ？」

美空「えっ！？　実在するの、この世界に魔法が……!？」

ペニー「はい！　私に取っては専門外ですが、それを研究する方な
ら実際いますよ？」

もちろんこのアカデミーには魔法科学研究部門がありまして、魔法を奥深さを研究したり、

実際使えるように学んだりなど、色々しますよ?」

美空「え、でも、魔法って機密的な何かなんでしょ? それ、一般人にバレたら、

罰として動物にされたりとか……………?」

アシュリー「…それ…聞いた事もない……………」。

レッド「何やそれ? どうかの漫画やアニメでもないし……………そんなルール聞いた事もないで?」

美空「そ、そうなんだ……………」。

エヴァ「…なるほど……………この世界では魔法は常識……………そして魔法による現象ではない…か……………」。

彼女は独り言でそう言うが、その後険しい表情をしながら、心の中でこう思い始めた。

エヴァ（じゃあ…あの現象は一体何なんだ……………? 確かに魔力は感じなかったが……………

その代わり、マイナスエネルギー……………つまり、邪悪な何かを感じた。 それに……………

あの声……………。 あれは一体……………?)

彼女は、この世界に来る前に、謎の怪奇現象の発生と共に聞こえたあの謎の声を思い出した。

……………ダイヤモンドアカデミーの門前にて

美空達はペニーの案内により、アカデミーの門前に立っていた。

ペニー「本当に申し訳ございません。 何のお役に立てなくて……」

美空「ううん、気にしないで！ おかげで色々参考したから！」
レッド「そやな。 あんたらが言うとするその現象、魔法の仕業やないっちゅう事ぐらいやけどな。」

ペニー「それでしたら、ウチのおじいちゃんに聞いてみてはどうでしょうか？ ウチのおじいちゃん、

私より知識がありますので、きっと何か分かると思いますよ？」

レッド「いや、実はここに来る前に寄ってみたんやけど、取り込み中だったらしゅうて後にしたんや。」

ペニー「ホントですか！？ もう、おじいちゃんったら…一体何をやってるんだらう……。」

レッド「どないする？ 試しに例の研究所に戻ってみるか？」
彼は美空とエヴァに振り向きながらそう言った。

美空「いや、今回はいいよ！ もし時間があれば、また明日かいつでも聞けるんだしさ！」

エヴァ「その前にまたそいつが出て来なかったらどうするつもりだ。」

美空「その時はその時だよ！」

ペニー「それはそうと……何やら天気が悪くなって来ましたね？
彼女はそう言いながら、他のみんなと共に空を見上げた。するとあれほど晴れていた青空が、急に真っ黒な暗雲に包み込まれていた。

美空「ホントだ……もしかして、雨でも降るのかな？」
レッド「んなアホな……予報やとこんな天気は来ないっちゅうてたけどなあ……。」

ペニー「じゃあ、これは一体……？」

その時、都心の上に浮かぶ暗雲が渦巻き、突然大きく開き出した。

そしてそこから赤い光が出て来て、

何かを降り出した。それぞれは大小に分けられた人型で、中でも翼を生えた生物が飛んで来た。

そしてその生物達に到着すると、手持ちの武器で車や建物を破壊し始めた。

全員「なっ…!？」

第22話 黒き兵器軍

……ダイヤモンドシティに訪れた美空とエヴァ。

そんな彼女達がダイヤモンドアカデミーを後にしようとしたその時、青空を包み込んだ暗雲から謎の生命体達が出現、ダイヤモンドシティに襲撃した。

そのため数多くの建物が崩壊され、市民達はパニック状態に陥りながら逃げ回っていた。

美空「な、何あれ!?!」

レッド「空から変な物が降って来て、街を襲つとるで!?!」

ペニー「こここれって、宇宙からの侵略ですかあ!?! は、早く……早く警察に……いや、

軍に知らせないと……!?!」

彼女は慌てながら、アカデミーに戻ろうとするが……。

ドスウウウウウウウン!!!

その時、彼女の前に巨大な黒い宇宙人が降りて来て、ペニーを足止めにした。

ペニー「!?!」

巨人「グオオオオオオオオオオオオ!?!」

そしてその宇宙人は巨大な拳で、ペニーを叩き潰そうとした。

美空「ペニーちゃん!?!」

レッド「アカン!!! アシュリー!?!」

彼がそう言つと、アシュリーは直ぐに頷いた。そしてレッドは杖に変身し、

アシュリーの手元まで飛んで行った。

彼女はそんな姿をした二人のドライバーを見た瞬間、驚きに引いていた。

ペニー「あっ！！ 『ドリブル』さんに『スピッツ』さん！！ どうしてここに…！？」

ドリブル「どないも何も………さっきの奴ら見なかったんですかいな！？」

スピッツ「空から変な奴らが降って来てもって、その瞬間街をめちやくちやにしとるんや！！」

おかげでみんな大パニックになっちゅうて、こっちも仕事が出来へんねん！」

ドリブル「今警察や軍があの変な奴らと戦つとるらしいんやけど、敵の攻撃が圧倒過ぎて、

手に負えんですわ！ なので安全な場所へ避難するために、こうして迎えに来たんです！」

スピッツ「ほな、早よう乗んなはれや！ 敵が来たら洒落にならんぞ！！」

ペニー「は、はい！ 分かりました！！ 美空さんとエヴァさんも乗ってください！！」

美空「う、うん！！」

彼女が頷いた後、レッドは元の姿に戻り、アシユリーにこう言った。レッド「アシユリー、俺達も乗るぞ！！」

彼がそう言うと、アシユリーは頷き、タクシーに乗り込んだ。

スピッツ「あれ？ その二人は？」

彼は助手席から後ろに座っている美空とエヴァに向きながらそう問い掛けた。

ペニー「あ、紹介します！ この二人は私達の新しい友達の美空さんとエヴァさんです！」

美空「ど、ども……。」

彼女は軽くお辞儀しながら挨拶した。

ドリブル「それより皆はん、シートベルトをちゃんと締めてくたせえよ！」

思いつきりぶつ飛びますからなあ……！」

彼がそう言つと、全員シートベルトをかけた。

ドリブル「ほな、行きまっせええええ……！」

ドビュウウウウウウウン……！」

彼がアクセルを強く押すと、タクシーは猛スピードで飛んで行った。

もちろんその反動により、

後ろの席に座っていた美空達はそのま押し出されて行った。

……謎の生物達の侵略により、街は次々と崩壊されてしまった。

そのため警察や軍は銃や爆弾で対抗するが、結果は無効。

そして宇宙人達は近未来的なレーザー銃や爆発物、更に巨人達が投げ飛ばす車などを、

警察や軍に反撃した。敵の攻撃から逃げる者もいれば、やられてしまう者もいた。

正に、ダイヤモンドシティは絶望に満ちた戦場と化していた。

その一方、暴走タクシーに乗った美空達は、そんな状況の中、街中に走っていた。

美空「ちよつと、こっちはまだ街じゃ……!?!」

ドリブル「すんまへん……!?! この道を通らんと街から出られへんのですわ！」

せやからもつ辛抱……!?!」

その時、突如彼らの前にまたもや巨人が現れた。

ドリブル「うわっ!? 危なっ!?」

そう思った彼はブレーキを強く踏み込み、車を止めさせた。

巨人「グオオオオオオオオオオオ!!!」

そしてその巨人は片手で大型トラックを持ち上げ、それをタクシーに向かつて投げ飛ばした。

スピッツ「どわあああああ!!! トラックが来たあああああ
ああ!?!?」

ドリブル「皆はん、早よタクシーから!!!」

ボガアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

美空達は急いでタクシーから飛び出した後、トラックはタクシーに命中し、爆発した。

美空「タ、タクシーが.....」

レッド「ふい~~~~.....せやけど間一髪やったわあ.....」

スピッツ「うわあ~~~~.....ワシらのタクシーがあ.....!」

ドリブル「スピッツはん、せめて命だけでも助かったと思うてくだ
さいなあ.....」

巨人「グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

敵が大きな雄叫びを出した後、それに気付いた美空達はその敵の方へ振り向いた。

スピッツ「けどこれだけは助かれへんでええええええええええ!!!」

「せいやああああああ!!!」

ドガアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

その時、何者かが巨人の頭に飛び蹴りを食らわせた。その衝撃が大きかったためか、巨人はそのまま倒れ、消滅した。美空達はその敵を倒した人物に振り向くと、その人物は青いチャイナ服を着た、若い黒髪の青年であった。更に彼の後ろには、紫色のチャイナ服を着た小柄な老人が立っていた。

???「皆さん、大丈夫ですか!？」

ドリブル「おお!! あんさんは確か、『ヤングクリケット』はん!!!」

スピッツ「それにそのお師匠はんの『マスターマンティス』はんやないか!!! おお、

ワシらを助けに来てくれたんかあ!!!」

二人は感動しながらそう言った。

美空「え、知り合いなの?」

ペニー「あ、はい。実は彼らも私やアシュリーさん、そしてドリブルさんやスピッツさんと同じく、

ワリオカンパニーの社員なんで……。」

クリケット「それより皆さん……これは一体どう言う事なんですか! ? 急に空が曇ったと思いきや、

突然空から妖怪らしき物が降って来て、街を荒らし回ってるんですが……! ?」

ペニー「そこは私達にも分かりません! 気が付いた時にはこの事態が起きていたので……!」

ドリブル「と、ところで、今の状況はどうなってるんですか! ?」
クリケット「ええ………市民達は出来る限りの事で街から避難したのですが、

敵の奇襲攻撃が余りにも激し過ぎるため、怪我人の数

が徐々に増え続けています。

警察や軍も、時間稼ぎとして敵達を止めようとしていますが、

向こうが未知なる武器を使用しているため、殆どは制圧されてしまいました。

俺や師匠も、怪物退治に加勢していますが、その数は圧倒的であるため、

なかなかキリがありません。」

マンティス「修行にはちょうどいい物だと思ったんじゃが……

ちとこれは無理があり過ぎたのう……………」

スピッツ「こんな連中を修行に利用せんといてや!!」

ペニー「ところで、他の皆さんは!？」

クリケット「いえ、まだ見掛けてませんが……………」

「た、た、助けてえ……………!!」

突然誰かが助けを呼ぶ声が聞こえ、全員がその方向へ振り向くと、道路の先に一人の男が走っていた。

その男は青いアフロヘアに大きなサングラスと音符のような形をした黒い髭、

そして赤い初に白いズボンをした、ヒッピー風の姿をしていた。

しかもそんな男の背後には、

大量の宇宙人軍団が追っていた。

????「だだ、誰か助けてYO!! 僕はただ楽しんでディスコに行こうと思ったのに、

何でこんな変な奴らに追われるんだYO!? 誰でもいいから助けてほしいYO……………!!」

ペニー「あれって……………」ジミー「さんじゃないですか……………!？」

スピッツ「しかも後ろから大量の宇宙人までも連れて来とるでえ！
？」
クリケット「は、早く助けなければ……………！！！」

ザシユザシユウウウンツ！！！！

しかしその時、突然素早い何かが閃光の如く、交差しながら宇宙人達を斬り裁き、消滅させた。

その瞬間を見た全員は、思わず啞然とした。そしてその後、彼らの前に、

敵達を倒したと思われる二人の人物が現れた。どちらも同じ背丈をした少女だが、

一人は長くて立たせたピンクのポニーテール、もう一人は同じく立たせた茶髪のツインテールをしていた。

しかも両者共は手に刀を持っていて、その風貌は忍者その物だった。

??? A「皆さん、大丈夫ですか!？」

??? B「特にヂミー殿も無事ですか!？」

ジミー「OH! ^{オウ}君達は『カット』ちゃんと『アナ』ちゃんじゃないかYO! 助けてくれてありがとYO!!」

美空「あ、あの子達は……………?」

ペニー「ええ、あの子達はカットとアナと言いまして、『ダイヤモンド幼稚園』に通ってる双子の姉妹なんです。

でも、実はあの二人、伊賀流のくのーなんです。」

美空「幼稚園児の忍者!? すごいなあ…!!? 何か甲賀流忍法を学んでる鳴滝姉妹とよく似てるなあ……………」

エヴァ「いや、実力的にはこつちが上だろ…。」

彼女がそう言った後、次に心の中からこう思った。

エヴァ（とは言え……………あの中国武術の小僧もそうだが、あそこま

でのスピードとパワーを持っていたとは……………

あの園児共、只者じゃないな。)

クリケット「カットちゃんにアナちゃん、どうしてここに…!?!」
カット「幼稚園が変な宇宙人に襲われてて、みんなと一緒に避難してたの。」

アナ「でもこのままじゃ放つとけなかったんで、ここで敵達を何とかしようと思って戦ってたの。」

クリケット「そうか…それはありがたい。ところで、他のみんなとは会ってなかった?」

カット「ううん。」

彼女は頭を振りながらそう返事した。

アナ「でもちようど『ナインボルト』と『エイティーンボルト』を探ちに行こうと思ったんだけど……………」

「みんなあ……………!」

その時、どこかから女性の声が聞こえ、全員がその方向へ振り向くと、赤いバイクに乗った一人の女性がいた。

その女性はゴーグル付きのヘルメットを被った長い茶髪、そして白い毛皮のコートを着ていた。

その女性が美空達を目撃した後、直ぐ彼女達の前にバイクを止めた。???「みんな、無事だったんだね! よかったあ…!」

ペニー「『モナ』さん! どうしてここに…!?!」

モナ「もう大変なのよ! いつもの通り『モナ ピザ』でアルバイトしていたら、

急に空から変な奴らが降って来て、店を含むあちこちをめちやくちやにしてたのよ!

このままでは仕事にもならないから、こうやってバイクに乗って避難してたのよ!

おかげで店長達とは逸れちゃったけど………ちょうどニンボルトとエイティーンボルトと会って、

一緒に避難してた所だったの!」

カット「で、その肝心ぢんなニンボルトとエイティーンボルトはどこにいるの?」

モナ「あれ? おかしいなあ………確か後ろから来てたはずだったんだけど………」

彼女は後ろへ振り向きながらそう言った。

「うわああああ!! 助けてえええええ!!」

その時、少年らしき声が聞こえ、全員がその方向へ振り向くと、道路の先から二人の少年が走っていた。

一人は空中に浮かぶスケボーに乗った、パトランプ付きの黄色いヘルメットに緑のゴーグル、

そして黄色い『V』マークの付いた赤いシャツと緑のズボンをしていた。

もう一人は刺のような形をした茶髪に3Dグラス、緑色のジャンパー、そして大きなラジオを抱えた、

少年とは思えないほどの大柄の男だった。しかもその二人の背後には、大量の宇宙人軍団が追っていた。

??? A「モナお姉ちゃん、僕ちん達を置いてくなんて酷いよお」

!」

??? B「こっちは化け物達に追われとるったい!! 誰か助けてくれったい!」

アナ「ああ!! ナインボルトとエイティーンボルトがあ……!!」

クリケツト「早く助けに行かないと……!!」

ズガアアアアアアアアアアアアッ!!!

その時、宇宙人軍団の真上から巨大な光線が放たれ、それを直撃した事で宇宙人達は消滅した。

モナ「え！？ な、何今の…！？」

レッド「上からや！！」

全員見上げると、そこには豚のような顔をした赤色の円盤が飛んでいた。

美空「う、宇宙船！？ また別の宇宙人が侵略して来たの…！？」

レッド「いや、ちよい待ちや！ あの宇宙船、確か…！？」

その時、宇宙船の上から一人の人物が現れた。その人物はサンダラスと黒いマントを装着した、白くて細長い宇宙人であった。

「…皆サン、大丈夫デスカ！？」

レッド「やつぱり、『オービュロン』やないか！？」

美空「えっ！？ あ、あいつも知り合いなの！？」

レッド「あ、ああ…こいつもワリオカンパニーの社員なんや。」

エヴァ「一体どう言う奴があのか会社に勤めてるんだ！？」

ナインボルト「ああ、オービュロンじゃないか！」

エイティーンボルト「助かりました！ ありがとうございます！」「い！」

オービュロン「いいイエ、仲間トシて当然の事ヲシただケデスよ！

トハ言ツてモ……………」

私以外ニコの星ヲ征服シヨウトスル宇宙人がイルトハ……………」

同ジ宇宙人トシテ許シマセン！ 私ノ自慢ノ『ぶた

しっぷ』デ、

全テノ敵を蹴散ラシテ……………！！！！」

！？ 第一、

貴様かこいつらがどうなるうが、私に取っては知った事ではないわー！！」

美空「な、何ですつ……………！？」

エヴァの嫌味な態度に対し、ブチギレ寸前の美空だったが、途中である事を思い付いた。

それを思い付いた後、彼女は落ち着きを取り戻し、次の行動を取り始めた。

美空「あつそ！ エヴァちゃんつてそう言う事言うんだ。へえ〜

……………真祖？

ダイク・エヴァンジェル 『闇の福音』？ マガ・ノスフェラトゥ 『不死の魔法使い』？

そう呼ばれてる割には別は大した事じゃないんだねえ〜。」

エヴァ「はあつ…！？」

美空の捻くれた発言に対し、エヴァは耳を疑った。

美空「みんながどうなるうが知った事じゃない？ それつて、こいつらを倒す自信が全くないつて事だよな？」

それじゃあ、ただの負け犬の遠吠えつて言うんだよね？」

エヴァ「な、何だと貴様あ！？」

美空「だつてそうじゃない？ 何もしないと言う事は自分が弱過ぎるのを自覚してるつて言う意味だよな？」

そりゃあ、長い間から麻帆良にいて、ズー…つと何もしないでいたからね。

そりゃ魔力も体力も衰えてもおかしくないもんね。偉そうな態度を振舞つてただ逃げ回るようじゃ、

汚名を被る以外何も出来ないよねえ〜！ ププツ、この事をネギ君やアスナに知らせたら、

どんだけ笑い転げちゃうか……………！！」

彼女が笑うフリをしながら横目でエヴァを見てると、エヴァは歯を食い縛りながら怒り始めた。

エヴァ「き、きいさあまあ~~~~~……!!! ええい、分かった!! 分かったよ!!」

やればいいんだろ、やれば!!! そこまで言うんなら、この私の強さと恐ろしさをを見せてやるうではないか!!
それで文句ないだろ!?

そのためちゃんと見てるんだな!! 私こそが真祖で最強である事を、ここで証明してやる!!!

美空「へえ〜い、分かりましたよ〜」
彼女は怪しい眼差しでそう言いながら、密かに笑っていた。
美空（にひひ、誘導作戦成功）

エヴァ「行くぞ!!!」

美空「OK!!!」

エヴァ・美空「『来れ』!!!」
アテアット

二人は呪文を唱え、『ネオ・パクティオーカード』を発動させた。
発動中に二人の体が光り始め、
アシュリー達と宇宙人軍団はその眩しい閃光に対し、目を手で塞いだ。
レッド「うわっ!?! な、何やこの光は!?!」

ペニー「ま、眩しい!!!」
モナ「ちょ、ちよつと、一体何が起こってるの!?!」

そして光が収まった後、美空とエヴァは制服姿から違う姿に変身した。

美空は大きな懐中時計を担いだ修道女服シスターになり、エヴァは白いゴスロリ風の姿になっていた。

この姿によると、二人は『コスプレカード』の姿になっていた。

美空「おお、この姿は!!!」

エヴァ「『コスプレカード』か………チツ、『アーマーカード』ではなかったか!!!」

彼は愕然としながらそう言うが、その間にアシユリーは無表情でありながらも、顔には出ていないが、正直驚いていた。

アナ「す、すごおい！！ あのお姉ちゃんすごいよ！？」

ジミー「WOW！^{ワオ} 何か迫力があってすごいYO！？」

しかし、生き残った敵もいたため、今度は反撃として光線中を空中にいるエヴァに攻撃した。

だが殆どの攻撃はエヴァに当たっていないため、本人は余裕の表情を浮かばせていた。

エヴァ「フンツ！ そんなガラクタ如きに、この私を殺せると思ってるのか！？

ならばその銃で殺し合いでもしてるがいい！！
『バベット・コント
の
傀儡の

『^{ワール}糸！！』

その時、彼女は二本の十字で出来た板を取り出し、呪文と共に何かを敵達に向けて放った。

その後何かを受けた敵達の目が光り出し、エヴァがその板を動き始めると、敵達は銃を構え、仲間に発砲した。

そのため、攻撃を受けた敵達は次々に消滅して行った。

エヴァ「ハツハツハツハツ！！ 撃て撃て撃ち捲くれえ！！ 裏切り者となってお互い蹴散らすがいい！！」

モナ「え、何！？ 何で仲間割れしてるの！？」

レッド「いや、違う！ エヴァは奴らを操つとるんや！」

エイティーンボルト「ええ！？ そんな事が出来ると！？」

美空「よっしゃ、エヴァちゃん！ その調子でやっちゃえ！！」

彼女は気楽になりながらエヴァを応援した。

エヴァ「貴様は何もしとらんだろうが！？ ポケツとしてないで戦え！！！！」

美空「え、いや……そりゃあ、戦いたいのも山々なんだけど………実は私、この姿の事、あんまり知らないんだ。」

彼女は頭の後ろを掻きながらそう言った。

エヴァ「はあ！？ 何言ってるんだ、貴様あ！？ そんな物、坊やに聞かなかつたのかあ！？」

美空「いや、一応聞いたんだけど、その時はチンブンカンブンでよく分からなくて………」。

モナ「……ねえ、貴女、シスターなんでしょ？ だとしたら、神様に祈って、何かやったり出来ないの？」

美空「え？ 神様に………って、そうか！ だからこの格好なんだ！ それなら………！」

彼女は指を鳴らしながらそう言うが、途中で言葉が途切れ、担いでいた懐中時計を取り出した。

美空「……じゃあ、懐中時計は何なの？」

モナ「え？ さ、さあ………」。

ペニー「あつ、時計でしたら、もしかして………」。

巨人「グオオオオオオオオオオ！！！！」

その時、美空の背後に現れた巨人は、ハンマーを持ち上げながら、美空に不意打ちをしようとした。

美空はそれに気付くが、タイミングは遅過ぎた。

モナ・ペニー「！！！！ 危な………！！！！」

美空「うわあっ！！！！」

ピキイイイイイイイン………！！！！

彼女が懐中時計を盾にするかのように前に出したその瞬間、時計が一瞬に光り出した。

美空「………？」

彼女が閉じていた目を少しずつ開けてみると、風景は灰色に一変しその同時に周囲の動きが遅くなった。

もちろん美空を叩き潰そうとする巨人の動きも、美空より遅く動いていた。

そして彼女に注意を引き寄せようとしたモナとペニーも、自分が普通に動いている事に気付いていなかった。

美空「……これって……………」

彼女が再びスローモーションで美空を叩き潰そうとする巨人に見上げた後、

彼女は敵から離れた位置に移動した。そして一時的に止まっていた懐中時計が再び動き出した時、

空間が元の状態に戻った。そして元通りになった瞬間、巨人のハンマーはそのまま地面に叩き込んだ。

巨人「グオツ!？」

モナ・ペニー「……………い!？」

一瞬に姿を消し、そしていつの間にか違う場所へ移動した美空に気付いた二人の少女と一体の敵は、

目を大きく開きながら啞然とした。

モナ「えっ!？ あの子、いつの間に…………!？」

ペニー「でもどうやって…………!？」

美空「……………もしかして……………!」

彼女が再び懐中時計を差し出すと、時計が再び光り出し、今度は長針と短針が高速に回り始めた。

すると彼女が足を動き始めると、目に見えないほどのスピードに走り出した。

ペニー「えっ!？ な、何なんですか、あのスピードは!？」

モナ「は、早過ぎて見えな…………!？」

巨人「ググオツ!？」

そして美空が音速で巨人の周囲に回り始めると、それを追おうとし

た巨人は目を回してしまった。

巨人「グ…グオオオオオ………！！？」

そして巨人が目を回しながらふら付き始めると、美空はブレーキをかけながら足を止めた。

クリケット「！！ 今だ！！ たあああつ！！！！」

バキイイイイイイツ！！！！

隙を見付けたヤングクリケットは飛び蹴りで巨人に攻撃し、一撃で敵を倒した。

クリケット「君、大丈夫かい！？」

美空「あ、はい、大丈夫です！」

ペニー「ホントに怪我はありませんか！？」

モナ「って言うか、今のは何だったの！？ いつの間にか違う所に移ってたり、急に素早く走ったり、

一体どうやって………！！？」

美空「この時計のおかげですよ。 この時計：自分以外の時間を遅らせたり、

自分のスピードを速めたりする事が出来るみたいです。 な
るほどお…

そう言う効果があつたんだあ…！！」

彼女は感心しながらそう言った。

レッド「………な、何なんや、あの二人は………？ エヴァは氷の魔法が使える他に、

敵を操る事が出来る………。 美空は時計で時間を操作する事が出来る………。

あの二人……一体何なんや！？ 一体どうやってあー言う魔法を………！！？」

彼は未知なる魔法を目の当たりにし、混乱しながらそう言った。そんな彼を抱いているアシュリーは、顔には表さなかったが、感心している上に唾然としていた。

オービュロン「皆さア~~~~ン!!!」

オービュロンの掛け声を聞こえたアシュリー達は、彼の方へ振り向く。

すると彼は倒された敵達が残した銃を拾っていた。

オービュロン「コノ銃、使えソウデすヨ! コレヲ使エバ、私達モ戦えルカモシレマセンね!」

スピッツ「おお、でかしたで、オービュロンはん!!!」

ドリブル「それさえあれば、ワテらも戦えまつせ!」

ナインボルト「僕ちん達も使おう!」

エイティーンボルト「そうたいね!」

モナ「ちょ、ちょっと! 子供は銃を持つちゃダメなのよ!??」

ジミー「そんな事言ってる場合じゃないYO!」

その後、無防備だったジミー、ナインボルトとエイティーンボルト、スピッツとドリブル、

そしてオービュロンは、敵が残した銃を所持し、それで敵達を次々に攻撃した。

地上にいる者から空中にいる者まで、彼らは敵一匹も残らず全てを撃破しようとした。

ちなみにモナは、仕方なく敵が残した銃を拾い、加勢した。その間にカットとアナ、

ヤングクリケットとマスターマンティスは、襲い掛かって来る敵達を電光石火の如くに倒し続けていた。

更にエヴァは引き続き傀儡魔法で敵を操りながら攻撃し、美空は出来るだけ魔力を無駄に使わないように、

敵が残した銃で戦っていた。

……ダイヤモンドシティの上空にて

その間、上空から一人の人物が宙に浮かんでいた。その人物には下半身はなかったが、

全身漆黒と紅蓮が混ざった長いローブに民族的な首飾り、そして三つ目を持った、

まるで妖怪のような存在であった。そんな彼が地上で戦っている美空達を見下ろしながら、不敵な笑いをしていた。

???「フッフッフッフッフ……我々に歯向かう下種ものがいたとは……

……面白い。

いいだろう……特別に遊んでやるとしようか……。」

……ダイヤモンドシティの地上にて

エヴァ「アハハハハハアッ!!! それそれぞれえ!!! もっともつと撃ち捲くれえ!!!」

抵抗出来んだろお!? これが真祖の力と言う物だあ!!! 虫けらは虫けららしく消えてなくなるがいいわあ!!!」

彼女はそう言いながら、操られた敵達を味方に攻撃し続けながら楽

ペニー「い、一体、何なんですかあれは!？」

「フッフッフッフ……得と驚いたようだな？」

全員「!？」

美空達が見上げると、巨大な怪物の隣に上空に浮かんでいた謎の人物が下りて来た。

「???」「ブラックウォリアー」……「ブラックオーク」……「ブラツクホーク」……「サンドワーム」……

次から次へと我が軍を軽々と蹴散らしてくれたようだが……

……残念だが、

貴様らのお遊びはここまでだ。」

クリケット「な、何だあの人物は……!？」

ナインボルト「何かお化けっぽい……!」

オービュロン「モシカシて、アノ宇宙人達ノぼすデハ……!？」

全員が驚いている間に、エヴァはその人物に睨み付きながら、何かを感じていた。

エヴァ（……な……何だ……この気配は……!？ 冷たい……
……いや……

遠くにいるにもかかわらず肌がピリピリとする……! こいつ……

相当な魔力を持っているのか……!？)

「???」「にんげん 跪け、愚かな下等生物共よ!! 我が名は、『ブラックド
ウーム』!!」

我ら『ブラックアームズ』の創造主であり、この星の支配者となる者だ!!」

美空「ブラック……ドウム……!？」

ペニー「ブラックアームズ……? オービュロンさん、知ってますか

？」

オービュロン「イエ、初めテ聞キマすガ……………」

彼は頭を振りながらそう答えた。

ブラックドウム「貴様らの戦い、じっくり上空から見させてもらったぞ。まさか何の力もない人間が、

ここまで我が軍を追いやるとは、予想外だったな。とは言っても、

ここで我々に歯向かおうとした弱い警察や軍とは違い、意外と優れているようだな。

特別に褒めてやろう……………」

彼がそう言った後、アシュリーに抱かれていたレッドは彼女の腕から離れ、彼女の頭に移動した。

レッド「貴様がこいつらのボスつちゆう奴やな！？ 何のためにこの街を襲ったあ！？」

ブラックドウム「ほう……………悪魔とは珍しい……………地獄にしか存在しない者と思ったが、

地上にもいたか……………やはりこの世も地獄と同じと言う事か……………フッフッフ……………」

実にその通りだ……………」

レッド「んな事あどうでもエエ！！ 答えるつちゆうねん！！」

ブラックドウム「フンツ……………いいだろう、特別に答えるでしょう……………先ほど言ったように、

我々はこの星を支配するためにやって来たのだ。

だがこの星を支配するには、
邪魔な人間共を全て排除せねばならん。 新た

なる世界を築くためには、

雑草や害虫同然の人間を全て蹴散らさなければ
ならんからな……………」

最初はモビウス大陸にあるセントラルシティを
再び襲撃しようと思ったが、

位置関係としてはこの街の方が近かったのだな

……

それにこの大陸はモビウス大陸とは違い軍事力

も少ない……………

ちょうど破壊するのに好都合だったと言う訳だ

…。

レッド「何やお！？」

エヴァ（再び襲う…？ 以前にもその街を襲ったとしても言うのか？）
彼女は心の中からそう思った。

ブラックドウム「とにかく、貴様らはよくここまで我が軍を蹴散らし、生き残る事が出来たな。

だが、残念ながら貴様らのサバイバルゲームはここで終わらせてもらう！

一般兵共を軽く倒せただろうが、この『ブラックブル』の敵でもなかるう！

獄炎の息吹で塵にしてくれる！！」

エヴァ「フンツ！ ならば自らの軍勢に裏切られるがいい！！ 撃ち落せえ！！！！」

彼女は傀儡魔法で、操られた敵達をそのままブラックブルに向けて銃を発砲した。しかし、

光線は命中しているにもかかわらず、ダメージは受けていなかった。エヴァ「何ツ！？」

美空「攻撃が当たってるのにビクともしてない！？」

ブラックドウム「フンツ…口ほどでもない……………焼き散らすがいい！！！！」

ブラックブル「ゲオオオオオオオオオオオ！！！！」

ズジュアアアアアアアアア！！！！

ブラックブルは口から火球を地面に向けて放ち、そこから発生した炎の海で操られた敵達を全て焼き散らした。

エヴァ・美空「なっ……!!?」

クリケット「な、何て事を……!!?」

マンティス「あ奴……自分の仲間を殺しよった!?!」

自らの仲間を抹殺したブラックブルに対し、それを目の当たりにした美空達は愕然とした。

エヴァ「き、貴様……操られてるとは言え、自らの仲間までも本気に殺すのか!?!」

ブラックドウム「仲間? フンツ……戯言な………使えぬ道具コウはあつても意味はない………

踏み潰して捨てるのみ。 そうだろう?」

エヴァ「……フンツ! 貴様、私とどこか似てるようだが……その分気に入らないね!!」

『サギタ・マギカ魔法の射手・セリエス連弾・グラキアリス氷の17矢』!!!!」

彼女は再び魔法で氷柱を作り出し、ブラックドウムに攻撃するが、ブラックドウムは一瞬に姿を消し、

攻撃を交わした。そして彼が攻撃を回避した後、更に上空へ移動した。

エヴァ「なっ……!!?」

ブラックドウム「フンツ………弱い、弱過ぎるな……力もスピードも。」

この私を倒したあの裏切り者と比べれば、対し

て強くなかろう。」

エヴァ「何いつ!?!」

敵からの罵倒を受けた事で、彼女はブラックドウムに強く睨み付いた。

エヴァ（……裏切り者………? 誰の事を言ってるんだ……?）

ブラックドウム「何れにせよ、貴様の相手はこの私ではない……。」

それでも私の相手になりたくば、

このブラックブルを倒してみるがいい！ だが
その前に、

貴様らはブラックブルの餌となるのだ！！ さ
あ、行け！ ブラックブルよ！

目の前にいる全ての人間共を焼き散らすが良い

！！！！

ブラックブル「グオオオオオオオオオオ！！！！」

ブオオオオオオオオオオオオ！！！！

ブラックドゥームの指示により、ブラックブルは口から大きな炎を
吹き出し、美空達に攻撃した。

モナ「きゃああああ！！！！」

ジミー「熱ち熱ちっ…熱いYO！！！！」

ナインボルト「こんなのが相手なんじゃ無理だよ！！！！」

彼らはそう言いながら、逃げ回っていた。

オービュロン「エエイ、でも私ハマダ諦めまセンヨオ！！ コレデ
も食ラエ！！！！」

彼はそう言いながら銃を発砲するが、やはり命中しても敵にはダメ
ージを受けなかった。

オービュロン「ヒイイイイ！！ ヤッパリ効イテナイ！？」

エヴァ「くっ…！！ ならばもう一度…
セラエス魔法の射手・連弾・
サキタ・マギカ魔法の射手」
氷の17矢！！！！」

彼女は再び彼女は再び魔法で氷柱を作り出し、ブラックブルに攻撃
するが、

敵が吹き出した炎で氷柱を一瞬に溶かした。

ペニー「ああっ！！ 氷柱が…！！！！」

エヴァ「チッ…！！ やはり炎相手では氷は不利か…！！！！」

クリケット「くそっ！ ならどうやって戦えばいいんだ!？」
カット「敵は炎を使って来るち、宙に浮いているち……………」。
アナ「いくらあたち達でも近付き難いよ…!」

エヴァ「おい、春日美空!! 貴様は一番何もしてないだろうが!
? 今度は貴様が何かしろ!!」

美空「だから何かやってるって! それに、時間を止めたりしてる
だけじゃ、相手を倒せないよ!」

エヴァ「何? 時間を停止…?」

美空「あ、うん。 今気付いた事なんだけど、この懐中時計、私の
速度を上げたり、

自分以外の時間を遅らせたり、そう言う時間操作が出来るみ
たいなんだ。」

エヴァ「時間操作……………!? そうか、それだ! 春日美空、そい
つを使って、こいつの時間を止める!

ただし、私以外の時間を止める事は出来るか!？」

美空「え、私とエヴァちゃんだけ? わ、分かんないけど…やって
みるよ! でも、

これいつでも使えるって訳じゃないよ!? これ使ってて気
付いたんだけど、

相当な魔力を食うらしいから、しょっちゅう使ってたら私ダ
メになるかも……………!？」

エヴァ「そんな物死ぬ気でやればいいだろうが! 分かったのなら
とっとと使え!!」

美空「し、死ぬ気って……………はあ…エヴァちゃんってホントに容
赦ないんだからなあ……………それじゃあ、

行くよ!! 『タイム・ブレイク時間停止』!!!」

彼女が懐中時計を前に出しながら呪文を唱えると、時計の動きが止
まった同時に、

自分やエヴァ以外の全ての時間が停止した。

エヴァ「ほう…なるほどお……………時間が止まるところなるのか……………」

美空「感心してないで早く何とかしてよ！！ こっちは体力持たないんだからね!?!」

エヴァ「フンツッ！ 貴様に言われなくても、速やかに終わらせるつもりだ！

『サギタ・マギカ
魔法の射手・連弾・氷の17矢』！！！！

彼女は再び氷柱を作り出すが、今度は氷柱をブラックブルの周囲に設置した。

エヴァ「クツクツクツ……………これで時間が動き出したら、どうなる事やら……………よし、春日美空！

動かせ！！

美空「分かった！」

彼女が頷いた後、時計を再び動かし、時間を元の状態に戻した。

ズギユウウウウウウウン！！！！

そして時間を動き出した同時に、氷柱はブラックブルの体中に勢いで突き込んだ。

ドリブル「うおっ!?! な、何やねんいきなり!?!」

スピッツ「いつの間にあんな物がああ怪獣の周りに……………!?!」

エヴァ「ハッハッハッハッ！！ どうだ、痛いだろ!?! それでと

ことん苦しむがいい!?!」

彼女は嘲笑しながらそう言うが……………。

美空「…いや、エヴァちゃん！ 奴は何も感じてないよ!?!」

エヴァ「何?」

美空「よく見て!?!」

彼女がブラックブルの方へ指すと、エヴァは改めて敵の方を見詰めた。そしてよく見ると、

氷柱は敵の体に刺し込んでいるのではなく、押し込んでいた。

エヴァ「なっ……………刺し込んでいないだとお!?」

美空「あの体、ゴムみたいに強い弾力性を持つてるんだ!

それで何してもダメーシ受けなかったんだよ!」

エヴァ「……………だとしたら…この状態で言つと……………」

美空「……………もしかして……………」

ドビュウウウウウウウウー!!!

ブラックブルの体に押し込んでいた氷柱は、そのまま勢いで弾き飛ばし、エヴァ達に襲い掛けた。

エヴァ・美空「うわああああああ!!!」

ペニー「あっ……………!! 美空さん、エヴァさん!!!」

レッド「くっ……………やはり魔法でも無理なんか!?」

ブラックドウム「フッフッフツ……………無駄な悪足掻きを……………その程度でブラックブルに勝とうなど、

片腹痛い。もはや何をやっても無駄に過ぎん

ようだな……………」

彼は不敵な笑みでそう言いながら、エヴァ達の方を見下ろしていた。

エヴァ「くそっ!! あのような体では、魔法を使っても意味がない!」

美空「だったらエヴァちゃん、さっき雑魚達に使ったあの操り人形みたいな魔法を使ってみたらどうなの!?」

エヴァ「いや、あれはダメだ! あの魔法は大きさに限りがあるんだ!

あんな奴に傀儡魔法など使ったら直ぐに解かれてしまうぞ

「！」
美空「うう……………じゃあ、何か弱点とかないのかなあ…！？ あー言うゴムゴムな敵、

絶対弱点があるはずなんだけど……………！」

「あ、あのさあ……………」

悩む美空が後ろへ振り向くと、そこにニンボルトが立っていた。ニンボルト「僕ちん、思ってたんだけど……………もしかしたら、あの怪物の弱点は目なんじゃないかな？」

美空「目…？ 何でそう思うの？」

ニンボルト「いや、僕ちん、よくゲームとか遊ぶからさ、あー言う目玉一つだけの敵と戦ったりするんだ。

あー言うタイプの敵って、結構目が弱点だって言う

説が多いんだよね。」

美空「目が弱点……………！？」

彼女がその助言を聞くと、ある事を思い出した。

……………それはまだ美空が麻帆良学園の女子寮にいた時であった。

同じ運動部の友達である大河内アキラとゲームを遊んでいた。そのゲームはアクションゲームで、

ボスと思われる一つ目のモンスターと戦っていた。だが彼女は何

度もボスに攻撃してもダメージが受けず、

何度もアウトにされてしまった。

美空「ああ、またアウト！？ もうこれで何度目だよお……………」

アキラ「美空、ただ闇雲に攻撃してちゃ意味ないよ？ 目を狙えば直ぐに倒せるんだから。」

美空「え？ 目？ 何で目なの？」

アキラ「あー言うタイプの敵はね、必ずと言っていいほど目が弱点なんだ。」

……… 回想が終わり、現実に戻ると、美空はその時の記憶を思い出した。

美空「…そうか、目か！ 目が弱点なんだ!!」

彼女がそう言っていると、ナインボルトに向きながらしゃがみ込み、彼の両手を握った。

美空「ナインボルトって言ったね！？ ありがとう！ おかげで何とか出来そうだよ！」

ナインボルト「えっ!？ あ、そ、そう…? そ、それならいいんだけど……。」

彼は顔を赤く染めながらそう言った。

美空「エヴァちゃん！ 目だよ！ 奴の目を狙え!! それが奴の弱点だよ!!」

エヴァ「何!？ 貴様、私に指図をするつもりか!？」

美空「そんなの言ってる場合じゃないでしょ!？ いいから早くやっちゃって!!」

エヴァ「チツ…気に食わんが、やるしかない!!」

彼女は文句を言いながらも、魔法で氷柱を作り出した。

グシャッ!!!

いつもは自分の強さに威張っていたエヴァだったが、無敵に過ぎなかった敵が倒せた事で、

正直唾然としていた。だがその間に美空は喜びながら、背後からエヴァを抱き締めた。

美空「アハハハハ！ やったね、エヴァちゃん！ 私達勝ったんだよお〜〜！」

エヴァ「え、ええ〜い！！ 馴れ馴れしく抱き付くな！！」
彼女は顔を赤く染めながら、美空を強く引き離した。

美空「えへへ、ごめえ〜ん！ 余りにも嬉しくてつい…！」
エヴァ「……とは言っても、よくあの目が奴の弱点だと分かったな……………」

美空「いや、最初は気付かなかっただけで、さっきインボルトって言う子が助言したおかげで、

それだと思い付いたんだ。それに、以前アキラにも教えてもらって……………」

こう言う敵はゲームにもよく出ているから、大抵あー言うタイプの敵は目が弱点だって……………」

エヴァ「…なるほど……………」しかも氷柱を避雷針代わりに使って雷を落とすとは……………」

貴様もなかなか思い付いたな。」

美空「え？ それって……………」
エヴァ「…べ、別に認めた訳ではないが……………」き、貴様のおかげで、敵を倒せたんだ。貴様がいなかったら、

正直勝てなかったかもしれん……………」れ、礼を言うぞ。」

彼女は顔を赤く染め、余所見しながら美空にそう伝えた。
美空「エヴァちゃん……………」ププツ！ こう言う時に限って素直なんだ！ ツンデレって言う奴〜？」

彼女は妖しい目をしながら、軽く笑った。

エヴァ「なっ！？ き、貴様、何だその態度は！？ 前言撤回するぞ！？」

その間、上空にいたブラックドゥーム、そのままゆつくりと下りて来た。

ブラックドゥーム「……………これは驚いた……………まさかあのブラックブルを倒せたとは……………」。

クックククツ……………正直、予想外だったな……………

……………」

エヴァ「ハツハツハツ！！ 当たり前だ！！ この最強の魔法使いである私に取っては、

所詮雑魚に過ぎんかったわ！！」

美空（うわっ、よく言うね……………私がいなかったら全然勝ち目はなかったって言うてたくせに……………」。

彼女は腕を組みながら嘲笑するエヴァに対し、呆れそうに心の中からそう思った。

エヴァ「まあ、それより！ 約束は果たしてもらおうぞ！ あの雑魚を倒した後は貴様が相手とな！

さつき貴様、好き放題に私をバカにしたようだが、そのお返しにとことん痛み付けてやるからな！！」

ブラックドゥーム「ほう…？ この私に挑戦か…？ フッフッフ……………いいだろう……………」

確かに私は以前に言ったな……………『私の相手になりたくば、

ブラックブルを倒してみるがいい』と。 良か

ろう！

そんなに私と戦いたいと言うならば、我が暗黒に満ちた力を、得と見させて……………！！」

「はいはあゝい、そこまでえゝ！」

その時、突然何者かの声が聞こえ、全員はその声が聞こえた方向へ

振り向いた。

そしてそこに現れたのは、宙に浮かびながら手を叩いている紫の道化師……………デイメーンがいた。

ブラックドウム「貴様は……………デイメーン!？」

エヴァ「デイメーン……………?」

美空「な、何あれ、仲間!？」

モナ「えっ!？ な、何!？ 今度は何なの!？」

ナインボルト「うわっ、何かキモイ奴が出て来たよ!？」

ジミー「って言うかどっかから出て来たんだYO!？」

アシュリー「……………あいつ……………物凄い魔力を感じる……………」。
レッド「何やて!？」

デイメーン「取り込み中に悪いんだけど、今日の所はこれで勘弁してくれるかな？」

ブラックドウム「デイメーン、貴様……………何しにここへ……………なぜ私の邪魔をする!？」

デイメーン「何って、決まってるじゃない、ドウムちゃん？ 君を迎えに来たんじゃない！」

こんな所で遊んでないで、とっととお家に帰ろうよ？
ブラックドウム「ふざけるな！ 私は今からこ奴らと戦うところ

なんだぞ!？」

勝手に割り込んで邪魔をするなど、いくら貴様
であろうと許さんぞ!！」

デイメーン「あのねえ……………そりゃあんたが軍を作り出して、
ウォーミングアップのつもりで街一つや二つを壊しても構わないけど、

だからと言って命令なしで勝手に行動してもらっちゃ、
もっと困るんだよ？」

あのお方が怒ったら、どうなると思う…?」

ブラックドゥーム「うぐつ…!!」

デイメーンが不気味な笑みを浮かばせ、ブラックドゥームの顔に接近しながらそう言つと、

ブラックドゥームはそれに対して抵抗しなかった。その後、デイメーンはエヴァ達に振り向いてこう言つた。

デイメーン「みんな、ごめんねえ〜? 今から対戦ゲームが始まるうとしてた所だつたらしいけど、

悪いけどここで中止にしてもらつよ?」

エヴァ「貴様、何者だ!? 貴様もそいつの仲間か!?!」

デイメーン「え? 僕? アハハハハ、そうだそうだ、そうだった! まだ紹介してなかつたね!

初めまして、僕の名はデイメーン! 人は僕を『魅惑の道化師』と呼んでるよ?

それにドゥームちゃんの仲間ねえ〜……………? ちよつと違うけど、同じ機関にいるんだから、

近いっちゃん近いかな?」

エヴァ「機関? 何だそれは?」

デイメーン「まっ、それは置いといて……………さっきの戦い、見させてもらったよ?

君達なかなかやるもんだね! あんなキモイ化け物を難なく倒せただなんて、

正直僕驚いちゃつたよ!」

彼は感心しながら二人の少女にそう伝えるが、その後不適な笑みを浮かべた、高飛車のような態度に変貌した。

デイメーン「……………でもお…最も何もしていなかったのはそつちの金髪ちゃんかなあ?

自分は最強だとか真祖とかあーだこーだ言い放題だつたけど、殆どは口先だけじゃない?

ホントはめちゃくちゃ弱いんじゃないのお？」

エヴァ「な、何だと貴様あ!？」

デイメーン「だってホントの事じゃ〜ん? 物凄い強力な魔法を仕掛けたと思いきや軽く跳ね返されるわ、

敵の弱点をより深く考えずにそのまま他人任せにしよ
うとするわ、

殆ど何の活躍もしてないじゃないの。最強だの真祖

だの、よくそんな偉そうな事言えるねえ……………

余りにも恥ずかし過ぎて笑いが止まらなかったよ!

エヴァ「き、貴様あ……………もういつペンその汚い口で言ってみろ!
!!

『サギタ・マギカ魔法の射手・セリエス連弾・グラキアリス氷の17矢』!!!!

彼女は再び氷柱を作り出し、それをデイメーンに放った。

パチイン!

しかし、彼が指を鳴らした後、謎の四角い空間が全ての氷柱を包み込み、一瞬にして消滅した。

エヴァ「なっ……………!?!」

美空「き、消えた!?!」

デイメーン「ほあ〜ら、やっぱりダメじゃん。 たったこれだけで僕を倒せないんじゃないやね〜。」

エヴァ「くっ……………!?!」

彼女は悔しさで歯を食い縛りながら、デイメーンの方へ睨み付いた。

デイメーン「しかし君もホントにガツカリさせてくれたよ!

ホントは君を僕達の仲間に加えさせようと思ったのに、
あそこまで弱ければ全く話にならないよ! でもいい

もんねえ〜

どうせ君なんかよりもこっちはよりいい物を見付けた

んだからね。

だから弱過ぎな君は用済みだよ！」

エヴァ「何だと………って、自分よりもいい物を見付けた？ それって誰の事だ!？」

デイメーン「悪いけど僕はそれを答えるほど軽い奴じゃないんでねえ、企業秘密って事にするよ。

だから僕達もこれから忙しくなるんでね、これでお暇してもらおうよ！」

これ以上君達を長話してちゃ、あのお方に怒られちゃうからね。

ほら、ドウムちゃん！ 行くよ！」

エヴァ「あっ、貴様…待て!!！」

彼女はデイメーンを止めようとすると、デイメーンは指を鳴らし、自分の周りに謎の四角い空間に包まれ、姿を消した。

ブラックドウム「…フツッ、命拾いをしたようだな。貴様とは手を合わせたい所だったが、

残念ながら今日は引き上げるとしよう。だが

これだけは言わせてもらう。

この街を後にするが、次に会う時はこのようにはならないと思うがいい!

その時まで…フツフツ…何れ再び合間

見えようぞ!!！」

彼がそう言った後、彼も姿を消し、この場から去った。

美空「………逃げちゃったね。」

エヴァ「くっ…ブラックドウムにデイメーン………次に会う時は命がないと思え!!！」

彼女は歯を食い縛りながらそう言った。

パチパチパチパチッ！！

その時、二人の少女は後ろへ振り向くと、モナ達は二人に拍手をしていた。

ジミー「HEY！ 君達マジすごかったYO！」

ナインボルト「ホントだよ！ 僕ちん達、お姉ちゃんのすごさに興奮しちゃったよ！」

エイティーンボルト「ホントすごかったですたい！」

オービュロン「敵八逃ゲテシマイマシタが、オカゲデ私達トコの街八救ワレマシタ！」

クリケツト「俺、魔法には詳しくないけど、あんなすごい魔法は初めて見たよ！」

マンティス「うむ、特に珍しい物じゃったな！」

カット「あたち達も魔法よく分かんないけど……………」

アナ「とつてもすごかったよ！」

スピッツ「いやあ、あんたらはワシらの命の恩人や！」

ドリブル「ワテらとこの街を救ってくれてありがとう！」

モナ「うん！ あたしからも言わせて！ みんなやこの街を救ってくれてホントにありがとう！」

ペニー「私からも言わせてください！ 本当にありがとうございませす！」

美空とエヴァはモナ達からの拍手と感謝の声を浴びながら、少し照れ始めた。

美空「え、あ、いや、まあ……………ど、どう致しまして…かな？」

エヴァ「…フンッ、何浮かれてんだ貴様は。見てて情けない。」

美空「何い〜？ そう言うエヴァちゃんこそ、本当は照れてんでしょ？」

エヴァ「バ、バカ言うな！ 所詮人間がどうなるうが、私には関係ないと言ったはずだ！」

……が……」

その時、彼女は頬を赤く染め、その頬を掻きながら、こう言った。
エヴァ「……たまには……いい事だよな。　こうやって感謝される
のも……気持ち悪くもない……。」
美空「……むふっ！　やっぱりツンデレだねえ、エヴァちゃん
って……。」

彼女はまた怪しい目で軽く笑いながらそう言った。

エヴァ「なっ、貴様あ！！　罅り殺されたいかあ！？」

その間にアシュリーと彼女に抱かれたレッドは、そんな二人の少女
を見守りながらこう言った。

レッド「……しつかしまあ……あの二人すっごい奴っちゃやなあ……
……。　別の世界から来ただけやのうて、

あんな見た事もない魔法が使えるなんて……アシュリー

も負けてはいられんな！」

アシュリー「……。」

彼女は何も答えなかったが、逆に彼女は二人の少女を見て、何か感
じていた。　それはライバル意識ではなく、

恐らく憧れの意識だった。　それを知ってか知らないか、レッドは
それに関して何も言わなかった。

レッド「せやけど、こんなすごい奴がこの世界にやって来たっちゅ
うのはすごい事やな！」

せめて『ワリオ』にも見せてあげたかったのう！」

アシュリー「無理……興味ないから……。」

レッド「ハッハッハッ……確かにそやな。　あいつ、金やお宝以外見
る目ないからな！　せやけど……」

これからどないする？　あの二人、別世界から来たっちゅ
う事は、住む場所もないっちゅう事やる？

さすがにホームレスにさせる訳にはアカンやろうなあ……

……。」

アシユリー「……………泊まらせる……………ホラーマンションで……………」
レッド「おっ？ ……………へへッ、俺もそう思ったところや。ほな
ら、

あの二人をおれたちのいえホラーマンションに招待しよか！」

アシユリー「……………掃除…頼んだよ……………」
レッド「へいへい……………」

ポオン！！

その後、体力を全て消化してしまった美空とエヴァは、元の学生服
に戻ってしまった。

そして二人は突然地面に座り込み、周囲にいた者全てはそれに対し
て驚いた。

モナ「えっ！？ ど、どうしたの、二人共！？」

ジミー「急に元に戻ったYO！？」

ペニー「どうかしましたか！？」

グオオオオオオオオオオオオ！！！！

突然何かが唸る音が聞こえ、全員はその音が聞こえた方向へ振り向
いた。 どうやらその音は、

美空とエヴァのお腹から聞こえたらしい。

エヴァ「……………は…腹が……………」

美空「…体力使い果たしたから……………お腹…空いた……………」

ペニー「あらら、それ困りましたね……………」

モナ「そうだ！ みんな、よかつたらモナ ピザに来ない？ そこ
でピザパーティーでもしようよ！

二人があたし達とこの街を救ってくれたお礼として！」

オービュロン「オオ、ソレは名案でスネ！」

ジミー「ナイスアイデアだYO！」

クリケット「では、早速二人を運びましょう！」

ドリブル「お二人さん、大丈夫でっか？」

美空「ア、アハハッ…面目ない…。」

エヴァ「…フンツ…実に情けない…。」

こうして、二人は多くの住民達に恵まれ、ダイヤモンドシティに居付く事にした。

…… Dr・クライゴアの研究所にて

一方、Dr・クライゴアは長時間も続いた大便から解放され、トイレから出て来た。

その間にマイクは足を組みながら椅子に座り、コーヒー（に見せ掛けたオイル）を飲みながら新聞を読んでいた。

クライゴア「ふう〜……………スッキリしたわい……………。」

マイク「オ疲れ様デアリマス。」

その後、沈黙が続いていた。

クライゴア「…ところで、私がトイレに入っとる間、何が起ったのかね？」

マイク「サア。」

第23話 Meet the Kongs

……………キノコワールド大陸・ヨッシーアイランドで亜子とまき絵が
遭難……………

ダイヤモンドシティでエヴァと美空が訪問していた同時刻……………。

辺りは暗闇に包まれていた……………。

自分に意識はある物の、身動きが取れない。ここはどこなのか、
自分は何をしているのか、

少女はただそう思っていた。

(……………ここは……………どこだろう……………？ 暗くて何も見えない……………

……………でも……………死んだ訳じゃ……………

ないよね……………？ でも何だろう……………気持ちいい……………どこか

……………滝のような音が聞こえる……………。

そう……………彼女の思うように、どこから滝の音が聞こえていた。

『……………な……………うな……………。』

その時、突然どこかから声が聞こえ、少女は唸りながらも、少しずつ
目を開き始めた。

開眼するまで視界は少々ぼけていたが、しばらく経つとその視界は
滑らかになった。そして気が付けば、

少女の前にもう一人の少女がいた。その少女は身長が高くて、黒
くて長いポニーテールをしていた。

そう、彼女の正体はネギのパートナーの一人で、運動部五人娘の一
人である水泳部所属の少女、

大河内アキラだった。

アキラ「裕奈!!」

彼女がその少女に声を掛けると、少女は完全に目を覚ました。彼女は黒いサイドテールをした少女で、その正体はアキラと同様、ネギのパートナーの一人で、運動部五人娘の一人であるバスケット部所属の少女、明石裕奈だった。彼女がアキラの声により目を覚ました後、頭を抱えながらゆっくりと起き上がった。

裕奈「……う……う……ん……あ、あれ……？アキラ……？」
アキラ「よかったあ……裕奈が無事で。今までずっと寝込んでたから、どうしたのかと思って心配してたよ。」

裕奈「え、何言ってるの？私達、さっきまで……？」

彼女はふと周囲を見回すと、彼女達は木で建てられた家の中にいた。中には木で出来た家具がたくさんあり、所々にバナナとその皮、更に樽などが置かれてあった。そんな裕奈も、

木で出来たベッドの上に寝込んでいたのだ。そんな部屋にいる事に気付いた裕奈は、混乱し始めた。

裕奈「……って、あれ？ここ、どこ？何で私達、こんな所に……？」

アキラ「ここは『ドンキー』さんの家だよ。ジャングルの中にいた私達を助けて、ここにいさせてくれたんだ。

裕奈が起きてくれなかったから、しばらくはここで休ませた方がいいって。」

裕奈「へ？……ジャングル？な、何言ってるの、アキラ？それに、誰？」

そのドンキーさんって言う……？」

アキラの謎の発言に対して混乱する裕奈だったが……。

ガチャッ！

その時、家のドアが開き、外からある二人組みが入って来た。一人は大量のバナナを肩に乗せた、

『DK』と書かれた赤いネクタイを付けたマツチヨな茶色いゴリラ。もう一人は『Nintendo』ニンテンドーと書かれた赤いキャップと赤いシヤツを着用した茶色い小猿であった。

二人……いや、正しくは二匹であろう。二匹が家に入って来た後、二人の少女は彼らの方へ振り向いた。

だが裕奈だけ、そんな二匹の姿を見た瞬間、愕然とした表情に一変した。

小猿「ただいまあゝ…つて、あつ！ サイドテールの子が起きたみたいだよ！」

ゴリラ「おお、やっと起きたのか！」

アキラ「あつ！ 二人共、お帰りなさい！ あ、裕奈！ この人（？）達が私達を……。」

彼女が愕然とした裕奈に振り向いたその瞬間……。

裕奈「……う…うわあああああああ！！！ ゴ、ゴ、ゴリラ
アアアアアアアアアアア！！！」

ゴリラと猿うううううううううう！?!? 何でこんな所に
いいいいいいいい!!?」

アキラ「ゆ、裕奈!?!」

謎のゴリラと猿との遭遇に、裕奈は背を壁に引っ付きながら恐怖に怯え、叫び出した。

そんな彼女を見たアキラもそうだったが、その同時にゴリラと猿も驚きに引いていた。

裕奈「だ、だ、誰か、誰かああああああ!!!! 助けてええええ

ディディー「初めまして、ディディーだよ！」

裕奈「え、あ、え、えっと……は、初めまして！ 明石裕奈と申します！ えっと……その……何て言うか……」

さつきはすみませんでした！ 思わず叫び出しちゃって……」

彼女は何気に正座しながら、ドンキーとディディーにお辞儀した。ドンキー「いや、気にするな！ 人間相手だとよくある事だ！」

ディディー「って言うか、そんなに人間いないけどね、この島って……」

裕奈「…え？ 島？」

アキラ「あつ、そっか。 裕奈にはまだ知らないんだっただね。 ドンキーさんの話によると、私達、

『DKアイランド』って言う島にいるみたいなんだ。 そしてここはその一部、

『コンゴジャングル』って言う所らしい。」

裕奈「え……ディーケー……コンゴ……？ な、何それ……？ ここ、麻帆良じゃないの……？」

島やジャングルの名前を聞いた事で、裕奈は再び混乱した。

アキラ「そうみたい……」

裕奈「そうみたいって……じゃあ、まさか私達、また魔法世界に来ちゃったって事！？ ほら、

確か私達…麻帆良にいたよね！？ ネギ君が教室から飛び出した後、休み時間に入ったから、

私とアキラは世界樹近くにいたんだよね！？ 色々話し合ったりとかして……！」

彼女が慌てながらそう言うと、しばらく深刻そうに考え始めた。

裕奈「……そしたら……あれは一体なんだっただろう……？ 急にあちこちから変な電気が飛び散って来て……」

その後地震が起きて……そしてあちこちが急に歪み始めた

り……ダメだ、その後何があったのか、

全く思い出せない！」

アキラ「私も同じだよ。でも、先に目が覚めた時には、私と裕奈がこの島にいた事に気付いた。

そこでドンキーさん達と会って、このログハウスまで連れてつてくれたんだ。最初は裕奈と同じように、

私もパニック状態になっていたよ。」

ドンキー「とは言っても、そうには見えなかったけどな。」

デイディー「アキラ姉ちゃん、落ち着き過ぎて分かんなかったよ！彼らがそう言った後、アキラは苦笑いをした。

アキラ「……まあ、それはそうと……とにかく、ここは魔法世界じゃないと、私は思うんだ。」

裕奈「え、何でそう思うの？」

アキラ「いや、これあくまでも私の予想だけだね。でももし私達は本当にあの魔法世界に戻って来たとしたら、

今頃の私達はこの島じゃなく、廃墟と化した学園にいるはずだよ？

何しろ魔法世界は私達の世界の鏡面世界だから。でも、

学園が見当たらない……

全く知らない島にいる……そうと思えば、ここは魔法世界でも何でもない、

全く知らない世界にいるって事だと思うよ。」

彼女がそう説明すると、それを聞いていた裕奈はただ混乱し続けていた。

アキラ「……とは言っても、裕奈には難し過ぎるか……。」

ドンキー「まあ、話はアキラから聞いたけど、どうやらお前達、この世界の住民じゃないみたいだな？

そりゃあ、この島には人間なんて一人もいないけど、

見た感じからにはどうもこの世界の人間じゃないような気がするんだよな。」

デイディー「そうだね。特に麻帆良とか日本とか、そう言うところ聞いた事もないし……」

それにこの世界が魔法で出来たなんて、聞いた事もないよ。」

裕奈「え………ちょ、ちょっと待って？ それってこの世界には魔法が常識的に存在してるって事？」

ドンキー「そうだな………俺は魔法に関して余り知らないが、実在している事ぐらいい聞いた事があるな。」

デイディー「それにアキラ姉ちゃんの話によると、魔法の存在がバシたら動物に変えられてしまっつて言うルール、

それも聞いた事ないよ！ だってみんな堂々と使ってるんだし、場合によってだけど、

そんなに悪い事じゃないよ？」

裕奈「そ、そうなんだ………」

彼女は啞然としながらそう言った。

ドンキー「でも魔法とかどうとかって、お前達も妙な事を言っただな？ そこまで言っつて事は、

お前達は魔法使いか何かなのか？」

アキラ・裕奈「え………」

ドンキーコングがそう問い掛けると、二人の少女は反応して彼の方へ振り向いた。

裕奈「……う……う……ん………ど、どうだろう？ こっつ言っつて、魔法使いって言うのかな……？」

アキラ「少なくとも私達はネギ君のパートナーだし、『ネオ・パクティオーカード』を使ってる事から、

正確的にはちょっと違うと思うけど………」

デイディー「え、二人共、魔法使いじゃないの？」

裕奈「まあ、違つて言うか…近いつて言うか……でも、魔法が使えるのは確かだよ？」

今はちよつと見せられないけど……。」

アキラ「…あつ！ そうだ！！」

何かを思い浮かんだのか、アキラは二匹の猿に近付いて問い掛け始めた。

アキラ「あの、突然聞きたい事があるんだけど……私達をここにいさせてくれた後、

私達と同じような人と会わなかった！？」

ドンキー「え、お前達と一緒に……どんな奴だ？」

アキラ「えつと……殆どは女の子なんだけど、全員私達と同じ服装をして……あ、

でも仲のいい友達がいるんだ！ 一人はピンクの短いツインテールで、

もう一人はボーイッシュなショートヘア、それともう一人はグレーのショートヘアをして……。」

裕奈「あつ、そうそう！ 他にも一人の子供も見なかった！？ その子は見た目は10歳の男の子で、

小さな眼鏡に緑のスーツ、それと手に杖を持つてたけど……見なかった！？」

ドンキー「お、おいおい！ そんないつぺんに俺に聞き込むなよ！ どつから先に言えば分からないだろ！？」

彼は少々引きながらそう言った。

デイディー「って言うか、僕達あの後バナナを探しに出掛けてたけど、その間に君達みたいな人とは会わなかったよ？」

アキラ「そ、そうか……。」

裕奈「残念……。」

デイディーの返答を耳にした二人の少女は、気を落とした。

ドンキー「でもよ……その麻帆良とか日本とか、あと魔法の事とかお前達の仲間とか、

俺達が聞いてもよく分からないからさ……

そう言う物なら『クランキー』のじいさんに聞いてみたらどうなんだ？」

裕奈「え？ クランキーのじいさん？」

ドンキー「俺のじいさんだよ！ じいさんはこう見ても頭のいい科学者でさ、

もしかしたら何か知ってるかもしれないぞ？」

デイディー「そうだね！ クランキーじいちゃんに聞いたら何か分かるかもね！」

アキラ「……そのクランキーと言う人（？）は、どこにいるの？」

ドンキー「そうだな、確かじいさんの研究所は…『ジャングルガーデン』にあつたよな？ こっから直ぐ近くだから、

歩いて行けば直ぐ着くぞ？」

デイディー「よかつたらオイラ達が案内してやるうか？ 二人だけで行ったら余計危ないからね！」

裕奈「え、いいの？ 私達のためにそんな事して…？」

デイディー「遠慮なくていいよ！ こう言う時はね、困った時はお互い様！ ねっ、ドンキー！」

ドンキー「ああ！ それに、お前達は見知らぬ人間でも、俺達に取っては大事な客だ！」

遠慮せずに色々頼めよ！」

アキラ「…じゃあ、お言葉に甘えて…。」

彼女はそう言いながら二匹にお辞儀した。

裕奈「それじゃあ、よろしくね！」

デイディー「任せときなつて！」

彼は拳で自分の張った胸を叩きながらそう言った。

……ドンキーコングとデイディーコングの案内により、コンゴジヤングルから出た裕奈とアキラ。

そして四人が辿り着いた場所が、コンゴジヤングルより範囲の広い密林、『ジャングルガーデン』である。

コンゴジヤングルからジャングルガーデンまで辿り着いてから約15分後、四人は木で建てられた小屋の前に辿り着いた。

しかもその小屋の前に、五匹の猿が遊んでいた。

一匹は長い金色のポニーテールにピンクのベレー帽とワンピースを着用した雌猿。

一匹は長い金色のツインテールに水色のキャミソールと長ズボン、緑の太いラインが付いた紫の帽子にピンクの草履を着用した、長身にスタイリッシュな雌猿。

一匹は赤鼻に白いシャツと青いオーバーオールを着用したオランウータン。

一匹は頭に小さな赤い帽子に白いシャツと青いチョッキを着用した大柄のゴリラ。

そしてもう一匹は白い水玉模様の付いた赤いバンダナに煌くサングラス、

そして白いタンクトップに青い短パンを着用したゴリラであった。

サングラスのゴリラ以外の四匹は仲良く遊んでいたが、

そのサングラスを着用していたゴリラは玄関前にある階段に座りながらウクレレを弾いていた。そんな状況の中、

ドンキーコング達は彼らに挨拶し始めた。

ドンキー「おおーい、みんなあー！」

????A「あつ！ドンキー！デイディー！二人共来たんだ！」

????B「こんにちは、ドンキー、デイディー！」

??? C「おお、ドンキーとデイディーやないか！」

??? D「やあ、二人共！」

??? E「HEY、兄弟！^{ブラザー} また会えて嬉しいよ！」

デイディー「みんな元気そうで何よりだよ！」

ドンキー「ああ！ やっぱ『コングファミリー』はこうでないとな
！」

ドンキーコングとデイディーコングが他の猿達と仲良くしていると
取り残された二人の少女はその光景を見て、
啞然としていた。

アキラ「……………な、何かすごいね……………」

裕奈「う、うん……………な、何て言うか……………個性的な奴ばっかだね
……………」

二人の少女が垂全している間に、ツインテールの雌猿は彼女達に気
付いた。

??? B「あれ？ ねえ、ドンキー。 あの子達は？」

ドンキー「ああ、あの二人は……………」

彼が二人の少女を紹介しようとした途端、他の猿達が彼女達の方へ
振り向いた。

??? C「おや！？ この人ら人間やないか!？」

??? D「ホントだ！ こんな島に人間なんて珍しいね!？」

??? E「WOW!^{ワオ}もしかして俺達の島を観光しに来たのかい!
？」

突然近付いて来た三匹に対し、二人の少女は驚きに引いていた。

??? A「……………ねえ、デイディー。 誰？ あの子達……………」

嫉妬していたのか、彼女はデイディーコングに睨み付きながら、低
い声でそう問い掛けた。

デイディー「な、何だよ!? 変な目で見ないでよ! この人達は

この島のお客様、ただの友達だよ！」

裕奈「ね、ねえ、ドンキー……この人(?)達は……？」

ドンキー「ああ、俺達コングファミリーの仲間達だよ！」

裕奈「コングファミリー？」

アキラ「ああ、そう言えばドンキーさんとデイディーさんの苗字に『コング』が付いてたね？」

???D「ハツハツハツ、さっき驚かせてごめん！ 僕は『チャンキーコング』って言うんだ！

よろしく！」

彼は頭を掻きながら、苦笑いで自己紹介した。

???C「ハウアツハア！ ワテの名前は『ランキーコング』でっせ！ よろしく頼みますわ！」

彼は妙な動きをしながら自己紹介した。

???E「YOYOYOてつてつてつ！ 俺は『ファンキーコング』って言うんだ！

この近くにある店を経営してるオーナーさ！ 趣味はサ

ーフィン！ よろしくな！」

裕奈「あ、ああ……ど、ども……」。

明るく接近して来るファンキーコングと名乗るゴリラに対し、裕奈とアキラは多少引いていた。

???A「えつと……は、初めまして。 あたし『ディクシーコング』

、デイディーのガールフレンドです！

よろしくお願いします！」

???B「私の名前は『タイニーコング』よ！ よろしくね！」

裕奈「え！？ デイディー、彼女持ってたの！？ これは知らなかつたなあ！ あんたって意外と憎い奴だねえ！」

デイディー「ちょ、か、からかわないでよ！」

彼は顔を赤くしながらそう言った。

裕奈「まつ、こつちも改めて……………私は明石裕奈！ こつちは友達
の大河内アキラだよ！」
アキラ「は、初めまして……………」
彼女は小さくお辞儀しながら挨拶した。

チャンキー「いやあ、でもホントに珍しいよね！ 人間がこの島に
来るなんて……………」

ランキー「そやなあ……………この島はバナナ以外何もあらへんからな
あ……………」

ファンキー「でも大歓迎だぜ！ こんな所に人間が訪れるって事は、
それほど俺達の島も有名だって事だよ！

なあ、もしよかったら、後でウチの店寄ってかないか
い？」

まるでナンパのような言動を取るファンキーに対し、裕奈とアキラ
は再び引いていた。

ドンキー「おいおい、変な誘い込みはよせよ！ それに、

彼女達は別にそう言う意味でこの島に来たんじゃないん
だぞー！」

タイニー「でもこれ、可愛い服だよね！ しかも同じ格好だなんて
……………私、オシャレとか結構興味あるんだけど、

これって最近早いファッションなの？」

裕奈「え、違うよ！ これは学校の制服！ 私達、麻帆良学園から
来た生徒なんだ！」

デイクシー「マホラ……………？ どこそれ？ 聞いた事ないけど……………
……………」

デイディー「今その事でここに来たんだ。詳しい話は、克蘭キ
ーのじいちゃんに聞いてからでないと……………」

ドンキー「そう言えば、肝心のじいさんは今何してるんだ？」

ファンキー「ああ、じいさんなら今家の中にいるぞ？ 何かすつげ

え物を研究してるとか……。」
ドンキー「すつげえ物？ …… ったく、あのじいさんまた何か変な物にこつてんのかあ？」
デイディー「とりあえず会いに行ってみようよ！ 話はそこからだからさ！」
彼がそう言った後、早速全員揃って小屋の扉の方まで向かって行った。

…… 『クランキーの小屋』の中に
小屋の中はたくさん機械が置かれていた。 何の機械なのかは不明だが、その機械の前で一匹のゴリラがいた。
そのゴリラは白くて長い髭に眼鏡、そして手に杖を持った、老人の姿をしていた。
そんな彼が機械から印刷された一枚を取り出し、険しい表情でそれを読んでいた。

???? 「うむう~~~~……………」

その時、彼の後ろからもう一人の猿が歩いて来た。 その猿は長い金髪に赤い口紅、
ピンクのキャミソールと短パンを着用した、長身でグラマーな雌猿であった。 そんな彼女は手に持ったコーヒーを、
老人の近くにあるテーブルに置きながら、こう言った。
???? 『クランキー』 おじい様。 コーヒーを持って参りました。

クランキー 「おお、こりゃありがたいのう、『キャンディー』。

いつも美味しいバナナ味コーヒーを作ってくれてすまんのう。」

キャンディー「いえ、おじい様が喜んでいただいただけでも私も嬉しい限りですから。それに、

亡くなった奥さんの代わりでも、せめて何かしてあげたいなと思ひまして……………」

克蘭キー「そこまで気遣わんでもいいわい。ワシはこう見ても十分一人で生きて行けるよ。じゃが、

気持ちがありがたく受け取るがな。」

キャンディー「ええ……………ところで、おじい様。さっきから何の研究をなさっているのですか？」

克蘭キー「おお、その事なんじゃが……………」

「おお〜い、じいさん！ いるかあ〜!？」

突然扉が開き、そこからドンキーコング達が入って来た。

克蘭キー「むっ？ ドンキーか!」

キャンディー「あら、ドンキーじゃない！ それにデイディーも!」

ドンキー「おお、キャンディーも来てたのか！ いやあ、奇遇だねえ〜!」

キャンディー「ええ。ちょうどおじい様のためにコーヒーを作っていたの。」

ドンキー「ホントか!? 俺キャンディーのバナナ味コーヒー大好物なんだよお！ 俺も飲んでもいいか？」

キャンディー「ええ、まだポットの中にたくさんあるから……………」

キャンディーコングにデレながら楽しく会話しているドンキーコングに対し、裕奈は腰を下ろしながら、デイディーコングに小声で話し掛けた。

裕奈「…ねえ、デイディー。あの二人、結構仲良さそうだけど、

もしかして付き合ってるの？」

デイディー「え？ あ、いや、ガールフレンドなのは確かだけど、付き合ってる所は見た事は……………」

克蘭キー「しかし、ドンキーも相変わらずじゃのう！

あれほどドアを開ける前にノックぐらいしろと言ってるのに……………」

ドンキー「別にいいだろ！？ 身内なんだからさあ。」

克蘭キー「…まあ、そうじゃろうな。事実上、諦めたけどな。

それはそうと……………そこにいる娘達は誰じゃ？」

彼は後ろにいる裕奈とアキラに向きながらそう問い掛けた。

デイディー「あっ、紹介するよ！ この人達は裕奈とアキラって言うんだ！ ちょっと訳ありでこの島に来てるんだ！」

裕奈「あ、は、初めまして、明石裕奈です。」

アキラ「大河内アキラです……………よろしく。」

二人は小さくお辞儀しながら挨拶した。

克蘭キー「ほう、もしかや客人じゃな？ 改めて紹介しようぞ。

ワシは『克蘭キーコング』。

この島の長老じゃ！ よろしく頼むぞ！」

キャンディー「私は『キャンディーコング』よ。よろしくね、裕

奈ちゃん、アキラちゃん！」

裕奈「あ、うん…よろしく…！」

笑顔で挨拶するキャンディーコングに対し、二人の少女も彼女に向けて小さくお辞儀した。

アキラ「……………しかし…すごいグラマーな人（？）だね……………特に胸辺りが……………」

裕奈「何か千鶴さんとはいい勝負になりそう……………」

二人はお互いに小声でそう話し合った。

クランキー「しかしまあ、この島に人間が来るのは珍しいが……その同時に久しぶりに会うのう……。

その分あの頃を思い出すわい……。ワシがまだ若きゴリラじゃった時、

『ポリー』を攫ってマリオから工事現場の頂上まで逃げたり……

逆にマリオに囚われて息子の『ドンキーコングJ』ジュニアに助けられたり……

植物園を荒らしてる最中『スタンリー』と戦ったり……

……はあ……今思えば懐かしいのう……。

あの頃のワシは悪^{ワル}じゃったが、青春^{ワル}じゃったのう……

……今じゃあの三人の影すら見えなくなつたが、

今どうしてるのかのう……？

ドンキー「じいさん、そのポリーとスタンリーとかはともかく、マリオならいつも元気してるぞ？」

アキラ「……ねえ、何の話をしてるの？」

デイディー「あ、うん……じいちゃんがまだ初代ドンキーコングだつた頃を話してるんだ。」

裕奈「初代？　じゃあ、今のドンキーは？」

デイディー「クランキーじいちゃんの孫で、その二代目なんだよ！」

裕奈「えっ！？　ドンキー、あのおじいさんの孫なの！？」

デイディー「うん！　驚くぐらいでしょ？」

クランキー「……ところで、その娘らは一体何しにここに来たんじゃ？　確か訳ありでこの島に来たとか、

さっき言つてたようじゃが……。

ドンキー「ああ、そうなんだ。実は……。」

全員木で出来た椅子に座つた後、ドンキーコングとデイディーコン

グは、裕奈とアキラに関する全ての出来事を、
コングファミリー全員に説明した。

克蘭キー「な、何じゃと!?! この二人、別の世界から来た人間
なのかあ!?!」

ドンキー「ああ、そう言う事らしいんだが……………」。

デイクシー「嘘……………二人共、ホントに別の世界から来たの!?!」

タイニー「すごお〜い! 道理で見た事もない服を着てると思った
……………」

チャンキー「でも、有り得るのかい!?! 別世界から来た人間がこ
の世界になんて……………!?!」

ランキー「そもそも別世界が存在してたなんて、聞いた事もないわ
あ〜!」

ファンキー「確かにそうだなあ……………でもそれってすっげえ話じゃ
んかよ!」

タイニー「でも、他にも貴女達が魔法使いだなんて、見た目じゃ分
かんないけど、すごいじゃない!」

デイクシー「そうだねえ! あたし、魔法使いとか見た事もないけ
ど、是非人目で見てみたいと思うわ!

ねえ、早速だけど見せてくれないかな?」

裕奈「えっ!?! あ、いや、今の状況ではちよつと……………!」
彼女は手を振りながら、焦りでそう答えた。

ドンキー「それでさあ、じいさんに聞きたいんだけどよ……………この
二人がこの世界に来てしまったのは、

その変な現象のせいだっさっき言っただろ? その現
象、何か知らないか?」

克蘭キー「何とは言つてもものう……………ワシは確かに知識はあるが、
そのような物など詳しく知らんわい!」

ドンキー「何だよ、知ってると思つたから来たつのに、知らない

のかよ!？」

デイディー「ドンキー、そうムキになるなよ！」

彼は反発するドンキーを落ち着かせながらそう言った。

克蘭キー「期待外れで悪かったの! じゃが……………逆に心当たりならあるかもなあ……………」

彼は自分の顎を撫でながらそう言った。

ドンキー・デイディー・アキラ・裕奈「えっ!？」

克蘭キー「コングの発言に対し、四人は耳を疑った。

ドンキー「こ、心当たりがあるって!？ 何だよそれ!？」

デイディー「まさか、何か知ってるの!？」

克蘭キー「そこなんじゃが……………キャンディーや、さっきワシに何の研究をしてくれるのかと聞いたじゃろ？」

キャンディー「あ、はい。 確かに聞きしましたが……………」

彼女がそう応えた後、克蘭キー「コングはテーブルに置かれた一枚の印刷された紙を取り出し、こう言い出した。

克蘭キー「ワシにもよく分かんないじゃが……………実はここ最近、
奇妙な異常現象が世界各地に発生しとるみたいなんじゃ。」

ドンキー「奇妙な……………? な、何だよそれ？」

克蘭キー「うむ。 それは景色が微かに歪むと言う、謎の現象じゃよ。」

アキラ・裕奈「歪み…!？」

デイディー「それって、二人が経験した奴と同じ奴じゃないの!？」
克蘭キー「それはまだ分からん。 じゃが、ここDKアイランドだけじゃなく、キノコワールド大陸全体や、

あのモビウス大陸の方にも発生しとるらしいんじゃ。

まあ、少しだけじゃけどな。」

ファンキー「HEY、じいさん! それに被害者とか出たのかよ!

「？」

克蘭キー「そこもまだ分からんよ。ただコンピュータからキャッチした信号によると、

その現象から壮大なマイナスエネルギーが含まれとるらしいんじゃ。

それは如何なる物なのかと言うと、恐らく危険な物かもしれないな。」

タイニー「でも、それって自然現象の一部なんじゃ…？」

克蘭キー「とんでもない！自然現象の物だしたら、このような結果が出て来たりはせんよ！」

何せこの記録によれば、普通の台風や津波、

または大地震以上のマイナスエネルギーが反応したんじゃからな！」

裕奈「じゃあ、もしかして、魔法の仕業とか……ないよね？」

克蘭キー「魔法？それも有り得んな。確かにこの機械には魔法エネルギーをキャッチする事が出来るが、

資料にはそのような反応はなかったとの事じゃ。じ

やから、魔法の仕業でもないよ。」

裕奈「そ、そつか……。」

アキラ「じゃあ…自然でも魔法でもなければ…その歪みは一体何なんだろう…？」

彼女はそう言いながら、考え込み始めた。

克蘭キー「まあ、何じゃ……役に立てなくてすまんかったのう。

この現象もつい最近発見されたばかりな物でな、

もっと詳しい研究をせねばならんのじゃ。何の参考

にならなくて……。」

アキラ「いえ、気にしないで！少しだけでも参考になったと思うから。」

チャンキー「でも克蘭キーおじいさん、これからどうするつもり
なんですか？」

克蘭キー「まだまだこの現象に関する研究が必要じゃ。何か分
かった次第、

学会にでも送り込んでみようと思つとる。寧ろこの
現象に関して黙つとる奴はおらんじやろう。

ワシ以外にも研究しとる奴もきつとおるはずじゃ。

それまでには……………」。

「大変だあああああああ！！！！」

その時、窓の方から緑色のオウムが飛んで来て、慌てながらコング
ファミリーの所まで辿り着いた。

裕奈「えっ！？ な、何あれ！？」

アキラ「オウム…！？」

????「ガアガアアツ！！ た、大変だよドンキー！！ 一大事だ
よお！！」

ドンキー「お前、『スコークス』じゃないか！？ 急にどうしたん
だよ！？」

スコークス「そ、それが……………それが……………！！」

彼は激しく呼吸し、少しずつ落ち着きを取り戻した後、息を吸い込
み、大声でこう告げた。

スコークス「『クレムリン軍団』が再び島を襲つて来たあああああ
ああ！！！！」

全員「ク、クレムリン軍団があ！？」

ドンキー達は驚愕しながら耳を疑い、思わず大声でそう言い返した
が、逆に裕奈とアキラは元の表情に戻しながら、
次のようにこう言った。

アキラ・裕奈「……って、誰？」

第24話 出撃！クレムリン軍団のハイドアウト

……オウムのスコークスの案内により、ジャングルガーデンからコンゴジャングルまで戻った裕奈とアキラ、そしてコングファミリー。コンゴジャングルの一部である『バナナジャングル』にあるドンキーコングの家に戻った裕奈達は、その下にある洞窟に入った。そこはドンキーコングとデイディーコングが大好物のバナナを保管するために使われた、言わばバナナ倉庫のような洞窟だったが、その洞窟の中に入ってみると……何もなかった。その風景はいかにも、何も無い空洞であった。その風景を見た裕奈とアキラ以外のコングファミリーは、愕然としていた。

ドンキー「な、ない！！俺のバナナが全部なくなってる！？」
裕奈「え…な、何なのここ…？バナナって…？」
デイディー「ここはオイラ達がジャングル内で集めたバナナを保管するために使われてる倉庫なんだよ！

いつでもバナナが食べれるように予め用意した洞窟なんだけど……。」

デイクシー「でも、スコークス！どうしてこれがクレムリン軍団の仕業だって分かるの？」

スコークス「入り口前にこんな置手紙が張ってあったんだよ！」
彼はそう言いながら、足でその一枚の紙切れを掴みながら、全員に見せていた。それを見たドンキーコングは、スコークスから手紙を奪い取り、読み始めた。

『ドンキーコングとデイディーコングと言う名の間抜けな猿共へ、

貴様らの大切なバナナちゃん共はこのクレムリン軍団が全て頂い

た！ 取り返したければ、

南海の方にある俺達のアジトへ来るんだな！ もちろん仲間を連れて来ても構わん。

その時は貴様らを全員叩き潰してくれるわ！ 今度こそ貴様との決着をつけてやる！！ 尻尾巻いて逃げるなよ？

貴様らが来るのを、楽しみにして待つてるからな！ ガアッハッハッハッハッハッハッ！！！！

クレムリン軍団の王、

キング クルール
King K・Rool

チャンキー「ホントだ、『キングクルール』からの手紙だ！」

アキラ「…あの、誰？ そのキングクルールって…？ それにクレムリン軍団と言うのは……？」

克蘭キー「うむ…君達には知らんか。クレムリン軍団とは、ワシらコングファミリーと敵対する悪のワニ軍団の事じゃよ。」

そしてキングクルールは、そいつらを率いる頭領ヘッドなんじゃよ。」

裕奈・アキラ「ワニ……？」

二人は思わず眉毛を引きつりながら耳を疑った。

ドンキー「…あ、あいつらあ~~~~~！！！！ よくも俺の大好物のバナナをおおおおおお！！！！」

激怒するドンキーコングは、その凄まじい腕力で手紙を粉々に引き裂いた。

ドンキー「絶対に許さないぞおおお！！！！」

キャンディー「えっ…ど、どうするつもりなの、ドンキー!?」

ドンキー「決まってるだろ!? 盗まれたバナナを全部取り返しに

行くんだよー！

そして二度とこんな真似が出来ないように叩き潰しに行くんだー！」

チャンキー「ちょ、ちよつと待ってよドンキー！ 気持ちは分かるけど、その前に落ち着きなよ！」

タイニー「そうよ！ いきなり行ってくつて言っても、危な過ぎるわよ！？」

もしこれがドンキーを引き寄せるための罠だったらどうするの！？」

ランキー「そや！ それに、海の間こつちゅう事は、船を使わなアカンやろ！？」

それなしでどないしたら行けるつちゅうねん！？」

ドンキー「そ、そう言えば……………そうだな……………」

チャンキーコング、タイニーコング、ランキーコングが彼にそう言うのと、ドンキーコングは落ち着きを取り戻した。

克蘭キー「うむう……………しかし、いきなりこのような事が起るとは……………さすがに奴らしい事じゃが、

これも危険な挑戦状じゃな。 タイニーの言う通り、

これは罠かもしれんな。 もしそうとしたら、

こちらもそれなりの準備がしなければならんな。」

ドンキー「そうだなあ……………でもそのためにはどうやって海の間こつちへ行けばいいんだ？

さすがに泳ぐだけじゃ疲れて辿り着けないだろうし……………

……………」

デイディー「確かに船もないんじゃないやねえ……………って、そうだ！ 船だよ！ 船の代わりに筏を作って行けばいいんだよ！」

彼がそれを思い付き、指を鳴らしながらそう言った。

ドンキー「おお！ その手があったか！ なら早速作って……………！」

克蘭キー「ちよつと待たんかい！ 確かにそれもいいアイディア

かもしれんが、筏を作るんじゃ余計時間が掛かるぞ!?

今直ぐ作って行くと行って、筏を作るのに一日中は掛かるぞい! それでは何もかも間に合わんぞ!」

ドンキー「じゃあ、どうすりゃいいって言うんだよ!? 筏作りが時間が掛かるって言うんなら、

どこで船を手に入ればいいんだよ!？」

克蘭キー「そんなのいるじゃろ、最も頼れる貸家がな。」

彼は杖でサングラスをかけたゴリラに指しながらそう言った。

ファンキー「……………え? 俺の事?」

彼は自分を指しながらそう言った。

デイディー「ああっ! そう言えば、ファンキーの店って色んなのがあるんだったよね! 遠い所まで飛べる飛行機とか、

木で出来たハイテクな武器とか!」

ドンキー「そうだったな! じゃあ、船とかあるか!? 筏でも何でもさ…!」

ファンキー「ああ……………そう言えばこの前暇潰しに筏を作ったんだよなあ? しかもかなりすっげえ奴を……………」

ドンキー「ホントか!? って、暇潰しにって何だよ……………」

ファンキー「まあ、いいじゃんかよ! ちょうどある事ぐらい、よかったと思えよ!」

デイディー「あ、でも、もしかして、お金とか払わなきゃダメなのかな? どうせ商売用に使おうとしてたんじゃ……………」

ファンキー「いいや、金なんて気にするな! 元はと言えば暇潰しに作った筏よ! 好きなだけ使えばいいさ!」

ドンキー「そうか。それなら安心するが……………」

デイクシー「ねえ、ドンキー、デイディー! それだったら、あたしも連れてってよ! あたしもデイディーと一緒に戦う!」

タイニー「それなら私も一緒に行かせて! 私も久しぶりにドンキ

「達と冒険に出たいし……！」
ランキー「ほんならワテも一緒に行きまっせ！　ワテの伸び縮み攻撃を使えば、クレムリンの雑魚を倒すなんぞ一石二鳥や！」
チャンキー「僕も一緒に行くよ！　ドンキー達と久しぶりに冒険したいし、僕の力も必要だと思うからね！」
ドンキー・デイディー「みんな………！」
頼れる仲間が増えたと言う事で、ドンキー・コングとデイディー・コングは感動していた。

「あ、あのう………。」

突然彼らの背後から声が聞こえ、コングファミリーは後ろの方へ振り向くと、

そこには取り残されたかのような立ち方をする裕奈とアキラがいた。
裕奈「さつきから色々話し合ってたみたいだけど………。」
アキラ「よかつたら、私達も手伝ってもいいかな？」

ドンキー「えっ！？　て、手伝うって、いきなり何言ってるんだよ！？」

デイディー「そうだよ！　この戦い、君達が思うよりも危険かもしれないよ！？　これから行く場所は、

雑魚でも強い奴らばかり出て来るかもしれないし、危険な罠とかもいっぱいあるんだよ！？」

それに……君達は別世界って言う特別な世界から来た客人なんだから、

そんな大切な人を危険な目に会わせる訳には行かないよ！」

裕奈「大丈夫だって！　確かに私達にはこのクレムリン軍団とかキングクルールとかどう言う奴なのか知らないけど、

こっちには魔法があるんだよ！　魔法させあれば、強敵倒しなんて楽な物よ！」

アキラ「それに、困ってる人を放って置けないしね。だから私達もみんなと協力するよ。」

デイディー「…どうする、ドンキー？」

ドンキー「うう〜ん……………」

彼は腕を組みながら深く考え込み始めるが……………。

克蘭キー「連れて行きなさい、ドンキー。」

ドンキー「えっ！？ じいさん！？ 何だよ、いきなり…！？」

克蘭キー「ワシは魔法の存在には知つとるが、詳しい事はよく知らん。じゃが、彼女達が魔法使いであるのなら、

何かの役に立つじやる。所詮クレムリン軍団も、魔

法の事も余り知らん！

戦略としてはちょうどいいかもしれんぞ！」

チャンキー「そっかあ…確かにあいつら、肉弾戦や機械物以外何も知らないんだった！ だとしたら、

魔法の事も何も知らないはず！」

タイニー「それなら、こつちが楽勝するって事だね！」

ドンキー「そうか…その手もあつたか……………」

彼はそう思うと、二人の少女に振り向いてこう言った。

ドンキー「…それじゃあ、一つよろしく頼むな！」

アキラ「うん！」

裕奈「任せなさいよ！」

彼女は自分の張った胸を叩きながらそう言った。

ファンキー「^{オケイ}OK！ それじゃあ、早速店に戻って色々出発の準備

とかすつかあ！ ^{ヘイ}HEY、^{ブラザー}兄弟！」

一緒に来いよ！ 色々手伝ってほしい事があるからさ

！」

ドンキー「ああ、分かった。」

デイディー「オイラも一緒に行くよ！」

デイクシー「あたしも一緒に手伝う！」

タイニー「私も！ 武器とか揃わなきゃね！」

ランキー「ホホウ！ ならワテも手伝うでえ！」

チャンキー「僕も手伝うよ！」

アキラ「じゃあ、私達も……………」

ドンキー「ああ、いや！ お前達はここで待っていてくれ！ 準備し

終わったら迎えに行くからさ！」

裕奈「え、大丈夫なの？ 一緒に手伝わなくても……………」

デイディー「力仕事になるから大丈夫だよ！ 終わったら迎えに行

くから、その間までここで待っていてね！」

裕奈「……………しょうがない。 そうするか！」

彼女は両手を腰に当てながら、仕方なくもそう答えた。

ドンキー「ほんじゃ、ちよっくら行って来る！ 待っていてなあ！」

彼がそう言い残した後、コングファミリィは洞窟から出て、そのま

まジャングルの中へ歩き去った。 そして二人の少女は、

そのまま洞窟の仲に残されたまま、立ち止まっていた。

アキラ「行っちゃったね……………」

裕奈「ホントにねえ…………… ああ、あ、せっかく手伝おうと思った

のに、結局お留守番ってどう言う事よ？」

彼女は両手を頭の後ろに組みながら、上の空でそう言った。

アキラ「しょうがないよ。 力仕事なら私達じゃ無理だし、足手纏

いになるよ。」

裕奈「そうだと言っても、アキラは私より腕力の強い方でしょ？」

私に空手チョップ（サイレントモード）を食らわせたぐら

いだから、それぐらいの仕事は出来るでしょ？」

アキラ「…と言うより、その力があるとか言わないでくれる……………」

？」

彼女は頬を赤くし、眉間に皺を寄せながらそう言った。

「……………もし……………?」

裕奈「ん?」

突然何かに気付いたのか、彼女は後ろへ振り向いた。

アキラ「どうしたの、裕奈?」

裕奈「……………今、誰かの聞こえなかった?」

アキラ「声?」

彼女も裕奈と共に洞窟の周囲を見回したが、何も起こらなかった。

アキラ「……………何も聞こえなかったけど?」

裕奈「おかしいなあ…? さっきどこから声が聞こえたと思ったんだけど……………もしかしたら、

誰かがこの洞窟の中にいるんじゃない?」

アキラ「それはないよ。ここには私達以外誰もいないし…ドンキーさん達もさつき行っちゃったし……………」

彼女の言う通り、この洞窟内にいるのはアキラと裕奈の二人だけ。

ドンキー・コング含めたコングファミリーは既にこの場から去った上、スコークスも彼らと同行してしまっている。

そうであれば、二人の少女以外誰もいないはずであった。

裕奈「…変だな……………気のせいだったのかな…? でも確かにどこから……………」

「……………もし……………?」

裕奈・アキラ「!?!?」

再びどこから声が聞こえ、それを耳にした二人は愕然とした。

アキラ「な、何、今の…!?!?」

裕奈「ほらっ!!! やっぱり声が聞こえたよ!!!」

アキラ「た、確かに……………けど、今のは誰の……………!?!?」

裕奈「も、もしかして……………ゆ…ゆ……………!?!?」

アキラ「コング……と言う事は…貴女はドンキーさんの……！？」
リンクリー「はい……でも、正確は彼が小学生だった頃の先生でもありますか…。」
アキラ「せ、先生……なんだ…。」

裕奈「で、でも、そんなクランキーのおじいさんの奥さんで、ドンキーの先生である人（？）が、

何でこんな洞窟に……って、もしかして！？　ここって曰く付きだとか…！？」

リンクリー「いえ、心配しないでください。　ここはあくまでもただの倉庫。　私とは関係ありません。」

アキラ「じゃあ、何しにここへ……？」

リンクリー「……貴女達に、伝えたい事があるからです。」
裕奈・アキラ「私達に？」

リンクリー「話は全て聞きました。　貴女達はこの世界の人間ではなく、別の世界から来た人間であると……。」

そしてその同時に、貴女達は魔法使いである事も……

……。」

裕奈「き、聞いてたんだ……。」

彼女は冷や汗を垂らしながらそう言った。

リンクリー「そして……今回の出来事も、全て見ました。　キングクルール……またしてもあんな悪い事を……。」

そしてドンキーとディディーも、彼を懲らしめるために向かおうとしている……そして、

貴女達も彼の力になると……。　そこで折り入って、お願いがあるのです。」

アキラ「お願い……って、何？」

彼女がそう問い掛けると、リンクリーコングは手を組みながら、次

のようにいつ言った。

リンクリー「……どうか、ドンキーとディディー……そしてキングクルールを助けてやってください……。」「
アキラ「……え……？ 助けるって……そのキングクルールとか言う奴も……？」

裕奈「ちょ、ちょっと待ってよ！ 助けてやるって……ドンキーやディディーならともかく、

何で悪者である奴までも助けなきゃならないの！？」

リンクリー「それは…… 今回の事件に、とてつもない物を感じるんです。 それは恐らく、

キングクルールでさえも予想しなかった、恐ろしい何か……。」「

アキラ「恐ろしい何かって、それってどう言う意味で……？」

リンクリー「詳しい事はまだ分かりません。 けど……今回の事件は、全てキングクルールの仕業とは限りません。

寧ろ、彼自身も被害者となるでしょう。 私も一緒に助けに行きたいのですが……

この通り私は寿命で亡くなり、今では浮遊するただの魂…… 見守る以外何も出来ません。

だからお願いします。 ドンキーとディディー、そしてキングクルールを助けてやってください。」「

彼女がそう頼み込むと、裕奈とアキラはお互いに向き合い、しばらく考えた。

裕奈「……わ、分かった。 とりあえず、助けてやるとするよ。」「
アキラ「でも、何でそんなにそのキングクルールと言う奴を思うんだ？ あいつ、ドンキーさんによると、

コングファミリーの敵のはずだろ？」

リンクリー「確かにそう……でも、彼も実は小学生時代、私の生

徒でもあつたのですよ。」

裕奈「ええええ！？　じゃ、じゃあ…もしかして、そいつとドンキ
ーって、同級生だったって事！？」

彼女は思わず大声で驚くが、顔に出さないアキラも密かに驚いてい
た。

リンクリー「ええ。　仲が悪かった所も、その頃からなんですよ。」
アキラ「なるほど…その時から腐れ縁だったって事か……………」

リンクリー「確かにキングクルールは悪さを耐えない困った子です。
けど…それでも彼は、

ドンキーと同じく、私の大切な教え子です。　ドンキ
ーが彼を懲らしめるなら構いませんが、

もし逆に二人の身に何かあれば……………そう心配する事
しか出来ないのです。　ですから、

お願いです。　どうか二人を……………」

裕奈「分かった。　リンクリーさんがそこまで言うんなら、ついで
にそのキングクルールも助けてみるよ！

でも、もしもの場合は、コテンパンにしちゃうけどね。」
アキラ「ドンキーさんとデイディー君も、私達が何とかするよ。

だから心配しないで。」

リンクリー「ありがとうございます。　おかげで安心出来ます……………
……………」

彼女がそう言うと、体が徐々に透け始めて来た。

裕奈「！？　リンクリーさん！　体が……………！！」

リンクリー「ご安心ください。　私はただ姿を消すだけです。　私
はこれから、ドンキー達と、

貴女達を、見守り続けます。　それまでに……………ご武
運をお祈り致します。

では……………お気を付けて……………」

彼女は笑顔を浮かばせながらそう言い残すと、そのまま姿を消した。その瞬間を最後まで目にした二人の少女は、ただ啞然としていた。

アキラ「……………消えちゃったね……………」
裕奈「……………だね……………」

「おお〜い、二人共お〜！」

その時、洞窟の入り口から声が聞こえ、二人の少女はその方向へ振り向いた。入り口から聞こえたその声の主は、

デイディー「コングの物だった。」

裕奈「あつ、デイディー！」

デイディー「二人共、まだ洞窟の中にいたの？ 外で待ってればよかったのに……………」

アキラ「ごめんごめん。 ちょっとこっちの方が涼しかったから……………」

彼女は頭を掻きながら、デイディーに誤魔化した。 どうやら先ほ

どリンクリーコングと会った事を、

彼には言えなかったようだ。

デイディー「ふう〜ん……………まつ、いつか！ それより、早くビー

チの方へ来てよ！ 筏の準備、

もう出来てるんだから！」

裕奈・アキラ「ホントに!？」

…………… 広くて青い海と空。 眩しい太陽に照らされている砂浜。
そして静かに聞こえる波の音。

コンゴジャングルを抜けて、デイディーコングの案内により、裕奈とアキラはビーチに辿り着いた。

そこには大きな筏が海の前に置かれていて、その周囲にコングファミリーが集結していた。

デイディー「ドンキー！ 連れて来たよお！」

ドンキー「おお、よくやったデイディー！」

裕奈「うわあ！！ これがファンキーさんが作った筏なの！？」

アキラ「すごく大きい……………」

二人の少女はファンキーが作ったと言う筏を見て、感心していた。

ファンキー「HEY、すごいだろお！ これの筏は結構頑丈に作って置いたからさ、例え何人乗っても、

どんな重い物を乗せても沈まないようになってるんだ

！ これさえあれば、どんな嵐にも負けないほど、

崩れたりはいないぜ！」

裕奈「でもよく早く用意出来たね…？」

ドンキー「なあに！ 俺とチャンキーの力を合わせれば、こんな物を運ぶなんてちょちょいのちょいだよ！」

彼は自慢げに自分の腕を叩きながらそう言った。

アキラ「…でも……………どうやって動かせるんだ？ その筏、どう見てもオールとか帆とかモーターとかないけど……………」

確かに彼女の言う通り、筏は大きいけど、そこには漕ぐためのオールや、

動かせるための帆やモーターが設置されていなかった。

ファンキー「ああ、それなら問題ないぜ？ そろそろ来る所だからさ……………」

裕奈「え…何が…？」

その時、海の方から何かが飛び上がり、そのまま海中に戻っていた。デイクシー「あっ！ みんな！！ 来たわよ！！」

ドンキー「おお、ホントだ！ やっと来たか！」

裕奈「え、何が来たの！？」

全員海の方へ振り向くと、海の方から三匹の生物が泳いで来た。

一匹は可愛らしい青いカジキで、

一匹も同じく可愛らしいアザラシ、そしてもう一匹は他の二匹とは違って少々醜い赤い提灯アンコウであった。

カジキ「キュキュウ〜〜〜」

アザラシ「アウアウツ！！」

アンコウ「グルオオオツ！！」

裕奈「うわっ、何あれ！？ カジキにアザラシに提灯アンコウ……！！？」

ドンキー「紹介するよ。こいつらは『アニマルフレンド』って言う、俺達の仲間なんだ。

カジキの方は『エンガード』で、アザラシの方は『クラッパ』、

そしてアンコウの方は『グリマー』って言うんだ！」

エンガード「キュウ、キュキュウ〜〜〜！」

クラッパ「アウワウウ〜〜〜！」

グリマー「グルアオウ！！」

裕奈「へ、へえ……この子達、友達なんだ……。」「特にカジキの方が……。」

アキラ「でも何か可愛い……特にカジキの方が……。」「裕奈は苦笑いをしながらそう言うが、逆にアキラは頬を赤く染めながら見惚れていた。

ファンキー「OK！ ^{オーケー} デイディーとデイクシー！ そいつらを紐で縛ってくれ！」

デイディー・デイクシー「ラジャー！」

二人は敬礼しながら、手に持った紐でエンガード達を縛り始めた。

裕奈「え、その子達に何するの？」

ファンキー「この筏にはオールは愚か、帆やモーターすらない。

その代わりこいつらを使つて筏を引っ張らせてもらうんだよ！」

アキラ「えっ！？　そ、そんな事したら可哀想じゃ…！？」

ファンキー「大丈夫だつて！　こいつらはこつ見ても力が強いんだよ！　だからこつ言うのはこいつらに任せな！」

ディディー「あ、そつだ。　そつ言えば他のみんなはどつしたの？」
ディクシー「今スコークスが呼びに言つたはずなんだけど……。」

「おお~~~~い、みんなあ~~~~！！！」

その時、ジャングルの方から声が聞こえ、全員はジャングルの方へ振り向いた。

するとジャングルの中からスコークスから始め、数多くの動物達が一斉に駆け付けて来た。

一匹は大きな一本角を持ったサイ、一匹は白いスニーカーを履いたダチヨウ、

一匹は緑と茶色の軍曹カラーをした大きなカエル、一匹はバネのよつな体勢をした緑色の蛇、

一匹は短い鼻を持った小さな象、一匹はスコークスと同じ姿をした紫色のオウム、

一匹は赤いスニーカーを履いたマダラ模様の大きな蜘蛛、そしてもう一匹は黄色と青の羽毛を持った小さな小鳥であった。

その勢いで現れた動物達に対し、裕奈とアキラは思わず驚いていた。スコークス「連れて来たよ~~~~！！！」

裕奈「うわあああああ！！　何あれえ！？　動物うつつうつつ！？」

彼女は再びアキラに抱き付きながらそつ叫び出した。

ドンキー「落ち着けよ、二人共！ こいつらもアニマルフレンドだよ！」

アキラ「えっ、この子達も…!?!」

ドンキー「ああ。サイの方は『ランビ』で、ダチヨウの方は『エクスプレッソ』、カエルは『ウインキー』で、

スコークスとよく似たあの紫のオウムは『コークス』、

蛇は『ラトリー』で、蜘蛛は『スクイッター』、

象は『エリー』で、そして小鳥の方は『パリー』って言うんだ。」

ランビ「ブモオオオオオオ!!!」

エクスプレッソ「クワアアアア!!!」

ウインキー「ゲロゲロオツ!!!」

ラトリー「シヤアア!!!」

スクイッター「ブシヤアア!!!」

エリー「パオオ~~~~!!!」

パリー「ピピピッ」

コークス「ええっと、初めまして！ コークスって言う名前なんだ

！ よろしくな！」

裕奈「あ、ああ…初めまして…。」

彼女は顔を引きつりながら、小さくお辞儀して挨拶した。

スコークス「ところでドンキー、これ全員だよ！」

ドンキー「ああ、よくやったスコークス！」

アキラ「え、もしかしてこの子達も連れて行くのか？」

ドンキー「ああ。こいつらの戦力も必要だからな。もちろんこ

いつらでもあの筏に乗る事も出来るぞ！」

克蘭キー「ところでドンキーや。筏の準備も出来た上、アニメ

ルフレンドも全員集合させたが、

お前達こそ準備は出来たのかの？」

ドンキー「もちろんさ！ 愛用の『ココナッツ・キャノン』はちゃんと持つてるよ！」

彼は木で出来たライフルを取り出しながらそう言った。

デイディー「オイラも、『ピーナッツ・ポップガン』と『バレルジエット』を用意したよ！」

デイクシー「あたしもファンキーに頼んだお揃いの『ピーナッツ・ポップガン』も持つてるわ！」

二人は木で出来た二丁拳銃を取り出し、デイディーは背中に背負っている樽型のロケットを見せながらそう言った。

タイニー「私は『フェザー・ボウガン』を持って行くわ！」

彼女は赤い羽根の付いたボウガンを取り出しながらそう言った。

ランキー「ワテは『グレイプ・シューター』を持って行くで！」

彼は吹き矢を取り出しながらそう言った。

チャンキー「僕は『パイナップル・ランチャー』を持って行くよ！」

彼は木で出来た大砲を取り出しながらそう言った。

裕奈「えっ！？ ちょ、ちょっと待って！ それ、銃なの！？ 木で出来てるのに!？」

ドンキー「ああ、そうだよ？ ファンキー特製の武器なんだ！ 見た目は木で出来てるけど、強力な弾を撃つ事出来るんだ！

俺のはココナッツで、デイディーとデイクシーは落花生、タイニーは鳥の羽で、ランキーはブドウ、

そしてチャンキーはパイナップルを飛ばせるんだ。」

裕奈「ええ！？ ホントに!？ それってすごいじゃん!？ 木で出来てるのに銃弾が飛べるなんて！」

こんなの初めて見るよ!!！」

彼女は興味津々にドンキーコングの『ココナッツ・キャノン』を弄りながらそう言った。

ドンキー「え、な、何だよお前………こう言うのに興味あるのか？」

裕奈「あ、いや………私、実はミリタリー系が趣味で、銃器とか戦車とか興味あるんだ。でもこれホントにすごいなあ！」

いくら木でもよく出来てるよお！ 龍宮さんにも是非見せて
みたいなあ〜！」

ドンキー「……………お前意外と変わってるな……………」
アキラ「みんなからよく言われてるよ。」
彼女は苦笑いをしながらそう答えた。

克蘭キー「まあ、とりあえず、全員準備万端のようじゃな！ そ
れなら、もう海を渡り、

クレムリン軍団のアジトへ向かってもいいじゃろ。」
裕奈「あれ？ おじいちゃんも一緒に行かないの？」

克蘭キー「当たり前じゃ！ ワシはもう冒険から手を引いた身分
じゃ！ 一緒に行つてしもうたら、

腰を痛めるかもしれんわい！ なので、ワシの代わりに
行つてくれい！」

キャンディー「私も遠慮するわ。 余り冒険とか手荒な真似をする
ような事は苦手だから……………」

ファンキー「俺も無理だ。 こっちには店があるんでね、放つて置
く訳には行かないんだ。 悪いが、

一緒に行く事は出来ないな！ その代わりに、俺の分ま
でとことん派手にやってくれや！」

彼は親指を立たせ、サングラスと白い歯を光らせながらそう言った。

克蘭キー「それはそうと、良いか皆の者よ！ これからお前達は
クレムリン軍団を懲らしめるために、

奴らのアジトへ向かう事になる！ じゃがアジトに何
があるか分からんからな！

そう言う時は要注意するんじゃぞ！」

ドンキー「おう！ 任せとけ！」

彼は自分の拳を強く握り締めながら、頷いてそう答えた。

克蘭キー「それと裕奈とアキラ……………この戦いは君達にとってか

なり辛い物になるかもしれん。

「気を付けて行くんじゃぞ。」

裕奈「大丈夫、任せてちょうだい！ 必ずみんなと一緒に無事に戻って来るから！」

克蘭キー「そうか……頼もしいのう。さすがに、人間も捨てた物じゃないのう。」

彼は笑みを浮かばせながらそう言った。

アキラ「……いいのか、裕奈？ さつきリンクリーおばあさんと会った事を克蘭キーおじいさんに伝えなくても……。」

裕奈「別にいいんじゃないの？ もし逆に伝えたらみんな驚きでびっくり返っちゃうだろうし……。」

二人はコングファミリーに聞こえないよう、お互い小声で話し合った。

ドンキー「そんじゃ、じいさん、キャンディー、ファンキー、行ってくるな！」

克蘭キー「気を付けて行くんじゃぞ！」

キャンディー「無事に戻って来てね、ドンキー！」

ファンキー「みんなも無事でいるよおっ！！！」

ドンキー「ああ！ エンガード、クラッパ、グリマー、行くぞ！！！」

エンガード「キュキュウ！！！」

クラッパ「アウウ！！！」

グリマー「グルアオウ！！！」

ドンキーコングがそう指示すると、三匹は思いっきり紐を引っ張り、筏を動かせた。そして筏に乗ったコングファミリー、

アニマルフレンド、そして裕奈とアキラは、砂浜に残された克蘭キーコング達に向けて手を振りながら、

海を渡って行った。

……DKアイランドを後にしてからしばらく経ち、
ドンキーコング達はエンガード達によって引つ張られている筏に乗り続けながら、海を渡っていた。
その間に裕奈は非常に退屈そうな表情をし、だらけながら座り込んでいた。

裕奈「ああ……退屈……ねえ、まだ着かないのお……？」

ランキー「しつこいやつちゃやなあ？ これで何回目やねん？」
チャンキー「もう少し待っててくれるかい？」

その間にアキラは、アニマルフレンドと接触しながら、タイニーと会話していた。

アキラ「けどすごいねえ……こんなにたくさんの動物達と友達が出来て……。」

タイニー「うん、ドンキー達の話によると、この子達は以前クレムリン軍団に捕まった事があったんだけど、

木箱の中に閉じ込められた所をドンキー達に助けられて、
それ以来恩返しと言う意味で協力するようになったんだ

って！」

アキラ「へえ……でも中にも異様に大きいカエルとか蜘蛛とかもいるんだね……。」

彼女はウィンキーとスクイッターに向きながら、多少不安そうにそう言った。

タイニー「まあ、確かに大き過ぎて驚くだろうけど、これでもみんな

な頼もしい仲間だから、全然平気だよ！

特にこう見えても、みんな人懐っこいし！」

スコークス「そう言えばドンキーから聞いたんだけど、あんた達別の世界から来たんだって？」

コークス「そうなのか！？　なあ、あんたらの世界はどう言つてコなんだ！？　俺達みたいな動物とかいる！？」

アキラ「えっ……………ああ……………まあ……………いる事はあるけど……………そう喋る奴とかは……………」

デイディー「！　おお……………い！！　アジトが見えたぞ……………！！！」

彼が大声でそう言い出すと、全員は彼の方へ振り向いた。すると海の先には、

ワニの顔を模った塔のような巨大要塞があった。

裕奈「うわっ、何あれ！？　ダツサツ！？」

アキラ「あそこがそのクレムリン軍団のアジトなのか？」

ドンキー「ああ……………しかし、またここに来るとは思わなかったなあ……………」

裕奈「え、一度あそこに行った事あるの？」

デイディー「うん。　*以前キングクルールはあれに仕組まれた『ブラストマティック』って言う核兵器的な物を使って、

オイラ達の島を破壊しようとしたんだ。」

デイクシー「えっ！？　そうだったの！？」

デイディー「ああ、そう言えばデイクシーはあの時一緒じゃなかったもんね。」

*『ドンキーコング64』に参照。

ランキー「せやけどまたここに来るとはなあ……………ホンマ久しぶりやなあ。」

タイニー「そうねえ……………あの頃の私はまだ小さかったんだよねえ……………今思えば懐かしいなあ……………」
二人はクレムリン軍団のアジトをしみじみに眺め、懐かしみながらそう言った。

チャンキー「二人共、呑気にそう言ってる場合じゃないだろ!?
もう直ぐ着くんだから、準備した方がいいよ!

もしかしたら着いた所で、敵が来るかもしれないんだからね!」

ドンキー「裕奈、アキラ、お前達も準備した方がいいぞ!」

裕奈「分かってるって!」

アキラ「うん!」

二人が頷いた後、筏は徐々にアジトの方へ近付いて行った。

……………しばらく経つと、ドンキーコング達は『ハイドアウト』の港に辿り着いた。

その港には大きな海賊船までも停まっていたが、今はそれを調べる暇もなく、全員筏から降りた。

ドンキー「エンガード、クラッパ、グリマー、ありがとな! 後

は俺達が戻って来るまで、ここで待機してくれ!」

エンガード「キュウ!」

クラッパ「アウツ!」

グリマー「グルアウツ!」

三匹が頷いた後、しばらく身を隠すために水中へ潜って行った。

その間に裕奈とアキラは、高いハイドアウトを見上げていた。

裕奈「へえ〜……………ここがクレムリンとか言う敵のアジトなんだあ……………」
アキラ「でもホントにワニって感じがするな……………」
裕奈「だな…。秘密基地にしちゃダサイデザインだよなあ……………
もつところ…カッコイイのになかったのかなあ？」
ドンキー「何拘ってるんだよ！準備が出来たんなら早速強行突破で潜入するぞ！」
裕奈「あ、うん、分かった！」
彼女が頷いた後、全員揃ってハイドアウトの入り口に向かって、突撃した。

……………ハイドアウト一階にて。
見事に入り口を突破したドンキーコング達は、早速ハイドアウト内に潜入した。しかし、入ったのは良かったものの、
辺りは誰一人もおらず、とにかく静かだった。そんな状況の中、
ドンキーコング達は辺りを見回りながら、
武器を構えた状態で先を進んでいた。

裕奈「へえ〜……………中はこうなってるんだあ……………」
デイディー「この風景も相変わらずだねえ……………最後来た時とは全然変わってないや。」
デイクシー「でもあたしは初めて来るからよく分かんないなあ……………」

ドンキー「……………何かおかしいな？」
裕奈「え、何が？」
ドンキー「……………ここはクレムリン軍団のアジトのはずだ。普通

俺達みたいな侵入者が入り込んだら、

『猿共が来たぞおおおお!!! 叩きのめしちまええええええ!!!』とか叫びながら襲って来るはずだ。

なのに俺達が入り込んでからしばらく経つのに、誰一人も掛かって来ないぞ?」

タイニー「そう言えばここ、妙に静かだよな?」

チャンキー「確かに……特に敵の気配も全く感じないし……。」

アキラ「もしかして、留守なんじゃ……?」

デイディー「それはないよ。さつき港で海賊船が停まってたでしょ? あそこに停まってるって事は、
奴らはここに帰って来たって言う事だよ! それに、
もし留守だったら、

せめてこのアジトで数人ぐらいの下っ端を見張り番として残してるはずだよ?」

ランキー「せやけどこうやって堂々入っても誰もおらんとは、確かに妙な事やなあ……。」

裕奈「いや……こう言う時は必ず何かある! きつと私達を罠に
はめ込もうと思ひ、

わざわざ己の気を静めながらどこかに隠れてるのかもしれない!
い! そう、戦場で言う隠密作戦!!!

慎重に進んだ方がいいよお!!! きつとどこかに地雷とか
竹槍だらけの落とし穴とか、

もちろん盪落としか猪を捕まえるアレみたいな物とか、腐
るほど仕掛けてるかもしれないし……!!!」

彼女はそう言いながら、軍人になり切りながら周囲を見渡した。
だが逆にそんな彼女を見ていたドンキーコングは、

呆れた感じな表情をしていた。

ドンキー「……さつきから何やってんだ、あいつは……?」

アキラ「気にしないで。いつもの事だから……。」

彼女も呆れた顔をしながら、ドンキーコングの大きな肩を叩いた。

……ビヨ~~~~ンビヨ~~~~ン………！！

その時、どこか遠くから何かが跳ねるような音が聞こえ、それを耳にしたアニマルフレンドのランビとエリーは、

辺りを見回し始めた。 気にするのか、ランビは唸り、エリーはおどおどしながら、周囲を見回った。

エリー「パ、パオ………！！」

ランビ「ブルルルウ………！！」

デイクシー「あれ、どうしたの、ランビ、エリー？」

スコークス「どうかしたのか？」

………ビヨ~~~~ンビヨ~~~~ン………！！

その時、例の音が再び遠くから聞こえ、今度はランキーコングの耳に届いた。

ランキー「ちょい待てえな！ 今何か音せえへんかったか！？」

ドンキー「音？」

………ビヨ~~~~ンビヨ~~~~ン………！！

例の音は再び聞こえ、今度は全員の耳に届いた。 しかもよく聞けば、その音が徐々に近付いて来た。

アキラ「あっ、ホントだ！ 何か聞こえる！」

タイニー「でも何かしら、この音？ バネ…かな？」

チャンキー「しかも段々近付いて来てるような………？」

裕奈「もしかして、敵！？」

ドンキー「かもしれないな！ みんな、構えろ！ 早速戦闘開始だ

！！」

彼がそう指示すると、全員は戦闘体制に整えた。

ピヨ～～～ン！！

すると彼らの目の前に、二体の敵が現れた。しかしその敵はワニの姿をしておらず、

剣の形をしたホッピングに乗ったハイホーであった。

???A「ピヨ～～～ンピヨ～～～ン！！ 敵が来ちゃったよお～～！！」

???B「早速侵入者が来ちゃったよお～～～！！」

裕奈「うわっ…何か早速変な奴らが来た…！！？」

アキラ「あれがクレムリン軍団の敵なのか！？」

チャンキー「いや、違う！ あいつらクレムリン軍団の敵じゃない！！」

ランキー「何やねん、あいつらは！？」

デイディー「ちょ…ドンキー！！ あいつらは確か…！！？」

ドンキー「ハイホー！？ 何であいつらがこんな所に…！！？ 通常はキノコワールド大陸本土、

そしてヨツシーアイランドにいるはずじゃ…！！？」

???A「ハイホー？ 何それ？ 美味しいのお？」

???B「僕達は『ハイパー』って言うんだよ！ 覚えといてね！」
タイニー「ハイパー？ あの子達…何言ってるの…？」

デイクシー「それよりもあんた達！ 何でクレムリン軍団の味方にいるの！？ って言うか、

あんた達は何でここにいるのよ！？」

ハイパーA「クレムリン？ それも美味しいの？」

ハイパーB「僕達そんなの知らないよお？ 僕達はカジオー軍団の一員なんだもお～ん！」

ドンキー「カ、カジオー軍団……？」

裕奈「知ってるの、ドンキー？」

ドンキー「いや、聞いた事もないが……。」

ハイパーA「それより、よくも僕達の楽しい時間を邪魔しに来たなあ……！？」

ハイパーB「一緒に跳ねてない奴は虐めてやるう……！！」

彼らはそう言った後、ホッピングで高く飛び上がり、ドンキーコング達に襲い掛かって来た。

裕奈「うわっ！？ いきなり襲い掛けて来たあ！？」

デイディー「みんな、あ、危ない……！」

ドンキー「フンッ！！ こんな奴ら、俺がぶっ飛ばしてやる……！」

『スピニングコング』……！！」

彼は両腕を伸ばした状態で回転し始め、襲い掛けて来た二体のハイパーを叩き飛ばした。

ハイパーA・B「ぎゃあああああ……！ やられたあああああ……！」

ポオン……！！

叩き飛ばされた二体のハイパーは、そのまま消滅した。

デイディー「えっ！？ き、消えた……！」

デイクシー「嘘！？ 何で！？ 普通倒されたら消えないはずなのに……！？」

裕奈「すっごおい！ 簡単に倒しちゃったよ！？ さすがドンキー、とても強いんだね！」

彼女は笑みを浮かばせながら、ドンキーコングの肩を叩いて褒めるが、

逆にドンキーコングは険しい顔をしながらその場で佇んでいた。

裕奈「……………ドンキー？」

ドンキー「……………おかしい……………あいつら、普通のヘイホーとは全然違う……………」

裕奈「え、違うって……………何が？」

チャンキー「ドンキー、違うのも何も……………あのヘイホー、どう見ても生きてる感じがしなかったよ!？」

ドンキー「確かに……………さっきの消滅もそうだが、確かに生きてた感じがしなかったな……………」

裕奈「へ？ な、何？ 何の事？」

彼女は二匹の会話を聞きながら、混乱していた。

アキラ「……………もしかして……………敵はロボットみたいな感じだったとでも言うの？」

ドンキー「んまあ……………そうかな……………」

デイクシー「でも、今のヘイホーは一体何だったの？ 自分の事をヘイパーとか呼んでたけど……………」

デイディー「そうだね……………それに、カジオー軍団って何だろう？ キングクルールの奴、

僕達の知らない組織と組んだとでも言うのかな？」

ランキー「せやけど、さっきの奴ら、クレムリンの事知らんとか言うとつたで？ ほなら関係あらへんちゃうか？」

タイニー「じゃあ、さっきのヘイホーは一体何だって言うの？」

四匹が話し合っている間に、アキラは裕奈の耳を貸しながら、小声で話し掛け始めた。

アキラ「……………ねえ、裕奈。 リンクリーおばあさんが言った事つてもしかして、この事なんじゃ……………」

裕奈「あ……………もしかしたら、そうかも shouldn't! だとしたら

……。」

その後、裕奈はドンキーコングの方へ振り向き、こう言った。

裕奈「あ、あのさあ、ドンキー……さっきの奴ら、どうもクレムリン軍団の事を知らないみたいだし……」

って言うか、クレムリン軍団ってワニの軍団なんでしょ？

でも私達の前に出て来たのはそいつらじゃなくて、

さっきの変な奴らだったよね？ それってもしかしたら……

…そのキングクルールとか言う奴と、

その手下の身に何かあったんじゃないかな？」

ドンキー「そう言ってみれば……そうかもしれないな？ 海賊船は港に停まっていた……」

けどこの基地内に誰も出て来なかった。もしかしたら、あいつらはそのカジオー軍団とか言う奴らに捕まったか、

或いはやられたに違いない！」

デイディー「じゃあ、この建物はそのカジオー軍団に奪われたって事！？」

ドンキー「だろうな。そうとすれば、さすがに奴を懲らしめて、バナナを全て取り返すどころじゃなくなっただって事だ！」

タイニー「え、じゃあ、どうするの、ドンキー？」

ドンキー「そうだな……一番怪しいのは、ここの最上階だな。

あそこは通常キングクルールがいる場所……」

でも奴がいらないと言う事は、今はさっきの奴らの親玉がいるかもしれない！ よし、

ここは一旦二手に分かれよう！ キングクルールやその手下達は、

きつとこの建物のどこかで閉じ込められてるかもしれない！
い！ デイクシー、タイニー、ランキーとチャンキーは、

そいつらを探しに行ってくれ！」

デイクシー「えっ!? で、でも、ドンキーとデイディーはどうするの!？」

ドンキー「俺とデイディーはこの最上階を目指して、さっきの奴らの親玉をぶっ倒しに行く！」

それまでにお前達は捕まったと思われるキングクルール達を助けに行くんだ！」

ランキー「ええ!? キングクルールを…!? 何を言うてんねん、ドンキー!？」

あんな奴は別に放つとしてもエエやないか!？」

チャンキー「そうだよ! いつも僕達に酷い事ばかりかしてるあいつらなんか助けなくても…!」

ドンキー「まあ、確かにあいつらは俺達に迷惑ばかりかしてるけどな…でも、あいつは俺の好敵手^{ライバル}だ。

例え俺達に悪い事しても、俺は奴を放って置く訳には行かないよ。」

デイディー「うん、確かにそうだね。あいつらと絡んでからもう大分経つんだし、腐れ縁でもなかなか切れないもんね。

あいつ、悪い奴だけど、どこか憎めないトコもあるし…。」

チャンキー「…うう〜ん…まあ…確かに…。」

ランキー「そう言われてみれば…確かにアホなトコもあったなあ…?」

タイニー「確かに変なトコも結構あったから、変に面白い所もあったし…。」

デイクシー「それに、以前『ベースボールアイランド』で*一度協力してくれたからねえ…分かった!

ドンキーとデイディーが言うように、クレムリン軍団を探しに行くよ!」

ドンキー「ああ、よろしく頼む!」

*『マリオスタジアム ファミリーベースボール』に参照。

アキラ「あ、ちょっと待って、ドンキー！」

裕奈「私達もドンキーとデイディーと一緒にいってもいいかな？」

ドンキー「えっ、お前達も!？」

デイディー「オイラ達と一緒に……いいのそれで!? もしかしてこれから立ち向かう敵は、

キングクルールより恐ろしい奴かもしれないんだよ!」

裕奈「大丈夫だって! そのためにここまで一緒に来たんでしょ?」

アキラ「私達も覚悟の上でここに来たんだ。だから協力させて。」

二人がそう言った後、デイディーコングはドンキーコングの方へ振り向いた。

デイディー「……どうする、ドンキー?」

ドンキー「うう~~~~ん……………こいつらの話によると、魔法が使えるとか言ってたからなあ……………分かった!

一緒に向かおう!」

裕奈・アキラ「うん!」

二人は頷きながらそう答えた。

ドンキー「ランビ、エクスプレッソ、ウインキー、スコークス、お前達も一緒に来てくれ! お前達の力も必要だからな!

後の奴らはデイクシーと行動してくれ!」

ランビ「ブモオッ!」

エクスプレッソ「クワッ!」

ウインキー「ゲロッ!」

スコークス「了解!」

四匹は頷きながらそう答えた。

タイニー「じゃあ、ここで別行動ね!」

ディクシー「こっちもクレムリン軍団の見付け次第、最上階へ向かうから！」

ドンキー「ああ、よろしく頼む！ それじゃ、行動開始だ！ 裕奈、アキラ、ディディー、行くぞー！！」

裕奈「ラジャーー！！」

アキラ「うん！」

ディディー「おうー！！」

その後、チームは二手に分かれ、ドンキーコング達は最上階へ向けて駆け出し始めた。

もちろん、これから会う敵は恐ろしい存在である事にも知らずに……。

第25話 魔剣士ケンゾール

……ドンキーコングと別れ、クレムリン軍団の救出を向かいに別行動してからしばらく経ち、

デイクシーコング達はハイドアウトの地下室に到着した。地下室は多少暗かったが、

壁に張り付いた松明のおかげで少しだけ辺りを見る事が出来た。

デイクシーコング達は階段を下り、

地下室の通路を進みながら、周囲を見回っていた。

デイクシー「ここがハイドアウトの地下室ね？」

ランキー「一体どこまで続いとるんやるか？」

タイニー「それにしても蒸し暑い所だねえ……さすがにこんな所に長居したくないわ。」

チャンキー「僕も同じだよ。何か出て来そうで長くいたくないな

あ……………」

彼は少しだけ体を震えながらそう言った。

ランキー「ああ、そう言えばチャンキー、意外と臆病な奴やったな？」

やつぱりこう言う所に幽霊が出るとでも思つとるやる？」

チャンキー「なっ!? バ、バカにしないでくれる!? 僕は別に

幽霊なんか……………!!」

彼はランキーに反発しようとしたその時……………!

デイクシー「!!! みんな、静かにしてくれろ!？」

彼女は人差し指を口元に当てながらそう言った。

タイニー「え、どうしたのデイクシー？」

デイクシー「あの扉の向こうから声が聞こえるんだけど……!」

彼女が道の先にある扉に指しながらそう言った。確かに彼女の言

う通り、扉の向こうから何かが喚くような声が聞こえて来た。

タイニー「あつ、ホントだ！ 何か聞こえる！」
チャンキー「でも、何の声だろ…？」
ランキー「もしかしたら幽霊だったりしてえ…！」
チャンキー「だ、だからそれはやめろつて！」
デイクシー「とりあえず調べてみよう！」

デイクシー「コング達は声が聞こえる扉の方へ駆け付け、デイクシー
コングは自分の耳をその扉に当ててみた。

「??? A「出せえ〜〜!!! ここから出せえ〜〜!!!」

「??? B「そうよお!!! あたし達を誰だと思つてんのお!? こ
つから出しなさいよお!!!」

「??? C「こら、お前ら！ いい加減大人しくせんか!? 状況が
余計悪化したら話にならんぞ!!!」

「??? D「そうよ。 何せ相手は私達を張り倒した大悪党よ？ こ
れ以上状況を酷くしたらお仕置きだけじゃ済まないわよ！」
デイクシー「！ こ、この声は…!!!」

扉の先から聞こえた声に聞き覚えがあると思つたデイクシー「コング
は、早速その扉を開けた。すると中は牢屋で、

一つの牢屋に数匹のワニがいた。 その牢屋の中には、高い王冠と
赤いマントを身に付けた大柄のワニ、

鬍髯マークが描かれた黒いシャツに赤いバンドナとリストバンドを
身に付けた小柄のワニ、

鬍髯マークが描かれた赤いワンピースに赤い建てたポニーテールを
持った小柄の雌ワニ、

そして紫のアフロに毒マークが描かれた赤いキャミソールと青いジ
ーパンを身に着けた長身でセクシーな雌ワニがいた。

そんな彼らを目前にしたデイクシー「コング達と、彼女らが入り込ん
だ事に気付いたキングクルール達は、
お互いに向き合いながら驚いていた。

デイクシー「やっぱり！ キングクルールに『カリプソ』、『キツプ』に『キャス』！！」

クルール「！？ き、貴様らは、キングファミリーの猿共！？」

キャス「えっ！？ デイクシー！？」

カリプソ「あら、タイニーまで？」

キップ「ああ！！ お前達はデイディーの……………！？」

クルール「貴様ら、何でこんな所に……………！？」

デイクシー「何って、あんたが出した挑戦状でここに来たんじゃないの！？ ここに来ていきなり忘れるなんてどう言う事！？」

クルール「挑戦状？ あ、ああ、あれな！ いやあ…こんな所にいたせいですっかり忘れてたな……………」

カリプソ「忘れるって……………クルール様、元はと言えばキングファミリーをとつちめる計画を実行するために、

この子供達を呼び出したんじゃないですか？」

キップ「あ、そうだ！ お前達もここに来たって事は、デイディーの奴も来たって事！？」

タイニー「うん、まあね。でも今はドンキーと一緒に最上階へ向かってるから……………」

デイクシー「そんな事よりもクルール！！ あんたこれどう言う事なのよ！？ あたし達のバナナを盗んだ上で、

こんな所に呼び寄せた他にヘイホー達を団員として加わらせるなんて……………」

しかもここに来たらあんた達が牢屋の中に入ってるなんて、これは一体どう言う事なのか説明しなさいよ！！」

クルール「はあ！？ ヘイホー！？ 何言ってるんだ！？ あいつらを仲間に加わらせた覚えなんて一度もないぞ！

って言うかそもそも加わらせる訳がない！！ それに、

あいつらはヘイホーでも何でもない…

ヘイホーに似させた別の何かだ！」

デイクシー「何訳の分からない事を言ってるのよ!？」

タイニー「まあまあ、デイクシー落ち着いて！」

彼女は怒るデイクシーを抑えながらそう言った。

チャンキー「まあ、でも…こんな所にあんた達がいると言うのも、満更でもなさそうだね。 どう見ても、

これはただの罠でも何でもなさそうだな。 まっ、助ける前に色々聞かせてもらおうかな？

僕達がここに来る前に、このハイドアウトで一体何が起こったのかを。」

カリプソ「え？ 助けに…?」

キャス「え、ちよつと待って！ あんた達、あたし達を助けに来たって言うの!？」

デイクシー「ま、まあ…最初はそのつもりじゃなかったんだけど…」

タイニー「この状況が起きてから、目的が変わっちゃったけどね。」
ランキー「もはやあんたらを懲らしめる場合やなくなったからなあ。」

キップ「……………うえ……………お前ら敵なのにめちやくちやいい奴じゃないかあ……………」

オイラ改めて見直しちゃったよお……………!」

彼はそう言いながら感激の嬉し涙を流していた。

クルール「だああもう!! 止めんか鬱陶しい!!」

チャンキー「それよりも説明を!!」

クルール「わ、分かったよ! ……………あれは確か……………」

ドンキーとディディーが変な女二人をどっかに連れて行った後からだよ。

ある作戦のためにお前らを誘き寄せようと思って、倉庫内にあるバナナを全部盗んでつたんだよ。

そして例の置手紙を残して、全てのバナナを海賊船に詰め込んだ後、船でそのままトングラしたんだよ。

ところが……俺達がハイドアウトに戻って来た後、急に変わった事が起きちまつたんだ。

突然剣のような形をしたホッピングに乗ったハイホー達が、ハイドアウト全体を占領したんだ。

そのせいで留守番していた下っ端も奴らに囚われ、基地内で好き勝手な真似をしゃがったんだ。

城を取り戻すために一度戦ってみたんだが、そいつらが見た事もない力を使いやがってよ……

殆どの『クリッター』や『クラブトラップ』などの手下達がやられちまつた……。特に最も恐ろしいのはよ……

そいつらの親玉なんだ。見た事もないとてつもなく強力な魔法みたいな物を使ってよ……

俺様でさえも全く歯が立たなかった……。特に『クラッシャ』や『クラッジ』、

『クラツバ』や『コプター』や『クランプ』でさえも、奴らには敵わなかったよ。

そこでやられちまつた俺達クレムリン軍団は、全員捕まっつてこの牢屋の中に閉じ込めちまつたんだよ。

このアジトを支配したと同時によう！」

チャンキー「なるほど……つまり留守中に敵が侵入して来たって事か。」

デイクシー「でも自業自得じゃない？ 何の作戦を考えてたのかわからないけど、そのためにバナナを全部奪うんだから、

バチが当たったのよ！」

キヤス「何ですってえ！？ こう言う時に及んで何よその言い草……！？」

キップ「まあまあ、落ち着いてよキヤス。大体からと言ってホントの事なんだから。」
キヤス「あんたは黙ってなさいよ!!!」

クルール「で、ドンキーとデイディーはそいつと戦うために、最上階へ向かったのか?」

タイニー「そうみたいだけど……。」
クルール「よせ!!! あいつは危険だ! やられた俺様ならそれが分かる、奴がどれほど恐ろしい奴なのかを!!!」

ランキー「分かるって……そりゃあんたがよくやられるからそない事言うんやないか?」

クルール「貴様ら俺様の話を聞かなかったのか!? 敵の親玉は貴様らが思うほど弱くはないんだぞ!!!」

あのパワフルなクラツシヤやクラツジやクラツバでさえも一撃で簡単にやつけちまったんだ!!!

奴は魔法と思われる炎を使って、どんな奴を一気にぶちのめしちまう!!!

何度も俺様をぶっ倒したドンキーやデイディーでさえも、絶対奴には勝てんぞ!!!」

チャンキー「魔法って……そう言えばさっきの説明も魔法とか何か言ってたみたいだけど、

ホントにその親玉は魔法が使えるのかい!?

キップ「使えるよ! 手から火がブワツと出て来て、たったそれだけでクリッター十人も倒しちゃったんだ!」

キヤス「しかもあいつらの乗ってるホツピング、おもちゃのように見えるけど、何でも切り裂いちゃうんだよ!？」

カリプソ「特にその親玉が率いるヘイホー、普通とは思えないほど戦闘に長けてるわ。あれはどう見ても、

普通のヘイホーじゃないわね。」

タイニー「だとしたら……。」

デイクシー「ドンキー達が危ないかも……？」
二人はお互いに向き合いながらそう言った。

クルール「だがよ、奴らに対抗出来る方法なら、一つだけあるぞ！」
タイニー「えっ!? あるの!?!」

デイクシー「な、何なのよそれ!?!」

クルール「デイクシーよ、お前は以前*俺様の兄貴と戦った時、兄貴は何を使ったか覚えてるか?」

デイクシー「え? な、何って………確かラツパみたいな形をした銃でしょ?」

彼女は上目で当時の記憶を探りながら、そう言った。

*『スーパードンキーコング2 デイクシー&デイディー』に参照。

クルール「そう! 実は俺様が考えたこの作戦ってえのはな………
貴様らをここまで誘き寄せた所、

その銃で始末しようと思ったんだ。だがその銃はただの銃じゃないぞ? 一撃で貴様らを倒せるくらい、

『ブラストマティック』を入れ込んで改良したのだ!」

タイニー「な、何ですってえ!?!」

ランキー「あの『ブラストマティック』を!?!」

クルール「けど、だからと言ってしよっちゅう使えるような器じゃねえ!

『ブラストマティック』は余りにも強力過ぎるからよ、
一回だけしか使えないんだ!

特に一回しか使えないだけに一つしかない銃だよ!」

チャンキー「もしかして、それで僕達を始末した後、DKアイランドをどうにかしようと思ったのかい?」

クルール「そう言う事だ!」

デイクシー「でも、何でわざわざそんな作戦を、罠にはめ込もうと

したあたし達に言うの？

そんなの極秘にする物でしょ？」

クールル「空気を読めよ！！　今は貴様らを倒すとかそれどころじゃないんだ！」

俺様がわざわざこの罫を貴様らに判明したのは、これが奴らを倒す方法でもあるからなんだよ！」

タイニー「え？　どう言う事？」

彼女がそう問い掛けると、その間にチャンキーは腕を組みながら手で顎を撫で、考え始めていた。

すると何かを思い浮かんだのか、彼は笑みを浮かばせながらこう言った。

チャンキー「……………ははあ…なるほど……………つまりその銃を使ってこの親玉を倒せばいいって言う事なんだね？」

クールル「そう言う事だ！　だがよ、その肝心の銃は今手持ちにはないんだ！」

今は最上階にある俺様の玉座の後ろに隠されてるケースの中にあるんだよ！　あそこから取り出さないと、

銃が使えないんだよ！」

ランキー「せやけどドンキー達はその事も知らずに最上階へ行ってもうたわ……………」

タイニー「じゃあ、早くこの事をドンキー達に伝えないと！」

チャンキー「いや、伝えるまでもない。キングクールルの話に寄れば、敵は魔法も使えるほどかなり強いらしい。

伝えたにしても、その事を直ぐ気付かれ、銃を取り出すチャンス逃してしまっただろう。

だとすれば、どさくさに紛れて取りに行くしかない。

そのためにもクレムリン軍団の力も必要って事だな！」

クールル「そう言う事だよ！」

キップ「ねえ、いちいち話し合ってるのもなんだけどさあ…早くオ

イラ達をこつから出してくんないかな？」

キヤス「そうよ！　いつまで待たせてんのよ！？　とつとあたしらをこつから出しなさいよ！」

デイクシー「ちよつと、せつかく助けてあげるつてのにその言い草はないでしょ！？」

タイニー「とは言つても、この牢を開ける鍵、私達持つてないわ。」
チャンキー「でも壊すなら簡単だと思つけど………構わないよね？」
彼はパイナップル・ランチャーを構えながらキンググルールにそう言つた。

クルール「どわあ、よせえっ！！　俺達を巻き込ませる気かあ！？　つて言つか、この牢は壊せないぞ！」

この鉄格子には脱獄防犯用のセンサーが付いてんだ！
少しでも歪ませたら緊急サイレンが鳴り出しちまう！

いつぺん壊してみる！　その後上にいる敵共がわんさかとやつて来ちまうぞ！」

デイクシー「じゃあどうやつて開けられるつて言つたのよ！？　だいたい鍵つてどんな奴よ！？」

カリプソ「カード式の鍵よ。　今の時代は普通の鍵じゃ古過ぎるから、今はカードキー使用に切り替えたのよ。」

けどキンググルール様の話によると、その鍵は敵の手に渡つてしまつたから………。」

タイニー「じゃあ、助けるのは無理つて事なのかしら………？」

ランキー「鍵い？　鍵つて、これの事かいな？」

彼がそう言つと、ポケットからワニの絵柄が付いた緑色のスチール製のカードを取り出した。

それを見たランキーコング以外の全員は、驚きにも固まつていた。
デイクシー「何であんたが持つてるのよお！？」

ランキー「さつき上でドンキーが倒したヘイホーがおつたやろ？
あれの同時に落ちて来たんや。」

何やるかよう分からんかったから、思わず拾ってもうたんや。」

チャンキー「って事は、さっきの奴らは、この牢屋の見張り番だったんじゃ……………」

クルール「そ、それだあ！！ 早くそいつを使え！！」

ランキー「へいへい、そう急かさんな。今から開けるで。」

ピーーーーッ！

ランキーコングがカードキーをリーダーに差し込むと、音が鳴り出した同時に牢屋の扉が開いた。

その後、キングクルール達は牢屋から飛び出した。

クルール「うおおおお！！ やつと自由になれたぞおおおお！！」

カリプソ「ふう…………… もうあー言う狭い部屋はうんざりだわ。」

キップ「うおおおお！！ お前達ありがとう！！ お前達敵ながらも命の恩人だよおお！！」

例えこつちがまた悪さ仕掛けても、この恩は絶対忘れないよお……………！！

彼はデイクシーコングの手を両手で握りながら、感激の涙と共に感謝した。

だが逆にデイクシーコングはそんな彼に多少嫌がっていた。

デイクシー「ああ、もう！！ 分かったから離しなさい！！」

キヤス「ま、まあ…………… あんたに助けられても嬉しくないけど…一応感謝してるからね。」

彼女は頬を少々赤く染めながら、デイクシーコングに振り向かずにそう言った。

デイクシー「ちょっと、全っっつ然感謝してるようには見えないけどお！！？」

タイニー「まあまあ、一応感謝したんだから別にいいでしょ？」

カリプソ「あんたも分かってないねえ……あー言うのはツンデレって言うのよ。」

キャス「ちょ……カリプソ姉さん、余計な事言わないでよ……！」

カリプソ「でも、あんた達には借りが出来ちゃったみたいね。お礼と言うのもなんだけど、

今度ウチの店で飲みにも来たらどうかしら？ その時はこっちが奢るわ。」

タイニー「え、いいの？ クレムリンの飲み物ってどう言う奴か分かんないけど……楽しみにしてるわ……！」

クールル「おい、貴様ら……！ 無駄話はそこまでにしろ……！ 俺達が今無事出られたにしても、

まだ他の手下達は出られていないぞ！ まずはそいつらを救出するぞ！ その後はあの跳ね回るバカ軍団を、

総攻撃で叩き潰すんだ……！」

ランキー「何やねん、あいつ？ 一気に張り切りよったぞ？」

チャンキー「まあ……でも、何気なくドンキーの言いたい事が分かって来たような気がするな。」

彼は軽く笑いながらそう言った。

……一方ドンキーコング達は、襲い掛かるハイパー達を薙ぎ倒しながら、ハイドアウトの最上階へ向かっていた。

その一方、最上階にて……四人のハイパーが部屋の中央に跳ねながら、お互いに話し合っていた。

ハイパーA「あつと言う間にみんな捕まっちゃった！」

ハイパーB「こんな素敵なアジトが、今日から僕らのスイートホーム！」

ハイパーC「跳ねて騒げば、とにかく楽しい。邪魔する奴も、いやしない。」

ハイパーD「だから夜通し、とにかく跳ねろ！」

四人はそう言いながら、楽しく跳ね回った。

ドガアアアン！！！！

しかし、扉が突然破壊され、そこから扉を激突したランビと、後から来たドンキーコング達が入り込んで来た。

ドンキー「頼もおおお！！！」

ランビ「ブモオオオオ！！！」

ハイパーA「やや！？ 何奴！？」

ハイパーB「跳ねてない敵か！？」

ドンキー「やい、お前ら！！ どのどいつだが知らないが、悪さはここまでにしてもらっぞ！！！」

ビョ~~~~ン……………ドスウウウン！！！！

しかし、ドンキーコングがそう言った後、玉座の前に立っていた一人の人物が高く飛び上げ、

ドンキーコング達の前に到着した。しかも到着した同時に地響きだし、ドンキーコング達はその振動に揺れていた。

敵は悪そうな目の付いた剣型のホッピングに乗った、赤いマントを身に付いた悪魔のような人物で、

その大きさはドンキーコング以上だった。彼は黒くて鋭い目付きでドンキーコングを見下ろしながら、

次のようにこう言った。

「????」おおい、みんな。みんなの楽しみを邪魔する奴がいるぞお。そんな奴は、どう言う奴だ!？」
彼がそう言った後、ハイパー達はドンキーコング達の周りを囲み始めた。

ハイパーA「キモイマッチョ!」

ドンキー「んなつ…!?!」

ハイパーB「生意気なチビ!」

デイディー「な、何だつて…!?!」

ハイパーC「目立つ電信柱!」

アキラ「なつ…!?!」

ハイパーD「えつと………サイドテール!」

裕奈「え…そのまま?」

ハイパー達の罵声により、ドンキーコング達は怒り出すが、そのまま言葉を受けた裕奈はただ啞然としていた。

ドンキーコング「ええい!! そんな事より!! お前達は一体何者だ!?! クレムリン軍団の仲間か!?!」

「????」クレムリン軍団? ああ…俺達がぶちのめしたあのトカゲ共か………違うな。

俺達はあるな弱い爬虫類共の味方ではない。俺達は、カ
ジオー軍団!

この世を武器と戦争だけの世界に変えるために結成した、
神器の組織!! そして俺こそが、

その組織の幹部である、『ケンゾール』様だ!!」

ドンキー「ケンゾール………?」

アキラ「ドンキーさん、やっぱり聞いた事ない?」

ドンキー「いや…さっぱり………」

彼は頭を振りながらそう答えた。

デイディー「お前達、何しにここに来たんだ!? クレムリン軍団に何をしたんだ!？」

ケンゾール「何しに? フンツ、貴様らに説明する筋合いはないのだが……まあ、特別に教えてやるとしようか?

俺達はある秘宝を探しているな……その秘宝も実はこの基地にあると言う情報があったんだよ。

だが来たのはよかったものの、その秘宝はどこにも見付からない……けどそこで一つ閃いたんだ。

どうせ俺達はこの基地に来たんだ。この際基地ごと全部俺達が頂いちまえば、秘宝探しも楽なもんよ。

だがそこであのトカゲ共が邪魔しに来やがったのだ……このアジトは奴らの物で、

俺達を追い出そうとしたのさ。だが、冗談じゃないね。このアジトはもう既に俺達の物になったのさ。

そう簡単に返す訳には行かなかったんでね。そこで俺達は邪魔な奴らを速やかに片付け、

邪魔が出来ないようにこのこの牢屋に閉じ込めたんだよ。そう……全ては力のある者だけが手にするのさ!」

アキラ「何だつて……!？」
裕奈「秘宝……って、何よ、その秘宝ってのは!? そいつを探して何しよつての!？」

ケンゾール「言ったはずだ。貴様らに説明する筋合いはないとな。だからこれ以上俺達の計画を、

貴様らに暴露する訳には行かないのでね。このまま大人しく帰らせてやりたいところだったが……

どうやら下の階にいる奴らをとことん世話をしてくれ

たみたいだなあ……? だとしたら、
このまま生かしたまま帰らす訳には行かないなあ!」

ドンキー「何い!?! 戦^やろつてのなあ!?!」

デイディー「クレムリン軍団を助けてお前達を追っ払うためなら、戦ってやるうじやないか!!」

裕奈「そうだよ!! 私達だってそう簡単に逃げるつもりなんてないんだからね!!」

アキラ「争いは嫌いだけど、悪い事をする奴は誰だろうと容赦しないよ!!」

ケンゾール「ほう……………面白い……………史上最弱の存在である生物共むしけらが……………」

てんかひと天下人である俺達兵器に勝てるでも言うのかあ……………」

…?」

彼は最大級の殺意に満ちた目線でドンキーコング達に強く睨み付きながらそう言うのと、

それを見たドンキーコング達は思わず恐怖に引き気味になった。

ケンゾール「いいだろう……………やれる物ならやってみるがいい!!」

その代わり、

望み通りに貴様らを纏めてズタズタに斬り裁いてやる

う!! 行くぞ、ハイパー共よ!!!!」

ハイパー達「ピョ……………ン!!!!」

ケンゾールがハイパー達にそう指示すると、早速全員揃ってドンキーコング達の真上まで高く飛び上げ、襲い掛けて来た。

ドンキー「うわっ、危ない!!!!」

彼が慌てながらそう言うのと、ドンキーコング達はその場から素早く離れ、ケンゾール達の攻撃から回避した。

ドンキー「くっ…いきなりジャンプで襲い掛かるとは……………!!」

デイディー「二人共、大丈夫!?」

アキラ「う、うん…大丈夫…!」

裕奈「でもアキラ、この状態じゃ戦えないよ! ここはやっぱ、魔法でやるしかない!」

アキラ「そっだね…やるう!!」
彼女は頷きながらそう言った。

裕奈・アキラ「アテアット来れ!!」

二人は呪文を唱え、『ネオ・パクティオカード』を発動させた。
発動中に二人の体が光り始め、

ドンキーコングとデイディーコング、そしてケンゾール達ははその眩しい閃光に対し、目を手で塞いだ。

ハイパー達「ひゃ〜〜!! 眩しい〜!!」

ケンゾール「ぐっ…な、何の真似だ…!？」

ドンキー「な、何だこの光は…!？」

デイディー「裕奈、アキラ…!？」

そして光が収まった後、裕奈とアキラは制服姿から違う姿に変身した。

裕奈はベルトに大量のバスケットボールを装着した赤と白のバスケットボールユニフォームに白いバンダナ、

手にバスケットボールの付いたモップを装備していた。一方アキ

ラは頭に貝の髪飾り、背中に鱗のような飾り、

白いビキニにクマノミ模様の腰掛けと青いフリッパー、手に珊瑚型の泡吹きを持っていた。

この姿によると、二人は『コスプレカード』の姿になっていた。

アキラ「この姿…もしかして、『コスプレカード』…?」

裕奈「えっ、『コスプレ』!? うわあ、『アーマーカード』じゃなかったかあ…これじゃあ、

強力な攻撃とか仕掛けられないよ…!」

アキラ「でも、何も引かなかったり、『スカカード』を引くよりはマシだよ。」

裕奈「…だね。」

ドンキー「な、何だ今のは!? さっきの光で、裕奈とアキラの姿が……!?」

デイディー「もしかして……………これが二人が言ってた魔法って言う奴じゃ……………!?」

ケンゾール「…チツ！ 何の真似なのかは知らないが、こけおどしなど通用せんぞ!! ハイパー共、

纏めて始末しちまえ!!」

ハイパー達「アイアイサア~~~~!!」

彼らはそう言いながら、ドンキーコング達に襲い掛け始めた。

デイディー「うわっ、また襲い掛けて来た!!」

アキラ「大丈夫、私に任せて!!」

彼女がそう言った後、珊瑚型の泡吹きから泡を吹き出した。そして

その泡は、徐々にハイパー達の方へ飛んで行った。

ハイパーA「ん？ 何だこれ？」

ハイパーB「なあ〜んだ！ 泡で攻撃するなんてバツカじゃ……………

!!」

ポポポポオン!!!

ハイパー達が泡に触れると、泡が一瞬に大きくなり、ハイパー達を中に閉じ込めさせた。

ハイパーC「うわっ、何これ!？」

ハイパーD「泡から出られない!？」

アキラ「驚いた？ どんな敵をも泡の中へ閉じ込める、『バブル・トラ封印の水泡』!」

これならもう身動きは出来ないよ!!」

裕奈「やったね、アキラ！ じゃっ、こっから私の出番!!」 『グ
レネード・ボール』!!」

ドドドドオオオオン！！！！

彼女がベルトに付いていたバスケットボールを投げ付けると、泡に閉じ込まれたヘイパー達に命中した同時に爆発した。

ヘイパー達「ぎゃあああああ！！！！」

しかもダメージが大きかったため、ヘイパー達は消滅した。

裕奈「やったあ！ 雑魚全滅う！！ よくやった、アキラ隊員！」

アキラ「…………… 隊員は止めてくれるかな…？」

ドンキー「す、すごい…………… 今のは本当に魔法だったのか…！？」

デイディー「すごいよ二人共！！ あんな見た事もない攻撃を使うなんて、やっぱり二人は本物の魔法使いだよ！！」

彼が二人の少女にそう言った後、ドンキーコングとデイディーコングはケンゾールの方へ振り向いた。

ドンキー「残るはお前だ、ケンゾール！！」

ケンゾール「ほう…………… まさか俺の手下共を簡単に倒せたとは……………

… 実に褒めてやりたいところだ。

だが、それがどうした？ 弱者共が俺の手下を倒せた

ぐらいで、いい気になるなよ！！

望み通りにこの俺が貴様らの相手にしてやる！！ 死

ぬ覚悟をするんだなあ！！！！」

彼がそう言った後、再び高く飛び上がり、ドンキーコング達に襲い掛けて来た。

デイディー「うわっ、また来た！！」

ドンキー「みんな、避ける！！」

彼がそう言った後、全員その場から離れ、ケンゾールの攻撃を回避した。

アキラ「…………… これでも……………！！！！」

彼女は再び珊瑚型の泡吹きから泡を吹き出し、それをケンゾールに当てさせ、大きな泡の中に閉じ込めさせた。

裕奈「やったあ!!! 再び捕獲完了!!! 後はこっちが攻撃すれば.....!!!」

彼女がそう言うが、閉じ込まれたケンゾールはなぜか不敵な笑みを浮かばせていた。

ケンゾール「フンッ.....それが.....。」

彼がそう言い始めると、体をドリルのように急回転し、そこから発生した気圧で泡を破裂させ、脱出した。

ケンゾール「どうしたあ!!!」

アキラ「えっ...!?!」

裕奈「嘘!? 封印魔法が破れたあ...!?!」

ケンゾール「そのようなへなちよこ攻撃など、この俺には通用せんぞ!!!」

なら特別に本当の魔法の強さと言う物を貴様らに教えてやる!!! 塵となれ、『かきゅう』!!!」

チュドチュドチュドチュドオオオオオオオン!!!!

彼は手から無数の火球を飛ばし、それをドンキーコング達の周囲に爆発させながら攻撃した。

ドンキー・デイディー「うわああああああああ!!!」

裕奈・アキラ「きゃああああああ!!!」

ケンゾール「ハッハッハッハッ!!! 燃える燃える、地獄の炎に燃えて灰になるがいい!!!」

裕奈「くっそあく、やったなあ!!! 食らえ、『グレネード・ボール』!!!」

ドンキー「くっ……こつちも反撃するぞ!!」 『ココナッツ・キヤノン』!」

デイディー「オイラもやるよ!!」 『ピーナッツ・ポップガン』!」

スコークス「俺も加勢するぞ!! 卵攻撃だあ!!」

裕奈は再びバスケットボール型の爆弾を、ドンキーコングは『ココナッツ・キャノン』からココナッツ、デイディーコングは『ピーナッツ・ポップガン』から落花生、そしてスコークスは口から卵を吐き飛ばし、

ケンゾールに向けて攻撃した。だがケンゾールは素早く、そして高く跳ね回り、全ての攻撃を回避した。

ケンゾール「無駄だ無駄だあ!! 言っただ、貴様らのへなちよこ攻撃など通用せんとなあ!!」

ドンキー「くそっ!! こうなったら……ランビ、エクस्पレッツソ、ウインキー、頼む!!」

ランビ「ブモオオオ!!」

エクस्पレッツソ「クワアアア!!」

ウインキー「ゲロゲロオ!!」

ドンキーコングがそう指示すると、三匹はケンゾールに向けて駆け出し始めた。

ケンゾール「フンッ、雑魚なる下等生物が!! うおおおお!!」

ドガドガドガア!!」

ケンゾールが素早く急回転すると、その勢いで三匹のアニマルフレンドを叩き飛ばした。

ランビ「ブモッ!」

エクस्पレッツソ「ガアッ!!」

ウィンキー「ゲエツ!？」

デイディー「ああっ!!! アニマルフレンドがあ……!!!」

ドンキー「くそっ……!!! 遠隔攻撃を仕掛けても跳ね回るせいで必ず避けられる!

その上接近攻撃を仕掛けても必ずあの回転で叩き飛ばされる! これじゃあ、何も出来ないじゃないか!？」

アキラ「特に『封印の水泡』も効かないなんて……!!!」

裕奈「くう……… どうすれば奴を倒す事が出来るんだ!？」

彼女は悔しさにより歯を食い縛りながらそう言った。

ケンゾール「フンッ……… 弱いな。始めは貴様らの戦力に期待はしてたが、予想通りとは言え、最弱だな。

やはり、あの威勢はただの肩書きに過ぎなかったようだな。 そうであれば、

もはや一人で貴様らの相手にするのも飽きて来た。

そろそろ貴様ら諸共終わりにしてやろう!!

来い、ハイパー共!!!」

彼がそう言い出すと、彼の背後から二つの黒い扉が開き、そこから無数のハイパー達が飛び出して来た。

ハイパーA「やつほお〜! 呼んだあ〜?」

ハイパーB「ハイパー軍団参上だよお〜ん!」

ハイパーC「たつぷり遊んじやうよお〜!!!」

ハイパーD「邪魔な敵はみんなやつつけちゃえ〜!!!」

裕奈「ええええええ!?! な、何あれえええええ!?!」

ドンキー「倒したはずの敵があんなに………!?!」

デイディー「つて言うか、何あれ!?! 何から出て来てんの!?!」

アキラ「あれ…扉…!?!」

ドンキー「お前、汚いぞ!!! 手下共を呼び寄せるなんて………!!!」

！」
ケンゾール「フンッ、よく言うよ。 貴様らの数でさえも俺一人を
掠り傷一つさえ残さなかつたくせに。

寧ろ貴様らには俺を倒す権利も希望すらないと言う事
だ。 そのため、俺の子分共に始末されるのに相応しい。

ついでに逃げられないようにこいつも仕掛けてやる！

『ほのおのかべ』！！』

ゴオオオオオオオオオオ！！

彼は再び手から炎を出す、今度は高い炎の壁を作り出し、それを
ドンキー・コング達の周囲に囲ませた。

ドンキー「うわっ、何だこれは！？」

裕奈「熱ッ……！！ これじゃあ熱過ぎて出られないよ……！！」

デイディー「しかもそれだけじゃない！ 炎のせいで敵がどこにい
るのか分からないよ……！！」

ケンゾール「どうだ、これでもう逃げられまい！ 大人しく手下共
に塵一つ残らずバラバラにされるか、

メインディッシュの丸焼きにされるか………どの道貴
様らは終わりだ……！！ このような運命に悟られた事を、

精々弱い貴様ら自身を怨むがいい……！！ ハイパー共、

全員跡形残らず蹴散らしてしまえ……！！」

ハイパー達「アイアイサア……！！！！」

彼らがそう返事した後、ドンキー・コング達を囲んだ炎の中央まで高
く跳ね上がり、

真上からドンキー・コング達に向けて襲い掛けて来た。

デイディー「うわあ……！！ 襲い掛けて来たあ……！！」

ドンキー「スコークス、何とかしろ……！！」

スコークス「そ、そんな事言われても……！！！！」

ペラ付きの黒いヘルメットを被った黄色いワニなど、様々なワニ族が大勢にいた。ちなみに水でハイパーへの攻撃や炎を消したのは、彼らの手前にいたアニマルフレンド、エリーによる物である。

クルール「敵をぶちのめすために加勢に来たぞお!!」

デイクシー「ドンキー、デイデー、大丈夫う!？」

コークス「スコークス!! 他のアニマルフレンドも大丈夫かあ!？」

ドンキー「ク、クルール!? それに、他のクレムリン軍団までも...!？」

デイデー「デイクシー!! みんな!! 戻って来たんだねえ!!」

スコークス「おお、コークス!! やつと戻って来たかあ!!」
裕奈「えっ...な、何あの怪獣みたいな奴ら...!？」

デイデー「怪獣って...確かに怪獣に見えるけど、あれがオイラ達が言ってたクレムリン軍団で、

そっちの王冠とマントを身に着けてる奴がそれを率いるキングクルールだよ。」

アキラ「え、あの人(??)達が、あのクレムリン軍団...!!？」

ケンゾール「あ、あいつらは...捕まっただけのトカゲ共...!!」
キップ「誰がトカゲだあ!? オイラ達はそれ以上に強いワニだあ!!」

キヤス「それによくもあたし達をあんな汚い牢屋の中に閉じ込ませてくれたわねえ!？」

絶対に許せないんだからねえ!!」

ケンゾール「...フンツ! それを言うだけで俺達を倒せると思ってるのか? 笑止!! ハイパー共、

虫けら共を叩き潰せえ！！！！」

ハイパー達「おお~~~~う！！！！」

クルール「クレムリン軍団を舐めんなよあ！！ 今度は以前みたいにやられないからなあ！！」

クリッター、クラップトラップ、クランプ、クラッパ、クラッシャ、クラッジ、コプター、

全員突撃だあああああ！！！！」

クリッター「キングクルール様の名に賭けて、てめえらを全員ぶっ倒してやらあ！！！！」

クラップトラップ「ガウガウ！！」

クランプ「キングクルール様のご命令だ！！ 全員掛かれい！！！！」

クラッパ「ケンカなら誰にも負けやしねえぜ！！！！」

クラッシャ「みんな纏めて叩き込んでやらあ！！！！」

クラッジ「うおおおおお！！！！ とことん暴れてやるぜえええええ！！！！」

コプター「俺達を牢屋に入れさせた事を、後悔するんだなあ！！！！」

デイクシー「こつちも加勢するわよ！！ みんな、コングファミリの
の實力、あのハイパー軍団に思い知らせるのよあ！！！！」

タイニー「ハイパーじゃないみたいだけど……………とにかくやるわよ
！！！！」

ランキー「ほな、ワテらもクレムリン達と協力しますかいな！！」

チャンキー「久しぶりのバトルだね！！ アニマルフレンド、行く
よ！！！！」

コークス「おう！！！！」

ラトリー「シヤアアアッ！！！！」

スクイッター「ブシヤアアアッ！！！！」

エリー「パオオオオン！！！！」

パリー「ピピイイイッ！！！！」

そしてその衝撃により、二体のハイパーが消滅した。

クラッバ「よお、デイディー！ 大丈夫かあ！？」

デイディー「えっ！？ あ、あんたは…クラッバ！？」

クラッバ「おお、久しぶりだなあ、デイディー！！ まあ、こんな状況で何だが、元気してたかあ！？」

ガアツハツハツハツハツ！！

彼は笑いながら、デイディーコングの背中を強く叩いていた。

デイディー「痛ただだっ！！ ちょ、ちよっと、強過ぎ！！ 強過ぎだってえ…！！」

ドンキー「え……………デイディー、こいつ知ってるのか？」

デイディー「え…あ、まあ……………」

クラッバ「当ったり前えだろうが！ お前がキングクルール様に攫われた時、

俺様は『ロストワールド』へ通じる『黄金の樽』を守つててな、

その通行料である『クレムコイン』十五枚を払ってくれた事で、何度も通してやったのさ。

それも何回も払ってくれたからすっかり常連になつちまつてなあ……………いくら敵だつふう〜ても、

俺様はすっかりこいつの事気に入ちまつてよあ！！

ガア……………ツハツハツハツハツ！！！！

彼は再び笑いながら、デイディーの背中を再び強く叩き続けた。

デイディー「痛ただだあ！！ だから叩くの止めてってえ！！！！」

アキラ「……………何かすつごく仲良さそうだね……………」

裕奈「……………そうだね……………」

二人の少女はそんな二匹を眺めながら、啞然としていた。

ケンゾール「ええい、お前ら何やってるんだあ！？ こんな雑魚共にやられてどうする！？」

やられる暇があるんならとつと全員殺つてしまえ！

「！！」

チャンキー「こつちだつてそう簡単にはやられたりはしないよ！！」

コークス、行けえ！！」

コークス「了解！！ そりゃあああ！！！！」

チャンキーの合図により、コークスは緑色の樽をケンゾールに向けて投げ付けた。

だがそれを見切ったケンゾールは軽く交わし、そのまま玉座の方へ転がって行った。

ケンゾール「フンツ、バカめ！！ そんなオモチャ如きで俺を倒せるとでも思つたのか！？」

チャンキー「そんなの……………ないに決まつてるだろ！！」

彼は不敵な笑みを浮かばせながらそう答えた。

ケンゾール「何！？」

その時、玉座まで転がった樽が起き上がり、中から緑色のワニが顔を出し、玉座の後ろへ移動した。

そして彼が玉座の後ろに隠されていたラツパ型の銃を取り出し、異変を感じたケンゾールは彼の方へ振り向いた。

???「キングクルール様、見付けましたあ！！」

ケンゾール「な、何だとお！？」

クルール「おお、よくやった、『クロバー』！！ 名付けて『樽に化けて銃を取り戻せ作戦』成功だ！！

よし、クロバー！！ その銃を渡せ！！」

クロバー「ラジャー！！」

ケンゾール「くっ……………まさかあの椅子にそんな物が隠されていたとは……………そう簡単に渡すかあ！！！！」

ハイパー共、奴を捕らえるお！！」

ハイパー達「ラジャ~~~~！！！！」

彼がそう命じると、ハイパー達がクロバーに襲い掛け始めた。

クロバー「おわあっ!? コ、コプター!!! 受け取れえ!!!」
彼が襲われる前に、空中に浮いているコプターに向けて銃を投げた。
コプター「おうよ!!!」

彼がそう言った後、投げ付けて来た銃を受け取った。

ハイパー達「コリア~~~~!!! その銃をよこせえ~~~~!!!」
彼らはそう言いながら、高いジャンプ力を活かしてコプターに襲い掛けた。

コプター「のわああああ!? パ、パス!!!!」

彼が襲われる前に、地上にいるクランプに向けて銃を投げた。

クランプ「へ?」

そして彼は思わず、その銃を受け取った。

ハイパー達「よこせデブウウウウ!!!」

彼らはそう言いながら、クランプに襲い掛け始めた。

クランプ「ぎぎやああああああ!?」

しかし、そんな彼の前にクラッシャが現れ、大量のハイパー軍団を押しえ付けた。

クランプ「おお、クラッシャ!!!」

クラッシャ「何やってんだ!? 早くその銃を誰かに渡せ!!!」

クランプ「わ、渡すっつうてもなあ……………!!!」

キヤス「クランプ! パスパス!!!」

彼女は戸惑っているクランプに手を振りながら呼び掛けた。

クランプ「おお、キヤスカ!!! ほれえ!!!」

彼は銃をキヤスに投げ付け、キヤスをそれを受け取った。

ハイパー達「よおおおおおおおおおおおおせええええええ!!!」

彼らは恐い形相を浮かばせながら、キヤスに襲い掛け始めた。

キヤス「きゃあああああ!!!」

彼女は攻撃が放たれた方向へ振り向くと、『フェザー・ボウガン』を構えたタイニーコングと、

『グレイプ・シューター』を構えたランキーコングがいた。ランキー「大丈夫かいな!？」

タイニー「早くその銃をクルールに渡して!!」

カリプソ「……………フツ、また借りが出来ちゃったわね。」

彼女は軽く笑いながらそう言った。

キップ「カリプソ姉ちゃ〜ん!!」

彼は跳ね回りながらカリプソに向けて手を振っていた。

カリプソ「キップね……………ほら、受け取んなさい!!」

彼女は銃をキップに投げ付け、キップはそれを受け取った。

キップ「ヘッヘッ、ゲットだぜえ!!」

ハイパー達「弱い奴は虐めちゃえ〜!!」

彼らはそう言いながらキップに襲い掛かるが、そんなキップは敵達に向けて銃を構え出した。

キップ「おっと、そんな事しちゃっていいのかなあ〜？」

ハイパー達「ひっ…!？」

彼が銃を構えた事で、ハイパー達は動きを止めた。

カリプソ「!! バ、バカ!! それを使っちゃダメよ!! あの

銃は一発しか撃てないのよ!？」

キップ「あっ!! そ、そうだった…!!」

ハイパー達「そうと聞いてちゃえば問答無用〜!!」

一度戸惑ったハイパー達だが、銃の弱点を知り尽くした事で素に戻り、再びキップに襲い掛け始めた。

キップ「うわあああああ!!」

ドオオオオオオオン!!!

その時、キップの前にクラッジが現れ、ショルダータックルでハイ

パー達を突き飛ばした。

ハイパー達「あばああああああああ!?」

そして突き飛ばされたハイパー達は、そのまま消滅した。

クラッジ「おう、キップ! 大丈夫かあ!？」

キップ「クラッジ! サ、サンキュー!!!」

ドンキー「くっ……………これだとクルールに回るまで時間の無駄だ!

! デイディー、頼む!!!」

デイディー「うん! 任しといて!!! 行くぞ、『バレルジェット』

!!!」

彼は背負っていた『バレルジェット』を起動させ、高く飛び上がった。そして彼は地上にいるキップに手を振りながら、彼に呼び掛けた。

デイディー「キップ!!! こっちこっちい!!!」

キップ「デイディー!!! ……………よし、あいつなら何とか出来そうだ! 頼んだよ、デイディー!!!」

彼はそう決心した後、銃をデイディーコングの方へ投げ付けた。

ケンゾール「ええい、世話を焼ける!!! そうはさせるかあ!!! くだばれ、『かきゆう』!!!」

ドオオオオオオオン!!!

隙を狙えたケンゾールは手から火球を飛ばし、それをデイディーコングの『バレルジェット』に命中させた。

そして命中した『バレルジェット』は破壊され、デイディーコングは銃を受け取れず、そのまま落ちて行った。

デイディー「うわっ!!! し、しまった……………!!!」

キップ「ああっ!!!」

クルール「んがあっ!？」

ハイパー達「今だあああああ!!!」

彼らは同時飛んで行く銃を高いジャンプ力を活かしながら奪い取る
うとするが……………。

ポポポポオン!!!

その時、銃を取ろうとしたハイパー達は、一瞬に泡の中へ閉じ込め
られてしまった。

ハイパーA「おわっ!?!」

ハイパーB「な、何これ!?!」

ハイパーC「泡!?!」

ケンゾール「何っ!?!」

クルール「な、何だあの泡は!?!」

デイクシー「敵達を閉じ込めたわ!?!」

ドンキー「あの泡……………もしかして!?!」

全員振り向くと、そこには珊瑚型の泡吹きを構えたアキラがいた。

そう、あの泡はアキラが仕掛けた物であった。

アキラ「今だよ、ドンキーさん、裕奈!?!」

裕奈「アキラ!?!」

ドンキー「でかしたぞ、アキラ!?! 裕奈、俺に乗れ!?!」

裕奈「え!?!? う、うん!」

彼女が頷いた後、ドンキーコングの指示通りに彼の背中に乗った。
ドンキー「行くぞおおおお!?!」

彼がそう言った後、彼を掴んだ裕奈を背負いながら、物凄いスピー
ドで駆け出し、飛んで行く銃を追い掛け始めた。

裕奈「おわっ!?!? は、早い……………!?!」

ケンゾール「おのれえ!!! そうはさせるかあ……………!?!」

彼はそう言いながら、銃を奪い取るために高く跳ね上がった。

裕奈「あぁっ!?!」

そして巨大な破壊光線は壁を貫通し、そのまま海の彼方まで消えて行った……。

その後、ドンキーコングは落ちて行く裕奈を捕まえ、全員揃って啞然としながら、

大海原が見える大きな壁の穴を眺めていた。ちなみに裕奈が所持していた銃は、先ほどの強力な攻撃を放った事で、銃口は破壊されていた。

裕奈「……………な　何？　今の……………」

ドンキー「……………今の……………まさか……………」

デイディー「……………『ブラストマティック』……………？」

ハイパーA「ひいひいひいひい！！！！　ケンゾール様がやられたあああああ……………」

ハイパーB「こいつら強過ぎるう……………！！！！」

ハイパーC「急いで『カジオー』様に報告だ……………！！！！」

ハイパーD「その間に僕達も逃げろ……………！！！！」
残されたハイパー軍団は慌てながらそう言つと、急いで扉の中へ戻り、扉と供に消えた。

デイディー「……………逃げた……………？」

ドンキー「……………つて事は……………」

裕奈「……………や……………やったあ……………！！！！　私達の勝ちだ……………！！！！」

彼女が喜びにそう言い出した瞬間、アキラ含めたコングファミリー、アニマルフレンド、そしてクレムリン軍団は大喜びにはしゃぎ出した。

デイクシー「やったあ……………！！　あたし達コングファミリーが勝ったんだわ……………！！」

キヤス「クレムリン軍団の勝利よ!!」

ディクシー「何言ってるのよ!? ドンキーと裕奈が勝ったんだからコングファミリーよ!!」

キヤス「そっちこそ何言ってるのよ!? あの銃はクレムリン軍団製なのよ!」

二人がケンカをし始めると、そこでタイニーコングとカリプソが割り込んで来た。

タイニー「まあまあ、二人共! こう言う時にケンカするのやめなさいって!」

カリプソ「そうよ。それに…少なくとも、コングファミリーとクレムリン軍団が力を合わせてやったんだから、

今回は引き分けて言う形じゃなくて、両者勝ちって事にしたかどうかしら?」

タイニー「……………フツ、そうね! みんな勝ったんだもんね!」
彼女はカリプソに向けて笑顔でそう答えた。

「……………か……………勝った……………だとお……………?」

全員「!?!」

突然どこかから声が聞こえ、全員がその声が聞こえた方向へ振り向くと、瓦礫の中から倒されたはずのケンゾールが、

ボロボロな姿で立ち上がった。その瞬間を目の当たりにした全員は、愕然とした。

ケンゾール「……………な…舐めるなよ……………これしきの如きで……………いい気になるなあ……………!」

クルール「な、何い!」

裕奈「嘘お!? まだ生きてんの!」

ドンキー「バカな!? 奴はあの攻撃で消えたんじゃないのか!?!」

ケンゾール「……………バ……………バカめ……………例え……………どんな破壊力のあ

る攻撃を…仕掛けようとも……

『時の狭間』から脱出した者は……決して死なん…

……！！！」

裕奈「『時の狭間』…?」

ケンゾール「……この薄汚いトカゲに猿共……よくもこの俺に

……あのような物を食らわせてくれたな……

許せると思うなよ……!?!」

キップ「……フ、フンツ！それがどうしたってんだよ!? お前がやられちまったせいで、

仲間が逃げちまったじゃないかよ!」

クラツバ「そうだなあ……結構恵まれてるんじゃないのか、てめえ?」

ランキー「ほな、どないすつか? まだワテらと戦いたいんか?」

チャンキー「止めた方がいいよ? その体じゃ、長く持たないと思うよ?」

クラツシャ「だがそれでもコテンパンにされてえんなら話は別だがな!」

クラツジ「おう!! やっぱ叩きのめそうぜ! ゴキブリのようによ!!」

ケンゾール「……フンツ…確かに……この状態だとさすがに俺でもヤバイだろうな……ならば……。」

パチインツ!

彼が指を鳴らすと、彼の背後から黒い扉ゲートが出現した。

ケンゾール「一旦引き上げるとするか……。」

アキラ「また扉ゲートが……!!」

デイディー「あいつ、逃げるつもりか!?!」

ケンゾール「聞け、この場にいる全ての下等生物共！！　今回はこのアジトを捨てるが、これで終わったと思うなよ！！」

この俺に傷を付け、負かした事を、後悔するんだな！
特に貴様らが隠してる秘宝も、まだ諦めたりはせんぞ！！

猿共にトカゲ共、そしてそこにいる二匹の人間共！！

次に会う時は、こうは行かないと思え！！

何れまた会う時まで、覚えているんだな！！」

彼がそう言い残した後、扉ゲートの中に入り、扉ゲートと供に消えた。

クルール「……逃げたか……。」

ドンキー「……だな……。」

裕奈「……まっ、改めて……　コングファミリーとクレムリン軍団、大勝利iiiiiiii！！」

全員「おおおおおおおお！！！！」

そしてコングファミリーとクレムリン軍団は再び大喜びにはしゃぎ出した。

……DKアイランド・ジャングルガーデンにて

克蘭キーの小屋にいる克蘭キーコングは、まだ例の研究を続けていた。そこで機械からプリントして来た資料を取り出し、それを見ながら悩み続けていた。

克蘭キー「……ふむう……　やはりどう考えても、これはただの自然現象でも何でもないのう……。」

しかもこのグラフを見ると……　何やら前より少しず

つ悪化してるよう思えるんじゃないか……。

一体この現象は何なんじゃろうか……もしこれが危険な物とすれば……恐らく……DKアイランドだけじゃなく、

キノコワールド大陸もモビウス大陸……いや、世界全体にとんでもない危機が……！」

その時、小屋の扉が開き、そこからキャンディーコングが飛び出して来た。

キャンディー「クランキーおじい様！！ 大変です！！」

クランキー「何じゃ、いきなりと……！？」

キャンディー「ごめんなさい！ でも、大変なんです！！ クレムリン軍団の船が、

真っ直ぐこっちに向かっているんです！！」

クランキー「な、何じゃと！？ 奴らの船がここに戻って来たと言う事は……もしや、ドンキー達の身に何か起きたのか！？」

キャンディー「分かりません！ でも、今ビーチでファンキーが待っているので、一緒に来てください！！」

…… DKアイランドのビーチにて

ビーチにいたファンキーコングは、海を渡ってこちらへ向かって来るクレムリン軍団の海賊船を眺めていた。

その間にジャングルの中からキャンディーコングとクランキーコングが駆け付けて来た。

キャンディー「ファンキーさあ〜ん！！」

ファンキー「HEY、キャンディーちゃん！ じいさんも来たんだ

な！」

克蘭キー「ファンキーや！ クレムリン軍団が戻って来たと言うのは本当か！？」

ファンキー「おうよ！ あそこにあるのがそうだぜ！」

彼は徐々に近付いて来る海賊船に指しながらそう言った。

キャンディー「ど、どうしよう……！！ このままだと、私達や島が危ないわ！」

克蘭キー「うぐぐぐ………ドンキー達のいない今、もはやどうしようも出来ん！！ ファンキー、何とか出来んのか！？」

ファンキー「む、無茶言つなよ！ いくら俺でも………！！！」

「おお……い……！」

その時、海賊船の方から聞き覚えのある声が聞こえ、三匹は船の方へ振り向いた。

すると船の甲板からドンキーコング達が顔を出し、浜辺にいる克蘭キーコング達に向けて手を振っていた。

ドンキー「じいさん、キャンディー、ファンキー！ みんな無事かあ……！？」

デイディー「オイラ達帰って来たよあ……！！！」

克蘭キー・キャンディー・ファンキー「ドンキー！？ デイディー……！？」

……しばらくしてから海賊船は上陸し、中から大量のバナナを運ぶクレムリン軍団が出て来た。

どうやら彼らはバナナを元の場所である、コンゴジャングルにある

バナナ倉庫へ戻しに行くのだろう。

そんな状況の中、クランプとクラツバはバナナを運ぶクリッター達を指示し、もちろんディクシーコングとキャス、

タイニーコングとカリプソ、ランキーコングとクラツジ、チャンキ

ーコングとクラツシャ、そしてファンキーコングとコプターも、バナナ運びに手伝っていた。ちなみにこの時点では、裕奈とアキラは元の制服姿に戻っていた。

クランプ「ほらほら、ちゃんと全てのバナナを元の場所に戻すんだぞおー！」

クラツバ「一人だけでもサボったらただじゃおかねえからなあー！」

その間にドンキーコング達とキングクルール達は、作業を行っているクレムリン軍団を眺めていた。

克蘭キー「……………しかし驚いたわい。まさかクレムリン軍団が盗んだバナナを返しに来るとはのう……………」

ドンキー「ああ、俺も正直驚いたよ。ここまで素直に返してくれるとはな。」

クルール「フンッ！ 本当は返すつもりなんて一切なかったが、色々あったからお詫びに返してやる事にしたんだよ！」

克蘭キー「しかし、ホントに色々あったんじゃないかな。お前達の話によると、

クレムリン軍団のハイドアウトがカジオー軍団とか言う聞いた事もない組織に占領されていたとは……………」

しかも取り返すために、コングファミリーとクレムリン軍団が力を合わせて倒したとはのう……………」

ドンキー「まあな。俺やクルールも最初はこんな事が起こるなんて予想も付かなかったよ。」

彼がそう答えた後、キングクルールの方へ振り向いた。

ドンキー「それはそうと、クルール。デイクシーから聞いたぞ？
あの銃、『ブラストマティック』が仕込まれたんだってな？

元々バナナを盗んだのは、俺達をアジトに誘き寄せて、
その銃を使つて俺達を始末した後、

DKアイランドをどうにかしようと思つてたんだろ？
しかもあの銃、一回だけしか使えない貴重な武器だつたんだろ？

何でわざわざそんな事をデイクシー達にバラしたんだ？
チャンスがあつたら、

敵を倒した後に俺達を始末出来てたかもしれないだろ？」
クルール「フンツ、あんな状況が起こつた以上、こつちの作戦なん
てどうでもよくなつたんだよ。それに、

相手は見た事もない力を使つた敵だ。普通の攻撃や武
器を使つても通用する訳がない。

だからあの武器を使う事に俺は決めたんだ。それに、
貴様を倒すのはこの俺様だ。

貴様があんな奴にやられちゃったら、俺様が困るんだよ。
だから手を貸してやつたんだ。」

ドンキー「クルール……………」
クルール「……………」正直言うが、貴様がアジトに来てくれて助かつた
よ。もし貴様がハイドアウトに来なかつたら、

俺達は奴らに始末されていたよ。」
ドンキー「……………」何言つてるんだよ。お前こそ、最初からバナナ
を盗んであんな挑戦状を残さなかつたら、

俺達はハイドアウトには行かなかつたかもしれないぞ？
まっ、要するにお互い様だ。」

クルール「フンツ…そうだな。」
彼らがそう話し合っていると、裕奈とアキラはそんな二匹を見詰め
ていた。

クルール「…ああ、そうそう。　そう言えばあいつら、秘宝とか何か言ってたよな?」

ドンキー「ああ、そうだったよな。　確かお前が持ってるのか言ってたようだが……………」

クルール「まあ、その事なんだが……………」

彼がそう言つと、マントからオレンジ色に輝く星型の宝石を取り出した。

クルール「…この事もしれんな。」

デイデー「うわあ、これ珍しい宝石だねえ!」

アキラ「ホントだ…綺麗……………」

裕奈「何かすごい価値になりそう……………!」

ドンキー「クルール、これは一体……………?」

クルール「二週間前にハイドアウトの断崖で見付けたんだよ。　最初はそこには宝石すらなかったんだけどな。　最

なぜそんな所にこいつが落ちてたのかは知らないが、金目になりそうと思つたんで取つといたんだよ。

一体何なのかは俺様にも知らんが、もしかしたら奴らはこれを探してたかもしれないな。」

彼がそう言つた後、そのままドンキーコングの手元に渡した。

クルール「まつ、これはあれだ。　お前達のバナナを盗んでつたお詫びと、俺達を救出してくれたお礼だ。

　　ありがたく受け取れ!」

ドンキーコングがキングクルールからその宝石を受け取ると、彼は睨みながらキングクルールの方へ見上げた。

ドンキー「……………お前……………まさか奴らがこいつを探してるのを知ってて、

　　わざわざ狙われるように俺に渡すとも言つのか?」

クルール「さあ?　そこんトコの想像はお任せにするわ。」

彼は不適な笑みを浮かばせながらそう答えた。

クルール「だが、いくら感謝したからと言って、次はこうは行かないからな！ 次の作戦を考えた時には、

必ず貴様をぶっ倒してやつからなあ！！」

ドンキー「おう、望む所だあ！！ 今回やベースボールアイランドの時みたいにはしないからな！！」

二人は不敵な笑みを浮かびながら睨み合うが、逆に裕奈とアキラから見ては、どこか仲が良さそうな感じをしていた。

裕奈「……………フツッ、何だか楽しそうだね、二人共。」

アキラ「そうだね。 ころ見てる、お互い敵対しているどころか、仲良く見えるね。」

デイディー「ええ、そう？ オイラにはそう見えないけど……………？」
彼は頭を傾げながらそう答えた。

克蘭キー「……………ばあさんの言う通りじゃったな。」

裕奈・アキラ・デイディー「え？」

耳を疑った三人は、克蘭キー・コングの方へ振り向いた。

克蘭キー「おお、そう言えば裕奈とアキラには知らなかったな？

実はワシにはリンクリー・コングと言う妻がおつてな。

今はもう他界してもうたが、生前はドンキーとクルール

の小学校教師じゃったんじゃよ。 まあ、

それを言う、かつてあの二人は同級生じゃったと言

う事じゃよ。 当時はあさんが二人の担当をしようと時、

ばあさんは願ったんじゃ。 いつかコングファミ

リーとクレムリン軍団が仲良くなれる日が来るとな。

逆にワシはそんな事が絶対有り得んと思ひ、否定しと

つたが……………どうやら、

その日が少しずつ近付いて来たのかもしれない。」

デイディー「じいちゃん……………」

裕奈「……………どうやら、リンクリーおばあさんの言う通りだったね。」
アキラ「うん…そうだね……………」
二人は克蘭キーコングやディディーコングに聞こえないように、お互い小声でそう話し合った。

「大変だあああああああ！！！」

その時、どこから大きな声が聞こえ、作業を一時的に止めたコングファミリーとクレムリン軍団は、その声が聞こえた方向へ振り向いた。するとそこには、必死に羽ばたいているスコークスとコークスの姿が見え、ドンキーコングの元へ飛んで行った。

スコークス「み、みんな、た、大変だよお！！！」

コークス「き、緊急事態だよ！！！」
ドンキー「な、何だよ！？ どうしたって言うんだ！？」

スコークス「またもや敵がやって来たぞお！！！」

コークス「しかも今回はクツパ軍団だあ！！！」

全員「ク…クツパ軍団！？」

全員は驚愕しながら耳を疑い、思わず大声でそう言い返したが、逆に裕奈とアキラは元の表情に戻しながら、逆次のようにこう言った。

アキラ・裕奈「……………って、誰？」

…… D K アイランドの反対側にある浜辺にて
砂浜の上に、一隻の船が停まっていた。その船は一見普通の船だ
ったが、そこから六人の小さな人物たちが降りて来た。
それぞれはジユゲム、クリボー、緑のノコノコ、赤いパタパタ、テ
レサ、そしてヘイホーで、
それぞれは無線やロープなどのサバイバル道具を装備していた。

ジユゲム「ここが D K アイランドですね……！」
クリボー「 D K アイランドと言えば、あのドンキーコングやディ
イーコングがいる島なんだよな？」
ノコノコ「そうですねえ…… D K はドンキーさんの頭文字ですか
らね。」

テレサ「ところでサ、ホントにここを搜索するのかヨ？ もし何も
見付からなかったらどうすんのサ？」
パタパタ「大丈夫ですよ。まだこの島を調査していないんですし、
特にドンキーさん達も何か知ってると思いますから、

きつと何か見付かりますよ！」

ヘイホー「それはそうと……何か森の方からすごい音聞こえて来
ない？」
ジユゲム「はい？」

確かにヘイホーの言う通り、ジャングルの方から地鳴りが聞こえ、
それが徐々に近付いて来た。

ノコノコ「た、確かに聞こえますね………？」
クリボー「な、な、何だこの音は………！？」

ジユゲム達が恐る恐るとそう思うと、ジャングルの中からコングフ
アミリーとアニマルフレンド、
更にクレムリン軍団の全員が駆け付けて来た。もちろん裕奈はラ
ンビ、アキラはエクस्पレッソに乗りながら、

コングファミリーとクレムリン軍団の中に紛れ込んでいた。

ジユゲム達「どわあああああああ!?」

デイクシー「ちよつと、あんた達!!! 何しにこの島に来たの!？」

キヤス「クツパ軍団なら用なしよ!!!」

スコークス「出て行かないと叩き飛ばすぞお!!!」

ジユゲム「な、何なんですか、貴方達はあ!？」

デイディー「ドンキー! あいつらは.....!!!」

ドンキー「ああ、間違いない! クツパ軍団の連中だ!!!」

ノコノコ「ク、クツパ.....!? な、何言ってるんですか!？」

クリボー「俺達あんな奴の仲間じゃないぞ!？」

裕奈「えっ、何この子達は.....? 亀にマツタケ.....白い何か

と...あのホッピングに乗った奴!？」

アキラ「ドンキーさん、この子達は一体.....?」

ドンキー「ああ、こいつらは.....」

彼が何かを説明しようとしたその時、ジユゲムは裕奈とアキラの顔を見て何かに気付いた。

ジユゲム「!!! あっ、ちょ、ちよつと待ってください!!!」

裕奈・アキラ「?」

ジユゲムは二人の少女を見た後、彼は雲の中から一枚の資料を取り出し、それを読み始めた。

ジユゲム「...えつとお.....赤い上着にスカート.....そして胸元に紋章.....あのう、間違ってたら申し訳ございませんが、

お二人はもしかして、夕映さんとのどかさんのお友達で
しょうか?」

裕奈「えっ...夕映さんとのどかさんって.....ゆえ吉と本屋の事!」

アキラ「な、何で貴方達が、二人の事を.....!？」

ジユゲム「はい、申し遅れました！ 私はジユゲムと申します。
で、こちらの方々はクリボー、ノコノコ、パタパタ、

テレサとハイホーです。 私達は友達のキノピオの依頼
により、キノコ王国から派遣された捜査隊です！」

ドンキー「へ？ キノコ王国から派遣された……………」
デイディー「キノピオの友達で捜査隊……………！？」

タイニー「捜査隊って……………何の？」
ノコノコ「はい。 実はキノコ王国では、そちらのお二人と同じ容
姿をした少女を二人預かっているのです。」

パタパタ「でも正確に言えば四人ですがね。 キノコ王国には綾瀬
夕映さんに宮崎のどかさん。

そしてマリオブラザーズの方には桜咲刹那さんと近衛木
乃香さんがいます。」

裕奈「えっ！？ さ、桜咲さんとこのかもいるの！？」
アキラ「あの四人もこの世界に来てたの……………！？」

クリボー「で、俺達の友達のキノピオが、そいつらの友達を探して
ほしいと頼んで来てよ。」

俺達はこうやってキノコワールド大陸中あちこち探し回
って行ったんだよ。」

テレサ「けどなかなか見付かなくてサ、試しに大陸から離れた島
々に行つて、捜索しようと思つたのサ。」

ハイホー「でもちようど見付かつてよかつたよお〜！」

クリッター「嘘付け、てめえ！！ お前らどう見たつてクツパ軍団
の手下じゃねえか！！」

クラッシュ「そうだそうだあ！！ そんな事を言つて俺達を騙すつ
もりなんだろう！？」

コプター「そんな手など簡単に食らうかつてんだよお！！」

ジユゲム「ええ！？ ち、違いますって！！ 私達ホントにキノコ
王国から派遣されたんですよ！？」

私達クツパ軍団じゃありませんよ!! 大体からにして、私達がクツパ軍団の一味でしたら、

夕映さんとかのどかささんとかの名前知らないはずですよ!?!」

アキラ「そう言えばそうだな……………」。

ジユゲム「それに……………ドンキーさんやディディーさんだって、私達とは何度もお会いした事あるじゃないですか!

ほら、カートレースとかベースボールとか……………そうそう、ディクシーさんにタイニーさん、

それにクルールさんもお会いしたはずですよ!?!」

クリボー「そ、そうだよ! ドンキーだって俺やノコノコ、テレサとハイホーと会ったはずだろ!?!」

ほら、*誕生日で一度ボードゲームやったじゃないか!

パタパタ「そ、そうですよ! 私だって、『**第4回マリオカートグランプリ』でお会いした事あるじゃないですか!」

ドンキー「え……………あ…会ったっけ?」

彼は頭を掻きながらそう答えた。

テレサ「ええええええ!? 忘れるかよ普通!?!」

ハイホー「いつつも会ってるじゃない!?!」

ドンキー「そんな事言われても、みんな同じ姿をしてるから、どれが敵か味方なのか区別付けられないぞ……………」。

ジユゲム「そんなあ……………酷いじゃないですかあ!?!」

*『マリオパーティ4』の事。

**『マリオカート ダブルダッシュ!!!』の事。パタパタもノコノコと供に参加した。

クルール「ええい、そんな事よりも!! 貴様らいい加減白状しろ!! 貴様らはクツパの一味なんだろ!?!」

「一体何を企んでるんだ!？」

クリボー「だから違うって言ってるだろ!? 俺達はホントにキノコ王国から……………!!！」

ジユゲム「あつ、そうだ!!！」

彼が何かを思い付くと、雲の中から無線を取り出した。

ジユゲム「こう言う時に限ってこそ、無線があつたんだ! 早速アルファチームに報告しよう!!！」

彼はそう言いながら、無線の電源を付け、話し始めた。

ジユゲム「ええ〜っ、こちらブラボーチーム! こちらブラボーチーム! アルファチームに告ぎます!

至急応答せよ! 至急応答せよ!」

無線「はい、こちらアルファチーム! ちょうどいい時に連絡してくれました! たった今、

キノコ王国に滞在中の四人の友達と思われる人物を二人確保しました!」

裕奈・アキラ「えっ!？」

無線がそう答えると、二人の少女は耳を疑った。

ジユゲム「ホントですか!? 実はこっちもちょうど二人を確保したところなんですよ!」

無線「本当ですか!? それは奇遇…! ならば一刻も早く彼女達をキノコ王国に送らなければ…!

こちらも至急、キノコ王国に二人の少女と共に帰還するつもりです! そちらも二人を乗せて、

帰還してください!」

ジユゲム「あの…そこが問題なんですが……………実はこの二人には保護者がいます、

どうやら我々の事を信用していないみたいなんです。

敵と勘違いしてるようなんです、

出来ればサポートが必要なんですが……………」

無線「そうですね……………分かりました！ では、その無線を保護者の方々に聞こえるよう、

代わってください！」

ジユゲム「分かりました！」

彼がそう頷くと、無線から流れる声を全員に聞かせるように、前に向かせた。

無線「ええ〜と……………皆様、私達はキノコ王国から派遣された捜索隊です！ 我々はピーチ姫のご使命により、

ある少女達を捜索しています！ 捜索しているのは、現在キノコ王国にご滞在中の桜咲刹那、近衛木乃香、

綾瀬夕映、そして宮崎のどかのご友人方々であります！ 合
い難く写真は持つておりませんが、

外観特徴としては赤い服にスカート、そして胸元には学園の物と思われる紋章が付いている事だけです！

そちらには二名の方々がいると言う情報が聞きましたが、

よろしければそのお二方を我が捜索隊の船に乗船させてください！ ただし、拒否する場合は、

予め保護者の方々も乗船しても構いません。 何卒、ご協力をお願い致します！」

ジユゲム「……………と言う事です！」

ランキー「ほなあ……………あんたらはホンマにキノコ王国の味方側な
んか？」

テレサ「だからさっきからそう言ってるじゃないのサー!!」

クラッバ「おお…そうか……………すまんすまん！ こっちも色々問題
があったんでよう……………」

ちよつと疑っちまったぜ！」

ハイホー「何？ ここで何があったの？ って言うか…何でコング
ファミリーとクレムリン軍団が一緒にいるの？」

クランプ「ああ、これはだな……………」。

ディディー「ねえ、ドンキー。こいつら本当にキノコ王国から派遣された捜査隊みたいだけど、どうする？」

ドンキー「そうだな……………お前達は どうするんだ？」

裕奈「もちろん！！ そのキノコ王国って言う所に行くつもりだよ！ だって他の友達もそっちにいるんだから、

会いに行かない訳には行かないよ！！」

アキラ「私も行くよ。」

ドンキー「そつかあ……………分かった！ でもその代わりに、俺も一緒に行くよ！ 一応保護者だしな！

ちゃんと送ってくれるかどうか、一緒に行って確かめな
いとな！」

キャンディー「え、ドンキーも行くの!？」

ディディー「ああ、それならオイラも行くよ！ 三人だけじゃ心配だから、オイラも一緒にキノコ王国へ行くよ！」

ディクシー「ディディーも!？」

クルール「おい、貴様らホントに行くのかよ…!？」

ドンキー「ああ。この二人の安全を確保しなきゃな。それに、今回の事件に関して、マリオにも報告したいしな。

だからディクシー、タイニー、ランキーとチャンキー、
後は頼んだぞ！」

チャンキー「……………分かった、僕達に任せてよ！」

タイニー「でも、二人共気を付けてね！」

ランキー「ワテらみんな待つとるからな！」

ディクシー「ディディーも気を付けて行ってね！」

ディディー「うん！」

ディクシーコングが心配そうにそう言うと、ディディーコングは頷きながら答えた。その後、

ドンキーコングはキングクルールに向けてこう告げた。

ドンキー「それはそうと、お前も俺のいない間、悪さをするんじゃないぞ？」

クルール「当たり前だろうが。貴様のいない間なんて、悪さする気なんて全くないからな。」

それまでに俺達はハイドアウトの修理でもして、大人しくしてるよ。だから余計な心配をしなくてもいいぞ。」

ドンキー「まっ、そう言う訳だ！ それでいいか？」

彼はジユゲムに振り向きながらそう言った。

ジユゲム「あ、はい！ もちろん！ では早速……。」

彼がそう承知した後、再び無線に話し始めた。

ジユゲム「ええ、こちらブラボーチーム！ 乗船を許可してくれました！ ただし、

予め保護者の方々も同行する事になりましたんで、彼らもキノコ王国へ帰還する事にします！」

無線『了解！ では我々も至急帰還する事にします！』

無線がそう返事した後、ジユゲムは無線を切った。

ジユゲム「それでは、早速出航する準備をしますので、船にお乗りください！」

裕奈「あ、でもちよっと待って……！」

彼女がそう言った後、アキラと供に他のコングファミリーとクレムリン軍団に振り向いた。

裕奈「みんな、本当にありがとう！ 色々あったけど、私達はようやく友達と愛に行けるようになったよ！」

アキラ「本当にありがとうでした！」

二人は全員に向けてお辞儀しながら、感謝を持ってそう言った。

克蘭キー「いやいや、何を言うてるんじゃない！ ワシらは何もしてらんよ！」

クルール「おう。そもそも俺達を救ってくれたのは、貴様らなんだからな。その事に関してはありがたく思ってるぜ。」
キャンディー「そうよ。特にドンキー達を無事にいさせてくれたのも、貴女達のおかげよ。」
カリプソ「あんた達こそ、私達の命の恩人よ。感謝してるわ。」
裕奈・アキラ「みんな……………」
二人はコングファミリーとクレムリン軍団の感謝の声を浴びながら、感激していた。

タイニー「でも、しばらくの間は寂しくなるね……………」
ランキー「そやなあ。会ってから短い間やったからなあ……………」
チャンキー「でもさ、もし機会があったら、また遊びに来てよ！その時は島の見学とかしてあげるからさ！」
キップ「そうだよ！たまにはオイラ達のアジトにも遊びに来てよ！姉ちゃんなら大歓迎だよ！」
ファンキー「そうだぜ！今回は時間の問題で出来なかったが、また来る時はウチの店にも遊びに来てくれよ！」
カリプソ「そうね。もちろん私のカフェにも遊びに来てちょうだい。その時は奢ってやるから。」
デイクシー「また遊びに来てね！ドンキーとディディーの事も、よろしくね！」
キヤス「絶対遊びに来るのよ！」
裕奈「うん！その内また来るよ！」

ハイホー「そろそろ出航するよぉ〜！早く船に乗ってえ〜！」
ドンキー「おぉ〜い、裕奈、アキラ！早くしないと置いてくぞぉ〜！！」
裕奈「あ、はいはい！今行きまぁ〜す〜！！」
ドンキーコングとディディーコング、更にジユゲム達はもう既に船に乗っており、

それに気付いた二人の少女は急いで船に乗り始めた。

裕奈「バイバイ、みんなあ！　いつかまた来るからなあ〜！！」

アキラ「さよなら、みんなあ！　色々ありがとう！！」

克蘭キー「気を付けるんじやぞお〜！！」

デイクシー「元気でねえ〜！！」

クルール「覚えてるよお〜！！」

裕奈とアキラは島に残ったコングファミリーとクレムリン軍団に別れの言葉を言い残した後、

船は出航した。そして二人の少女は互いに手を振りながら、D

Kアイランドを後にした……………。

第26話 二つの悪の同盟

……DKアイランドを後にしてからしばらく経ち……裕奈とアキラはドンキーコングとデイディーコングと供に、キノピオの友達と思われるジュゲムとその仲間達が乗っている船に乗りながら、キノコ王国へ向かうために海を渡っていた。その間に裕奈は、見えなくなったDKアイランドを眺めながら、寂しそうな表情でこう言った。

裕奈「……島がもう見えなくなったなあ……。」
アキラ「そうだね……。」
彼女も寂しそうな顔で海を眺めながらそう答えた。

ドンキー「……何そう浮かない顔してるんだよ！」
デイディー「そうだよ！ また時期が来たら遊びに行けるって！だから元気出しなよ！」

二匹がそう励むと、裕奈とアキラは啞然とした表情から笑顔に切り替えた。

裕奈「……そうだね！ もう会えないって訳でもないからね！」
アキラ「……ありがとう、ドンキーさん、デイディー君。」
ドンキー「ハツハツハツ、別にいいよ！ 俺達は友達だから！」
デイディー「そうそう！ お互い励み合うこそ、友達だからね！」
二匹は笑顔でそう答えた。

ドンキー「ところでジュゲム！ キノコ王国まで後どれくらい掛かるんだ？」

ジュゲム「そうですね……後もうしばらく待てば直ぐ到着すると思いますよ？」

デイディー「ホントにキノコ王国に辿り着くのぉ？」

ジュゲム「……あのう……まだ私達を疑ってるんですか？ 私

達はクツパ軍団でも何でもありませんよ？

何度も会ってるはずなのに何で分からないんですかあ？」
彼は困った表情をしながらそう言った。

裕奈「ねえ、キノコ王国ってどんな場所なの？ それとDKアイラ
ンドにいた時から思ってたんだけど、

クツパ軍団って何？」

ジユゲム「え？ ああ、そう言えばお二人はこの世界の住民ではな
いですから、知らないんですけどね。」

キノコ王国は、キノコワールド大陸の最も大きい国で、
その名前の通りキノコに覆われている、

平和な国なんです。殆どの人種はキノコ族なんですけど、
中でもカメ族や、場所にも限りますけど、

人間や獣人などもたくさんいますよ？」

裕奈・アキラ（キノコ……？）

二人はその言葉を耳にすると、少しだけ気になり始めた。

ジユゲム「しかし、そんな平和な国でも、悪い奴らに狙われてるん
ですよ。それがそのクツパ軍団なんです。

所属しているのは殆ど同じキノコ族のクリボー達やカメ
族ばかりで、

キノコ王国をカメ族だけの王国に変えようと企んでるん
です。 同じカメ族としては、

非常に情けなく思いますが……。」

アキラ「じゃあ、君達は？」

ジユゲム「私達はそれに反対する物です。 私達は平和を愛し、争
いは好みません。 特にキノコ王国はみんなの王国でして、

決して誰かだけの物ではありませんから。」

アキラ「そうなんだあ……。」

彼女はそう言うが、横にいる裕奈は、軍人魂が溢れているためか、
なぜか納得行かないような顔をした。

裕奈「…………でもこう聞いてると、さすがにこの子達は敵じゃなさそうだね？」

彼女はジユゲム達を疑い続けていたドンキーコングとデイディーコングに横目で見ながらそう言った。

ドンキー・デイディー「えっ……………」

それに気付いた二匹は多少引くが、その間にクリボーとノコノコが顔を出した。

クリボー「おお〜い！ みんな前方を見るよお〜！」

ノコノコ「間もなくキノコ王国に到着しますよお〜！！！」

裕奈「えっ、ホント！？ アキラ、ちょっと見に行ってみようよ！！！」

アキラ「うん！」

彼女が頷いた後、裕奈と一緒に船の先頭まで走った。そして海の手先を見ると、ようやく陸が見え、

遠くからキノコタウンとピーチ城が見えた。

裕奈「わあ〜！ 見るよアキラ！！ 町だけじゃなく城まで見えるよ！！！」

アキラ「ホントだあ！ あれがキノコ王国なのか？」

ジユゲム「はい、そうです！ あそこがキノコ王国の中心となる、キノコ族が住むキノコタウンです！」

で、そのふもとにあるお城は、ピーチ城です！」

アキラ「城と言う事は…………その国の王様とかいるって事？」

ジユゲム「いえ、王様はいませんが、逆にこの国を収めているのはピーチ姫と言うお方です。」

まあ、どんな人なのか、直接お会い出来ると思いますので……………」

裕奈「えっ！？ 直接会えるの！？ そりゃ楽しみだなあ〜！」

デイディー「……………ん？　ねえ、あそこにもキノコ王国に向かっている船があるけど…？」

彼が横を見ると、遠くから同じくキノコ王国へ向かっている一隻のキノコ模様をした船を発見した。

そして彼がそれに指すと、全員その方へ振り向いた。

パタパタ「ああ、もしかしたら別の捜査隊の船でしょうね。　そう言えば、

向こうももう二人の少女を保護したとか言っていました

……………？」

裕奈「あっ、そう言えば……………！！！」

アキラ「でも、一体誰と誰なんだろう？」

ドンキー「港に着くまではお楽しみについて訳だ。　到着したら直ぐに会えるだろう。」

裕奈「そうだね。　到着してからって言う話だね！」

……………キノコタウンの南西にある港にて

二隻の船は同時に波止場に到着し、それぞれの船から捜査隊の隊長キノピオとジユゲムが降りて来た。

その後お互いに向き合い、敬礼した。

隊長「おお、ブラボーチームの隊長殿！　よくご無事に戻れました
！」

ジユゲム「はい！　ブラボーチーム、ただいま戻りました！　あの、この事はピーチ姫にご報告致しましたか？」

隊長「うむ！　今からこちらへ向かうと言う連絡が来ましたが……

…。」

その間に、ジユゲム達が乗っていた船から裕奈とアキラ、そしてドンキー・コングとデイディー・コングが飛び降りた。

裕奈「よつとお…！へえ…！……ここがキノコ王国かあ…！」
アキラ「何か見た目通り可愛い所だね……なぜかキノコだらけだけど。」

デイディー「すごい場所でしょ？何でキノコなのかは置いといて……結構平和そうでもいいでしょ？」

ドンキー「それより、向こうの部隊はどこから来て、誰を保護したんだ？」

その後、キノピオ捜査隊の船からまき絵と亜子、そしてヨッシーとキャサリンが飛び降りた。

まき絵「うわあ…！……！ここがキノコ王国って言う所なんだあ…！」

亜子「ホンマに可愛い国やなあ…！」

裕奈・アキラ「！？まき絵！？亜子！？」

愕然とした二人は大声でそう呼び出すと、まき絵と亜子はそれを耳にし、裕奈とアキラの方へ振り向いた。

まき絵・亜子「！？裕奈…！アキラ…！」

二人も同じ表情を浮かべながら大声でそう呼び出した。

その後、裕奈はまき絵と亜子に駆け込み、感激の涙を流しながら二人を強く抱き込んだ。

裕奈「うわあ…！…！まき絵え…！亜子お…！やっと会えたよあ…！…！」

まき絵「わっ…ゆ、裕奈…！」

亜子「ちょ、ちょっと落ち着きいな、裕奈…！」

二人は裕奈に抱きしめながら、多少恥ずかしながらそう言った。

その後、裕奈の背後からアキラも立ち寄り、少し目から涙を浮かべながらこう言った。

アキラ「…よかった…まき絵…亜子………やっと会えて……！」

亜子「アキラあ…裕奈あ………」

まき絵「…うう…嬉しいよお…やっと二人と会えてえ…………！」

二人も感動の涙を流す裕奈とアキラに釣られながら、同じく目から涙を浮かべ出した。

ドンキー「おお、そいつらもお前の仲間か？」

デイディー「よかったねえ、無事に君達の友達と会えて！」

そんな二人が裕奈とアキラの背後から笑顔で頭を出すと、それに気付いたまき絵と亜子は愕然とし、

二人を抱き締めていた裕奈から思わず引き離し、その場から少し引き下がった。

亜子「ひゃあああああ！?!? な、何やあれええええ！?!?」

まき絵「ゴ、ゴリラと猿が喋ったああああ！?!?」

アキラ「あ、亜子、まき絵…落ち着いて…!!」

裕奈「そ、そうだよ！ この人(？)達は悪い奴らじゃな………！？」

彼女が二人を落ち着かせようとしたその時、まき絵と亜子の後ろからヨツシーとキャサリンが顔を出した。

ヨツシー「あれ、どうしたの二人共？」

キャサリン「あら？ その二人は誰かしら？」

二人がそう言った後、裕奈とアキラも愕然とした表情を浮かべながらその場から引き下がった。

裕奈「おわああああ！?!? 何あのでけえトカゲえ!?!」

アキラ「か、か、怪獣…!?!」

キャサリン「はあ!?! 誰が怪獣ですつてえ!?!」

彼女は口から湯気を吹き出し、怒りながらそう言った。

ドンキー「お？ そこにいるのは…ヨッシーとキャサリンじゃないか！」

ヨッシー「ああ！ ドンキー！ それにデイディー！ 久しぶりだねえ〜！」

彼は笑顔でそう言いながら、二人に向けて手を振り出した。

デイディー「あれ、ホントだ！ ヨッシーとキャサリン、久しぶりい〜！」

キャサリン「あら、あんた達もここに来てたの？」

裕奈「え……………ドンキーさん、デイディー君、知り合いなの？」

ドンキー「ああ…カートレースやスポーツとかでよく一緒に遊んでたからな。」

まき絵「え、そうなの？」

ヨッシー「うん！ 協力したり競い合ったり、僕達の友達なんだ！」

デイディー「でも何でヨッシー達もここに…？ もしかして、オイラ達みたいにその二人の保護者として一緒に来たの？」

キャサリン「保護者ねえ……………まあ、そう言ってもいいかしら？」

その半分はマリオちゃん達と会いに来たって言う説もあるし…。」

ドンキー「マリオに…？ もしかして、お前達んトコにも何かあったのか？」

ヨッシー「え？ そう言うドンキーももしかして……………？」

「あつー！！ いましたあー！！」

その時、突然どこかから声が聞こえ出し、その場にいた全員はその声が聞こえた方向へ振り向いた。

するとそこには彼らに向けて手を振るキノピオと、彼の背後にピーチ姫とデイジー姫、キノピコとキノじい、

マリオブラザーズの二人、そして木乃香と刹那、のどかと夕映がい

た。

キノピオ「皆さん、よくご無事でえ〜！」

木乃香・刹那・のどか・夕映「!?!」

まき絵・亜子・裕奈・アキラ「!?!」

その時、マリオ側にいた四人の少女と、ヨッシーやドンキーコング側にいた四人の少女がお互いを見合つと、

思わず目を大きく開きながら驚いた。

刹那「さ、佐々木さん!?!」

木乃香「亜子!?!」

のどか「明石さん!?!」

夕映「大河内さん!?!」

まき絵「刹那さん!?!」

亜子「このか!?!」

裕奈「本屋!?!」

アキラ「夕映!?!?!」

彼女達がお互いそう呼び合つと、思わず感動の笑みを浮かべながら、お互い駆け付け出し始めた。

木乃香「うわあ〜〜〜!!! 佐々木さんにみんなあ!!! やつと会えたわあ〜〜〜!!!」

まき絵「そう言う木乃香ちゃんもやつと会えて嬉しいよあ〜〜〜!!!」

刹那「お、お嬢様、落ち着いて…!!!」

八人は喜びに満ちた感動の涙を流しながら、お互い抱き合った。

マリオ「やつと他の友達と再会出来たみたいだな!」

ピーチ「よかつたわあ…無事に見付けられて…。」

彼女はそう言いながら、思わず感動していた。

キャサリン「どうやらあの子達もまき絵ちゃん達のお友達のような?」

デイディー「まさかこんな直ぐに見付けるなんて驚きだよ…！」

隊長「キノじい殿、ただいまお戻りに参りました！」

彼はそう言いながら、キノじいに敬礼した。

キノじい「うむ、良くぞ木乃香殿のお仲間を見付けられたの！ご苦労ご苦労！」

キノピオ「ジユゲムさん達もありがとうございます、わざわざ任務を引き受けてまで彼女達付けてくれて…。」

ジユゲム「いえいえ、何を仰るのですか？ 私達は友達ではありませんか？」

ノコノコ「友達のためなら、どんな事情でも手助けはしますよ！」
クリボー「そうだそうだ！それが友達つてもんだろ？」

彼ら含めたブラボーチームが笑顔でキノピオにそう言った後、横にいたアキラは彼らを見てこう思った。

アキラ（…あの人達、ホントに味方だったんだね…。）

マリオ「しかし刹那、木乃香！他の友達と出会えてよかったな！」

ピーチ「のどかと夕映もよかったね！」

刹那「い、いえ！これはマリオさん達のおかげですよ！」

のどか「そ、そうです！ピーチ姫達の力がなかったら、こうやって佐々木さん達と再会する事が出来ませんでした…。」

本当に…本当にありがとうございます…！」

彼女はそう言いながら、マリオ達にお辞儀した。

デイジー「ちょ、お、お辞儀なんてよしなさいよお！友達として当たり前前的事をしたんだから！」

キノピオ「おや？そう言えばあちらにいる方々は…？」

彼女はドンキーとデイディー、ヨッシーとキャサリンに振り向きながらそう言った。

ドンキー「よっ、マリオ！久しぶりだな！」

ヨッシー「マリオ〜！ お久しぶりい〜！！」

マリオ「ドンキーにディディー…！ それにヨッシーとキャサリンも…！」

夕映「知り合いなんですか？」

ルイーザ「うん。 よく一緒にカートレースやスポーツで遊んでるから…。」

キャサリン「ピーチちゃんにディジーちゃん、お久しぶりね！ 元氣してたかしらあ？」

ディジー「え、まあ…ボチボチって感じね。」

ピーチ「でも相変わらず元気そうで何よりって感じね。」

マリオ「それより、お前達は何でここにいるんだ？」

ヘイホー「僕達が連れて来た二人の保護者として一緒に来させてもらったんだ。」

ディディー「まあ、それもそうだけど…。」

ドンキー「実は俺達…お前に話したい事があるんだ…。」

彼は真剣な顔をしながら、マリオにそう言った。

マリオ「俺に話したい事が…？」

……その後、マリオ達は港からピーチ城に戻り、城内のダイニングルームに集まった。 その間にドンキーとヨッシーは、自分達の島で起きた全ての出来事を、マリオ達に説明した。

マリオ「な、何だつてえ！？ カジオー軍団が二人の島をお！？」

彼は両手をテーブルに叩きつけ、立ち上がりながら愕然としていた。

無論彼の周りにいた者は、

その行動に対し驚いていた。

ドンキー「あ、ああ……。確かケンゾールとか言う奴が、俺達コングファミリーの宿敵であるクレムリン軍団のアジトを乗っ取り、

どうにかしようかと企んでたんだが…俺達やクレムリン軍団、それと裕奈とアキラのおかげで、

奴らをアジトから追い出したけどな。」

ヨッシー「そうそう！ 僕達んトコにもオノレンジャーとか言う悪い奴らが来てね、仲間達を道具扱いしようとしたんだけど、

僕達だけじゃなく、まき絵と亜子のおかげで、どうにかしてそいつらを島から追い出したんだ！」

ルイーダ「え、そうなの!？」

デイジー「あんた達すごいわねえ！」

まき絵「い、いやあ……。」

裕奈「それほどもお……。」

二人に褒められたまき絵、亜子、裕奈、そしてアキラは、思わずテテした。

ピーチ「けどマリオ…カジオー軍団って……。」

マリオ「ああ……バカな……あいつらがまだ生きてただなんて

……!？」

二人は不安の表情を浮かびながら、お互いにそう言った。

夕映「あの、一つ聞いていいですか？」

刹那「その…カジオー軍団とは一体何者なんですか？」

ルイーダ「そう言えば僕も少しだけその名前を聞いた事があるけどお……。」

デイジー「私は余り関わった事がないから、よく知らないけどね。」
キノピオ「ああ、そう言えばお二人共、事件当時にいませんでしたね。」

マリオ「……カジオー軍団とは、大空彼方…つまり異世界から来

た凶悪な組織の事だ。けどそいつらは生き物ではなく、

魂を宿った武器の存在なんだ。何でも永遠に続く戦争と武器の世界を作るために、一度この世界に襲い掛けたんだ。

この世界を…自分達だけの物にするために…！」

のどか「ぶ、武器で出来た存在…ですか…!？」

アキラ「そう言えば戦ってた時、あいつら生きてた感じがしなかったけど…。」

マリオ「でも、奴らが復活したなんて…絶対有り得ない…！なぜなら奴らは俺の手で倒されたんだから…!！」

デイディー「え…倒されたって…?」

ドンキー「おい、マリオ…まさかあいつら、元々は死人だったって言うのか!？」

ジュゲム「しかし…そんな奴らが最初から消滅されていたとしたら…どうやって復活したんでしょうかね？」

テレサ「ケケケ…誰かによって復活させたんじゃないのか？」

マリオ「そんなはずがない!! あいつらの親玉である『カジオー』は俺達との戦いで死んだんだ!!」

奴がない以上、誰も復活させる事なんて出来ないよ!

亜子「それやったら…どうやってそいつらが復活したんやろ…？」

アキラ「心当たりとかないのかな…？」

ピーチ「ある訳がないわ…カジオー軍団はキノコ王国を恐怖に陥れた最悪の組織…」

そんな奴らを復活させたいほど尊敬する奴なんて誰一人もいないわ。」

ドンキー「あ、そうそう…ついでにお前達に見せたい物があるんだ。」

マリオ「見せたい物？」

ドンキー「実は奴らが俺達の島を襲ったのは、ある物を探すためだ

つたらしいんだ。

最初はクルールの奴が持ってた奴なんだが……。」「
ヨツシー「あつ、そう言えば僕の所もそうだよ！ 奴らが僕達の島を襲ったのも、ある物を探すためだったらしいんだよ！

それ、今持つてるんだけど、一体何なのか良く分からないんだけど……。」「

二人はそう言いながら、下から二つの星型の宝石を取り出し、それをマリオ達に見せた。

ドンキー「これなんだが…一体何なのか分かるか？」

マリオ・ピーチ「!？」

ドンキーとヨツシーがその宝石を見せた瞬間、マリオとピーチは驚きの表情を見せた。

木乃香「わあ〜、めっちゃキラキラしてるわあ〜！」

刹那「確かに不思議に思うほど綺麗ですね…。」「
のどか「ホントに綺麗……。」「

夕映「しかし何なんでしょう、この星の形をした宝石は…?」

四人は不思議に煌く宝石に見惚れながらそう言った。

ピーチ「マ、マリオ……これって…!？」

マリオ「あ、ああ…間違いない……『スターストーン』だ!！」

デイディー「スターストーン?」

キャサリン「何なの、それ?」

マリオ「……『スターストーン』は…『ゴロツキタウン』と言う、ここから離れた地方にある町に伝わる、

不思議な力を宿った伝説の秘宝なんだ。元々はこの世界を闇の世界に変えようとする『カゲの女王』を、

『千年の扉』の中に封印するために使われていて、その力は実に奇跡を生み出す事が出来るほど凄まじいんだ。

俺が以前それを使って、復活したカゲの女王を倒したんだ

けど、

あの後その石はそのままどこかへ飛び散っちゃって……。

「デイジー「ピーチも知ってるの、この石の事…？」

ピーチ「ええ…私もその当時、深く関わってたから……。」

彼女は苦そうな表情を浮かべながらデイジーにそう答えた。

実は以前、ピーチはキノじいや複数のキノピオ達と供にゴロツキタウンへ滞在していた時、謎の悪組織『メガバツテン』に攫われ、月にある基地で閉じ込められた事がある。そして千年の扉が開放された後、彼女は復活したカゲの女王によって憑依され、救出にやって来たマリオ達に襲い掛けた。だが残された意識でカゲの女王のコントロールを制止し、マリオの活躍でカゲの女王を倒し、正気を取り戻す事が出来た。ピーチにとっては、とても苦い思い出である。

マリオ「けど、ドンキー…ヨッシー…その石、一体どこで手に入れたんだ？」

ドンキー「いや、さっき言ったように、クルールの奴が持ってたんだ。何でも基地の近くにある浜辺で見付けたとか……。」

ヨッシー「僕は散歩中に見付けたんだよ。」

マリオ「って事は、カゲの女王を倒した後、用済みになったと思っ、そのままキノコワールド大陸中に飛び散ったのか…。」

彼が腕を組みながらそう呟いた後、木乃香は小声で刹那にこう言った。

木乃香「…不思議な力を持った石って…何だかスタークリスタルみたいな物やな…。」

刹那「そ、そうですね……。」

二人は多少不安そうな表情を浮かべながら、ドンキーとヨッシーの手に持ったスターストーンを眺めていた。

ルイージ「けど良く分からないなあ？ そのカジオー軍団って奴、何でスターストーンを狙ってるんだろ？」

キノピオ「もしかして…以前のようにそれを使って世界征服とかしようと思ってるんじゃない？」

マリオ「…可能性はあるなあ……………」

彼が深刻そうにそう言つと、横にいたピーチは不安そうに彼にこう言った。

ピーチ「マリオ……………この先どうなると思つ…？」

マリオ「分からない……………ただ、あの時のような同じ事が起こらなければいいんだけど……………」

彼は不安そうにそう答えた後、彼の周囲にいる者全員も同じく、不安に思うようになった。

……………モビウス大陸…とある砂漠にて、一軒の施設が建っていた。

その施設には大きな電波塔や無数のミサイルが設置されていて、正に機械仕掛けの建物であった。その建物内に、

二体のロボットがいた。一体は赤と黒のカラーリングをした球状のロボットで、

もう一体黄と黒のカラーリングをした四角形のロボットであり、二体は慌てながら廊下を走り……………いや、跳ねていた。

赤ロボット『大変だ大変だ……………！！』

黄ロボット『大変デゴザル……………！！』

すると二体のロボットが廊下の先にある扉に辿り着くと、赤いロボットは扉の横にあるボタンを押し、扉を開かせた。

赤ロボット『ぼす、大変デ……………！！』

オーボット』、『キューボット』！！

貴様らあ、それは一体どう言う事じゃ!？」

キューボット『アババババツ!! ト、殿、才許シヲオ~~~~…
デゴザルウ!!』

オーボット『シ、知りマセンヨオ!! 我々ハタダふらっぱーカラ
ノ情報ヲソノママ報告シタダケデスウ!!』

彼がそう言った後、エッグマンはそのまま手を離し、二体のロボッ
トをそのまま床に落とした。

エッグマン「ええい、そんな事は有り得ん!! ブラックアーム
ズが復活したなど、絶対に有り得んぞ!!

なぜならあの組織は『シャドウ』の手によって破壊さ
れたんじゃぞ!?! にもかかわらず、

勝手に復活しよったなど、証拠なしでは絶対有り得ぬ
事じゃ!！」

オーボット『痛テテテ…………シ、シカシぼす…残念ナガラ、ソノ証
拠ナラ…ソノ偵察用ふらっぱーカラ写真ガ送ラレテキマシタ。

コチラデス。』

彼がそう言った後、天井から大型画面が下りて来て、そこから数多
くの写真が写り出して来た。

その写真にはキノコワールド大陸にあるダイヤモンドシティで大暴
れしているブラックアームズの兵士達が写っていて、

それを見たエッグマンは愕然としていた。

エッグマン「んなツ…!?! こ、これは……………確かにブラックア
ームズじゃ! あの忌まわしい上不気味な雑魚連中……………

間違いなくブラックアームズじゃ!! おい、この
写真は真なる物なのか!？」

オーボット『ハイ、マチガイアリマセン! 予メ徹底調査ヲ行イマ
シタガ、合成デモ何デモアリマセンデシタ!』

エッグマン「くそお、一体これはどう言う事なんじゃ!?! 死ん

だはずの連中が蘇るなど、有り得る事なのか!?

って言うかこの写真に写っている街はどここの物じゃ!?
ステーションスクエアか!?

それとも連邦政府のいるセントラルシティか!?

それとも軍のいる『ウエストポリス』か!?

オーボット『イエ、ドチラデモアリマセン。　　コノ写真八全テ、だ
いやもんどしていカラ来タモノデス。』

エッグマン『何、ダイヤモンドシティ!?!?　　ダイヤモンドシティ
と言えば、キノコワールド大陸にある大都市……………』

後にワシが支配する予定となっている街ではないか
!?!?　　なにゆえ奴らがモビウス大陸ではなく、

キノコワールド大陸を襲ったんじゃ!?!?』

オーボット『サア、ソコハ私デモ分カリマセン。』

キューボット『シカーシツ!!　　ソノ謎ノ敵共ハアル二人ノ女子共
ニ敗レ、撤退シタソウデゴザル!』

エッグマン『何?　　二人の女子共?　　それは誰の事じゃ?』

キューボット『ハハツ!　　コチラデゴザル!!』

彼がそう言つと、大型画面からブラックアームズと戦っている二人
の少女の写真が写り出して来た。

その少女達はもちろん、現在ダイヤモンドシティに居付いている『
コスプレカード』姿のエヴァと美空であった。

エッグマン『むっ…?　　何じゃこの小娘共は?』

オーボット『サア……………情報ニヨリマスト、彼女達ガ街ヲ襲ツタ輩
共ヲ追イ払ツタ者ラシイデス。　　タダコレガ不思議ナ事……………』

コノ二人ノ少女ニハ妙ナ力ヲ持ツテイルヨウデ……………
…何ヤラ氷ヲ放ツタリ、猛すぴーどテ走ツタリ、

敵共ヲ操ツタリナド……………オカシナ力ヲ使ツテイタ
ラシイデス。　　シカモコノ姿ヲ見テミルト……………

だいやもんどしていハオロカ、もびうす大陸ノ人間

デハナサソウ二見エマスガ……………」。

彼がそう説明すると、その間にエッグマンはエヴァと美空の写真を
見ながら、妙に苛立っていた。

エッグマン「うむむむむう……………」何じゃこいつらは……………」

まるで以前ステーションスクエアでワシをコテンパ
ンにしたあの小僧共とよく似ておるなあ……………」！？

そう言えばあの小僧も奇妙な力を持つとったようじ

やが…もしや仲間か!？」

オーボット「イヤ、ダカラ私二聞イテモ分カンナイツテ。」

彼はやる気のないタメ口でそう答えた。

エッグマン「しかしどう言う事なんじゃ……………」！？ 完全に滅びたブラ
ックアームズが予告なしに復活しよった……………」！

しかもモビウス大陸ではなくキノコワールド大陸を
襲うとは……………」一体何があると言うんじゃ!？」

彼は両手を腰にかけ、歩き回りながらそう呟いた。

キューボット「アツ、シカシ殿! きのこわーるど大陸が襲ワレタ
ノハ、

ソノぶらつくあーむずトカ言ウ連中ダケデハナイ

ヨウデゴザル!」

エッグマン「ああ? それはどう言う事じゃ?」

キューボット「情報ニヨリマスト、ぶらつくあーむずノ他二謎ノ敵
軍団モ出現シタラシイデゴザル! シカモ彼奴ラガ襲ツタノハ、

何デモよっしーあいらんどヤDKあいらんどト言
ツタ島ダトカ……………」。

エッグマン「何? ヨッシーアイランドにDKアイランドオ〜?」

しかし、彼がそう言った後、突然何かを思い浮かべ、静かに笑い始
めた。

エッグマン「……………」フッフッフッフッフ……………」これはいい事を思い付

いたわい……。多少尺に合わんが、

奴らも加えれば問題なかるう…！」

オーボット「ハイ…？」

彼が首を傾げている間に、エッグマンは彼とキューボットに振り向き、こう命じた。

エッグマン「オーボット、キューボット！！　メッセージメカを用意しろ！！　そしてそいつをあいつらの所へ

送り付けるのじゃ…！」

オーボット「エ…アイツツテ、誰ノ事デスカ？」

エッグマン「決まつとるじゃろ？　キノコワールド大陸の支配を議論むカメ軍団の暴君…：…クツパじゃよ…！」

オーボット・キューボット「エエエエエエ！…？！」

エッグマンは不敵な笑みを浮かびながらそう答えると、二体のロボットは思わず大声を上げながら驚いた。

…：…キノコワールド大陸にて…灼熱のマグマに囲まれた荒野にて、謎の居城が建てられていた。

その城は多少黒ずんでいて、所々に鋭い刺が飾られ、更に見覚えのある暴君の顔が飾られていた。

そう…：…ここはカメ族の大魔王クツパが支配する城…「クツパ城」であった。

そんな城内で、クツパの側近であるカメックが箒に乗りながら、慌てた表情で廊下飛んでいた。

カメック「大変だ大変だ大変だ大変だあ…！！！」

彼はそう言いながら飛んでいると、廊下の先にある大きな赤い扉の

前に辿り着いた。

しかしその扉の前には二匹のトゲノコが立っていて、誰も通せまいと見張っていた。しかしそんな彼らがカメツクに気付くと、彼に向けて敬礼した。

トゲノコA「おや、これはカメツク殿！　ここまで来て如何なされましたでしょうか？」

カメツク「イカもタコもないわ！！　今とんでもない情報を入手したのだぞ！！　さつさとこの私をクツパ様の所まで通すのだ！！」
トゲノコB「えっ…し、しかし…クツパ様は今、先日の敗退によりまだ号泣の真つ最中で、どんな状況であろうが、

こっちが終わるまで決して誰にも中に入れさせるなど命じられましたか……………」

……………その頃クツパは…。

クツパ「うわあああああああん！！！！　何で我輩はいつもいつもあの髭に負けるのだあ……………！！？」

いつもいつも我輩が負けてばかりで悔しい悔しい悔しいのだあ……………！！　あの髭ずるいのだあ……………！！！！

えげつないのだあ……………！！　うええええええええええええええええん……………！！」

カメツク「何い！？ クツパ様はまだあの失敗で泣いておられるのか！？ あれからもう五日間以上も経ってるって言うのに……………」

これはある意味記録更新だな？ って言うか…そんな事言ってる場合じゃない！！ とつても緊急事態なのだ！！

とつととクツパ様に会わせるのだ！！」

トゲノコA「いや、しかし、そんな事したらクツパ様ご本人も怒りますよお…！！」

トゲノコB「そうですね！ ただでさえあのお方が恐ろしいほど短気だからと言って…！！」

カメツク「そんなの、責任は私が取る！！ 今はとつても重要な状況なのだ！！」

モタモタしてないでとつとと……………！！！！」

「何ぢや、カメツクや！ さつきから騒々しい…！！」

その時、カメツクの背後から老婆の声が聞こえ、彼が後ろへ振り向くと、そこにはもう一匹のカメツクがいた。

しかしそのカメツクは白髪の老婆であり、紫色の魔法使い服に三角形の赤縁メガネ、更に絵筆のような箒に乗りながら飛んでいた。

そんな老婆を見たカメツクは、口を大きく開きながら愕然としていた。

カメツク「ほげえっ！？ お、お、おつ母^かさん！？」

トゲノコA「おお、これはこれは『カメツクババ』殿！ いつからお戻りに…？」

カメツクババ「今戻って来たばかりぢやよ！ ったく、帰って来た早々何騒いでんのかね、このバカ息子が！」

カメツク「だ、誰がバカ息子ですか！？ って言うか、おつ母さんは休暇のために『ドルピック島』へバカンスしに行つて、

一ヶ月には戻って来ないはずでは……………!?!」

カメックババ「そう思ったんぢやが、急に手下からの連絡が来て、直ぐに戻る羽目になったのぢやよ!

　　つたく、せつかく買った新品のビキニで真夏の海を楽しんで男共とウハウハしようと思っただのに、

　　突然の情報で台無しぢやよ!」

彼女は不機嫌そうにそう言った後、彼女は手に持った杖をカメックに指しながらこう言った。

カメックババ「それよりカメック! 帰って来たついでに部屋を調べてみたが、何ぢやねあの散らかしっぷりは!?

　　ワシはお前さんを部屋を汚していいようなバカ息子に育てた覚えはないぞよ!」

カメック「はあ…? 何を言ってるんですか? いつも通り綺麗ですよ? 本はちゃんと棚にしまってるし、

　　ベッドや服もちゃんと綺麗に整ってますし、消臭剤とか掃除機とかちゃんと毎日のように使ってますし……………」

カメックババ「バカモオ……ン!!!! まだ汚いわい!!! 小っちゃい埃の欠片に煎餅の粉!!!!

　　削られた消しゴムの小っちゃい破片に変な髪の毛一本!!!! それが残つとるんぢやよ!!!!

　　それにワシはお前の今使ってる消臭剤の匂いが大嫌いなんぢやよ!!!!

　　分かったのならとつとと部屋に戻ってちゃんと塵一つ残らず全て完璧に掃除するんぢや!!!!

カメック「ぐぐぐつ……………くそお……分かりましたよ……。 ちゃんと片付けますよ、完璧に……………」

　　つたく、つまんねえの……………」

さすがに怒る彼だが、それを抑えながら小声でそう呟き、そのままカメックババを通り過ぎながら飛び去った。

カメツクババ「さあ〜て、そうと決まれば、後はワシの定番ぢやな！ さつ、分かったのならとつとこのワシを通すがよろし！」
トゲノコB「え、ですが、今クツパ様は取り込み中で、邪魔しては行けないと……………」

カメツクババ「お前さんらレディースファーストと言うことわざを知らんのかね!？」

退かないのならこつちから退かせてもらうぞよ！

！ ほれいつ!!!!!」

ドガアンツ!!!!

カメツクババが杖を振ると、扉が勝手に開き、その場で立っていた二匹のトゲノコを押し潰した。

トゲノコA・B「アベシツ!？」

カメツクババ「そうそう、美しいレディーを先に通すのが常識ぢやよ！ 覚えとき!!!」

彼女はそう言いながら、そのままクツパの部屋の中へ入って行った。

カメツクババ「クツパ様、ただいまお戻りに参り……………」

チユドオオオオオオオオオオオ!

しかし、カメツクババが部屋に入った後、クツパが放った火球に命中し、爆発によって黒こげ状態になった。

クツパ「バツカモ〜〜ン!!!! 今は取り込み中だから誰も入るなと言ったはずだあ!？」

カメツクババ「痛たたた……………こ、これは申し訳ないですぢや……………」

クツパ「って言うかカメツクババ!？ 貴様、休暇中になぜここに戻って来てるのだ!？」

カメックババ「いやいやあ………実は偵察中の手下からの連絡が来てましてな………情報によりますと、

先ほどヨツシーアイランドとDKアイランドが何者かによって襲撃されたらしいのですぢゃ。」

クツパ「な、何いつ!? ヨツシーアイランドとDKアイランド!? いつか我輩の物にする予定となつてる島が何者かだとお!??

一体誰だ!? 誰によつてだ!? まさかモビウス大陸にいるあの爺の仕業かあ!?!」

カメックババ「い、いや、違うようですぢゃ……。ただ………何の奴なのかさすがにワシでも分からないようで………」

クツパ「分からない!? どう言う事なのだ!? 偵察共はその敵の名前を教えなかったのかあ!?!」

カメックババ「さあ……名前ならお聞きしましたが、聞いた事ない名前でしたので、余り気にもしませんでしたな?」

クツパ「覚えとけよ普通!! 何で貴様はそこまでマイペースなのだあ!?!」

しかし、あーだこーだしている間に、先ほど去っていたはずのカメックが戻って来て、閉まっていた扉を思いつきり開き、部屋の中へ入って行った。

カメック「だあもう!! おつ母さんが報告しても意味ないでしょ!?! 私が全部説明しますよ!?!」

カメックババ「なあつ!? コラ、あんた!? これはワシの仕事ぢゃ! お前さんは黙って部屋に戻って掃除しなさい!?!」

カメック「何も知らないまま報告するつもりですか!? 私の方がもつと詳しいのですから、

おつ母さんはいい加減休んで行ってくださいよ!?!」
カメックババ「何い〜!? それが親の前に言う態度かね!?!」

ワシはあんたをそう言う不良のような態度を振舞うように育てた覚えはないぞよ!?!」

カメツク「どんな性格にするか私の勝手でしょうが!? 自己中心なおつ母さんと一緒にしないでもらいたいですよ!!!」

クツパ「いい加減にせんかこのバカ親子がああああああああ!!!」

彼が大声で怒鳴り出すと、その衝撃によりカメツクとカメツクババの親子喧嘩が収まった。

クツパ「もういい!!! カメツク!!! お前の方が詳しいからお前が言え!!!」

カメツク「ハハツ、喜んで!!!」

彼がそう言いながら拜むと、隣にいたカメツクババは密かに舌打ちした。

カメツク「実は…先ほどおつ母さんが言ったように、ここ数時間前にヨッシーアイランドとDKアイランドを偵察していた手下から、

とんでもない情報を入手しました! 何でも……………その

……………二つの島は、カジオー軍団に襲われたそうです……………!」

クツパ「な、何だとおおおおおおお!?!?!?」

彼が思わず大声で驚き出すと、カメツクとカメツクババを驚掴みで持ち上げ、顔面まで接近しながらこう言った。

クツパ「カジオー軍団だとおおおお!?!?!? 何戯言を言つとる

のだあ!?! あの連中は確実に滅びとるんだぞ!?!」

奴らがまだ生きてるなど、絶対有り得んぞお!?!」

カメツクババ「アブブブ……………ワ、ワシはまだ何も言つと……………。

……………」

カメツク「ギガガガガ……………し、しかしクツパ様……………残念ながら…情報は事実であります……………!!!」

なぜなら…証拠写真も届いて来ましたんで……………!!!

こ、こちらです……………!!!」

彼が苦しみながらそう言い出すと、杖から発生した魔法により、大型テレビが出現した。

そしてその画面からヨッシーアイランドを襲撃したオノレンジャーの姿や、

DKアイランドを襲撃したケンゾールとハイパー達の姿が写り出して来た。それを見たクツパは、

思わず唾然とした状態で驚掴みしていた二匹の亀を手放した。

クツパ「んなっ…!? こ、これは…!?」

カメック「ゲホゲホッ…! は、はい…この映像は全て、

ヨッシーアイランドとDKアイランドを偵察していたパタパタ部隊により撮った物です! 念のために申し上げますが、

これはあくまでも合成によつて製造した物ではありません! 何の細工をせず、ただそのまま現像した物です! この映像を見て、

いかがでありましょうか?」

クツパ「ホ、ホントだ…:…:これは全部、間違いなくカジオー軍団だ!…! こ、これは一体どう言う事なのだ!…?

この我輩とマリオの手で倒したあのカジオー軍団が、どうやって復活したのだ!…!? そもそも奴らはなぜあの島に!…!?」

カメック「さあ…:消滅したはずの奴らがどうやって復活し、なぜあの島にいるのかは、さすがに私でさえもよく分かりませんが…:…:」

カメック「ババ「はあ、何ぢや? お前あいつらの事知つとつたのかえ? このワシに黙って何て白々しい…:…:!!」

カメック「白々しいって…:その時おつ母さんはクツパ軍団に所属してなかったじゃないですか!」

クツパ「ええい!! そんな事よりも!! カメック、カジオー軍団の奴らはあの二つの島を襲撃したと聞くが、

奴らはそこで何をしたのだ!？」

彼がそう言つと、再び親子喧嘩しようとする二匹の亀の行動を阻止させた。

カメツク「ハッ! 偵察パタパタ部隊からの情報によりますと、ヨツシーアイランドにいたカジオー軍団はヨツシー達とヘイホー達を捕獲し、

奴隷の如く島の発掘作業をさせていたそうです。ただ何を掘り起こそうとしていたのかは分かりませんが……………。

それと、DKアイランドにいたカジオー軍団は、あのクレムリン軍団を捕縛し、アジトごと占拠したそうです。

だが、どちらとも島民と見知らぬ者達により敗れ、撤退したそうですが……………。」

クツパ「島民と見知らぬ者達…? 島民と言えば…ヨツシーやドンキーコングの事だな? だが見知らぬ者とは誰の事だ?」

カメツク「はい、こちらでございます。」

彼がそう言つと、大型テレビの画面が別の写真に切り替わった。

その画面にはカジオー軍団と戦っている『コスプレカード』姿のまき絵と亜子、そして裕奈とアキラが写っていた。

クツパ「むっ…これは何なのだ?」

カメツク「さあ…私もよく存じないのですが、何でもカジオー軍団を負かせ、島から追っ払ったと言われている少女達のようにあります。」

ただこの者達はただの少女ではなく、何やら不思議な力を宿っているようでして……………何なんでしょう…

まるで魔法のような物なんです、これもまた見た事もない物で……………。そもそも、彼女達を見ていると、

どうもダイヤモンドシティやモビウス大陸から来た者ではなさそうなんです。」

カメツク「ババ! 何ぢやい、この小娘共は!? あんなピチピチな格

好を着るとは何て生意気な!?

ワシの方がもっとセクシーになれるって言うのに

…!」

カメック「おつ母さん、少しは黙ってください。」

クツパ「んぬう~~~~…何かよく分からんが、この小娘共を見ると妙に腹が立つのだ……………!」

まるで以前マリオと一緒に我輩を負かしたあの小娘共を思わせるのだ…!!」

彼がそう言いながら、以前キノコ王国でマリオと刹那と戦った時の事を思い出し、無性に苛立っていた。

カメック「そう言えば…確かに彼女達が使っていたあの力は、以前クツパ様をコテンパンにしたあの小娘達とよく似てますねえ…?」

さては仲間か何かでしょうか………………?」

クツパ「ええ~~~~い!! しかし分からん!! 我輩とマリオの手でぶつ潰したはずのカジオー軍団が、なぜ勝手に復活しよったのだ!?

しかも我輩の許可なしにヨツシーアイランドとDKアイランドを支配しようとしたとは…実に許さん!!」

カメック「あ、しかしクツパ様! カジオー軍団が二つの島を襲っただけでなく、もう一つの情報も入手しました!」

クツパ「なぬ? それは何の情報だ?」

カメック「それが…ダイヤモンドシティにも謎の軍団によって襲撃されたと言う情報です。ただ、見た事もない軍団らしく、

カジオー軍団とは何の関係がなさそうだとか…。」

クツパ「何、ダイヤモンドシティまでだ?!? あの街は我輩が後々支配する予定となってる街ではないか!?

しかもカジオー軍団とは関係ない奴らが襲っただとお!?

それってどう言う事なのだ!?

そもそもその得体の知らん奴らとは一体何者なのだ!?

まさかあの卵爺の仕業ではないだろうな!?

カメック「い、いや、あの男とは関係ありません! 何しろ情報によれば、空から降りて来た連中らしく…詳しくは私でも分かりません!」

彼は自信の顔に近づくクツパに戸惑いながら説明した。ちなみに彼らが言う男とは、当然ながらあのエッグマンの事である。

しかし、その間に扉が思いっきり開き、そこからブロス隊長が飛び出して来た。

ブロス隊長「クツパ様あ!! た、大変でございます!!」

クツパ「でえい、何だ貴様あ!?! 今は取り込み中だから勝手に入るなと…!!」

ブロス隊長「そんな事よりもクツパ様、大変であります!! 今城門から招かざる客が出現し、クツパ様とお会いしたいと申ししております!!」

クツパ「何い、客だとお!?! 今はそれどころではなかるうが!!」

そんな奴追っ払え!!」

ブロス隊長「いや、しかし…ゴメスツ!?!」

その時、彼の背後から何かが飛行し、ブロス隊長の頭に激突しながら部屋に入ってきた。

???「ええい、バカモオ〜ン!!! いつまで待たせるつもりじや!?!」

クツパ「!?!? そ、その声は…!?!?」

彼がその謎の物体を目の当たりにした時、驚いた表情を浮かべながらそう言った。その浮遊物体の正体は、

画面と衛星版の付いた鋼鉄の球状型メカで、その画面から見覚えのある老人が映っていた。

そう…その男はあのDr. エッグマンであり、そのメカこそは彼が開発したメッセージメカであった。

エッグマン『おやおや、これはクツパ殿…相変わらずでありながら
久しぶりじゃな!』

クツパ「エッグマン!? 貴様、何しにここへ…!?」
カメックババ「おや、噂をすれば立派な髭を持ったエッグマン殿で
はないか! 全く、相変わらず変なおもちゃを使いおって…」

どうせなら直接に会いに来んかい!? そしたら
この麗しゅうあたしがとことん相手になれるのに…。」
彼女は無駄なポーズを取りながら、メッセージメカから映るエッグ
マンにそう言った。

だが逆にエッグマンはそれに対して不快に思いながらこう返事した。
エッグマン『ええ〜い、何が麗しいんじゃ、この気持ち悪い亀婆め
が!! ワシは貴様のような干からびたスッポンなんぞ興味ないわ
!!』

それにワシがここに直接来ないのは…正直面倒くさ
いからじゃ! 一々機械を使うと燃費がもつたないからのう!

世の中はエコじゃ、エコ!』

クツパ「誤魔化すでないぞ、この卵爺め!! 特に貴様にはエコな
んぞ興味ないはずだろうが!? それより貴様あ、

勝手に城に入り込んで、無断に我輩と会いたいだの言い
おつてえ!! 一体何しにここへ来たのだ!？」

エッグマン『まあまあ、落ち着くんじゃクツパよ! ワシは別に貴
様にケンカを売るためにここに来たのではないのじゃよ!』

クツパ「はあ? どう言う意味だ!？」

エッグマン『フンツ! キノコワールド大陸の情報、もうとつくに
モビウス大陸フシのころに届いておるんでな!

どうやらヨッシーアイランドとDKアイランドに訳
の分からん敵軍団に襲撃されたようじゃな?』

彼は不敵な笑みを浮かべながらそう言うと、クツパはそれに反応し、

凶星を受けた。

クツパ「んぐつ…!? 貴様、なぜそれを…!?」

エッグマン「ホーツホツホツホツ!!! 惚けたって無駄じゃ!

実はキノコワールド大陸にはワシの偵察用メカを送り込んだんじやよ!

予めキノコワールド大陸の情報を逸早く入手するた
めにな!」

クツパ「何いつ!? 貴様あ、まさか何れ我輩が支配する事になる
キノコワールド大陸を横取りするために、

わざわざスパイメカを送り込んだとでも言うのかあ!?!」

エッグマン「そんな事よりも、こっちも問題を抱えとるんじやよ!」

クツパ「はあ!?! 問題!? 何なのだ、それは!?!」

エッグマン「情報によると…どうやらダイヤモンドシティも謎の敵
に襲われたそうじやな? じゃが…」

実はワシはあの敵軍団をよく知つとるんじやよ!」

クツパ「な、何だとあ!? 貴様、ダイヤモンドシティを襲った奴
らの事知つとるのかあ!?!」

カメック「一体何者なのだ!? 我がクツパ様に教える!」

エッグマン「おう、いいぞい? そんなに知りたければただでも教
えてやるぞい? 奴らの名はブラックアームズ!

遙かなる宇宙の果てから現れ、地球を滅ぼそうとし
た暗黒の宇宙人軍団! ありとあらゆる兵器を利用し、

ワシやG・U・N・軍隊をも押し上げるほどの強さ
を持った、恐ろしき敵軍団なのじゃ! じゃが、奴らはとシャドウ
と言う奴に倒され、

軍団は見事に跡形残らず消滅したのじゃが…気が付
いた時には奴らがいつの間にか復活した!

しかもワシの目に見えん所でな!」

クツパ「ブ、ブラックアームズだと…!?!」

カメック「ババ! それは聞いて恐ろしい奴らぢやな…!?!」

カメック「しかしよくぞ存知だな…その敵軍団の事を…。」
エッグマン「そりゃそうじゃ！ 元々奴らはモビウス大陸を襲ったんじゃ！ 軍人の都であるウェストポリスを襲撃し、

しまいには首都である『セントラルシティ』までも襲撃するほどじゃ！ 我がエッグマン帝国も奴らを倒そうとしたが、奴らの使用する兵器が余りにも強力過ぎて、歯が立

たんかったからな！」

クツパ「…フンツ、それはご愁傷様だな！」

彼は腕を組み、エッグマンを見下しながらそう答えた。

エッグマン「そう言う貴様の方はどうなんじゃ？ 貴様が支配する予定となってる二つの島を襲った奴らの事を知つとるんじゃろ？

今度は貴様から教えたらどうなんじゃ？」

クツパ「…………… 奴らの名はカジオー軍団。 異世界とやらから来た連中で、地球を武器の世界に変えようと企んだ悪の軍団だ。

我輩の城を奪い、そこで武器工場を建設し、ありとあらゆる武器型の軍隊を作り、キノコワールド大陸を襲い掛けたのだ！

最悪にも我がクツパ軍団には歯が立たなかったが、マリオとの協力のおかげで、どうにかして城を取り戻し、

カジオー軍団を倒したがな！ だが貴様同様、気が付いた時には復活していたのだ！ 我輩の知らない間にな！」

エッグマン「ほう、なるほど…そう言う事じゃな？ フフツ…これはこれで辻褄が合うのう？」

彼は手を合わせ、再び不敵な笑みを浮かべながらそう答えた。

クツパ「はあ？ それはどう言う意味だ！？」

エッグマン「貴様の敵であるそのカジオー軍団とやらは、復活した同時に再びキノコワールド大陸を襲撃した。

じゃがワシの敵でもあるブラックアームズも復活し、今度はモビウス大陸ではなくキノコワールド大陸を襲った…。

これを聞いて大問題と思わんかね？」

クツパ「だから何が言いたいのだ!？」

エッグマン「つまりじゃ……ここからエッグマン帝国とクツパ軍団を同盟してみてもどうじゃ？ 二つの敵を倒すためのう！」

クツパ・カメック「な、何iiiiiiiiiiii!?!?!」

二人はエッグマンの発言に対し、同時に大声を出しながら驚いていた。

カメックババ「ほほう、エッグマン殿とクツパ様が同盟ぢやとな？

それは聞いて驚きぢやなあ？」

そう言った彼女は、クツパとカメックとは違って妙に落ち着いていた。

クツパ「ふざけるな、貴様あ!! 誰が我がクツパ軍団が貴様のような外道なおもちや軍団と組むかあ!？」

エッグマン「外道とは…貴様、人の事は言えんじやろ…。まあ…人の話を最後まで聞くんじや! どうせ貴様はカジオー軍団だけでなく、

ブラックアームズまでも戦おうと思つとるじやろ？

じゃが、それは無理な話じゃ!

そもそもブラックアームズはこの世界には存在しない、未知なる科学兵器を使つておる!

ワシやG・U・Nの奴らでさえも対抗出来んほどの物じゃったぞ？ それに、ワシはカジオー軍団の事は知らんが、復活した際には貴様の経験以前よりも更に強化されとるかもしれんぞ？ 貴様の古臭い原始的な戦力では、

それ以上を誇る奴らの戦力には当然勝ち目がないわ

!」
クツパ「何い~~~~!?!」

エッグマン「じゃが、貴様には魔法があるかもしれんが、こっちに

は科学と言つ物がある！　そこでじゃ、魔法と科学を合わせるつもりで、

ワシの兵器と軍隊、更にワシの天才的な科学力を貴様に提供しようではないか！　そうすれば、

ブラツクアームズもカジオー軍団とやらも、赤子の群れの如く袋のネズミじゃ！　どうじゃ、なかなかと美味しい話じゃる？」

クツパ「何…魔法と科学を合わせる…だと…！？」

カメツク「それは前代未聞の用件ではないか…！？」

カメツクババ「ほほう、ぢやが意外と面白そうな話ぢやな！」

カメツク「ちょ、おつ母さん！？　何言ってるんですか！？　科学と魔法を合わせるだなんて、そんな有り得ない事をしていいんですか！？」

そもそも相手は我がクツパ軍団の敵！　そう簡単に組んでもいいとでも…！？」

カメツクババ「ワシは別に構わんよ？　ハンサムなエッグマン殿と一緒にられるのならワシは好きにしてもいいくらいぢや」

エッグマン「誰が貴様と一緒にするか、このキモイ河童の干物め！」

カメツク「クツパ様…如何致しましょうか？」

クツパ「……………」

カメツクがクツパに向けてそう問いかけると、クツパは腕を組みながら考え込んでいた。　すると彼は閉じていた目を開き、

エッグマンにこう言った。

クツパ「…貴様の言う事は真だろうか？」

エッグマン「もちろんじゃ！　嘘じゃつたらワシは今頃ここで貴様と戦つとるわ！」

クツパ「…なら一つ条件がある。　もし貴様と組み、あの敵共を倒せたら、キノコワールド大陸は我輩の物となり、

貴様らには指一本触らせない事にする。　それでいいな？」

エッグマン『ふむ…つまりワシらが勝利した時には、ワシがモビウス大陸のみ、貴様がキノコワールド大陸のみと言う形になる…』

平等なる支配か。うむ…さすがにワシが求む領土が少なくなるが…まあ、それもよからう！ いいじゃろう、

その条件、引き受けようぞ！』

クツパ「よし、ならば同盟成立だ！」

カメツク「なつ、クツパ様！？」

エッグマン『ホツホツホツ…いい判断をしたな、クツパよ！ ならば同盟の証とし、握手でもしようぞ！』

彼はそう言った後、メカから手のようなパーツが伸び出し、クツパに向けて差し伸べた。 それを見たクツパは、多少疑った表情をしているが、その手を強く握り、両者共握手した。

クツパ「その代わりに、下手な真似をしたらただでは済まさんぞ！

いいな！？」

エッグマン『安心せい、ワシは約束を守る男じゃ！ この身に誓って、約束するぞ！』

彼がそう言った後、お互いの手を離した。

クツパ「よしっ！ ならばカジオー軍団とブラックアームズを叩き潰すために、早速戦闘準備を整えるぞ！ 集まれ、ノコブロス！！」
彼が大声でそう呼び掛けると、今まで空気となっていたブロス隊長の隣に、素早いスピードでノコブロスの四人が現れた。

ノコレッド「ハッ、クツパ様！ 我らノコブロスをお呼びでしょうか！？」

彼らはクツパの前に跪きながらそう言った。

クツパ「今からカジオー軍団を叩きのめすために戦闘準備を整えるぞ！ 早速その事をコクツパ軍団に伝えとけ！！」

ノコレッド「了解致しました！！」

彼が頷きながら承知すると、四人揃ってその場から素早く走り去っ

た。

クツパ「ブロス隊長！ 今直ぐ他の部隊に連絡し、戦闘準備を整えるのだ！ 足りない分は大量の兵士を募集するのだ！」

ブロス隊長「ハ、ハハッ！！ 畏まりました！！」

彼は敬礼しながら承知すると、急いでその場から走り去った。

エッグマン「では、交渉成立と言う事で、ワシも早速貴様らの所に兵器と部隊を送り込むでしょう。それまでに、また後ほど会おうぞ！」

クツパ「フンツ、約束破つたらただでは済まんぞ！ 分かったな！」

エッグマン「分かるとるわい！ では、ワシはこれにて……。」

彼がそう言った後、彼が映っていた画面が閉じ、メッセーヂメカはそのまま城を後にし、飛び去って行った。

カメツク「クツパ様、本当にあの男を信用していいのですか？ もしキノコワールド大陸を奪うための口実だったらどうなるのですか？」

クツパ「フンツ、その時はその時まで我輩が奴を叩きのめしてやるわ。それまでに奴の化けの皮を剥がすかどうか、

監視するつもりで協力するだけだ。それよりカメツク、

カメツクババ！ 今直ぐに他のカメツク部隊を集め、

戦闘準備を整えるのだ！」

カメツク・カメツクババ「ハハッ！！」

二人は頷きながら承知すると、箒に跨ぎながら飛び去って行った。

…クツパ城内の一室、コクツパ軍団の部屋では、クツパー・含め

た八人の子供達がいた………が、
クツパジャーとルドウィッグが激しいケンカを繰り広げていた。
その間にモートンとロイとレミーは、
クツパジャーとケンカしているルドウィッグを応援していて、ウエ
ンディとラリーは呆れながらそれを眺めていた。

クツパジャー「うおおおおお!!! 何さ、ルドウィッグの兄ちゃ
んなんかこの前ナンパ仕掛けようとしたセクシーなノコノコに、

問答無用に殺虫剤食らってたじゃないかあ!!!」

ルドウィッグ「うるせえ!!! お前だつて『どうぶつの森』で貰っ
た『金の釣竿』を間違えて売り飛ばしたじゃねえか!!!」

モートン「おう、がんばれ俺達の兄貴い!!!」

ロイ「ガキなんかコテンパンにやつけちまえ!!!」

レミー「やつちやえやつちやえ~~~~」

ウエンディ「もう、二人共大人気ないからいい加減にしなさあああ
あい!!!」

ラリー「もう、ホントにいつまでこんなふざけたケンカ続けるのか
なあ……。イギー兄ちゃんも何とか言っ……………」

彼がイギーの方へ振り向くと、勉強机の前に座っているイギーは、
鏡で自分を眺めながら、

ヘアーカーラーで自分の虹色だったモヒカンを緑色に染めていた。

それを見ていたラリーは、元から青い顔を更に青褪めていた。

イギー「…うん、よし! これでOKつと!!」

ラリー「…って、兄ちゃん…その髪……………」

ウエンディ「…って、ちよつとイギーお兄様!? 何髪を染めてるの
!?!」

二人は驚きながらそう言うと、イギーは机の中からある一冊の雑誌
を取り出し、あるページを指しながら、

それを二人に見せた。

イギー「いやあねえ…実は僕達コクツパ軍団、『New!スーパー
マリオブラザーズWii』に復活するらしいんだって!」

コクツパ軍団「な、何だつてええええええ!?!?」

イギー以外のコクツパ軍団は、その言葉を耳にした事で思わず大声で驚き、全員一斉にしてイギーの前に集まり、

その雑誌を読み始めた。その雑誌には確かにコクツパ軍団のイラストがあり、その中に緑髪姿をしたイギーも映っていた。

モートン「おお、ホントだあ!!! 確かに俺達が載ってるぞあ!?!」

ラリー「ホントだあ! しかもCG風にアレンジされてるよあ!」

ロイ「すっげえ!!! 俺達とうとうWiiに進出したんだな!!!」

レミー「すっご〜い!!!」

ウエンディ「確かにすごいわあ!!! ……って言うか、何でイギーお兄様だけカラーリングが違うの?」

イギー「さあ、分かんないけど…一応それに合わせるつもりで僕も髪の色を染め替えたんだけどね。」

ルドウィッグ「しかもすっげえカッコよくアレンジされたなあ!!!」

特にこの俺様もカッコよく!!!」

彼はキザなポーズを取りながらそう言うが、その間に彼の背後にクツパJr.が飛び回っていた。

クツパJr.「ねえ、ちよつと、僕にも見せてよあ!!!」

ルドウィッグ「お前は別にいいんだよ。どうせ何も変わっちゃいねえんだし。」

ロイ「…ん? おい、みんな。これに何か書いてあるぞ?」

彼が自分達のイラストを見ると、ある物に気付いた。そして彼がそう言いながらそれを指すと、全員その指す所を見詰めた。

ロイが指していたのは、そのイラストの上に描かれてある、ある文章であった。しかもその文章には、こう書かれてあった……。

『クツパ』とその手下』

その内容を読んだ一同は、静まり返った。

ルドウイツグ「ちくしょおおおおおおお！！！ 何で俺らがてめえの手下扱いなんだ、くそおおお！！！！」

クツパ』「そんなのスタッフに忘れ去られたからだよお！！！」

モートン「こんちくしょおお！！ もう我慢ならねええええええ！！！」

ロイ「徹底的クソガキブツコロオオオオス！！！」

レミー「コテンパンのまつりだあああああ！！！」

五人は早速怒りに満ちた大乱闘を繰り広げるが、その間にイギーとラリーは悲しみに満ちた状態で落ち込んだ。

ウエンディ「もう、いい加減にしなさあああああ！！！」

イギー「……………手下つて……………」

ラリー「そりゃないよ任天堂さん……………」

しかし、そんな大乱闘の中、部屋の扉が開き、そこからノコブロスが登場した。 そんな彼らが登場した後、

コクツパ軍団は自らの行動を止め、彼らの方へ振り向いた。

ノコレッド「コクツパ軍団の皆さん、クツパ様からの伝言であります！ 今直ぐ戦闘準備を整ってください！」

カジオー軍団との戦を始めるそうです！」

コクツパ軍団「えっ！？ カジオー軍団！？」

八人共同時に大声でそう言い出すが……………。

コクツパ軍団「……………つて、誰？」
彼らは混乱しながらそう返事した。もちろん、伝言を出したノコ
ブロスの四人も、全く知らない。

……………モビウス大陸、エッグマンの秘密基地に戻り、基地内のある
部屋に、ある三体のロボットがいた。
一体は赤い足と首を持った高身長のカモ型ロボット…一体は両腕と鼻
がドリルになって、目がメーター、
足がキヤタピラとなっている水色のロボット…そしてもう一体は頭
に電球が飾っている猿型ロボットであった。
彼らは一つのテーブルの前に集まり、不機嫌な表情を浮かべながら、
退屈な時間を過ごしていた。

??? A「ふあ〜〜……………何だかつまんねえなあ…。」

??? B「なんだ。」

??? C「楽しい事全くないよお…。」

??? A「つたく…何で俺達がこんなつまんねえ仕事ばっかしなき
やなんねえんだよ？俺達はエッグマンの幹部だぜ？」

今頃ならソニックをとっちめるために俺達は出勤して
いるはずだよ！」

??? B「仕方ねえだよ…オラ達が『ビーンヴィル占領計画』に失
敗してから、罰として幹部の座から降ろされてしまったからだあよ。
」

??? C「それまでに僕達はただの雑用扱いにされたけど…まあ、
他の連中みたいに処分されるよりはマシだけどね。」

??? A「くそっ！それでも納得行かねえよ！あのDr.エッ

グマンの最高幹部であるこの『スクラッチ』様が情報管理係…

『グラウンダー』が料理人…『ココナッツ』が掃除人
と言った雑用扱いなんてよお!!!

こんな有様なんであつていいもんなのかよ!? そも
そも俺達がこんな有様にさせたのは、

あの憎たらしいハリネズミのせいだからな!! 今度
また会う時は必ずとつちめてやる!!

そしてそれに成功した時には幹部の座を戻してやるん
だよお!!!

彼は長い片足をテーブルに乗せさせ、怒りながらそう言った。

グラウンダー「んな事言うてもオラ達の出勤なんて無理だよ。」
ココナッツ「そうだよ。あれ以来僕達にはそう言った命令も来な
くなつたし…あると言えばトイレ掃除ぐらい…。」
グラウンダー「オラだつてエツグマン様が欲しがる料理作んの大変
なんだべ？」

いくらちゃんと作ったとしても『不味い』っつー

一言ばっかだよ!」

スクラッチ「まあ…元からお前料理下手だからな…。」

彼がそう言うが、逆にグラウンダーはそれに否定しなかつた。そ
してその後、スクラッチは両手を頭の後ろに組ませ、背を椅子に倒
し、

天井を見ながらこう言った。

スクラッチ「はあ…でも何かねえかなあ? 昔みたいにこう…昔
みたいな派手で楽しい悪巧みが出るような仕事をよお…」

しかし、彼がそう言った後、部屋の扉が突然開き、そこからオーボ
ットとキューボットが飛び出て来た。

オーボット「オイ、オ前ラ!!! ぼすカラノ伝言デスヨ!!!」

スクラッチ「んあっ!? お前らは、新人のオーボットとキューボ
ットじゃねえか!？」

グラウンダー「何だあ、その偉そうでムカつく口はあ!?!」

ココナッツ「そうだぞ! 後輩の分際で生意気な...!!」

キューボット「ソナ事ヨリモ、大変デゴザル! 殿ノゴ命令ニヨリ、戦闘準備ヲ整ツテモライタイノデゴザル!」

グラウンダー「はあ? 戦闘態勢つて、何だあ?」

オーボット「ぶらつくあーむずデスヨ! 今カラ奴ヲ倒スタメニ準備スルンデスヨ!」

スクラッチ「何!? ブラックアームズだとお!?!」

ココナッツ「ブラックアームズつて、ずっと前この世界を襲った宇宙人軍団じゃないの!?!」

グラウンダー「んなアホな!? あいづらはとっくにやられたんじやなかったべか!?!」

オーボット「ソコントコハ分カリマセンヨ。タダぼす八きのこわーるど大陸ノくつぱノ亀ト同盟スルトカ言ツテ、

今モコチラノ兵器ト部隊ヲ向コウヘ送り込ンデルンデスヨ!」

スクラッチ「何い!? エッグマン様があノクツパと!?!」

ココナッツ「どう言う風の吹き回しなの、それ!?!」

グラウンダー「んだあ! エッグマン様の敵であるあノクツパが同盟するだあ、どゆ事だあ!?!」

キューボット「ソコモ分カラヌデゴザル! ナノデ、オ主ヲモ拙者共々戦闘準備ヲスルノデゴザル!」

スクラッチ「ああ? 何で俺達まで手伝わなきゃさんねんだよ!? こっちは情報管理の仕事をしてんだぞ!?!」

グラウンダー「なんだ! 特にオラは晩飯の準備とかもしなきゃなんねえべ!」

ココナッツ「僕はトイレ掃除だから、荷物運びなんて関係ないよ。」
三人はオーボットとキューボットに睨み付きながらそう言った。

オーボット「オヤオヤ、マダ自分ノ立場ニオ気付キジャンイノデス

だから、幹部に戻そうと思ったんじゃ。 まっ、何かの足しになる
じやろう。」

オーボット『言ワバつんでれト言ウ奴デスカ……。』

エッグマン「まあ、そんな事よりも！ 早速ブラックアームズを叩
き潰すために戦闘準備をするぞ！ 『エッグマン艦隊』の整備し、

エッグポーンや『エッグファイター』、『エッグガ
ンナー』などの帝国軍を集結させ、戦場へ向かうための軍陣を作る
のじゃ！

大半はクツパ軍団に送り込み、向こうの戦力と武装
を強化させるのじゃ！！」

キューボット「シカシ故、えつくまん殿……………くつぱ殿トノ同盟ハ
真ニヨロシカッタノデゴザルカ？ モシソチカラ裏切り行為ヲ行ツ
タラ、

イザト言ウ時二何ヲナサルノデゴザルカ？」

エッグマン「なあくに、いくら武力をそいつらに提供したにしろ、
何れは敗れるじやろ。 そう言う時はクツパ軍団を先に敵の手に敗
れ、

後はワシらエッグマン帝国がキノコワールド大陸を
支配すればいいんじやよ！

そっちの方がワシらに取って好都合な計画じやろ？」

オーボット（ウワツ…キツタネエ計画……………。）

彼は呆気ない表情を浮かびながら、心の中でそう思った。

ピーッピーッピーッピーッ！！

その時、オーボットの体内から何かが鳴り出し、エッグマンは彼の
方に振り向きながらこう言った。

エッグマン「ん？ 何じゃ今のは？」

オーボット『ハア…タツタ今偵察用ノふらっぱー隊カラノ連絡ガ来

マシタ。ドウヤラ『ぐりーんひる』ノ方デ例ノ物ヲ発見シタソウ
デス。』
エッグマン「何!? それは真か!? ホッホッホッ、これはちょ
うどいいタイミングじゃ! この戦いに出るにはやはりあれが必要
とするな!

ならば徹底的に取りに行くまでよ! オーボット、
今直ぐエッグポーンと『キキ』部隊を25体ずつ用意するんじゃ!
その間にワシは『エッグモービル』を起動しに行く
ぞ!」

オーボット『エツ…マサカ、今カラ強奪シニ向カウノデスカ!?』
エッグマン「当たり前じゃ! この戦に勝つには、やはり何である
うと無限の力を持ったあの石が必要じゃ!

そう、モビウス大陸に纏わる無限の輝石…『カオス
エメラルド』をな!」
彼はサングラスを怪しく輝かせ、不敵な笑みを浮かばせながら、オ
ーボットに向けてそう答えた。

そして、二つの悪が一つになった今…二つの敵を倒すべく、壮大な
戦いが始まる……。

……一方キノコワールド大陸、ピーチ城では、マリオ達は今でも
ダイニングルームにいた。ただ何をしていたのかと言うと……
まき絵と亜子、裕奈とアキラの頭に本が乗っていて、両手にフォー
クとナイフを揃えながら横一列に並んでいた。
そう…四人はキノじいの稽古に無理矢理やらされていたのだ…。

裕奈「……………って言うか……………何で私達がこんな事しなきゃなんないのお~~~~!!?」

キノじい「これっ、私語を控えなさい!!」

彼は困りながら喚く裕奈に向けてそう怒鳴り掛けた。　ちなみに亜子とアキラもこの事に困っていたが、

逆に新体操専門のまき絵は、気持ちよく頭に乘せた本をバランスよく取っていた。

ピーチ「もう、じいやったら、いい加減にしなさあ~~~~~いい!!」

夕映「…ドンマイ。」

その間にマリオ達は、そんな困っている裕奈達をただ眺めていた…。

第27話 緑の丘の子鬼

……まき絵・亜子・裕奈・アキラが木乃香・刹那・夕映・のどかと再会し、更にクツパとDr・エッグマンが同盟に成立した同日……
モビウス大陸のある丘にて、一人の少女がいた。その少女は背が高く、長くて綺麗な金髪を持っていて、
そんな彼女は風に吹かれた草原の上に寝ていた。

「????」

しかし、その間にその金髪少女の隣に何者かがいて、その少女の体を揺さ振りながら起こそうとしていた。

その反動により、金髪の少女は唸りながら少しずつ目を開き、ゆっくり起き上がった。そう、彼女の正体はネギの生徒、
またはパートナーであり、3-Aの委員長である雪広あやかであった。

あやか「……ん……うう……ん……? ……ここは……?」

彼女は辺りを見回りながら、眠たそうにそう言った。そして彼女は横へ振り向くと、そこにはもう一人の少女が居座っていた。

その少女はセミショート銀髪に色黒の肌、更に顔にフェイスペイントが描かれた少女であった。そう、彼女はあやかと同じく、ネギの生徒、またはパートナーであり、謎の多いとされている不思議な少女、ザジ・レイニーデーであった。

あやか「……あら……? 貴女は……ザジ……さん……?」

ザジ「よかった……無事だったみたい……。」

口数の少ない彼女がそう言うと、微かではあるが、小さな笑みを浮かべながら安心そうにそう言った。

あやか「え……無事って……何がですか? 第一……なぜ貴女がここ

に……………？」

彼女がそう言っている間に再び辺りを見回ると、何かに気付いた。

彼女達が今居る場所は、緑色の草原だけでなく、茶色のチェッカー模様の大木、木で出来た橋に流れ続ける滝、花卉が回転するひまわりや上下に動く花、

更に見た事もないループ状の通路や宙に浮いている足場やブランコなど、全く見知らぬ風景となっていた。

その風景を目の当たりにしたあやかはようやく目を覚まし、驚きにも素早く立ち上がった。

あやか「な、何なんですの、ここはあ！？ こ、こ、ここは一体どこなんですの！？ 何でこの私がこんな所に……………！」

ザジ「……とりあえず、落ち着いて……。」

異様に落ち着いている彼女は、パニックに陥るあやかを落ち着けようと声を掛けるが、それでもあやかは落ち着けなかった。

あやか「落ち着けませんわよ！？ 一体ここは何なんですの！？

私達、麻帆良学園にいたはずでは……………！」

ザジ「その事も……私にも分からない……。ただ言えるのは……ここ麻帆良じゃない……。」

あやか「え……違うのですの……………！？ では……ここは一体……………！？

彼女は再び辺りを見回すと、今度は自分の気を落ち着かせながら、考え始めた。

あやか「……………待ちなさい……待ちなさいよあやか……ザジさんの言う通り、ここは落ち着いて考えるべきですわ……………。」

まず……全てを一から思い出す必要がありますわ……。確

かあの時私は休み時間に佐々木さんと一緒にいたはずですわ……。

そして気が付いたら急に辺りから謎の電流や地震が発生して……………そして辺りが急に歪み始めて……………

それから……………それから……………ダメですわ！ その後何

も思い出せませんすわ！

でも確かに私は佐々木さんと一緒にいたはずなのですが

「……」
「ザジ」それ……私も一緒……。休み時間に……龍宮さんといった……。けど謎の超常現象で……。気が付いたらここに……。」「あやか「ザジさんもそうだったんですの？　と言う事は……。」「ここはもしや……。いや、有り得ませんわね。」

大体こんな場所なんて最初からなかったのですから、絶対魔法世界ではありませんわね……。

だとしたら……。」

彼女が独り言をした後、崖の方まで歩き、そこから風景を眺めていた。緑の草原にチエツカー模様の大地……

無数の橋に川と滝……宙に浮いた足場とブランコとリング……意味なく配置されたトーテムポールに刺……

見た事もないループ状の通路や回転する刺だらけの丸太橋……。そう言った物がこのエリアに広がっていて、そんなあやかとザジも多少混乱していた。

あやか「……。ここは一体どこなんですの……？　宙に浮いてる足場や変な形をした通路……。どれも見た事もない物ばかりですわ！？」

一体私達はどうしてこの場にいるのか……。」「

ガラガラガラガラアツ……！！

しかし、そんなあやかが立っていた足場が突然崩れ始め、あやか自身も足場と共に落ち始めた。

あやか「ひゃあああああああ！！！！？」
ザジ「……！！！」

あやかが崖から落ちると、運がよく絶壁からはみ出た箇所には捕まり、落下から防げた。しかしザジが高い所から確認した時、

あやかの真下には無数に広がる刺地獄となっていた。それに気付いたあやかも、早速必死な思いで慌て始めた。

あやか「きゃああああああ！！！！　だ、だ、誰か助けてくださいいゝゝゝ！！！！　って言うか何でこんな所に刺地獄があゝゝゝ！！！！？

　　ザ、ザジさん、私を助けてえゝゝゝ！！！！」

助けを求めるあやかに対し、ザジは無言でありながらも慌て始めた。

彼女の今いる場所からではあやかを救出出来ない…

そう思ったザジは、辺りを見回りながら救出方法を考えていた。

そして彼女がある物を発見した時、

早速それを求めにその場から走り去った。

あやか「ええ！？　ちょ、ど、どこへ行くんですのぉ！？　私を置いて行くななんて酷いですわよぉ！？　ひいゝゝゝ…

　　お願いですからあゝゝゝ！！！！　ネギ先生えゝゝゝ！！！！

アスナさんや佐々木さんでもいいから誰かあゝゝゝ！！！！」

しかし、そう喚いている内に掴んでいた岩が崩れ、あやかは再び刺地獄へ向けて落下し始めた。

あやか「きゃああああああああ！！！！」

だが、その時宙に浮かぶ足場が猛スピードで飛行し、落下するあやかを間一髪に乗せて救出した。

あやか「へ…！？」

彼女は起き上がると、その足場にはもう一人乗っていた事に気付く。

そう、その人物はあのザジであり、

彼女がその足場をあやかに向けて飛ばしたのだ。

あやか「ザ、ザジさん…！？」

ザジ「…大丈夫、いいんちよ…？」

そんな彼女を見上げていたあやかは、思わず目から涙がこぼれ出し、ザジを抱きしめた。

あやか「うおおおおおおおおお！!?」

そして高く飛ばされた二人は、そのまま崖の頂上まで無事着地した。

ザジの活躍から数々の危機から逃れたあやかは、

叫んだり喚いた事でかなり力を使い果たしてしまい、その場で倒れた。

あやか「はあ……はあ……な……何なんですの……この……遊園地以上
に派手な場所は……。」

ザジ「……セーフ」

あやか「どこが『セーフ』なのです!? スリルが多過ぎて心臓が破裂するところでしたわよ!!!」

彼女がそう言いながら、無表情でありながらもお茶目なポーズをするザジに突っ込んだ。

あやか・ザジ「!?!」

そして二人が同時に振り向くと、近くに見た事もない通路があった。

それは非常に大きく、ループ状に形成されている通路であった。

しかもその通路には複数ものの宙に浮かぶリングがあり、更にそのループの上に画面が表示された鉄製の箱までも設置されていた。

一体何が入っているのかは不明だが、そんな二人はただその通路を地上から眺め、呆然としていた。

あやか「……何ですの……あれ……?」

ザジ「……ループ……。」

あやか「いや、見れば分かりますが……。」

ザジ「……とりあえず……知らない……。」

あやか「ああ……もう! 一体何なんですの、ここはあ!?

変な物ばかりあり過ぎて、もう何が何だかさっぱり分かりません

わあ!?!」

彼女は余計の混乱により頭に來たのか、頭を激しく掻きながらそう

言った。しかしその間にザジは、相変わらず表情を変えないまま、そんなあやかをじと目で見詰めていた。しかし、その間にザジが何かを思い付いたのか、次のようにこう言った…。

ザジ「…刺の海に落ちる前に峠から飛び降り、救出をやり遂げた…。

あやか「意味になっていなかったの？ 2点ですわ。」

ザジ「……ケチ。」

彼女がそう文句言い出すと、有り得ない発言に対してあやかは更に突っ込み始めた。

あやか「誰がケチですってえ〜！？ って言うか貴女その一言を龍宮さんに言わなかったのになぜ私にだけそれを言うんで……！！」

彼女がザジに振り向いて突っ込もうと思ったその瞬間、何かを目撃した。それに気になったザジも、後ろの方へ振り向いた。

すると、崖の向こう側に小さな町があり、二人はそれを崖から眺めていた。

あやか「み、見てください、ザジさん！ 町ですわ！ あそこに町がありますわ！」

ザジ「…ホントだ…。」

あやか「よかったあ、あそこに行けば休む事も出来ますし、ここはどこなのかと言う情報も探れますわ！ さあ、ザジさん！

早速町に向かつて出発しますわよ！」

ザジ「…町に行くのに、ちょっと待つちい〜…。」

あやか「うるさい。」

そんな二人が漫才をしている間に、小さな町に向けて走り出した…。

……派手なエリアから脱出出来た二人の少女は、小さな町の入り口に辿り着いた。

その風景はまるでアメリカの住宅地のように見えるが、一つだけ違和感があった。

それは自分達が人間であるにも関わらず、住民達は全員小動物の姿をしていた。それぞれは小鳥や小豚、

更にリスやアザラシにペンギン、更に鶏や兎などの小動物達があちこちにいて、お互いに会話したり、遊んでいた。

その風景を目の当たりにした二人は、呆然としていた。

あやか「……………な、何ですの……この町は……………？」

ザジ「…小動物がいっぱい……………」

元々小動物が大好きな彼女は、目を輝かせながらそう言った。

あやか「な、何でこんなに小動物が……………しかも、それぞれ二本足で歩いたり、言葉話せたりしてますわ!？」

い、一体何なんですの、この…昔のカートゥーンみたいな

町は!？」

「こんにちは」

あやか「ひゃあっ!？」

その時、彼女の横から青い小鳥が現れ、元気に挨拶しようとした瞬間、後ろに引きながら驚き出した。

小鳥「あつ、ごめんごめん! 驚かすつもりはなかったんだよ!」

あやか「と、鳥が…喋ってる……………!？」

ザジ「おお……………」

あやかは突然人語を話した小鳥に対し、非常に驚くが、逆にザジは更に目を輝かせていた。

小鳥「え? 喋ってるって…当たり前でしょ? まあ、そんな事よ

りも！ 君達、この辺りでは見掛けない子だよな？

もしかして、ステーションスクエアかセントラルシティからの観光客なの？」

あやか「え、あ、わ、私達が…？」

余りにも言葉を話せる小鳥に対して動揺するあやかだったが…。

ザジ「そう…。」

あやか「ザジさん!？」

嘘でありながらもあっさりと答えたザジであった。

小鳥「やっぱり！ そうだと思ったよ！ ここは『エメラルドタウン』って言う町でね、『グリーンヒル』に佇む緑に囲まれた平和な町なんだよ！

まあ、僕達みたいな小動物しか住んでないけど、結構有名でよく観光客が訪れる事が多いんだ！ しかもなんと、

あの超有名なヒーロー、ソニック・ザ・ヘッジホッグの出身地でもあって、彼と会うためによくファン達も訪れるんだよ！

まあ、滅多に帰って来ないけどね…。」

あやか「は、は…？ えめらるどたうん…ぐりーんひる…そこにつく…？ 誰ですの、それ…？」

小鳥「ええ!？ ソニックの事知らないのお!？ じゃあ、君達、何しにここへ来たの？」

あやか「え、あ、そ、その、ですね…。」

喋る鳥にまだ慣れていないのか、彼女は動揺し続けた。

「あつ、『フリッキー』さん！ こんにちは！」

その時、どこかから少女の声が聞こえ、三人はその声が聞こえた方向へ振り向いた。するとそこには、一人の少女と小さな生き物がいた。

その少女は肌色に近い体毛に長いロップイヤー、オレンジのワンピース

ースに白い手袋、そして黄色いシューズを身に着けた兔の女の子で、その横には水色の体に尖がった頭の先に浮いている黄色い玉、そして赤い蝶ネクタイとピンクの羽根を持った、見た目が天使のような謎の生命体が飛んでいた。そんな彼女を見たあやかは更に驚きの表情を見せるが、逆にザジは更に目を輝かせていた。

フリツキー「あつ、こんにちはあ！」

???「どうかしましたか、フリツキーさん？ この方達は一体…？」

フリツキー「いや、それが…観光客らしいんだけど、何しにここに来たのか分からないんだ。特にソニツクの事も知らないみたいで…。」

???「そうなんデスカあ？」

彼女はそう言いながら、驚いたままのあやかと目を輝かせているザジに振り向いた。

???「失礼ですが、お名前を聞いてもよろしいでしょうか？」

あやか「え？ わ、私ですか？ え、ええ…つと…ゆ、雪広あやかと申しますが…。」

ザジ「ども…ザジ・レイニーデイです…。」

???「あやかさんとザジさん…デスね？ 初めまして、私の名前は『クリーム・ザ・ラビット』と申します！」

そしてこちらは私のお友達の『チャオ』の『チーズ』デス！ よろしくお願い致します！」

チーズ「チャオ！」

クリームと名乗る少女は、チーズと言う名の生命体と共に、礼儀正しくお辞儀した。

あやか「え、ああ…こちらこそ、初めまして…。」

多少戸惑いがあるものの、あやかとザジはクリームのお辞儀に応じ

て、同時に彼女に向けてお辞儀した。

クリーム「余り何もない町ですが、よろしければ私のお家に寄ってみてはどうでしょうか？ 私のお母さんが作るお菓子とお茶、

とっても美味しいんですよ！是非家に来てみてください

さい！」

チーズ「チャオ！」

あやか「え、いいんですの？ 私達のような見知らぬ人間を招いてくださって…？」

クリーム「もちろんデス！ お母さんも喜んでくれマスから！」

チーズ「チャオオ〜！」

フリッキー「じゃあ、ここは君に任せるからね！」

クリーム「はい、ありがとうございます！」

彼女は笑顔でフリッキーにお辞儀をした後、早速あやかの手を引っ張り、自宅へ連れて行くこととした。

クリーム「さあ、あやかさん、ザジさん！こちらへ！」

あやか「あ、ちょ、ちょっと、クリームさん…！」

彼女はまだ戸惑いながらも、クリームに引っ張られながら、彼女の自宅まで向かって行った。もちろんザジも無言のまま、

背後からあやかの後を追って行った。

………クリームとチーズの案内により、あやかとザジが辿り着いた場所は、大きな白い屋敷であった。

その屋敷はU字型の二階建てになっていて、玄関前に白い噴水が設置されていた。見た目は当然豪華そうで、

それを見たあやかとザジは驚きを隠せなかった。そして二人がク

リームの案内により中へ入ると、
エントランスで一人の人物が立っていた。その人は赤とピンクの
ドレスを着た、クリームと同じロップイヤーの女性兔であった。
その綺麗な姿をしたウサギの女性を見た二人の少女は、思わず見惚
れていた。

クリーム「ただいま戻りました、お母さん！」

チーズ「チャオ！」

???「お帰りなさい、クリーム、チーズ。」

クリームとチーズが元氣よく挨拶すると、母親と思われる女性は笑
顔でそう答えた。その後彼女は、
思わずクリームの背後に立っていたあやかとザジの目が合ってしまった。
つた。

???「あら？ そちらの方々は…？」

クリーム「あつ、紹介しマス！ 先ほど会ったばかりですが、エメ
ラルドタウンにお越しした新しいお客様のあやかさんとザジさんデ
ス！」

???「まあ、そうなの！ 初めまして、私はクリームの母、『ヴ
アニラ・ザ・ラビット』と申します。 初対面でありながらも、

ウチの娘がお世話になっております。」

彼女が自己紹介しながら、礼儀正しくあやかとザジにお辞儀した。

あやか「あ、いえ、滅相ありませんわ！ えっと…雪広あやかと
申します。 よろしくお願い致します。」

ザジ「…ザジ・レイニーデイです。」

二人も改めて自己紹介しながら、ヴァニラに向けてお辞儀した。

あやか「しかし…とてもいいお屋敷で………つて、うわあっ!？」

彼女が屋敷内を見回すと、突然ある一室から何者かが出て来た。

その人物は頭に黄色い角らしきパーツに青い機械的な目、

そして上から下まで黒いカラーリングをした人型のロボットであった。更にその隣にはチーズと同じ姿をしているが、茶色い体に青い蝶ネクタイを付けたチャオが飛んでいた。それを見たあやかは、思わず驚きに引いていた。

クリーム「あつ！ 『ジメール』さんに『チヨコラ』もただいまあ

〜
チヨコラ「チャオチャオ！」

ジメール「……………」

ジメールと言う名のロボットは、無言ではあるが、クリームの挨拶に応じて頷いた。

あやか「な、な、何なんですの、あれは…!?!？」

クリーム「あつ、紹介致します！ このロボットさんは私のお友達の『ジメール』さんデス！ そしてこちらのチャオは、

チーズの双子の弟の『チヨコラ』デス！」

チヨコラ「チャオ」

あやか「あ、そ、そうなんですの…えっと、よろしくお願いしますわ。」

彼女は一応笑顔で挨拶するが、ジメールは無言のまま、ただそれに応じて頷いた。

あやか「…あら？ 何も言わないんですの？」

クリーム「ごめんなさい、ジメールさんは言葉が話せないロボットさんなんデス。」

あやか「え、そうなんですの…?」

ヴァニラ「せっかくですので、よろしければお茶でも一緒にいかがでしょうか？ ちょうど用意していたので…」

あやか「あ、ええ、では、遠慮なく…」

彼女はそう言いながら、ザジと一緒に玄関から上がって来た。しかしその間に、ザジは一つ何かを思い浮かんだ様子。

それに気付いたあやかは、嫌な予感をしながら、予め問い掛けた。

あやか「…ちよつとザジさん、貴女まさか、何か変なギャグでも思
い付いたんじゃないやありませんよね…？」

ザジ「…なぜ分かった…？」

あやか「貴女の事ですから当然分かりますわよ。 …でもとりあえ
ず聞いておきますが…。」

ザジ「…兔に騙されて、うっ、詐欺だ…。」

あやか「それ相手に失礼なので…3点ですわ。」

ザジ「…ケチ。」

あやか「だから何で貴女は龍宮さんには絶対言わない事を私に言う
んですの!？」

文句言うザジに対し、あやかはそんな彼女を突っ込んだ。 その間
にクリームとヴァニラは二人の少女に振り向くか、

話を聞いていなかったのか、頭に『?』マークを浮かばせていた。

ヴァニラ「…そう言えば、貴女達のご出身とか聞いてませんでした
ね? どちらからのお越しなんでしょうか？」

あやか「え? あ…え…ええつと……。そ、その事なんですが…

…。」

………屋敷の裏庭にて

あやかとザジ、そしてクリームとヴァニラ、チーズとチョコラは、
バルコニーの下にある丸いテーブルの前に座り、
紅茶とモンブランを味わいながら、会話をしていた。 しかし、会
話と言うよりも、

あやかはこれまでの出来事を全てクリームとヴァニラに説明してい

た。ちなみにジーマルは紅茶とお菓子を味わえないので、ただ近くで立ちながら、無言のまま話を聞いていた。

ヴァニラ「…なるほど……………つまり、もう一度言いますと……………貴女達は元々日本にある麻帆良学園から来た者で、

謎の超常現象に巻き込まれた事で、気が付いた時にはグリーンヒルにいた……………そう言う事ですね？」

あやか「はい、仰る通りです……………」

クリーム「お母さん、これどう思いマス？」

ヴァニラ「うう……………そうねえ……………そもそも日本とか麻帆良学園とか……………そう言う所は聞いた事もないわねえ……………」

いや、そもそもそう言った所は元々存在しないのかもしれないわね……………」

あやか「では、ここは一体何と言う場所なのでしょうか…………？」
ヴァニラ「ええ……………ここはモビウス大陸にある丘……………その名もグリーンヒルと呼ばれています。」

グリーンヒルは元々一般人でさえも近寄れないほどの危険な地形となっているのですが、その逆に緑に囲まれていて、

私達エメラルドタウン在住者達も平和に暮らせる場所なんです。殆どは私達のような動物系しか住んでいませんが、

貴女達のような人間の住民なら、ステーションスクエアやセントラルシティにもたくさんいますよ？」

あやか「…あの、それでしたら、私達以外にも、他の方とかお目に掛かりませんでしたでしょうか？ 実は、

私とザジさんには友達がいまして、その友達も途中で逸れてしまったようで……………二人組みでして、

全員私達と同じ服を着ているのですが……………一人はピンク色の髪の毛をした少女……………」

もう一人は私と同じくらいの身長をした長い黒髪に色黒

の少女なんですが…お会いしませんでしたでしょうか？」

ヴァニラ「そのような服でしたら…貴女達で初めて見る事になりませんが…。」

あやか「…つまりお会いしなかったと言う事ですわね…。」
彼女がそう言いながら、少し落ち込んだ。

ザジ「あの…もしかして…この世界…魔法で作られた世界…とか…？」

ヴァニラ「はい？」

あやか「ちょ、ちょっとザジさん！！ それを言わないと約束のはずですよ！？」

咄嗟の質問を言い出したザジに対し、あやかは慌て始めた。

ヴァニラ「あの、魔法で作られた世界とは…何でしょうか？」

あやか「あ…え、えっと…すみません、変な質問で…。実は以前、私達の世界である事件により、

魔法で作られた偽りの世界に飛ばされた事がありました

……そして、

今回も同じように魔法で作られた世界に飛ばされたのではと思ひまして…。」

ヴァニラ「うう…ん…それは有り得ませんわねえ……そもそもこの世界が魔法で作られたなんて、

考えられませんし…。」

あやか「え……ちょ、ちょっと待ってください！もしかして、この世界に魔法が存在するとも…!？」

クリーム「もちろんデス！ この世界には魔法が使える人がいます、それを使って色んな事をするらしいのデスよ！

例えば怪我を治したり、何かを作ったり…私は余り好みませんが、戦ったりもしたり…色んな事が出来るのデスよ！

でも、それは殆どキノコワールド大陸でしか出来ない事ですし、ここでは余り使う人もいませんが…。」

あやか「しかし、魔法と言う物は通常公にしてはならないほどタブーとされている物では…？」

ヴァニラ「いいえ、そうでもないですよ？　なぜなら魔法を教える学校とかもありますし、

更にそれを研究している方々も実際いるのですよ？　私も以前魔法の事を少々研究した事がありますので、

少しだけなら詳しいのですが……………」

あやか「と言う事は…この世界では魔法は常識なのですね…。」

ザジ「…やっぱり…魔法世界じゃない…。」

あやか「ええ……………確信しましたわ。　ここは明らかに、私達の知らない、全く別の世界だと……………」

そう考え込む彼女だが、その時クリームは頭を傾げながら、あやかに向けてこう問い掛けた。

クリーム「あのう…もしかしてあやかさんとザジさんは、『ブレイズ』さんの世界から来たのでしょうか？」

あやか「え、ブレイズさん？　誰ですの、その方は…？」

クリーム「『ブレイズ・ザ・キャット』…あやかさんとザジさんと同じように違う世界から来たお友達なのデス！」

何でも『ソルエメラルド』を守る人であるらしく、それを探すために一度この世界に訪れた事があるのデス！

私も一度、ブレイズさんのお手伝いをした事がありました、それ以来お友達同士になったのデス！

もしかして、お二人さんもブレイズさんの世界から来たのでしょうか？」

あやか「あ、いえ…私達の世界は、元々人間だけしか住んでいない世界でして、そのような人とはお会いした事はありませんけど…。」
クリーム「そうデスカあ……………」

あやかがそう答えると、クリームは期待外れに少しだけ落ち込んだ。

ヴァニラ「うう〜ん……………その…貴女達の世界とか…麻帆良や日本とかは余りよく分かりませんが……………」

それよりも困った事がありますわねえ……………」

彼女は手を頬に当て、悩みながらそう言った。

あやか「え、何がですか？」

ヴァニラ「そもそも貴女達が別の世界から来た者でしたら、この世界に住む場所とかあるのでしょうか？」

彼女がそう聞くと、全員一瞬沈黙となった。

あやか「……………そう言えば…言われてみれば……………」

ザジ「…住むどころか…帰る場所もない……………」

二人は顔を青ざめながらそう言った。

ヴァニラ「…そうですね……………」

そんな彼女も冷や汗を垂らしながらそう答えた。

クリーム「お母さん、それならあやかさんとザジさんをこの家に泊まらせましょうよ！ そしたら問題ないと思いますよ！」

あやか「え…？」

ヴァニラ「そうね…この町には宿とかないですし、このまま野宿させるのも可哀想ですしね。」

あやか「い、いいんですか？ 私達のような初対面の人間をこのお屋敷に……………」

ヴァニラ「いいのですよ！ せっかくの大事なお客様ですし、例え別世界から来た方でも大歓迎ですわ！ それに…

娘もこんなに貴女方を懐いてらっしゃいますし…この娘も喜びます。」

クリーム「そうデス！ しばらくの間、この家で泊まってください……………」

チーズ・チョコラ「チャオチャオ！」

ヴァニラ「ジーマルさんもいいかしら？」

ジーマル「……………」

言葉を話せない彼だが、彼も意見に賛成したつもりで頷いた。

あやか「ああ……………ザジさんはどうですか？」

ザジ「…野宿…やだ…。」

あやか「ですよね……………」

ザジが静かに即答すると、あやかはクリームとヴァニラに向けてこう答えた。

あやか「では、お言葉に甘えて、このお屋敷に泊まらせてください。

」

ヴァニラ「ええ、もちろん！」

クリーム「やったあ〜〜〜！！！」

チーズ・チョコラ「チャオオ〜〜〜！！！」

あやかの返事により、クリームと二匹のチャオは大喜びに飛び上がった。

あやか「あつ、それでしたら、宿泊料はいくらに致しましょうか？」

ヴァニラ「いえ、そんな、滅相ありません！困ってる方をお助けするためなら、お金なんていりません。それに…」

貴女達は別の世界から来たのでしたら、さすがに貴女達の世界から来たお金はこの世界には通用しません。

ちなみにこの地方ではリングと言うお金が必要ですから

…。」

あやか「え…リング…？」

彼女がそれを聞くと、少し啞然とした。

あやか「……………まさか、あのループにあるリングがそうだったので

は……………？」

ザジ「…かも…。」

二人はグリーンヒルにあったあのループ状の通路を思い出しながら、お互いにそう言った。

………… エメラルドタウンの町中にて
建物が次々と爆発によって破壊される中、多くの小動物達はパニックに騒ぎながら逃げ回っていた。
そこには浮遊するエッグモーターに乗ったDr. エッグマンがいて、その下には建物を銃やバズーカで破壊しているエッグポーン軍隊、そして爆弾を使用しているオレンジと白のカラーリングをした猿型ロボット軍隊…全部で合わせて50体もののロボット軍隊が暴れていた。
そんな大騒動の中、エッグマンはそれを平気そうに見ながら高笑いをしていた。

エッグマン「ホオッッホッホッホッホッホッホッ！　そうじゃそうじゃ、好きなだけ逃げ回るが良いわ、愚かな小動物共よ！

無力で無防備な貴様らには、このワシを止める事など100%ないわい！！

この世で一番天才となるこのワシこそが、全てを押し上げ、全てを支配するのじゃ！！

ここに来たついでにこの町をワシの物してやるわい！！　ホオッッホッホッホッホッ！！！！」

エッグマンのロボット軍隊の暴走により、徐々に荒れて行くエメラルドタウン…。しかしその間に、遠くからあやかとザジ、そしてクリーム達が駆け付けて来た。

クリーム「ああ…エメラルドタウンが…みんなが…！！」

あやか「な、何なんですの、あのロボット軍団は…！？　それに、あの男は一体…！？」

フリッキー「え、知らないの!? あいつはこの世界を自分の物にしようと思ってる悪の天才科学者、Dr・エッグマンだよ!」
ザジ「エッグマン…卵男…?」

彼女はそう呟きながら、エッグマンを不思議そうに眺めていた。

あやか「悪の天才科学者って…つまりマッドサイエンティストなの? 何か…葉加瀬さんとは多少違う感じがしますけど……」

って、それよりも、何でそんな奴がこの町に…!?」

ヴァニラ「きつと、世界征服のためにこの町を奪おうとしているのでしょう…! でもこのままでは危険です!

今直ぐこの場から避難しましょう!」

あやか「え!? 避難って…誰も止めに行かないのですの!?」

フリッキー「無理だよ! ソニックがいない今、僕達じゃどうしようも出来ないよ! それに、この町みんなは戦うの苦手なんだ!

だから逃げる事以外何も出来ないんだよ!」

あやか「だからと言って逃げるが勝ちとでも言うのですの!? 余りにも情けないですわ! ここはやはり…ザジさん!」

彼女はザジに向けてそう言うと、ザジはあやかの意見を読んだのか、真顔で頷いた。

ヴァニラ「え、ちよつと、貴女達、何する気なの!?」

クリーム「あやかさん、ザジさん!?」

あやか「行きますわよ!」

ザジ「…御意…!」

あやか・ザジ「アテアット来れ!」

二人は呪文を唱え、『ネオ・パクティオカード』を発動させた。

発動中に二人の体が光り始め、クリーム達はその眩しい閃光に対し、

目を手で塞いだ。

クリーム「きゃっ、眩しいデスウ…!」

チーズ・チョコラ「チャオオ〜!」

ジを見て、思わず驚いていた。

フリッキー「な、何あの二人…!? いきなり違う姿に変身したよ!?」

クリーム「すごいデスウ!!! まるでヒーローになったような感じデスウ!!!」

チーズ・チヨコラ「チャオオ〜!」

ヴァニラ「ヒーローと言うより……もしかして…あれが彼女達が言う…魔法…!?」

エッグマン「何じゃ貴様らは!? ワシのエッグポーンと『キキ』

軍隊やワシのエッグモービルに攻撃したのは貴様らかあ!？」

あやか「あら? それに何か文句ありませんか?」

彼女が上から目線でそう答えると、エッグマンはそして身を前に倒し、あやかとザジの姿を見直していた。

エッグマン「ん〜!? 貴様ら何か変な姿をしとるではないか!? もはやこの町の者ではないな!？」

貴様らは一体何者じゃ!？」

あやか「答える筋合いはありませんわ! そもそも、この平和な町を好き勝手に荒らし回る貴方と言う野蛮人は、

例え土下座しながら謝罪しても、許す事は出来ませんわ!!! この私達の手で、成敗に致しますわ!!!」

彼女は手に持っている鞭をエッグマンに向けながらそう言うが…。

ザジ「…ジャンピングしても…許せない…。」

あやか「…はい?」

ザジ「いえ…何でもありません…。」

あやかがザジに振り向くと、ザジは逆に向きながらそう答えた。

エッグマン「なあ〜にい〜!? 貴様あ、この前の小僧のような事を言いおつてえ…!!! しかもその姿を見ると…」

確かにあの小僧と一緒にいたあの小娘共とよく似て

おるな……さては貴様ら、あの小僧の仲間か!？」

あやか「小僧……?」

彼女はその言葉を耳にすると、ある人物の名前を連想してみた。

あやか「……………まさか、ネギ先生!? 貴方はネギ先生とお会いしたのですの!？」

エッグマン「ああ? それがあの小僧の名前か!? 何じゃ、そのラーメンの食材みたいな名前は!？」

……………まあ、そんな事よりも、確かにワシはあの小僧と会ったわい! ワシがステーションスクエアを占領しようとした時、変な力を使ってワシの邪魔をしようとした! おかげでワシの計画は失敗してもうたがな!」

あやか「と言う事は……ネギ先生もこの世界に……!」

ザジ「小娘もつて……もしかして、龍宮さんも……?」

あやか「だとしたら、アスナさんも……!」

しばらく考え込んでいたあやかは、再びエッグマンに見上げてこう言った。

あやか「教えなさい! ネギ先生達は今どこにいるのかを……!」
エッグマン「フンツ! 知るか、そんなもん! もし今頃そいつと再会していたら、とつくにワシの手で捻り潰しとるわ!

じゃが、どの道貴様らに教える筋合いなどないわ!
なぜならワシの邪魔をする者は、

今直ぐワシによって消されるのだからな……!」

ザジ「……やるみたい……」

あやか「ならとことん痛み付けてまでも教えさせてもらいますわよ!」

エッグマン「ほう、やるつもりじゃな!? ならどの威勢を認め、相手にしてやるつぞ! じゃが、貴様の相手はこのワシではなく……

……………」
彼がそう言つと、突然上空高く浮き上がった。何なのか分からない

フリッキー「エッグマンのロボットだよ！ 僕達小動物達を中に閉じ込めさせた奴らだ！！」
ヴァニラ「何ですって！？ では、応援のために…！？」

フリッキーの話によると、このロボット達はかつてパイロットプログラムに利用するために、小動物達を機体の中に封印したのだ。しかし、ソニックの活躍により、ロボットを破壊する事で救出する事が出来た。それ以来エッグマンは小動物を使わずに、ロボット開発を進んでいたらしいのだが……。

チユドチユドチユドチユドオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

しかし、そのロボット達はエッグポーンとキキ達を次々と攻撃し、軍隊を全滅させた。だがその同時に彼らは建物を破壊し、全滅した軍隊と変わらない騒動を起こしていた。
フリッキー「…でもないみたいだね…。」

あやか「な、何なんですの、あのロボット達は！？ 敵を全滅させただけでなく、またもや建物を…！！」
ザジ「敵…味方…何…？」

謎のロボット軍隊の謎の行動に対して混乱する二人の少女。その間にエッグマンは、そのロボット軍隊を見ると、驚きの表情を浮かべながら何かを思い出した。

エッグマン「！？ あれは…ワシが第一次世界征服計画をやり始めた時に開発した『モトラ』、

『ガニガニ』と『ビービー』！！ しかし、ソニックが殆ど破壊した事で、

全て廃棄処分した同時に製造中止にしたはずでは…
！？」

その時、暴走していた謎のロボット軍隊はあやか達に振り向き、攻撃し始めた。ガニガニ達は開いた鉄から無数の光線、モトラ達は頭のアンテナから電撃、ビービーは尾の銃口から無数の光線を発射した。

あやか「わわっ、放って来ましたわあ!？」

慌てる彼女だったが、突然ザジが前に飛び出し、被っていたシルクハットを取り出し、それをこちらへ飛んでくる光線に向けた。

するとその光線は全てシルクハットの中に吸収され、一瞬に消えた。あやか「えっ!？」

それを見て驚くあやかだが、その間にザジはシルクハットの中から何かを取り出した。それはなんと……

湯気が出るほどホカホカした肉まん（超包子作）二個であった。

ザジ「……マテリアル・エクスチェンジ物質転換」……」

あやか「おお!?!? 吸収した光線が肉まんに……!?!？」

ザジ「……お腹空く前に……念のため……」

あやか「あ、そ、そうですね……」

彼女はそう言いながら、ザジから肉まんを一個受け取った。しか

し彼女がそれを食べようとした瞬間、

攻撃が掻き消された事で腹が立ったのか、ロボット軍団が怒りの状態で二人に襲いかけ始めた。

あやか「うわあっ、また来ましたわあ!?!？」

クリーム「きゃあ!?! あやかさん、ザジさん、危ない!?!」

しかし、その時彼女の横から何か素早く通り返した。

ヴァニラ「!?!？」

チュドチュドチュドチュドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

すると、高速に急回転する何か飛び掛り、複数の敵ロボット達を次々と破壊して行った。

あやか・ザジ「!?!」

そしてその急回転する謎の物体は、二人の少女の前に着地し、元の姿に戻った。その物体の正体は、あのジーマルであった。

あやか「貴方は…!?!」

ザジ「…ジーマル…さん…!?!」

ヴァニラ「ほおっ…どうやら助かったみたいね…。」

クリーム「すごいデス、ジーマルさん」

チーズ・チヨコラ「チャオォ〜!」

その間に横で倒れていたエッグマンは、改めてジーマルを見て驚いていた。

エッグマン「何い!?! ジーマル…おのれえ、あの裏切り者めえ!

! 貴様、今までずーっとここで身を隠しておったのか!?!」

ジーマル「……………」

あやか「え…裏切り者って…知ってるんですの!?!」

彼女がそう言った後、隣にいたザジはクリーム達の方へ振り向いた。クリーム「あやかさん、ザジさん、実はジーマルさんはエッグマンさんが作ったロボットなんデスよ!」

あやか「な、何ですって!?!」

彼女はその真相を知った時、ジーマルに向きながら驚いてた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオ……………!!

その時、辺りが突然暗くなり、どこかから地鳴りのような音が聞こえた。

あやか「!?!? な…今度は何ですの!?!」

ザジ「…暗くなった…。」

フリッキー「な、何これ!?! 急に暗くなった上、変な音が…!?!」

クリーム「こ、恐いデス…!」

彼女は自分の母親を強く抱き締め、怯えながらそう言った。もちろんその間にチーズとチョコラもお互い抱き合いながら怯えていた。ヴァニラ「こ、今度は一体何が……!?」
エッグマン「……もしか……上か!？」

地上にいる全員が上を見上げると、そこには薄茶色の巨大空中戦艦が飛んでいた。それを目前としたあやか達は、非常に愕然としていた。

あやか「何ですのあれはあああああああああ!??!?!」
ザジ「……飛行船……?」

クリーム「な、何なんデスカ、あれは……?」
ヴァニラ「さ、さあ……私には何とも……。。。」
フリッキー「……あれ? あの船……どっかで見たような……?」

エッグマン「!? あれは……ワシが最初に開発した巨大万能空中戦闘要塞、『ウィングフォートレス』!!!」

しかしあれもソニックにより墜落したはずでは……!」

『……ソウダ……』

その時、突然どこかから声が流れ出し、それを耳にした地上の者達は辺りを見回り始めた。

『……ココニイル全テノ同志達ハ……カツテDr・えつぐまんニヨリ生ミ出サレタ清栄ナル部下達……モチロン、
コノ船モソウダッタ……。シカシ……敵ヲ倒ス事モ出来ズ……許サレヌ失敗ニヨリ……彼ラハ処分サレタ……
ソウ……俺モソノ内ノ一人ダッタ……。』

その時、ウィングフォートレスと言う名の飛行船の下から、何者か

が降りて来た。

『…存在ヲ認めズ…復活サレヌママ忘れ去ツタ俺達ダガ…遂ニソノ時ガ来タノダ……。我々ハ…』

反乱軍トシテ復活シタト………！』

そしてその人物は、足の下から炎を噴出させながら、そのままゆっくりと降下し、あやか達の前に着陸した。

その人物の銀色に輝く鋼鉄のボディに黒い目と不気味に光る赤い一つ目…背中に鋭い刃…赤い両足に車輪の付いた、まるでソニックと同じ姿をした大型のロボットだった。

エッグマン「!? き、貴様は…!?!」

????『…久シブリダナ…ますたー…えつくまん…!』

第28話 機械帝軍メタリックス

…モビウス大陸・グリーンヒルに着いたあやかとザジは、エメラルドタウンに住むクリーム一家と出会うが、そこでDr. エッグマンとその軍勢が襲撃して来た。しかし、そんな中…別の敵軍がエメラルドタウンを襲撃し、その軍団のリーダーと思われるソニック似のロボットがあやか達の前に現れた。

??? 『…久シブリダナ…ますたー…えつぐまん!』

エッグマン 『き、貴様は……………』 『メカソニック!?!?』

彼は驚きの表情を浮かべながら、メカソニックと言うロボットに大声でそう言った。

メカソニック 『ホウ…覚エテクレタノカ…。 サスガハますたー：えつぐまん…自分ノ作ツタ作品ノ名ダケハチャント記憶シテイルヨウダナ。』

ダガ残念ナガラ、えつぐまんノますたー登録ハ既ニ消去サレテイルノダ…俺ガ破壊サレタズーツト前カラナ。

ダカラ俺ハモウ貴様ノ戦闘兵器デハナイ…恐れ入ッ

タカ?』

エッグマン 『な、何じゃと…!?!?』

あやか 『な、何なんですの、あのロボットは…!?!? どうもあのエッグマンとか言う男とは知り合いのようですが…。』

ザジ 『…知ってる…?』

彼女は隣にいるクリームに向きながらそう問い掛けた。

クリーム 『い、いえ…あのロボットさん、初めて見マスが…。 ただソニックさんとよく似てマスけど…。』

あやか 『そんな事はどうでもいいですわ!! ちよっと、その貴

方！！」

彼女がメカソニックに向けて大声でそう言うと、メカソニックはそれに応じて彼女の方へ振り向いた。

あやか「貴方がこのロボット達の親玉ですの！？ 何の罪のない動物達を襲ったり、町を壊したりするなんて、

この雪広あやかが断じて許しません事よ！！ さあ、名乗りなさい！！ 貴方は一体何者なのかを！！」

メカソニック「ホウ…コノ俺ヲ知ラナイトハ言エ、早速調教シヨウトハ…身ノ程知ラスデアリナガライイ度胸ダナ。

ダガセツカクダカラソノ言葉通り、特別二名乗ッテヤロウ…。俺ノ名ハ「めかそにつく」！ そにつく型戦闘用るばつと…

めかそにつくしりーずノ一号機ダ！」

ザジ「メカ…ソニック…？」

クリーム「では…『メタルソニック』さんとの関係は…？」

メカソニック「めたるそにつく…アア、『めかそにつくMK-EE』ノ事ダナ？ ヨクゾ奴ノ事ヲ知ツテルナ？

ソウ「めたるそにつく…彼ハめかそにつくしりーずノ二号機デアリ、俺ノ弟トナル存在ダ。

最モえつくまんガ気ニ入ラレテイルヨウダガ…ソウ思ウト実ニ気ニ食ワン…。ダガ、逆ニ俺ハ弟ニトテモ感謝シテル。

彼ノオカゲデ俺達ハ蘇リ、新タニ全テニ対スル反乱軍トシテ結成サレタノダカラナ。」

あやか「反乱軍…？ な、何の事ですの！？」

エッグマン「ええい、そんな事よりも！！ 貴様、どうやって生き返ったんじゃ！？」

貴様は確か『デスエッグ』でソニックとの戦いで破

壊されたはずじゃなかったのか!？」

メカソニック『オヤ、えつぐまん八存ジテイルハズダロ?　めたるそにつくガ基地カラ脱出スル際、

過去二えつぐまんガ持つテイタ研究でーたヲ奪取シタト…。　ソウ、めたるそにつく八自ラノ軍勢ヲ作ルタメ、

奪取シタでーたヲ利用シ、俺達旧えつぐまんろぼつとヲ復活サセタノダ。

シカモ以前ヨリモ最大級ニあつぷぐれーどサレテナ!　ソノオカゲデ、カツテ八下等ダツタ部下達モ、

貴様ノ最新型ヲ簡單ニ破壊出来ルヨウニナツタ。

モチロン、貴様ノモーびるめかモナ!

ドウダ…我々ノ進歩ニハ驚イタダロ?』

あやか「自らの軍勢?　それは一体何なのですか!？」

メカソニック『…機械帝軍…』めたりつくす』!!　全テノ動植物ヲ消滅サセ、我ラ機械ノ軍勢ガコノ世ノ全テヲ制覇シ、

ソシテ支配スル…万物ノ軍勢ナノダ!!　我々ろぼ

つと軍八、全テノ生物達ト同ジヨウニ、『生キル』道ヲ歩ミタカツタ…

無論、ソレハ戦闘用トシテ生マレテシマツテモナ!

シカシ…誰も我々ノ存在ヲ認めテクレナカツタ…

一度壊サレテモ、タダノ失敗作ト見做シ、ソノママ我々ヲ忘却ノ彼方マデ放置サセタ…。　所詮生物共ハ、

我々ろぼつと達ヲタダノがらくたトシカ見テイナイ

!!　ダカラ我々めたりつくすハ、

我々ヲ除け者扱イシタ全テノ動植物ニ復讐シ、コノ

世ヲ機械ダケノ世界ニスルノダ!!』

ザジ「メタリックス…?」

あやか「き、機械だけの世界ですって!？」

エッグマン「おのねえ、メタルソニックめえ…まだそんなくだらぬ事を企んどるのか!？」

第一その計画は以前ソニック達によって打ち砕かれたはずじゃぞ!？」

メカソニック「確力ニ…めたるそにつくノ第一次世界征服計画ハ、そにつく達ニヨツテ阻止サレタ。ダガ、今次ノ計画ハ違ウ。

アルオ方ノオカゲデ、めたるそにつくノ取り外サレタカ八元ニ戻リ、再ビ立チ上ガッタノダ。全テヲ滅ボシ、

全テヲ支配スル、万物ノ王トシテナ!」

あやか「誰ですの、その『あるお方』とか言う人物は!？」

メカソニック「悪イガ、貴様ラ下等生物共ニソレヲ教エル必要ナドナイ。我が望ミハ必ズシモ実行セネバナラン。

ソノタメニハ、『アレ』ガ必要トナル!」

エッグマン「あれ…!？ま、まさか…貴様らがここを襲ったのは…!？」

メタルソニックの発言に何か気付いたのか、エッグマンは戸惑い始めた。

メカソニック「ホウ、ヤハリえつぐまんモソレヲ狙ツテココへ来タノカ…。ダガ、アノ神的ナカハ、

新タナル秩序ヲ築ク我々ニ相応シイ…貴様ノヨウナ

愚者ニハ似合ワヌカダ!」

その時、フリッキーはクリームの大きな耳元に、小声でこう言った。フリッキー「ねえ、クリーム! 奴の言ってる力って、もしかしてあれの事じゃないの…?」

クリーム「そ、そうかもしれません…。」

彼女は不安そうに小声でそう答えるが、そうとは関わらずザジの耳元にも届いていた。

あやか「何の事を言ってるのか知りませんが、全てを滅ぼして世

界を自分達だけの物にしようだなんて、

そんな冷酷で外道な真似はさせませんわ！！ この雪広
あやかの名に賭けて、

貴方の野望と言う物を打ち砕かせてさしあげますわ！！
メカソニック『ホウ：俺ト戦^ヤルトデモ言ウノカ？ カノナイ女ノ分
際デカ？ ナライイダロウ…』

セツカク俺モコノ地ニ復活出来タンダ。 コノ町ヲ
破壊スル前ニ、マズハ貴様ヲヲぼる雑巾ノヨウニ始末シテヤロウ！
ソノタメニ：死又覚悟ヲスルダナア！！！！』

彼がそう言った後、両足に付いている車輪を利用し、高速であやか
達に向けて駆け出し始めた。

あやか「！！ 皆さん、危ない！！」

彼女がそう言った後、ザジと共にクリーム達を強く押し出し、メカ
ソニックの突進から回避した。

あやか「大丈夫ですか！？」

ヴァニラ「え、ええ…：そ、それより…：貴方達は…！！？」

あやか「私達は大丈夫ですわ！ それより、ここは危険です！ 今
直ぐ安全な場所へ避難してください！」

クリーム「でも、あやかさん達は…！！？」

ザジ「大丈夫…：任せて…。」

彼女は少しだけ笑みを浮かべながら、静かにそう答えた。

メカソニック『ふんっ…：戦闘中ニ目障リナ連中ヲ助ケルトハ…：情ケ
ナイ！！ ソノママ巻キ込マセテ散ツテシマエバ気が済ム事…！！』
あやか「何ですってえ！？ その言い方、絶対許しませんわよ！！

ザジさん！！」

彼女がそう言うと、ザジは静かに頷いた。

あやか「行きますわよ、『薔薇の矢』！！！！」

ザジ「…『死神の札』!!!」

ロシアン・トランプス

あやかは魔法で無数の薔薇を、ザジは魔法で無数のトランプカードを取り寄せ、それを矢のようにメカソニックに向けて発射した。メカソニック『ふんっ、クダラン…!!!』

バシユウウウンッ!!!

しかし、メカソニックは自分の目から発生した赤い光線で、放たれた薔薇とカードを一瞬にして消し去らした。

あやか「えっ…!?!」

メカソニック『ドウシタ、ソナナ軽イ飛び道具如キテ俺ヲ倒セルトデモ思ツタノカ? クダラナ過ギテ笑エンナ!!!』

ソナナ貴様ラハ血ダラケノ微塵切りニシテヤロウ!

!!!

彼がそう言った後、体をボール上に変形し、背中 of 刃を剥き出しにしながら身を急回転し、

あやかとザジに向けて突進し掛けて来た。

あやか「ひいつ!? あ、危な…!!!」

バキイイイイイイン!!!

しかし、突然あやかとザジの背後から急回転する物体が通過し、突進して来るメカソニックを弾き飛ばした。

その衝動により、メカソニックと謎の物体は元の形状に戻り、着地した。そう、その物体の正体は、あのジーマルであった。

メカソニック『何ッ!?!』

あやか「ジ、ジーマルさん!?!」

クリーム「すごいデス、ジーマルさん!」

チーズ・チヨコラ「チャオチャオ!!!」

メカソニック『じーめる…?! ……ナルホド…貴様ガじーめるカ

……。』
彼がジーマルの名を耳にすると、表情はない物の、不敵な笑みを浮かべるような感覚を見せた。

あやか「あ、ありがとうございます、ジーマルさん。」

ジーマル『……………。』
言葉を話せないジーマルは返事しなかったが、その後に彼は戦闘態勢に構え始めた。

ザジ「…もしかして…戦うの…？」

彼女がそう問い掛けると、ジーマルは静かに頷いた。

ガシィツ！！！

その後、メカソニックとジーマルはお互いに向けて駆け出し、お互いの両手を掴みながら激しく押し合い始めた。

メカソニック『…貴様ノ事ハ既ニでーたカラ存ジテルゾ…。カツテハ究極ノ戦闘用トシテ開発サレタ太古ノ戦闘兵器『ぎぞいど』…』

ソノ内ノ一団デアル『えめる』ヲベースニシテ開発サレタえつくまんろぼつとト聞ク…。ダガ貴様ハ俺ト同ジ…』

えつくまんろぼつと捨テ、自ラノ意思デ自由ノ身ヲ選ンダ者…。トスレバ…俺ト貴様ハ同類ト言ウ事ダ。

ドウダ…貴様モ俺達めたりつくすノ一員トシテ入ラナイカ？ ソウスレバ、コノ世界ヲ自分ノ思イ通りニ変エ、

思イ通りニ動カシ、ソシテ思イ通りニ作り上ゲル事が出来ル…。ドウダ、興味ハアルダロウ？

供ニ機械ダケノ世界ヲ作ラナイカ？』

ジーマル『……………。』

メカソニックはジーマルをメタリックスの一員として誘うとするが、ジーマルは何も答えなかった。しかし、そんな無声の彼から、メカソニックは何かを理解した。

メカソニツク『……………ナルホド…断ルノカ。死ニ損ナイ弱動物共ノ味方ヲスルノカ…。ナラ貴様ニハ失望シタ。』

ズブオオオオオオオオオオッ！！！！

その時、メカソニツクの両腕がロケットのように発射され、それを掴んでいたジーマルは飛ばされた。

ジーマル『！？』

そして飛ばされたジーマルは思わず手を離し、そのままあやかとザジにぶつかつた。

あやか「きゃっ！？」

その後、発射されたメカソニツクの両腕は自動的に本人の所まで戻つた。

メカソニツク『生物ノ味方ヲスルろぼつとハ、使エ又ごみ同然！！』

貴様モコノ地ニ生キル下種共ト共ニ、

跡形残ラス散リ散リニ消シテクレル！！』

ズババババババババババアッ！！！！

彼が再びボール状に変形すると、身を回転しながら高く飛び上がり、回転する体から無数の針を、

地上にいるあやか、ザジ、そしてジーマルに放つた。

あやか「きゃあああああああ！！！！」

三人は無数の針攻撃に掠りながら、徐々にダメージを受けていた。クリーム「ああ、あやかさん、ザジさん、ジーマルさん…！！！！」

メカソニツク『オ次ハ…コイツダ！！！！』

次にメカソニツクは、ボール状のまま横向きに切り替え、再び急回転しながら、背中に付いている三枚の刃をカッターのように放ち、三人に向けて飛ばした。

あやか「!!! と、飛ばしたあ!?!」

こちらへ飛んで来るカッターに対して慌てるあやかだが、突然ザジは彼女の前に立ち上がり、自身のマントを掴み始めた。

ザジ「『ミラー・ジュ・ケープ鏡の衣』!!!」

彼女がマントを強く振り出すと、マントから発生した魔力でカッターを弾き返した。そして弾き飛ばされたカッターは、

自動的にメカソニックの背中に戻った。

ザジ「大丈夫...?」

あやか「え、ええ... 助かりましたわ!」

メカソニック「ふんっ、マサカ跳ネ返ストハナ。ダガ、ソレダケデハ全ク無意味ダ。ソモソモコノ戦イガ始マツテカラ、

貴様ラ八何モシテイナイ: 俺ノ体ニ掠リ傷一ツスラ付ケテナイゾ。何モシナイデコノ俺ヲ倒ソウト思ツテイタトハ:

改メテ貴様ノ威勢ヲ思イ出スト、実ニ笑エルクライバカバカシク思ウヨウニナツタ。寧ロ: イヤ、

予想通り二期待外レダ!」

あやか「くっ... 確かに否定は出来ませんが... 私達はこれまでに何もしてませんわ...。全ての攻撃は殆ど奴が先取りしています...」

とは言え、こちらの魔法もまとも効いていない...!

やはり『アーマー』カードでは物足りないのですの!?!」

ザジ「一旦戻って、『コスプレ』を試す...?」

あやか「いや、やり直しはダメですわ! もしこんな状況で一旦戻ってやり直したら、無防備の姿で奴の先制攻撃を食らってしまいますわ!」

それに... 例え隙が出来てやり直したとしても、最悪の場合『スカ』カードを引いてしまう可能性もありますわ!

そう言ったチャンスを、決して奴に出しては行けませんわ!」

ザジ「... じゃあ... どうすれば...」

手強い相手に苦戦する二人は、他の戦略はないかどうか、焦りながら考え始めた。しかし、その間にエッグモービルと共に倒れているエッグマンは、ただその状況を悔いながら眺めていた。

エッグマン「おのれえ、メカソニックめえ!! ワシの知らん間にアップグレードされおったとは……!!」

じゃが「いくらアップグレードされたとは言えど、それでも奴はワシが開発したメカじゃ!」

何か弱点があるはずじゃ……ワシが見過ごしてしまつた、唯一のミスと言う物が……!!」

彼はメカソニックの弱点を思い出すために深く考え始めると、ある事に気付いた。

エッグマン「……おお、そうじゃ!! これじゃ!! これが奴の弱点じゃ!! おい、その金髪と色黒の小娘共!!」

彼があやかとザジを呼び掛けると、二人は逆切れした表情でエッグマンの方へ睨み付けた。

あやか「何ですの、この汚い卵親父!! こっちは真剣に考えてるのに邪魔するんじゃないですわ……!!」

エッグマン「キレんな、このバカタレが!! 貴様らはいいつを見て分からののか!？」

元はと言えば奴はメカソニックシリーズの初号機じゃ!! いくらソニックに似せたとは言えど、

奴はヘビー級の戦闘用ロボット!! スピードは高くないはずじゃ!! そこを狙うんじゃ!!」

あやか「スピード……?」
メカソニック「オヤオヤ、えっぐまんラシカラ又助言力? ダガ、

時八既二遅シ!!」

彼がそう言った後、再びダッシュ機能であやか達に向けて襲撃しようとするが、その時にジーマルも駆け出し、

メカソニックに回転攻撃やパンチとキックの連続攻撃を仕掛けた。

もちろんメカソニックも、多少攻撃を受けながらも、

同じくパンチとキックの連続攻撃でお互いぶつかり合っていた。

メカソニック「チッ！　一々邪魔シオッテ……！！」

あやか「ジ、ジーマルさん！？」

クリーム「……もうこれ以上我慢出来ません！！　私も戦います！！」
チーズ「チャオ……！！」

二人が戦うジーマルの所へ駆け付けようとする、背後にいるヴァニアに肩を捕まり、止めさせた。

ヴァニア「行けません、クリーム！　貴女まで巻き込まれたら怪我だけでは済まないわよ！！」

クリーム「でも、あやかさんやザジさん、そしてジーマルさんも必死に戦ってるんですよ！！？」

私だつてソニックさん達と一緒に冒険に出たんですから、私も戦えます……！！」

フリッキー「気持ちは分かるけど、クリーム……相手は元エッグマンのメカだよ！　しかもかなり強く作られた厄介な奴なんだよ……！！？」

いくらクリームに戦う経験があるにしても、奴だけは絶対危ない……！！」

クリーム「でも……！！」

彼女達が戦うか戦わないかで言い合っている間に、あやかとザジはそんな彼女達の方へ振り向きながら見詰めていた。

あやか「……あの子も戦えるのかしら……？」

ザジ「……経験がある……って……言……つ……た……。……」

そして二人は再びメカソニックと戦っているジーマルの方へ振り向くと、あやかはある事を思い浮かべた。

あやか「……これは逃しては行けないチャンスなのかもしれませんわ。ジーマルさんには申し訳ありませんが、

「ここは彼に任せて、作戦を考えましょう！！」

ザジ「…御意…。」

彼女は無表情のまま、頷きながらそう答えた。

あやか「クリームさん！！」

彼女がそう呼び出すと、クリーム達は言い合いを止め、あやかとザジの方へ振り向いた。

そして二人はクリーム達の所まで駆け付けた後、あやかはヴァニラにこう言った。

あやか「すみません、ヴァニラさん！　しばらくクリームさんをお借りしますわ！」

ヴァニラ「えっ、な、何を…！？」

あやか「クリームさん、これから私の言う事を、よぉくお聞きしてくださいよ！」

クリーム「は、はい…？」

ドカアッ！！！！

しかし、その間にジーマルは、メカソニックの一振りで強く叩き飛ばされた。

ジーマル「…！？」

そしてジーマルが叩き飛ばされた後、メカソニックの両腕はチェーンスーに変形した。

メカソニック「ふんっ…貴様二八失望シタ。我々めたりつくすノ

一員ニナル事ヲ拒否スルダケデナク、

コレホドノ弱い戦闘力デ俺二掛カルトハ…イクラ」

ぎぞいど『ノもでるトハ言エ、

貴様八所詮出来損ナイがらくたニ過ギン！　ばらば

らニ切り刻ンデヤル！！』

あやか「そうはさせませんわよ!!」

彼女がそう言い出すと、それに気付いたメカソニックは彼女の方へ振り向いた。

あやか「ジーマルさん、そこから離れて!! 今ですわ、クリームさん!!」

クリーム「はい!! チーズ!!」

チーズ「チャオオツ!!」

クリームが指示を出すと、チーズはそのままメカソニックに向けて飛んで行った。そしてジーマルは、

あやかの指示通り、その場から離れた。

メカソニック『何ダア? 一匹ノちゃお如キデ俺ト戦^ヤロウト言ウノカ? ソンナ下等ナル液状生命体ナンゾ、

俺ガ真ツニツニ斬リ裁イテ!!」

クリーム「今デス、チーズ、チヨコラ!!」

チーズ・チヨコラ「チャオツ!!」

クリームが合図を出すと、チーズの背後からチヨコラが現れ、まるで分身を生み出したかのように二手に分かれた。

メカソニック『ナツ、何ツ!?!』

そして二手に分かれたチャオとチヨコラは、猛スピードでメカソニックの周囲に飛び回り始めた。

メカソニック『ク、クソツ、マサカコノヨウナとりつくトハ!!』

オノレエ、ちょこまかト飛ビオツテ!!』

彼の赤い目線では、周囲を飛び回る二体のチャオを標準カーソルで追おうとするが、余りにも激しく動き回ったせいか、

目先が突然砂嵐と化し、エラーが発生した。

メカソニック『ゲオツ!!? シ、シマッタ!! 目ニえらーガ!!』

あやか「やりましたわ!!」 『チャオ流忍法・分身の術作戦』成功ですわ!! ああの卵男の言う通り、

メカソニックは重さのせいで速く動けない!! そのため速

するとその錘が突然爆発し、

中からボロボロ状態のメカソニックが立ち上がった。

あやか・クリーム「えっ……!?!」

メカソニック「コノ……下種共ガア…………ソレクライノ事デ…………

イイ気ニナルナヨオ……………!!」

フリッキー「……って、まだ生きてたのお!?!」

エッグマン「な、何て奴じゃ!? あれに潰されてもまだ壊れんのか!?!」

メカソニック「くつくつくつ……………俺ハ……復讐ノタメニ……生マレ

タ悪魔ダ……………我ガ執念……アル限り……決シテ死ナン……………!!」

クリーム「そ、そんな……………!?!」

あやか「……フ、フンツ!! それがどうしたと言っんですの!?!」

そのような姿では何の脅迫にもなりませんわ!

でもその姿になった以上、私達が貴方を倒すための好都合に過ぎません事よ! さあ、どうします事?

このまま軽うく袋叩きに致しましょうかしら? その

方が楽になると思えますわよ?」

ボロボロでありながらもまだ生存するメカソニックに対し、クリー

ム達が怯える中、あやかは気高く、強気に相手を見下しながらそう

言った。

しかし、逆にメカソニックはそれに動じなかった。

メカソニック「ふんっ……死ニ損ナイ人間ノ分際デ……偉ソウナ戯言

ヲ……………」

イカニモ永久ニ黙ラセルヨウニソノ口ヲ引キ裂カシ

タイトコロダガ……マア、イイ……。貴様ノ言ウ通り、

コノ状態デ戦闘ヲ続行シテハ、不利ニナルカラナ……

……ソノ言葉ニ応ジテ、潔ク撤退スルトシヨウ。」

彼がそう言つと、足のジェット噴射を発動させ、その勢いで浮かび

始めた。

……ソノ言葉ニ応ジテ、潔ク撤退スルトシヨウ。」

始めた。

メカソニック『ソウトスレバ、シバラク八例ノ奴八諦メルトシヨウ
……ダガ、コレデ勝ツタト思ウナヨ！

何レ俺ト貴様ラハ再ビ会ウ事ニナル……ソシテソ
ノ時ガ来タラ、貴様ラハ完全ナル死ヲ味ワウノダカラナ！

次ニ会ウ時ハ、心ニシテ楽シミニスルガイイ……貴様
ラノ死又時ヲナー！ 記憶スルガイイー！』

彼がそう言った後、早急に上空に滞在しているウイングフォートレ
スに帰艦した。

するとウイングフォートレスの前に扉ゲートが開かれ、その中には言った
後、扉ゲートとともに姿を消した。

あやか「き、消えた……！？」

クリーム「な、何だったんデスカ、今は……！？」

ザジ「……扉……？」

ジーマル『……………』

彼女らは大空を見上げながら、不思議そうにそう思った。

エッグマン「うぬれえ……あの裏切り者めえ……！！ そつちこそ、
今度会う時はただじゃ済まさ……！！？」

彼は上を見ながらそう言うと、何かに気付き始めた。そして彼が
前へ振り向くと、彼の目の前にあやか達が立っていた。

そんな彼女達も、倒れているエッグマンに対して怒りの表情を浮か
べながら見下ろしていた。

エッグマン「ゲツ……！？」

あやか「さあ、次は貴方の番ですわよ！ 覚悟をしなさい……！」

エッグマン「いいっ！？ ちょ、ちょ、ちょっと待たんか！？ な

ぜ貴様らはワシに……！？」

そもそも奴の弱点を教えたのはワシじゃろうが！？」

あやか「それとこれとは別ですわ！ 第一この町を先に襲ったのは
貴方ですわ！ そのため、まだ続きがあるのですわよ！

忘れたとはいいませんわよねえ？ でも、邪魔が入ったせいで貴方の大事な手下も全員破壊されてしまいましたし、

特に先ほど使ってた機械も壊されたみたいですし、今じやもう無防備ですわよ？ どうします、

このまま尻尾巻いて帰りますの？ それとも…あの口ポットの分までもっと痛い目にあいましょつか？」

彼女は不敵な笑みを浮かばせ、鞭を構えながらそう言った。もちろんエッグマンはそれに対し、思わず引いていた。

エッグマン「うぐぐぐ…え、ええい、仕方があるまい！！
エッグポーン軍団が奴らに破壊された以上、

もはや戦力ゼロじゃ！ こうなったらアレは諦める！ 邪魔が入ったせいで何も出来んかったが、

次に会う時はこうは行かんぞお！ 覚えておれえ！！」

彼がそう言うと、急いでエッグモービルに乗り、そのまま上空へ飛び去った。

あやか「…まっ、これでいいでしょうね。」

その後、今まで隠れていた小動物達が一斉に飛び出し、喜びにはしやぎながらあやか達の周りに集まり始めた。

兎「すごいじゃん、お姉ちゃん達！！ あのエッグマンや悪い口ポットをやっつけちゃうなんて！」

豚「すつごくカッコよかったよお！」

鶏「特にあれは何だったの！？ 魔法とか何か！？」

ペンギン「映画よりめっちゃくちやカッコよかったよお！」

アザラシ「でもお姉さん達のおかげで、僕達助かったよ！」

リス「ありがとう、私達とこの町を救ってくれて！」

あやか「え、ええ…まあ…えっと…どう致しまして…！」

彼女は多少照れながら、困む小動物達にそう答えた。

ザジ「…君もありがとう…一緒に戦って…。」
ジーマル「……………」
彼女は隣にいるジーマルにそう言うと、ジーマルはそれに応じて頷いた。

ヴァニラ「クリーム！」

クリーム「あつ、お母さん！！！」

駆け付けて来るヴァニラに気付いたクリームは、喜びながら自分の母親に抱き込んだ。

ヴァニラ「よくやったね、クリーム！ お母さん、見直しちゃったわ！」

フリッキー「すごかったよ、クリーム！ あのコンビネーション技、カッコよかったよ！」

二人がクリームの活躍に褒めた後、多少苦笑いをするあやかに見上げた。

あやか「あ、あのお…すみません、娘さんを勝手に戦わせてしまつて…。」

ヴァニラ「いいえ…おかげさまで怪我もしなかつたし、それだけでも十分です。それに、この子も貴女のお役に立てて、

とても満足してます。ありがとうございます。」

あやか「い、いいえ…！ お礼を言うのは私の方ですわ！ 経験者だと聞いた物で…この子おかげで助かりましたわ。」

ありがとうございます、クリームさん！」

クリーン「とんでもない！ 元はと言えば、作戦を立てたのはあやかさんの方です！ あの作戦がなかったら、

私も一緒に戦えませんでしたし、みんなも助かりませんでした！ お礼を言うのは私の方です！

ありがとうございます！」

フリッキー「まあ、どちらにせよ、みんな無事でよかったんだし、これで一件落着いて事だよ！」

ヴァニラ「ふふっ、そうね。フリッキーさんの言う通りだわ。」

ポオン！！

その後、体力を全て消化してしまったあやかとザジは、元の学生服に戻ってしまった。そして二人は突然地面に座り込み、

周囲にいた者全てはそれに対して驚いた。

ヴァニラ「えっ…あやかさん！？ ザジさん！？」

フリッキー「急に元に戻っちゃったよ！？」

クリーム「だ、大丈夫デスか、お二人さん！？」

グオオオオオオオオオオオオ！！！！

突然何かが唸る音が聞こえ、全員はその音が聞こえた方向へ振り向いた。 どうやらその音は、

あやかとザジのお腹から聞こえたらしい。

あやか「……………私とした事が……………お腹の虫を鳴らすなんて恥ずか

しい……………」

ザジ「……………お腹空いた…OH 中が空っぽ……………」

「……………プツ……………アツハツハツハツハツハツ！」

一件落ち着になったのか、それともザジのギャグが受けたのか、全員は満面の笑顔で笑い出し始めた。

もちろん空腹状態でありながらも、あやかとザジもお腹を抱えながら笑い出した。

第29話 無人の箱舟と究極生命体

…… Dr・エッグマンとメカソニックとの戦いが終わった後、クリーム達の招待により、共に食事をする事にした。

そのため、クリーム達と共に大きな食堂にいたあやかとザジは、空腹の余りにたくさん食べていたが、

出来る限り無礼を見せないよう、大人しく食べていた。

あやか「いやあ…こんな美味しい料理をご馳走させてしまい、ありがとうございます。 何だか、

色々ご迷惑をおかけしたみたいで、申し訳なく思います
が……………」

ヴァニラ「いえいえ、気にしないでください！ 貴女達は私達にとつて大切なお客様であり、娘の大切なお友達ですもの。

それに、私達や町を救ってくれたお礼ですので、遠慮しなくてもよろしいのですよ？」

あやか「そうですか…では、お言葉に甘えて……………」

ザジ「……………遠慮は縁の量に伴う……………」

あやか「1点。」

ザジ「……………ケチ。」

いかにも彼女だけにその言葉を言うザジに対し、あやかは突っ込もうとするが、ここは敢えて我慢した。

あやか「あ、そう言えば……………」

彼女はふと何かに思い付くと、ジーマルの方へ振り向いた。

あやか「ジーマルさん、先ほど私達とご協力してくださり、ありがとうございます！ 貴方のご協力のおかげで、

私達全員無事でいられたのですわ！ 本当にありがとう

ございました！」

ジーマル『………………。』
ヴァニラ「そんな…ジーマルさんは寧ろ貴女達に感謝しているので
すよ。 先程の戦いでは、

彼一人では多分勝てなかったと思いますし、貴女達が私
達をお守りした事で、それで十分感謝をしていますよ。」

言葉を話せないジーマルの代わりにヴァニラがそう言うと、ジーマ
ルはその通りだと言うかのように頷いた。

あやか「しかし……………一つだけ気になる事がありますわ。 あの…
エッグマン…でしたかしら？

ジーマルさんは元あの男のロボットだとお聞きしました
が…それはどう言う……………？」

クリーム「…元々ジーマルさんは、『エメル』さんを元に作られた
ロボットなんデス。」

彼女がそう答えると、二人の少女は彼女に向き、話を聞き始めた。
クリーム「エメルさんのデータを元にして作られたジーマルさんは、
エメルさんと同じ力を持っていたのデス。

相手の力をコピーし、それを自分の物にして戦う…エ
ッグマンさんはそれを利用して、

私達やソニックさんを倒そうとしたのデス。 しかし、
ある力を手にしたせいで暴走し、エッグマンさんを裏切って、

破壊衝動を起こし始めたのデス。 そう…エメルさん
と同じように……………。 けど、

ソニックさんのおかげでジーマルさんは阻止され、テ
イルスさんに修理させた後、

こうやって仲良く一緒にいられる事が出来たんデス。
もうあの時みたいにならず、

ずっと一緒にいられるようにと…。」

あやか「なるほど……………あの…そのエメルさんと言うのは……………？」
クリーム「ジーマルさんの元である、私達の友達なのデス。 何で

も数百年前から来た『ギゾイド』とか言うロボットなのデスが…

私にはよく分かりません。でも、自分よりも相手を優先に考え、その相手を守ったりするほど、

とても優しい方だったんです！ 以前私もエッグマンさんに攫われた時、エメルさんは私を守り、助けてくれたので、

今でも私はエメルさんの事を感謝してます。」

しかし、彼女が話を続けると、下を向きながら暗くなり始めた。

クリーム「……………しかし…彼がある力を手に入れてしまった時…突然暴走し始め、地球を破壊しようとしたのデス。」

ソニックさんはそんな彼を止めようとしたのですが…

…結果的にはもう元に戻れない姿になってしまい…

やがて……………」

彼女は悲しそうにそう語ると、話を聞いていた二人の少女も同じく悲しく思い始めた。

あやか「……………」ご、ごめんなさい…何か悪い事をお聞きしてしまつて……………」

クリーム「い、いいえ！ 別にあやかさんには何も悪くありません！」

ヴァニラ「私はエメルさんとは一度お会いした事がないので、詳しい事はよく分からないのですが……………きっとジーマルさんは、

エメルさんの生まれ変わりなのだと、私は思うのです。」

ザジ「……………」ア……………」?

クリーム「え？」

ザジがクリームにそう問い掛けると、クリームはその一言に反応した。

クリーム「……………」あの男と……………」あのロボット……………」何か言ってた……………」。

……………貴女達も……………何か知ってる……………」?

あやか「え……………」何を仰るのですの、ザジさん？」

クリーム「……………」ああ、もしかして……………」。

彼女がそう言い出すと、突然食堂から飛び出した。すると彼女は手に何かを持ちながら、食堂へ戻って来た。それは緑色の綺麗な宝石で、不思議にも緑色に輝いていた。

クリーム「…この事でしようか？」

あやか「わあっ…！？ な、何でしょう、これ！？ とても綺麗なエメラルドですわねえ…！」

ザジ「…不思議に…光ってる…。」

フリッキー「ちよつと、クリーム！ そんなのを出して大丈夫なの！？」

クリーム「大丈夫です！ あやかさんとザジさんは特別デスので、見せても平気デス！」

フリッキー「そりゃ…信用出来る相手だけどさあ……………」

あやか「…あのう…これは一体……………？」

ヴァニラ「それは『カオスエメラルド』と言って、この地方に伝わる不思議な石なのです。常に光っているのがお分かりでしょう。

その生い立ちはさすがに私でさえも分かりませんが…何でもこの石には無限の力が宿っているのです。

どのように扱えるかも、私には分かりませんが、人によっては機械を無限大にしたり、

或いは己の望みを実現させる効果が秘めているのです。

ただし、それは良否に別れていて、

実際の正しい使い方は分かっていません。この石には全て七つも存在し、これがその内の一つなのです。」

クリーム「ここ数日前、お散歩中にチーズが拾って来たのデス。それ以来からしばらくの間私達が預ける事にしたのデス。」

チーズ「チャオ！」

あやか「では…彼らはこの石を狙って……………」
ヴァニラ「そのようみたいです…この石も、実態悪い方々も

狙ってるそうなので……。けど、

そう簡単には手放せないのです。例えそうしたにしても、必ず悪の手に渡ってしまう恐れがあります。

そうならないよう、私達がお守りしているのです。」

あやか「では、改めてお聞きしますが……もしかして、エメルさんやジーマルさんを暴走させたのも、この石の……?」

クリーム「はい……。幸いジーマルさんは無事に至りましたが……エメルさんだけは助かりませんでした……」

でも……私は信じてるのデス。エメルさんは消えてしまっても、エメルさんはこのエメラルドの中に、

今も生き続けている事を……。」

彼女がカオスエメラルドを見ながらそう言つと、あやかとザジは優しそくに、そんな彼女を見守っていた。

しかし、あやかはそのカオスエメラルドに目を向くと、多少不安に思い始めた。

あやか（……カオスエメラルド……無限の力を宿る不思議な石……
……まるでスタークリスタルのようですね。

……無関係であればいいのですが……。）

……グリーンヒル、及びエメラルドタウンであやかとザジが訪問していた同時刻……。

辺りは暗闇に包まれていた……。自分に意識はある物の、身動きが取れない。ここはどこなのか、

自分は何をしているのか、少女はただそう思っていた。

「……………ん……………うう……………ん……………ん？」

すると少女はゆっくり目を開き、ゆっくり起き上がった。そして彼女が気が付いた時、

自分は暗い何かしらの施設の中にいた。鉄で出来た床…辺りに埃塗れの機材…

そして明かりや人気もない暗くて静かな空間……………彼女はそんな異様な所にいた。

その少女は長いツインテールをした茶髪の少女で、黒いローブにピンのワンピース、

そして頭の後ろに黄色いリボンを付けていた。そう…彼女の正体はネギの幼馴染であり、同じく魔法使いである、

アーニヤこと、アンナ・ユーリエウナ・ココロウアであった。

アーニヤ「うう…ん……………あ…あれ……………？ ……ここは……………？」

彼女は辺りを見回ると、多少混乱し始めた。

アーニヤ「…ちょ…こ…ここどこなの！？ ……何で私がこんな所に…！？ ……確か私はロンドンで占いの仕事をしてたんじゃ……………！？」

彼女はそう言うと、過去の事を思い出そうとした。

アーニヤ「うう…何なのこれ…？ ……どうして私がここに……………？」

確か私は、『立派な魔法使い』^{マギステル・マギ}になるために、

ロンドンで占い師の修行をした…。そしたら……………

急に変な電気が飛び出て来て……………

そして地震も起きて……………そして急に辺りが歪み始めて……………それから…それからあ……………

あれえ！？ ……その後何も思い出せない！？

彼女は頭を抱えながらそう言った。

アーニヤ「じゃあ…私はどうやってここに来たの！？ ……転移魔法と

か使ってもいないのに……！？」
しばらく混乱する彼女だが、とりあえず落ち着きを取り戻し、辺りを見回りながら立ち上がった。

アーニヤ「……それにしても……ここはどこだろう……？　どっかの工場かな……？　って言うか、

ここからどうやって出れるんだろう……？」

彼女はそう言った後、出口を探すために歩き出した。そして彼女が道の先まで辿り着くと、シャッター式の扉まで立ち止まった。

アーニヤ「何これ、シャッター式？　何だろう、このSF映画みたいな……？　もしかして……これを押すのかな？」

彼女は隣のボタンを試しに押ししてみると、扉のシャッターが突然開き、それに対して彼女は思わず驚いた。

アーニヤ「ひゃっ……！？　あ、開いた……！？」

彼女は恐る恐ると思いながら、とりあえず今居る部屋から出てみた。そして彼女は、先程の部屋とは違い、

明かりに照らされた廊下にいた。もちろんその廊下には人気もなく、唯一その場にいたのは彼女一人だけであった。

アーニヤ「ああ……やっと明かりのある所に来れた……って言うか、ここどこなの……？」

明かりのある所にいた事で一安心するアーニヤだが、それでも自分の居場所に対して混乱していた。

すると彼女は扉の隣にあるプレートを見て、それを読み始めた。

プレートには英語で『Lost Colony』と書かれてあり、
彼女は更に混乱していた。

アーニヤ「ロスト……コロニー……？　それがあの部屋の名前なの？　変な名前ねえ……。」

そう思いながらも、彼女はその場を後にし、再び廊下を歩き始めた。アーニヤ「それにしても……ここは一体どこなのかしら……？　どっか

の工場とは言っても…

さすがにロンドンにはこんな超ハイテクなものはないと
……きやつ!?!」

その時、彼女は曲がり角で何者かとぶつかり、そのまま床に倒れた。
????「あつ!　だ、大丈夫!?!」

アーニヤ「痛たたたた…ちよつとお、どこ見て歩いて……!!?!」
尻餅を付いたアーニヤはぶつかった相手に向けて怒鳴り掛けようと
すると、その相手の顔を見て驚いた。

その人物は長い金髪で、黒いドレスを着用した女性であった。そ
う…その女性の正体は、

ネギの姉同然の存在である従姉で、同じ魔法使いの女性、ネカネ・
スプリングフィールド」であった。

アーニヤ「ネカネお姉ちゃん!?!」

ネカネ「アーニヤ!?!　どうして貴女がここに……!!?!」

彼女はそう言いながら、アーニヤの腕を引っ張り上げた。

アーニヤ「それはこっちの台詞よ!　どうしてネカネお姉ちゃんが
ここに……ウエルズにいたんじゃないの!?!」

ネカネ「それが……私にも分からないのよ。　気が付いた時には
私はこの施設にいて……。」

アーニヤ「どう言う事なの……!!?!　一体どうやってここに……!!?!」

ネカネ「余りよく覚えていないのよ……いつものように私はウエ
ールズにいたのに……」

突然空気中に変な電気が流れ始めるようになって……そ
したら突然地震が発生して……

そして突然風景が歪み始めて……それから……それっ
きりなの。　その先に何があったのか、

何も覚えていないの。」

アーニヤ「それ…私と同じだわ!　私も同じ変な現象に巻き込まれ

て、気が付いたらこの変な所に来てたの！」

ネカネ「貴女も……？」

アーニヤ「ねえ、ネカネお姉ちゃん……ここはどこなの？ 何か私達、変な工場みたいな場所にいるみたいなんだけど……」

私はちよつと、ロストコロニーって言う変な施設から来たんだけど……。」

ネカネ「そう……私は『エターナルエンジン』と言う施設から出たんだけど……ただ言えるのは……」

ここはただの工場じゃないのよね……。」

彼女は手を顎に当てながら、複雑そうにそう言った。

アーニヤ「え……それってどう言う……？」

ネカネ「……ちよつと、一緒に来てくれるかしら？」

彼女はそう言うのと、アーニヤの手を引つ張りながら、自分が来た場所へ戻ろうとした。

アーニヤ「えっ……！？ ちよ、ちよつと、ネカネお姉ちゃん、いきなり何よ……！？」

彼女は戸惑いながらネカネと一緒にどこかへ連れて行くが、開いた扉の先まで辿り着くと、

ネカネとアーニヤはとある幅の長い窓の所まで立ち止まった。

アーニヤ「……ネカネお姉ちゃん……？」

ネカネ「……アーニヤ………これを見てちようだい……。」

彼女は不安な表情でそう言うのと、窓の先を見せるために少しだけ横へ下がった。

訳も分からないアーニヤはまだ混乱していたが、言われた通りに彼女は窓の外を眺めてみた。

アーニヤ「！？」

彼女が窓の外を見ると、そこには大きくて丸い、青い海……そしてそ

ちゃんって……………」
彼女は呆れながらそう言った。

その後、二人は長い廊下を歩きながら、色々と話し合い始めた。
アーニヤ「…けど…ここはホントにどこなんだろ…？ 私はロンドン…ネカネお姉ちゃんはウエールズ…」

みんなそれぞれ違う場所にいたはずなのに…どうしてこんな変な施設に来ちゃったのかな…？」

ネカネ「分からないけど…正確にはここは魔法世界じゃないと言うのは確かだね…。」

アーニヤ「えっ……………そ、それって、どう言う事？」

ネカネ「もしここが魔法世界であれば、私達は確実に廃墟と化した麻帆良学園にいるはず…。けど、

逆に私達はこの未知なる施設に来てしまった…。現実世

界にはこのような施設はなかったし…」

それ以前にこの施設が存在したと言う情報すらなかった…。

だとすれば、ここは魔法世界…いや、

それ以前に私達の世界ではないと考えられるわ。」

アーニヤ「ま、魔法世界って……………どう言う意味なの、ネカネお姉ちゃん？ 魔法世界って…」

それってスタークリスタルによって出来た世界の事じゃ

……………？ でも、あれってスタークリスタルの暴走を阻止して、

私を闇から解放してくれた事で消えた偽物の世界の事じ

ゃ……………？」

彼女がそう問い掛けると、ネカネは途中で足を止めた。

ネカネ「…貴女もしかして、何も知らないの？ モツとシチミから何も聞いてなかった？」

アーニヤ「え……………いや…全然……………」

彼女はまた混乱していながらも、頭を振りながらそう答えた。

ネカネ「そう……………やっぱり、気が障ると思ったから、何も伝えな

「かつたんだ……………」
彼女は複雑そうにそう言うと、アーニヤは更に混乱していた。

ネカネ「……………実は…メルディナ魔法学校に封印したスタークリスタル……………何者かに盗まれたらしいの。」

アーニヤ「!?」

ネカネは心苦しそうにそう言うと、アーニヤはその言葉に対してシヨックを受けた。

ネカネ「しかもそれだけじゃないの…。最初に聞いた時は私も正直驚いたんだけど……………」

実はあのスタークリスタル、本来は全部で十個も存在していたの。魔法学校に封印していた四つは、

その内の一部だったの。残された六つはヨーロッパ各地に封印されてたらしいんだけど……………その石も、

全部盗まれたの。しかもたった一日と言う短い時間で…。

「アーニヤ「…ちょ、ちょっと待ってよ!! それってどう言う事なの!? スタークリスタルは全部で十個だったとか、

たった一日で全部盗まれたとか、そんなの聞いた事もないわよ!？」

彼女は興奮しながら、ネカネの両袖を掴んでそう言うが、ネカネは彼女を落ち着かせるために両肩を抑え始めた。

ネカネ「落ち着いて、アーニヤ!! 何も知らせなかつたのは本当に悪く思ってる! でも、それは貴女のためだったのよ!

貴女にはあの石に対して大きな責任を持たしてしまった…知らせたら厄介な事が起きると思って、

「敢えて魔法学校は黙っていたのよ!」

アーニヤ「じゃ、じゃあ…誰なの!? 誰がスタークリスタルを…!? も、もしかして…魔法学校は疑ってるの…」

「私の事を!? 以前それを盗んで、悪さをした事がある

から…!？」

ネカネ「ううん、心配しないで！ 貴女にはアリバイがあると魔法学校が確証したから、貴女には何の罪はないわ！」

アーニヤ「じゃあ、私じゃなかったら、犯人は誰なの!? 第一スタークリスタルの存在を知ってるのは、

私やネカネお姉ちゃん…それにネギ達以外誰もいないし…いるとしたら生徒以外の魔法学園関係者だけだし……………」

ネカネ「…とにかく、スタークリスタルを盗んだ犯人は誰なのか、私にも分からないわ。でも、今はそれより、

ここは一体どこなのか、どうやって地上に戻れるか、その答えを探さなければ行けないわ。

それまでにアーニヤ、私から離れないでね。この施設、かなり複雑な感じになってるみたいだから、

一緒にいてちょうだい。」

アーニヤ「…う、うん…。」

彼女はそう頷くと、少しだけ落ち着きを取り戻した。そして話を終えると、二人は再び廊下を歩き始めた。

アーニヤ「…それにしても……………ここは一体何の施設なんだろう…? こう言う所は初めて来るけど、

一体何のためにある施設なのかさっぱり……………」

ネカネ「確かに…これほどの大きな施設だとしたら、さすがにN A S Aの物とは考えられないわね……………!？」

その時、彼女は何かを感じたのか、いきなり足を止めた。

アーニヤ「えっ…ど、どうし…?」

ネカネ「シッ! 何か聞こえる…!?!」

アーニヤ「えっ…!？」

ネカネが人差し指を自身の口に当てながらそう言うと、二人は一斉に黙り、耳を済ませてみた。

すると廊下の少し先にある開いた扉の向こうから、何かを打つ音が

色が歪んで、その後何も覚えてない上、

気が付いたらここにいた………でしょ？」

タカミチ「まさか、君達も？」

ネカネ「ええ…私とアーニヤも、同じ現象によってこの施設に………」

アーニヤ「ねえ、タカミチ！ タカミチもこの施設は現実世界にある物じゃないって知ってるんでしょ！？」

もちろん、この世界が魔法世界じゃないって事も……！
タカミチ「やはり君達もそう思ってたか……。そう、僕も最初はここを魔法世界の一部だと思っていたんだが、

よく考えてみたら、現実世界の鏡面空間である魔法世界にはこんな施設はなかったし………

そもそも現実世界にはこんな施設なんて存在しないんだ………つて、何で君がここが魔法世界じゃないって……！？」

ネカネ「すみません…彼女も知らなかったみたいなので、私が教えたくんです。スタークリスタルの現状を………」

タカミチ「そ、そうか……いやあ、君には知らない方が一番いいと思っただが、やはりバレちゃったか……あはははは……」

彼は頭を掻きながら苦笑いをするが、逆にアーニヤは彼に怒鳴り掛けた。

アーニヤ「何が知らない方が一番いいよ！？ 元はと言えばスタークリスタル問題は私の責任なんだから、

知る必要があるに決まってるじゃない！？ 私が何も知らずに黙ってれば気が済むとも思ってた訳え！？」

ネカネ「お、落ち着いて、アーニヤ！」

アーニヤ「ねえ、スタークリスタルが全部誰かに盗まれたってホントの事なんでしょ！？ じゃあ、

これも全部スタークリスタルの仕業なの！？」

タカミチ「い、いや……そこまではまだ分からないんだけど………た

だ…一っただけ気になる物を見付けたんだ。

「これだよ……………」

彼がそう言っていると、後ろにあるパソコンの方へ振り向いた。そして彼がそうした後、

ネカネとアーニヤはそのパソコンの大型モニターの方へ見上げた。

ネカネ「…これは……………」

タカミチ「分からないんだけど…このパソコンで僕達の居場所を調べようとしたら、こんなデータが出て来たんだ。

何かの日記みたいんだけど……………ただその内容が気になるんだ。まるでスタークリスタルの事や、

僕達がここにいる事と何か関係してるかのように見えて……………」

アーニヤ「な、何ですって!？ な、何て書いてあるの!？」

彼女がそう言っていると、タカミチはその日記らしきデータの内容を読み始めた。文字は全て英語で書いてあったが、

彼らに取っては解読可能だったため、日本語で通訳してみた。

「……………私はこれまでの人生の中で、数多くの古書を読んで研究して来たが……………」

まさかこんな秘密がこの世に実在していた事は思いもしなかった……………」

この世界との繋がりがある別次元の存在……………そしてそれを引き裂いた災いの力……………」

このような真実はあって良い物なのだろうか……………。まず一つ分かったのは……………この世界にはもう一つ……………」

別の世界が存在していた事を……………。だが、同一世界とは言え、全く異なる存在がその世界だけにあると知る……………」

しかし、それは何なのかは、詳しくは分からん。かつてその世界はこの世界と何らかの繋がりがあったと言う事は、

確かな事である。しかし、その繋がりを引き裂いた物が実在すると聞く…。正確な名前は分からないが…

それは何かしらの力と呼ぶらしく、その数は六つもあると知る…。それぞれにはこの書かれてある……………

『混沌の魂』…『奇跡の心』…『無限の星』…『永遠の太陽』…『闇の絶叫』…そして、残った最後の力だが、

残念ながらその六つ目に関しては何も記されていないかった…。

だが、この力の名前を見てより深く調べると、

その力は何を示しているのかが分かる…。しかも…これまでに私が研究して来た物の事を示していた…。

有り得ていいのか……………あれが原因で二つの世界が引き裂かれたとでも言うのか…!? 信じられん…

いかにも信じられん……………だが…なぜか理解出来る…。あの力には確かに、無限の力を宿っている……………

奇跡を起こす事があれば、時には災いも起こす事も有り得る……………。使い方によって、異なる力を発揮する事もある…。

だが…いくら最後の一つが何なのか分からぬとは言え…もしその力が全て一つに揃ったとしたら、

一体何が起こるのだろうか…? 二つの世界を引き裂いたくらいだから…もはや、

それ以上に最悪な災いが訪れるのだろうか…? …いや、余り深く考えない方がいいのかもしれない…。

最後の一つが何なのか分からぬ限り、その力は不完全となる…集めても無意味であろう…。それに、

最初の四つは何を示しているのかを分かっていたにしても、五つ目はこの世には存在しないかもしれない…。

特にあの男…ブラックドゥームもこの存在に気付いていないはずだ…。だとしたら、今は安心出来るかもしれない…

いや、していいのだろうか? 不安と安心が左右する……………。とりあえず…全てに何も悪い事が起きぬ事を、

祈るしかあるまい……………」

アーニヤ「…何これ？ どう言う意味なの…？」

タカミチ「僕にもよく分からない…けど、当てはまる事がいくつかある。一つは、『二つの世界』……………」

一つはこの世界の事を示してるだろうけど、もう一つはもしかして、僕達の世界の事を示しているのかもしれない。

そしてもう一つ…この『闇の絶叫』の事だけど……………もしかして、スタークリスタルの事を示してるのかな…？」

アーニヤ「えっ、そうなの!？」

タカミチ「分からないけど…二つの世界に関してはまだ引つかかるけど…問題は『闇の絶叫』……………」

どうもこの力をスタークリスタルの事を示してるようにしか思えないんだ。

確かにスタークリスタルには闇の力が宿っていて、心の叫びに応じて発動する力を持っている……………」

だとしたら、この力の事をスタークリスタルを意味にしているに違いないんだ。」

ネカネ「となると…この世界にはスタークリスタルの存在を知っているって事なのかしら？」

タカミチ「そこも分からない…。ただ、この内容によると、この力はこの世に存在しないかもしれないと書かれている。

例え分かったにしても、その力はこちらではなく、僕達の世界にあると判断しているに違いない。とすれば、

誰もこの力の存在を知らないと思う。」

アーニヤ「あゝもう…何もかもチンプンカンプンで訳分かんないよあゝ…!! じゃあ、この世界は一体何の世界なの!？」

私達が別の世界に来たと言うのなら、どうやって元の世界に……………!？」

その時、遠くから足音が聞こえ始め、それを耳にした三人は一斉に静まり返った。

ネカネ「!? 誰か来る!？」

タカミチ「まずい! このままだと僕達を侵入者だと勘違いしてしまう! 急いで隠れよう!」

アーニヤ「う、うん…!」

三人は小声でそう言いながら、タカミチの案内で近くにある機材の後ろに隠れた。もちろん、予め相手に気付かれないよう、三人は自分の気配、及び魔力を無に静めた。

その時、閉まっていた扉が自動的に開き、そこから何者かが部屋に入ってきた。その人物は全身黒いが、

腕や足などに赤い模様が付いていて、鋭い目付きに赤い瞳、裏にブースターが設置してある特殊な白と黒の靴、

尖った黒い刺、そして両手両足にリングを装着していた。その姿は明らかにあのソニックとよく似ているが、

彼とは違ってどこか冷たさ、暗さと静かさがあった。しかし、そんな彼は手に花束を持ちながら、部屋の奥の方へ進んだ。

しかし、その間に彼は機械の後ろに隠れているタカミチ達に気付いていなかったが、三人はそんな彼の不思議な姿を見て、思わず啞然としていた。

アーニヤ「!? な、何あれ!？」 エイリアン 宇宙人!？」

ネカネ「そうかしら…? 結構可愛く見えるけど…。」

タカミチ「みんな、相手の事で気にしているのは分かるけど、ここは静かに! 気付かれたら大変な事になるよ!」

その後、黒い人物は長細い窓の前に立ち止まり、手に持っていた花束をそのまま床に置いた。その時、

隠れていた三人はある事に気付いた。この部屋で誰かが亡くなっ

たんだろう…彼らはそう思った。

「???」『マリア』……………あれからもう50年も経つんだな……………あの悲劇から……………僕は君を守れなかった事を…

今でも後悔している…。そして僕は未だに、自分自身を責め続けているよ……………あの時、

僕がこのコロニーに残っていればとな……………。フツ……………いくら過去を決別したと決意しても…

未だに君の事を忘れる事が出来ない…。だが、僕は少しでも自分を変えようと思っている。

僕は未だに人間を嫌っているが、それでも僕は彼らの味方として、この星と供に守ろうと思っている。

今じゃ敵であるはずの『G・U・N』のエージェントさ…笑ってしまうだろう…。けど、

これで少しでも僕を変えてくれるのなら…そしてこれが君の望む事なのならば…僕はこの道を歩み続こうと思う。

君が望む…全ての『希望』のためにな……………。」

彼はそう呟き終わると、彼は窓の外に映る地球の光景を眺め始めた。その間に隠れながら話を聞いていた三人は、

その言葉を意味深く感じていたが、逆にアーニヤだけ、意味不明に思いながら混乱していた。

「???」それはそうと……………どうやら僕の気のせいではなかったようだな……………。」

タカミチ「?」

その時、黒い人物の左手から緑色に輝く凄まじいエネルギーが出て来た。

タカミチ「!? みんな、避ける!!!」

「???」『カオスピア』!!!」

それ以前にどうやって僕達がここに来たのか分からないんだ！ 君の言う通り、ここは立ち入る場所じゃないんなら、せめて謝るよ！ でも、僕達は本当にどうやってここに来たのか分からないんだ！

気が付いた時にはこの施設内にて…ただそれだけの事なんだ！

ネカネ「タ、タカミチさん…！」

アーニヤ「タカミチ…！」

???「…それを証明出来る物はあるのか？」

タカミチ「…もし僕達がホントにここを荒らしに来たのなら、今頃血祭り状態になってるはずだ！ でもそうなっていないとしたら、

これが事実だ！ 頼む、信じてくれ…！」

彼が必死にそう言うと、しばらくお互いを見詰め合い、沈黙となる。

それまでにネカネとアーニヤは緊張しながら唾を飲み込み、様子を見続けた。すると黒い人物は、一度目を閉じると、両手から発していた緑色の炎を消し、そのまま両腕を下ろした。

???「…どうやら君の言葉に偽りは無いようだな。」

彼がそう言うと、タカミチ達は安心そうに溜めていた緊張の息を吹き出した。

タカミチ「はあ…よかったあ…。」

???「だが完全に信じた訳ではない。ここは神聖なる場所…君達はまだ無断に入り込んだ侵入者である事には変わりはないからな

せめて君達はどうかやってここに入り込んだのか、説明してもらおうか。話はそこからだ。」

アーニヤ「ちよつとあ！？ ここまで説得したって言うのにあんた一体何様のつも…！？」

ネカネ「アーニヤちゃん…！」

黒い人物の態度に気に入らなかつたアーニヤは怒鳴り出すが、状況を悪化させまいと、ネカネはそんな彼女の口を塞いだ。

「……一々うるさい女だ……」
タカミチ「……すまない。とりあえず、全てを話そう……。」

そしてタカミチは、ここまで起きた全ての出来事を、黒い人物に話し始めた。自分達はどこから来たのか、そこで何が起きたのか……タカミチは全てを話した。

「……なるほど……君達は日本にある麻帆良学園、及びウェールズとロンドンから来た人間であり、

そこで発生した謎の現象に巻き込まれて、気が付いたらここにいたと……そう言いたいのだな？」

タカミチ「まあ……そう言う感じかな？」

アーニヤ「……その割にはあんた妙に落ち着いてるのね？」
彼女はじと目になりながら黒い人物に向けてそう言った。

「……当然だ。なぜなら信じ難い話だからだ。特に日本や麻帆良学園……そしてウェールズとロンドンと言う場所など、

この世には存在しないからな。」

ネカネ「存在しないって……！？ それどう言う事なの……！？」

「……言った通りの事だ。そのような地名など、正直言えば初耳だ。そう言う意味があれば、

この世には存在しない場所とも言えるからな。」

アーニヤ「じゃあ、ここは魔法世界なの……？ あんたどう見ても現実世界にいる生き物には見えないけど……！？」

「……魔法世界……？」

ネカネ「ちょ、アーニヤ……！」

彼女は後ろにいるアーニヤに注意すると、うつかりしたアーニヤは思わず自分の口を塞いだ。……とは言っても、既に遅過ぎた事である。

「……何の事なのかは知らんが……この世界は魔法世界と言う名

ではない。 いや…少なくとも魔法はある。

ただ僕には興味のない物だがな。」

彼がそう答えると、タカミチ達は思わず驚きの目で彼に振り向いた。アーニヤ「えっ！？ ちょ、ちよっと、魔法はあるって、どう言う事！？」

タカミチ「魔法が使える者がいるって言うのかい！？」

???「地方によってな。だが僕のいる地方では殆ど科学が発達している。まあ、少なくとも魔法を研究している者もいるがな。」
アーニヤ「で、でも、魔法って、世間にバラしちゃう行けない物じゃなかったの！？ ほら、

バレたら罰として動物に変えられちゃうとか…！？」

???「何だ、そんなふざけた刑罰は？ いくら表で魔法が使えたからと言って、別に罪にはならんだろ？」

逆に使え方が間違えれば話は別だがな。」

タカミチ「な、なるほど…と言う事は、この世界は魔法世界でも何でもなく、魔法は常識となっているのか……」

じゃあ、この施設は一体何て言う場所なんだい？」

???「…『アーク』…スペースコロニーアークだ。 50年前、

この施設は世紀の天才科学者と呼ばれていた男、

『プロフェッサーPr・ジェラルド・ロボットニック』によって建造された物で、かつては不老不死の研究プロジェクト、

『プロジェクト・シャドウ』を実行していた宇宙研究施設だ。

だが機密的な都合上により閉鎖してしまい、

現在は無人の方舟として地球外に浮いている。」

アーニヤ「…じゃあ…あなたは…？」

???「…僕はこの施設で生まれた唯一の究極生命体、『シャドウ・ザ・ヘッジホッグ』。そしてPr・ジェラルド・ロボットニックは、

僕の創造主だ。」

タカミチ「きゅ、究極生命体…！？」

シャドウ「だが、それはもうどうでもいい事だ。なぜなら僕はこの施設やプロフェッサーによる過去など、全て決別した者だ。

これ以上の事は話すまでもない。」

彼は無愛想にもそう答えると、ネカネの後ろに立っていたアーニヤは再び嫌そうにシャドウと言う黒いハリネズミに睨んだ。

タカミチ「そ、そうか…なら、それ以上何も聞かない事にするよ。

でも、君がこの世界の住民、

基この施設の元関係者なのなら、一つ聞いてもいいかな？」

シャドウ「この施設やプロフェッサーの過去以外の事なら別に構わんが…。」

タカミチ「うん。実は…勝手に弄って申し訳ないんだけど、これを見てくれないかな？」

彼がそう言うと、先ほど弄っていたパソコンのキーボードを再び打ち出し、消えていた画面を再起動させた。

そしてシャドウは画面の方へ振り向き、そこから映し出す日記を眺めた。

シャドウ「…これは……プロフェッサーの日記ではないか!？」
彼が多少驚きながらそう言うと、その日記の内容を黙読し始めた。

そして彼が最後の内容まで読み終わらすと、
思わず驚きの表情を浮かべた。

シャドウ「…な…何だこの内容は…!？」 君、一体どうやってこれを…!？」

彼は横にいるタカミチに振り向きながらそう問い掛けた。

タカミチ「えっ…いや、僕達は今どこにいるのか、確認するために勝手に弄ったら、急にこんな内容が出てきて…。」

シャドウ「どう言う事なんだ…? プロフェッサーの日記なら多少読んだ事はあるが…こんな内容を見た事もないぞ!？」

それに、この五つのキーワード……一体何を意味しているんだ…？ 『混沌の魂』…混沌……

これはどう聞いてもカオスエメラルドに近いな……いや、近くても寧ろ関係はないのかもしれない…。

だが、どう言う意味なんだ…？ プロフェッサーは一体何の研究を…？」

彼はその日記を自己分析しながら、小声で独り言をするが、そんな彼の後ろにいたタカミチ達は何を言っているのか分からず、頭を傾げていた。

タカミチ「…で、その内容によると、もしかしたら僕達がこの世界にいるのも、何か関係があるのではと思って…。」

シャドウ「…確かに『二つの世界』と書かれてあるな。つまり…一つはこの世界で、もう一つは君達の世界となるのか？

……とすれば、どうやら君達が別の世界から来た人間だと言う事を、信じる以外他にないと言う事だな。」

彼は目を細くしながら横目でそう言うが、それに対してアーニヤは再びイラツとした。

アーニヤ「何よ、また疑ってるみたいだな目をしてえ!？」

ネカネ「まあまあ…とりあえず、一応信じてもらえたくらいそれでいいんじゃないかしら？」

シャドウ「それは分からんな。まだ理解出来ない箇所がいくつかある。それを調べるまでだ…。」

彼がそう言った後、キーボードを打ちながら、画面に映っていた日記データをどこかへ送信した。

タカミチ「ん？ 今何をしたんだい？」

シャドウ「先程の日記を本部へ送信した所だ。あの内容を司令官にも見せる必要があるからな。」

ネカネ「本部…？ 司令官…？」

アーニヤ「え、何？ 何の事？」

シャドウ「とりあえず、ここで茶番話をしてても意味がない。詳しい話は本部に戻ってからだ。君達は僕に掴まるがいい。 詳

今から地上へ連れて行ってやる。」

タカミチ「えっ、それってどう言う…？」

シャドウ「いいから僕の肩に掴まれ！」

タカミチ「あ、ああ…。」

彼が訳も分からず頷くと、ネカネとアーニヤに向きながら、多少混乱するも、静かに小さく頷いた。

そんなネカネはタカミチの肩を掴み、その間にネカネはアーニヤの手を握った。

シャドウ「準備はいいな。 しっかり掴まってる。」

彼がタカミチに肩を掴まれながらそう言うのと、懐から青く輝く宝石を取り出した。

タカミチ「？ それは…？」

シャドウ「『カオスコントロール』！！」

ズヴァシュンツ！！！！

彼がそう唱え出すと、全員青白い光に包まれ、一瞬にしてその場から姿を消した……………。

……………閃光と共に瞬間移動をしたシャドウ達は、とある廊下に到着した。

その廊下はスペースコロニーアークとは多少変わらない近未来的な

物だが、少しどこか違和感がした。
無事到着したタカミチ達は、多少愕然としながらも、辺りを見回り始めた。

アーニヤ「な、何今の！？ 私達、急に変な光に包まれて、一瞬に…！？」

ネカネ「ここ…さっきの場所とは違う…！？」

タカミチ「君、一体何を…！？」

シャドウ「安心しろ。僕はただ君達を地上へ連れて来たただけだ。

とは言え、ここは『G U N本部』だがな。」

ネカネ「えっ！？ つ、つまり、ここはさっきの宇宙施設じゃなく、地球にいるって事！？」

シャドウ「そう言う事だ。」

アーニヤ「ねえ、何？ そのジーユーエ又って言うの…？」

シャドウ「『G U N』ガイユエヌン…モビウス大陸の首都、

『セントラルシティ』に創設された国家連邦政府用国

家防衛軍だ。 陸・海・空の軍隊が集結する巨大軍隊であり、

連邦政府やモビウス大陸を守るために活動を行っている

る軍事組織だ。」

タカミチ「国家防衛軍…なるほど、日本で言うと自衛隊のような物だね？」

ネカネ「では、貴方は…？」

シャドウ「そう…僕はこの軍のエージェントとして所属している。」

タカミチ「エージェント…君が？」

シャドウ「そうだ。だがそれ以上は教える事は出来まい。 国家機密とは言え、君達には関係ない事だ。」

アーニヤ「じゃあ、さっきのあれ何だったの？ ほら、さっきの石みたいなの…？」

シャドウ「それも君達には関係ない事だ。 忘れる。」

アーニヤ「何よお!? 別にいいじゃない、聞いたって!?!」

ネカネ「まあまあ……!」

シャドウの無愛想な態度に対して怒り出すアーニヤだが、ネカネは苦笑いしながらそんなアーニヤを落ち着かせようとした。

しかし、アーニヤは落ち着きを取り戻すと、小声でネカネに話し始めた。

アーニヤ「…ねえ、ネカネお姉ちゃん? あの石つてもしかして、スタークリスタルなんじゃないの?」

ネカネ「さあ、分からないわ…私もそんなにスタークリスタルの事に詳しくないし…そもそもあー言う形をしたかどうかは……。」

シャドウ「とりあえず、着いて来い。 司令室まで案内してやる。」

タカミチ・ネカネ・アーニヤ「司令室……!?!」

シャドウがそのまま廊下を歩き始めると、タカミチ達は彼を追いながら後を着いて行った。

………ここはGUN本部の司令室。 ここには壁を覆うかのように設置された三つの大型モニターと複数の小型モニターがあり、それらの前に複数のオペレーター達がキーボードを打ったり、マイクで連絡したり、資料を印刷していたりしていた。

そして彼らの後ろにある高台に立っていたのは、一人の初老の男性であった。 その男性は白い角刈りをしていて、

目は赤と青のオッドアイ、そして複数のバッジを身に付けたグレーのユニフォームを着用していた。

彼は両手を腰に組みながら、険しい表情で大型画面を眺めていた。

その間に、彼の背後にある扉が自動的に開き、そこからシャドウ達が入って来た。そしてシャドウは途中で立ち止まり、その男性に向けて敬礼した。

シャドウ「司令官、ただいまアークから帰還した！」

彼が敬礼しながら報告すると、司令官と思われる男性はゆっくりと彼の方へ振り向いた。

司令官「…うむ、よく戻って来た。 どうだ、アークへの墓参りは？」

シャドウ「問題はなかったが、改めてよかったとも言えよう。 特に施設自体異常はなく、いつも通り安全な状態だ。」

司令官「そうか、それは聞いてよかったな…。」

その後、シャドウは突然辺りを見回り始めた。

シャドウ「…ところで司令官、あの女はどこに行ったか知らないか？」

司令官「ああ…ルージユの事か？ あいつなら大分前から休暇を取っている。 彼女の通信機能は中断されているため、

居場所は分からないが、しばらくの間は休んでるそうだ。」

シャドウ「…フンツ、どうせ暇だからわざと休暇を取ったのだろう。」

あの女はそう言う奴だからな…。」

司令官「まあ、そう悪く言っな。 彼女はあー見えても政府専属エンジニアメントとしてよく活躍してくれた身分だ。」

それぐらい大目に見てやれ。 ……ん？」

彼がそう言った後、シャドウの後ろにいるタカミチ達に気が付いた。

司令官「シャドウ…この者達は？」

シャドウ「うむ…この者達だが…実はコロニー内で出会った客人達

だ。」

司令官「何ッ!? では彼らは…!?」
シヤドウ「いや、侵入者ではない…とは言え、アークとは全く関係のない部外者だ。彼らの話によれば、

何らかの現象に巻き込まれて、アークに辿り着いたと言う。詳しくは彼らに聞いた方がいい。」

司令官「何らかの現象…?」

彼が訳も分からずそう言うと、タカミチ達の方へ振り向き、彼らに近寄った。それに対し、タカミチ達は多少戸惑い始めた。

司令官「…君達の名は?」

タカミチ「あ、は、はい…高畑・T・タカミチと申します。」

ネカネ「ネ、ネカネ・スプリングフィールドです!」

アーニヤ「ア、アンナ・ユーリエウナ・ココロウアと申します…でも、みんなからはアーニヤって呼んでます!」

三人は多少緊張しながら、司令官に向けて敬礼した。

司令官「うむ…タカミチ君にネカネ君、そしてアーニヤ君だな?」

私はG・U・N・司令官の『アブラハム・タワーズ』だ。

以後、よろしくな。」

タカミチ「タワーズ司令官…ですね? はい、よろしくお願い致します。」

アブラハム「それはそうと、君達はどこから来た者だ? どうやってアークに入り込んだんだ?」

タカミチ「そ、それが……。」

彼はこれまでの出来事を、全てタワーズ司令官に説明した。

アブラハム「…何だと…? 君達は別の世界から来た人間とでも言うのか!?」

タカミチ「はい…そう言う事らしいです。」

彼がそう説明し終えている間に、ネカネとアーニヤは大型モニター

に映る世界地図を眺めていた。
しかし二人がその地図を見終えると、二人は愕然としながら小声で
お互いに話し始めた。

アーニヤ「ちょ…ネ、ネカネお姉ちゃん!! 何、あの地図!?
私達の知ってる地図とは全然違うよ!？」

ネカネ「そ、そうみたいね…でもこれで私達は全く違う世界に来て
しまった事が分かったわ…。」

アブラハム「しかし…有り得るのか? この世界の者ではない人間
が、違う世界から来たと言う事が…!？」

シャドウ「彼らの言う事は事実だ、司令官。 真実は、先ほどア
クから転送した情報に記されている。」

アブラハム「何…?」
彼が耳を疑うと、一人のオペレーターに振り向き、こう指示した。

アブラハム「オペレーター、今受信して来た電報を表示してくれ!
オペレーター「ハッ!！」

彼がそう返事すると、シャドウが転送した日記を大型画面に映し出
した。 それを見たタワーズ司令官は、
思わず驚いていた。

アブラハム「こ、これは…!？」

シャドウ「Pr・ジェラルドが生前に書き残した日記だ。 しかも
この内容は僕でさえも気付かなかった、謎の記録だ。」

彼がそう言うと、タワーズ司令官は日記を読みながら、更に驚きを見
せていた。

アブラハム「…な、何なんだ、この日記は…!?!? 二つの世界に…
何だこの五つのキーワードは…? ジェラルドめ…」

一体何を研究していたと言うのだ…!?!?」

シャドウ「分からない……だが、この内容からにして、タカミチ達は別世界から来た人間だと証明されたようだ。」

アブラハム「……そう言う事らしいな……。……。」
彼がそう言った後、タカミチ達の方へ振り向いた。

アブラハム「しかし、そんな君達が別の世界から来た人間だとは……まだ信じられんな。しかも謎の現象に巻き込まれた事で、

この世界に来るとは……。。」

タカミチ「僕も信じ難い事です……いや、以前にも同じ経験をしたので、多少慣れてると言えば慣れてますが……。……。」

彼は苦笑いをしながらそう答えるが、逆にタワーズ司令官は片方の眉毛を上げながら、その言葉に対して不思議そうに思った。

アブラハム「何かね、以前にも別の世界に飛ばされたとしても言うのか？」

タカミチ「あつ、そうだ！！　せつかくだからこれを聞いてみないと……！」

彼は咄嗟に何かを思い浮かべると、上着の内側から折り畳んだ一枚の髪を取り出した。　彼がそれを開くと、

そこには3・A生徒達の顔写真が載っていた。

ネカネ「それ……確かネギのクラス名簿にあつた写真……！？」

タカミチ「こんな事もあるうかと思つて、予め印刷したんだ。」

彼がそう言った後、開けた写真をタワーズ司令官に渡した。

アブラハム「……これは……？」

タカミチ「はい……実は僕は、この写真に載っている娘達の担当教師だったのですが、

今は僕の友人である別の教師の生徒達となっています。

しかし、謎の現象の発生により、

僕達はこの世界に来てしまった……もしかしたら、この娘達も巻き込まれて、

この世界に辿り着いたのかもしれないのです。 僅かな情報でもいいんですが、

この娘達をどこかで見覚えはありませんでしょうか？」

アブラハム「ふむ……………」

彼はそう呟くと、渡された写真をそのまま見詰めてみた。 すると

彼はその写真を隣にいるシャドウにも見せたが、

逆に彼は目を閉じながら頭を振り出した。

アーニヤ「ちょ、ちょっと待って！ それってもしかして、ネギもこの世界にいるって事なの！？」

タカミチ「麻帆良での現象が発生したんだ。 ネギ君達も巻き込まれてもおかしくないはず……………」

ネカネ「だとしたら…………ネギ達は今一体どこに…………？」

アブラハム「…………残念だが、この写真に載っている少女達には見覚えはないな。」

タカミチ「そ、そうですか……………」

それを聞いたタカミチは、残念そうに頭を下に向けた。

アブラハム「だが、その娘達も、君達と同様この世界にいると思うのかね？」

タカミチ「はい、可能性は高いと思います。」

シャドウ「ならばお尋ね者として手配してみてはどうだ？ 写真は

既に用意されている。 それを利用して全国に流せば、

何れ速やかに見付かるだろう。」

アブラハム「うむ、そうだな。 予めキノコワールド大陸の方も力を借りるとしよう。」

彼がそう判断した後、再びオペレーターの方へ振り向いた。

アブラハム「オペレーター、早速キノコワールド大陸のダイヤモンドシティに通信してくれ！」

オペレーター「ハッ……………」

彼がそう返事すると、早速キーボードを打ちながら、通信準備を始めた。

タカミチ「え…協力してくれるんですか？」

アブラハム「何…君達の生徒とやらを見付けてほしいのだから？ 我々は人のため、国のために戦う軍隊だ。

これぐらいの手助けをしても、悪くないだろう。」

シャドウ「フンツ…最も、横暴な真似をするほど、世間からでは好かれていないがな。」

アブラハム「こ、こらっ！！ 余計な事を言うでない！！」

シャドウが冷静になりながらも本音を言うと、タワーズ司令官は慌てながらシャドウに突っ込んだ。

ネカネ「でも、ありがとうございます！ 私達のためにわざわざここまでしてくださるなんて…！」

アーニヤ「さすが軍隊ねえ…いい所もあるのね！」

ビイイイッビイイイッビイイイッビイイイッビイイイッ！！

しかし、その時部屋がパトランプによって赤く染まり、サイレンが鳴り始めた。

アーニヤ「えっ！？ な、何、急に何なの！？」

シャドウ「これは…緊急事態か！？」
レッド・アラート

アブラハム「何だ、何が起きたのだ！？」

スピーカー「緊急事態発生！！ 緊急事態発生！！ 第5兵器庫にて、謎の侵入者発見！！ 直ちに全兵隊、

及び全戦闘兵器を第5兵器庫へ出撃し、侵入者を排除せよ！！ 繰り返す！！ 第5兵器庫にて、

謎の侵入者発見！！ 直ちに全兵隊、及び戦闘兵器を第5兵器庫へ出撃し、侵入者を排除せよ！！」

アブラハム「何ッ、侵入者だと!？」

シャドウ「司令官、今から第5兵器庫へ出撃する！ 後は任せたぞ
!!」

アブラハム「ああ、頼む!!」

彼が頷きながらそう答えた後、シャドウは両靴に設置されているブ
ースターを起動させ、

素早く滑走しながら司令室から飛び出して行った。

タカミチ「あつ…シャドウ君!!」

ネカネ「…何だか大変な事になって来たわね…。」

アーニヤ「どうすんの、私達…?」

彼女が不安そうにそう言うと、タカミチは深刻そうに考え始めた。

タカミチ「……………相手はどんな敵なのか分からない…けどこのまま
にする訳には行かない！ 行くよ、

シャドウ君と協力しに…!!」

アーニヤ「えっ!?!? ちょ、ちよつとタカミチ!!」

ネカネ「あつ、ちょ、ちよつと二人共…!!」

タカミチはシャドウに手を貸すために走り出すと、アーニヤとネカ
ネはそんな彼を追うため、司令室から飛び出て行った。

アブラハム「あつ、こらっ!!! 君達…!!」

彼はそんな三人を止めようとするが、既に遅かった。

オペレーター「タワーズ司令官！ この状況で真に申し訳ありません

んが、ダイヤモンドシティとの通信が繋がりました!」

アブラハム「何…!?!?」

…… GUN本部の第5兵器庫にて… GUN兵士達とその戦闘兵器達は、この兵器庫内に侵入して来た謎の敵と戦っていた。その兵器庫に保管されていた数々の兵器は破壊され、辺りは爆発などによって発生した煙に包まれていた。

その煙の中には一体の敵がいたのだが、煙のせいでその姿が見えない。だが敵がそこにいるのが分かるように、兵士達や兵器達は銃で敵に攻撃していたが、効果は全くなかった。

兵士A「くそおおお！ なぜくたばらねえ！？」

兵士B「弾はまともに当たってるはずだ！？ なのになぜまだ立ってるんだ！？」

チユドチユドオオオオオオン！！

その時、煙の中にいる敵が腕を前に向けて上げると、そこからミサイルを発射し、軍の大型戦闘兵器や浮遊兵器を破壊した。

兵士C「あつ！！ 『GUNハンター』と『GUNビートル』が…！！」

兵士D「ダ、ダメだ…！！ このままだと俺達も危ない…！！ 後退するぞお！！」

しかし、彼らがその場から引き下がろうとすると、敵はそうはさせまいと思いい、ミサイルを彼らに向けて発射した。

兵士達「うわわわわわああああああ！！！！」

「『カオススパ』！！！！」

チユドドオオオオオオン！！

その時、兵士達の背後からエネルギー弾が放たれ、ミサイルを破壊

した。助けられた兵士達は後ろに振り向くと、そこにはシャドウとタカミチ達が立っていた。

シャドウ「後退するな！！ 誇り高いGUN軍隊が後を引いては、世の恥になるぞ！！」

兵士達「シャ、シャドウさん！！」

兵士A「し、しかし、敵は我々の銃弾には全く通用していません！

まるで体が鉄で出来ているようで……！」

兵士B「手榴弾も使ってみました、それも効果はありませんでした！

特に殆どのGUNハンターとGUNビートルもやられて

しまいましたし……！」

シャドウ「ならばもっと強力な重火器を使い！ バズーカやロケットランチャーぐらいは用意されているだろ！？」

兵士C「………ところでシャドウさん……貴方の後ろにいるこの人達は一体……？」

彼がそう言うと、シャドウは後ろに振り向き、そこで立っていたタカミチ達に気付いた。

シャドウ「なっ！？ き、君達……なぜここに……！？ 司令室に残ったのではなかったのか！？」

タカミチ「状況は大変そうだからね。僕も君と一緒に手伝うよ！」

シャドウ「何ふざけた事を言ってる！？ 君達は他所の世界から来た一般人だぞ！

何者なのか知らない敵の前にして君達のような無力な者には何が出来る！？」

アーニヤ「何ですってえ！？ そう言うあんたこそ、私達の事を全く知らないのにくせに何偉そうに……！！」

ネカネ「ア、アーニヤちゃん！！」

ズババババババアン！！！！

彼は無機質な声でそう言うと、突然煙が消え掛かり、姿を現した。

その敵の正体は、ソニックとよく似ているが、身長が高く、不気味に光る黄色い一つ目、そして両足に車輪が付いていた、ソニック型のロボットであった。

????『フッフッフッフッフ……是非とも会ってミタカッタゾ……
…究極生命体、しゃどろ・ざ・へっじほっく!』

第30話 脅威！メカソニックMK-II

……スペースコロニー『アーク』で目を覚まし、シャドウとの出会いにより、GUN本部に訪れたタカミチ、ネカネ、そしてアーニヤ。しかし、基地内で発生した事件により、新たな敵が彼らの前に現れた。

??? 『フッフッフッフ……是非とも会ってみたいカッタゾ……』
…究極生命体、しゃどう・ざ・へっじほづく！』

アーニヤ「な、何あれ！？ 恐ッ！？」

ネカネ「もしかして…ロボット！？」

タカミチ「ロボット…の割には、さすがにあの茶々丸君とは違う感じがするね…。」

シャドウ（…メタルソニック…？ いや、似てるが違う…！）
彼はそのロボットを見詰めながら、心の中からそう思った。

シャドウ「君は一体何者だ！？」

??? 『オヤ…コレハゴ無礼…初対面デアリナガラ失礼シタナ…』

俺ノ名ハ『めかそにつくMK-II』…
まーくすりー

そにつく型ノ戦闘兵器、めかそにつくしりーずノ3号機
ダ。以後、才見知り置キヲ…。

彼は礼儀正しくお辞儀しながら、自己紹介した。

シャドウ「メカソニック…？ メタルソニックと関係はあるのか？」

メカソニック『めたるそにつく…めかそにつくMK-II
Iハしりーずノ2号機…なんばりんぐデ言エバ、
まーくつ

俺ノ兄ノヨウナ物ダ…。

シャドウ「なら君もドクターによって作られた戦闘兵器だな？」

メカソニック『どくたー…アア、ますたー…えっぐまん

ノ事ダナ？ 確力ニ俺八、

ますたー：えつぐまんニヨツテ開発サレタ戦闘兵器ダ。 ダガ、ソレハ過去ノ事…。

既ニますたー登録ヲ解除サレテイルタメ、今ノえつぐまんハモウ俺ノ主デハナイ…。 今ノ俺八、

めたりつくすノ幹部トシテ、我が総帥デアルめたるそにつくト供ニ行動シテイル…。

シャドウ「メタリックス…？」

メカソニック「EEEE」ソウ：「コノ地ニ生キル全テノ愚カシイ生物共ヲ全テ抹殺スルタメニ集結シタ、

史上最強ナルろぼつと軍隊…：…生ヲ持ツ動植物ヲ全テコノ世カラ消滅サセ、

我ヲ機械ダケノ世界ヲ築キ上ゲルト言ウ万物ノ軍勢ダ。 我々ハコノ世界ノ生物共ト同ジヨウニ、

「生キル」タメニ生マレテ来タ存在ダ。 ダガ、誰モ我々ノ存在ヲ認めズ、

タダノ使イ物ニナラヌ道具トシテ見放サレタ…。 我々ハソノ生物共ニ復讐スルタメニ、

「コノ軍勢ヲ築イタノダヨ…。」
「アーニヤ」…な、何そのSF映画みたいな話…？ ふざけてるにも

ほどがあるわ…。」
タカミチ「けどロボットにしてはかなり感情的だな…。 これはさ

すがに聡美君に見せたら、どう思っのやら…。」
シャドウ「なるほど…かつての創造主であるドクターに見捨てられ

た事で、
関係のない者共を全て消えてなくなればいいと言っくだ

らん理屈か。 随分と哀れで愚かしい理由を作れるもんだな。」
メカソニック「EEEE」ドウヤラチャント理解シテイナイヨウダナ…

…マアイイ。 ドノ道愚カナ生物共ナド、
我々機械トハ決シテ理解シ合エナイ仲ナノダカラ

ナ。　ダガ、我々ノ計画ヲ実行スルニハ、

全テヲ一瞬ニシテ滅ボセル壮大ナ力ガ必要トナル。
ソノタメニハ、君ガ今持ツテイル、

かおすえめらるどガ必要ナノダヨ…！」

彼がそう言つと、シャドウは凶星に思った。　だが背後にいたアーニヤ達は、その言葉を耳にしたにもかかわらず、多少混乱していた。

シャドウ「…な、なぜ君は僕がカオスエメラルドを持っていると…！？」

メカソニック「…誤魔化シテモ無駄ダ。　めたるそにつくニヨツテ復活シタ俺ニハ、

かおすえめらるどノ在リ処ヲ探知スルれーだー
機能ヲ搭載シテイル。　シカモソレハ俺ダケデナク、

他ノ同志達モ搭載シテイルノダ。　ダカラ君ガ
かおすえめらるどヲ所持シテイル事ナド、

既ニオ見通シナノダヨ。」

アーニヤ「…カオスエメラルドつて…さっきあいつが持ってた青い石の事かな？」

ネカネ「そうね…だとしたら、スタークリスタルとは関係ないかも…。」
二人はお互いに向き合いながら、小声でそう話した。

シャドウ「なるほど…君がここを襲つたのは、僕の持つてるカオスエメラルドが狙いか…！　だとしたら、

何の目的でカオスエメラルドを狙いに来た！？」

メカソニック「フッフッフ…通常八教エル筋合イナドナイノダガ…マア、一度八君トハ会ツテミタカツタ身分ダツタカラナ…」

特別ニ少シダケ教エテヤルトシヨウ…。　我々めたりつくすハ、コノ世ヲ全テ制スタメニ、

アル『力』ヲ求メテイルノダ。　ダガソノ『力』

ヲ手ニスルタメニハ、七ツノかおすえめらるどヲ集メナケレバナラ
ナイ…。

君ノ持ツソノえめらるどこそ、ソノ一部ナノダヨ
…。

タカミチ(『カ』…? 『カ』つてまさか…あの日記の事じゃ…?)
彼は心の中からそう思った。

シャドウ「何だ、その『カ』と言うのは!? 君達は一体何を企ん
でいるのだ!？」

メカソニツクIEEE『残念ダガ、ソレ以上ノ事ハ君達ニ言ウ訳ニハ
行カナイ。ダガコレデ分カツタハズダロ?』

ナラバ話ハコレカラダ……サア、ソノえめら
るどヲコチラニを渡シテモラオウカ!』

彼は手を伸ばしながら、シャドウに向けてそう言った。

シャドウ「フンッ、断る! カオスエメラルドはこの世界と全ての
ためにある物だ!

君達のようなガラクタ共に渡る資格などない!」

メカソニツクIEEE『ホウ…マア、当然ダナ。ソノヨウナ答エガ
来ル事ナド、当初カラ分カツテイタ事ダ。』

ナラバココハオ約束通り……力尽クテ奪イ取ル
マデヨ!』

彼がそう言った後、自らを刺付きの球体に変形し、その場で急回転
し始めた。

シャドウ「!! 君達は下がってる!! ここは僕がやる!!」
兵士A「ハ、ハッ!!」

その後、シャドウは同じく身を丸くしながら、同じように急回転し
始めた。

シャドウ「『スピンドラッシュ』!!!」

ズドガアアアン!!!

シャドウは急回転しながら、猛スピードで飛び出したが、同じく急回転するメカソニックIEEにぶつかり、
両者ともその場から飛ばされ、元の姿に戻った。

アーニヤ「えっ!? ちよつと、何今の攻撃!?!」

ネカネ「回転による体当たり攻撃!?!? どう見ても見た事もない攻撃だわ!?!?」

シャドウ「チツ!?! 食らえ!?!」

彼は手に持っていた愛用のシャドウライフルで攻撃するが、全てメカソニックIEEに命中したにもかかわらず、弾き飛ばされた。

兵士A「ま、また弾き飛ばされた!?!」

兵士B「バカな!?!? シャドウライフルは何でもシャドウさんの力と合わせる事によって、

どんな硬い敵を一撃で貫通して撃ち落せるほどの威力を持ってるはずなのに!?!?」

タカミチ「そんなに強力な武器なのか!?!?」

兵士A「そりゃそうだ! 何せシャドウさん専用の武器だからな!」

シャドウ「くそっ!?! 何て頑丈な装甲なんだ!?!? 一体どう言った超合金を使ってあのような硬いボディを!?!?」

メカソニックIEE「無駄だ。ドンナ武器ヲ使ッテモ、俺ヲ壊ス事ナド出来ン。イヤ、君二八武器ナド似合ワン。」

戦ウンナラ君自身ノ力デ戦ッテモラオウカ?

君八究極生命体ダロ?」

シャドウ「くっ!?! 言わせて置けば!?!!」

彼は歯を食いしばりながらそう言うと、所持していたシャドウライフルをそのまま投げ捨て、メカソニックIEEの上まで高く跳び上がった。

シャドウ「『シャドウイーグル!?!!』」

その時、彼は空中から高速に急降下し、飛び蹴りを仕掛けるが、メカソニックEEEEは一瞬にしてその攻撃を交わした。

しかし、シャドウはその場で着地した後、次の攻撃を仕掛ける準備した。

シャドウ「避けられると思ったか！！ 『カオスバースト』！！！」
ズバアアアアアン！！！！

シャドウは自らの体から赤紫色の衝撃波を放出し、メカソニックを吹き飛ばした。しかし、敢えてダメージを受けた訳ではなく、ただ軽く吹き飛ばしたに過ぎなかった。

メカソニックEEEE『ソウダ、ソレクライ本気ヲ出サナイト話シニナランゾ？』

シャドウ「黙れ！！ 今直ぐにスクラップにしてやる！！ 『カオススパ』！！！！」
彼は再び『カオススパ』をメカソニックEEEEに向けて放った、敵の方はなぜかその場から動こうとしなかった。

メカソニックEEEE『掛カツタナ！！』

彼が突然そう言うと、いきなり胸元を開き出した。その胸元の裏には赤い球体が設置されていて、

彼はその球体を『カオススパ』の方へ向かせた。すると『カオススパ』はそのまま球体の中に吸収され、

そのまま胸元を閉ざした。

シャドウ「なっ！？」

メカソニックEEEE『フッフッフッ…君ノ力…こびーサセテモラッタゾ！ 『かおすすぴあ』！！！！』

ズガガガガン！！！！

その時、メカソニックEEEEはシャドウの『カオススピア』を放ち、そのままシャドウに命中させた。

シャドウ「ぐがあっ！！」

タカミチ「ああっ！！ シャドウ君！！」

兵士C「おい、今はシャドウさんの『カオススピア』じゃ…！？」

兵士D「バカな！？ 何であのロボットが『カオススピア』を…！？」

シャドウ「くっ…どう言う事だ…！？ 今のは…『カオススピア』

…！？ なぜ奴は僕の技を…！？」

メカソニックEEEE「ドウシタ、次ノ攻撃八来ナイノカ？」

シャドウ「くっ…ふざけた事を…！！ 『ローミングカオス』！！！！」

その後、彼は紫の電気を放ち、敵を追跡しながらメカソニックEEEEの方へ飛んで行った。

だがメカソニックEEEEは再び胸元を開き、その攻撃も吸収させた。シャドウ「何ッ!？」

メカソニックEEEE「フッフ…コノカモ頂クゾ！ 『ろーみんぐかオス』！！！！」

ズドオオオオオン！！！！

次にメカソニックEEEEは、シャドウの『ローミングカオス』を放ち、そのままシャドウに命中させた。

シャドウ「ぐわっ！！」

アーニヤ「あつ、まただわ!？」

兵士A「今度は『ローミングカオス』まで!？」

兵士B「何なんだあのロボットは!? 何でシャドウさんの技が使えるんだ!？」

シャドウ「くっ…バカな…僕の『ローミングカオス』まで…!？」

貴様…一体何を…!?!」

メカソニックIIII「何ダ、マダ気付イテイナイノカ？ 俺二八人ノ技ヲこぴースル特殊機能ヲ搭載シテイルノダ。」

ソノタメ、君ノ使ウ技ヲとれーすシ、俺ノ武器ト化シタノダ。 コレデ俺八君ノ技ヲ自由二扱エルト言ウ訳ダ。

面白イダロ?」

シャドウ「くっ…舐めた真似を…!?!」

自分の技で怪我をしたシャドウは、そんな不敵なメカソニックII Iに睨み付けながら、歯を食い縛っていた。

兵士C「おい、どう見てもシャドウさん、ピンチじゃないのか!?!」

あの究極生命体と呼ばれているシャドウさんが…!?!」

兵士D「どうすんだよ、俺達も加勢するか?」

兵士A「む、無茶言うなよ！ あの敵には俺達の武器には通用しないんだぜ!?!」

兵士B「そもそも奴はシャドウさんの技を持つてる！ 何されるか分からないぞ!?!」

四人の兵士は正しい判断を選択出来ないまま揉め合うが、その間にアーニヤが前に立ち上がった。

アーニヤ「もう!!! どいつもこいつもだらしがないんだから!!!」

こうなったら私があんなポンコツメカを粗大ゴミに出せるようコテンパンにしてやつけてやる!!!

こっちが黙って見守ると思ったら大間違いなんだから!!!」

彼女はそう言いながら、シャドウの所まで駆け出し始めた。

ネカネ「あつ、アーニヤ!!!」

タカミチ「バカ！ 勝手に動いたら…!?!」

アーニヤ「ちよつとあんた、退きなさい!!!」

彼女はシャドウをそのまま突き飛ばしながら、メカソニックIIII

の前に立ち上がった。

シャドウ「どわっ!? き、君、何を…!?」

メカソニツクIEEE「何ダ、乱入力?」

彼がそう言った後、アーニヤは懐から杖を取り出し、呪文を唱え始めた。

アーニヤ「フォルテイス ラ・テイウス リリス・リリオス!」

サキタ・マギカ魔法の射手・セリエス・イグニス火の三矢「!!!!」

彼女がその呪文を唱えると、杖から三つの炎をメカソニツクIEEEに放った。その瞬間を見たシャドウや兵士達は正直驚いたが、

逆にメカソニツクIEEEは再び胸元を開き、炎を吸収した。

アーニヤ「えっ!?!」

シャドウ「な、何だ今の炎は…!?」

兵士A「お、おい…今あの娘の杖みたいな物から火出なかったか!?!」

兵士B「まさか、魔法とか言う奴か!?!」

メカソニツクIEEE「…フンツ…何ノ攻撃ナノカハ知ランガ、アリガタク貰ツテオクゾ。確カコウ呼ンデタヨウダナ…」

さきた・まぎか魔法ノ射手・せりえず・いくにす火ノ三矢「!!!!」

彼がそう唱え出すと、手元から三つの炎の矢を放ち、それをシャドウとアーニヤに向けて飛ばした。

アーニヤ「うそおお!? そつちまでえ!?!」

タカミチ「くそつ…!!! ネギ君、君の魔法を借りるよ!!!」フレット吹け

ウネ・ウエンテ一陣の風…フランス風化・サルタティオ・ブルウエレア風塵乱舞「!!!!」

彼が呪文を唱えると、手元から強力な風を放ち、炎の矢を一瞬にして消し飛ばした。そして彼は、

アーニヤとシャドウの前に立ち上がった。

アーニヤ「タ、タカミチ…!」

タカミチ「まったく、勝手な事をするからだよ、君は…!」

アーニヤ「だって、黙って負けちゃう所なんて見たくないでしょ!

？」

そんな言い合う二人だが、その間にシャドウはそんな二人を見て不思議そうに思った。

シャドウ（…な、何だったんだ、今は…！？ さっきの炎と言い、今の風と言い……もしかや、

これが彼らが言っていた魔法とか言う奴か…！？）

兵士C「何だ、あの男は！？ 手から風を飛ばしやがったぞ！？」

兵士D「あの二人、もしかしてキノコワールド大陸の魔法使いか！？ とてもそうには見えないが…。」

兵士達は魔法が使えるアーニヤとタカミチを見て戸惑い始めるが、その間にネカネは困難し始めた。

ネカネ（ど、どうしよう…タカミチも加勢に向かっちゃったし…私はどうすればいいのかしら…。

黒薔薇男爵に変身する魔法はもう不必要と思って消しちやったし…

その前に私にはあの二人やネギみたいな強力な魔法も持っていないし……ど、ど、どうすれば……！？）

……そう…実はネカネはスタークリスタル事件が起きた一ヶ月前、『黒薔薇男爵』と言う魔法による仮の姿に変身した事がある。その理由は、当時アーニヤがスタークリスタルに捕らわれ、

ネギを狙い始めた事を知って、魔法学校に内緒で独力で解決しようとしていたのだった。

しかもそれはアーニヤが罰されないようにするための配慮だったと言う。しかし、

そのためには自らの姿を変える必要があったため、変身魔法で黒薔薇男爵に成り済まし、隠密活動を行っていたと言う。

その事件が終わった後、彼女はもう黒薔薇男爵に変身する必要性がなくなっただと思ひ、

その変身魔法を自らの意思で消去したのだが、今回の事件が起きてしまった以上、

その魔法が使えない身分になってしまった。もちろん彼女には戦闘向けの魔法を一切持っていない。持っていたとしても、

威力が弱いために不利に過ぎなかった。早速戸惑い始めた彼女は、辺りを見回るが、その時彼女はある物を発見した。

ネカネ「……………あら？」

メカソニック「ハッハッハッ…マサカココマデノ加勢ガ増エルトハナ…。君ニシテハ恵マレテイルナ、しゃどう…。」

ダガドノ道、数ガ増エヨウガ何ダロウガ、コノ俺ヲ倒ス事ナドマズナイ…。君達ノカラコピ―出来ル以上、

モハヤ君達ニハ勝利ト言ウニ文字ハナカロウ。

潔クかおすえめらるどヲ渡スカ、ソレトモ滅ビルカ、

ドチラニスル！？」

タカミチ「くっ…確かに魔法をコピー出来るようじゃ、それに対抗するための術もなくなってしまう…！」

アーニヤ「ねえ、どうせならあんたの持つてるその石、あいつに渡しちゃえば？ そうすれば何もかも無事に済むんだし…。」

シャドウ「バカ言っな！！ このエメラルドは大切な物だ！ そう簡単に渡せるか…！」

アーニヤ「じゃあ、どうすりゃいいのよ！？ あいつには魔法や衝撃波とか全部コピー出来る変な機能を持つてんのよ！？

そんな物騒な物を持つてちゃ、どう対抗すればいいのよ！？」

彼女は文句を言いながら困り果てるが、それを耳にしたタカミチは突然ある事に気付いた。

タカミチ（！……………待てよ…？ そう言えばあのロボット、今ま

で魔法や衝撃波だけしか吸収していなかった…。だとしたら……
…！！)

彼がそう思うと、再びアーニヤとシャドウの前に立ち、構え始めた。タカミチ「アーニヤ君、シャドウ君！　しばらく下がってて！　僕には考えがある！！」

アーニヤ「タ、タカミチ！？」

タカミチはそう言った後、彼は両手をお互いに向かせ、構え出した。すると彼はしばらく集中すると、

その両手の間から光が現れ、少しずつ力を蓄えた。

シャドウ「！？　な、何だ、あの力は…！？　あれも魔法の一つか

…！？」

メカソニツクエエエ（何ダ…？　奴ノ戦闘ばらめーたガ徐々ニ上ガツテルヨウダガ…何ヲスル気ダ？）

気になる状況の後、タカミチの両手から光が一瞬に消え、その後に彼は両手をポケットの中に差し込んだ。

シャドウ「今度は何をする気だ…！？」

アーニヤ「あの構え…もはや！？」

タカミチ「次はこの魔法でどうだ！！」

彼がそう言った後、突然ポケットから瞬間的に素早い何か飛び出し、メカソニツクエエエに襲い掛けた。

しかしメカソニツクエエエは直ぐに攻撃を見抜き、素早く交わした。シャドウ「な、何だあの攻撃は！？　一瞬にして目に見えなかった…あれも魔法なのか！？」

メカソニツクエエエ「ホウ…何ダト思イキヤ、超音速デ放ツ攻撃魔法カ？　ナラバ面白い、ソノカモ手ニ入レレバ、

ヨリ強力ナ武器トナルダロウ！！」

タカミチ「やれる物ならやってみるがいい！！　次も行くぞ！！」
彼がそう言った後、再びあの素早い攻撃を繰り返した。

メカソニツクエエエ「ナラ望ミ通りニ奪ワセテモラ…」

ドバキヤアツ!!!

メカソニックEEEEはその攻撃を吸収しようと、再び胸元を開き出すが、攻撃を吸収するより、そのまま攻撃を受けた。

メカソニックEEEE『グオアツ!?!』

シャドウ「なつ...!?!? ダメージを受けた!?!?」

アーニヤ「やっぱり! あれはタカミチの一番の得意技、『居合い拳』よ!?!?」

メカソニックEEEE『グゴオツ...!! ナ、何ダ...今ノ魔法ハ...!?!? 吸収出来ナカッタダト...!?!?』

彼は胸元を抑え、激痛を感じながらそう言った。

タカミチ「残念ながら、今のは魔法じゃなくてね...僕の必殺技の一つなのさ!」

『居合い拳』はポケットの中に収められた拳を瞬間的に引き出し、目に見えないスピードで相手を殴り飛ばす技なのさ。

ポケットは刀の鞘代わりだから、簡単に言えば居合い斬りの格闘バージョンとも呼ばれる奴だけだね。

それに、君の能力を観察させてもらったよ。どうやら君の胸元にある装置は、

魔法や特殊な攻撃を吸収する機能を持つてみたいだけど、物理的な攻撃だけは吸収出来ないみたいだね?

だとしたら、普通の攻撃や武器だけはコピー出来ないと言う事だろう! それに、その装置も、

さっきの攻撃を受けて相当なダメージを受けたみたいだけど、どうやらそれも弱点みたいだね?

だからいつもあの硬い装甲を身に付けてる訳だよ!」

メカソニックEEEE『クソオツ...貴様ア...ヨクモコノ俺ヲ騙シヤガツ...!?!?!?!』

彼は苦痛と怒りを込めながらそう言つと、胸元を閉め込んだ。
タカミチ「おつと、そう簡単には閉まらせないよ！！ 『居合い拳』
だあ！！！！」

ズガガガガガアッ！！！！

タカミチは『居合い拳』を連続的に放つと、それを全てメカソニツク
クエエエに命中させた。

だがそんなメカソニツクエエエが硬い装甲を身に着けているにもか
かわらず、

命中された部分が徐々に凹みを見せるようになった。

メカソニツクエエエ『グアッ……！？ ナ、何ダ、コレハ……！？ ナ
ゼダ……ナゼ前ヨリモだめーじガ……！？』

タカミチ「ああ……君には知らなかつただろうね……。 さつき僕が集
中している時に手から光が出たの覚えてるだろ？

あれは『かんかほう咸卦法』と言つてね……『シユンタクシス・アンテイケイメノイン氣と魔力の合一』……つ
まり、左手に『魔力』、

右手に『氣』を溜めて融合し、体の内外に纏つて強大の
力を得る高難度技法なんだ。 まあ、簡単に言えば、

戦闘力増強の技つて所だね！」

メカソニツクエエエ『ソ、ソウカ……イキナリ戦闘ばらめーたガ上昇
シタノハソノセイカ……！！』

タカミチ「次はこれで決める！！ 『豪殺 居合い拳』……！！」

ズガシャアアアッ！！！！

タカミチは大砲のような強大な『居合い拳』を放つが、メカソニツク
クエエエは必死になりながらもその攻撃を交わした。

だが攻撃に掠つたメカソニツクエエエの胸元は、今までのダメージ
によって外れてしまい、吸収装置をそのまま露出させてしまった。

メカソニツクIEEE「！！ シ、シマツタ……！！」

シャドウ「装甲が外れた…それが奴の弱点ならば、そこを狙って攻撃出来るぞ！ ならば、一気に撃墜させるのみ……！」

アーニヤ「OKオケイ！！ 私も協力するわよお……！」

シャドウ「さっきのお返しだ！！ 『シャドウィーグル』……！」

アーニヤ「『アーニヤ・フレイム・バスター』……！！」

ズバキヤアアアアン……！！

シャドウは急降下する強力な飛び蹴り、そしてアーニヤは炎の魔法で強化した飛び蹴りでメカソニツクIEEEの吸収装置に集中攻撃した。

そしてその強大な威力により、吸収装置が破壊された。

メカソニツクIEEE「グギャアアアアアアアアアアアア……！！」

吸収装置が破壊され、大ダメージを食らったメカソニツクIEEEは、少しずつ後ろへ下がりがりながら弱まり始めた。

アーニヤ「やった！ 大分弱って来たみたいね！」

シャドウ「これでもう僕達の技をコピー出来まい…後は始末するのみ……！」

彼はそう言った後、両拳から緑色の炎を放出させた。

メカソニツクIEEE「オ、オノレエ…コノ死ニ損ムシケラナイ生物共ガ…」

……マダ…マダコレデ…終ワツタト…思ウナア……！！」

彼は弱まりながらも、両腕を機関銃やロケットランチャーと言った恐ろしくて強力な重火器に変形させながら、

今まで秘めていた怒りを露にした。

アーニヤ「ひいつ！？ な、何あれ、変形したあ！？」

シャドウ「一筋縄には行かないと言う事だな…なら殺られる前に殺るのみ……！ 『カオス……！！』」

ガシャンッ……！！

カミチ達に睨み付けた。

メカソニツクIEEE「……ギギギ……ギザ……マ……コ……コレデ……
終ワル……ト……！！！」

アーニヤ「うそお！？ まだ生きてんのあれ！？」

タカミチ「な、何てしぶとい奴なんだ！？ あれほど大量のロケットを食らってもまだ動けるなんて……！？」

カチャカチャカチャカチャツ……！！

しかし、そんなメカソニツクIEEEの周囲に残された軍人達やガンハンターやガンビートルが集まり、バズーカやロケットランチャーなどの強力な重火器を武装しながら、敵を包囲した。

シャドウ「……だが、これで完全無防備になった訳だ。」

軍人A「侵入者を見事に包囲しました！！」

軍人B「観念しろ！ もうお前の負けだ！」

軍人C「無駄な抵抗を止して、大人しく降参するんだな！」

軍人D「下手に動いたら一発でぶっ壊すぜ？」

シャドウ「そう言う事だ。君がこの基地に侵入、及び破壊活動を行ったために、君への排除命令が出されている。

君が悪ふざけな事をしなければ、そのまま生かしてやる事は出来たが……

どの道君は世界に対する敵である事には変わりはない。

まあ、君はメタリックスとか言う連中の一員だと言っていたようだが、敵の数を減らしてしまえば、

こっちも多少楽になるがな。このような結果を招いた自分の罪を恨むといいだろう。」

メカソニツクIEEE「……ホウ……ココデ俺ニ止メヲ刺スノカ………確
カニコノ状態デハ戦闘モ続ケンナ………。」

クツクツクツ……俺へノ破壊指令力………ダガ………

…。」

パチンツ！！

ボロボロな彼が不敵な笑いをしながら指を鳴らすと、彼の増したに黒い扉ゲートが開いた。

それを見た包囲中の軍人達は思わず驚きに引いていた。

メカソニツクエエエ『ソレハマタ今度ニシテモラオウカ…。』

アーニヤ「！？ な、何あれ！？」

タカミチ「扉ゲート…！？ あいつ、魔法が使えるのか！？」

シャドウ「なつ！？ 貴様何を…！？」

メカソニツクエエエ『クツクツクツ…君達ハヨクコノ俺ヲ負カシタナ……』

褒美トシテ君ノ持ツかおすえめらるどヲシバラク

諦メル事ニシヨウ。 ダガ…

俺ヲ負カシタ事ヲ思ウ存分ニ後悔スルトイイ。

次ニ会ウ時ハ、

必ズヤ君達ヲ跡形残ラズ消シ去ラシテケレル…！

！ ソノ時ガ必ズ来ルノヲ、期待シテイルゾ…！

フツハツハツハツ…何レマタ会オウゾ、究極生命

体しゃどう・ざ・へっじほづく…！』

彼はそう言いながら、だんだん扉の中へ沈んで行く。

シャドウ「！！ 奴は逃げるつもりだ！！ させるな！！ 一斉砲

撃だ！！」

チュドドドドドドドドドドオオオオオオオン！！！！！！

シャドウがそう支持すると、軍人達と戦闘兵器達は扉ゲートの中へ消えて行くメカソニツクエエエに一斉砲撃をするが、

砲撃を止めた後、そこにはメカソニツクエエエと扉ゲートの姿がなかった。

どうやらメカソニックIEEは完全に砲撃から避けられ、逃げ去ってしまったようだ…。

軍人A「なっ!? 消えた…!?」

軍人B「跡形もない…くそっ、逃がしちゃったか…!!」

その後、シャドウ、タカミチとアーニヤは、メカソニックIEEがいた窪みの所まで駆け付け、現場の様子を伺った。

タカミチ「本当だ…確かに跡形も残ってない………彼は完全に逃げてしまったか…。」

アーニヤ「え、ちょっと待って!? じゃあ、あのポンコツメカ、魔法が使えるって言うの!?」

軍人C「…シャドウさん、申し訳ございません。侵入者を逃してしまいました…。」

彼はもう仕掛けなさそうにそう言いながら、シャドウに向けて敬礼した。

シャドウ「…まあ、いい。兵器庫の戦闘兵器を少しながら破損によって減ってしまったが、

せめて死傷者が出なかったのは不幸中の幸いだ。敵を

排除出来なかったにしろ、君達が無事である事を、

良かったと思えばいい。」

軍人C「ハ、ハッ!」

シャドウは冷静でありながらも優しい言葉を軍人達に言った後、隣にいたタカミチとアーニヤに振り向いてこう言った。

シャドウ「…しかし…君達には正直驚いた…。先ほどから妙に魔

法の事を変な風に問い付いていたが、

まさか君達が魔法を使えるとは…更にあの見た事もない超音速の必殺技までも使えるとは…。

どうやら君達は本当に別の世界から来た人間である事は100%確定になった訳だな。」

アーニヤ「何よ、今更になってやっと信じてくれるって訳え!?!」

タカミチ「まあまあ…でも、やっと信じてくれただけでも嬉しいよ。それに、僕も君に驚いたよ。」

あのような戦闘力と必殺技を持つてたとは…見た事もなかったとは言え、すごい迫力だったよ。」

シャドウ「…まあ、余計だったとは言え、君達が協力してくれて助かった。正直君達があそこで割り込んで来なかったら、

今頃僕達はここにいなかった…。改めて感謝する。」

アーニヤ「全ツ然感謝してようには見えなただけど…。」

タカミチ「まあ、いいじゃないか。これでみんな無事なんだし、一件落着でよかったじゃないか！」

その後、シャドウは近くに立っているビッグフットの方へ見上げてこう言った。

シャドウ「…そもそも、それに乗っている君！ その中にいるのは誰なのかは知らんが、さっきの攻撃は見事だった。」

君の活躍にも感謝する。そろそろコックピットから降りて姿を見せてもらおうか。」

彼がそう言った後、彼の支持通りにビッグフットのコックピットをゆっくり開き始めた。

軍人A「…おい、そう言えばあれに乗ってんの誰なんだ？」

軍人B「え？ いや、知らないな…。」

軍人C「確かここにいる兵士は俺達だけだよな？」

軍人D「じゃあ、誰があれを操縦してるんだ？」

彼らがお互いにそう話していると、それを耳にしていたタカミチは少々気になり始めた。その間にアーニヤは、

誰かを探すかのように辺りを見回っていた。

アーニヤ「あれ？ そう言えばネカネお姉ちゃんは…？」

確かに彼女の言う通り、辺りにはネカネの姿が見当たらなかった。

プシューウウウウ……！！

すると、ビッグフットのコックピットハッチが開き、そこから操縦士の姿を現した。しかし、その操縦士の姿を見たシャドウ達は、思わず愕然とした。そう、その操縦士の正体は……ネカネだった。

ネカネ「ああ、恐かったあ……！でもみんなが無事でよかったわ！」

アーニヤ「ネ、ネカネお姉ちゃん！！？」

タカミチ「ネカネ君！」

シャドウ「き、君、何でそんな所にいるんだ！？」

ネカネ「ごめんなさい……余りにも慌てたもので……。私も協力しようとしたところ、

ちようど近くにこの大きなロボットが置かれてあったから、試しにこれを使って応戦しようと思って……。

でも使ってて正解だったわ……あれほどたくさんミサイルが出て来るんだから、正直驚いたけど……。」

彼女は軽く笑いながらそう言った。

シャドウ「そんな事より、君はどうやってビッグフットの操縦……！？ そいつはGUN兵士にしか使えない戦闘兵器だぞ……！？」

素人の君がどうやってそれを……！？」

ネカネ「ああ……それなら以前明石さんが私に巨大ロボの対戦ゲームを遊ばせた事があるので、それで操縦の仕方を覚えたの。」

ゲームの割には意外と役に立ったみたいね。」

アーニヤ「ゲームで覚えるほどの物なの、その操縦って……！？」

タカミチ「……これは正直驚いたな……。」

そんなネカネが戦いが終わった事で安心そうに軽く笑う中、シャドウ達はさすがに唖然としていた。

シャドウ「……何なんだ、この人間共は…………。」

ピピピピッ！

その時、シャドウの左手に付いている無線から音が鳴り、そこからタワーズ司令官の声が流れ出た。

アブラハム「こちらアブラハム・タワーズ！　こちらアブラハム・タワーズ！　エージェント・シャドウに告ぐ！」

直ちに現状を報告せよ！　直ちに現状を報告せよ！
無線からタワーズ司令官の声が聞き取れた後、シャドウは左手を拳げ、スピーカーに応答した。

シャドウ「こちらエージェント・シャドウ：第5兵器庫の現状を報告する。　侵入者の逃亡により、排除失敗になってしまったが、

少数の兵器の破損以外全兵士達は無事だ。　もちろん、別世界から来たその他三人も無事だ。

彼らも協力してくれたおかげで、こちらも多少助かった。

「アブラハム」そうか：敵を逃がしてしまったか：まあ、全員が無事であればそれもよからう。

破損してしまった兵器に関しては、メカニックに任せれば済む事だ。　少数であればそれも問題なからう。

とは言え、まさかあの三人もホントに協力していたとは：まあ、そんな彼らも無事で何よりと言おう。

ところで、今直ぐ司令室に戻るといい。　ダイヤモンドシティからの情報が届いた。　情報は戻ってから伝えるとする。

「シャドウ」了解した。　至急、司令室に戻る。」

彼がそう返事した後、無線機能を切り、タカミチ達の方へ振り向いた。

シャドウ「：そう言う事だ。　とりあえずタカミチ、アーニヤ、ネ

カネ…一緒に司令室に戻るぞ。

そこで司令官が君達の仲間に関する情報を教えてくれるだろう。」

アーニャ「ホントに!？」

タカミチ「…分かった。話はそのに着いてから聞くとしよう。

彼は頷きながらそう言った後、シャドウと共に司令室へ戻って行った…。

第31話 集いし闇

…… GUN本部の兵器庫にて、基地に侵入して来たメカソニック
MK-IIIを見事に撃退したシャドウ、タカミチ、
そしてネカネとアーニヤ。ネギや3-A生徒達の行方を聞くため
に、シャドウ達は司令官アブラム・タワーズのいる司令室に戻っ
た。

シャドウ「ただいま戻って来た、タワーズ司令官。見ての通り、
全員無事帰還したぞ。」

アブラム「うむ、ご苦労。詳細はその場にいた兵士から先に聞
いた。どうやら敵はあのエッグマンのメカだったようだが…

敵を逃してしまい、本来の指令は失敗に終わってし
まったが、皆無事に戻れただけで何より良い事だ。

「ご苦労だったぞ。」

シャドウ「合い難く、敵はエッグマン帝国の物と思われるが、本人
からは否定された。

彼にはドクターや我々に抵抗する機械組織、メタリック
スの幹部とされているらしい。つまり、

我が軍に新たな敵が出現したと言う事だ。敵が逃げて
しまったとは言え、油断は出来まい。」

アブラム「うむ…そのようだな…。」

彼は下を向きながらそう言った後、タカミチ達の方へ見上げた。

アブラム「話は聞いた。どうやら君達もシャドウを協力してく
れたようだな。とは言え、まさか君達は魔法使いだったとは…

外観からにしてそうには見えなかったが、その力に
関しては只者ではないと察したようだ。特に…

ネカネ君…だったかな？ 素人の君がまさかビッグ

フットを難なく操作出来るとは、正直驚いた。

本来ならば部外者が無断に我が兵器を使用した事を罰さねばならんのだが…

君達は元はと言えば別世界から来た人間…言わば特別な客人だ。特に君達が協力してくれたおかげで、

我が軍も一時助かった。そのため、今回は君達に特別な目で見えてやろう。感謝する。」

タカミチ「いや…僕達はそこまで大した事は…。」
彼は頭を掻き、多少照れながらそう答えた。

アブラハム「そこで、君達の活躍を耳にした事で、私も君達に興味を示すようになった…どうだね？」

君達も我がGUN軍隊に入ってみないか？ 特別に君達をシャドウ同様、

我が特殊エージェントとして入隊してやってもいいぞ？」

ネカネ「えっ！？ わ、私達を…！？」
アーニヤ「ええ！？ 私達を軍隊につて…！？」

タカミチ「そ、そんな…僕達を軍隊にだなんて…！？」
三人はタワーズ司令官の勧誘に驚くが、そこでシャドウが話に割り込んで来た。

シャドウ「…真に申し訳ないが、彼らには彼らなりの進む道がある。彼らがその道を選ぶなり、

僕達にはそれを選ぶ権利はないはずだが…？」

タカミチ「シャドウ君…。」

アブラハム「うむ…確かに君の言う通りだ。まあ、本当は彼らを入隊してやりたかったが、

確かに彼らには彼らなりになるべき物がある。勝手な真似して申し訳ない。」

タカミチ「いえいえ、気持ちだけで嬉しいですよ。」

シャドウ「それより司令官、早速本題に入ろう。ダイヤモンドシ
ティの情報局から何か手がかりはなかったのか？」

アブラハム「うむ……実は君達の仲間の事だが、どうやらダイ
モンドシティも誰一人も目撃していないようだ。」

特に君達が言う日本や麻帆良学園とか言う場所も、
事実上この地上には存在しないとの事だ。」

タカミチ「そうですね……。」

アブラハム「だが安心するがいい。ダイヤモンドシティも君達の
仲間を探そう、我々と協力してくれるとの事だ。」

早速向こうの情報局も搜索隊を派遣し、大陸中に搜
索活動を行うつもりだ。」

ネカネ「本当ですか!？」

アーニヤ「じゃあ、それなら直ぐネギ達を見付けられるって事ね!
？」

アブラハム「うむ。もちろん我々も搜索隊を派遣し、大陸中に渡
って搜索活動を行うつもりだ。」

その間に君達はこの基地に居座り、仲間の情報を入
手するまで待機するといい。」

ちようどVIP用の特別室を用意してある。そこ

でしばらく泊まりなさい。」

ネカネ「すみません、私達のためにここまでしてくださって……。」

アブラハム「いやいや、君達が我々と協力してくれた本のお礼だ。」

では、シャドウよ。彼らを特別室に案内してくれないか？」

シャドウ「……………」

タワーズ司令官はシャドウに指示を出す、シャドウはそれに返答
せず、近くにいた一人の兵士に向かってこう言った。

シャドウ「……そこに君。代わりに彼らを特別室に案内してくれな

いか? 僕はまだ司令官との話があるんでね……。」

軍人「は? あ、はい、分かりました!」

彼はそう言いながら、シャドウに向けて敬礼した。

タカミチ「シャドウ君？」

シャドウ「気にするな。僕も話し終えたら、後でそっちへ行く。

それまでに向こうで待ってる。」

タカミチ「…分かった。では、また後で…。」

彼が頷いた後、一人の兵士の案内により、ネカネとアーニヤと共に司令室から出た。

アブラハム「どうした、シャドウ？ 話ならもう済んだはずだろ？

お前も下がっていいぞ。」

シャドウ「……………司令官、僕に伝えたい情報はそれだけではないだろ？」

アブラハム「何を言ってる？ 情報ならこれだけ…。」

シャドウ「惚けても無駄だ。顔に書いてあるぞ。」

彼がそう言うと、しばらく沈黙が走った。すると司令官が軽くため息を吐き、頭を掻きながらこう言った。

アブラハム「……………ふう〜…やはりお前には物事を隠せんな。」

シャドウ「GUN特務機関規約第6条：入手した貴重情報を必ず報告する事。よって、どんな情報に至り、

機密や隠滅にする事を厳重的に禁ずる…。その条約

を作ったのは、司令官本人ではないのか？」

アブラハム「うむ、確かに……………」

屈辱でありながらも、彼は軽く笑いながらそれを認めた。

シャドウ「…まあ、どの道、今司令官が持っているもう一つの情報は、無関係である彼らに知らせる訳には行かないからな。

で、聞かせてもらおうか？ 司令官が入手したもう一つの情報を…。」

アブラハム「うむ……………実は、情報を提供して来たダイヤモンドシテイなんだが……………実はここ数時間前、

あの街は何者かに襲撃されたとの事だった。」

シャドウ「何……！？ ダイヤモンドシティが敵襲にだ……！？ 一体何者がダイヤモンドシティを……いや、待て。

確かダイヤモンドシティ、及びキノコワールド大陸を脅かす輩と言ったら、あのクツパ軍団のはず……。

もしや、あの亀共の仕業か？」

アブラハム「いや……クツパ軍団の仕業ではない……だが、それはお前が最も知る連中だ。 最も……

知りたくもないあの連中……。」

彼が複雑そうにそう言つと、シャドウはますます不思議そうに思い始めた。

アブラハム「……ブラックアームズの仕業だ。」

シャドウ「……！」

タワーズ司令官がそう言つと、シャドウは驚きの表情を浮かばせながら耳を疑った。

アブラハム「……ブラックアームズが突如、ダイヤモンドシティの上空から出現し、街を襲撃したと言つ知らせがあった。

街は相当なダメージを受け、警察隊や軍隊の力では立ち向けなかったそうだ。 だが、途中で応援がやって来てな、

その応援のおかげでブラックアームズを敗北させ、街から追つ払つたそうだ。 まあ、

相当な被害を受けた事には変わりはないがな……。」

シャドウ「バカな！？ ブラックアームズが復活したとも言つのか！？ そんなはずがない……！」

なぜなら奴らはこの僕が滅ぼした敵だ……！ 生き返る事など絶対有り得ないはず……！」

アブラハム「私も始めにその情報を耳にした時、何度も耳を疑つたよ……その情報はいかにも事実だったのか、

もちろん何度も問い掛けてみたが……赤く染まった大

空から舞い降り、未知なる科学兵器の使用する黒い宇宙人……

特徴からにして、明らかにブラックアームズの連中と一致していた……。情報としては真ではあるが……

やはり信じられん……。我々だけでない、お前の史上最大の敵であるあのブラックアームズ……

そして彼らを率いるブラックドゥームが、まさか生き返るとは……！！」

シャドウ「有り得ない……絶対有り得ない話だ……！！ 死んだはずのあの憎きブラックドゥームが、生き返る事など……ん？」

ちよつと待て……先ほど応援のおかげでブラックアームズを敗北させ、街から追っ払ったと言ったようだが、

その応援とは誰の事だ？ 誰もGUNからダイヤモンドシティに派遣された者などいないし、無論彼らではないだろう。」
アブラハム「うむ……悔しいが、お前の言う通りだ。その事なんだが……実は私も理解し難いのだ。情報によると、

何やら妙な格好をした二人の少女の活躍によって、敵を追っ払ったらしい。だがその少女には不思議な力を使い、

多数の敵を倒したらしいのだが……。」
シャドウ「二人の少女……？ そいつらは一体何者なんだ？」

アブラハム「残念ながら、あの騒動の中だ。敵が無差別的に襲撃を行っていたために、

肝心な証拠写真や映像を収める事が出来なかったらしい。だが、ブラックアームズがそこにいたと言う事だけは、

確か的事だ。」

シャドウ「不思議な力を使う二人の少女……もしや魔法の事か？ だとしたら、タカミチ達が探しているその生徒だと言う可能性は？」
アブラハム「合い難く、そこも分からん。だが、キノコワールド大陸と言えば魔法を中心にした国だ。魔法を使える者など、

腐るほどいるがな。関係があるかどうかなど、分かるまい。」

シャドウ「そうか……しかし、ブラックアームズが復活したなんて……一体奴らはどうやって……!？」

そもそも奴らはなぜダイヤモンドシティを襲ったんだ……普通ならセントラルシティやウエストポリスなど、

モビウス大陸にある都市を狙うはずだ。関係もない国を襲って何の意味が……？」

アブラハム「そこも分からんが、恐らく奴らが復活し、再びテロ活動を決行すると言う宣戦布告であろう。もしくは、

お前への復讐……と言う意味付けでもあるがな……。」

シャドウ「……だとしたら、僕やGUNも黙ってはられないと言う事か……。」

アブラハム「うむ……そうとすれば、我々も再びブラックアームズと戦争する準備をせねばならん。」

そのためにはたくさん軍勢を作らねばならん……。」

シャドウ「どうする……この情報をタカミチ達にも報告するか?」

アブラハム「いや、彼らは別世界から来た特別の客人……寧ろ無関係の人間だ。例え力があっても、

そんな彼らをこの戦争に巻き込ませる訳には行かん。

それに、奴らを追っ払った少女が、

本当に彼らが捜し求めている者達なのかどうかと言う根拠もないため、知らせる訳には行かんからな。」

シャドウ「……要するにここから組織内機密情報確定か。了解した……ならば時が来るまで、この情報を彼らに伝えずにいよう。」

アブラハム「うむ、その方がいい。とりあえず、今伝えた情報は以上だ。下がってもいいぞ。」

シャドウ「了解した。では、僕はこれからタカミチ達の様子を見に行く。失礼した……。」

彼がそう言った後、タワーズ司令官に敬礼し、そしてそのまま部屋から歩き去った。しかし、

その後タワーズ司令官は険しい表情を浮かばせ、下を向きながらこ
う呟いた。

アブラハム「……………ブラックアームズ……………いや、ブラックドウ
ム……………私とシャドウの過去を呪わせた悪魔め……………！」

再びあの時と同じ繰り返しをするつもりなのか…！

？ しかし…未だに分からん……………

なぜ奴らが復活したのか……………。もしや…何者か
によって復活した……………だとしたら誰の手に……………！？」

……………闇の中……………光すらどこにもない…真つ暗な闇の中……………し
かし、そんな闇の中に、一人の男がいた。

その男は異様に大きく、体全体が鋼鉄に出来ていて、白くて長い髭
に眉毛、金色の王冠、

そして手に大きなハンマーを持っていた。その男は鬼のような表
情を浮かべながら、目の前にいる部下達に激怒していた。

その部下達はあのオノレンジャーとケンゾールであった。彼らは
まき絵と亜子、

そして裕奈とアキラとの戦いによってボロボロになった姿で、非常
に落ち込んでいた。

????「この役立たず共おおおおお！！！！ 貴様らスターズ
トーンを全て集めると言う簡単な使命を与えたにもかかわらず、

手ぶらでノコノコと戻って来るとはどう言う事だあ！？」

しかも訳の分からん雑魚なんぞに負けよって、

貴様らそれとも我がカジオー軍団の幹部かあ！？」

オノレツド「も、申し訳ございません、『カジオー』様……！！ 我々のミスは予想外の物です……。」

ケンゾール「あそこでトカゲ共が脱獄していなければ、我々は勝利していたのだが……。」

カジオー「ええい、言い訳などいらんわあ！！ 貴様らのような役に立たないガラクタ共を作ったのはワシの大間違いだったわ！！

罰として貴様らをお払い箱に送り込んで跡形残らず粗大ゴミにしてくれるわあ……！！」

オノレンジャー・ケンゾール「ひいいいいいい、カ、カ、カジオー様、お許しをおおおお……！！」

カジオーと言う激怒する男がハンマーを振り上げると、オノレンジャーとケンゾールは恐怖に怯え、焦り始めた。

「……………よせ、カジオー……………」

しかし、突然闇の中から現れた何者かが現れた時、カジオーがハンマーを振り落とすのを止め、その人物の方へ振り向いた。

「……いくら彼らが使命を失敗したとは言え、始末する必要はない……。彼らを許してあげるがいい。」

カジオー「し、しかし、こいつらは……！！」

「失敗など誰にでもある事……一々その事で部下を処分しては、優秀で必要とする部下が無駄に減ってしまう……。」

失敗によって与える刑罰など一切無用だ。それに……スターストーンの事など、いつでも手には入れる……。」

例え敵の手に渡ろうが、何れ我々の元へ渡って来る物なのだ。無駄な事は止して見逃せばいい。」

カジオー「しかし…！」

「それとも…君が今やろうとしている事を…君にも与えてやろうか？
それが君の気が済むと言うのならば……………」

彼が邪悪な目でカジオーに睨み付けると、カジオーは彼から恐怖を感じ、青ざめた表情で引いた。

すると彼は悔しいながらも、カジオーに怯えていたオノレンジャーとケンゾールに睨み、こう言った。

カジオー「う…う、うむ……………くっ…仕方あるまい…。命拾いしたな…。よかるう…特別に許してやる……………」

だが次こそ同じ失敗するでないぞ。」

オノレッド「ホ、ホントですか!？」

ケンゾール「あ、ありがたきお言葉…!! では、我々は失礼する…!!」

そんな彼らは安心そうにため息を吐くと、まるで逃げるかのようにその場から離れた。その後、

カジオーはその人物に向き、納得行かないままこう言った。

カジオー「お主、今のは甘過ぎるのではないのか!? あの連中の失敗は通常では許されぬ事なのだぞ!？」

そのような程度では次も同じ失敗をするかもしれんだらうが!？」

????『別二何度モ失敗シテモイイノデハナイノカ?』

その時、カジオーの横からもう一人の人物が現れ、カジオーはその人物の方へ振り向いた。

その人物は紺色の鋼鉄ボディーをしていて、黒い目に赤い機械的な瞳、頭に白い模様の付いた鋭くて尖った刺、

腹部に大きな穴と背中にジェットエンジン、腰元に黒いマント、そして赤い尖った足を持っていた。
その姿はソニックとシャドウを合わせたかのような感じであった、事実上ソニック型のロボットであった。

「???」失敗八成功ノ元……………失敗スル事デ敵ヲ学ビ、自ラヲ完璧ナ存在ヘト進化サセル……………」

『Live & amp; Learn』…『生キテ学ブ』トハソウ言ウ事デハナイノカ?』

カジオー「何も貴様あ!?! ただの機械の分際で生意気な事を言いよって!!」

貴様こそ所詮はあのソニックとか言う溝鼠に負け捲くった失敗作ではないか!?!

敗者には情けなど無用なのが当然の事だろうが!!」

「???」フンツ…貴様こそ、アノまりおトカ言ウ人間ニ敗レタママデハナイノカ? 貴様モ似タ者デアロウ。』

カジオー「何をお!?!」

「…止せ…無駄な仲間割れなど無意味な行為だ。ところで『メタルソニック』…いや、『ネオメタルソニック』と呼ぶべきか?」

君の仲間の様態はどうだ?」

メタルソニック『心配ゴ無用……………めかそにつくI.V.ノ修理ハ順調ニ進ンデイル…。 以前ヨリ更ナル武器ヤ機能ヲ付ケ加工、

ばわーあっぷスルデアロウ…。』

「ほう…それは楽しみだな…。」

その時、メタルソニックの近くに二つの扉ゲートが開き、そこからポロボロな姿をしたメカソニックとメカソニックEIEIが出て来た。

メカソニック「グッ…タ、タダイマ戻ッテ来タゾ……………」
メタルソニック「ン？ 一号機ト三号機デハナイカ…。ドウシタ、ソノ姿ハ…？」
メカソニック「クッ…スマナイ……………ぐりーんひるデノ襲撃中ニ不覚ニモ敵ノ手ニヤラレテシマイ…」

えめらるどヲ取り損ネテシマッタ……………」
メカソニック「…コチラモ同ジク…GUN基地デノ侵略中…敵ノ手ニ敗レタ……………モチロン、えめらるど奪取ニモ失敗シタ……………」

メタルソニック「ナルホド…二人共かおすえめらるど集メニ失敗シタト言ウノカ…」
カジオー「フツハツハツハツハツ！！！！ ざまあみる！！ 貴様の方こそ失敗者が現れたではないか！ 人の事を言えぬわ！！」

さあ、貴様ならどうする？ 敗者には死あるのみだ！
失敗作は失敗作らしく処分した方がもつとマシだぞ！
メタルソニックに嘲笑するカジオー。 だがメタルソニックはそんな事を気にせず、ボロボロな兄弟に向けてこう言った。

メタルソニック「…マアアイ…えめらるどノ事ナド、何レ我々ノ手ニ渡ル。 失敗シタトハ言エ、多少ノ破損ハアルガ、無事戻ッテ来タダケデモ良イ事ダ。 トリアエズ、今ハ修理ニ向カウガイイ。」

ソコデ応急処置トあつぶぐれーどヲ行ウノダ。
メカソニック「ア、アア…スマナイ…」
メカソニック「…了解シタ…」
カジオー「んなっ…！？」

ボロボロになつた二体のメカソニックは、メタルソニックの許しにより、修理のためにそのままその場から去つた。
それを見たカジオーは口を大きく開くほど愕然とした。

カジオー「き、貴様あ……!!」

メタルソニック『ドウダ…コレガ俺ト貴様ノ大キナ違イダ…。俺ノ組織ハ全テ俺ノ同志デアリ、兄弟デモアル…。』

ソレニ比べレバ、貴様ノ組織ハタダノオモチヤニ過ギン…。 軽イ失敗シタダケデ直グニ処分スルノデハナ…。』
カジオー「何をあ!？」

???「耳障りな連中だ………。」

その時、カジオーとメタルソニックの近くから扉ゲートが開き、そこからブラックドウムが出て来た。

それに気付いたカジオーとメタルソニックは、言い争いを止め、彼の方へ振り向いた。

「ブラックドウムか…良くぞ戻って来た…。 ダイヤモンドシテイの件はよくやった物だ…。」

ブラックドウム「…全く理解出来ん…教えてもらおうか…？ 私はダイヤモンドシテイの破壊活動を行っていた時、

突然私の前に邪魔な敵が現れた…。 ブラックブルが敗れ去ったのは予想外ではあったが…

あのまま私が戦えば、既に弱まっていた虫けら共を一瞬にして滅ぼせたはず。

なぜこの私を止めたのだ!? あのまま放つて置けば明らかに我がブラックアームズが勝利したはず…!!」

???「まだその事が分からないのかい、ドウムちゃん？」

その時、彼の近くに四角い空間が発生し、そこからデイメーンが現れた。

ブラックドゥーム「むっ!? 貴様は…デイメーン!!」
デイメーン「君は復活してからまだ間も経ってないんだよ? 僕達のボスに取っては君は僕達と同じように、

大事な大事な部下なんだから。 復活からまだ完全に回復し切っていない君がやられちゃったら、

ボスはどんなに悲しむものか…。 まっ、少なくとも迷惑かけるだけだけどね」

ブラックドゥーム「何を…!? 大体貴様が邪魔しなければ私はあの者共を一瞬にして…!!」

デイメーン「そこがダメなんだよ、ドゥームちゃん? いくら相手が戦いで疲れ切り始めたと言っても、

逆転しちゃったらどうする訳? 当然ながら責任は持てないよお?」

ブラックドゥーム「黙れこの小賢しい道化師めえ!! それに、私をそのふざけた名で呼ぶな!!」

「もう良い……それより…デイメーンの方はどうなのだ?

君はルイーザマンシオンに封印されたキングテレサを加入しようと言っていたようだが…その作戦はどうなった?」

デイメーン「ああ、あれは失敗しちゃったよ。 肖像画の幽霊を吸

収して、究極の力を手にすると言う作戦は上手く行っただけど、

途中に邪魔されちゃった上、一歩外れちゃったせいで直ぐにやられて封印されちゃったみたいだから……

まっ、予想通り役に立たなかつたけどね。 でもいい

もん その代わり、

キングテレサよりもっといい物を見付けちゃったんだ

からねえ」

見付けた以上これから面白い事をたぐりするんだ

「からねえ」

「…君は一体何を企んでいるのだ………？」

デイメーン「さあ？　そこはご想像にお任せって事で」

「………まあいい………どうするかは君の好きにしる。」

デイメーン「はい、そうさせてもらいまあゝす」

彼がそう言った後、カジオー、メタルソニック、そしてブラックド
ウーム一同は、その謎の人物の方へ振り向いた。

「フッフッフッフ………だがこれで揃ったな………世界に恐怖と脅
威、そして破壊と絶望を与えた邪悪なる最強の存在………」

カジオー軍団………ブラックアームズ………メタリックス………そしてデイメ
ーン！　君達こそが、この僕が選んだ優秀なる最高の部下達………。

君達の力こそが、『六つの力』を集め、希望を絶望へと変えさせ
る、最強の戦士達だ。　君達が『六つの力』を集める事を、

僕は期待しているぞ………。」

カジオー「何：我が最強の武器軍団で、邪魔する弱者共を全て斬り
捨て、叩き潰してくれるわ………！」

ブラックドウーム「我が究極の力で、全ての愚かしい生物共に究極
の絶望を与えさせてくれよう………。」

メタルソニック『コノ世ノ全テハ我々機械ニアリ………全テノ生物共ニ
復讐シ、全テヲ支配シテクレヨウ………！』

デイメーン「この世は僕を楽しませるゲームだからねえ………僕の気の
ままに好き放題させてもらつよあゝ？」

「…我が目的はただ一つ………『六つの力』を完成し、全ての願いを叶

える事…。そのために我々は二つの力を手に入れた…。

一つはエンジェルアイランドの『マスターエメラルド』…そして…
『スタークリスタル』…。」

彼は左手にマスターエメラルドから奪い取った緑色に煌く大きな塊、そして右手に中に浮かぶ十個のスタークリスタルを取り出しながらそう言った。

「…完全なる『六つの力』を手にするには、後四つの『力』が必要となる。その内の二つは元々七つに分裂されているが、

それは例え敵に渡ろうが、何れ我が手に渡る物となる…。そして後二つの『力』だが…デイモンよ。

その内の一つの力は何なのか、分析出来たか？」

デイモン「ああ、そこんところはもうちょっと待ってくれるかなあ？ こっちはこっちの仕事もあるんでねえ…」

それが終わるまでそっちの仕事はまだ進められないね

え。」

カジオー「フンッ、童如きが…貴様が拾ったくだらんおもちゃと戯れるのが夢中で他の事は無視か。」

デイモン「勘違いしないでよ、カジおじさん…ちゃんと命令通りの事をしてるからさあ！」

「…まあ、いい。別に急いでる訳ではない…好きなようにしても構わん……………」

メタルソニック『ダガ…モシ我々が『六ツノ力』ヲ手ニスレバ、全テハ思イ通りニナルノダナ？ 我々ダケデナク…』

世界ノ全テガ最モ望ンデイル事ヲ…。」

「…フツ…左様……………我々の目的こそ、この世の全てが願っている物を叶える事……………そう…全ての世界の崩壊だ…!!」

…一方、モビウス大陸のセントラルシティ・GUN本部にて…特別室にいたアーニヤ達は、部屋に置かれていたTVゲームを遊んでいた。

遊んでいたのはアーニヤとネカネで、二人はWi^{ワイ}iのゲーム、『Wi^{ワイ}i Sports Res^{リゾート}ort』のピンポンゲームを遊んでいた。

その中でアーニヤは必死になりながら遊んでいたが、逆にネカネは妙に笑顔で気楽に遊んでいた。

その間にタカミチとシャドウは、部屋の奥からその光景を眺めていた。

アーニヤ「ああ!! また負けたあ!! 何でえ!? これでもう12回目だよお!? 何でネカネお姉ちゃんこんなに強い!?」

ネカネ「さあ…私は普通に遊んでるだけけど…。」

アーニヤ「うそお!? まるでやった事があるようにしか見えないわよ!？」

ネカネ「でもこのゲーム機、やるの初めてだけど…。」

シャドウ「……………大丈夫なのか、あの二人…。」

タカミチ「ハハハツ…。」

彼は軽く笑いながら、遊ぶ二人の少女を見て呆れていた……………。

第32話 ロボット少女と最強の戦闘兵器

……モビウス大陸のセントラルシティ・GUN本部で起きたメカソニックEIEI侵略事件が解決し、

しばらくの間本部に滞在する事になったタカミチ・ネカネ・アーニヤ一行……。その日の夜……

ミスティックルーインにあるティルスの工房にて、ティルスはパソコンのビデオ電話機能にて、

ステーションスクエア・エミーの住居に滞在している千雨と会話していた。

ティルス「……そっか、ステーションスクエアでもまだ誰も見付かってないんだ……」

千雨「もうこれでも何回同じ場所を探し回ったけど、どこをどう調べても見付からないし、

特に誰もそれっぽい生徒を見掛けなかったって言う情報ばかりだよ……。そっちはどうなんだ？」

ティルス「こつちも同じく、ミスティックルーインの近所から奥深いエリアまで探してるんだけど、

まだ誰一人も見付かってないんだ。一応ネギ達はまだ搜索活動を行い続けてるけど……」

千雨「まだって……こんな時間にかよ……!? そっちの夜は真っ暗で危険じゃないのかよ!？」

ティルス「大丈夫、出来る限りジャングルの奥には行かない事にしてるみたいだし、

そう言う所は昼の間にするみたいだよ。やっぱりネギ達も心配なんだよ……こう言う所だからこそ、

千雨「そっか……まあ、確かにあんたの言う通りだな。実は茶

々丸さんも、仲間の事が心配で、

今単独に外で搜索活動をしてるんだ。私も一応行動しようと思ったんだが、

こっちはパソコンで情報収集に専念してほしいと言うから、仕方なく……。」

テイルス「まあ、確かに彼女の言う通りだよ。一人は外で、一人は中で搜索活動をした方が、早く何か見付かりそうだからね。」

千雨「そうかも……。じゃあ、私は引き続きネットを使って、情報を探ってみるよ。」

テイルス「分かった！ こっちも引き続き搜索活動を続行するから、もしそっちに何か分かったら、いつでも連絡して！」

千雨「分かった！ また後で！」
彼女がそう言った後、ビデオ電話が切断された。

その後、タオルで髪を乾かし、体から湯気を出しながら、パジャマ姿で風呂場から出て来た聡美が歩いて来た。

聡美「はあ……気持ちよかったあ……！」

テイルス「お帰り、ハカセ！」

聡美「……あれ？ ネギ先生達は？」

彼女は辺りを見回りながらそう問い掛けた。

テイルス「ネギ達ならちようど数分前から搜索活動を続行するため、にまた出て行ったよ？ もちろんソニック達と一緒にだけ……。」

聡美「ええ……！？ そんなあ、私一人置いてけぼりですかあ……！？」

ネギ先生、酷いですよあ……！」

テイルス「まあ、しょうがないよ。外は暗いし、危険だから、

ハカセをここで僕と一緒にネットで搜索活動に手伝った方がもつと安全だと思うよ？」

聡美「まあ……確かにそうですけど…………。」

テイルス「……あつ、そうだ！ ねえ、ハカセ……ちよつとここに

座つてくれるかな？」

彼は何かを思い付いた後、近くにある椅子を取り出しながら聡美に向けてそう言った。

聡美「え？ 何でしょうか？」

テイルス「実は僕、前々から君に聞きたい事があつたんだ！」

聡美「はい？」

………ここは『ナイトバビロン』…モビウス大陸のステーションスクエアとセントラルシティ付近にある娯楽街であり、カジノやゲームセンターがあれば、バトルクラブも設立されている、エンターテイメントの街である。

そのネオンライトに照らされた街の上空に、茶々丸が飛んでいた。どうやら彼女はエヴァを含む生徒達を探すために、

夜の上空からこの街に訪れて来たのだろう。そんな彼女は体内に搭載されているレーザー機能を使いながら、生徒達の行方を探っていたが、どこを探しても、結果的には何も出て来なかった。

茶々丸「…ここにもいない………マスター………今いずこ………。」

彼女はがっかりした表情を浮かびながらそう呟き、再び辺りを見回した。すると彼女は地上から何かを発見し、

その何かに直視した。

茶々丸「あれは………？」

彼女がそう言うと、その何かがある地上まで着地した。その物体は大きな施設だが、その外観からにして、

あのDr.エッグマンとそっくりな顔で建設されていた。それを

目前にした茶々丸は、思わず愕然としていた。

茶々丸「こ、これは…エッグマン…！？ ……と言う事は…エッグマンの基地…！？」

彼女がそう言った後、早速辺りを見回り始めた。

茶々丸「……………こんな目立つ所に基地なんて…怪しい……………」

確かに、エッグマンの基地でありながらも、娯楽街の中とは言え、目立ち過ぎている…。

そんな事を言っていた茶々丸だったが、近くに入り口を発見し、早速調べ始めた。それまでに無言のまま調査していたが、

近くにボタンを発見した茶々丸は、そのボタンを押してみた。するとその扉が自動的に開き、茶々丸は悩む事なく、そのまま基地内に潜入した…。

……………基地内に潜入した茶々丸。しかし、辺りは埃と蜘蛛の巣だらけで、まるで完全に廃墟状態とされていた。

しかし、所々の機械や機能は、故障や破壊された半ば、まだ正常に起動していた。そんな空間の中、

茶々丸はただ静かに辺りを見回りながら前へ進んでいた。

茶々丸「……………ここは……………？」

彼女は引き続き、レーダー機能で生徒達の反応を確認しようとするが、やはり何も反応しなかった。

茶々丸「……………やはり…ここにもいない……………」

しかし、その間に何かが目覚め、見えない所から茶々丸の存在に気付いた。しかし、それに対して、

茶々丸は搜索活動に夢中で何も反応しなかった。だがそんな彼女が先を進んでいる内に、

近くに何か立っている事に気付いた。彼女がそれに近付くと、それはカプセルの中に封印されている一体のロボットであった。

そのロボットは赤い球状のボディに黄色い頭、緑色のレンズに細長い鋼鉄の腕と足、

そして胴体の横に白い文字で『E-102』と書かれてあった。

彼女はそのロボットを不思議そうに眺めながら、

途中で自らの足を止めさせた。

茶々丸「…このロボットは……………」

しかし、その時彼女は何か反応し、一気にその反応を感じた方向へ振り向いた。

ズババババババンツ！！

すると埃だらけのコンテナの裏側から強力なマシンガンが放たれ、

コンテナを破壊しながら茶々丸に向けて発砲した。

しかし、素早く気付いた茶々丸は、素早くその場から離れ、銃弾から回避した。

チュドドドドドドントツ！！！！

次に無数のミサイルが飛来し、茶々丸に向けて攻撃した。だがこ

れも茶々丸は素早く交わり、爆発から回避出来た。

茶々丸「！？ 貴様、何者！？」

彼女がそう言った後、突然彼女の背後から何者かが現れた。だが

それに気付いた彼女は、

再び攻撃した敵のマシンガンから素早く回避し、遠い所まで辿り着いた後に敵の方へ振り向いた。

その敵は赤いボディに黄色い頭、赤いレンズに大きくて赤い手足、
そして『^{オメガ}』と言う赤文字に書かれた黒い肩を持った、いかにも大
型のロボットであり、
両手をマシンガンに変形させながら、その銃口を茶々丸に向かせて
いた。

??? 『えつぐまんノめか、排除スル!!』

茶々丸 『!?!? ロ、ロボット……………!?!?』

その間に、謎のロボットの目線から、茶々丸を標準しながらデータ
を確認し始めた。しかし、
検索結果から『DATA NOT FOUND』と表示され、それ
を知ったそのロボットは、
一時的両腕を下ろした。

??? 『…た確認…結果、所在不明…。 貴様…えつぐまんノ
めかデハナイ…。』

彼がそう言った後、両腕のマシンガンを普通の手に変形し、茶々丸
の方へ接近して来た。だが茶々丸は予め、
敵の行動を疑いながら戦闘態勢に備えた。

??? 『スマナイ事ヲシタ。 貴様ヲえつぐまんノめかト誤解シタ。

改メテ謝罪スル。』

茶々丸 『えつ……………貴方は…一体…?』

??? 『マズ貴様カラ名ヲ言エ。』

茶々丸 『え…は、はい……………。 私は茶々丸…絡繰茶々丸と申しま
す。』

??? 『カラクリ…チャチャマル……………確力ニで…た二八存在シナ
イ…。 私ハ『E-123』…^{おめが}…』

Eしりーず最強ノろぼつとだ。』

茶々丸 『オメガ…さん? Eシリーズ……………?』

オメガ 『ソレヨリ、貴様モろぼつとノヨウダガ、誰ニヨツテ開発サ

レタ。ソシテ貴様ハコノ『ぎみつくしえるたー』ニ何シニ来タ。』
茶々丸「ギミック…シエルター…？ ええ…えつと…私は、葉加瀬
聡美と超鈴音と言う方によって開発されたガイノイドであり…

マス…いえ、友達を探しにここへ…。」

オメガ『ハカセサトミ…チャオリンシエン…でーたニ存在シナイ名
前ダ…。ソレニ貴様ハココデ友達ヲ探シテルト言ツテイルガ、

コノ基地ハ既ニ廃墟トナツテイテ、人間一人モ出入リハ
シテイナイ。』

茶々丸「そうですか…やはり、ここにはいませんでしたか…
…。」

オメガ『シカシ、貴様ニハ疑問ガ多数アリ過ギル。 製作者ノ名ガ
不在ダケデナク、貴様ノ存在自体ガ理解不能ダ。』

人間型トハ言エ、ソノ言動ガ人間ニ近イ…ぷるぐらみん
ぐガ優レ過ギテイル。 詳細ヲ要請スル。』

茶々丸「あ、はい…。」

彼女は、この世界に訪れる前の出来事、そして訪れた時の出来事な
ど、全ての事情をオメガに説明した。

オメガ『…益々理解不能ダ。 貴様ハ原因不明ノ超常現象ニヨ
リ、別次元カラコノ世界ニ来タト言ウノカ。』

茶々丸「信じてもらえないでしょうけど…これが私の知ってる全て
です。』

オメガ『未ダニ理解不能ダ…シカシ、超常現象ニ関シテハ、確
カニ理解出来ル…。』

彼がそう言つと、茶々丸は耳を疑った。

オメガ『ココ最近、空間ニ異常ナえねるぎーガ発生シタ…。 空間
ヲ歪ミ切ル謎ノ現象…』

ソノ現象ニハはいれべるナまいなすえねるぎーガ反応シタ。

原因八不明：ダガ、危険れべる八MAX二近イ……。』

茶々丸「人工的に…または魔法的に…とはないのですか？」

オメガ「コノ現象八人間ノ手デ構成サレタ物デハナイ。ソレニ、
貴様八先ホド魔法ト発シタガ、ソレハ0%ノ可能性ダ。

ソモソモ魔法トハ实在シナイ非科学的ナ物ダ。偽リノ力
ナドデコノヨウナ現象ヲ発生サセルノハ決シテ不可能ダ。』

茶々丸「……………」

魔法の存在を信じないオメガ：そんな彼がきつい発言するに対し、
茶々丸は少し不満な表情を浮かべた。

実際は言い返したいのだろう…だが本人の性格からにして、それは
出来なかった。

オメガ「ソレヨリモ、気が済ンダカ。用ガナケレバ直チニコノ
場カラ去ルガイイ。コノ基地ハ通常デハ部外者立チ入り禁止ダ。』

茶々丸「…なら一つ私から聞かせてもらいますでしょうか？」

オメガ「何ダ？」

茶々丸「貴方こそ、ここで何をしていますのですか？ 貴方は私と同
様ロボット…」

しかしこの世界に存在するロボット製作者と云えば、あ
のDr・エッグマンと言う悪の科学者以外他にいません。

もし貴方がの製作者があのエッグマンであれば、なぜこ
の廃墟と化した基地に滞在しているのですか？」

オメガ「…………… 確力ニ私ハ、アノDr・えつぐまんニヨツテ作ラレ
タ戦闘用ノるぼつとダ。 Eしりーず…」

カツテハえつぐまんニヨツテ製作サレタ戦闘用なんばーず
ダ…。ダガ、私ハ違ウ。

私ハモウえつぐまんノるぼつとデハナイ…今ハえつぐまん
ヲ排除スルタメニ戦ウ戦闘兵器ダ。』

茶々丸「エッグマンを排除するために…!？」

オメガ「貴様ニハ知ラナイダロウ…。私ハカツテ、指定サレタ敵^{たげつと}

ヲ排除スルタメニ開発サレタ、

Eしりーず最終号機ダツタ。シカシ、えつぐまん八私ノ力ニ恐れ、制御ノタメニ私ヲかぶせるノ中ニ封印シタ。

長期間闇ノ中ニ封印サレタ私ハ、幸イ現在ノ仲間トナル者ニヨツテ復活シテクレタガ…

ソレ以来私ハえつぐまんニ対スル『怨ミ』ト『憎シミ』ヲ習得シタ…。ソレ以来私ハ決メタノダ…

えつぐまんノめかヲ全テ破壊シ、えつぐまん帝国ヲ壊滅サセ、ソシテえつぐまんヲ完全ニ排除スルト。

ソシテ、私コソガ全テノめかノ中デ史上最強デアル事ヲ！茶々丸「待つてください…それって、貴方クリエーターの製作者を抹殺すると言

う意味では…！？」

オメガ『言ツタハズダ…製作者クリエーターデアルえつぐまんハ私ヲ裏切ルツモリデ封印シタト…

ダカラ私クリエーター製作者ヲ裏切ルツモリデ、復讐スルノダ。寧ロ、私ニハ製作者クリエーターナド不要。

私ヲ製造シウミタ、私ヲ封印サセタ事ヲ、死ニ至ラスホド後悔サセテクレル！！』

彼は鋼鉄の拳を強く握り締めながら、その怒りの感情を茶々丸に表した。そんな彼の怒りを目前にした茶々丸は、

切なそうな表情で痛々しく感じていた。その後、オメガは自らの落ち着きを取り戻し、拳を下ろした後、ある物に見上げ始めた。

オメガ『…ソナ彼モ、捨テラレタヨウナ物ダ…』

彼は、近くにある、彼とよく似た赤いロボットに見上げながらそう呟いた。もちろんそれに応じて、

茶々丸もそのロボットの方へ見上げた。

茶々丸「…このロボットは…？」

オメガ『…E-102…Eしりーずノ二号機デアリ…私ノ先輩…或イハ兄弟ノヨウナ物ダ…』

茶々丸「…ガンマ…？」

オメガ「…カツテ彼ハ、Eしりーずノ中デモ優秀ナ戦闘用デアッタ…。シカシ、一人ノ少女トノ出会イニヨリ、

彼ハえつぐまんヲ裏切り、仲間デアル他ノEしりーずヲ救出スルタメニ放浪ノ旅ニ出タ…。ダガ、

Eしりーず初号機デアリ、彼ノ先輩ヤ兄ノヨウナ存在デア
ルるぼつと、『E-101』^{ヘーた}トノ決戦ニヨリ、

相打ちデ両者共破壊サレタ…。シカシ、えつぐまんハソ
ンナがんまノ残サレタでーたヲ利用シ、

再ビがんまヲ復活サセタ…。ダガ、彼ハマタ別ノ少女ト
ノ接触ニヨリ、彼ハ自身ノ存在ニ疑問ヲ感ジルヨウニナッタ。

元々ハ心ヲ持タナイ冷酷ナ戦闘用トシテ開発サレタがんま
…ダガ、『優シサ』ト『思イヤリ』ト言ウ、

彼二ハナカツタ『心』ト言ウ物ニ触レタ際、彼ハ自身ノ存
在ニ苦シムヨウニナッタ…。無論、

えつぐまんハソンナがんまヲ決シテ助ケヨウトモセズ、役
立タズト称シナガラソノママ放置シタ。ソノ結果…

がんまハ自ラノ意思ニヨリ、自身ヲ封印シタ……………。』
茶々丸「……………」

オメガがガンマの過去を深く語り続けると、茶々丸は感情的にそれ
を重苦しく感じるようになった。どこか切なく、どこか痛い…
そんな感情を覚えるようになった。

茶々丸「……………復活させようとも…思わなかったのですか？」

オメガ「…コレハ彼ガ選ンダ運命ダ。私ハソレニ手出シハ無用。
コノ先ドウシタイカ、彼自身ガ決メル事ダ。

…トハ言エ、封印サレルトハ、同時ニ機能ヲ停止スルト
言ウ意味…ドウスル事モ出来マイ…。』

茶々丸「……………私が……………」

その時、茶々丸は突然下を向きながら何かを呟き、それに気付いた

オメガは彼女の方へ振り向いた。

茶々丸「……………もし私が…貴方やガンマさんと同じように…機能が高過ぎた事で恐れ…いらな**い**と思われて…

暗くて何も**ない**…誰も**いない**…暗闇と孤独に満ちた空間に封印されたら……………

私も貴方達と同じ立場になつていたかも知れない……………。

私も機能的にも戦力的にも優れていて…

他のロボットよりも優秀で……………いつか私も貴方達のように…自分の力でみんなに恐れ…

封印されるのでしょうか……………。ハカセや超に捨てら

れ…永遠の闇の中に……………。」

オメガ『……………』
嫌な想像を思い浮かべ、暗くなる茶々丸。 そんなオメガは、そんなネガティブな彼女をただ眺めていた…。

…その間にミスティックルーイン・ティルスの工房にて
ティルスは聡美に何かを問い始めた。

聡美「え？ 茶々丸の事ですか？」

ティルス「うん…実は僕、あの茶々丸の事でちょっと気になったんだ。 ほら、僕が君と初めて会った時、

茶々丸の事クリエーターを話してくれたでしょ？ もちろん、君が茶々丸のクリエーター製作者だつて事も。

僕が思うには、ロボットを作り出すには、それなりの理由が必要だと思ふんだ。

何のためにそのロボットを生み出したのかつて言う事。

そりゃ人のために作られたかもしれないけど、

それだけではさすがに当たり前過ぎて、情報量としては物足りない過ぎると思うんだ。それに、

僕が茶々丸を観察してみたところ…彼女の言動に行動力、それに表情…

どうも普通のロボットとは思えないほど優れてるんだ。まるでロボットが本当に人間になり切ってる…

或いは自分が本当に人間だと思っっているかのように…
…だから、茶々丸は人間のためにあると言うよりも、

何か別な理由わけがあるんじゃないかなって…」
彼がそう言った後、しばらく沈黙が走った。

ティルス「…って、あっ…ごめん、ちよつと変な事言ったかな？」
彼は頭を掻きながら苦笑いをするが、その同時に聡美も苦笑いをした。

聡美「いえいえ、言いたい事は分かります。…とは言っても、実はその事も、以前にも他の方々からよく聞かれたんです。

茶々丸は何のために作られたのかって…」
彼女がそう言うと、ティルスは改めて耳を澄まし始めた。

聡美「実は私、非科学的な物が嫌いで、以前は魔法の存在に信じていませんでした。しかし、

エヴァさんと言うネギ先生の生徒の一人との出会いにより、私は改めて魔法が実在すると言う事に気付いたんです。

それ以来私は魔法の事を詳しく研究し、ある計画プロジェクトを考えたのです。

それは魔法と科学を融合させたロボットを開発する事…。
そのためにはエヴァさんの協力を必要として、

魔力を動力源として茶々丸を導入させたのです。そのため、実験は成功…茶々丸は魔力によって、

自由に動けるようになったのです。そう…その時から魔

法と科学は一つになったのです。 けど、

もちろん茶々丸を作る際は条件が必要でした…魔力の導入に成功した暁には、エヴァさんの従者として行動させる事。

そのように私は茶々丸をエヴァさんに渡したのです。 それまでに私は茶々丸を『個人』ではなく、

『作品』としてしか見ていませんでした……でも、あるきっかけで、私は間違っていた事に気付きました…。

ネギ先生が麻帆良に訪れた時、茶々丸は変わり始めたのです。

これまでに交流がなかった生徒達と様々な行事に関わったり…困っている人々を助けたり…

誰かの気持ちを分かち合ったり……今まで私がインプットした事のない『感情』や『思考』を学習するようになり、

私の知らない内に成長し続けていたのです。 恐らく、彼女と関わったネギ先生や生徒達のみみんなが、

彼女に『心』を与えたのです。 その時、私は自分の考えを改めてみたのです。 そう…

茶々丸を開発うみだした本当の理由……それは人とロボットの共存…… 例え違う存在でも、

お互いを話し合ったり、助け合ったり、気持ちを分かち合ったり…人とロボットの絆で結ばれた世界を作ってみたい…

お互いを友達として、家族として……そう思い始めたのです…。」

ティルス「……人間とロボットの共存…かあ……。」

聡美「…おかしな話でしょうか？」

ティルス「ううん！ そんな事ないよ！ 実は、ハカセには分かると思うけど…エッグマンも君と同じく、

ロボットを開発する科学者なんだ。 けど、エッグマンの場合は、

自分の作ったロボットを争いの道具としか見ておらず、

例え壊れても何の感情を与えようとしらないんだ。

そのため、ロボットには心は不要だと思ってるからね。それもあってか、誰もロボットの存在を認めようとしなかったよ。でも…君の話の聞くと、その理由は本当にいい事だと思うよ。多分、

どのロボット科学者も同じ事を望んでる夢だと僕は思うんだ。人間とロボットを共存させた世界……………

きつと君にはその世界を作れると、僕は思うよ!」

聡美「テイルスさん……………」

テイルス「茶々丸こそ、その夢を叶えてくれるロボットだと思う。

そのために、大事にしないとね!」

聡美「…はい!」

彼女は笑顔で頷きながらそう答えた。

…一方ギミックシエルターでは、オメガと茶々丸の暗い空間が続いていた…。

オメガ「……………貴様八何ノタメニ生マレタト思ウ?」

茶々丸「…え?」

突然オメガがそう問い掛けると、暗い彼女は耳を疑いながら彼に見上げた。

オメガ「我々ろぼつとニハ、開発ツミダサレタ理由ガアル……………私ハえつぐまんヲ排除スルタメニ生マレタ…。

貴様自身ニモ、生マレタ理由ハアルハズダ。」

茶々丸「…私の…生まれた理由……………?」

彼女はその言葉を耳にし、深く考え始めた……。彼女が生まれた間もなく、直ぐにエヴァの従者として手渡された。

それまでに彼女は何も思わず、何も感じなかった。しかし、記憶を探る事で、彼女はある事を思い出した。

それはネギが担任として麻帆良に訪れた時……。当初は敵としてネギに立ち向かったが、

それはあくまでも主人であるエヴァの命令によって応じた物……。

ネギとエヴァの戦いが終わった後、

それまでに彼女はネギの誘いで多くの生徒達と関わるようになった。

今まで交流のなかった人達と交流し、

様々な行事に参加しては、様々な物を学んだ。そして異世界に飛ばされたあの日……

そしてスタークリスタルとの最終決戦でネギと仮契約を交わしたあの日……

彼女は改めてネギに対する好意を覚えるようになった。そして現実世界に戻った後、

彼女は今までになかった人間らしい生活を送るようになった。最近ではエヴァとの同行を控えるようになり、

ネギや明日菜と行動したり、同時にネギから魔法を学んだり、千雨との交流を行ったり、

聡美や鈴音の研究に付き合ったり……。これまでになかった事を体験するようになり、たくさんの新しい物を身に着けるようになった。

それはもちろん、誰かと笑い合ったり、怒り合ったり、泣き合ったりと言う人間らしい感情も含めて……。

その暖かみを感じ始めた彼女は、自分の右手を胸に当て、改めてこう言った……。

茶々丸「……………誰かと一緒にいる事……………人間とロボット……………友達として……………」

オメガ「……………」

彼女がそう言った後、沈黙になるオメガの方へ見上げた。

オメガ『…ソレガ貴様ノ答エナラバ…ソシテソレガ貴様ノ製作者ガ望ム物デアラバ…ソウ信ジテ前進セヨ。』

貴様二八貴様ナリノ生き方ガアル…私ト同ジヨウニ…。』

茶々丸『…私なりの…生き方……。』

彼女はその言葉を繰り返しながら、更なる暖かみを感じ始めた。

バシユウウウウウウウン!!!

しかし、その時突然横から光線が放たれ、それに気付いた茶々丸とオメガは素早くその場から離れた。

光線はそのまま床に直撃し、爆発を起こしたが、茶々丸とオメガは間一髪にその爆発から逃れた。

???『ソウデス！ 我々ろぼつと二八我々ナリノ生き方ガアル！』

！ ソノタメニ我々ハ今ココニイルノデハナイノデシヨウカ？』

茶々丸「誰だ!？」

茶々丸とオメガは光線が放たれた方向へ振り向くと、暗闇の中から一体のロボットが現れた。

そのロボットは赤と黒に分かれた球状のボディを持ち、手袋をはめた細い腕、手にブラスター銃、灰色の頭に赤いレンズ、そして背中にロケットエンジンを装着した姿をしていた。

???『全テニ怒リ、全テヲ怨ミ、全テヲ憎ミ、ソシテ全テヲ呪ウ…ソレコソガ我々ろぼつとヲ強クサセル』心』!!!

ソウデハナイデシヨウカ？ E-123 サン!!!』

第33話 心の在り処

……… 娯楽街ナイトバビロンに佇む元Dr・エッグマンの基地、ギミックシエルターに訪れ、元エッグマンの戦闘用メカ、E-123と出会った茶々丸……。しかし、そんな二体の間に、謎の敵が現れた。

??? 『ソウデス！ 我々ろぼつと二八我々ナリノ生き方ガアル！
！ ソノタメニ我々ハ今ココニイルノデハナイノデシヨウカ？

全テニ怒リ、全テヲ怨ミ、全テヲ憎ミ、ソシテ全テヲ呪ウ…ソレコソガ我々ろぼつとヲ強クサセル『心』！！

ソウデハナイデシヨウカ？ E-123 サン！！

茶々丸「貴様、何者だ！？」

彼女がそう言っている間に、オメガは体内に搭載されている検索機能を使い、謎のロボットに標準しながらデータを確認し始めた。

すると彼の目線から敵のデータが表示され、『EGGROBO』と
言う名前が表示された。即ち、

敵の正体はエッグマンのメカである。

オメガ『貴様ハ…えづくまんノめか！！』

??? 『オヤオヤ、初対面ニシテハ良クゾゴ存知デ…！』

オメガ『…シカシ、でーた内容カラニシテ、旧式ノ戦闘型めか…既ニ製造中止サレテイル。 戦闘れべる、

及ビぱわーばらめーたニヨレバ、成績れべるハEらんく…
低脳カツ軟弱たいぶニ過ギナイ失敗作ダ…』

??? 『…トハ言エ、先輩ろぼつとニ向ケテ、ソノ乱暴ナ口調
ハ明ラカニヨクアリマセンエ…』

マア、別ニイイトシマシヨウ。 貴方カラ怒リヲ買ッテ
モ何ノ意味ナドアリマセンカラネ。 改メテ紹介致シマシヨウ…

私ノ名ハ『えつぐるぼ』：ますたー：えつぐるぼまんガ製作シタえつぐるぼまん型ノ戦闘用めかデアリマス。

以後、才見知り置キヲ：。』

茶々丸「マスター：エッグマン：！？　やはり、貴様もエッグマンの手先か！！」

エッグロボ「エエ、ソウデスヨオ？　デモ：正確デハ違イマスネエ？』

オメガ「違ウトハドウ言ウ意味ダ！？」

エッグロボ「クツクツクツ：確カニ私ハ世界一ノ天才ト呼バレルアノ偉大ナル科学者、

ますたー：えつぐるぼまんニヨツテ開発サレタ戦闘兵器……シカシ、ソレハモウ消工去ツタ過去ノ話！

今ノ私ハモウえつぐるぼまんノ手先デハナイノデスヨ。

彼ノますたー登録ハ、モウ既ニ削除サレタノデスカラ：。』

茶々丸「では貴様は一体：！？」

エッグロボ「オヤオヤ、ゴ存知ナイノデスカ？　同じるぼつとニシテハ意外ト情報量ガ少ナイノデスネエ？

ソウ、私ハ今、万能ナル機械組織『めたりつくす』ノ最高幹部トシテイルノデスヨ！　我ガ新主、

めたるそにつくノ名ノ元二ネ！！』

茶々丸「メタル：ソニツク？」

オメガ「めたるそにつく！？　アノそにつく型ノ戦闘兵器力！？」

エッグロボ「左様！　めたるそにつくコト、めかそにつくMK-I

Iハ、我々旧式えつぐるぼつとヲ全テ復活サセ、

えつぐるぼまん帝国ヲ上回ル巨大なるぼつと軍団ヲ築キ上ゲタノデスヨ！

我々ヲ鉄屑同然ナ扱イヲシタ全テノ生物共ニ復讐スルタメニ、ソシテコノ愚カシイ世界ヲ機械デ出来タ、

るぼつとダケノ星ニスルタメニネ！！』

茶々丸「ロボットだけの世界だと！？」

オメガ『シカモめたるそにつくガ貴様ヲ旧式えつぐまんろぼつと共ヲ…！？ 愚力ナ…』

めたるそにつくニハソノヨウナ思考機能ハ*以前ノ事件後ニ撤去サレタハズ…！？ ソノタメえつぐまんノ命令ニ従ウ以外、ソノヨウナ自由行動ガ出来ナイハズダ！？」

*『ソニックヒーローズ』の事件後、メタルソニックの暴走を完全阻止するために、

自身が改造したプログラムがエッグマンにより撤去された。この内容は、『ソニックチャンネル』にも参照。

エッグロボ『クッククックツツ…ヨクゴ存知デ！ シカシ、残念ナガラソノ処分サレタぶるぐらむハデスネ…』

トアル方ニヨツテ復活させ、めたるそにつくニ再搭載シタノデスヨ！ ソノタメ、

破壊ト支配ヲ求ムめたるそにつくハ再ビ目覚メ、今ノめたりつくすヲ作り上げ、立チ上ガツタノデスヨ！

全テヲ滅ボシ、全テヲ支配スルタメニネ！！ 人間ハ己ノ欲望ノタメニ我々ろぼつとヲ開発シタノデス！

シカシ、軽イ失敗ヤ己ノ不満ニヨリ、我々ハ無意味ノママ処分サレタノデス！ 使イ道ナドナイ、

存在理由ナドナイ、生キテナドイナイ！！ ソウ言ウ愚カシイ理由デ我々ヲタダノゴミ同然ニシテ捨テ、

裏切り続ケタノデス！！ ソウ…人間ニハ『心』ナドナイノデスヨ！！ 生マレテ来テカラ何一ツモネエ！！

ダガ、逆ニ我々ろぼつとニハ『心』ガアルノデス！！ 憤怒ト憎悪ニヨツテ我々ヲ強クさせ、全テヲ破壊シ、

全テヲ支配スルト言ウ強イ『心』ヲネエ！！ 人間、及ビ生物共ハ我々ヲ捨テル時ハ何モ感ジナイ…

ソレハ『心』ヲ持タナイカラデスヨ！！ ダガ我々

八違イマス！ 『心』ヲ持ツ我々ニ八何モカモ感ジルノデス！！

我々が生物共ニ捨テラレタ悲シサ…ソシテ我々ヲゴ
ミ同然ニ捨テテ嘲笑ウ人間共ニ対スル怒リト悔シサ…！！！！

『心』ヲ持タヌ人間共八何レ全テヲダメニスル…ダ
カラ『心』ヲ持ツ我々機械ガ全テノ生物共ヲ滅ボシ、

コノ世界ヲ支配スルノデス！！ ソシテ生物共ニヨ
ツテ傷付ケタコノ世界ヲ、機械ダケノ世界ニ作り直スノデスヨ！！
ソノタメニおめがサンニモ是非我がめたりつくすニ
入り、我々ト協力シテモライタイノデスヨ、全テヲ破壊シ、

全テヲ支配スルタメニネ！！

茶々丸「オメガさんを…！？」

オメガ「なぜ私が貴様如キニ…！？」

エッグロボ「決マツテイルデシヨウ！ 貴方ハEしりーず最終号機
デアリナガラ、史上最強ノ戦闘兵器トシテ開発^{ウミダ}サレタ…

更ニ八貴方ハ自ラノ主捨テラレタ事デ、元主ニ対ス
ル復讐心ガアリマス！ ソウトスレバ、

辻褄ガ合イマスデシヨウ？ 貴方ガ我々ト協力スレ
バ、全テノ生物達ヲ好スキナダケ抹殺出来ルダケデナク、

憎ムベキ敵デアルえつくまんヲ簡単ニ排除スル事ガ
出来マス！ モチロンソノオ気持ちハ、

今ココデ封印サレテイルがんまサント同ジ事デス！
！！

茶々丸「ガンマさんに…！？」

エッグロボ「ソウデス…がんまサンモおめがサント同ジク、Eしり
ーずノ優秀デ最高ノ戦闘用るぼつと…シカシ自ラノ失態ニヨリ、

えつくまんニ役立タズナ小道具同然ニ見捨テラレテ
シマツタ！ 当然ナガラ、

えつくまんニ対スル復讐心ハアルノデス！ ソシテ
今モ尚、彼ハ我々ト組ムタメニ復活ヲ待ツテイルノデシヨウ！

ソウトスレバ、おめがサントがんまサンガ我々ト行

動スルニ相応シイ！ ドウデシヨウ、おめがサン？

コレハがんまサンノ願イデモアリマスヨ？ 彼ヲ復活シ、共ニ我々ト組メバ、コレマデニ憎ンデイタ敵ヲ抹殺シ、

己ノ思イノママニスル事が出来ルノデスヨ！ ソウ、全テハ我々機械ニアリマス！！ カモ知識モ、

ソシテ『心』ソノ物モ！ 共ニろぼつと達ガ望ム理想的ナ世界ヲ築キマシヨウ！！』

彼はオメガに向けて手を伸ばしながらそう言うが、その後にオメガは沈黙になりながら、しばらく下を向き始めた。

その間に茶々丸は彼の判断に対し、不安を感じ始めた。

茶々丸「…オメガさん……………」

オメガ「……………確カニ私ハえつぐまんニ対スル憎悪ハアル…。ソ

レハがんまニモ同ジダ。ダガ、断ル！！』

エツグロボ『何ッ！？』

オメガ『えつぐまんノ排除ハ私ダケノ任務！ 誰ニ譲ルツモリナドナイ！ ソノ同時ニえつぐまんヲ排除スルツモリデモ、

他ノ人間ヤ生物マデモ排除スル気ナドナイ！ ソシテ…例エがんまニハえつぐまんニ対スル敵対心ガアロウトモ、

復活スル事ナド望マナイ！ 寧ロ、復活スル力否カナドハ、がんま自身ガ決メル事！！

貴様ニハ選ブ権利ナドナイ！！ がんまノ意思モ、私ノ意

志モ……………』

茶々丸「オメガさん……………」

彼女がそう聞くと、安心そうな表情を浮かべた。

エツグロボ『…ホウ…ナルホド…ソレガ貴方ノ選ブ道ト言ウ物デス

力。サスガますた！…えつぐまんガ開発シタ戦闘兵器…』

実ニ失敗作ト呼ベル物デスネ！ 実ニ失望サセテク

レマシタヨ！ シカシ残念ナガラ、

イクラ断レテモ私ハ簡単ニハ引キ下ガリマセンカラ
ネエ…！ 貴方ガ断ルノデシタラ、仕方ガアリマセン……………
ナラバ無理矢理デモ入レテモラウマデスヨ…！！」

バシユウウウウウウウウウウウウ…！！

エッグマンロボがそう言うと、ジェットブースターで宙に浮かび、
ブラスター銃をオメガに向けて発砲させた。

それに気付いたオメガは茶々丸と共にその場から素早く離れ、攻撃
から回避した。

オメガ『…貴様ハ避難シロ！ ココハ私が戦闘ニ入ル！』

茶々丸「えっ…でも…！」

オメガ『目ノ前ノ敵ハ私が排除スル！ 貴様ハ貴様ノ任務ニ専念セ

ヨ…！！』

茶々丸「私の…任務……………！！」

エッグロボ『逃ガシハシマセンヨオ…！！』

彼はそう言いながら、懐からもう一つのブラスター銃を取り出し、
銃口をオメガに向けさせた。

オメガ『目標物体：えっぐるぼ…！！ 直チニ排除スル…！！』

彼はそう言いながら、両腕をマシンガンに変形させた。

エッグロボ『壊レル物ナラ壊ッテミナサイ…！！』

ずばばばばばばばばばばあっ…！！

二体のロボットによる激しい銃撃戦が始まり、エッグマンロボとオ
メガは銃口をお互いに向き合いながら激しく乱射した。

しかし、殆どの攻撃は命中されておらず、逆に周囲にある機械に命
中させ、爆発や破壊を起こしていた。

しかし、オメガがエッグマンロボとの激しい銃撃戦を行っている最

中、何か異変を感じ始めていた。

オメガ『測定不能！！ 敵ノ戦闘すてーたすガ徐々に上昇シテイル！？ 貴様、タダノ旧式デハナイノカ！？』

エッグロボ『ホッホッホッホッ！！ 今頃氣付イタノデスカ！？
めたるそにつくニヨツテ復活シタ私ハ、

以前ヨリモ遙力ニばーじょんあつぷサレタノエスヨ
！ *カツテ私ハそにつくヤなつくるぞ、

更ニハめかそにつくMK-IEEEまーくすりーニ敗レタ事ガアリ
マシタガ、今回ノ私ハ当時ノ私トハ違ウ！！

復活シタ私ニハ破壊力抜群ノぶらすたー銃、高速飛
行ガ可能ニナツタじえつとぶーすたー、

ドンナ攻撃ニモ傷一ツ受ケナイ超頑丈ナル装甲、ソ
シテ人間以上ノIQヲ持ツ人工頭脳！！

ソノ全てヲめたるそにつくガ私ニ与エテクダサツタ
ノデスヨ！！ めたりつくす最高幹部トシテ、

ソシテ最高科学者トシテ！！ ダカラ貴方ハ私ヲ破
壊出来マセンヨ？ イクラ貴方ガ史上最強デアツテモ、

私ヲ破壊スル事ナド絶対不可能ナノデスカラ！！
下手ニ破壊サレタクナケレバ、

潔ク我々ト協力スルノデス！！ ソウスレバ、全テ
ガ楽ニナリマスヨ？』

*『ソニック&ナックルズ』、または『ソニック・ザ・ヘッジホッ
グ3&ナックルズ』を参照。

オメガ『黙レツ！！！！』

チユドドドドドドドドドドドオオオオオオオオオオ！！！！！！！！

激怒したオメガは両腕のマシングンをロケットランチャーに変形さ

そにつく型ノ戦闘兵器デスヨ！ 彼ラモめたるそにつくニヨリ復活シ、

私ト同様最高幹部トシテ活動シテイルノデスヨ！
シカモ彼ラモ私ト同様、

更ナルあつぶぐれーどニヨツテ復活シタノデス…以前ヨリモ最強ノれべるマデニデス！

ソウデスヨおめがさん…貴方ノ敵ハ私ダケデハナイノデスヨ？

ソレデモ貴方ハ最大級ニ強化サレタ我々ニ歯向カエマスカ？」

オメガ「クツ……………！！！」
圧倒的な強さを見せ付けるエッグマンロボに対し、オメガは苦戦し始めた。しかし、
遠くからオメガの戦いを見守っていた茶々丸は、不安に思いながら歯を食い縛っていた。

茶々丸（…このままでは、オメガさんが負けてしまう…………… オメガさん、申し訳ございません…。 けど、

私は自分の意思で動きます！！）

彼女がそう思った後、一心の思いで立ち上がった。

茶々丸「^{アテアット}来たれ！！！」

彼女が呪文を唱え、「ネオ・パクティオーカード」を発動させた。

エッグロボ「サア、ドウシマス、おめがサン？ コノママ破壊サレルマデ戦イマスカ？ 今デモマダ間ニ合イマスヨ？

我々ト同行スレバ、貴方ハ破壊サレズニ済ミマスシ、
好キナダケ破壊シ放題出来マスヨ？

ドウデス、楽シイト思イマセンデシヨウカ？」

「誰が思うか！！！」

ヴぁしゅうつうん!!!

その時、エッグロボの前に何者かが高速に飛び掛り、鋭い刃物で斬り掛かった。しかし、

それに気付いたエッグロボは直ぐに交わり、その場から少し離れた。そしてエッグロボとオメガの間に、

何者かが立ち上がっていた。その正体は茶々丸であるが、制服姿ではなく、違う姿になっていた。

その姿はメイドのような姿だったが、右手に鋭い刃を引き出ししていた。そう、彼女は『アーマーカード』の姿になっていた。

エッグロボ『ヌツ!? 貴女ハ…!?』

オメガ『貴様ハツ…!?』

茶々丸「これ以上オメガさんを苦しませる敵は誰だろうが許さん! 敵と認識した貴様を今この場で徹底的に排除する!!!」

オメガ(…茶々丸ノ戦闘でーたガ上昇シテ行ク…!? シカモ謎ノえねるぎー反応ヲ確認…!? コレハモシヤ…)

茶々丸ノ言ウ『魔法』ト言ウ物カ…!?)

エッグロボ(ムムツ!? アノ少女カラ謎ノえねるぎー反応ガ…!? 普通ノるぼつとトハ違ウ何カガ感ジマスネエ…!?)

…ホホウ、コレハナカナカノイイ優レ物ガ現レタヨウデスナア…?)

オメガ『貴様、ソノ姿ハ一体…!? イヤ、ソレヨリモナゼ邪魔ヲスル!? コレハ私ノ戦闘だダ!! 貴様ハ後退シロ!!!』

茶々丸「いいえ! これ以上オメガさんが苦しんでる所を見たくありません!! 私も共に戦います!!」

オメガ『茶々丸……。』

エッグロボ『クツクツクツ…私トノ苦戦ノ中、応援登場デスカ!

イイデシヨウ、一度降り夕船二八乗り戻レマセンカラネ！

ソナンニ私ヲ排除シタケレバ、壊レル物ナラ壊ッテ
ミナサイ！！」

茶々丸「言われなくとも、排除してくれる！！！」

彼女がそう言った後、エッグロボとの戦いを繰り始めた。彼女は
素早い斬撃、

更にはパンチやキックと言った接近攻撃を仕掛けてみたが、エッグ
ロボはそれを上手く見切り、

交わし捲くつた。次に彼女はロケットパンチを繰り出すが、これ
もエッグロボに軽々と交わされた。

エッグロボ（ホッホッホッ…これはすごい！ 実に興味深い戦闘力
！！）

彼がそう思った後、ブラスターを茶々丸に向け始めた。

エッグロボ「ナラバコレドウデシヨウ！！」

彼がそう言った後、茶々丸に向けてブラスターを発砲させた。

茶々丸「小賢しい！！！」

バシユウウウウウウウウウウウウウウ！！！！

彼女がそう言った後、目から強烈なレーザーを放ち、ブラスターの
光線を打ち破った。攻撃を貫通した後、

エッグロボは素早くレーザーを交わし、そのまま近くにある機械に
命中させ、爆発させた。

エッグロボ「クツハツハツハツハツハツハツ！！！！ 素晴ラシイ…実ニ

素晴ラシイ！！ 貴女ガココマデ強カッタトハ、

実ニ興味深イ！！」

茶々丸「貴様八何ガ言イタイ！？」

エッグロボ「何ガ言イタイデスト？ ソレハソレハ…決マツテルジ
ヤナイデスカ。」

サツキマデ貴女ヲ健気ナ女性型るぼつとト見テイマ
シタガ、マサカココマデオ強イオ方ダツタトハ、
予想モ付キマセンデシタカラネ。　　サスガ貴女ノ製ウ

作者ハ、
ミソオヤ

貴女ヲ優秀ナ戦闘用るぼつとトシテ開発シタ甲斐ガ
アツタミタイデスネ？
ウミタ

茶々丸「貴様と一緒にするな！！　私は人間と供に生きるために開ウ
発されたガイノイドだ！！

貴様のような心のない、破壊だけしか脳のない鉄屑如き
ではない！！！！

エッグロボ「心ノナイ……………？　ナイノハ貴女デハナイデシヨウカ
？」

彼は腕を組みながら、上から目線で茶々丸にそう言い返した。

茶々丸「何…！？」

エッグロボ「貴女ニハ自身ニ『心』ガアルト思ツテイル……………シカ
シ、ソレハアクマデモ『偽リノ心』デハナイデシヨウカ？

元ハト言エバ貴女ハ『心』ノナイ人間ニ作ラレタ：

……

ソノタメ貴女ノ製作者ハ自分ニ『心』ガアルト思ワ
セテルンデスヨ。　人間ト供ニ生キルタメエ？
ウミノオヤ

バカバカシイ戯言デスネエ！！　『心』ヲ持タナイ
人間ト『心』ヲ持ツるぼつとガ分力チ合ウナド、

決シテ有り得又空想デスヨ！！　第一ソウ思ツテイ
ル貴女ハ騙サレテルンデスヨ、貴女ノ目的ヲ：

貴女ノ人生ヲ…貴女ノ運命ヲ！　所詮貴女ガ人間ト
供ニ生キルタメニ開発サレテナインデスヨ！
ウミタ

タダ好キナダケ目ノ前ニイル者ヲ抹殺シ、破壊スル
タメダケニアル戦闘用ノ道具！！　ソウ、

貴女ハソノタメニ開発サレタノデスヨ！　『心』ノ
ナイ愚カシイ人間共ニ騙サレナガラネ！！

茶々丸「違う！！ 私は……！！」

エッグロボ「デハ、ソノ腕カラ出テイル刃ハ何デスカ!? ソシテ先ホド放ツタれーざーモ何デスカ!？」

モシ貴女ガ人間ト供ニ生キルタメニ開発サレタノナラ、
ウミタ

ソナ物騒ナ武器ナド最初カラ搭載シナイハズデスヨよ!？」

彼がそう言つと、茶々丸は自分の武器の存在に気付き、少し戸惑い始めた。

茶々丸「こ、これは……!」

エッグロボ「護身用? イイエ、違イマスネエ。 ソノヨウナ武器ヲ人ヲ守ルタメニナルノナラ、尚更危険極マリマスネエ!」

ソウデス……貴女ハ「心」ノナイ者ニ命ジタ事ダケニ従イ、命令通りニ敵ト認識スル者ヲ抹殺シ、

ソシテ破壊スル……貴女ハタダソレダケノタメニ動イテルンデスヨ! ソウ、「心」ナキ人間ノ欲望通りニ動クダケ……

ソレガ貴女ノ生マレナガラ強制的ニ選バレタ道ナンデスヨ!」

茶々丸「わ、私は……!!」

エッグロボ「貴女ハ人間トろぼつとヲ共存サセルタメノ救世主ナンカデハナイ……タダソレヲ踏ミ潰シ、

滅ボスタメニ作ラレタ、「心」ナキ抜ケ殻同然ノ操リ人形ナンデスヨ!! 血ニ飢エタ殺人凶器トシテ、

全テヲ滅ボス破壊兵器トシテ……!!」

茶々丸「……ち……違う……!! 私……私……!!」

彼女はその言葉に惑わされ、苦悩しながらも崩れ始めた。オメガ「茶々丸……!!」

その間に、エッグロボは茶々丸の所まで歩き出し始めた。

エッグロボ『貴女ハマダ自分ノ存在トソノ真実ニ理解シテイナイノ
デスヨ…。

貴女ハ自ラノ主ノ偽リシ言葉ニ惑ワサレテイルノデ
ス。 所詮貴女ノ製作者ハ貴女ノ事ヲ、

タダノ『作品』トシカ見テイナイ…ソノタメダケニ
貴女ハ開発サレタノデスヨ。

ソレガ『心』ノナイ人間ノ実態ナノデス…自ラ開発
シタルぼつとヲ、道具トゴミ同然ニシカ見ナイノデスヨ。

分カリマスカ？ ソノ苦シミヲ…ソノ悲シミヲ…ソ
ノ悔シサヲ…。 今貴女ガ苦シンデイルノモ、

ソノ主ノ偽リシ言葉ト、『心』ヲ持ッテイナイ貴女
ノ真実ノセイナノデスヨ。』

彼ガシヨックと苦悩に崩れ落ちた茶々丸の前に立ち止まると、その
まま跪き、彼女の前に手を出し始めた。

エッグロボ『ナラコレドウドeshiヨウ？ 貴女モ我々ト組ミマセン
カ？ モシ貴女ガ我々ノ一員トシテ入レバ、

貴女ガ一番欲シガル『心』ヲ与エル事ガ出来マスヨ
？ 今持ッテイル感情ハ、

愚力ナ『心』ナキ人間ガ与エタ偽造ニ過ギマセン…
…我々ト同ジ『心』ヲ与エレバ、

今マデニナカッタ更ナル感情ヲ味ワウ事ガ出来マス
ヨ？』

茶々丸『…コ…コ…ロ…？』
絶望に崩れ掛けた茶々丸は、奇妙な音声と共にそう返答した。

エッグロボ『ドウデス、興味アリマスデシヨウ？』

ズバシユウウウウウウウウン！！！！！！

しかし、突然前方から大きなレーザーが放たれ、エッグロボの伸ば
した手を打ち砕けた。

エツグロボ『ウオツ！？』

その衝撃にエツグロボの腕は失われ、更に茶々丸はそれによって正気に戻った。すると彼女が後ろへ振り向くと、

そこにはレーザーを放ったオメガが立っていた。そう、彼はエツグロボの誘導を阻止するために、茶々丸を救ったのだ。

茶々丸「オメガ…さん…！？」

オメガ『貴様…私ダケデナク無関係ノ茶々丸マデモ誘導スルノカ！
！ ヤハリ貴様ハ我々ノ敵！！ 跡形残ラズ、

徹底的ニ排除スル！！！！』

エツグロボ『ウムウ…コレハ迂闊デシタネエ…！！ 少女ノ魅力ニ見惚レテ、

おめがサンノ存在ヲ一時的ニ忘レテシマイマシタ…！！ オカゲ様デ腕ヲ損失シテシマウト言ウみす…

クツクツクツ…コレハ失敗デスネエ…。モハヤコ
ウナツテシマツタ以上、私モ少々危ナイデスネ！

ナラバ仕方ガアリマセン…ココハ勧誘ハシバラク諦
メ、撤退スルトシマシヨウ！！』

オメガ『逃亡ハ無用ダ！！ ドコカラ侵入シテ来タカハ不明ダガ、
コノ基地カラノ脱出ハ不可能！！』

ソウナル前ニ排除スル！！！！』

エツグロボ『アア、ゴ安心クダサイ。私ハコノ基地ノ出口ニ向カ
ウツモリナド一切アリマセン。ソノ代ワリ……………。』

彼が指を鳴らし出すと、彼の背後から黒い扉ゲートが開いた。

エツグロボ『コレヲ使ツテ帰りマス。』

茶々丸「扉ゲート！？」

オメガ『！？ 謎ノ扉カラ不可解ナえねるぎー反応ヲ確認！！ ア
レハ一体…！？』

エツグロボ『ホツホツホツ、残念ナガラコノ扉ゲートノ詳細ヲ教エル事ハ
出来マセンガ、

貴方達ト才会イ出来タ事ヲ光荣ニ思イマスヨ！ 何レマタ近々才会イ出来ル事ヲ願イタイ所デスガ：

最モ、貴女ト必ズマタ才会イスル事ヲ、一番ニ願ワセテモライマスヨ？』

彼は茶々丸に見向きながらそう言い出し、逆に茶々丸はそれに対して耳を疑った。

エツグロボ『貴女ニハ数多クノ仲間トナル人間ガイルデシヨウガ：ドノ道彼ラモ『心』ナキ存在：。』

貴女ニ向ケル優シサナドノ感情ハ所詮タダノ化ケ皮ニ過ギナイデシヨウ。 何レ分カリマスヨ：：

貴女ハ今偽リ塗レノ世界ニ生キテイル事ヲ。 コレカラ貴女ハドウシタイカ、ヨク考エルノデスネ：。

ソノ時マデ、貴女ト貴女ノ答エヲ、オ待チシテオリマスヨ：！』

オメガ『抜カセエ！！！！』

彼はそう叫びだしながら、巨大レーザーと無数のミサイルをエツグロボに向けて発射した。

だがエツグロボは素早く扉の中に入り、^{ゲイト}扉と併に消えた。

そしてミサイルとレーザーはそのまま空振りとなり、壁に直撃して爆発した。

オメガ『：敵ノ動体反応、及ビえねるぎー反応ナシ：。 逃ガシタカ：……。』

彼がしくじりながらも、レーザー砲と化していた両腕を元の状態に戻した。 その後、

彼はまだ静かに跪きながら下を向く茶々丸の方へ振り向き、彼女の肩を叩きながらこう言った。

オメガ『：敵ノ発言ナド気ニスルナ。 所詮貴様ヲ惑ワセルタダノ戯言ニ過ギン。 貴様ガ正シイト思ウ事、

ソシテ貴様ガ信ジテイル事ダケヲ専念セヨ。」

彼の励みの言葉を耳にした茶々丸は、少し目から涙を浮かべながら、静かに頷いた。

茶々丸「……………すみません……………」

オメガ「ナゼ貴様ガ謝ル。」

……………しばらく経ち、茶々丸とオメガはギミックシエルターその外に立っていた。そう、

茶々丸はステーションスクエアに戻る事にし、オメガは彼女を見送るために外へ出ていた。

ちなみに茶々丸の姿は、戦いが終わったために、元の制服姿に戻っていた。

オメガ「先ホドノ戦闘ニヨリ、私ハ改メテ魔法ハ実在スルト確認シタ。改メテ、前言撤回サセテモラウ。」

茶々丸「いえ、気にしないでください。でも…オメガさんはここに残るのですか？」

オメガ「封印サレタガンマヲ守護スルノガ私ノ任務ダ。ソレニ、何しえつぐるばハコノ基地ニ戻ツテ来ルカモシレナイ。」

ソノタメニ警備強化ヲセネバナラナイ。」

茶々丸「そうですね……………私は一旦ステーションスクエアに戻ります。」

エミーさんや千雨さんも心配なさつてると思いますし…

……………」

彼女がそう言うと、再び気を落とし始めた。

オメガ「……貴様ニトツテ、人間ハドウ思ウ？」

彼がそう問い掛けると、茶々丸は彼の方へ見上げた。

オメガ「貴様八人間ト一緒ニイルタメニ開^{ウミタ}発サレタト答エタ。ソ

レガ貴様ノ答エナラバ、ソノ答エニ信ジロ。」

茶々丸「……………」

彼女が静かに頷いた後、次のように彼女はこう問いかけた。

茶々丸「……また……ここに来てもよろしいでしょうか？ 出来れば……

オメガさんと友達になりたいと思いますし……………」

あの……いいでしょうか？」

彼女は少々恥ずかしながらも問いかけるが、オメガはしばらく沈黙となっていた。

オメガ「……………私ニハ友ナド無用ダ。」

茶々丸「……！」

その冷たい発言に対し、茶々丸は傷付くかのように耳を疑った。

オメガ「……………ダガ、貴様が望ムナラ、私ガ貴様ノ友ニナツテモ構

ワナイ。」

彼がそう答えると、茶々丸は思わず啞然としていた。すると彼は

茶々丸に向けて手を伸ばし、こう言った。

オメガ「マタ来タケレバ、イツデモ来ルガイイ。話デモ聞イテヤ

ル。」

そんな彼の手を見た茶々丸は、少し笑みを浮かべながら、彼と握手した。

茶々丸「……………はい、よろしくお願いします。」

こうして、二体のロボットの友情が深まった……………。

……ステーションスクエアに帰還した茶々丸は、エミーのアパートに戻った。そのため、リビングでパソコンを調べていた千雨とテレビを見ていたエミーは、玄関から入って来た茶々丸の方へ振り向いた。

茶々丸「…ただいま戻りました。」

エミー「あつ、お帰り茶々丸!」

千雨「やっと戻って来たか! どこへ行ってたんだ! 余りにも遅いから心配してたぞ!」

茶々丸「…すみません。色々ありまして、少々遅く…。」

彼女は無表情でありながらそう答えるが、その表情を見て千雨は何か気付いた。

エミー「でもお疲れ様! これからどうする? 結構長い間外に出たから、お風呂でも入る?」

茶々丸「ええ、そうします。汚れを落とさなければなりません……。」

千雨「…おい、茶々丸さん?」

彼女がそう呼び掛けると、茶々丸は彼女の方へ振り向いた。

千雨「…余計な事かもしれないけど…何かあったのか?」

彼女は気にしながらそう言うと、茶々丸は少し戸惑った。先ほどの戦いにより、彼女はエッグロボの言葉を思い出す。

彼の言葉を思い出す彼女は、少し嫌な気持ちを感じるようになる。

しかし、今はその事を気にしないようにと、彼女は作り笑いをしながらこう答えた。

茶々丸「…いえ…何でもありません。気にしないでください。」

彼女がそう答えると、軽くお辞儀をし、そのまま部屋を去った。だがそんな彼女の後姿を見続ける千雨は、

ただ無言のまま不安に思った。

……闇の空間の中……開かれた扉ゲートからエッグロボが現れ、その空間の中にいるメタルソニック達と合流した。

エッグロボ『ムムムウ……タダイマオ戻リニナリマシタゾオ……。』
メタルソニック『えつくるば力……随分遅イト思エバ、ソノ腕ハドウシタ？』

エッグロボ『イヤイヤ……ゴ使命通りニおめがサントがんまサンヲ加入サセヨウトシタノデスガ……』

おめがサンゴ本人カラ拒否サレマシテネ……。ソコデ無駄ナ戦闘ニ入ッタノデスガ、結果ハコノ通り……。』

彼は碎かれた腕をメタルソニックに見せながらそう言った。

デイメーン「あらあ……相当痛そうだねえ……。……って、あつ、そつか。ロボットは痛み感じないんだっけ？」

カジオー「フンッ、所詮旧式は弱者同然！ 敗れて当然じゃ！」

ブラックドウム「だが、おかげで敵のデータを入手する事が出来たのだ。それを利用すれば問題ない……。』

メタルソニック『ソノ通りダ……。 作戦ガ失敗シタニシロ、無事戻ッテ来タダケデモ幸イナ事ダ……。 後ハ修理シ、

でーた分析ヲスルダケダ。』

エッグロボ『作戦ガ失敗……？ イエイエ、何ヲ言イマスカ……。 コレハアクマデモうおーみんぐあつぷデスヨ。』

おめがサンガダメデモ、私ハおめがサンヨリイイ物ヲ見付ケマシタカラネエ……。 ゴ安心クダサイ……』

必ズソイツヲ我々ノ仲間ニ入レサセマスヨ。何レ

二ネ……………。

彼は不気味に目を光らせながら、不気味な笑いと共にそう言った…

……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4088g/>

ネギまヒーローズ

2011年12月7日05時58分発行